

基本計画書

基本計画書										
事項		記入欄								備考
計画の区分		学部の設置								
フリガナ 設置者		ガッコウホウジン リッキョウガクイン 学校法人 立教学院								
フリガナ 大学の名称		リッキョウダイガク 立教大学 (Rikkyo University)								
大学本部の位置		東京都豊島区西池袋三丁目34番1号								
大学の目的		キリスト教に基づく人格の陶冶を旨とし、学校教育法（昭和22年法律第26号）により学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥を究めること。								
新設学部等の目的		自然環境と人間の関係を複合的な視点でとらえ、環境問題の解決と持続可能な社会への変革に貢献できる力の育成を目的とする。文理の枠を超えて幅広く知識を身につけ、現実の課題と結びつけながら活用できる能力と、環境正義の概念を理解し、自らの強みを活かしながら、対話と協働の関係を構築できるリーダーシップを養う。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位	学位の分野	開設時期及び開設年次	所在地	
	環境学部 【College of Environmental Studies】 環境学科 【Department of Environmental Studies】	4	204	—	816	学士（環境学） 【Bachelor of Arts and Sciences】	理学関係 法学関係 経済学関係	令和8年4月 第1年次	東京都豊島区西池袋三丁目34番1号	
	計		204		816					
同一設置者内における変更状況 （定員の移行、名称の変更等）		・令和7年3月 収容定員の変更に係る学則変更認可申請済み 環境学部環境学科（204）								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	環境学部環境学科 全学共通科目等	78科目 273科目	13科目 23科目	23科目 270科目	114科目 566科目	124単位				
学部等の名称		基幹教員					助手	基幹教員以外の教員 （助手を除く）		
新設	環境学部 環境学科	教授	准教授	講師	助教	計	0 (0)	41 (41)		
		人	人	人	人	人				
		9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	18 (18)				
		a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)			18 (18)	
		b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			0 (0)	
		小計（a～b）	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)			18 (18)	
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)					
計（a～d）	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	18 (18)					
分	計	9 (9)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	18 (18)	0 (0)	41 (41)		

大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数
12人

既	文学部 キリスト教学科		人 7 (7)	人 1 (1)	人 0 (0)	人 0 (0)	人 8 (8)	人 0 (0)	人 58 (58)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 5 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	8 (8)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	7 (7)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	8 (8)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	7 (7)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	8 (8)				
	史学科		人 16 (16)	人 3 (3)	人 0 (0)	人 0 (0)	人 19 (19)	人 0 (0)	人 80 (80)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 8 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	16 (16)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	19 (19)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	16 (16)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	19 (19)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	16 (16)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	19 (19)				
	教育学科		人 8 (8)	人 3 (3)	人 0 (0)	人 1 (1)	人 12 (12)	人 0 (0)	人 69 (69)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 5 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	12 (12)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	8 (8)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	12 (12)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	8 (8)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	12 (12)				
	文学科		人 30 (30)	人 10 (10)	人 0 (0)	人 4 (4)	人 44 (44)	人 0 (0)	人 207 (207)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 15人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	30 (30)	10 (10)	0 (0)	4 (4)	44 (44)				
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	小計（a～b）	30 (30)	10 (10)	0 (0)	4 (4)	44 (44)				
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事 する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	計（a～d）	30 (30)	10 (10)	0 (0)	4 (4)	44 (44)				

経済学部 経済学科	人 15 (15)	人 3 (3)	人 0 (0)	人 5 (5)	人 23 (23)	人 0 (0)	人 82 (82)	
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	15 (15)	3 (3)	0 (0)	5 (5)	23 (23)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 12人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	15 (15)	3 (3)	0 (0)	5 (5)	23 (23)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	15 (15)	3 (3)	0 (0)	5 (5)	23 (23)			
会計ファイナンス学科	人 9 (9)	人 5 (5)	人 0 (0)	人 1 (1)	人 15 (15)	人 0 (0)	人 82 (82)	
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	15 (15)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	9 (9)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	15 (15)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	9 (9)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	15 (15)			
経済政策学科	人 9 (9)	人 3 (3)	人 0 (0)	人 2 (2)	人 14 (14)	人 0 (0)	人 82 (82)	
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	9 (9)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	9 (9)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			
理学部 数学科	人 10 (10)	人 3 (3)	人 0 (0)	人 4 (4)	人 17 (17)	人 0 (0)	人 17 (17)	
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	17 (17)			大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	17 (17)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	4 (4)	17 (17)			

物理学科	人	人	人	人	人	人	人
	6 (6)	4 (4)	0 (0)	10 (10)	20 (20)	0 (0)	42 (42)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	4 (4)	0 (0)	10 (10)	20 (20)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	6 (6)	4 (4)	0 (0)	10 (10)	20 (20)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	6 (6)	4 (4)	0 (0)	10 (10)	20 (20)		
化学科	人	人	人	人	人	人	人
	10 (10)	4 (4)	0 (0)	5 (5)	19 (19)	0 (0)	18 (18)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	4 (4)	0 (0)	5 (5)	19 (19)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	10 (10)	4 (4)	0 (0)	5 (5)	19 (19)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	10 (10)	4 (4)	0 (0)	5 (5)	19 (19)		
生命理学科	人	人	人	人	人	人	人
	9 (9)	4 (4)	0 (0)	7 (7)	20 (20)	0 (0)	26 (26)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	4 (4)	0 (0)	7 (7)	20 (20)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 6人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	9 (9)	4 (4)	0 (0)	7 (7)	20 (20)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	9 (9)	4 (4)	0 (0)	7 (7)	20 (20)		
社会学部 社会学科	人	人	人	人	人	人	人
	9 (9)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	12 (12)	0 (0)	91 (91)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	12 (12)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	9 (9)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	12 (12)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	9 (9)	2 (2)	0 (0)	1 (1)	12 (12)		

設

現代文化学科	人	人	人	人	人	人	人
	9 (9)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	13 (13)	0 (0)	97 (97)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	13 (13)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	9 (9)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	13 (13)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	9 (9)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	13 (13)		
メディア社会学科	人	人	人	人	人	人	人
	9 (9)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	102 (102)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	13 (13)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 9人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	9 (9)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	13 (13)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	9 (9)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	13 (13)		
法学部 法学科	人	人	人	人	人	人	人
	14 (14)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	20 (20)	0 (0)	101 (101)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	14 (14)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	20 (20)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 12人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	14 (14)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	20 (20)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	14 (14)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	20 (20)		
政治学科	人	人	人	人	人	人	人
	9 (9)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	13 (13)	0 (0)	101 (101)
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、主要授業科目を担当するもの	9 (9)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	13 (13)		大学設置基準別表第一に定める基幹教員数の四分の三の数 8人
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
小計（a～b）	9 (9)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	13 (13)		
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事する者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、かつ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)		
計（a～d）	9 (9)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	13 (13)		

国際ビジネス法学科	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)	0 (0)	101 (101)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 8 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a ～ b）	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当す るもの（a 又は b に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b 又は c に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a ～ d）	12 (12)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	17 (17)			
観光学部 観光学科	11 (11)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	14 (14)	0 (0)	54 (54)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	11 (11)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a ～ b）	11 (11)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当す るもの（a 又は b に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b 又は c に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a ～ d）	11 (11)	1 (1)	0 (0)	2 (2)	14 (14)			
交流文化学科	10 (10)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	14 (14)	0 (0)	36 (36)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	14 (14)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a ～ b）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	14 (14)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当す るもの（a 又は b に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b 又は c に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a ～ d）	10 (10)	3 (3)	0 (0)	1 (1)	14 (14)			
コミュニティ福祉学部 福祉学科	7 (7)	3 (3)	0 (0)	6 (6)	16 (16)	0 (0)	49 (49)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 8 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	3 (3)	0 (0)	6 (6)	16 (16)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a ～ b）	7 (7)	3 (3)	0 (0)	6 (6)	16 (16)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当す るもの（a 又は b に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間 8 単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b 又は c に該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a ～ d）	7 (7)	3 (3)	0 (0)	6 (6)	16 (16)			

コミュニティ政策学科	10 (10)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	19 (19)	0 (0)	51 (51)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 10人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	10 (10)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	19 (19)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	10 (10)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	19 (19)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	10 (10)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	19 (19)			
経営学部 経営学科	7 (7)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	62 (62)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 10人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	7 (7)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	7 (7)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	7 (7)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	13 (13)			
国際経営学科	6 (6)	4 (4)	0 (0)	4 (4)	14 (14)	0 (0)	58 (58)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	6 (6)	4 (4)	0 (0)	4 (4)	14 (14)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	6 (6)	4 (4)	0 (0)	4 (4)	14 (14)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	6 (6)	4 (4)	0 (0)	4 (4)	14 (14)			
現代心理学部 心理学科	8 (8)	5 (5)	0 (0)	3 (3)	16 (16)	0 (0)	38 (38)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 6 人
a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	8 (8)	5 (5)	0 (0)	3 (3)	16 (16)			
b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
小計（a～b）	8 (8)	5 (5)	0 (0)	3 (3)	16 (16)			
c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	8 (8)	5 (5)	0 (0)	3 (3)	16 (16)			

分	映像身体学科	人 12 (12)	人 2 (2)	人 0 (0)	人 2 (2)	人 16 (16)	人 0 (0)	人 44 (44)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 7 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	12 (12)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	16 (16)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	12 (12)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	16 (16)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	12 (12)	2 (2)	0 (0)	2 (2)	16 (16)			
	異文化コミュニケーション学部 異文化コミュニケーション学科	人 21 (21)	人 6 (6)	人 2 (2)	人 6 (6)	人 35 (35)	人 0 (0)	人 82 (82)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 9 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	21 (21)	6 (6)	2 (2)	6 (6)	35 (35)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	21 (21)	6 (6)	2 (2)	6 (6)	35 (35)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	計（a～d）	21 (21)	6 (6)	2 (2)	6 (6)	35 (35)			
	スポーツウエルネス学部 スポーツウエルネス学科	人 14 (14)	人 6 (6)	人 0 (0)	人 8 (8)	人 28 (28)	人 0 (0)	人 27 (27)	大学設置基準別 表第一に定める 基幹教員数の 四分の三の数 12 人
	a. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、主要授業科目を担当するもの	14 (14)	6 (6)	0 (0)	8 (8)	28 (28)			
	b. 基幹教員のうち、専ら当該学部等の教育研究に従事 する者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（aに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	小計（a～b）	14 (14)	6 (6)	0 (0)	8 (8)	28 (28)			
	c. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当す るもの（a又はbに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
	d. 基幹教員のうち、専ら当該大学の教育研究に従事す る者以外の者又は当該大学の教育研究に従事し、か つ専ら当該大学の複数の学部等で教育研究に従事す る者であって、年間8単位以上の授業科目を担当 するもの（a、b又はcに該当する者を除く）	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)			
計（a～d）	14 (14)	6 (6)	0 (0)	8 (8)	28 (28)				
計	297 (297)	98 (98)	4 (4)	85 (85)	484 (484)	0 (0)	1857 (1857)		
合 計	306 (306)	107 (107)	4 (4)	85 (85)	502 (502)	0 (0)	1898 (1898)		
職 種	専 属			そ の 他		計			
事 務 職 員	267 (267)			176 (176)		443 (443)			
技 術 職 員	26 (26)			0 (0)		26 (26)			
図 書 館 職 員	23 (23)			3 (3)		26 (26)			
そ の 他 の 職 員	0 (0)			0 (0)		0 (0)			
指 導 補 助 者	0 (0)			0 (0)		0 (0)			
計	316 (316)			179 (179)		495 (495)			

校 地 等	区 分		専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計						
	校 舎 敷 地		259,974㎡		㎡		㎡		259,974㎡						
	そ の 他		4,929㎡		㎡		㎡		4,929㎡						
	合 計		264,903㎡		㎡		㎡		264,903㎡						
校 舎			専 用		共 用		共用する他の 学校等の専用		計						
			188,050㎡ (182,054㎡)		㎡ (㎡)		㎡ (㎡)		188,050㎡ (182,054㎡)						
教 室 ・ 教 員 研 究 室			教 室		315室		教 員 研 究 室		712室		大学全体				
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕 冊		電子図書 〔うち外国書〕 冊		学術雑誌 〔うち外国書〕 種		電子ジャーナル 〔うち外国書〕 冊		機械・器具 点		標本 点		学部単位での特定不能のため、大学全体の数。
	大学全体		2,220,640 [857,801] (2,141,579 [835,259])		52,712 [39,419] (44,835 [34,011])		118,843 [103,725] (118,843 [103,725])		96,628 [96,467] (96,628 [96,467])		763 (763)		0 (0)		
			計		2,220,640 [857,801] (2,141,579 [835,259])		52,712 [34,419] (44,835 [34,011])		118,843 [103,725] (118,843 [103,725])		96,628 [96,467] (96,628 [96,467])		763 (763)		
スポーツ施設等			スポーツ施設			講堂			厚生補導施設			大学全体			
			13,450㎡			881㎡			17,838㎡						
経費 の見 積り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経費 の見 積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次						
		教員1人当り研究費等		1,002千円	1,002千円	1,002千円	1,002千円	—	—						
		共同研究費等		14,380千円	14,380千円	14,380千円	14,380千円	—	—						
		図 書 購 入 費	728,631,000	728,631,000	728,631,000	728,631,000	728,631,000	—	—						
		設 備 購 入 費	353,203,000	353,203,000	353,203,000	353,203,000	353,203,000	—	—						
	学生1人当り 納付金			第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次						
				1,590千円	1,370千円	1,370千円	1,370千円	— 千円	— 千円						
	学生納付金以外の維持方法の概要			手数料収入、資産運用収入、寄付金収入、補助金収入等											
大 学 等 の 名 称		立教大学													
学 部 等 の 名 称		修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又は 称号	収容定員 充 足 率	開設 年度	所 在 地						
文学部		年	人	年次 人	人		倍		東京都豊島区西池袋 三丁目34番1号						
キリスト教学科		4	50	—	200	学士（文学）	1.05 《1.00》	昭和24 年度							
史学科		4	215	—	860	学士（文学）	1.06 《0.99》	昭和24 年度							
教育学科		4	101	—	404	学士（文学）	1.03 《0.98》	昭和24 年度							
文学科		4	552	—	2208	学士（文学）	1.14 《1.10》	昭和37 年度							
						学士（学術）	1.04 《0.98》	平成18 年度							
経済学部							1.05 《0.99》		同上						
経済学科		4	332	—	1328	学士（経済学）	1.07 《1.01》	昭和24 年度	同上						
会計ファイナンス学科		4	176	—	704	学士（経済学）	1.00 《0.95》	平成14 年度							
経済政策学科		4	176	—	704	学士（経済学）	1.05 《0.99》	平成18 年度							
理学部							1.01 《0.96》								
数学科		4	66	—	264	学士（理学）	1.03 《0.98》	昭和24 年度							
物理学科		4	77	—	308	学士（理学）	1.06 《0.96》	昭和24 年度	同上						
化学科		4	77	—	308	学士（理学）	0.95 《0.92》	昭和24 年度							
生命理学科		4	72	—	288	学士（理学）	1.02 《0.97》	平成14 年度							

社会学部						1.06 《1.01》	同上	
社会学科	4	173	—	692	学士（社会学）	1.07 《1.02》	昭和33年度	
現代文化学科	4	173	—	692	学士（社会学）	1.06 《0.99》	平成14年度	
メディア社会学科	4	173	—	692	学士（社会学）	1.06 《1.01》	平成18年度	
法学部						1.06 《1.00》	同上	
法学科	4	360	—	1440	学士（法学）	0.96 《0.91》	昭和34年度	
政治学科	4	110	—	440	学士（政治学）	1.04 《0.97》	昭和63年度	
国際ビジネス法学科	4	115	—	460	学士（法学）	1.38 《1.28》	平成8年度	
観光学部						1.04 《0.99》	埼玉県新座市北野一丁目2番26号	
観光学科	4	195	—	780	学士（観光学）	1.06 《1.01》	平成10年度	
交流文化学科	4	175	—	700	学士（観光学）	1.03 《0.97》	平成18年度	
コミュニティ福祉学部						1.03 《0.99》	同上	
福祉学科	4	130	—	544	学士（コミュニティ福祉学）	1.03 《0.99》	平成18年度	※令和5年度入学定員減（24人）
コミュニティ政策学科	4	220	—	814	学士（コミュニティ福祉学）	1.03 《1.00》	平成18年度	※令和5年度入学定員増（66人）
経営学部						1.07 《1.00》	東京都豊島区西池袋三丁目34番1号	
経営学科	4	230	—	920	学士（経営学）	1.04 《0.97》	平成18年度	
国際経営学科	4	155	—	620	学士（経営学）	1.12 《1.04》	平成18年度	
現代心理学部						1.06 《1.01》	埼玉県新座市北野一丁目2番26号	
心理学科	4	143	—	572	学士（心理学）	1.06 《1.02》	平成18年度	
映像身体学科	4	176	—	704	学士（映像身体学）	1.06 《0.99》	平成18年度	
異文化コミュニケーション学部						1.07 《1.02》	東京都豊島区西池袋三丁目34番1号	
異文化コミュニケーション学科	4	210	—	710	学士（異文化コミュニケーション学）	1.07 《1.02》	平成20年度	※令和6年度入学定員増（65人）
スポーツウェルネス学部						1.00	埼玉県新座市北野一丁目2番26号	
スポーツウェルネス学科	4	230	—	690	学士（スポーツウェルネス学）	1.00	令和5年度	
文学研究科							東京都豊島区西池袋三丁目34番1号	
英米文学専攻(M)	2	18	—	36	修士（文学）	0.27	昭和26年度	
英米文学専攻(D)	3	3	—	9	博士（文学）	0.44	昭和28年度	
史学専攻(M)	2	15	—	30	修士（文学）	0.60	昭和33年度	
史学専攻(D)	3	6	—	18	博士（文学）	0.94	昭和51年度	
教育学専攻(M)	2	10	—	20	修士（教育学）	0.60	昭和44年度	
教育学専攻(D)	3	3	—	9	博士（教育学）	0.55	昭和47年度	
日本文学専攻(M)	2	20	—	40	修士（文学）	0.55	昭和35年度	
日本文学専攻(D)	3	8	—	24	博士（文学）	0.50	昭和37年度	
フランス文学専攻(M)	2	8	—	16	修士（文学）	0.37	昭和40年度	
フランス文学専攻(D)	3	3	—	9	博士（文学）	0.22	昭和42年度	
ドイツ文学専攻(M)	2	8	—	16	修士（文学）	0.50	昭和42年度	
ドイツ文学専攻(D)	3	3	—	9	博士（文学）	0.22	昭和44年度	

既設大学等の状況	比較文明学専攻 (M)	2	10	—	20	修士（比較文明学）	0.55	平成10年度	同上	
	比較文明学専攻 (D)	3	5	—	15	博士（比較文明学）	0.46	平成12年度		
	超域文化学専攻 (M)	2	5	—	10	修士（文学）	1.10	昭和42年度		
	超域文化学専攻 (D)	3	3	—	9	博士（文学）	0.22	昭和44年度		
	経済学研究科								同上	
	経済学専攻 (M)	2	40	—	80	修士（経済学）	0.57	昭和26年度		
						修士（会計学）				
	経済学専攻 (D)	3	5	—	15	博士（経済学）	0.86	昭和38年度		
						博士（会計学）				
	理学研究科								同上	
	物理学専攻 (M)	2	20	—	40	修士（理学）	1.12	昭和28年度		
	物理学専攻 (D)	3	4	—	12	博士（理学）	1.16	昭和30年度		
	化学専攻 (M)	2	20	—	40	修士（理学）	1.25	昭和29年度		
	化学専攻 (D)	3	4	—	12	博士（理学）	0.16	昭和37年度		
	数学専攻 (M)	2	5	—	10	修士（理学）	1.20	昭和30年度		
	数学専攻 (D)	3	3	—	9	博士（理学）	0.33	昭和37年度		
	生命理学専攻 (M)	2	15	—	30	修士（理学）	1.30	平成8年度		
	生命理学専攻 (D)	3	4	—	12	博士（理学）	0.33	平成10年度		
	社会学研究科								同上	
	社会学専攻 (M)	2	20	—	40	修士（社会学）	0.92	平成2年度		
	社会学専攻 (D)	3	10	—	30	博士（社会学）	0.70	平成9年度		
	法学研究科								同上	
	法学政治学専攻 (M)	2	20	—	40	修士（法学）	0.47	平成18年度		
						修士（政治学）				
	法学政治学専攻 (D)	3	8	—	24	博士（法学）	0.41	平成18年度		
						博士（政治学）				
	観光学研究科								埼玉県新座市北野一丁目2番26号	
	観光学専攻 (M)	2	20	—	40	修士（観光学）	0.62	平成10年度		
観光学専攻 (D)	3	8	—	24	博士（観光学）	0.41	平成10年度			
コミュニティ福祉学研究科								同上		
コミュニティ福祉学専攻 (M)	2	15	—	30	修士（コミュニティ福祉学）	0.80	平成18年度			
コミュニティ福祉学専攻 (D)	3	5	—	15	博士（コミュニティ福祉学）	0.40	平成16年度			
ビジネスデザイン研究科								東京都豊島区西池袋三丁目34番1号		
ビジネスデザイン専攻 (M)	2	90	—	180	修士（経営管理学）	1.17	平成14年度			
ビジネスデザイン専攻 (D)	3	5	—	15	博士（経営管理学）	0.86	平成19年度			
社会デザイン研究科								同上		
社会デザイン学専攻 (M)	2	50	—	100	修士（社会デザイン学）	1.15	平成14年度			
社会デザイン学専攻 (D)	3	5	—	15	博士（社会デザイン学）	0.60	平成19年度			

※令和6年4月名称変更

異文化コミュニケーション研究科								同上	
異文化コミュニケーション専攻(M)	2	20	—	40	修士(異文化コミュニケーション学)	0.57	平成14年度		
異文化コミュニケーション専攻(D)	3	5	—	15	博士(異文化コミュニケーション学)	1.20	平成16年度		
経営学研究科								同上	
経営学専攻(M)	2	10	—	20	修士(経営学)	2.05	平成18年度		
経営学専攻(D)	3	5	—	15	博士(経営学)	1.13	平成18年度		
国際経営学専攻(M)	2	50	—	100	修士(国際経営学)	0.73	平成23年度		
					修士(公共経営学)				
現代心理学研究科									埼玉県新座市北野一丁目2番26号
心理学専攻(M)	2	10	—	20	修士(心理学)	0.20	平成18年度		
心理学専攻(D)	3	3	—	9	博士(心理学)	0.11	平成18年度		
臨床心理学専攻(M)	2	15	—	30	修士(臨床心理学)	0.96	平成18年度		
臨床心理学専攻(D)	3	4	—	12	博士(臨床心理学)	0.25	平成18年度		
映像身体学専攻(M)	2	15	—	30	修士(映像身体学)	0.70	平成20年度		
映像身体学専攻(D)	3	4	—	12	博士(映像身体学)	0.16	平成22年度		
キリスト教学研究科									東京都豊島区西池袋三丁目34番1号
キリスト教学専攻(M)	2	10	—	20	修士(神学)	0.50	平成21年度		
					修士(文学)				
					修士(実践神学)				
キリスト教学専攻(D)	3	5	—	15	博士(神学)	0.73	平成21年度		
					博士(文学)				
人工知能科学研究科								同上	
人工知能科学専攻(M)	2	63	—	126	修士(人工知能科学)	1.05	令和2年度		
人工知能科学専攻(D)	3	8	—	24	博士(人工知能科学)	0.75	令和4年度		
スポーツウエルネス学研究科									埼玉県新座市北野一丁目2番26号
スポーツウエルネス学専攻(M)	2	#	—	20	修士(スポーツウエルネス学)	0.85	令和5年度		
スポーツウエルネス学専攻(D)	3	5	—	15	博士(スポーツウエルネス学)	0.86	令和5年度		
附属施設の概要	該当なし								

教 育 課 程 等 の 概 要																		
(環境学部環境学科)																		
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 (助手を除く) 以外の教員			
必修 科目	リベラルアーツとしての環境学原論 1	1前	○	2			○			4	5				1	オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部) オムニバス※実験 オムニバス※実験 共同		
	リベラルアーツとしての環境学原論 2	1後	○	2			○			5	4							
	環境科学入門 1	1前	○	2			○			4	1							
	環境科学入門 2	1後	○	2			○			1	4							
	環境フィールドスタディ 1	1通	○	2				○		6	3							
	小計 (5科目)	—	—	10	0	0	—			20	17	0	0	0	1			
専門 選択 科目	基幹 科目	環境 総合	気候変動とカーボンニュートラル	1・2・3・4前	○		2		○			1	2			1	オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部) オムニバス・共同 (一部)	
			生物多様性とネイチャーポジティブ	1・2・3・4後		2		○			2	2						
			環境汚染・公害とわたしたちの社会	1・2・3・4前	○	2		○			2	1						
			資源循環とサーキュラーエコノミー	1・2・3・4後	○	2		○				3						
			環境アセスメントと持続可能な開発	1・2・3・4前	○	2		○			2	1						
			環境データサイエンス	1・2・3・4後	○	2		○			1					2		
			小計 (6科目)	—	—	0	12	0	—			8	9	0	0	0		3
			人間と 社会	自然環境と人間社会	1・2・3・4前	○		2		○				1				
	環境倫理	1・2・3・4前		○		2		○			1							
	環境教育・ESDとシティズンシップ	1・2・3・4後		○		2		○										
	環境法入門	1・2・3・4前		○		2		○				1						
	環境政策・経済学入門	1・2・3・4後		○		2		○			1	1						
	環境学のための社会調査法入門	1・2・3・4後		○		2		○				1						
	Environmental Issues in Japan and the World	1・2・3・4後		○		2		○							1			
	小計 (7科目)	—		—	0	14	0	—			3	4	0	0	0	1		
	科学と 技術	環境統計学基礎	1・2・3・4後	○		2		○			1	1					オムニバス オムニバス オムニバス オムニバス オムニバス オムニバス オムニバス	
		環境物理学基礎	1・2・3・4前	○		2		○				1				1		
		環境化学基礎	1・2・3・4後	○		2		○			2							
		環境生物学基礎	1・2・3・4前	○		2		○			1	1						
		環境地学基礎	1・2・3・4後	○		2		○				1				1		
環境デザイン・マネジメント		1・2・3・4前	○		2		○				2							
Natural Science of Triple Planetary Crisis		1・2・3・4後	○		2		○								1			
小計 (7科目)		—	—	0	14	0	—			4	6	0	0	0	3			
発展 科目	自然 科学 領域	地球化学	2・3・4前	○		2		○			1					1	オムニバス	
		材料化学	2・3・4後	○		2		○			1							
		陸上生物学	2・3・4後	○		2		○				1				1	オムニバス	
		海洋生物学	2・3・4前	○		2		○			1							
		生物生態学	2・3・4後	○		2		○								1		
		分子生物学	2・3・4前	○		2		○				1						
		微生物学	2・3・4後	○		2		○								1		
		環境毒性学	2・3・4後	○		2		○			1							
		熱力学	2・3・4前	○		2		○			1							
		地球流体力学	2・3・4後	○		2		○				1						
		気候学	2・3・4前	○		2		○				1				1	オムニバス	
		科学史・科学哲学	2・3・4後	○		2		○								1		
		地球環境史	2・3・4前	○		2		○				1					オムニバス	
		環境化学実習	2・3・4前	○		2			○		2							

教 育 課 程 等 の 概 要																
（環境学部環境学科）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
人文・社会科学領域	環境生命実習	2・3・4後	○		2				○	1	1					オムニバス オムニバス
	環境数値解析	2・3・4前	○		2		○			1	1					
	気象学実習	2・3・4後	○		2				○						1	
	小計（17科目）	—	—	0	34	0	—			9	7	0	0	0	7	共同
	人文・社会科学領域	法学概論	2・3・4前	○	2		○				1					
		国際環境法	2・3・4後	○	2		○				1					
		環境行政法	2・3・4後	○	2		○			1						
		環境ガバナンス	2・3・4前	○	2		○			1						
		市民参加と合意形成	2・3・4後	○	2		○				1					
		環境と国際政治	2・3・4前	○	2		○								1	
		気候・エネルギー政策論	2・3・4後	○	2		○								1	
		経済学概論	2・3・4前	○	2		○				1					
		環境経済学	2・3・4前	○	2		○				1					
		環境と国際経済	2・3・4後	○	2		○								1	
		サステナビリティ経営論	2・3・4後	○	2		○								1	
		環境コミュニケーション	2・3・4前	○	2		○								1	
		環境社会学	2・3・4後	○	2		○			1						
		環境社会調査法実践	2・3・4前	○	2		○				1					
		環境と人権	2・3・4前	○	2		○								1	
		環境アクションと市民社会	2・3・4前	○	2		○								1	
		持続可能な開発と国際協力	2・3・4後	○	2		○				1					
		エシカル消費論	2・3・4前	○	2		○								1	
		環境とメディア	2・3・4前	○	2		○								1	
		環境正義のための紛争解決学	2・3・4後	○	2		○								1	
		社会変革の環境教育学・ESD論	2・3・4前	○	2		○			1						
		参画と対話のファシリテーション	2・3・4後	○	2		○				1					
		共創のコーディネーション	2・3・4後	○	2		○								1	
		環境心理学	2・3・4後	○	2		○								1	
		地誌学概論	2・3・4後	○	2		○				1					
		環境文学	2・3・4後	○	2		○								1	
		環境とアート	2・3・4前	○	2		○								1	
	小計（27科目）	—	—	0	54	0	—			4	9	0	0	0	14	共同
	環境総合領域	地理学概論	2・3・4前	○	2		○				1					
		都市環境学	2・3・4後	○	2		○				1					
		資源循環学	2・3・4前	○	2		○				1					
		エネルギー科学	2・3・4前	○	2		○								1	
		測量学	2・3・4前	○	2		○								1	
		食品科学	2・3・4後	○	2		○								1	
	小計（6科目）	—	—	0	12	0	—			0	3	0	0	0	3	
	実践科目	環境フィールドスタディ2	2・3・4通	○	2				○	2	6					
		環境リーダーシップEL1	1前	○	2					5	4					
		環境リーダーシップEL2	1後	○	2				○	4	5					
		環境リーダーシップEL3	2・3・4前	○	2				○	1					1	
		環境リーダーシップEL4	2・3・4後	○	2				○	1					1	
		短期フィールドワークA	2・3・4前後	○	1					1						集中※演習 共同 集中※演習 共同 集中※演習 共同 集中※演習
		短期フィールドワークB	2・3・4前	○	1				○		2					
		短期フィールドワークC	2・3・4後	○	1				○		2					
		長期フィールドワークA	2・3・4前後	○	2				○	1	1					
		長期フィールドワークB	2・3・4前	○	2				○	3	1					

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(環境学部環境学科)																	
科目 区分		授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
					必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		基幹教員(助手を除く)以外の教員
		長期フィールドワークC	2・3・4後	○		2				○	1	3					共同 集中※演習 共同 集中※演習 共同 集中※演習 集中※演習 集中※演習 集中※演習 集中 集中 集中 集中
		長期フィールドワークD	2・3・4前	○		2				○		3					
		長期フィールドワークE	2・3・4後	○		2				○	1	1					
		短期ワークエクスぺリエンスA	2・3・4前	○		1				○	1						
		短期ワークエクスぺリエンスB	2・3・4後	○		1				○		1					
		長期ワークエクスぺリエンスA	2・3・4前	○		2				○	1						
		長期ワークエクスぺリエンスB	2・3・4後	○		2				○	1						
		プロジェクト実習A	2・3・4前	○		2				○	1						
		プロジェクト実習B	2・3・4後	○		2				○	1						
		インタープリテーション実習	2・3・4前	○		2				○						1	
		Environmental Interpretation in English	2・3・4後	○		2				○						1	
	野外活動実習	2・3・4前	○		2				○						1		
	小計 (22科目)		—	—	0	39	0	—			25	29	0	0	0	5	
	卒業論文・プロジェクト関係科目	専門演習1	3・4前	○		2				○		9	9				
		専門演習2	3・4後	○		2				○		9	9				
		卒業論文・プロジェクト演習1	4前	○		2				○		9	9				
		卒業論文・プロジェクト演習2	4後	○		2				○		9	9				
		卒業論文	4後	○		8				○		9	9				
		卒業プロジェクト	4後	○		8				○		9	9				
		環境コロキウム1	4前	○		1				○		1					
		環境コロキウム2	4後	○		1				○			1				
		留学レポートセミナー	4後	○		1				○			1				
		小計 (9科目)		—	—	0	27	0	—			55	56	0	0	0	0
	専門自由科目	専門導入科目	大学への数学	1・2・3・4後			2			○							1
大学への物理学			1・2・3・4後			2			○							1	
大学への化学			1・2・3・4前			2			○							1	
大学への生物学			1・2・3・4前			2			○							1	
自然科学のための数学			1・2・3・4前			2			○							1	
小計 (5科目)		—	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	5		
専門関連科目		日本史	1・2・3・4前			2			○							1	
		世界史	1・2・3・4後			2			○							1	
	理科総合実験	3・4後			2				○						5		
	小計 (3科目)		—	—	0	6	0	—			0	0	0	0	0	7	
共同																	

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目：総合系科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員	
学 び の 精 神	全学共通科目総合系科目															
	世界史の中のキリスト教	1・2・3・4前	○		2		○								4	オムニバス
	思想を生み出すキリスト教	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	美術の中のキリスト教	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	音楽の中のキリスト教	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	文学を生み出すキリスト教	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	国際社会の中の宗教	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	現代社会の中の宗教1	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	現代社会の中の宗教2	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	人文学からの学び（文学）	1・2・3・4前・後	○		2		○								5	
	人文学からの学び（思想・教育）	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	人文学からの学び（史学）	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	芸術への扉	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	グローバル経済社会を考える	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	学びの場としての社会	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	社会学からの学び	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	メディアからみる学び	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	法と政治の世界	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	経営学への招待	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	異文化コミュニケーション学からの学び	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	なぜ外国語を学ぶのか？	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	現代社会と観光	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	現代社会の諸相	1・2・3・4前・後	○		2		○								4	
	自然科学の探究	1・2・3・4前・後	○		2		○								18	
	身体科学からの学び	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	現代心理学からの学び	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	アジア地域での平和構築	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	グローバル社会での平和構築	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	大学生の学び・社会で学ぶこと	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	人権とジェンダー	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	ライフマネジメントと学生生活	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	立教大学の歴史	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	西欧キリスト教社会における大学の誕生	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	キャリアデザイン	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	キリスト教史に学ぶ多文化共生	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	美と生命について：キリスト教の美学	1・2・3・4前	○		2		○								4	
	愛について：キリスト教の倫理と哲学	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	Economy and Society	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Image Studies	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	英語によるビジネスコミュニケーション入門	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	多文化共生社会と大学	1・2・3・4後	○		4		○								1	
	小計（40科目）	—	—	0	82	0	—			0	0	0	0	0	130	
多 彩 な 学 び	全学共通科目総合系科目															
	聖書と人間	1・2・3・4後	○		2		○								4	
	聖書考古学	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	ジェンダーとキリスト教	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	イスラームの世界	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	「宗教」とは何か	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	現代社会と人間	1・2・3・4前	○		2		○								3	
	哲学への扉	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	論理的思考法	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	教育と人間	1・2・3・4後	○		2		○								2	
1 人 間 の 探 究	歴史への扉	1・2・3・4前・後	○		2		○								5	
	地域研究への扉	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(全学共通科目：総合系科目／選択科目)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹 (助手を除く) 教員以外の教員	
	教育学への扉	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	共同
	多文化の世界	1・2・3・4後	○		2		○								3	
	文化を生きる	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	人権思想の根源	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	手話と人権を考える	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	点字から考える人権	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	アジアの文化とことば	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	アフリカの文化とことば	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	ヨーロッパの文化とことば	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	ラテンアメリカの文化とことば	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	ロシア・東欧の文化とことば	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	中東の文化とことば	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	イタリアの文化とことば	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	ドイツ語圏の文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	フランス語圏の文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	スペイン語圏の文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	中国語圏の文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	朝鮮語圏の文化	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	子どもの権利から考える国際協力	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	現代社会における言葉の持つ意味	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	立教ゼミナール1	1・2・3・4前・後	○		2			○							3	
	立教ゼミナール発展編1	1・2・3・4前・後	○		2			○							3	
	睡眠文化論	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	ボランティア論	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	哲学対話 in Rikkyo	1・2・3・4後	○		2		○								6	
	ジェンダー・宗教・社会	1・2・3・4後	○		2		○								3	
	立教学院とポール・ラッシュ	1・2・3・4後	○		2		○								3	
	多文化共生社会と日本	1・2・3・4後	○		4		○								1	
	仏教の世界	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	日本の宗教	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	日本文化と精神性	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	Japanese Ethnology	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	World History	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
Religions in Asia	1・2・3・4後	○		2		○								1		
Peace and Human Rights 1	1・2・3・4前	○		1		○								1		
Peace and Human Rights 2	1・2・3・4前	○		1		○								1		
International Humanities 1	1・2・3・4後	○		2		○								1		
International Humanities 2	1・2・3・4後	○		2		○								1		
Introduction to Gender Studies	1・2・3・4後	○		2		○								1		
多文化社会と異文化コミュニケーション	1・2・3・4後	○		2		○								1		
小計 (51科目)	—	—	—	0	102	0	—				0	0	0	0	0	94
多 彩 な 学 び 2 社 会 へ の 視 点	全学共通科目総合系科目															
	入門・経済教室	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	統計情報で社会・経済を診断する	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	景気・格差問題と統計情報	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	法と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	政治と社会	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	グローバル社会における法と政治	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	現代のビジネスを学ぶ	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	企業と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	現代社会と環境	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	情報と倫理	1・2・3・4前	○		2		○								1	
メディアと人間	1・2・3・4後	○		2		○								1		
文化と社会	1・2・3・4前	○		2		○								1		

教 育 課 程 等 の 概 要																
(全学共通科目：総合系科目／選択科目)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考	
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手		基 幹 教員 (助手を除く 以外の教員)
	現代社会の解説	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	いのちの尊厳と福祉を考える	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	コミュニティをデザインする	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	観光学への誘い	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	異文化コミュニケーションを考えるA	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	異文化コミュニケーションを考えるB	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	異文化コミュニケーションを考えるC	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	経験から学ぶ、世界とつながる	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	対話を学ぶ	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	大学と現代社会	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	パレスチナ問題の歴史と現在	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	世界の中のロシア	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	ドイツ語圏の社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	フランス語圏の社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	スペイン語圏の社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	中国語圏の社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	朝鮮語圏の社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	社会調査入門	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	社会調査の技法	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	データ分析入門	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	データの科学	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	多変量解析入門	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	データサイエンス入門	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	データサイエンス応用	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Introduction to Statistics 1	1・2・3・4前	○		2		○								2	共同
	Introduction to Statistics 2	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	Introduction to the Social Survey	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Introduction to Multivariate Analysis	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	国際情勢を読み解く	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	立教ゼミナール2	1・2・3・4前・後	○		2			○		○					7	
	立教ゼミナール発展編2	1・2・3・4前・後	○		2			○		○					7	
	RS Lゼミナール	1・2・3・4前	○		2			○		○					1	
	立教卒業生の「社長の履歴書」	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	グローバルシティ・ソウルを読み解く	1・2・3・4後	○		2		○								3	共同
	SDGs×AI×経済×法	1・2・3・4前	○		2		○								2	共同
	SDGsと現代社会の課題とその関わり方入門	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Knowledge, Design, and Innovation	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	大衆演劇の世界	1・2・3・4後	○		2		○								8	オムニバス
	持続可能性の理論と実践	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	持続可能な公共サービス提供体制の構築	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	福島原発事故と社会の持続性	1・2・3・4後	○		2		○								2	共同
	世界を動かす変革のチカラ	1・2・3・4後	○		2		○								3	共同
	世界経済と日本	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	日本国憲法	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	近代日本社会と人権	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	日本の「多文化」政策を問い直す	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Modern Japanese History 1	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Modern Japanese History 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Japanese Politics and Economy 1	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Japanese Politics and Economy 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Japanese Relations in Asia 1	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Japanese Relations in Asia 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Japanese Society 1	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(全学共通科目：総合系科目／選択科目)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹(助手を除く)教員以外の教員	
	Japanese Society 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Tokyo Studies	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	Humans and Other Animals	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Food Cultures and the Acceptance of Japanese Food in the World	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Business Communication	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Introduction to Tourism Studies	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	Learning and Teaching Today 1	1・2・3・4前	○		1		○								1	
	Learning and Teaching Today 2	1・2・3・4前	○		1		○								1	
	Global and Japanese Political Economy 1	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Global and Japanese Political Economy 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Knowledge and Society 1	1・2・3・4前	○		1		○								1	
	Knowledge and Society 2	1・2・3・4前	○		1		○								1	
	Introduction to Sociology	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Japanese Society and Culture 1	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Japanese Society and Culture 2	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	The Dignity of Life and Welfare	1・2・3・4前	○		2		○								1	
	Introduction to International Cooperation	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	Political Sociology	1・2・3・4前・後	○		4		○								2	
	Career and University Education in the Global World	3・4前	○		2		○								1	
	Selected Topics in Intercultural Communication A	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
Selected Topics in Intercultural Communication B	1・2・3・4前・後	○		2		○								2		
	小計 (86科目)	—	—	0	170	0	—			0	0	0	0	0	146	
多 彩 な 学 び 3 芸 術 ・ 文 化 へ の 招 待	文学への扉	1・2・3・4前・後	○		2		○								5	オムニバス 共同
	表象文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								6	
	美術の歴史	1・2・3・4後	○		2		○								3	
	美術と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	音楽の歴史	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	音楽と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								3	
	美術論演習	1・2・3・4前・後	○		2			○							3	
	音楽論演習	1・2・3・4前・後	○		2			○							2	
	キリスト教美術	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	キリスト教音楽	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	都市と芸術	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	建築と文化	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	舞踊論	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	映像と社会	1・2・3・4前	○		2		○								2	
	身体表現と哲学	1・2・3・4後	○		2		○								2	
	ドイツ語圏の文学	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	フランス語圏の文学	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	スペイン語圏の文学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	中国語圏の文学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	朝鮮語圏の文学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1	
	立教ゼミナール 3	1・2・3・4前	○		2			○							2	
	日本の美術	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	日本の音楽	1・2・3・4前・後	○		2		○								2	
	日本の演劇	1・2・3・4後	○		2		○								1	
	演芸の世界	1・2・3・4前	○		2		○								6	
	観光と文学	1・2・3・4後	○		2		○								3	
		Japanese Culture 1	1・2・3・4前・後	○		2		○								

教 育 課 程 等 の 概 要															
（全学共通科目：総合系科目／選択科目）															
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
	Japanese Culture 2	1・2・3・4後	○		2		○								1
	Japanese Arts A	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	Japanese Arts B	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	The Psychology of Literature 1	1・2・3・4後	○		1		○								1
	The Psychology of Literature 2	1・2・3・4後	○		1		○								1
	Exploring Children's Literature	1・2・3・4前	○		2		○								1
	Techniques for reading and enjoying a picturebook in English	1・2・3・4後	○		2		○								1
	International Humanities 3	1・2・3・4前	○		2		○								1
	Literature and Society	1・2・3・4後	○		4		○								1
	Culture and Fine Arts	1・2・3・4前	○		4		○								1
	小計（37科目）	—	—	0	76	0	—	—	—	0	0	0	0	0	77
多 彩 な 学 び 4 心 身 へ の 着 目	全学共通科目総合系科目	認知・行動・身体	1・2・3・4後	○	2		○								3
	心の科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								3
	パーソナリティの心理	1・2・3・4後	○		2		○								3
	対人関係の心理	1・2・3・4前・後	○		2		○								3
	心の健康	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	身体パフォーマンス	1・2・3・4後	○		2		○								2
	ストレスマネジメント	1・2・3・4後	○		2		○								1
	癒しの科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1
	スポーツの科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	健康の科学	1・2・3・4後	○		2		○								2
	栄養の科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								1
	アンチエイジングの科学	1・2・3・4前	○		2		○								1
	スポーツとメディア	1・2・3・4前・後	○		2		○								1
	スポーツと社会	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	スポーツと文化	1・2・3・4後	○		2		○								2
	レジャー・レクリエーションと現代社会	1・2・3・4後	○		2		○								1
	アウトドアの知恵に学ぶ	1・2・3・4前・後	○		2		○								1
	いのちを健康で彩る智慧	1・2・3・4前	○		2		○								1
	立教ゼミナール4	1・2・3・4前・後	○		2			○							2
	立教ゼミナール発展編4	1・2・3・4前・後	○		2			○							2
	Japanese Mind	1・2・3・4前	○		2		○								1
	Understanding Speech Sounds 1	1・2・3・4後	○		1		○								1
	Understanding Speech Sounds 2	1・2・3・4後	○		1		○								1
	Applied Data Science with the focus on Sport and Wellness	1・2・3・4前	○		2		○								1
	Health Science	1・2・3・4前	○		2		○								1
	Health and Wellness	1・2・3・4後	○		4		○								1
	小計（26科目）	—	—	0	52	0	—	—	—	0	0	0	0	0	42
多 彩 な 学 び 5 自 然 の 理 解	全学共通科目総合系科目	数学の世界	1・2・3・4後	○	2		○								4
	宇宙の科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								4
	生命の科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								5
	物質の科学	1・2・3・4前・後	○		2		○								3
	身近な物質の化学	1・2・3・4前・後	○		2		○								3
	化学と自然	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	行動の科学	1・2・3・4後	○		2		○								2
	生命の歩み	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	地球の理解	1・2・3・4前・後	○		2		○								3
	情報科学A	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	情報科学B	1・2・3・4前・後	○		2		○								2
	自然環境の保全	1・2・3・4前・後	○		2		○								1
	生物の多様性	1・2・3・4前・後	○		2		○								2

教 育 課 程 等 の 概 要																		
(全学共通科目：総合系科目／選択科目)																		
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考		
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	基 幹 (助 手 を 除 く) 教 員 以外の 教 員			
	地球環境の未来	1・2・3・4後	○		2		○									1	共同	
	自然と人間の共生	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
	脳と心	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
	オーダーメイド医療最前線	1・2・3・4後	○		2		○									1		
	大学と科学技術	1・2・3・4前	○		2		○									2		
	化学と社会	1・2・3・4前・後	○		2		○									1		
	カーボンニュートラル人材育成講座	1・2・3・4後	○		2		○									2		
	立教ゼミナール5	1・2・3・4前	○		2			○								1		
	Science Studies	1・2・3・4後	○		2		○									1		
	Nature of the Earth	1・2・3・4前	○		4		○									1		
	Understanding of Agricultural Science	1・2・3・4前	○		2		○									1		
	Importance of Global Plant Health	1・2・3・4後	○		2		○									1		
	Ecology: Environment and Sustainability 1	1・2・3・4後	○		1		○									1		
	Ecology: Environment and Sustainability 2	1・2・3・4後	○		1		○									1		
	Topics in Natural Science	1・2・3・4後	○		2		○									1		
小計 (28科目)	—	—	0	56	0	—			0	0	0	0	0	0	52			
多 彩 な 学 び 6 知 識 の 現 場	全学共通科目総合系科目																集中 共同・集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中	
	GL102	1・2・3・4後	○		2			○										1
	GL103	1・2・3・4後	○		2			○										1
	GL104	1・2・3・4後	○		2			○										1
	GL111	1・2・3・4後	○		2			○										2
	GL201	1・2・3・4後	○		2			○										1
	GL202	1・2・3・4前	○		2			○										1
	国連ユースボランティア	1・2・3・4後	○		12				○									1
	陸前高田プロジェクト	1・2・3・4後	○		2				○									2
	海外ワークエクスペリエンス1	1・2・3・4後	○		1				○									1
	海外ワークエクスペリエンス2	1・2・3・4前・後	○		2				○									1
	グローバルワークエクスペリエンス (オンライン)	1・2・3・4前	○		1				○									1
	国際的協働のためのキャリア実践	1・2・3・4後	○		2				○									1
	RS Lーコミュニティ (池袋)	1・2・3・4後	○		2				○									1
	RS Lーコミュニティ (埼玉)	1・2・3・4後	○		2				○									1
	RS Lーローカル (南魚沼)	1・2・3・4後	○		2				○									1
	RS Lーローカル (陸前高田)	1・2・3・4前	○		2				○									1
	RS Lーローカル (地域共生)	1・2・3・4前	○		2				○									1
	RS Lーグローバル (フィリピン)	1・2・3後	○		2				○									1
RS LーグローバルA	1・2・3・4後	○		2				○								1		
小計 (19科目)	—	—	0	46	0	—			0	0	0	0	0	0	21			
ス ポ ー ツ プ ロ グ ラ ム ／ ス ポ ー ツ ス タ デ イ	全学共通科目総合系科目																集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中 集中	
	スポーツプログラム1 (はじめてのバレー)	1・2・3・4前・後	○		1				○									2
	スポーツプログラム1 (バドミントン)	1・2・3・4前・後	○		1				○									3
	スポーツプログラム1 (はじめてのフィンスイミング)	1・2・3・4前	○		1				○									1
	スポーツプログラム3 (バスケットボール)	1・2・3・4後	○		1				○									1
	スポーツプログラム3 (バレーボール)	1・2・3・4前・後	○		1				○									2
	スポーツプログラム3 (フライングフットボール)	1・2・3・4前・後	○		1				○									1
	スポーツプログラム3 (卓球)	1・2・3・4後	○		1				○									1
	スポーツスタディ1 (アダプテッドスポーツ)	1・2・3・4前・後	○		2				○									1
	スポーツスタディ1 (クライミング)	1・2・3・4前・後	○		2				○									3
	スポーツスタディ1 (スポーツ縄跳び)	1・2・3・4前	○		2				○									1
	スポーツスタディ1 (バドミントン)	1・2・3・4前	○		2				○									1
	スポーツスタディ1 (ヒップホップ)	1・2・3・4前	○		2				○									1
	スポーツスタディ1 (レクリエーションルスポーツ)	1・2・3・4前・後	○		2				○									5

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(全学共通科目：総合系科目／選択科目)																	
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹 教員 (助手を除く) 以外の教員		
	スポーツスタディ1 (レクリエーション・スポーツ (英語))	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	共同・集中 共同・集中 共同・集中 共同・集中 共同・集中 共同・集中
	スポーツスタディ1 (太極拳)	1・2・3・4前・後	○		2					○						2	
	スポーツスタディ1 (日本文化と踊り)	1・2・3・4前	○		2					○						1	
	スポーツスタディ1 (コンテンポラリーダンス)	1・2・3・4後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (ウォーターエクササイズ)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (アーティスティックスイミング (初級))	1・2・3・4前	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (アーティスティックスイミング (中・上級))	1・2・3・4前	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (セルフケアエクササイズ)	1・2・3・4前・後	○		2					○						2	
	スポーツスタディ2 (ダイエットフィットネス)	1・2・3・4後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (トレーニング)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (ボディコンディショニング)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ2 (ボディシェイプ)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (ゴルフ)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (テニス)	1・2・3・4前・後	○		2					○						3	
	スポーツスタディ3 (テニス (英語))	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (バスケットボール)	1・2・3・4後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (ハンドボール)	1・2・3・4前	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (フットサル)	1・2・3・4前・後	○		2					○						4	
	スポーツスタディ3 (ブラインドサッカー)	1・2・3・4前・後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (初心者向けサッカー・フットサル&フィットネス)	1・2・3・4後	○		2					○						1	
	スポーツスタディ3 (卓球)	1・2・3・4前	○		2					○						1	
	スポーツスタディ4 (ゴルフ)	1・2・3・4前	○		2					○						2	
	スポーツスタディ4 (ネイチャーキャンプ)	1・2・3・4前	○		2					○						2	
	スポーツスタディ4 (スキー (初級))	1・2・3後	○		2					○						2	
	スポーツスタディ4 (スキー (中・上級))	1・2・3後	○		2					○						2	
	スポーツスタディ4 (はじめての和太鼓)	1・2・3・4前	○		2					○						2	
	スポーツスタディ4 (馬術)	1・2・3・4後	○		2					○						2	
	スポーツスタディ e	1・2・3・4前・後	○		2					○						2	
	小計 (41科目)	—	—	0	75	0	—			0	0	0	0	0	0	65	

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
（必修科目／英語） 全学共通科目 言語系科目	英語ディスカッション	1前	○	1					○							19
	英語ディベート	1後	○	1					○							10
	英語リーディング&ライティング1（R）	1前	○	1					○							10
	英語リーディング&ライティング2（W）	1後	○	1					○							10
	英語eラーニング	1前	○	1					○							2
	英語プレゼンテーション	1後	○	1					○							10
	上級英語1（リーディング&ライティング）	1前	○	2					○							1
	上級英語2（プロジェクト英語）	1後	○	2					○							1
	小計（8科目）	—	—	10	0	0	—			0	0	0	0	0	0	63
（選択必修科目／ドイツ語） 全学共通科目 言語系科目	ドイツ語1	1前	○		1				○							4
	ドイツ語2	1後	○		1				○							2
	ドイツ語A	1前	○		1				○							4
	ドイツ語B	1後	○		1				○							2
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	0	12
（選択必修科目／フランス語） 全学共通科目 言語系科目	フランス語1	1前	○		1				○							4
	フランス語2	1後	○		1				○							2
	フランス語A	1前	○		1				○							4
	フランス語B	1後	○		1				○							2
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	0	12
（選択必修科目／スペイン語） 全学共通科目 言語系科目	スペイン語1	1前	○		1				○							4
	スペイン語2	1後	○		1				○							2
	スペイン語A	1前	○		1				○							4
	スペイン語B	1後	○		1				○							2
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	0	12
（選択必修科目／中国語） 全学共通科目 言語系科目	中国語1	1前	○		1				○							6
	中国語2	1後	○		1				○							3
	中国語A	1前	○		1				○							6
	中国語B	1後	○		1				○							3
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	0	18

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
（選択必修科目／言語系科目） 全学共通科目 （朝鮮語）	朝鮮語 1	1前	○		1				○						8	
	朝鮮語 2	1後	○		1				○						4	
	朝鮮語 A	1前	○		1				○						8	
	朝鮮語 B	1後	○		1				○						4	
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	24	
（選択必修科目／言語系科目） 全学共通科目 （ロシア語）	ロシア語 1	1前	○		1				○						1	
	ロシア語 2	1後	○		1				○						1	
	ロシア語 A	1前	○		1				○						1	
	ロシア語 B	1後	○		1				○						1	
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	4	
（選択必修科目／言語系科目） 全学共通科目 （日本語）	大学生の日本語 A	1前	○		1				○						1	
	大学生の日本語 B	1前	○		1				○						1	
	大学生の日本語 C	1後	○		1				○						1	
	大学生の日本語 D	1後	○		1				○						1	
	小計（4科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	4	
全学共通科目 （英語） グローバル・コミュニケーション領域	Reading for Pleasure	1・2・3・4前・後			2				○						5	
	Current News through English Media	1・2・3・4前・後			2				○						5	
	Multimodal Communication in English	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	Self-directed and Reflective Language Learning	1・2・3・4前・後			2				○						5	
	Academic Communication	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	Intercultural Studies	1・2・3・4前・後			2				○						5	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 1 (Basic)	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 2 (Intermediate)	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 3 (Advanced)	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	Study Abroad Preparation: IELTS 1 (Basic)	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	Study Abroad Preparation: IELTS 2 (Intermediate)	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	Study Abroad Preparation: IELTS 3 (Advanced)	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	英語海外文化研修	1・2・3・4通			2				○						1	
	小計（13科目）	—	—	0	26	0	—			0	0	0	0	0	51	

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
全学共通科目（英語） 言語系科目 グローバル・スタディーズ領域	Introduction to Global Studies A: Humanities	1・2・3・4前・後			2				○						5	
	Introduction to Global Studies B: Social Science	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	Introduction to Global Studies C: Natural Science	1・2・3・4前・後			2				○						2	
	CLIL Seminars: International Relations and Politics	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Globalization and Business	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Advertising and the Media	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: History	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Art	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Movies	1・2・3・4前・後			2				○						2	
	CLIL Seminars: SDGS	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Ecology	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Intercultural Communication	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Tourism	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	CLIL Seminars: Health and Wellness	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	CLIL Seminars: Gender Issues	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Japanology	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	CLIL Seminars: Psychology	1・2・3・4前・後			2				○						4	
	CLIL Seminars: Literature	1・2・3・4前・後			2				○						2	
	CLIL Seminars: Language Learning	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	小計（19科目）	—	—	0	38	0	—			0	0	0	0	0	59	
全学共通科目（英語） 言語系科目 グローバル・スタディーズ領域	Communication for Global Business	2・3・4前・後			2				○						8	
	Collaborative Business Projects	2・3・4前・後			2				○						6	
	小計（2科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	14	
国際交流制度 短期英語系科目 自由プログラム（英語）	短期語学研修科目（英語）	1・2・3・4前・後			1				○						1	
	ビクトリア夏ESL 2	1・2・3・4前			2				○						1	
	ハワイ夏ESL 1	1・2・3・4前			1				○						1	
	ダブリン春ESL 3	1・2・3後			3				○						1	
	ビクトリア春ESL 2	1・2・3後			2				○						1	
	ダブリン夏ESL 3	1・2・3・4前			3				○						1	
	ハワイ春ESL 1	1・2・3後			1				○						1	
	グリフィス春ESL 3	1・2・3後			3				○						1	
	小計（8科目）	—	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	8	

集中
集中
集中
集中
集中
集中
集中
集中

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目））																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
留自全 学由学 準科共 備目通 領（ド 域イ 言 語 系 科 目	ドイツ語総合1	1・2・3・4前			2				○						2	集中
	ドイツ語総合2	1・2・3・4後			2				○						2	
	ドイツ語総合3	1・2・3・4前			2				○						3	
	ドイツ語総合4	1・2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語総合5	1・2・3・4前			2				○						1	
	ドイツ語総合6	1・2・3・4前			2				○						2	
	ドイツ語総合7	1・2・3・4後			2				○						2	
	ドイツ語海外言語文化研修（春学期）	1・2・3・4前			2				○						1	
	小計（8科目）	—	—	0	16	0	—	—	—	0	0	0	0	0	14	
ブ自全 ロ由学 ジ科共 エ目通 ト（ド 領イ 域言 語 系 科 目	入門ドイツ語	2・3・4前・後			2				○						3	集中
	ドイツ語演習1	2・3・4前			2				○						1	
	ドイツ語演習2	2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語演習3	2・3・4前			2				○						1	
	ドイツ語演習4	2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語演習5	2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語演習6	2・3・4後			2				○						1	
	小計（7科目）	—	—	0	14	0	—	—	—	0	0	0	0	0	9	
キ自全 ャ由学 リ科共 ア目通 領（ド 域イ 言 語 系 科 目	ドイツ語トレーニング1	2・3・4後			2				○						1	集中
	ドイツ語トレーニング2	2・3・4前			2				○						1	
	ドイツ語トレーニング3	2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語トレーニング4	2・3・4前			2				○						1	
	キャリアドイツ語1	2・3・4前			2				○						1	
	キャリアドイツ語2	2・3・4後			2				○						1	
	キャリアドイツ語3	2・3・4後			2				○						1	
	キャリアドイツ語4	2・3・4前			2				○						1	
	小計（8科目）	—	—	0	16	0	—	—	—	0	0	0	0	0	8	
ア自全 カ由学 デ科共 ミ目通 ツ（ド 領イ 域言 語 系 科 目	アカデミックドイツ語1	2・3・4後			2				○						1	集中
	アカデミックドイツ語2	2・3・4前			2				○						1	
	アカデミックドイツ語3	2・3・4前			2				○						1	
	アカデミックドイツ語4	2・3・4後			2				○						1	
	ドイツ語CLIL1	2・3・4後			2				○						1	
	小計（5科目）	—	—	0	10	0	—	—	—	0	0	0	0	0	5	
留自全 学由学 準科共 備目通 領（フ 域ラ ン ス 語 系 科 目	フランス語総合1	1・2・3・4前			2				○						2	集中
	フランス語総合2	1・2・3・4後			2				○						2	
	フランス語総合3	1・2・3・4前			2				○						2	
	フランス語総合4	1・2・3・4後			2				○						2	
	フランス語総合5	1・2・3・4前			2				○						2	
	フランス語総合6	1・2・3・4後			2				○						2	
	フランス語総合7	1・2・3・4前			2				○						1	
	フランス語総合8	1・2・3・4後			2				○						1	
	フランス語総合9	1・2・3・4前			2				○						1	
	フランス語総合10	1・2・3・4前			2				○						1	
	フランス語海外言語文化研修（秋学期）	1・2・3後			2				○						1	
	小計（11科目）	—	—	0	22	0	—	—	—	0	0	0	0	0	17	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(全学共通科目 (言語系科目／必修科目／選択科目))																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外の教員	
全学共通科目 (言語系科目) キャリアリ ア領域	キャリアフランス語 1	2・3・4前・後			2				○						2	集中
	キャリアフランス語 2	2・3・4前			2				○						1	
	キャリアフランス語 3	2・3・4後			2				○						1	
	フランス語トレーニング 1	2・3・4前			2				○						1	
	小計 (4科目)	—	—	0	8	0	—			0	0	0	0	0	5	
全学共通科目 (言語系科目) プロジェクト 領域	入門フランス語	2・3・4前・後			2				○						2	
	フランス語演習 1	2・3・4前・後			2				○						2	
	フランス語演習 2	2・3・4前			2				○						2	
	フランス語演習 3	2・3・4後			2				○						2	
	フランス語演習 4	2・3・4前・後			2				○						2	
	フランス語演習 5	2・3・4前			2				○						1	
	フランス語演習 6	2・3・4後			2				○						1	
	小計 (7科目)	—	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	12	
全学共通科目 (言語系科目) アカデミック 領域	上級フランス語ライティング 1	2・3・4前			2				○						2	
	上級フランス語ライティング 2	2・3・4後			2				○						2	
	小計 (2科目)	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	4	
全学共通科目 (言語系科目) 留学準備 領域	スペイン語総合 1	1・2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語総合 2	1・2・3・4前・後			2				○						3	
	スペイン語総合 3	1・2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語総合 4	1・2・3・4後			2				○						2	
	スペイン語総合 5	1・2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語総合 6	1・2・3・4後			2				○						2	
	スペイン語海外言語文化研修 (秋学期)	1・2・3後			2				○						1	
	小計 (7科目)	—	—	0	14	0	—			0	0	0	0	0	14	
全学共通科目 (言語系科目) プロジェクト 領域	入門スペイン語	2・3・4前・後			2				○						2	
	スペイン語演習 1	2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語演習 2	2・3・4後			2				○						2	
	スペイン語演習 3	2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語演習 4	2・3・4後			2				○						2	
	スペイン語演習 5	2・3・4前			2				○						1	
	スペイン語演習 6	2・3・4前			2				○						2	
	スペイン語演習 7	2・3・4後			2				○						2	
小計 (8科目)	—	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	15		

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
全学共通科目 （スペイン語系科目）	キャリアスペイン語1	2・3・4後			2				○						1	集中 集中
	キャリアスペイン語2	2・3・4前			2				○						1	
	スペイン語トレーニング1	2・3・4前			2				○						1	
	スペイン語トレーニング2	2・3・4後			2				○						1	
	小計（4科目）	—	—	0	8	0	—			0	0	0	0	0	4	
全学共通科目 （スペイン語系科目）	アカデミックスペイン語1	2・3・4前			2				○						1	
	アカデミックスペイン語2	2・3・4後			2				○						1	
	小計（2科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	2	
全学共通科目 （中国語系科目）	中国語総合1	1・2・3・4前			2				○						2	
	中国語総合2	1・2・3・4後			2				○						2	
	中国語総合3	1・2・3・4前			2				○						2	
	中国語海外言語文化研修（春学期）	1・2・3・4前			2				○						1	
	中国語海外言語文化研修（秋学期）	1・2・3後			2				○						1	
	小計（5科目）	—	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	8	
全学共通科目 （中国語系科目）	入門中国語	2・3・4前・後			2				○						1	
	中国語演習1	2・3・4前・後			2				○						1	
	中国語演習2	2・3・4前・後			2				○						1	
	小計（3科目）	—	—	0	6	0	—			0	0	0	0	0	3	
全学共通科目 （中国語系科目）	キャリア中国語1	2・3・4前			2				○						1	
	キャリア中国語2	2・3・4後			2				○						1	
	中国語トレーニング1	2・3・4前			2				○						1	
	中国語トレーニング2	2・3・4後			2				○						1	
	上級中国語コミュニケーション1	2・3・4前			2				○						1	
	上級中国語コミュニケーション2	2・3・4後			2				○						1	
	上級中国語ライティング1	2・3・4前			2				○						1	
	上級中国語ライティング2	2・3・4後			2				○						1	
	小計（8科目）	—	—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	8	

教 育 課 程 等 の 概 要																
（全学共通科目（言語系科目／必修科目／選択科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹（助手を除く） 教員以外の教員	
ア自全 カ由学 デ科共 ミ目通 ツ（中 ク（国 領国語 域語） 系科目	アカデミック中国語 1	2・3・4前・後			2				○						1	集中
	アカデミック中国語 2	2・3・4前・後			2				○						1	
	上級中国語リスニング・リーディング 1	2・3・4前			2				○						1	
	上級中国語リスニング・リーディング 2	2・3・4後			2				○						1	
	小計（4科目）	—	—	0	8	0	—			0	0	0	0	0	4	
留自全 学由学 準科共 備目通 領（科 域（目 朝鮮言 語） 系科目	朝鮮語総合 1	1・2・3・4後			2				○						2	
	朝鮮語総合 2	1・2・3・4前			2				○						2	
	朝鮮語総合 3	1・2・3・4前			2				○						3	
	朝鮮語総合 4	1・2・3・4後			2				○						4	
	朝鮮語海外言語文化研修（春学期）	1・2・3・4前			2				○						1	
	小計（5科目）	—	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	12	
ブ自全 ロ由学 ジ科共 エ目通 ク（科 ト（目 朝鮮言 語） 系科目	入門朝鮮語	2・3・4前・後			2				○						2	
	朝鮮語演習 1	2・3・4前・後			2				○						3	
	朝鮮語演習 2	2・3・4後			2				○						2	
	朝鮮語演習 3	2・3・4前・後			2				○						2	
	朝鮮語演習 4	2・3・4前・後			2				○						2	
	小計（5科目）	—	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	11	
ア自全 カ由学 デ科共 ミ目通 ツ（朝 ク（鮮 領鮮語 域語） 系科目	上級朝鮮語演習 1	2・3・4前			2				○						2	
	上級朝鮮語演習 2	2・3・4後			2				○						2	
	小計（2科目）	—	—	0	4	0	—			0	0	0	0	0	4	
留自全 学由学 準科共 備目通 領（科 域（目 ロシア言 語） 系科目	ロシア語総合 1	1・2・3・4後			2				○						1	
	ロシア語総合 2	1・2・3・4後			2				○						1	
	ロシア語総合 3	1・2・3・4前			2				○						1	
	ロシア語総合 4	1・2・3・4前			2				○						1	
	ロシア語総合 5	1・2・3・4後			2				○						1	
	小計（5科目）	—	—	0	10	0	—			0	0	0	0	0	5	

基本計画書 -30-

教 育 課 程 等 の 概 要																
(全学共通科目 (言語系科目／必修科目／選択科目))																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 (助手を除く)	
(自由科目) 全学共通科目 (タイ語)	入門タイ語	2・3・4前・後			2				○						2	
	小計 (1科目)	—	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	2	
(自由科目) 全学共通科目 (タガログ語)	入門タガログ語	2・3・4前・後			2				○						1	
	小計 (1科目)	—	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	1	
(自由科目) 全学共通科目 (ベトナム語)	入門ベトナム語	2・3・4前・後			2				○						1	
	小計 (1科目)	—	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	1	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(教職科目)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授 業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	教 授	准 教授	講 師	助 教	助 手	基 幹 教員 以外 の教 員	
教 職 科 目	【再掲】自然環境と人間社会	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境倫理	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境教育・ESDとシティズンシップ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境法入門	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境政策・経済学入門	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境学のための社会調査法入門	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境統計学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境物理学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境化学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境生物学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境地学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】国際環境法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境行政法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境ガバナンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】市民参加と合意形成	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】気候・エネルギー政策論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境経済学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】サステナビリティ経営論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境社会学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】持続可能な開発と国際協力	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】社会変革の環境教育学・ESD論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】参画と対話のファシリテーション	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境社会調査法実践	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】地理学概論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】地誌学概論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】経済学概論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】法学概論	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】熱力学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】地球流体力学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境毒性学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境化学実習	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】材料化学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】地球化学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】微生物学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】海洋生物学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】陸上生物学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境生命実習	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】分子生物学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】気候学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】気象学実習	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境データサイエンス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】環境統計学基礎	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
【再掲】日本史	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
【再掲】世界史	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
【再掲】理科総合実験	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
社会・公民科教育法 1	3・4前					2	○								3	
社会・公民科教育法演習 1	3・4後					2		○							3	
社会・公民科教育法 2	3・4前					2	○								3	
社会・公民科教育法演習 2	3・4後					2		○							3	
理科教育法 1	3・4前					2	○								1	
理科教育法演習 1	3・4後					2		○							2	共同
理科教育法 2	3・4前					2	○								1	
理科教育法演習 2	3・4後					2		○							2	共同

教 育 課 程 等 の 概 要																
（教職科目）																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 の教員	
	教育原論	1・2・3・4前				2	○								4	
	教職概論	2・3・4前				2	○								6	
	教育制度論・教育課程論	1・2・3・4後				2	○								4	
	教育心理学	1・2・3・4前				2	○								6	
	特別支援教育の理論と方法（中・高）	2・3・4後				2	○								6	
	道德教育の理論と方法（中学校）	1・2・3・4前				2	○								5	
	特別活動及び総合的な学習の時間の理論と方法	2・3・4通				2	○								6	
	教育方法論	2・3・4後				2	○								6	
	ICT活用の理論と方法	2・3・4前後				1	○								1	
	生徒・進路指導の理論と方法	1・2・3・4後				2	○								5	
	学校教育相談の理論と方法	2・3・4前				2	○								5	
	中・高教育実習事前指導	3・4通				1	○								6	
	高校教育実習	4通				2			○						8	
	中・高教育実習	4通				4			○						8	
	教職実践演習（中・高）	4後				2		○							10	
	教職特別演習	3・4後				2		○							1	
	【再掲】日本国憲法	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツプログラム1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツプログラム2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツプログラム3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツスタディ1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツスタディ2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツスタディ3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツスタディ4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スポーツスタディe	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語ディスカッション	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語ディベート	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語リーディング&ライティング1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語リーディング&ライティング2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語eラーニング	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】英語プレゼンテーション	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】上級英語1（リーディング&ライティング）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】上級英語2（プロジェクト英語）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】ドイツ語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】ドイツ語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】ドイツ語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】ドイツ語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】フランス語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】フランス語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】フランス語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】フランス語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スペイン語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スペイン語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スペイン語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】スペイン語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】中国語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】中国語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】中国語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】中国語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】朝鮮語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】朝鮮語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】朝鮮語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	【再掲】朝鮮語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

教 育 課 程 等 の 概 要																
(教職科目)																
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置						備考
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	基幹教員以外 (助手を除く) の教員	
	【再掲】ロシア語1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	【再掲】ロシア語2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	【再掲】ロシア語A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	【再掲】ロシア語B	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	小計（110科目/うち初出24科目）	—	—	0	0	48	—			0	0	0	0	0	0	105
合計（680科目）		—	—	20	1265	48	—			128	140	0	0	0	0	1276
学位又は称号	学士（環境学）			学位又は学科の分野						理学関係，法学関係，経済学関係						
卒業・修了要件及び履修方法										授業期間等						
環境学科は，全学共通科目 28 単位，専門教育科目については必修科目を10単位，選択科目のうち基幹科目を16単位以上，発展科目12単位以上、実践科目6単位以上併せて52単位，卒業論文・プロジェクト関係科目を18単位，自由科目を16単位以上，合計 124 単位以上を修得しなければならない。 自由科目には，指定単位数を超えて修得した選択科目の単位を算入することができる。また，専門導入科目，専門関連科目，他学部科目，言語自由科目（全学共通），並びに 5 大学間単位互換制度による他大学の科目の単位を算入することができる。										1 学年の学期区分				2学期		
										1 学期の授業期間				14週		
										1 時限の授業の標準時間				100分		

別記様式第2号（その3の1）				
授業科目の概要				
(環境学部環境学科)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
必修科目	リベラルアーツとしての環境学原論 1	○	リベラルアーツとしての環境学原論 1 は、続く 2 とともに、環境学の多様なアプローチとその関係性を春学期・秋学期の 1 年を通して学びながら、教員と学生のそれぞれが環境問題の解決と持続可能な社会の実現に向けてどのような役割を担うのかをともに考える、初年次生向けの必修科目である。本講義では、コーディネーター役の教員が、リベラルアーツの視野から見た各講義の関係を整理、解説しつつ、多様な専門分野を持つ教員がそれぞれの学問的アプローチを紹介する。また、フィールドスタディ訪問地域等から招くゲストスピーカーと複数名の教員が同時に出演し、環境問題や持続可能な地域づくりに関する現場からの報告と、それに対する多様な学問的視点からの対話を展開する授業回も用意する。全体コーディネーター教員のもと、各教員とゲストスピーカーが 1 ～ 2 時間ずつ担当する一連の講義を通して、学生は、リベラルアーツとしての環境学の中でそれぞれの専門的な学問分野がどのような役割を果たすかを理解し、批判的思考を身に付けながら、学生自身の興味関心を自ら発見し、持続可能な社会づくりに参画する一市民としての自身のあり方を考えることが期待される。 (オムニバス方式／全14回) ※予定 コーディネーター：2 ニノ宮リムさち (全14回出演) 第1回：導入 (2 ニノ宮リムさち) 第2回：環境法学 (15 鈴木詩衣菜) 第3回：環境生物学 (7 大久保奈弥) 第4回：環境政策学 (5 遠藤崇浩) 第5回：環境課題の現場と向き合う対話 (ゲストスピーカー-A・15 鈴木詩衣菜・5 遠藤崇浩・7 大久保奈弥) 第6回：環境史学 (11 佐野雅規) 第7回：環境社会学・環境倫理 (6 富田涼都) 第8回：生命科学・生態学 (16 宮田佳奈) 第9回：環境課題の現場と向き合う対話 (ゲストスピーカー-B・11 佐野雅規・6 富田涼都・16 宮田佳奈) 第10回：人文地理学 (12 相馬拓也) 第11回：海洋学・気候学 (17 山本絢子) 第12回：環境教育学 (2 ニノ宮リムさち) 第13回：気候アクションの現場と向き合う対話 (基幹教員以外の教員 (平田仁子)・12 相馬拓也・17 山本絢子・2 ニノ宮リムさち) 第14回：まとめ (2 ニノ宮リムさち)	オムニバス方式・共同 (一部)
	リベラルアーツとしての環境学原論 2	○	リベラルアーツとしての環境学原論 2 は、1 とともに、環境学の多様なアプローチとその関係性を春学期・秋学期の 1 年を通して学びながら、教員と学生のそれぞれが環境問題の解決と持続可能な社会の実現に向けてどのような役割を担うのかをともに考える、初年次生向けの必修科目である。本講義では、コーディネーター役の教員が、リベラルアーツの視野から見た全体を通じた各講義の関係を整理、解説しつつ、多様な専門分野を持つ教員がそれぞれの学問的アプローチを紹介する。また、フィールドスタディ訪問地域等から招くゲストスピーカーと複数名の教員が同時に出演し、環境問題や持続可能な地域づくりに関する現場からの報告と、それに対する多様な学問的視点からの対話を展開する授業回も用意する。全体コーディネーター教員のもと、各教員とゲストスピーカーが 1 ～ 2 時間ずつ担当する一連の講義を通して、学生は、リベラルアーツとしての環境学の中でそれぞれの専門的な学問分野がどのような役割を果たすかを理解し、批判的思考を身に付けながら、学生自身の興味関心を自ら発見し、持続可能な社会づくりに参画する一市民としての自身のあり方を考えることが期待される。 (オムニバス方式／全14回) ※予定 コーディネーター：10 森朋子 (全14回出演) 第1回：導入 (10 森朋子) 第2回：環境化学 (8 高田秀重) 第3回：環境政策・法学 (9 滝口直樹) 第4回：環境緑地学 (13 飯田晶子) 第5回：環境課題の現場 C と向き合う対話 (ゲストスピーカー-C・8 高田秀重・9 滝口直樹・13 飯田晶子) 第6回：環境政策学・環境アセスメント論 (14 柴田裕希) 第7回：環境化学工学 (4 下ヶ橋雅樹) 第8回：経営学 (3 石川淳) 第9回：環境課題の現場 D との対話 (ゲストスピーカー-D・14 柴田裕希・4 下ヶ橋雅樹・3 石川淳) 第10回：環境化学 (1 小林潤司) 第11回：環境経済学 (18 西林勝吾) 第12回：環境工学 (10 森朋子) 第13回：環境課題の現場 E と向き合う対話 (ゲストスピーカー-E・18 西林勝吾・1 小林潤司・10 森朋子) 第14回：まとめ (10 森朋子)	オムニバス方式・共同 (一部)
	環境科学入門 1	○	地球環境に関する基本的な知識と現代の環境問題を理解するための自然科学的な基礎を学ぶ科目である。特に環境科学入門 1 では化学と生物学を中心に扱う。この授業では、地球の主要な環境システム (大気圏、水圏、地圏、生物圏) の構造と機能を化学的な視点と生物学的な視点から学び、それらが相互にどのように作用しているかを調べる。また、気候変動、森林破壊、大気汚染、水質汚染、生物多様性の減少など、地球規模での環境問題を取り上げ、その原因と影響を化学および生物学の視点から分析する。また、化学および生物学の基礎的な実習を通じて、理論と実践の関連性と相違点についても学ぶ。化学分野の講義および実習と生物学の講義および実習のそれぞれをオムニバス形式で複数の教員が担当する。 (オムニバス方式／全 1 4 回) (8 高田秀重／2 回) 導入、まとめ (4 下ヶ橋雅樹／3 回) 環境システムの化学的視点からの理解 (1 小林潤司／3 回) 環境化学に関する基礎実習 (7 大久保奈弥／3 回) 環境保全、生物多様性などの生物学的な視点からの理解 (16 宮田佳奈／3 回) 微生物学、植物生態学に関する基礎実習	オムニバス方式 講義：16.6時間 実験：6.6時間
	環境科学入門 2	○	地球環境に関する基本的な知識と現代の環境問題を理解するための自然科学的な基礎を学ぶ科目である。特に環境科学入門 2 では気候学、気象学、地学とデータサイエンスを中心に扱う。この授業では、地球の主要な環境システム (大気圏、水圏、地圏、生物圏) の構造と機能を気候学の観点から学ぶとともに、私たちが生活する都市環境およびエネルギー問題と関連づけて学ぶ。また、気候変動とエネルギー問題との関連、気候変動と都市開発の関連など、地球規模での環境問題を取り上げ、その原因と影響を分析する。また、気象学およびデータサイエンスの基礎的な実習を通じて、理論と実践の関連性と相違点についても学ぶ。地学、物理分野の講義および実習とデータサイエンスの講義および実習のそれぞれをオムニバス形式で複数の教員が担当する。 (オムニバス方式／全 1 4 回) (1 小林潤司／2 回) 導入、まとめ (11 佐野雅規／3 回) 気候学、データサイエンス基礎実習 (17 山本絢子／3 回) 気象学、気象学実習 (13 飯田晶子／3 回) 都市環境学 (10 森朋子／3 回) 物質収支とLCA (ライフサイクルアセスメント)	オムニバス方式 講義：16.6時間 実験：6.6時間
	環境フィールドスタディ 1	○	1 年次必修科目として講義や演習で身につけた知識やスキルを実際のフィールドで活用する科目である。この授業では、実際の地域課題や現地の自然環境を題材として、様々な学問分野の知識や視点がどのように関連しているかを学ぶ。事前学習、現場実習、事後学習を通して、知識と実際の体験とを関連づけることを目標とする。事前学習においては、担当教員による地域の課題や関連する基礎知識の導入を行い、フィールドスタディで実際に訪れる地域の方をゲストスピーカーとして招き、グループディスカッションを通じて議論を重ねることで知見を深めた後、数日間、もしくは複数回の現場実習を行う。現場実習においては、その地域の環境課題の現場を訪れ、実際の取り組みを見学し、問題の本質を多角的な視点に基づいて理解することを目的とする。最終的に事後学習として、学生達が学んだことをプレゼンテーションする報告会を行う。	共同

専門 選択 科目	基幹 科目	環境 総合	気候変動とカーボンニュートラル	○	地球規模で進行する気候変動の原因と影響を理解し、気候変動を緩和するためのカーボンニュートラル（炭素中立）の概念とその実現に向けた戦略を学ぶ科目である。この授業では、温室効果ガス（GHG）の排出と地球温暖化の関係、主要な温室効果ガスの種類とその発生源、気候変動が生態系や社会に与える影響の科学的な分析を学ぶ。 カーボンニュートラルを実現するための具体的な手法として、再生可能エネルギーの導入、エネルギー効率の改善、カーボンオフセット、炭素回収・貯留技術（CCS）、植林や森林保護などの科学的な観点からの解決策も取り扱う。また、国際的な気候政策や合意（パリ協定など）、各国のカーボンニュートラルに向けた取り組み、市民による社会運動としての気候アクション等についても学び、持続可能な社会構築に向けた政策的・技術的アプローチを批判的に考察する。 学生は講義やグループディスカッションを通じて、気候変動の緩和と適応に向けた多角的な視点を養い、持続可能なエネルギー利用や低炭素社会の実現に向けた実践的な知識とスキルを身につけることを目指す。 （オムニバス方式／全14回） （17 山本絢子・11 佐野雅規・9 滝口直樹／5回） 導入、まとめ （17 山本絢子／3回） 気候変動 （11 佐野雅規／3回） 森林保護 （9 滝口直樹／3回） 気候政策 （基幹教員以外の教員（平田仁子）／1回） 気候変動と脱炭素社会	
			生物多様性とネイチャーボジティブ	○	地球上の生物多様性の重要性を理解し、それを保全・回復するための「ネイチャーボジティブ」なアプローチを学ぶ科目である。この授業では、生物多様性の概念、生態系における多様な生物の役割、生物多様性がもたらす生態系サービス（食料、水、気候調整など）について科学的に探求する。また、生物多様性の喪失が地球環境や人類の生活に与える深刻な影響を学び、これを逆転させるための国際的な取り組みや政策も取り上げる。 「ネイチャーボジティブ」とは、単に自然破壊を止めるのではなく、生態系を回復し、自然の状態を改善することを目指す考え方であり、この授業ではその具体的な実践方法を学ぶ。例えば、都市部でのグリーンインフラの導入、絶滅危惧種の保護、エコシステム再生プロジェクトなどの具体例を通じて、生物多様性を回復させるための技術と政策を考察する。生物多様性保全の重要性を理解し、ネイチャーボジティブな未来を実現するための科学的知識と実践的なスキルを身につけ、自然との共生に貢献できる力を養うことを目指す。 オムニバス形式で複数の教員が担当する。 （オムニバス方式／全14回） （5 遠藤崇浩・15 鈴木詩衣菜・7 大久保奈弥・13 飯田晶子／3回） 導入、まとめ （5 遠藤崇浩／3回） 生態保全と持続可能な社会構築 （15 鈴木詩衣菜／4回） 生態保全にむけた国際的な取り組みや政策 （7 大久保奈弥／3回） 生物多様性保全 （13 飯田晶子／3回） 生態系サービスと都市環境との関わり	オムニバス方式・共同 （一部）
			環境汚染・公害とわたしたちの社会	○	国内外のさまざまな汚染・公害問題の原因、影響、対策について、過去の歴史から学び、現状を理解し、これからの社会のあり方を考える科目である。この授業では、大気汚染、水質汚染、土壌汚染、騒音、振動、悪臭といった、世界中で発生してきた主要な公害問題を取り扱う。公害が人間の健康や生態系に与える影響を科学的に理解し、各国の環境規制や国際的な協力、技術的な解決策を学ぶとともに、公害の歴史的経緯と社会的課題について、政策的動向と、被害・加害に直面した人々や地域社会の苦難と運動に着目しつつ学ぶ。 これまでの重大な公害事件を取り扱うとともに、プラスチックごみによる海洋汚染や放射能汚染など、現代の重要課題を取り上げる。 さらに、環境汚染への対応として、国内施策と国際的な枠組みや協力体制を理解する。 学生はこれらの知識をもとに、持続可能な未来に向けた環境問題の解決策を考え、実践的な取り組みに貢献するための視野とスキルを身につけることを目指す。 （オムニバス方式／全14回） （2 ニノ宮リムさち・8 高田秀重・12 相馬拓也／2回） 導入、まとめ （2 ニノ宮リムさち／4回） 公害の歴史、社会への影響、公害学習・運動 （8 高田秀重／4回） 海洋プラスチック汚染、化学物質と汚染 （12 相馬拓也／4回） 世界の公害・汚染問題、国際協力	オムニバス方式・共同 （一部）
			資源循環とサーキュラーエコノミー	○	限りある地球資源を効率的に利用し、廃棄物を最小化するための循環型経済（サーキュラーエコノミー）について学ぶ科目である。この授業では、従来の「使い捨て」型経済に代わる、新しい経済モデルであるサーキュラーエコノミーの基本概念を理解し、資源のライフサイクル全体における持続可能な管理方法を探る。 サーキュラーエコノミーでは、製品の設計段階から廃棄物の削減、リサイクル、再利用が考慮され、資源が無駄なく循環するシステムを構築することが重要である。具体的なトピックには、リサイクル技術、リユース、リペア、アップサイクル、クローズドループの設計、廃棄物から資源を生み出す技術革新などが含まれる。また、資源循環を促進するための政策や企業の取り組み、産業界での循環型ビジネスモデルの事例（シェアリングエコノミーやプロダクト・アズ・ア・サービスなど）も取り扱う。 さらに、プラスチックや金属、電子廃棄物、食品廃棄物などの資源管理と、それに伴う環境負荷の低減についても学習し、経済発展と環境保護のバランスを取るための手法を考察する。学生は、持続可能な経済システムに向けた実践的なアプローチを理解し、資源循環を促進するための知識とスキルを身につけることを目指す。 （オムニバス方式／全14回） （10 森朋子・16 宮田佳奈・18 西林勝吾／2回） 導入、まとめ （10 森朋子／4回） 資源循環、廃棄物削減とリサイクル （16 宮田佳奈／4回） 生物資源管理 （18 西林勝吾／4回） 環境経済学、循環型経済	オムニバス方式・共同 （一部）
			環境アセスメントと持続可能な開発	○	開発が環境に与える影響を評価し、持続可能な開発を実現するための手法と政策について学ぶ。この授業では、環境アセスメント（環境影響評価、EIA）の基本概念と手法を理解し、開発活動が自然環境や社会に及ぼす影響を事前に評価し、適切な環境保護措置を講じるためのプロセスを学ぶ。 環境アセスメントでは、環境への影響を予測し、そのリスクを最小化するための代替案の検討や環境保護対策が行われる。具体的には、インフラ建設、エネルギープロジェクト、工業施設の開発などにおける影響評価や、自然資源の利用が生態系に与える影響を科学的に分析する。また、住民参加や公聴会の重要性、多様な利害関係者との合意形成のプロセスも学習し、持続可能な開発におけるガバナンスの役割も考察する。 さらに、持続可能な開発のための国際的な枠組み（SDGs、パリ協定など）や、企業の社会的責任（CSR）、持続可能な設計や建設手法（グリーンビルディング、エコシティ）も取り扱う。持続可能な開発を実現するための環境アセスメントの実践的なスキルを習得し、環境と経済のバランスを取るための意思決定プロセスを理解することを目指す。 （オムニバス方式／全14回） （14 柴田裕希・1 小林潤司・6 富田涼都／2回） 導入、まとめ （14 柴田裕希／4回） 環境アセスメントの概念と手法 （1 小林潤司／4回） 開発が環境に及ぼす化学的影響評価 （6 富田涼都／4回） 持続可能な開発と市民対話・合意形成	オムニバス方式・共同 （一部）

			環境問題の解決に向けて、大量のデータを収集、解析し、意思決定を支援するための手法と技術を学ぶ。この授業では、気候データ、生態系データ、汚染物質のデータなど、環境分野で利用される多様なデータを紹介し、これらのデータがどのような手法に基づいて収集されているかと言うことを理解し、効果的に分析するためのデータサイエンスの基礎を習得する。 データの収集と前処理、統計解析、機械学習、時系列解析、空間解析（GIS）、データ可視化の手法の基礎を学ぶ。環境データの解析に用いるプログラミング言語（PythonやRなど）についても触れる。また、気候変動の予測モデル、都市のヒートアイランド現象、森林減少の解析、環境リスク評価など、実際の環境問題にデータサイエンスを応用するケーススタディを通じて、実践的なスキルを磨く。 環境データの解析とその応用を通じて、持続可能な社会の構築に向けた科学的意思決定をサポートする能力を身につけることを目指す。 （オムニバス方式／全14回） （4 下ヶ橋雅樹・基幹教員以外の教員（古川真莉子）・基幹教員以外の教員（後藤尚弘）／2回） 導入、まとめ （4 下ヶ橋雅樹／4回） 化学物質のデータ収集と解析 （基幹教員以外の教員（古川真莉子）／4回） 社会科学的データの理解と解析 （基幹教員以外の教員（後藤尚弘）／4回） データ解析とプログラミング基礎		オムニバス方式・共同（一部）
人間と社会	自然環境と人間社会	○	人間の社会は自然環境に支えられ、相互に影響を与えながら成立している。本講義では、人類学・地理学・生態学・社会学などの知見と視座を踏まえつつ、自然環境と人間社会の関係性の奥行きを学習する。講義では、21世紀の地球人類の直面する、①環境適応のエスノグラフィ、②動物・植物と人間のインタラクション、③人新世の環境課題、の3つの大分類テーマを設定する。人間社会の生活・文化・経済といった領域が、自然環境との相互作用のなかでどのように発展してきたのか、またどのような課題を生んできたのか、グローバルにケーススタディを踏まえながら検討する。とくに講義担当者の専門とする地理学・人類学・環境保全や国際協力分野などフィールドでの研究実務と実践から、人間社会のさまざまな環境課題の解決に積極的にコミットできる「働く学問」としての環境学の手法と感性を体得し、そのうえで、自身と自然環境との関わりについて、批判的に省みる気づきを得ることを目指す。		
	環境倫理	○	人にとって環境はどのようなものか。人や社会が環境との間で抱える問題やその解決とはどのようなものか。こうした「環境問題」に直面した人倫の理としての「倫理」は、現場でも思想でもずっと問われてきた。この講義では、その問いと格闘してきた思考や事例をふりかえりながら、私たちが現代の「環境問題」をどう捉えてくべきなのかを考える。2年次以降、各自の関心に応じてあらゆる領域で学びを深めていく際の基礎となる思考、視点を培う科目である。		
	環境教育・ESDとシティズンシップ	○	環境問題の解決や持続可能な社会の実現に向け、人間や社会が変容・変革していくための「教育・学習」のあり方について学ぶとともに、自身が持続可能な社会づくりに参画していく力としてのシティズンシップを育むことを目的とする。これまでの環境教育・持続可能な開発のための教育（ESD）の発展をふりかえり、概念の変遷や、実践の具体的事例、アプローチを学び、意義、課題を検討する。また、環境教育・ESDが育む重要な力としてシティズンシップに着目し、自らが学習者としてその力を得ることを目指す。2年次以降、あらゆる領域を支える環境教育・ESDについての基本的な視点と、行動するための基盤となるシティズンシップを培う科目である。		
	環境法入門	○	環境問題に向き合う上で重要な役割を果たす法制度について、その基本的な枠組を学ぶ。国内法・国際法それぞれに関する制度や理論の発展の歴史、基本原則や理念、現在の主要な法制度、それらにかかわる具体的事例等を学び、環境法としての特色や課題を理解する。2年次以降、専門性を深めていく際、あらゆる領域に関連する環境法の基礎的理解を身につけるとともに、環境法や関連領域について専門性を深めたい学生にとっては特に発展科目「国際環境法」「環境行政法」の導入的な役割を果たす。		
	環境政策・経済学入門	○	講義前半部分で主に環境経済学の知見を基に、環境問題の原因である市場の失敗とその是正策に関する理論を学ぶ。講義後半部分で昨今の環境問題に焦点をあて、前半で培った理論的視座が現実の環境問題の理解にどのように役立つか解説する。 （オムニバス方式／全14回） （5 遠藤崇浩／7回） 環境政策学 （18 西林勝吾／7回） 環境経済学		オムニバス方式
	環境学のための社会調査法入門	○	環境学におけるアプローチのひとつとしての社会調査について、その意義、背景、方法、思想に関する基本的な知識を学ぶ。さまざまな社会調査の手法と、それらにもとづくデータ収集・分析の具体的方法について、量的調査・質的調査の双方を扱いながら、実例に沿って解説する。また、社会調査の歴史や思想、倫理について、環境学におけるパラダイム理解のあり方も踏まえ、検討する。卒業論文に向けて社会調査を行う学生にとっては、そのための基礎的なスキルを習得する機会となり、それ以外の学生にとっても、社会調査を読み解くためのリテラシーを獲得する機会となる。		
	Environmental Issues in Japan and the World	○	In this course, students gain an overview of the history and status of environmental issues in the Japanese and international society. Pollution or <i>Kogai</i> cases including Minamata Disease and Fukushima Nuclear Power Plant Accident in Japan are reviewed in relation to the socio-economic system behind them. Global environmental issues such as climate change and biodiversity loss are also discussed, from both the local and global perspectives. （和訳）この科目は、日本および世界における環境問題の歴史と現状について概観する科目である。水俣病や、福島原発事故をはじめとする公害や汚染について、その背景となる社会経済システムとの関連から学んでいく。気候変動や生物多様性損失といった地球規模の環境問題についても、地域的視点とグローバルな視点から取り扱う。		
科学と技術	環境統計学基礎	○	環境科学の研究や実務において不可欠な統計の手法とデータ解析技術を学ぶ。この授業では、まず統計学の基本概念、確率論、データの記述統計といった基礎的な内容から始まり、次に推測統計、仮説検定、回帰分析、相関分析など、環境データの解析に必要な高度な手法について学ぶ。講義では理論とともに、実際のデータを用いて、データ収集、処理、解析の各ステップを実践的に習得する。実際の環境問題に関連するデータを実践的に取り扱うことで、統計的な解釈をするとともに、その限界を理解する。これにより、学生は統計解析を通じて環境問題を科学的に評価し、客観的なデータに基づいた意思決定を行う能力を身につけることが期待される。 （オムニバス方式／全14回） （4 下ヶ橋雅樹／7回） 基礎概念と確率論 （11 佐野雅規／7回） データの記述統計、推測統計		オムニバス方式
	環境物理学基礎	○	環境問題の理解と解決に向けて必要な物理学の基本的な概念と原理を学ぶ。この授業では、力学の概念を中心に学び、さらに、電磁気学や波の性質など、基礎的な物理学について学ぶ。また、発展科目である「熱力学」「地球流体力学」「エネルギー科学」といった科目の導入的な役割を果たす。これらを通して学生は、物理学の基本的な概念・法則・考え方を学び、様々な自然現象を科学的にとらえる基礎を習得する。物理法則を環境問題に応用する姿勢を学び、環境現象を物理的に理解し、物理的な問題解決のアプローチを身につけることが期待される。また、この科目は環境科学の他の領域と物理学を結びつけ、より広範な視野で環境問題を考察するための基礎となる知識を提供する。 （オムニバス方式／全14回） （17 山本絢子／7回） 力学 （基幹教員以外の教員（川上言美）／7回） 電磁気学		オムニバス方式
	環境化学基礎	○	環境中での化学物質の振る舞いやそれが環境および人間に与える影響を理解するための基礎的な化学の概念と原理を学ぶ。この授業では、まず化学の基本的な概念、すなわち、原子構造、化学結合、化学反応の基礎から始め、酸・塩基反応、酸化還元反応、光化学反応など、環境に特有の化学反応を理解するための基礎的な平衡の化学や、無機化学、有機化学について総論的に学ぶ。学生は環境問題を化学的に理解し、実践的な解決策を導くための知識とスキルを習得するための基礎を学ぶ。 （オムニバス方式／全14回） （4 下ヶ橋雅樹／7回） 原子構造と化学結合 （1 小林潤司／7回） 化学反応		オムニバス方式
	環境生物学基礎	○	生物と環境の相互作用を理解し、環境問題の解決に向けた基礎的な生物学の知識を学ぶことを目的とした科目である。この授業では、細胞、遺伝や代謝といった生物学の基礎的な知識に加え、生態系の構造と機能、生物多様性の重要性、種間および種内の相互作用、エネルギーの流れと物質循環など、環境生物学の基本概念を中心に学ぶ。さらに、地球規模での生態系の変化や人間活動による影響、例えば森林破壊、気候変動、外来種の侵入、生物多様性の減少といった現代の環境問題についても講義の中で触れていく。この科目を通して、学生は環境保全や生態系管理において、科学的な根拠に基づいた判断を下すために必要な生物学の知識と視点を習得する。 （オムニバス方式／全14回） （7 大久保奈弥／7回） 種の分類と多様性 （16 宮田佳奈／7回） 生物の構造と機能		オムニバス方式

			環境地学基礎	○	地球の物理的・化学的プロセスと環境との関連を理解するための基礎的な知識を学ぶ。前半では、宇宙の誕生から始まり地球の内部構造、プレートテクトニクス、火山活動、地震、風化、堆積といった地質学の基本概念を取り上げ、それらが環境にどのように影響を与えるかを探る。後半では、地球を取り巻く大気と海洋の構造と動態について学ぶ。具体的には、大気および海洋の構造および大循環、熱収支、雲形成の仕組み、大気と海洋の相互作用について取り上げ、地球システムにおける大気と海洋の働きについての理解を深める。また、人間活動が地球の自然プロセスに及ぼす影響やそれに対する持続可能な解決策についても考察する。 (オムニバス方式／全14回) (17 山本絢子／7回) 大気と気象 (基幹教員以外の教員 (小宮剛)／7回) 地球の内部構造	オムニバス方式
			環境デザイン・マネジメント	○	日本及び世界における環境デザイン・マネジメントの変遷、理論、実践を学ぶ。前半では、公園系統、田園都市、流域圏プランニング等の国内外におけるこれまでの環境デザインの理論と実践を学ぶ。また、循環型都市、グリーン・ジェントリフィケーション、グリーン投資と環境認証など環境デザインに関する最新のキーワードについても取り上げる。後半では、環境マネジメント・システムについて扱う。環境マネジメントシステム (EMS) の構築や、ISO14001などの国際基準に基づいた管理手法を学び、企業や自治体が環境配慮型の経営を実践するための戦略も考察する。 (オムニバス方式／全14回) (13 飯田晶子・14 柴田裕希／2回) 導入、まとめ (13 飯田晶子／6回) 環境デザイン (14 柴田裕希／6回) 環境マネジメントシステム	オムニバス方式・共同 (一部)
			Natural Science of Triple Planetary Crisis	○	We, humans, living in the current world are facing the triple planetary crises. The triple planetary issues caused by human activities - climate change, biodiversity loss, and pollution - impact the lives of people all over the world though in an unfair pattern. This course aims at letting students gain basic understanding of these issues from both natural and social scientific approaches and discuss how we can transform our socio-economic system to overcome this crisis. (和訳) 私たち人類は、今「3つの地球危機」に直面している。人間の活動によって引き起こされた、気候変動、自然・生物多様性喪失、汚染、これら3つの地球危機は、世界中の人々の生活に影響を及ぼしているが、その負荷は不平等にもたらされている。この科目では、自然科学、社会科学の両方の側面からこれらの問題に対する基本的な理解を深め、社会経済システムをどのように変革してこれらの危機を乗り越えるかを議論することを目的とする。	
	発展科目	自然科学領域	地球化学	○	地球の化学的な構成要素とその変遷、ならびに地球の物質循環に関する基本的な原理とプロセスを学ぶ。この授業では、地球内部の元素分布、炭素や窒素などの元素に注目した物質循環と同位体を用いた研究方法についても学ぶ。物質循環と環境問題との関連についてもふれ、オゾン層破壊などの地球規模の環境問題も取り上げる。地球の物質循環における化学的過程を科学的に探求するスキルを養うことを目指す。 (オムニバス形式／全14回) (8 高田秀重／7回) 元素循環 (基幹教員以外の教員 (角野浩史)／7回) 同位体地球化学	オムニバス方式
			材料化学	○	物質の構造、性質、および性能を理解し、これらの相関関係を理解することを目的とした科目である。この授業では、プラスチックや金属、半導体、セラミックスや複合材料などの主要な材料の特性とそれらの応用について学ぶ。具体的には、材料の構造、相構造、熱的性質、電気的などの基礎的な概念を取り上げる。また、材料の加工技術や表面処理、材料の劣化と寿命評価、再利用とリサイクルの技術にも焦点を当てる。持続可能な社会への変革を意識し、持続可能な材料の開発やエコマテリアルの設計についても学ぶ。	
		陸上生物学	陸上生物学	○	陸上に生息する生物の多様性、進化、生態学、行動、およびそれらが環境とどのように相互作用しているかを理解することを目的とした科目である。植物、動物、菌類などの陸上生物の分類について学び、これらがどのように進化し、陸上環境に適応してきたかを探るとともに、生態系内での役割や相互作用について学ぶ。具体的なトピックには、陸上生物の進化的適応、陸上での栄養やエネルギーの循環が含まれる。また、森林、草原、砂漠、湿地などのさまざまな陸上生態系における生物群の相互作用、食物連鎖、群集動態、生物多様性についても取り扱う。陸上生物の多様性と生態系の機能に対する深い理解を得るとともに、自然保護や環境管理の実践的なスキルを身につけることを目指す。 (オムニバス方式／全14回) (基幹教員以外の教員 (上遠岳彦)／7回) 陸上動物の生物学的構造、生態学 (11 佐野雅規／7回) 陸上植物の生物学的構造、生態学	オムニバス方式
			海洋生物学	○	海洋に生息する生物の分類、生態、およびそれらが環境とどのように相互作用しているかを理解することを目的とした科目である。この授業では、海洋に生息する生物、その生理・生態、海洋生態系の多様性など、広範囲にわたるトピックを学ぶ。具体的には、プランクトン、植物プランクトン、動物プランクトン、ネクトンなどの海洋生物の分類や生態に関する知識を深め、海洋生物の繁殖、成長、適応戦略や、海洋環境における種間・種内相互作用も探る。また、サンゴ礁や干潟や深海の生態系についても学習する。海洋生物とその生息環境の科学的理解を深めるとともに、持続可能な海洋資源の利用や生態系の保全に貢献するための知識と実践的スキルを習得することを旨とする。	
			生物生態学	○	生物と環境、または生物同士の相互作用を理解することを目的とした科目である。個体、集団、生態系の3つのレベルでの考察を行い、生物多様性、生態系サービスなどの概念を学ぶ。加えて、生物の生息空間を創出・保全についても学ぶ。地球温暖化や絶滅危惧種の増加などの環境問題を踏まえ、生態系の構造や機能、動植物の生態、自然環境の保全と再生技術に関する知識を身につけ、生物多様性の保全と生物の生育環境改善を目指したバイオトープの役割を理解することを旨とする。	
			分子生物学	○	生物の生命活動を分子レベルで理解することを目的とした科目であり、この授業では、DNAやタンパク質といった生体分子の構造と機能に焦点を当て、それらが細胞内でどのように生命現象を支えているかを学ぶ。主要なトピックには、細胞、遺伝、分子生物学、代謝、などが含まれる。さらに、遺伝子改変に関して、理論的な視点からの学びに加えて、倫理的な側面からの理解も深め、批判的な思考を身につける。また、分子レベルから生物現象を理解することで、バイオテクノロジー、遺伝子工学、農業、医療などの応用分野における、実践的な知識を身につけるとともに、地球環境を多角的な視点から評価できるようになることを目指す。	
			微生物学	○	微生物の構造、機能、分類、そして生態系における役割を理解することを目的とした科目。この授業では、細菌、ウイルス、真菌、藻類、原生動物などの微生物の基本的な生物学的特性を学び、微生物の成長や代謝、遺伝子の構造と発現、環境中での役割に焦点を当てる。また、微生物の生態学的役割、例えば分解者としての機能や、炭素、窒素、硫黄などの物質循環における重要性についても探る。さらに、バイオテクノロジーにおける微生物の利用も取り上げる。学生は微生物の多様な機能と環境、産業、医療分野での応用について深い理解を得て、環境や人間社会における微生物の役割を科学的に考察できる能力を養う。	
			環境毒性学	○	環境毒性学は、環境中に放出される化学物質の動態から、生体毒性、生態影響まで幅広い分野をカバーしている。しかし、その方法論さえ未だ議論の対象となっていないのが現状である。本講義は、環境毒性学を成立させた環境問題全体の把握から、毒性学の基礎、化学物質汚染の事例を概説する。それらの事例を通して、化学物質の構造や物性がその物質の環境動態および毒性を支配していることを学ぶ。本講義を通じて、個人個人が環境問題について考える「基礎」の涵養を目的とする。	
			熱力学	○	エネルギーの変換と物質の状態変化に関する基本的な法則と原理を学ぶ。熱力学の第一法則と第二法則を中心に、エネルギー保存とエントロピーの概念を理解する。また、熱機関の効率や可逆・不可逆過程、自由エネルギーの役割についても学び、エネルギー変換の限界と可能性を探る。さらに、相平衡や化学平衡の概念を取り上げ、物質の状態変化や反応の進行における熱力学的視点を深める。実際の環境問題、例えば気候変動やエネルギー資源の利用における熱力学的考察も行い、持続可能なエネルギー利用のための科学的基盤を築く。環境科学における熱力学の応用についての知識を習得し、エネルギー問題の解決に寄与する能力を育成する。	
			地球流体力学	○	地球流体力学の基礎と応用を学ぶ科目である。本授業では、大気および海洋の動態を理解するための流体力学の基本的な理論と数理的手法を扱う。流体の運動方程式、回転、成層、渦度、波動現象といった地球環境に特有の力学プロセスに焦点をあて、地球システムのダイナミクスを解析する能力を養う。具体的には、ナビエ-ストークス方程式、地衡風理論、波動の基本、不安定性、大気および海洋の大循環に関する理論を学ぶ。これらを通じて気候システムの理解を深め、気候変動や異常気象といった地球環境問題の解析に役立つ知識を習得することを旨とする。	

		気候学	○	地球の気候システムの基本構造とそのプロセスを理解し、気候システムを科学的に捉えるための基礎的知識とスキルを身につけると共に、気候変動が人間社会や環境に与える影響を科学的に考察する力を養う科目。この授業では、大気と海洋の構造と循環、気候システムのエネルギーのバランス、海洋、大気、陸地の相互作用、水循環、気候変動のメカニズムなどを包括的に学ぶ。また、エルニーニョ現象などの自然変動に加え、温室効果ガスの増加による人為的気候変動も取り扱う。また、気候モデルや気候感度、フィードバックメカニズムを通して、過去・現在・未来の気候を科学的に解析する方法を習得し、気候科学が現実社会の課題解決にどう役立つかを学ぶことを目指す。 (オムニバス方式／全14回) (17 山本純子／7回) 気象データの解析 (基幹教員以外の教員（関澤徳温）／7回) 気象データの測定	オムニバス方式
		科学史・科学哲学	○	科学の発展の歴史や科学的探求の哲学的基盤を理解し、科学の役割や方法論について深く考察することを目的とした科目。この授業では、科学がどのように形成され発展してきたか、歴史的に重要な科学的発見や技術革新が社会に与えた影響を学ぶ。古代ギリシャから近代科学の成立、ニュートン力学、ダーウィンの進化論、アインシュタインの相対性理論など、主要な科学的進展を取り上げる。また、科学的知識の本質や科学的手法、仮説検証の意義、科学の客観性と限界、社会との関係性について哲学的視点から探求する。科学哲学では、ボバーの反証可能性やクーンのパラダイムシフトなど、科学の進展に関する理論を学び、科学がいかにして知識を構築し、その知識がどのように社会に影響を与えるかを議論する。学生は科学の本質とその社会的役割を批判的に考える能力を養い、科学的思考の発展や限界を理解する力を培うことを目指す。	
		地球環境史	○	地球の環境がどのように変遷してきたかを長期的な視点から理解し、現在の環境問題や未来の変化を考察するための基礎的な知識を学ぶ科目。この授業では、地球誕生から現在に至るまでの地質学的時間スケールでの気候、海洋、大気、生物圏の変化を探る。具体的には、プレートテクトニクスによる大陸の移動、氷期と間氷期のサイクル、海洋循環の変化、生物大量絶滅と進化の歴史、大気中の二酸化炭素濃度の変動など、地球システムの長期的変動に焦点を当てる。また、人間活動が始まってからの環境への影響、特に産業革命以降の急激な気候変動や生態系への影響についても考察する。過去の環境変化を理解し、現代の環境問題を歴史的な視点から評価する力を養う。	
		環境化学実習	○	環境化学の理論を実践的に理解し、環境中の化学物質の分析と評価を行うための技術の習得を目的とした科目。本実習では、実際の水（河川や海水）などの環境サンプルを採取するところから行い、化学物質の抽出、分離、定量分析の基本的な技術を学ぶ。各種分析機器の使用手法や、化学分析のための標準操作手順の実践を行う。また、実験データの処理と解析、データの信頼性の評価方法も取り扱う。架空のサンプルではなく、海洋プラスチックの採取など、実際の環境問題をテーマにしたプロジェクトを通して、学生は化学分析結果をもとに環境汚染の状況を評価する。これにより、学生は分析データがどのような過程を通してえられ、どの程度の信頼性のもとに議論されるのかを学ぶ。また、実際の化学反応を行い、物質変換の基礎を体験するとともに、物質の精製過程についても体験する。 (オムニバス方式／全14回) (4 下ヶ橋雅樹／7回) 水溶液の分析 (1 小林潤司／7回) 大気の実験、土壌の実験	オムニバス方式
		環境生命実習	○	自然環境の変化が生き物にどのような影響を与えているのかを調べ、環境問題への理解を深めることを目的とした実習科目である。前半は、海洋無脊椎動物を用いて、水温やpH、マイクロプラスチックなど、現在問題になっている要因が生き物にどのような影響をもたらすのか、各自が独自の視点で観察と実験をおこない、その結果と考察を発表する。後半は、フィールドから植物の共生菌を探索し、接種実験や観察を行うとともに、過剰に施肥を行った際の菌根菌の感染状態の解析を行う。加えて、分子生物学における様々な技術に実際に触れて理解を深めるとともに、得られたデータを統計的に処理し、客観的に評価する手法を学習する。これらの実習を通して、自然環境における問題解決のための科学的アプローチ方法を知り、理解を深める。 (オムニバス方式／全14回) (7 大久保奈弥／7回) 動物実習 (16 宮田佳奈／7回) 微生物学実習	オムニバス方式
		環境数値解析	○	環境問題の解決に向けた数値的手法とその応用を学ぶ。この授業では、数値解析の基本的な理論と手法を理解し、環境データの解析や環境モデルの構築に必要な技術を習得する。具体的なトピックとして、微分・積分と偏微分方程式、線形代数などの数学の導入と、最適化手法、統計的手法の基礎などを扱う。これらの数値解析技術は、気候変動モデル、大気汚染の拡散シミュレーション、水質予測モデルなど、環境分野における実際の課題に適用される。講義と授業内での演習を通じて、プログラミングを用いて数値解析を実行し、環境データの処理やモデルの開発を行うスキルを磨く。これらの課題を通じて、数値解析の結果を科学的に解釈し、実際の環境問題に応用する力を養うことを目指す。 (オムニバス方式／全14回) (11 佐野雅規／7回) プログラミングとデータ解析 (4 下ヶ橋雅樹／7回) 常微分方程式、偏微分方程式	オムニバス方式
		気象学実習	○	気象観測手法・実験手法およびその解析手法を実践的に学ぶことを目的とする。前半では、気象観測の基礎を学び、得られた観測データを主にExcelを用いて解析する。一地点における気象観測から得られるデータを通じて、特定地域の気象現象を理解する力を養う。後半では、2次元および3次元の気象・気候データを活用し、Pythonを用いて空間パターンや長期変動の解析手法を学ぶ。地域スケールの観測データと全球スケールのデータ解析から、気象現象や気候変動の階層的な関連性を理解することを目的とする。本授業では、理論と実践を組み合わせたデータアプローチを通じて、観測データの活用や解析スキルを深めることを目指す。また、科学的データ解析に基づいて結論を導き出す力を育成するとともに、気象学・気候学に関する基礎知識の習得を促進することを目標とする。	
	人文・社会科学領域	法学概論	○	本講義では、実定法（人間の行為に基づき成立し、一定の時代の特定した国家に適用されるルールのこと）のうち、憲法、民法、行政法、刑法、国際法を取り上げる。それぞれの特徴ある条文や判例を手掛かりに、理想とする社会を実現するために、法がどのような役割をするのか、何が守られるべきなのか、どのように運用されているのかなど、環境学部の学生が知っておくべきルールを学ぶ。	
		国際環境法	○	国際環境法は、国際環境問題の特質ゆえに、形成、発展、形態、内容、履行確保において様々な特徴がある。本講義では、環境条約を手掛かりに、その基本的な構造を取り上げ、環境問題に対し国家がどのように対応しているのかを検討する。また、具体的な判例を通じて、環境問題を解決するために、何が守られるべきか、必要とされる対応はなにか、などについて汎山考える。	
		環境行政法	○	環境行政法とは、環境問題が顕在化するにたがって発展してきた環境行政に関わる法制度である。本講義では、その基本的な考え方と構造を学び、現代社会における可能性と課題を考える。具体的な環境問題に対する法令文、裁判例等を扱いながら、問題解決に向けた行政法制度の意義と問題点を議論する。	
		環境ガバナンス	○	環境ガバナンスとは、社会が環境との関係を調整、管理するための能力や仕組みのことをいう。現代社会において、環境ガバナンスのあり方は多様性を増し、関与する主体も広がっている。本講義では、そのような現代的視野を踏まえ、環境課題の解決と持続可能な社会づくりに向けて、行政のみならず、企業、NPOなどの市民組織、さらに多様な市民が積極的に関わり合いともに取り組む仕組みについて、検討を深める。	
		市民参加と合意形成	○	現実社会のなかで環境問題を解決し、持続可能な社会をつくらうとする過程には、様々な人々や組織の価値観、立場、利害関係などを調整し、合意形成を図る必要がある。本講義では、主として行政が行う計画づくりや公共事業に着目し、持続可能な地域形成に向けた、公的な計画活動における市民参加の手法と合意形成のあり方を検討する。地域とその環境の情報を整理し、これに基づいて参加型で計画を立案し、社会的な合意を実現するための手法について、事例と理論の両面から学びその知識と技術を修得する。	
		環境と国際政治	○	気候変動、生物多様性損失、汚染といった世界規模の環境課題に向き合い、持続可能な開発を実現するためには、グローバルな協調が欠かせない。本講義では、国際政治の具体的な成果を取り上げながら、そこに含まれる様々な課題を検討する。国際機関、市民社会組織、企業などのアクターが、環境問題に対し、どのような手段とともに取り組んでいくことができるか、その可能性を議論するとともに、グローバルシティズンとしての自身のあり方についても考えたい。	
		気候・エネルギー政策論	○	気候変動が喫緊の課題として我々の社会の行く末を阻む今、その緩和と適応を早急に促すための政策転換が強く求められている。しかし現状は、国際社会の対応は不十分なまま事態は悪化している。この授業は、対策が進まない原因について切り込み、気候変動を政治的課題としてとらえ、国際社会や各国の気候・エネルギー政策動向を理解し、課題と解決の可能性について考察し検討することを目的とする。国連による気候レジームとしての「パリ協定」のもと、日本をはじめとする各国がどのような姿勢を取り、政策を進めてきたか、またそうした中で市民社会がどのような役割を果たしてきたかを多面的に学び、これからの人類の存続をかけた挑戦に向け、自由闊達かつ創造的に今後の展望を議論する。	
		経済学概論	○	ミクロ経済学の入門的な内容を扱う。ミクロ経済学とは、個々の消費者や生産者がどのような経済的な意思決定を行っているのか、その結果として市場において商品の価格や取引量がどのように決まっているのかなどを分析する学問である。この授業では、市場における需要と供給の作用がどのように商品の価格や取引数量を決定しているのか、その時に消費者や生産者の厚生がどうなるのか、また政府の様々な規制や税などは経済にどのような影響を与えているのか、などの問題を考える。	

			環境経済学	○	環境経済学は、環境問題とは何か、そしてそのための処方箋はどのようなものかを、経済学的に分析し、考察する学問である。現在、環境問題が人間社会の抱える最も大きな問題の一つであることは明らかであり、大半の環境問題は人間の経済活動に起因することから、環境問題のメカニズムに経済学的にアプローチすることは不可欠である。本講義では、環境問題が経済学に関わっているもの、経済学が展望する持続可能な経済システムについて学び、議論する。また、環境経済学の実践史に触れ、現代の環境経済学を相対化する視点を身に付けることも目標とする。	
			環境と国際経済	○	グローバル化の進む現代社会において、わたしたちが直面するさまざまな問題は、相互に関係しあいながら、複雑性を増している。この授業では、環境問題をはじめとする持続可能性を取り巻く課題について、国際経済の観点から検討し、持続可能な社会の実現に向けた課題と可能性を検討する。貿易や、労働・資本の国際間移動等について、具体的事例を踏まえ扱いながら、基本的構造を理解し、向き合うべき問題を見出すことを目指す。	
			サステナビリティ経営論	○	現代社会において、環境や人権といったサステナビリティに関わる課題への取組は、企業を含むあらゆる組織にとって経営戦略の最重要課題である。本講義では、経営戦略としてのサステナビリティへの取組、すなわちサステナビリティ経営について、基本的な理念と現状を学ぶ。具体的な事例を取り上げながら、ESG投資やSDGsとの関わりを含め、国内外の動向を理解し、企業と社会の相互関係にもとづく今後の課題と可能性を議論する。	
			環境コミュニケーション	○	環境コミュニケーションとは、企業等が、環境に配慮した商品やサービス、価値を創造し、人々に伝え届けたい取組である。本科目では、現代社会が直面する環境問題に対して、企業、さらに行政や市民社会にも視野を広げ、取組がどのように広がっているか、マーケティングの視点から検討し、環境コミュニケーションとしての意義と課題を論じる。そのうえで、これからの持続可能な社会を実現していくうえで、新たなコミュニケーションのあり方がどのような可能性を示すか、議論を深める。	
			環境社会学	○	環境社会学は、「環境と人間社会の関係」と「環境を前にした人間社会内の関係」を、大きなネットワークとして捉えて、制度や経済、文化などを考慮しながら社会のあり方について探究する学問領域である。本授業では、様々な環境問題を取り上げながら、具体的事例を環境社会学のアプローチを用いて解説することで、環境社会学の基本的な理論的枠組みを理解し、それらを用いて事例を分析することができるようになることを目指す。また、そうした理解に立ちながら、自らや現在の社会を批判的に捉え直し、未来を構想することも見据える。	
			環境社会調査法実践	○	「環境学のための社会調査法入門」で学んだ手法と、歴史や倫理等に関する理解にもとづき、環境学領域における具体的な調査の企画、実施、データ分析、報告書作成を経験しながら、実践的スキルを身につけるための科目である。環境学研究に関するパラダイム理解も踏まえながら、現代の環境課題にもとづく問いを設定したうえで、必要な社会調査の内容を検討し、適切なデータ収集・分析方法を確定、実施して、得られた結果を報告書にまとめる。卒業論文、さらに卒業後も見据え、環境課題の理解と解決につながる社会調査を行うための理解と技能を確立することを旨とする。	
			環境と人権	○	環境をめぐる諸問題と人権の連関は、その発生と被害をめぐる一連のプロセスに及んでおり、より良い環境のあり様を考える上で人権は不可欠な視点である。この授業では、環境と人権をめぐる具体的な課題を取り上げ、環境と人権の結びつきの実相とその構造を理解し、よりよい環境で生きることができる社会のあり方について検討する。また、環境をめぐる人権課題に対し、その状況を変革しようと奮闘してきた人びとが学び・伝えてきた諸実践をととして、私たちが互いに人間の尊厳を守り合うことのできる社会と自己の在り方を問い直すこと目指していく。	
			環境アクションと市民社会	○	世界の環境危機を乗り越えていくうえでは、人々が社会を変えようと行動する「環境アクション」の広がりが不可欠である。この授業は、社会運動の理論や国内外の事例から、社会変革を担う市民社会のあり方、現代社会における環境アクションの可能性と課題を考えたともに、自らが市民のひとりとして環境アクションを企画し、実践し、広げるために必要なスキルを培うことを目的とする。コミュニティ・オーガナイズング等の実践的蓄積を踏まえ、市民社会に根ざす環境アクションを体験的に学ぶ。	
			持続可能な開発と国際協力	○	講義では、開発途上国における環境問題や持続可能な開発の実現に着目し、そのためにどのような国際協力が行われ、どのような効果と課題がみられるかをグローバルな事例から検討する。日本をはじめとする先進諸国や、国連・世界銀行・アジア開発銀行といった国際機関による開発援助、さらに南南協力・三角協力のスキームの役割と、それらを通じた貧困・紛争・環境問題・感染症などへの対処や対策を取り上げる。加えて、NPO・NGOなどの市民活動や草の根／国際協力についても学習し、ミクロからマクロレベルまで幅広い個別事例を扱いながら学びを深める。本講義の重要な理念でもある市民参加型開発・人間開発・アクション＝リサーチを軸として、学生自らが国際協力に参与できる理論と実践の手法を学習する。	
			エシカル消費論	○	この授業は、人間の生活を通じて環境問題に大きな影響を及ぼす行動としての「消費」に着目し、「エシカル（倫理的）」な消費のあり方を多角的にとらえる知識と視点を身につけることを目的とする。環境にこわえ、社会・人権、ガバナンスといった観点からも、モノやサービスに潜む問題を批判的に考えつつ、消費者としての自身との関係を理解するとともに、消費行動の具体的な選択肢を知り、問題の本質的解決につながる社会変革の道筋を検討する。	
			環境とメディア	○	メディアやジャーナリズムは、社会における様々な問題を解決し持続可能な未来を目指していくうえで重要な役割を果たすとともに、現在そのあり方の転換期を迎えている。この授業では、新聞・テレビ・ラジオ・雑誌・ウェブメディアなど、時事的な問題の報道・解説・批評の伝達を担うメディアが、環境問題にどのように向き合い、その解決と持続可能な社会づくりの中でどのような役割を果たしてきたか、また今後果たしていくことができるか、具体的事例をもとに検討する。フェイクニュースに代表される現代的課題も扱い、メディアリテラシーを養うことも目的とする。	
			環境正義のための紛争解決学	○	環境問題の解決や持続可能な社会づくり、環境正義の実現のためには、多様な立場や価値観の間の対立・葛藤・紛争を乗り越えていくことが不可欠となる。また公害や環境汚染などの被害が起こった場合には、そこに加害・被害の連鎖が生まれ、その修復と正義構築にも課題も生じる。この授業では、環境正義の課題を取り巻く人や組織等の間の紛争解決と平和構築に向けた取り組みの可能性と課題を学ぶことを目的とする。紛争解決学が蓄積してきた理論と、実社会における歴史や具体的事例から、環境正義や持続可能な社会づくりにおける紛争の構造を理解し、その解決について実践的に考えてゆく。	
			社会変革の環境教育学・ESD論	○	持続可能な未来の実現に向けた社会経済システム全体の変革が求められるいま、それを支える教育・学習のあり方が問われている。この授業では、国際社会ならびに国内での議論と実践を踏まえつつ、自らの体験を通じて、社会変革に必要な環境教育・ESDのあり方を検討する。環境教育学・ESD論において発展してきた理論を理解するとともに、自然環境保全や公害といった環境課題に向き合う地域や学校等の学習・教育活動の具体的事例から学び、自身でも教育プログラムを体験・試行することで、環境教育学・ESD論における研究・実践双方の視点を得ることを目指す。	
			参画と対話のファシリテーション	○	社会を持続可能な未来へ向けて変革していくためには、様々な人々の気づきや力を引き出し、参画と対話にもとづく学び合いと協働を促すファシリテーターが重要な役割を果たす。この授業では、ファシリテーションの理念や技術について、理論と実践の双方から学ぶ。ファシリテーションの意義や役割を理解するとともに、対等な関係性にもとづく参加型の話し合いや学び合いの場をファシリテートするための具体的な技法を体験を通じて習得することを目指す。環境教育やESD、環境アクションに取り組むうえで重要となる思考とスキルを身につけるための授業である。	
			共創のコーディネーション	○	持続可能な社会の実現に向けて、多様な立場、認識を持つ人や組織による共創のプロセスを支える中間支援機能の重要性が注目されている。この授業は、この中間支援機能としての、人・組織間の調整やネットワークづくり、すなわちコーディネーションについて学ぶことを目的とする。例えば地域社会で、様々な住民、組織・団体、事業者、行政などをつなぎ調整し、対話と協働を促しながらパートナーシップを育み、連携・協働のハブとなるコーディネーターのあり方について、理論と事例の双方から理解を深める。	
			環境心理学	○	環境心理学とは、人間と環境の関係を考える心理学の一領域であると同時に、多様な学問領域を横断する学際的領域でもある。この授業では、環境心理学の成立過程や主な理論・方法論を学ぶとともに、具体的な事例を挙げながら、環境心理学の課題と可能性を検討する。様々な環境問題に直面する社会のなかで、わたしたちが直面する現状と、未来を切り拓く方策を、心理学の視点から議論する。	
			地誌学概論	○	本講義では、とくに《自然環境と人間のインタラクション》に焦点を当てたテーマを選定する。従来の、アジア・アフリカ、オセアニアなどの地理区分ではなく、生態環境に依拠した暮らしの文脈から、地域を横断した自然環境と人類社会のインタラクションを地理学的視点から学習する。毎回の講義は、自然と生態環境・地域史・国家体制などを縦糸に、そして生存戦略、資源利用、文化遺産、宗教、ジェンダー、移民・難民、紛争、食文化など、話題性の高いトピックを横軸としてゆるやかなテーマを編み上げ、個別の社会・文化・生態現象を地域横断で比較する地誌学のダイナミズムを学ぶ。	
			環境文学	○	文学や物語における、人間と自然・環境の関わりを理解し考える。環境文学とはなにか、その歴史や主要な理論を学び、国内外の環境文学について実際の作品を取り上げ批判的に検討していく。環境文学研究の展開を理解し、環境学における環境文学の意義を考え、今後向き合うべき課題について論じる。社会科学・自然科学のアプローチだけでは解決できない環境問題に、文学がどのような関わりを持つことができるか、議論を深める。	
			環境とアート	○	アートと自然・環境の関係性を考え、議論することを目的とした科目である。人間社会は古くから、自然を芸術作品の主題としてきた。環境危機の時代といわれる今、人間と自然の関係を見つめなおし、そのあり方を再構築する必要性が認識されるなかで、アートの世界でも問題意識の広がりがみとれる。同時に、アートは、環境コミュニケーションを促進する重要な役割を担っている。この授業では、そうした自然・環境とアートの関係の変遷を学び、現代社会における課題と可能性を検討する。	

環境総合領域	地理学概論	○	本講義では、人文地理学と自然地理学の双方のテーマを学習します。地理学から派生した個別の分野を各講義の主題としつつ、グローバルにケーススタディを学ぶ。講義は、地理学の成立について、人文地理学的アプローチ、自然地理的アプローチ、地理調査法、の4つのカテゴリを設定する。自然地理と人文地理という枠組みを理解しつつも、文理の融解したリベラルアーツ性を重んじた構成で進める。また、地理学と隣接するさまざまな学問分野と社会問題・課題も統合し、あらゆる分野で有益となる地理学的思考力を養う。	
	都市環境学	○	都市環境における様々な環境問題を理解し、それらの課題に対する持続可能な解決策を探ることを目的とした科目。この授業では、都市化が環境に与える影響、例えば大気汚染、ヒートアイランド現象、水質汚染、廃棄物処理、エネルギー消費の増加、生物多様性の喪失といった問題を扱う。また、都市の成長と環境の持続可能性とのバランスを取るための都市計画やインフラ設計の理論と実践について学ぶ。さらに、再生可能エネルギーの導入、グリーンインフラの活用、低炭素社会の実現に向けた都市政策、スマートシティ技術の活用など、都市環境を改善するためのアプローチも考察する。学生は都市の環境問題を科学的に理解し、持続可能な都市開発に貢献するための実践的な知識とスキルを身につけることを目指す。	
	資源循環学	○	資源の持続可能な利用と循環を目指し、資源の採取、利用、廃棄、リサイクルのプロセスを体系的に理解することを目的とした科目。この授業では、天然資源の有効活用と、廃棄物の削減やリサイクルを通じて資源の循環型社会を実現するための理論と技術を学ぶ。具体的なトピックには、資源のライフサイクルアセスメント（LCA）、廃棄物処理技術、リサイクルの原理、廃棄物発生抑制、循環型経済の概念が含まれる。また、金属、プラスチック、紙などのリサイクルの実践の方法や、バイオマスやエネルギー資源の再利用の可能性についても探求する。資源の持続可能な利用に向けた政策や法規制、国際的な動向についても学び、資源循環を促進するための技術革新や社会的枠組みを考察する。	
	エネルギー科学	○	エネルギーの生成、変換、利用、そしてその持続可能性に関する基本的な理論と技術を学ぶ。この授業では、エネルギーの物理的・化学的基礎を理解し、化石燃料、再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマス、地熱など）、および核エネルギーの利点と課題を探る。エネルギーの変換効率やエネルギー保存の法則、熱力学の基礎原理、発電技術、エネルギー貯蔵技術も取り扱う。さらに、エネルギー消費と環境への影響、気候変動との関連、持続可能なエネルギーシステムの構築に向けた取り組みについても考察する。講義では、エネルギー供給と需要の現状分析、エネルギー政策の動向、国際的なエネルギー問題についても議論し、現代社会におけるエネルギー利用の課題を総合的に理解することを目指す。学生は、エネルギーの科学的理解を通じて、持続可能な社会の実現に向けた技術革新や政策立案に貢献するための知識を身につける。	
	測量学	○	地形や構造物の位置や形状を正確に測定し、そのデータをもとに地図や設計図を作成するための技術と理論を学ぶ科目である。この授業では、地形測定の基本概念を学び、実際の地形や土地利用に関するデータを取得する手法を学ぶ。また、地理情報システム（GIS）やコンピュータソフトウェアを用いたデータ処理と可視化についても学習し、測量データを効率的に活用する技術を習得する。学生は測量の基本技術を身につけ、環境の複合的な見地からの管理において役立つ基盤的な能力を習得することを目指す。	
	食品科学	○	食品の化学的・物理的性質、栄養価、安全性、加工技術、保存方法などを科学的に理解することを目的とした科目。この授業では、食品に含まれる主要成分（炭水化物、タンパク質、脂質、ビタミン、ミネラル）の構造と機能について学び、これらが食品の品質や栄養においてどのように役割を果たしているかを学ぶ。また、食品の加工や保存における化学的な変化、微生物の影響、食品添加物の役割、食品の劣化や腐敗の防止方法についても学習する。さらに、食品の安全性評価や食品衛生の管理手法、食品法規や規制についても取り扱い、消費者の健康保護に貢献するための知識を身につける。学生は食品の科学的理解を深め、食品産業や栄養管理の分野での実践的な知識と技術を習得し、持続可能な食品供給と消費に貢献する能力を育成する。	
実践科目	環境フィールドスタディ 2	○	環境フィールドスタディ1に続き、2年以上以上の学生を対象とした現場実習型のフィールドスタディである。この授業では、環境フィールドスタディ1で得た知識や経験をもとに、より主体的な取組を求める。フィールドスタディ1と同様に、事前学習、現場実習、事後学習を通じて、知識と実際の体験とを関連づけることを目標とするが、さらに実習全体の企画・運営にも関わり、初年次生の学びを促す役割を担うことで、現場理解を深め、対話や協働の力としてのコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力等を養うことを目的とする。	共同
	環境リーダーシップEL1	○	少人数のグループワークを通じて、自分なりのリーダーシップの発揮方法を体感し、自律的に学習していくための専門知識やスキルの必要性を学ぶことを目的とする。リーダーシップ実践と、自分と他者視点からの振り返りを通して、自分自身の強みや、自分でも気づいていなかった可能性に気づくことを目指す。実践と学びの過程において、議論、フィードバック、調査分析、企画提案、プレゼンテーション、関係構築など、チームワークの基本スキルを獲得することも目指す。	
	環境リーダーシップEL2	○	授業を通して、多様なチームメンバーとの協働による新しい提案の創造を体験する。プロジェクトの中では、様々な視点から自分の経験を振り返り、チーム内での相互フィードバックや対話を通じて、自分自身や人生にとって価値ある実践的な学びを得る。	
	環境リーダーシップEL3	○	クライアントとなる地域や企業から提示される「地域特有の環境課題」をグループで解決するプロセスを通じて、全員発掘型リーダーシップを学ぶ。授業はグループワーク中心のPBL（Project Based Learning）形式で行われる。地域や企業が抱える環境課題に触れることで環境に対する実践的な知識の習得を図る。同時に、その解決策を検討するプロセスで生じるグループ内や他のステークホルダーとのコンフリクト、振り返り、および相互フィードバックを通じて、他者に影響力を発揮するリーダーシップを習得する。	
	環境リーダーシップEL4	○	本コースの目的は「リーダーシップ開発の理論を学び、実践ができる学生の育成」である。自分のリーダーシップを向上させるだけでなく、他者のリーダーシップ開発ができる学生を育てることを目標とする。具体的には、（１）リーダーシップが身につくメカニズムの理解（２）リーダーシップを開発する方法の理解（３）他者のリーダーシップ開発を促す実践ができることを目指す。	
	短期フィールドワークA	○	「人はどのように成長するのか」に関する理論を理解し、リーダーシップが身につくプロセスについての理解を深める。「人の成長を促す関わり方」に関する理論を理解し、ファシリテーションやコーチング等の具体的な関わり方方法・スキルについて学ぶ。また、理論を頭で理解するだけでなく、実際に他者に関わることで、実践できるようにする。授業は講義だけでなく、グループワークを中心に行う。	集中 演習：6.6時間 実習：7～10時間
	短期フィールドワークB	○	本コースの目的はリーダーシップの出発点である自己認識力の涵養である。この授業では自己の内面にある思考・感情や自己概念に着目し、他者の視点も参考にしながら、自分自身らしいリーダーシップを構築することを目標とする。自身のリアルリーダーを扱いながら、自己認識するやり方を学習し、自己開示と授業内外での実践が求められる。この授業では自己認識から「自分らしい」リーダーシップの開発を目指す。またこれまでのリーダーシッププログラムで学んだ論理思考をさらに複雑な状況にも適応させ、状況を改善する方法も学ぶ。これにより、自信を持ってリーダーシップを発揮できる力を身につける。	共同・集中 演習：6.6時間 実習：7～10時間
	短期フィールドワークC	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では教員が提案したフィールドワーク先において、教員の指導の下フィールドワークを実施する。短期フィールドワークでは、フィールドワークの実習地により、日帰りあるいは1泊2日程度（計7-10時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計4回程度）を組み合わせて実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	共同・集中 演習：6.6時間 実習：7～10時間

		長期フィールドワークA	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では学生が主体的にフィールドワーク先を探索し、教員の指導の下フィールドワークを実施する。長期フィールドワークでは、日帰りで複数回、あるいは2泊3日～4泊5日程度（計16-20時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計7回程度）を組み合わせ実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	集中 演習：11.6時間 実習：16～20時間
		長期フィールドワークB	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では教員が提案したフィールドワーク先において、教員の指導の下フィールドワークを実施する。長期フィールドワークでは日帰りで複数回、あるいは2泊3日～4泊5日程度（計16-20時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計7回程度）を組み合わせ実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	共同・集中 演習：11.6時間 実習：16～20時間
		長期フィールドワークC	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では教員が提案したフィールドワーク先において、教員の指導の下フィールドワークを実施する。長期フィールドワークでは日帰りで複数回、あるいは2泊3日～4泊5日程度（計16-20時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計7回程度）を組み合わせ実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	共同・集中 演習：11.6時間 実習：16～20時間
		長期フィールドワークD	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では教員が提案したフィールドワーク先において、教員の指導の下フィールドワークを実施する。長期フィールドワークでは日帰りで複数回、あるいは2泊3日～4泊5日程度（計16-20時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計7回程度）を組み合わせ実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	共同・集中 演習：11.6時間 実習：16～20時間
		長期フィールドワークE	○	環境フィールドスタディに続く、現場実習型の科目である。環境フィールドスタディ1、2が実際に環境課題を抱える現場を訪問し、環境課題の実態を見学し、課題に取り組んでいる人々とのディスカッションを通して、環境課題の本質を理解することを目的とする科目であったのに対し、本フィールドワーク科目では、学生自身が地域課題の解決に参画することを目的とした科目である。主体的な活動を通して、実践を目的とした対話や、異なる立場の人々との協働を通して、チームとして環境課題に取り組むために必要なコミュニケーション力、状況分析力、課題解決のための創造力、実践力を養うことができる。本科目では教員が提案したフィールドワーク先において、教員の指導の下フィールドワークを実施する。長期フィールドワークでは日帰りで複数回、あるいは2泊3日～4泊5日程度（計16-20時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計7回程度）を組み合わせ実施し、事後授業の一部として全体でのフィールド報告会へ参加するものとする。	共同・集中 演習：11.6時間 実習：16～20時間
		短期ワークエクスぺリエンスA	○	本科目は自治体やNPO/NGO、あるいは企業での実務経験を通して、環境問題に対する理解を深め、実践的な協働関係の構築の手法や問題解決の能力の習得を目的とした科目である。学生は、環境保全や持続可能な開発に関わる現場の業務を体験し、講義や実習で得た知識を応用する機会を得る。現場での経験を通して、環境問題に対する実際のアプローチや課題を学び、リーダーシップやコミュニケーション能力、あるいはマネジメント能力などの社会的なスキルも養う。実習終了後は、体験をもとにレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。短期ワークエクスぺリエンスでは、実習先により、1週間程度（計30-35時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計2回程度）を組み合わせ実施する。	集中 演習：3.3時間 実習：30～35時間
		短期ワークエクスぺリエンスB	○	本科目は自治体やNPO/NGO、あるいは企業での実務経験を通して、環境問題に対する理解を深め、実践的な協働関係の構築の手法や問題解決の能力の習得を目的とした科目である。学生は、環境保全や持続可能な開発に関わる現場の業務を体験し、講義や実習で得た知識を応用する機会を得る。現場での経験を通して、環境問題に対する実際のアプローチや課題を学び、リーダーシップやコミュニケーション能力、あるいはマネジメント能力などの社会的なスキルも養う。実習終了後は、体験をもとにレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。短期ワークエクスぺリエンスでは、実習先により、1週間程度（計30-35時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計2回程度）を組み合わせ実施する。	集中 演習：3.3時間 実習：30～35時間
		長期ワークエクスぺリエンスA	○	本科目は自治体やNPO/NGO、あるいは企業での実務経験を通して、環境問題に対する理解を深め、実践的な協働関係の構築の手法や問題解決の能力の習得を目的とした科目である。学生は、環境保全や持続可能な開発に関わる現場の業務を体験し、講義や実習で得た知識を応用する機会を得る。現場での経験を通して、環境問題に対する実際のアプローチや課題を学び、リーダーシップやコミュニケーション能力、あるいはマネジメント能力などの社会的なスキルも養う。実習終了後は、体験をもとにレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。長期ワークエクスぺリエンスでは、実習先により、2週間～1か月間程度（計60-70時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計2回程度）を組み合わせ実施する。	集中 演習：3.3時間 実習：60～70時間
		長期ワークエクスぺリエンスB	○	本科目は自治体やNPO/NGO、あるいは企業での実務経験を通して、環境問題に対する理解を深め、実践的な協働関係の構築の手法や問題解決の能力の習得を目的とした科目である。学生は、環境保全や持続可能な開発に関わる現場の業務を体験し、講義や実習で得た知識を応用する機会を得る。現場での経験を通して、環境問題に対する実際のアプローチや課題を学び、リーダーシップやコミュニケーション能力、あるいはマネジメント能力などの社会的なスキルも養う。実習終了後は、体験をもとにレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。長期ワークエクスぺリエンスでは、実習先により、2週間～1か月間程度（計60-70時間程度）の現場実習と事前・事後授業（計2回程度）を組み合わせ実施する。	集中 演習：3.3時間 実習：60～70時間
		プロジェクト実習A	○	本科目は、環境問題の解決や持続可能な社会の実現を指向した実践的なプロジェクトの計画と実施に取り組むことで、他者と協力して行動する力を身に付けることを目的とする。この授業では、チームの協働を通して、現実の課題に取り組む、学生が身につけた知識を実践的に応用する経験を積む。プロジェクトの進行にあたって、企画立案、データ収集・分析、提案の作成、進捗報告などプロジェクト管理の基本を学ぶ。また、プロジェクトの実施に際しては、ディスカッションや役割分担を通してチームビルディングのノウハウやリーダーシップ、コミュニケーション能力を養うことも重要な要素となる。プロジェクト終了後は、体験をもとにしてレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。	集中
		プロジェクト実習B	○	本科目は、環境問題の解決や持続可能な社会の実現を指向した実践的なプロジェクトの計画と実施に取り組むことで、他者と協力して行動する力を身に付けることを目的とする。この授業では、チームの協働を通して、現実の課題に取り組む、学生が身につけた知識を実践的に応用する経験を積む。プロジェクトの進行にあたって、企画立案、データ収集・分析、提案の作成、進捗報告などプロジェクト管理の基本を学ぶ。また、プロジェクトの実施に際しては、ディスカッションや役割分担を通してチームビルディングのノウハウやリーダーシップ、コミュニケーション能力を養うことも重要な要素となる。プロジェクト終了後は、体験をもとにしてレポートを作成し、得られた知見を振り返り、卒業研究や卒業プロジェクトに向けての意識を深めることが求められる。	集中
		インタープリテーション実習	○	自然や文化等、事物や事象の背景にある意味や相互の関係性を解き、人々がそれらを理解しつなげることを助けるインタープリテーションの考え方や技術を、実践を通じて身につけることを目指す実習科目である。当初、アメリカの国立公園で発達し、その後、日本でも自然公園、歴史地域、ジオパーク、博物館、科学館、学校、その他環境教育関連施設のほか、まちづくりの現場などでも活用され発展してきた教育的手法としてのインタープリテーションについて、事例を踏まえつつ、実際に自ら企画、試行し、インタープリターとして活躍するための基礎を培う。	集中
		Environmental Interpretation in English	○	This practical course provides an experiential learning opportunity for students to acquire the concepts and techniques of environmental interpretation, using English as medium. Environmental interpretation is an educational method to enhance people's understanding and connection with natural, cultural, and other heritages, by unraveling meanings and relationships behind them. It was originally developed in the U.S. national parks, and has been used and developed in natural parks, historical areas, geoparks, museums, science museums, and other environmental education-related facilities, as well as in community development projects. The course will cultivate the basis for students to contribute to such fields as an interpreter. (和訳) 英語を媒介として、環境インタープリテーションの概念と技術を体験的に習得する実践的な科目である。環境インタープリテーションとは、自然遺産や文化遺産などの背景にある意味や関係を解き明かし、人々のそれらに対する理解とつながりを深める教育手法であり、アメリカの国立公園で開発され、自然公園、歴史地区、ジオパーク、博物館、科学館などの環境教育関連施設や、地域開発プロジェクトなどで活用され、発展してきた。この授業では、こうした現場でインタープリターとして貢献するための基礎的な力を養う。	集中
		野外活動実習	○	自然環境の中に身を置いて、自然との関りを五感を駆使して培いつつ、野外での活動に必要な技術を体験的に学ぶ、実習型授業である。キャンプ、アウトドアスポーツなどの野外活動を実際に体験しながら、自然の中で他者と協力して活動を実施し、リスクを認識・管理しつつ、自然の価値を享受し、参加者の学び合いを促すための、具体的な技能を身につける。	集中

卒業論文・プロジェクト関係科目	専門演習1	専門演習1	○	4年次に履修する卒業論文・プロジェクト演習に繋がる演習科目である。4年次に指導を受ける担当教員からの指導のもと、卒業論文・プロジェクト演習に必要な専門分野の知識の習得、分野特有の視点の涵養や、必要に応じて、社会調査の方法や自然科学の実験技術、および解析の方法を身につけることを目的とする。各担当教員からのゼミ形式的演習を通して、背景となる論文の購読や資料収集、専門分野的な視点からの理解を深めていく。	
		専門演習2	○	専門演習1に引き続き、卒業論文・プロジェクト演習に繋がる演習科目となる。専門演習1で身につけた専門分野特有の知識や視点をともに、より学生自身が興味のある分野・領域を見つけ、専門分野の視点から問題を分析し、掘り下げていくことを目的とする。また、演習を通して、論文の書き方やレポートのまとめ方を専門分野にあった手法に基づいて身につけていく。この演習を通して、4年次に行う卒業論文や卒業プロジェクトのテーマの方向性を見出し、研究方法やプロジェクトの実施方法などの計画を建てることを目的とする。また、他の学生とのディスカッションを通して、自身が行う卒業論文や卒業プロジェクトの客観的な評価を得て、改善点を検討していく。	
		卒業論文・プロジェクト演習1	○	4年間の学びの集大成としておこなう科目である。これまでに講義や実践系の科目で学んできた知識や思考法、経験や体験をもとに、学生自身が環境課題として興味・関心のあるトピックを取り上げて課題に取り組む。学生は自分の興味・関心に基づいて、卒業論文、または卒業プロジェクトを選択し、指導教員の指導のもと、研究または実践をすすめる。卒業論文では、環境課題に関連した調査、研究を行い、卒業プロジェクトでは環境課題解決を指向したプロジェクトの立案、計画、実践を行う。卒業論文・プロジェクト演習1では、指導教員との議論を通して、学生自身が興味、関心の的を絞りながら、研究、あるいはプロジェクトのテーマを定めていく。背景となる論文や資料を収集、分析し、具体的な研究方法、プロジェクトの実施方法を決定することを目的とする。	
		卒業論文・プロジェクト演習2	○	卒業論文・プロジェクト演習1の後をうけて、論文の完成、あるいはプロジェクトの完遂を目的とする科目である。卒業論文・プロジェクト演習1を通して、決定した学生自身の卒業論文テーマ、あるいは卒業プロジェクトをもとに研究の遂行、あるいはプロジェクトの実施を行う。それぞれの過程において定期的にゼミを行い、自身の研究、あるいはプロジェクトの進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身の研究、あるいはプロジェクトを批判的思考法に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加研究、プロジェクトを計画する。最終的には卒業論文、あるいはプロジェクト実施報告書としてまとめることを目的とする。	
		卒業論文	○	4年間の学びの集大成としておこなう科目である。これまでに講義や実践系の科目で学んできた知識や思考法、経験や体験をもとに、学生自身が環境課題として興味・関心のあるトピックを取り上げて課題に取り組む。学生は自分の興味・関心に基づいて、卒業論文のテーマを選択し、指導教員の指導のもと、研究をすすめる。卒業論文では、環境課題に関連した調査、研究を行う。その過程において定期的にゼミを行い、自身の研究の進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身の研究を批判的思考法に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加研究を計画する。最終的には卒業論文としてまとめることを目的とする。	
		卒業プロジェクト	○	4年間の学びの集大成としておこなう科目である。これまでに講義や実践系の科目で学んできた知識や思考法、経験や体験をもとに、学生自身が環境課題として興味・関心のあるトピックを取り上げて課題に取り組む。学生は自分の興味・関心に基づいて卒業プロジェクトでは環境課題解決を指向したプロジェクトの立案、計画、実践を行う。指導教員の指導のもと、プロジェクトをすすめる。その過程において定期的にゼミを行い、自身の研究の進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身のプロジェクトを批判的思考法に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加研究を計画する。1年をかけてプロジェクトを手がけ、最終報告書の提出を行う。	
		環境コロキウム1	○	環境学は様々な学問分野が複合的に相互作用する領域であり、同じ環境学部にも所属する学生同士でも、卒業研究や卒業プロジェクトの内容を相互に理解することが困難な場合がある。一方で、本環境学部ではリベラルアーツに基づく文理融合型の教育を行い、学生には広い視野と批判的思考を身に着け世界を理解することを求める。本授業は、それぞれの卒業研究や卒業プロジェクトの内容を理解し、それぞれが孤立したものではなく相互に関連していることを認識し、多角的な視点を持って自身の研究・実践を振り返る機会とする。具体的には、環境コロキウム1では他の分野（ゼミ）で卒業研究あるいは卒業プロジェクトに取り組む学生とグループを組み、互いの研究・実践内容の背景や方向性について報告し合うとともに、ディスカッションを通じて相互の関係性を話し合う。	
		環境コロキウム2	○	環境コロキウム1を受け、環境コロキウム2でも同様に他の分野（ゼミ）の学生とグループを組み、それぞれの卒業研究や卒業プロジェクトの内容と、相互の関係性を話し合う。他の専門分野で研究・実践に取り組む学生とのディスカッションを通じて、自身の研究・実践が、環境学や環境アクションにおいてどのような位置づけにあるか、どのような意義や重要性を示し得るか、批判的、多角的に省察し、持続可能な社会の実現に向けた取り組みとしてのビジョンを集合的に描くことを目的とする。	
		留学レポートセミナー	○	3年次秋学期から4年次春学期にかけて、大学間連携、または学部主催の留学プログラムを利用して海外での交換留学を行った学生向けの科目。学生は交換留学中に学んだ内容をまとめ、留学プログラムの参加前後において、自身の知見や考え方にどのような変化があったのかを振り返り、どのような学問的視点を新たに獲得したかを報告する。留学プログラムで新たに獲得した視点を今後の卒業研究、卒業プロジェクトにどのような形で活かすことができるのかを、学問的視点に基づいて考え発表する。この授業では、留学先での学業、文化的体験、生活経験を整理し、他者に効果的に伝える方法を学ぶとともに、留学を通じて得た知識やスキルの振り返りを行う。また、海外大学と立教大学の教育プログラムの違いを環境学の視点から分析し、併せて報告する最終的にプレゼンテーションを行い、留学で得た知見を他の学生や教員と共有し、自己成長とキャリア形成に対する意識を深めることを目指す。	
専門自由科目	専門導入科目	大学への数学		この講義は、高校で数学を履修してこなかった学生を対象に、大学レベルの数学を学ぶための基礎を提供することを目的とする。高校数学の重要な内容である代数、幾何、微分積分の基礎をカバーし、これらの概念を復習しながら、大学で必要とされる数学的な思考力と問題解決能力を養成する。数式の扱いや、論理的な思考方法、数学的な問題へのアプローチ法を身につけるため、具体的な演習を通じて理解を深める構成となっている。講義の後半では、大学レベルの数学に接続する応用的なテーマにも触れ、さらに高度な内容への橋渡しを行う。	
		大学への物理学		この講義は、高校で物理学を履修してこなかった学生を対象に、物理学の基礎知識を補いながら大学レベルの物理学へと導入することを目的とする。力学、電磁気学、波動、熱力学などの基本的な概念を理解し、自然現象を物理的に解釈するための土台を築く。高校物理学の内容を段階的に復習し、基礎的な数式の扱い方や物理的な問題解決の方法を学ぶ。また、演習問題を通じて、物理法則の理解を深め、実践的な応用力を養成する。後半では、大学での物理学に関連する応用的なテーマに触れ、さらに発展的な内容への橋渡しを行う。	
		大学への化学		この講義は、高校で化学を履修してこなかった学生を対象に、化学の基礎知識を補充しながら大学レベルの化学への導入を行う。物質の構造、化学反応、熱力学、化学結合、溶液の性質など、化学の基本的な概念を理解し、物質の性質や反応を化学的に解釈する能力を養成する。高校化学の内容を段階的に復習し、必要に応じて演示実験を行うことで理解を深めながら、大学で必要となる化学的思考力や分析力を身につける。また、講義の後半では、大学化学の応用的なトピックにも触れ、より高度な化学の学びへの橋渡しを行う。	
		大学への生物学		この講義は、高校で生物学を履修してこなかった学生を対象に、生物学の基礎知識を補充しつつ、大学レベルの生物学への導入を行う。生命の基本単位である細胞の構造と機能、遺伝情報の伝達、進化、エネルギー代謝、生態系の構造と機能など、生物学の主要なテーマを扱う。高校生物学の基礎的な内容を復習しながら、生命現象を分子レベルで理解するための知識と論理的な思考力を養う。また、演習問題を通じて、生命現象を科学的に解明する力を培う。講義の後半では、大学レベルの生物学に関連する応用的なテーマにも触れ、さらに高度な学問領域への基礎を築く。	
		自然科学のための数学		この講義は、学部レベルの自然科学分野の内容を学ぶ学生が基本的な数学の実用的な知識を身につけることを目的としている。特に、物理学や化学の分野で使用する応用に重点を置く。多くの学生が抱える、抽象的な数学的知識を実際の問題にどう応用すればよいのかという課題を克服することを目標とする。具体的なトピックとして、ベクトルと行列、微積分と座標系、微分方程式、ベクトルの微積分、積分定理などを取り扱う。	
		日本史		原始古代から近世まで歴史の流れを追いながら時代のとらえ方や重要事項、研究動向などを解説、紹介していく。史料の調べ方、文献の探し方なども随時取り上げ日本史に関する専門性を高めていく。	
		世界史		現在は過去の積み重ねの上であり、歴史を知ることが現代の世界のなりたちを知る上で極めて重要である。本科目では、古代から近代に至る世界の歴史を扱うため、細かい知識の修得を目的とするものではない。むしろ、歴史の全体像を俯瞰することによって、歴史的なものの見方を学び、現代の世界に対する多様な理解をできるようにしていきたい。学期中、数回ミレポートを課す。	
		理科総合実験		初回にガイダンスを行う。ガイダンスでは、テキスト・スケジュール表などを配付し、実験を行うにあたっての安全教育、注意事項やレポートの書き方、提出方法などについて説明する。事前に実験指針をよく読み、実験の目的・内容を把握した上で実験を始めること。事故を起こさないためにも実験中は必ず担当教員の指示に従うこと。実験によってはグラフ用紙、定規、色鉛筆（赤、青、紫、桃）、関数電卓、PCなどが必要であるので各自適切なものを持参すること。	共同

別記様式第2号（その3の1）					（用紙 日本産業規格A4縦型）	
授 業 科 目 の 概 要						
（全学共通科目 総合系科目）						
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考	
学 び の 精 神	世界史の中のキリスト教	○	日本及びアジア諸地域で、キリスト教が展開してきた歴史を学びます。日本布教に至る世界史的背景を踏まえたうえで、近世・近代日本において受容されたキリスト教の展開について中心的に取り上げます。アジア諸地域での受容と展開にも目を向けることで、それぞれの地域・時代における特徴を捉えつつ、キリスト教の広がりを考えます。			
	世界史の中のキリスト教	○	本講義ではキリスト教の成り立ちと神学の主要テーマなどの基礎知識を身につけた上で、さまざまな時代・地域においてキリスト教神学が取り組んできた諸課題（ファンズム、戦争、貧困、差別等）を学び、それらを通して世界史に分け入っていく。			
	世界史の中のキリスト教	○	講師は、歴史学者ではなく説話学者である。この場合、実際の講義内容は、おそらく「世界史の中のキリスト教」よりも、むしろ「キリスト教の中の世界史」となるであろう。問題は、「キリスト教が、どう世界史に出現するか」ではなく、「世界史を、どうキリスト教は表現するか」である。そもそも、「キリスト教」とは何か。また「世界史」（あるいは「世界」「歴史」とは何か。受講者の皆様の提案を待つ。			
	世界史の中のキリスト教	○	イエスという名の一人の男の活動と死から誕生したキリスト教が、今に至るまで大きな影響を与え続けてきたのはなぜか。これについて、その前史である古代イスラエル史、イエスの活動、聖書の成立、および神学思想の展開を辿りつつ、世界的展望の中で考察する。			
	思想を生み出すキリスト教	○	チャールズ・テイラー『世俗の時代』（2007）の議論に依拠して、「世俗化」とその周辺の概念について検討します。テイラーは、同書において、合理的な思考や科学の発展により宗教的信仰が不可逆的に論駁されたのだとする歴史理解に異を唱えました。本講義では、支配的な世俗化の物語に對抗してテイラーが提示する批判的論点の数々を確認し、キリスト教の思想と実践に生じた歴史的変容が、いかにして今日の「世俗の時代」を生み出すことになったのかを学びます。			
	思想を生み出すキリスト教	○	2世紀から5世紀までの時代において、代表的な5人のキリスト教思想家の生涯、著作、思想を紹介する。またこの時代のキリスト教思想において重要なテーマであるキリスト論、三位一体論について、思想家それぞれの理解の特色を明らかにし、相互に比較する。			
	思想を生み出すキリスト教	○	現代人にとって必ずしも理解が容易ではないキリスト教の「罪」や「贖罪」という概念を、様々な角度から探求し、考察する。			
	思想を生み出すキリスト教	○	キリスト教とは何かという根本問題に触れながら、サブタイトルおよび目標にあるように、テキストを通じて、受肉、人間の尊厳、人格、自由、記憶、証言をめぐる根本的かつ現代的問題への沈潜していく。			
	美術の中のキリスト教	○	西洋美術を理解するには、ギリシア・ローマ神話と並んでキリスト教文化の知識が欠かせません。この講義では初期キリスト教時代から19世紀までの西洋美術の中から、キリスト教主題の作品を取り上げ、時代背景、美術様式や技術、芸術家の経歴、宗教思想やジェンダー論などさまざまな視点から考察します。まず古代末期からビザンチン、ローマヌスク、ゴシックまで中世美術の流れを確認したうえで、ルネサンスから近代までの絵画作品について、①観察、②時代背景と画家の経歴の確認、③読解を行い、キリスト教美術を見る力を実践的に養います。作品の観察とディスクリプションも行うので積極的な受講態度を期待します。			
	美術の中のキリスト教	○	ヨーロッパの中世・ルネサンスの美術にアプローチするためには、キリスト教の知識は必須です。というのも5～16世紀にかけての主要作品は、ほとんどがキリスト教と関係付けられるからです。本講座では、中世からルネサンスにかけての代表作を取り上げ、作品を理解するためにはどのような知識が必要なのかをお伝えしていこうと思います。			
	美術の中のキリスト教	○	ローマなどのイタリアの聖堂にあるキリスト教美術を講義する。聖人図像や聖書のテーマに焦点を当て、基本的な事柄、聖書のテキストと美術作品の表現の一致や違いを考察する。中世の作品を中心とし、歴史的な理解を深める。			
	美術の中のキリスト教	○	キリスト教美術は、キリスト教それ自体から遅れて2世紀末から3世紀初頭にローマ美術の範疇の中で誕生する。本講義では、キリスト教の誕生と発展の経緯をたどり教義の成立の諸相を指摘しながら、キリスト教美術においてキリスト表現がどのように変化して行ったのかを考察する。具体的にはカタコンベや石棺浮彫、初期キリスト教から中世までの聖堂建築とその装飾を扱う。			
	音楽の中のキリスト教	○	講義。中世から20世紀までのキリスト教と関連がある音楽作品をほぼ時代順に取り上げ、作曲家や作品の構造、背景などを論じる。宗教曲はもちろん、キリスト教関連の要素が取り入れられている世俗曲や、作品発表が教会暦と関連している世俗曲など、多様な作品を紹介する。			
	音楽の中のキリスト教	○	中世から現代に至るまで、教会を含む西洋キリスト教社会においては、何らかの形で音楽が求められていた。また、音楽家にとってもキリスト教はその創作の源となり、多くの作品が生み出されてきた。本講義では、キリスト教と音楽の展開を歴史的にたどり、それらの関わりを考察する。音楽作品の成立背景、礼拝や神学的内容と音楽表現や楽曲構造との関連など、具体的な楽曲を聴きながら各時代の音楽の特徴を紹介する。いわゆる宗教音楽のみではなく、キリスト教と係わりのある楽曲、オペラや器楽曲なども取り上げ、西洋音楽全般への理解を深める一助としたい。			
	文学を生み出すキリスト教	○	近代西欧で誕生した児童文学ファンタジーは、キリスト教文化の影響を強く受けており、その主題や表象に表れている。本講義では文学と宗教の関係を広くとらえ、現代でも親しまれている童話や児童文学の宗教的主題や文化的背景としてのキリスト教とその変容から魔女の誕生や死と再生のモチーフを読み解く。			
	文学を生み出すキリスト教	○	我が国でもよく知られた作品を取り上げます。 1. 作者がキリスト者ではないがキリスト教的モチーフが見られるもの、 2. 作者がキリスト者でありながら「キリスト教文学」とは広く認識されていないもの、 3. 作者がキリスト者であり「キリスト教文学」と呼ばれているもの。 これらを取り上げ、作品の背景を確認するとともに、作品の名言、聖書の引用、キリスト教的モチーフを見出す試みを行います。			
	文学を生み出すキリスト教	○	文学作品（主として小説）を読み、そこに表れているキリスト教の問題意識および背景を説明していく。キリスト教は人間の心や魂といった内面性をとりわけ重視する宗教であり、それゆえ（特に近代の）文学作品におけるキリスト教のテーマは、登場人物の心情の動きを通してよく表現されるため、授業内では人物の内面に重点を置いて説明を行う。その内面の表現にはキリスト教的テーマを背景として持ち、そしてそれは歴史的・宗教的文脈の中にも置かれているので、それも併せて解説していく。			
	国際社会の中の宗教	○	本授業では、まず、イスラーム成立の歴史的経緯と基本教義、聖典クルアーンといった基本的な事柄を学習する。その上で、イスラームの信仰に基づく諸実践について検討する。さらに、世界各地で実際に起きた事件を取り上げて考察する。日々の報道にも目を配りながら、現代国際社会におけるイスラームの在り方を捉えていく。			
	国際社会の中の宗教	○	初回では、宗教的人間（homo religiosus）という概念の考察を皮切りに、世界宗教史全体の中に一神教伝統を位置付けてみます。その後、古代イスラエルの宗教という共通の起源からユダヤ教・キリスト教・イスラーム教が独立した宗教システムとして成立していった過程を学んでいきます。その上で、中世から現代にまで至る一神教の流れを概観します。			
	国際社会の中の宗教	○	国際社会の中の宗教をめぐる課題や問題点（宗教の社会貢献や公共における宗教的中立性など）について、具体例の検証などを通じて学習・理解を深める。			
	国際社会の中の宗教	○	この授業では、「グローバル化する国際社会における宗教」という主題を考える上で必要な基本的な事柄を学んでいく。まず、グローバリゼーションとは何か、宗教とは何かという根本的な問いを考えることから始める。そして、政教分離という要件を含んだ近代になって現れる宗教教育という現象に焦点を当て、この問題の歴史的変遷、地域的バリエーション等を検討していく。このような知識を踏まえた上で、ドイツ、日本における状況を事例として、受講者とともに考えていく。			
	現代社会の中の宗教1	○	倫理／生命倫理において問われる問題、特に「わたし」「われわれ」「いのち」といった問題は、それを語る自分自身が問われてくる問題でもある。本授業では、まず、そういった問題について、幾つかの倫理／生命倫理的テーマを扱うことによって確認・検討を行う。その上で、そこで確認・検討した問題に対して、幾人かの哲学者・思想家の見解を確認・検討・参照し、その者たちが語ろうとしているところ―それは（宗教の源泉）を感じさせるものであったりする―からどのように向き合っているのか、そして「わたし」「われわれ」「いのち」はどのようなあり様をしているのかといったことを考究していく。なお、授業後に毎回コメントを提出してもらすが、そのコメントペーパーは匿名化した上で皆と共有し、より多くの意見を知ることによって見識を広めてもらうつもりである。また、授業は提出してもらったコメントの紹介や、コメント同士の議論、疑問への応答、コメントへの応答などをもしつつ進めていくため、積極的な参加を望む。授業の進行や扱うテーマも、受講者の関心や社会状況などに応じて適宜調整する予定である。また、理解を深めるために、映像資料も用いるつもりである。（グループに分かれてディスカッションをしてもらうことも考えている。）			

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	現代社会の中の宗教 1	○	国民国家の成立以来、多くの国で信教の自由が認められ、宗教は、政治の領域から個人の内面の領域へとその場所を移すこととなったかに見えた。しかし宗教は、文化的な諸領域と結びつき、国民形成に寄与し、政治を支えるものとして働いてきた。そしてそのような関係は、現代においてもまだなお続いているように思われる。本講義では、まず国民国家の成立以前の西洋でのキリスト教の歴史を概観し、その政治的機能とその分化過程を見る。そしてその後キリスト教が、国家とどのように関係したかについて見ていく。啓蒙主義による影響を被り、道徳化するキリスト教、それとは異なる道を模索するキリスト教。国民のアイデンティティ形成に寄与するキリスト教、またそのようなアイデンティティ形成をつき崩すようなキリスト教など、いくつかの思想家のキリスト教理解を通して、さまざまなキリスト教理解を見る。	
	現代社会の中の宗教 1	○	この授業では、現代社会において「バイオエシックスに関する問題」「性的少数者に関する問題」は、大きく変化していることを学びます。さらにそれらの問題について、キリスト教はどのように向き合っているのかを学びます。グループ討論を活発に行ないます。この授業の終了時には、学生は自分の見解を理論化できるようにします。	
	現代社会の中の宗教 2	○	①事件直後のオウム施設の内部を直接に取材したドキュメンタリー映画や、麻原彰晃自身の著作などを通して、オウム真理教の教えや実践がどのようなものであったかを、できるだけ偏見なしに知る。その上で、②信者たちがオウムに入信し、教祖への絶対服従の中で凶行に走ったプロセスがどのようなものであったかを考察する。考察にあたっては、多数出版されているオウム幹部や元信者の手記、裁判傍聴記などを利用する。最後に、③オウムのような宗教団体に若者が引き寄せられていった社会的要因について、これまでに提出されてきたオウムに関する様々な論考を検討する。	
	現代社会の中の宗教 2	○	近現代以降の人間精神史的状況をかきりみつつ、過去から今日に至る人間社会の現実が生じている様々な分断、対立、不正の諸状況を真正面に見据えつつ、宗教伝統における知恵・叡智を、いわゆる神秘主義、神秘思想の観点を通じて考察する。その際、サブタイトルおよび目標にあるように、テキストを通じて、知恵をはじめ、無分別智、慈悲、愛、真理、人間の尊厳、人格、自由、真理をめぐる根本的かつ現代的問題への沈潜してゆく。とりわけ、今日における、諸分断、諸対立の問題を近現代の知のありように不可避的に絡み取られている問題として取り上げる。	
	現代社会の中の宗教 2	○	現代社会の中の宗教の分析にまず必要なのは、宗教について我々が抱きがちに偏った理解を正すことである。日本に暮らす多くのひとが自らを無宗教とみなす一方で、初詣参拝やおみくじ、さらには古いには余念がない。こうした一見矛盾する状況は、近代日本において「宗教」という言葉が使用されるようになった経緯、さらには宗教学という学問が成立した背景を理解することで明らかにされるだろう。 また、消費主義的な社会が成立した現代において、消費者が消費するのはモノに限られず、あらゆる記号、あるいは情報を含み、それには宗教的なものも含まれる。とするならば、伝統的な宗教が影響力を持っていた、生と死についての理解も今日においては大きな変容を遂げざるをえないと考えるべきだろう。以上の主題に加えて、本講義では、国家と宗教の関係、新興宗教や宗教原理主義、さらには宗教学を構成するいくつかの学術領域とその主要な問題を見ていく。それによって学術的に宗教について考察を深めるということがどのようなことなのかを明らかにしていきたい。 本授業では、基本的には講義と随時関連した資料を配布する。また、講義や資料についてのリフレクションペーパーやグループディスカッションを通して、自らの見解を論理的に述べるという技術も実践する。	
	現代社会の中の宗教 2	○	近代化に伴い、宗教が政治的領域をはじめとする様々な領域において影響力を失っていくという世俗化論は、アメリカの福音派やイスラーム主義など、二十世紀後半の宗教復興運動の登場により、批判にさらされるとともに、大幅な修正を余儀なくされた。加えて今日では、パワースhots巡りや御朱印集めなどの流行に見られるように、宗教は消費社会の中で新たな意味づけを得ている。したがって宗教が、政治的領域の内外でいまなお多大な影響力を持っていることは否定しがたいだろう。本講義では、日本や諸外国で宗教が社会的にどのような役割をもち機能してきたかについての歴史を追う。その後、新宗教や宗教復興運動、スピリチュアリティなど、現代において宗教と関わるいくつかの事象に焦点を当て、それが持つ機能について考えていきたい。	
	人文学からの学び（文学）	○	従来、中学校・高等学校の国語（現代文）教科書は、明治・大正・昭和時代の多くの文学作品を採録してきた。そのような教材を読解してきた皆さんにおいて本授業は、もう一度その教材を、ただし独力で読み直す場となる。担当教員は作家や作品について新たな視点や資料を紹介するが、それは本授業が企図するところの一部だ。本授業は、皆さんが作品に向き合い読み解き、そして自分の言葉で自分の解釈を語る場を提供したい。また教員は学期を通じて、日本近代文学史について抄説する。なお授業の内容や計画は修正することがある。	
	人文学からの学び（文学）	○	本講義では18世紀フランスを軸に、文学研究が何を対象としているのかについて学ぶ。 本講義は文学という学そのものについて考える機会でもある。現代文のテストでよくある「下線部を読んで著者の気持ちを説明せよ」という問いに不快感を抱いていた学生を歓迎する。テキストを読むとはどういうことか、について講義全体を通じて考えていきたい。 また、本講義はディスカッションといったアクティブラーニングのグループワークも実施予定である。	
	人文学からの学び（文学）	○	明治期から現代にかけての日本文学（小説）を時系列に即して読む。 特に、都市と文学との関係を考える。近現代の日本文学において中心を占めるジャンルとなったのが小説（novel）だったが、その展開は東京という強固な中心を基盤として、同時に依存することによってなされてきた。都市は日本の近代文学にとってのインフラの一つだったと言ってもよい。また、近代都市としての東京の発展は、人びとの生活や生きることそのものによって形作られ、また、文学にもさまざまな影響を与えた。 これらの具体的な様相について考え、理解を深める。なお、東京以外の都市が舞台になる作品も含む。	
	人文学からの学び（文学）	○	19世紀アメリカの文豪ハーマン・メルヴィルの代表長編小説『白鯨』（1851）を読む。この作品は世界的名作として広く世に知られているが、その知名度に反してなかなか実際に読まれることは少ない。それもそのはず、その長大さ（翻訳にして1000ページ超）、難解さを考えれば無理もない。 そこで本講義では、講師がこの作品の読みどころ、歴史・文化背景などを説明することにより、受講者を『白鯨』の世界へと誘うことを目標とする。さらには、この作品の読解を通じて、アメリカとは何か、個人とは何か、民主主義とは何かなど、この作品が取り組んでいる壮大な諸問題について考察してみたい。	
	人文学からの学び（文学）	○	人文学的な営みを概観することで、知的活動についてのメタ思考を磨く。講義形式	
	人文学からの学び（思想・教育）	○	本講義の主題は、想像力である。現代社会は、“先が見えない”、“閉塞した”といった言葉で形容され、最近の若者は夢がないとも言われる。そのようなことを踏まれば、想像力の視点から考えれば、現代は想像力不在の時代と考えることもできる。社会の閉塞性を打ち破るには、そして夢をもって生きていくためにはどうすればいいのだろうか。本講義では、そういう問いを、人間の心の能力の一つである想像力に注目して考えてみたい。実は人文学と切っても切れない関係にある想像力を一緒に考えましょう。さあimaginationの世界へ。	
	人文学からの学び（思想・教育）	○	本授業では、西洋哲学の歴史の中で、心と身体、ならびに両者の関係がどのように理解されてきたのかを講じる。 心と身体を厳密に区別し、「心身問題」という哲学・科学上の難問を生み出したとされるデカルト（1596-1650）の思想から出発して、心と身体をめぐる知の枠組みがその後どのように継承され、あるいは変更されていったのかを辿り、心と身体にかんする人間の理解が、時代的状況や科学的発見にどの程度依存しているのか、また「心身問題」に対する説得的な回答がありうるのかどうかを検討する。 本授業では、心身問題を以下のように定式化する。 (1) 心は非物理的なものである。 (2) 身体は物理的なものである。 (3) 心と身体は相互作用している。（痛みなどを考えよ） (4) 物理的なものと非物理的なものは相互作用できない。 これらのひとつひとつの命題は矛盾なく思考できるが、しかしこれらすべてを一緒に考えると矛盾が生じてしまう——これが心身問題である。	
	人文学からの学び（史学）	○	明治以降の日本において、軍部の果たした政治的役割は極めて大きいものがあった。本講義では、戦争に至る過程での軍部に焦点をあて、史料を提示しつつ検討する。また、陸軍と海軍における差異にも着目し、講義を進める。近代の軍部と政治との関係性について考察することで、現代の安全保障問題への関心を深める機会としてほしい。	
	人文学からの学び（史学）	○	①「チャリティ」。2021年6月、国際チャリティ機関CAFは「思いやり」に関する調査結果を公表した。それによると、調査対象の114か国中、イギリスは22位、日本は最下位の114位であった。何がこのような差を生み出したのか。第2～5回目授業では、イギリス社会における共生・協働の文化について考える。 ②「デモンストレーション」。日本における「デモ」には否定的なイメージが付きまとう。しかし声をあげる行動は、これまで無視されてきた問題について議論するための出発点を生み出す力を持ちうる。第6～9回目授業では、イギリスにおける示威行進の意味を考える。 ③「文化財返還問題」。2010年4月、「略奪」文化財問題を協議する国際会議が開かれた。イギリスは、帝国主義時代に植民地から「持ち出し」、200年近く「保存」していた文化財の返還を迫られることになった。「持ち出した」文化財を長らく管理していたイギリスは文化財の守護者なのか、それとも略奪者なのか。第10～13回目授業では、イギリスの文化財をめぐる問題について考える。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	人文学からの学び（史学）	○	歴史とは何か、なぜ私たちは歴史を語るのか、歴史をどのように語ることができるのか。これらの問いを様々な歴史作品（特に歴史書）や歴史家の姿をとおして一緒に考えていきます。基本的には講義形式ですが、質疑応答やディスカッション等をとおして、受講者の積極的な参加を求めることもあります。	
	芸術への扉	○	ヨーロッパで制作された平面ならびに立体的美術作品に焦点を当て、作品の造形技術および表現上の特徴、歴史的意義、社会的・政治的・宗教的な重要性を分析する。講義ではパワーポイントで制作したスライド（作品の部分図、拡大図、作品に関連する図版・表・テキスト）を映写し、主に画像を参照しながら授業を進める。受講者には授業で取り上げる作品の図版と、文書資料のテキストが掲載されたプリント資料が配布される。	
	芸術への扉	○	西洋美術を中心として、様式論、図像学などの古くからある研究方法から、美術と社会の関係、視像と言語の関係を経て、精神分析学、ジェンダー研究、ポスト・コロニアリズムといった新たな視座に基づく研究まで、大学において美術を研究するための展望を、主要な研究者を紹介し、方法論の解説と作品分析に基づく個別研究によって提示する。	
	芸術への扉	○	本授業は、「芸術とは何か」「作品の正しい鑑賞法は存在するか」「芸術は何の役に立つのか」「どうすれば創造性を獲得できるのか」といった問いを参加者に投げかけ、参加者と共に、また先達たちと共に、これらの問題を考えていこうとするものです。言い換えれば、本授業は、たとえば絵画や音楽の鑑賞法を知識として伝授するものではなく、芸術にかんする常識や自分なりの理解を批判的にとらえ直す機会を提供し、参加者を哲学的思索の快楽へとといざなうことを目指しています。授業では文献資料および視聴覚資料をもちいます。	
	グローバル経済社会を考える	○	受講者はあらかじめテキスト内容を予習した上で参加する。そのうえで教員がテキスト内容を解説し、理解を深める。講義では教員と受講者が適宜質疑応答等を行い、受講者の主体的、能動的学修を促進する。受講者には講義内容をリアクションペーパーに要約し自分の見解を述べて提出する	
	グローバル経済社会を考える	○	グローバルな視点から経済を考える力を養うには、ローカルな視点で各地の経済をより深く理解することが大切です。経済の特徴は地域によって大きく異なっているからです。この授業では、ヨーロッパ諸地域の経済的特徴がどのように形成されたのかを学びます。毎回異なるトピックをとり上げて、特定の国または地域が独特の経済・産業をもっているのはなぜなのか、ということ、地理的・歴史的な観点からアプローチします。	
	グローバル経済社会を考える	○	本講義では、総論として、国際通貨システムと国際金融市場の機能に着目し、その制度的枠組みや理論・歴史等を紹介していきます。各論では、国家、企業、機関投資家等の機能の変化と、それに対する財政・金融政策を意義しながら、適宜、グローバル金融市場、国際金融危機への対応などの、グローバル経済に関連するテーマを取り上げていきます。	
	グローバル経済社会を考える	○	世界経済は、複雑かつ多様であり、幅広い論点を含んでいる。本授業では、このような世界経済を、総合的かつ体系的に分析することを旨とする。とくに、一国経済と世界経済をつなぐモノ・カネ・ヒトの移動、および、各国・地域の経済動向に焦点を当てる。	
	学びの場としての社会	○	ライフストーリー・インタビューに基づいて、「ひきこもり」とは当事者にとってどのような経験なのか理解するためのいくつかの視点を提示します。生きることをめぐる葛藤が「ひきこもり」の本質であることを理解するとともに、自分自身の人生・生き方に関連づけて考えることが重要です。	
	社会学からの学び	○	この講義は、日常の社会で起きている身近な現象や問題について、メディアの映像資料等を用いながら、社会学的な思考方法を通して問題解決に繋がるような思考方法を身に付けられるようにします。	
	メディアからみる学び	○	既存のメディアから新しいメディアまで、それぞれの特性とその変化について、具体的事例を示すと同時に、概念化を施しながら論じる。	
	法と政治の世界	○	この講義は、政治を扱った映画を見る講義ではありません。また「楽単」と呼ばれるような講義でもありません。政治学の主要テーマや基本概念を理解するための補助線として映画を利用しつつ、現代社会が抱える様々な問題について考えていくタイプの講義です。 講義は、まずリベラリズムという政治原理の特徴とその自由観について確認することから始まります。しかし、リベラリズムが実現しようとした自由は資本主義を生み出し、資本主義によって人間自身が翻弄されていくという疎外の状況を生み出しました。次に、このような疎外の状況を克服するために1960年代末に集中的に行われた若者たちの反乱の試み、すなわち大学闘争やカウンター・カルチャーの異議申し立て運動を紹介したいと思います。ですが、若者たちの異議申し立ての試みは、その多くが失敗に終わりました。その失敗の原因を、今度はデモクラシーの政治原理と照らし合わせながら分析してみたいと思います。そして、民主主義という政治体制の中でリベラリズムとデモクラシーという二つの政治原理が、相互に牽制し合うと共に、その問題点を補い合うように作用していることを確認したいと思います。 このように、民主主義の中に含まれる二つの政治原理の相互作用について考察していくことが、この講義のねらいです。また、小レポートのテーマについて自ら考え、それを文章として書くことが求められる「出力」重視の講義です。得られる単位は2単位だけなので、単位取得効率の点から言えば、はなはだ「コスパ/タイパ」の悪い講義ですが、自らの考えを深め、それを他者に向けて表現していくことに習熟したい学生には、良い練習の機会になると思います。	
	法と政治の世界	○	政治を理解しようとするには様々なやり方があるが、政治制度を知るといのは一つの重要な方法だろう。主要国、なかんづく我が国の制度は社会に出ても必須となる基本的知識といえる。議院内閣制や大統領制、小選挙区制や比例代表制といった制度を各国は組み合わせているが、運用の仕方が異なり、一様ではない。本講義では主要国の制度を踏まえつつ、それと比較しながら我が国の制度に関する知識を獲得するものとする。加えてそれに関する最新の情報を英米の新聞を使って読んでみることも行う。受講者にワン・センテンスずつ訳してもらうことにする。	
	法と政治の世界	○	国制としての統治機構を素材として、その成立過程や運用における法と政治との関係を説明していく。政治家や政党、国民といったアクターのおりなすダイナミズムによる国制の形成と運用をみることで、憲法をはじめとした法により定められる統治機構が所与のものではなく歴史的・場所的制約性のある内容のものであることが理解されることを狙いとしている。	
	経営学への招待	○	この授業では、企業の戦略と組織に関する基礎的な知識について、具体的なケースと問題演習を通じて習得していく。専門的な用語や理論の説明はできるだけ具体的なケースを絡めて詳しく解説をしていき、その後の問題演習では、中小企業診断士試験や経営学検定試験の問題等を用い、基礎的な知識の定着を図りたい。	
	経営学への招待	○	この授業では、経営戦略論、会計・財務管理論、経営組織論といった3つの専門分野から企業活動を理論と実態の両面から講義を行うことで経営学の入門的内容の講義を行う。その際、3名の担当教員が、それぞれ3つの専門分野について4回ずつ順次講義を行う。各専門の講義においては、まず、専門分野の観点から企業の活動の特徴づけ、次に各専門分野の理論の基礎を学び、最後にその理論に基づき、具体的なケースを通じてその内容の実態面を学ぶ。 なおこの講義では、3つのクラスが同じ内容を学ぶが、ただし、所属するクラスによって学ぶ順序が異なり、また成績評価担当者も異なる。したがって担当者が誰かを確認したうえで、自分が履修した担当者のクラスで受講しなければならない。具体的な進め方などについては最初の講義で説明するので必ず出席すること。	
	経営学への招待	○	この授業では、経営戦略論、経営組織論、会計・財務管理論といった3つの専門分野から企業活動を理論と実態の両面から講義を行うことで経営学の入門的内容の講義を行う。その際、3名の担当教員が、それぞれ3つの専門分野について4回ずつ順次講義を行う。各専門の講義においては、まず、専門分野の観点から企業の活動の特徴づけ、次に各専門分野の理論の基礎を学び、最後にその理論に基づき、具体的なケースを通じてその内容の実態面を学ぶ。 なおこの講義では、3つのクラスが同じ内容を学ぶが、ただし、所属するクラスによって学ぶ順序が異なり、また成績評価担当者も異なる。したがって担当者が誰かを確認したうえで、自分が履修した担当者のクラスで受講しなければならない。具体的な進め方などについては最初の講義で説明するので必ず出席すること。	
	経営学への招待	○	この授業では、経営戦略論、会計・財務管理論、経営組織論といった3つの専門分野から企業活動を理論と実態の両面から講義を行うことで経営学の入門的内容の講義を行う。その際、3名の担当教員が、それぞれ3つの専門分野について4回ずつ順次講義を行う。各専門の講義においては、まず、専門分野の観点から企業の活動の特徴づけ、次に各専門分野の理論の基礎を学び、最後にその理論に基づき、具体的なケースを通じてその内容の実態面を学ぶ。 なおこの講義では、3つのクラスが同じ内容を学ぶが、ただし、所属するクラスによって学ぶ順序が異なり、また成績評価担当者も異なる。したがって担当者が誰かを確認したうえで、自分が履修した担当者のクラスで受講しなければならない。具体的な進め方などについては最初の講義で説明するので必ず出席すること。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	異文化コミュニケーション学からの学び	○	本授業ではまず、異文化コミュニケーションを学ぶうえでの基礎的な用語や概念を学びます。これにより、視野を広げ、現象を異なる視点からクリティカルに見る力を養います。たとえば、グローバリゼーションと多文化社会コミュニケーション、文化、言語、非言語、アイデンティティ、メディア、異文化接触、コミュニケーションの阻害要因、異文化コンピテンスなど、多様なテーマを取り上げます。 授業では、グループディスカッションやピアフィードバックを行います。仲間や教員との議論を通して自分の思考を言語化し、また他者の多様な考えを聞くことで考察を深めます。最終的には、関連文献を読み、自分の考察をまとめてラウンドテーブル発表をすることを目指し、各自が自律的に深い学びを追求できるよう支援します。	
	異文化コミュニケーション学からの学び	○	本講義では、現代のグローバル社会が直面する重要な課題として、難民問題と児童労働問題を取り上げます。南アジア、特にバングラデシュの事例を中心に、これらの問題の構造的要因、社会経済的背景、そして解決に向けた国際社会の取り組みについて学びます。開発学、国際協力論、地域研究の視点を組み合わせながら、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた課題と可能性を考察します。	
	異文化コミュニケーション学からの学び	○	本授業は、異文化コミュニケーションに関連する課題を翻訳学の視点から探求する意欲的な学生を対象としています。特に、SNSや動画コンテンツの翻訳が果たす役割に焦点を当てます。講義では、生成AIを含む最新の翻訳技術や従来の翻訳手法を学び、それらの比較や適用可能性について議論します。また、これらの知識を活用し、実際の翻訳・ローカライゼーション活動を通じて、文化的に異なる他者とより良いコミュニケーションを構築する方法を模索します。 授業は、個人発表、ペアワーク、小グループおよび大グループでの活動（主にディスカッション）を中心に進められ、受講生が翻訳学の理論と実践を結びつけながら、異文化間の課題を深く理解し、より効果的な対話を実現する力を養うことを目指します。	
	なぜ外国語を学ぶのか？	○	「言語」というものが、どのような特性や性質を持っているか、どのような点で共通しているのか、どのような多様性があるのか考えます。皆さんの多くが母語としているであろう日本語、比較的に長い間学習を続けている英語、大学に入ってから初めて触れることが多いと思われる言語B（いわゆる第2外国語）、それらの意外な特徴やこれまでの歩み、複数の言語を学ぶ重要性や意義などに触れていきましょう。新たな言語を学ぶ時に役立つヒントが見つかるかもしれません。	
	なぜ外国語を学ぶのか？	○	「複言語・複文化主義」とは、言語・文化の多様性に満ちた近年のグローバル社会において、各個人の持つ様々な言語能力と文化的経験を「複合的な能力」ととらえ、それを育み、尊重する考え方です。多言語社会であるヨーロッパ発の概念ですが、グローバル化が進む今日では世界中の外国語教育で重視されています。 本講義では、複言語・複文化の基本的概念、世界の言語文化を取り巻く事情、複数の言語を学習することの利点などをテーマに扱い、講義および学生によるグループディスカッションを通して理解を深め、知見を広げていきます。各回で扱うテーマを多角的、批判的に考察し、学生一人一人が自分にとっての外国語を学習する意義、そしてユニークな言語・文化能力をもって社会にどう貢献していくべきかを見出ししていきます。	
	現代社会と観光	○	観光は、国の成長戦略や地方創生の切り札として大きな期待が寄せられています。しかし他方では、地域の暮らしや環境に悪影響を及ぼす“オーバーツーリズム”が問題視されています。この授業では、観光や地域振興に関わる様々な問題を提起していきます。現代の観光を取り巻く様々な環境条件と変わりゆく観光の動向を把握するとともに、現代社会における観光の意義や役割、あり方について考えてみましょう。	
	現代社会と観光	○	◆観光学の入門編として、様々なタイプの楽しみを求めて観光旅行に出かける私たち一人ひとりの視点に立ちながら、観光が地域の社会や文化等にどのような影響を与えているか、また、旅行者の行動が現代社会の世相や大衆心理をいかに反映しているのかを解説します。 ◆本講座の特色として、各回の授業では「旅行者の心理・行動にみられる特性」に関わるトピックを多く扱っているため、この研究領域に関心をもつ方々には特に受講してほしいと思います。 ◆毎回実施するコメントペーパーでは主に、これまでの旅行体験をふり返ったり観光旅行に関する自らの意見・好み等を記入・提出してもらい、その集計結果を教員からフィードバックします。	
	現代社会と観光	○	観光は巨大な産業である一方で、観光者と地域社会が交わる場でもある。我々は旅行者として、どこに行き、どのような経験を得て、何を学ぶのか。また、観光客を受け入れる地域では、何が観光の対象となるのか。そして、観光によって地域はどのような影響を受け、そこに住む人びとの生活や文化はいかに変容するのか。本講義では、観光者と観光地の事例紹介を通じて、観光者と地域の交流によって特徴付けられる現代の観光現象の諸相について考察する。	
	現代社会の諸相	○	この授業では、グローバルな規模で起きる社会変動について検討したうえで、こうしたマクロな変動による人々の生活の変化と市民社会の取り組みを格差、貧困、人権、ジェンダー平等の概念を中心に考えていく。	
	現代社会の諸相	○	本授業では、現代社会に起きている様々な課題に焦点を当て、その背景にある構造やシステム、考え方等について学び、現代社会の在り様の理解を深める。自らも社会システムの一員として、社会との相互作用との間に、課題の解決にも悪化にも貢献しうる存在であることを認識したうえで、具体的な社会課題への取り組み方や向かい方などについて講義やグループディスカッション等を通じて考え、自らの問いを進化させる。 授業は教科書各の各トピックスに掲げられている課題を中心に扱う。また、講義内容は講義の進捗度によって変更することがある。	
	現代社会の諸相	○	現在世界で激化している紛争の原因と現状を理解する一助として、中東の事例を中心に切り上げ、歴史的な背景や、宗教的な考え方を学ぶ。特に2023年10月から続くガザ戦争、日本が大きく関与したイラク戦争を詳しく取り上げる。こういった国際問題を、いかに自分ごととしてとらえることができるか、グローバルな視点の持ち方についても学び、問題解決を考える。	
	現代社会の諸相	○	「現代社会」に関して、比較的にあたらしいと思われる諸テーマを設定し、それについての読解をおこないます。 その際、そこであつかわれる諸事象について、歴史的視点の獲得、社会の構造的把握、政治権力とその対抗軸の設置といった、多角的かつダイナミズムをもった視点からそれらをあつかってゆきます。 ※なお、講義内容は講義の進捗度により変更することもあります。	
	自然科学の探究	○	数学・物理・化学の3分野に対して、いくつかの基本となるテーマを通して、自然科学が過去から現在までにいたる大きな発展を導いた基本理念や方法論を学んでいく。数学では整数や素数にまつわる話題、物理では宇宙・物質・素粒子の物理、化学では化学物質のキラリディや光化学などを取り上げる。個々の分野において、まずはその不思議さに驚き、そこに現れる興味深い性質を堪能し、自然科学に対する知的好奇心を励起して欲しい。これらの学習を通じて、自然科学の基本的な理念を理解し、高度に発展していく自然科学に対するビジョンを得ることができよう。 (オムニバス方式/全14回) (基幹教員以外の教員(佐々木直樹)／2回) 導入、まとめ (基幹教員以外の教員(佐々木直樹)／4回) 化学編 (基幹教員以外の教員(安田雅哉)／4回) 数学編 (基幹教員以外の教員(北本俊二)／2回、基幹教員以外の教員(原田知広)／1回、基幹教員以外の教員(久間晋)／1回) 物理学編	オムニバス方式
	自然科学の探究	○	数学・物理学・化学の3分野に対して、いくつかの基本となるテーマを通して、自然科学が過去から現在までにいたる大きな発展を導いた基本理念や方法論を学んでいく。数学では素数にまつわる話題、物理学では宇宙・物質・素粒子の物理、化学では色や薬の化学、人工光合成を取り上げる。個々の分野において、まずはその不思議さに驚き、そこに現れる興味深い性質を堪能し、自然科学に対する知的好奇心を励起して欲しい。これらの学習を通じて、自然科学の基本的な理念を理解し、高度に発展していく自然科学に対するビジョンを得ることができよう。 (オムニバス方式/全14回) (基幹教員以外の教員(安田雅哉)／2回) 導入、まとめ (基幹教員以外の教員(安田雅哉)／4回) 数学編 (基幹教員以外の教員(和田亨)／2回、基幹教員以外の教員(三井正明)／1回、基幹教員以外の教員(大多和正樹)／1回) 化学編 (基幹教員以外の教員(北本俊二)／2回、基幹教員以外の教員(原田知広)／1回、基幹教員以外の教員(久間晋)／1回) 物理学編	オムニバス方式

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	自然科学の探究	○	数学・物理学・化学の3分野に対して、いくつかの基本となるテーマを通して、自然科学が過去から現在までにいたる大きな発展を導いた基本理念や方法論を学んでいく。数学では素数にまつわる話題、物理学では宇宙・物質・素粒子の物理、化学では色や薬の化学、人工光合成を取りあげる。個々の分野において、まずはその不思議さに驚き、そこに現れる興味深い性質を堪能し、自然科学に対する知的好奇心を励起して欲しい。これらの学習を通じて、自然科学の基本的な理念を理解し、高度に発展していく自然科学に対するビジョンを得ることができるであろう。 (オムニバス方式／全14回) (基幹教員以外の教員（北本俊二）／2回) 導入、まとめ (基幹教員以外の教員（北本俊二）／2回、基幹教員以外の教員（原田知広）／1回、基幹教員以外の教員（久間晋）／1回) 物理学編 (基幹教員以外の教員（佐藤信哉）／4回) 数学編 (基幹教員以外の教員（三井正明）／2回、基幹教員以外の教員（和田亨）／1回、基幹教員以外の教員（大多和正樹）／1回) 化学編	オムニバス方式
	自然科学の探究	○	授業は理学部生命理学科の教員によるオムニバス形式で行い、各教員がそれぞれのテーマに関して解説する。生命科学を広く深く知るのではなく、いくつかのテーマを深く理解するための内容を講義する。理解を確認するために、各授業の終わりに、リアクションペーパーの提出、または、小テストを行うことを基本とする。 (オムニバス方式／全14回) (基幹教員以外の教員（後藤聡）／3回) 生体の不思議、まとめ (基幹教員以外の教員（花井亮）／1回) 分子としてのDNA (基幹教員以外の教員（末次正幸）／1回) つくって理解する生物学 (基幹教員以外の教員（岡敏彦）／1回) 母からもらったミトコンドリア (基幹教員以外の教員（樋口麻衣子）／2回) ストレスと疾患、がんの生物学 (基幹教員以外の教員（榊原恵子）／2回) 植物の起源、家畜化と栽培化の生物学 (基幹教員以外の教員（関根清彦）／1回) 抗生物質耐性菌 (基幹教員以外の教員（岩川弘宙）／2回) はたらくRNA、はたらくウイルス (基幹教員以外の教員（塩見大輔）／1回) 生命の起源	オムニバス方式
	身体科学からの学び	○	ジェンダーの視点から自身の成育史を振り返り、各回のテーマと自らを結びつけて考察する。無用なジェンダー・バイアスから自らを解放し、よりよい社会づくりの一員となるために必要な知識を身につける。なお、各回のテーマを講義する際には、スポーツや学校体育に関する話題が中心となる。	
	身体科学からの学び	○	身体動作をバイオメカニク的に解釈するために必要な力学の基礎、および各スポーツ動作におけるバイオメカニクスについて講義する。授業では書き込み式の資料を配布し、計算を含んだ問題にも取り組む。また、テーマに合わせた映像を視聴して理解を深める。	
	身体科学からの学び	○	本授業では、生涯スポーツに関する科学的知見と社会的観点から、多様な楽しみ方があるスポーツについて考えていく。特に、施設、イベント、クラブ、ツーリズム、ガバナンス、インテグリティ、政策の観点から、生涯スポーツ社会の意義について解説する。	
	身体科学からの学び	○	サプリメントと総称される健康食品について学ぶ前に、栄養学や食事の基本について理解する。その上で、健康食品に関わる法律、安全性、有効性、添加物、表示、そして目的別にどのような商品（成分）があるのかを学び、氾濫する関連情報にいかに対処して真実を見極めていくかを考える。	
	現代心理学からの学び	○	本科目は、臨床心理学・健康心理学の研究を通して社会問題を考える授業です。特に、うつ病や不安障害など現代社会における心理的問題に焦点を当て、これまでの臨床心理学や健康心理学の知見から社会を見ることで、社会のあり方を共に考えます。臨床心理学の知見や実際の介入技法の紹介を通して、臨床心理学の研究手法や動向を学びます。授業で得た知識を自分の生活に活かすために、授業で扱ったテーマについて自分なりに考え、コメントペーパーにまとめて提出することが求められます。	
	現代心理学からの学び	○	社会心理学に関する基礎的なテキストを用いる。そのテキストが扱うテーマの中から、各人が好きなテーマを選択し、グループを作る。各回、グループごとに発表し、ディスカッションを行う。発表はパワーポイントによって実施する。発表の1週間前までに、所定のグーグルドライブに、発表ファイルをアップロードをしておく必要がある。学生は、グループの中でプレゼンターとしての役割を果たすことに加えて、それ以外の興味のあるテーマについてコメントペーパーとしての役割を担う。第3回目の授業で各自が席を決定し、その席に基づき座席表を作成する。以降の授業では、その席で受講すること。	
	現代心理学からの学び	○	私たちの日常には、Instagram写真や動画をはじめとした映像があふれていますが、皆さんはその存在について、立ち止まってじっくりと考えたことはあるでしょうか。もはや当たり前になったからこそ、案外考えたことはないかもしれません。けれど、映像の存在が身近になったことで、それへの人間の身体知覚の感度が鈍っていることはあるにしても、その存在の本質から来る力自体が失われたわけではありません。写真が誕生したのは19世紀の半ばですが、いまだ、写真はその魅力を放ち続けています。この授業を通して、写真を観ること、撮ること、それを語ることの意義と魅力を確認します。AIなど科学技術の進展は、映像の世界にもさまざまな変容を迫っている状況です。このような時代に、本授業では、写真という映像の性質とそれを受け取る人間の知覚の問題を巡って、フレームや細部、焦点、言葉との関係、時間といった写真と特徴づける切り口から考察していきます。	
	アジア地域での平和構築	○	近代朝鮮の歴史は日本との関係を抜きにしては語ることができないが、それは近代日本の歴史を語る場合にも同様である。授業では、近代朝鮮と日本との関係やユン・ドンジュに触れながら19世紀の開国前後から植民地時代、解放、分断、戦争、軍事政権時代を経て民主化に至るまでの朝鮮半島の近現代史を概観する。	
	アジア地域での平和構築	○	尹東柱(ユン・ドンジュ)は1942年に立教大学への留学経験もある韓国を代表する詩人です。授業では尹東柱をめぐる人物史と彼の作品を軸に、20世紀における日本と朝鮮半島の歴史全般について再考察しながら、近代以降の世界における国家・民族と個人との関係、東アジアの近現代史における歴史を動かす要因とその今日の意味について読み解いてゆきます。	
	アジア地域での平和構築	○	本講義では、多民族国家である中国の多様性、政治制度の特徴、産業や経済発展のメカニズムなどについて詳しく解説するとともに、貧富格差、環境破壊、人権抑圧、米中対立の長期化など中国が直面している様々な課題を取り上げ、アジアの中の中国実態、および中国と世界との関わりについて理解できるようにする。	
	グローバル社会での平和構築	○	世界には帝国主義・植民地主義に起因する紛争問題が多数あり、今も解決されないまま続いています。これらの問題に対処して平和構築を進めるべき国連をはじめとする国際機構のシステムが抱える問題も明らかになっています。この状況は日本にとっても無縁なものではありません。本講義では植民地主義の清算に関わる代表的な事例をとり上げ、平和構築に向けた課題を考えます。	
	グローバル社会での平和構築	○	平和研究の観点から、これまでどのような争点が「平和」の課題とされてきたのか、そして、この課題はどのようにして変遷してきたのか、さらに、「平和」の名の下に注目されない排除について学ぶ。具体的には、「移民の受け入れは受け入れ国が決めて良いのか」、「死刑は認められるのか」、「旧植民地国への責任はどのようなもので、いつまで継続するのか」などについて考える。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	グローバル社会での平和構築	○	平和学の基礎と平和構築における文化的平和と人権の確立の重要性を説明したうえで、戦後日本の平和思想を時系列に沿って紐解く。本講義は、日本の平和思想と政治思想について、反核思想とアクトーの問題、歴史和解と靖国参拝問題の三つの軸で構成される。第一に、民主主義や戦争放棄を内包した平和主義を目標とした憲法が制定される時代、「平和」がどのように模索されていたかを、多種多様な知識人が参加した「平和問題談話会」の議論を紹介して、考察する。1955年体制に至るまでの国際・国内政治状況を踏まえ、当時の平和思想がどのような政治思想と関係していたのか明らかにする。第二に、反核思想が平和思想の中で重要性を増す時代の各政党の考え方や立場の違いを解説する。ヒロシマ、ナガサキの記念の在り方やヒバクシャの平和思想についても紹介する。第三に、戦争の記憶と和解の問題を取り上げ、加害者と被害者の戦争記憶や記念の課題について考察する。首相の靖国参拝と日中韓の歴史認識を巡る衝突も紹介する。これらを通して、グローバル社会に対応する平和構築の新しいアプローチを議論する。	
	大学生の学び・社会で学ぶこと	○	この科目は立教サービslラーニング(RSL)科目群のひとつとして開講する。RSLはコミュニティを理解し、コミュニティに関わる能力を習得することを通してシティズンシップ（市民性）を習得することを目的とする。授業の前半は「大学生の学び」の領域として、本学学生にとって4年間を過ごすコミュニティである立教大学の歴史、建学の精神や、サービslラーニングの役割と位置付けなどを理解する。 授業の後半は、「日本は平和か」という問いから、社会の一員としての自分を見つめ、自らがよりよい社会の実現のためにどのようなコミットメントができるのかを考える。大小様々な社会課題を取り上げることによって、国際社会のようなマクロの視点から、地方自治体のようなミクロの視点まで、自分自身と社会とのつながりを多角的に捉える。それぞれの課題の解決に向けてアクションを起こすために貪欲に学び、またその学びを言語化すること、可視化する姿勢を重視する。	
	大学生の学び・社会で学ぶこと	○	この科目は立教サービslラーニング(RSL)科目群のひとつである。 授業の前半は「大学生の学び」領域（自校教育）として、立教大学の歴史、正課教育や正課外教育での学び、サービslラーニングの役割と位置付け等について講じる。授業の後半は、教育学の専門領域を基盤としながら、本学のキャンパスがある池袋地域の歴史にも注目しつつ、教育とは何か、教育学と社会との関係性や背景にある思想について講じる。コミュニティの中で、教育が果たしてきた役割や取り組みについて、批判的な視点も持ちつつ、「過去」と「現在」を往還させることで、「自分事」として現代社会を捉え、未来を創っていく力を養うことを目指す。 なお、適時、自身の体験や経験、考えを言語化し、他者と議論する機会（ディスカッション）も設ける。 【付記】 立教サービslラーニング(RSL)はコミュニティ（他者、共同体における思想や生活文化）を理解し、自身の専門性を活かしながら現場での体験・経験をとおしてコミュニティに関わる能力を培い、4年間の学生生活（正課教育と正課外教育の往還）を通じてシティズンシップ（市民性）を涵養することを目的とする科目群である。本科目は全学共通科目における「学びの精神」科目群に位置し、初年次教育、秋学期のRSL実践系科目のフィールドとのつながり等も意識した、RSL入門としての要素を持つ科目である。	
	大学生の学び・社会で学ぶこと	○	この科目は立教サービslラーニング(RSL)科目群のひとつである。RSLはコミュニティを理解し、コミュニティに関わる能力を習得することをおしてシティズンシップ(市民性)を習得することを目的とする。そこで、この授業の前半は、本学学生にとって4年間生活するコミュニティである立教大学の歴史や大学が学生に期待する正課教育や正課外教育での学びと人間的成長について講じる。授業の後半は、立教大学の教育的・信仰的根幹であるキリスト教（聖公会）のアプローチ（視座）を通して、倫理的に、現代社会の現実課題を見つめていく。またディスカッションなどの機会を多く持ち、他者の声を聴くと共に、自らの想いの意識化と言葉化を試みつつ、他者・社会の中に生きる一人の「個」としての在り方を探求することを内容とする。	
	人権とジェンダー	○	すべての人間は生まれながらにして自由でありかつ尊厳と権利について平等である（世界人権宣言）。しかし、近代になって生まれた人権の原初的な概念からは女性排除されており、そのような状況に対する女性たちの反発がイギリスの第一波フェミニズムに結実した。 本講義ではフェミニズムが生まれたそうした背景や、その展開のなかで顕在化した人権とジェンダーに関わる課題について知ることから始める。そしてその延長でもあり、いまだ解決したとは言えない今日のジェンダーにまつわる問題について、ジェンダー・ギャップ指数や国連持続可能な開発目標（SDGs）等をふまえた日本や国際社会における最新の議論を学ぶ。 ジェンダー平等の実現は、SDGsのすべての目標達成に関わる死活的な課題である。そしてその達成には、市民の理解と声が重要とされる。本授業が、複雑化している現代社会の様々な課題をジェンダーや人権の観点から知る・学ぶだけでなく、「誰ひとり取り残さない」をスローガンに掲げたSDGsの達成にむけて自分になにができるかを市民のひとりとして考えるきっかけになることを願う。	
	人権とジェンダー	○	「近代的人権」は普遍的な概念として把握されているが、主に白人男性たちによって作られた成立当初は「女性の人権」が除外されていたことはとても有名である。授業の最初ではまず「近代的人権」の歴史的経緯を把握し、人権概念が各時代における異議申し立てにどのように対応し、変化をしてきたかを学ぶ。その後には、現代の社会における具体的な諸問題を取り上げ、人権とジェンダーの視点によって、それら諸問題をどのように理解し、考えたらよいかを一緒に検討していく。	
	ライフマネジメントと学生生活	○	よりよく生きることについて考え、ビジネスパーソンに求められるさまざまな知見、思考法、コミュニケーションのあり方などについて明らかにする。学生生活や人生をマネジメントする上で必要となる自己研鑽の方法、自己表現するためのマインドセット、表現方法などについて議論する。	
	ライフマネジメントと学生生活	○	体育・スポーツは「身体性」「同時性」「連帯性」といった特徴をもち、実生活で経験する多くの出来事と相通ずる。人生は偶然という予期せぬ出来事の連続である。不確実で不安定な時代だからこそ、自尊心、自己肯定感、自立心、自閉心、自己そして協調性、共感する力、思いやり、社交性、道徳といった人生に必要な能力を、体育・スポーツの研究・教育を通じて、養っていく。	
	ライフマネジメントと学生生活	○	よりよく生きることについて考え、ビジネスパーソンに求められるさまざまな知見、思考法、コミュニケーションのあり方などについて明らかにする。学生生活や人生をマネジメントする上で必要となる自己研鑽の方法、自己表現するためのマインドセット、表現方法などについて議論する。	
	立教大学の歴史	○	立教は創立150年を迎えました。この授業では日本近現代史における立教の歴史とその特色を学んでいきます。具体的には、1874年の前身校の成立から現代までを対象とし、ネット等でも公開されていない貴重な写真資料や動画も紹介します。本学には「自校史」研究の蓄積があり、その研究成果にもとづきながら立教の歩みとそれに関連する歴史の授業を展開します。	
	立教大学の歴史	○	この授業では、1874年の創立から2000年の「一貫連携教育」の開始までを対象とし、立教大学の歴史を日本近現代史のなかに位置づけながら検討していく。立教大学の歴史的展開を明らかにしていくなかで、立教各校（小・中・高）の動向や他大学の事例についても適宜紹介していく。そのほかゲストスピーカーの招聘を予定している。なお、進捗状況により、授業計画が若干変更することがある。	
	立教大学の歴史	○	アメリカ聖公会宣教師ウィリアムズによる開校以来、「立教」は150年の歴史を有している。本講義では立教を開拓した宣教師たちの伝記を繙きながら、そのあゆみを紹介する。	
	立教大学の歴史	○	1874年にその前身となる学校が創立されて以降、立教は150周年の節目を迎えました。その歴史にはまだ明らかでない部分も残されていますが、この間に進展してきた研究成果にもとづく形で、立教の歩みを紹介いたします。	
	西欧キリスト教社会における大学の誕生	○	本講義は、大学の歴史そのものではなく、大学という場で営まれる学問とはいかなるものかを、西欧キリスト教思想史を概観することによって、考えていく。それによって、古代から現代にいたる様々な人物たちや考えかたを取り上げることによって、西洋文化の全体を俯瞰する。	
	西欧キリスト教社会における大学の誕生	○	マックス・ウェーバーの『職業としての学問』の講読を通じて、現代日本の大学で学ぶことの意義について考えていく。また、「大学の歴史」についても紹介する。	
	キャリアデザイン	○	本講義では、自分らしい生き方とは何かをしっかりと考え、それを希望の進路に結び付けていくために、「働くこと」に関するルールである労働法について学習する。 詳しくは、労働関係の開始・展開・終了の各段階で生じる多様な労働法の問題（たとえば、採用・採用内定取消の問題、ブラック企業の見分け方、派遣切りなど）について、テキストの知識を前提に、労働法全般の基本的な内容を学んでいく。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	キャリアデザイン	○	多くのみなさんが、将来、企業に勤めることが予想されるため、日本の企業や組織での働き方、とりわけ人事労務管理や人的資源管理の分野を中心に授業を展開していきます。昇進、給与、労働時間、ワークライフバランスなど、日本企業での働き方、日本の労働環境などを議論していきます。進捗状況により、授業計画が若干変更することがあります。	
	キャリアデザイン	○	本講義では、日本経済新聞の記事を配布し、受講生と記事を読んで意見交換をする。受講生は関心を持ったテーマについて深掘りし、自ら判断し、評価できる力を身につける。日々、ニュースに触れる積み重ねを大切にしていきたい。学んだことを知識として覚えることよりも、課題を考える経験を増やしてほしい。	
	キリスト教史に学ぶ多文化共生	○	キリスト教に対する批判を歴史的・哲学的観点から取り上げる。 キリスト教の信仰をもたない無神論的な立場からは、次のような強力な議論が提示されている。 1)神が存在する 2)悪が存在する 3)1と2は矛盾する（両立しない） 4)2は真である〔経験的事実〕 5)1は偽である この世に悪が存在しているのは、誰もが認める事実であろう。 とすれば、「神は存在しない」という命題は真となるのか。 本講義では、このような議論に対してどのような応答が可能であるのかを問う。 歴史的には、ユダヤ教やグノーシス派の見解を参照しつつ、アウグスティヌスや現代の宗教哲学の議論を紹介する。 *キリスト教の予備知識や信仰の有無は問いません。 **簡単なグループディスカッションを行うかもしれません。 ***受講者の関心によって授業内容が変更する可能性もあります。	
	キリスト教史に学ぶ多文化共生	○	ベシミズムについて一般的な背景を説明した後、近代ベシミズムの主要な人物であるショーペンハウアーとシオラン、およびニーチェとカミュに焦点を合わせ、そこには宗教を個別的に見ていく。また、ベシミズムの文化断断性と普遍性とをよりよく理解するために、諸宗教におけるベシミズムおよび、現代のベシミズムとしての反出生主義にも触れ、比較検討する。	
	キリスト教史に学ぶ多文化共生	○	文化とは人間の日々の生活を形作る重要なものですが、異なる文化同士が接触した場合、対立や軋轢が生まれることもあります。一方でキリスト教という宗教は、特定の時間や場所を超えて、様々な文化と共存することができる普遍性を持っています。本講義では、キリスト教の歴史を辿りながら、色々な文化がキリスト教に抱かれ、ときには新しい文化をさらに生み出ししていく様子を扱います。古代ギリシャ哲学、イスラームの思想、ヨーロッパの様々な国の文化が、キリスト教という枠組みの中で交流し、共生していく様子を一緒に学んでみましょう。	
	キリスト教史に学ぶ多文化共生	○	今日、多様な人々が対等な関係のもとに暮らす共生社会の実現が求められている。多様性には年齢・性・文化の違いや障害の有無といった、さまざまな面があり、そこには宗教の違い、あるいは信仰する宗教の有無も含まれる。しかし、そうした宗教的多様性は日本社会において尊重されているとはいえないのが実状である。日本ではなぜ宗教的多様性が認められにくいのか？そして、そのことが問題とされること自体、少ないのはなぜか？この問いに本科目は、近代以降の日本社会の中でキリスト教や神道といった宗教が置かれた状況、主に国家と宗教との関係を振り返ることで、取り組む。それを通じて、この社会が多様な人々により開かれたものとなるために、何が必要か、考える。	
	美と生命について：キリスト教の美学	○	この講義は、キリスト教的世界像の形成および変遷を扱う前半部（基礎）と現代に生きる私たちにとってものなおディカルな「問い」を扱う後半部（応用）とに分かれています。 前半部では、この授業の【美】をテーマに、変遷を辿りながらも現代まで通底する西欧の世界観を学び、西欧思想の基本的な流れの一端を理解することが狙いです。後半部では【生命】をテーマとし、それぞれのトピックについて、前半部の理解を踏まえながら、様々な西欧の思想家に触れ、共に考えてゆきます。 この授業では、他者の考えを読む・聞くのみならず、自らの考えを書く・話すことも重要視しています。したがって、グループ・ディスカッションを行う予定です。また、授業毎にリアクションペーパーの提出を課しますが、リアクションペーパーの内容は次回授業で紹介することがあるので注意してください。知識や教養を得ようとするだけでなく、己と向き合い、自分自らの「問い」を見いだそうとする姿勢を歓迎します。 ※授業計画・内容およびディスカッションの回数は、履修者数や状況に応じて変更する可能性があります。	
	美と生命について：キリスト教の美学	○	中世の西欧キリスト教世界において崇敬の対象として生み出された無数のマリア像は時代や環境により多様性を示すが、その源流にはマリア神学（Mariology）の存在がある。従って、神学を考慮せずしてマリア芸術の本質に至ることはできないと言える。本講義ではマリア崇敬に関する基本的な知識を提供し、マリアを表す様々な芸術作品を紹介する。それらを神学思想と共に辿りながら、マリアの存在の本質に迫り、マリアの美の多様性について考察する。折に触れて、マリア崇敬の盛んなイタリアやフランスの人々の暮らしや伝統文化についても紹介する。	
	美と生命について：キリスト教の美学	○	フランス文学作品には、キリスト教的な信仰・思想に基づいているものが多い。その背景として、フランスではキリスト教（特にカトリック）が、中世から現代に至るまで、主流の宗教であることが挙げられる。もちろん、このような理解の仕方には問題がないわけではない。フランスには非キリスト教的、または反キリスト教的な信仰・思想が数多く存在し、歴史や文化の中で重要な役割を果たしてきたからだ。実際、他の宗教、例えばユダヤ教やイスラーム教を信じるフランス人も多数存在してきた。（マイノリティの宗教に基づく文学作品がフランス文学史の中で重要な位置を占め難いことは疑問に付されて然るべきだが、本授業の主題ではない。）また、ギリシア・ローマの古代宗教は、キリスト教と並んでフランス文学の2大柱と言われる。そしてフランスは、ある意味でキリスト教に反する思想である共和主義を掲げ、政教分離や公共空間での非宗教性を原則とする国である。さらに、古くから無神論者や反宗教的な自由主義者を輩出した国でもあり、昨今は国民の間でキリスト教的信仰の希薄化が進んでいる。しかしそれでも、フランス国語の模範として称えられ、受け継がれてきた文学作品には、キリスト教に基づいているものが多いと言える。これらの文学作品の中には、もちろん、キリスト教的な信仰や思想を直接的に表現しているものもある。しかしまた、非キリスト教的、あるいは反キリスト教的なテキストから、キリスト教的思想の枠組みや神への断然難い信仰が浮かび上がってくる場合もある。本授業では、このようにキリスト教と様々な結びつきを持つテキストをいくつか扱う。 日本でもよく知られた作品、そしてなるべく多様な時代（中世～現代）やジャンル（詩、演劇作品、小説、思想書など）に属するテキストを紹介する。受講者がこれらテキスト（もちろん仏語原文でなく日本語訳）を読むことがまず重要だ。 本年は、ブレイズ・バスカル『パンセ』、ウィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』、そして2022年にノーベル文学賞を受賞した作家アニー・エルクノーの『ある女』を扱う。また参考文献として、他の文学作品を読むこともある。 これらのテキストを扱いながら、主に次の3種類のテーマについて考察する。まず、キリスト教、あるいは宗教性についてのテーマ、次に美と生命、すなわち人間の様々な様相に関するテーマ、そして、文学作品やテキストを読んだり書いたりすることの意味につながるテーマである。 この授業は、2016年度に設置された新プログラムの一環として、受講生の積極的な参加による学びを目指している。ゆえに、担当教員による一方的な講義よりは、次のような機会を多く得られることが望ましい。すなわち、受講生がテキストを自ら精読する機会、コメントペーパーや他の課題で見解を述べる機会である。担当教員は基本的なテキストの選択、作業の指示、学習指導を行うが、テキストや問題点を逐一まとめたりはしない。受講生が自ら読み、考え、理解し、問題点を引き出し、論じることが重要である。予め用意された絶対正しい答えなどは、最終的には存在しない。ただし、このことはどんなに荒唐無稽なことを述べても構わない、ということの意味しない。逆に、受講生には論理的に考え表現することが求められる。そのために、小論文の書き方、ルールについても見ていく。 学習者やクラスの特徴、および社会的状況に合わせて授業計画を変更する場合がある。	
	美と生命について：キリスト教の美学	○	聖書の中で描かれるキリストは、貧者や病人、徴税人など当時の社会規範から逸脱し、「罪人」とされた人々と積極的に関わった。彼が説く隣人愛は、社会規範や敵味方といった区別を超えた愛である。それはギリシア世界において政治の根拠となる社会規範的な役割を持つ徳や卓越さに向けられる愛とは異なる性質を持ったものである。しかし非政治的ともいえる性質を持ったキリスト教は、ローマ帝国による国教化に伴い、政治的権威と結びつく。キリスト教史の中でこの非政治的な性質と政治的な性質は、互いに関わり合い、多様な解釈を生んできた。本講義では、そのような二つの性質がキリスト教史の中でどのように関連し表れているか幾人かの思想家を選び出し、そこから読み取る。そして同時にそのコンテキストとの関係も考察する。講義の後半では、宗教的権威に対し疑義が呈されるようになる18世紀後半から19世紀にかけて生きたカントやヘーゲル、19世紀に生きたキルケゴールのキリスト教理解を見る。	
	愛について：キリスト教の倫理と哲学	○	キリスト教の歴史において、今日私たちが「愛」と呼ぶものは、いくつかの異なった概念として理解されてきた。授業ではこれらの「愛」の区分——エロース、アガペー、カリタスについて紹介し、これらの異なる愛の側面が、キリスト教思想において、様々な色々な仕方で表現される様子を追っていく。	
	愛について：キリスト教の倫理と哲学	○	講義では、「絶対に結びつくことのないものの結合」として〈愛〉の問題を考察していく。「愛とは何か」、「結びつかぬものが結びつくとは何か」ということをめぐり、文学、映画、プラトンの『饗宴』や『聖書』を手引きとしながら、受講者一人ひとりと〈愛〉をめぐって旅に出かけたいと思う。この旅に参加するに際して求められる態度は、受講者一人ひとりが愛の内実を他人事ではなく自らの問題として引き受け考えることである。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Economy and Society	○	この講義では、学生は現代の日本と世界の経済が直面する問題について英語教材を用いて学習する。私たちはテキスト『日本と世界の経済を研究する』およびその他の教材を使用し、国際経済学の視点から現代経済と社会が内包する問題について考える。	
	Image Studies	○	世界には、歴史的に様々なアニメーション作品が作られてきました。漫画的な絵が動くアニメーションや、CGで作られたものだけでなく、様々な素材と表現がアニメーションには存在します。アニメーションといえば、商業的なものが一般的と思われるますが、アニメーションの歴史は、美術の文脈とも関係しています。この授業では、主に20世紀における世界のアニメーション映画の歴史について、英語文献の講読を通して学びます。それにより、アニメーションを中心とした映像文化への知識だけでなく、グローバルな視点を獲得することも目指します。	
	英語によるビジネスコミュニケーション入門	○	In class, participants will watch TED Talks (with Japanese subtitles). They will write a persuasive leadership essay about themselves. They will read business cases (in English) that are accessible online, discuss these cases in learning teams, and write individual reports on the solutions. They will work both individually and in teams to create a crowdfunding campaign, an elevator pitch, and business proposals. (和訳) 授業では、参加者はTED Talks（日本語字幕付き）を視聴します。自分自身について説得力のあるリーダーシップに関するエッセイを作成します。オンラインでアクセスできるビジネスケース（英語）を読み、学習チームでそのビジネスケースについて議論し、解決策に関する個別のレポートを作成します。個人およびチームで、クラウドファンディングキャンペーン、エレベーターピッチ、ビジネス提案書を作成します。	
	多文化共生社会と大学	○	多文化共生社会とはどのような社会かを自分の言葉で説明することができる。また、日本が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす一人ひとりがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきか、自分の言葉で表現することができる。そして、そのような日本の多文化共生社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、自分の言葉で提案することができる。	
多彩な学び（1） 人間の探究	聖書と人間	○	聖書の基本構成と成立史概要、聖書への多角的アプローチの仕方を知りながら、選択した幾つかのテキストを読む。その際、記述された諸思想とそれらの意味について考察を深めると、聖書が特定の宗教を超えて様々な文化事象に影響を及ぼしてきたという視座を養うことを大切にする。授業では適宜視聴覚教材を補助的に用いる。	
	聖書と人間	○	旧約聖書の創世記6-9章の洪水物語を取り上げ、同様に神がもたらす大洪水について語る古代メソポタミアの文学作品と比較する。そして、メソポタミアの物語を示す人間観・世界観・神観との共通点と相違点の両方を確認しながら、聖書の人間観の特質を明らかにすることを試みる。	
	聖書と人間	○	聖書内容を理解するために必要となる用語あるいは概念をいくつか取り上げ、具体的な箇所当たりつつ、それらの意味及び意義について学ぶ。必要に応じて聖書語文書が執筆された、あるいは聖書に現れる各人物が活躍した時代や社会状況について説明する。	
	聖書と人間	○	聖書の有名な説話を、読む、いざ讀むと、いろいろ不可解な点に突き当たる。その不可解は、はたして我々の知識不足による（ので、知識を増やせば解消する）ものだろうか。それとも、原作自体が当初から難解なものとしてある（ので、知識を増やしても、不可解は解消しないどころか、むしろ知識量に比例して増殖する）のか。さまざまな説話を手がかりに考えてみたい。	
	聖書考古学	○	講義形式で、聖書思想、イスラエル史研究、考古学調査の関係をそれぞれの立場から多角的に検討していく。それぞれの分野についての入門的な知識にも触れていく。	
	ジェンダーとキリスト教	○	この授業では、聖書の数々の物語の中でも特に女性たちが登場する場面に注目します。受講者はあらかじめ物語に目を通したうえで授業に参加し、女性たちが登場する物語について理解したこと、感じたこと、疑問に思ったことを、他の受講者と意見交換します（Zoomを利用）。受講者の状況により進度は調整されます。必要なキリスト教的知識は随時教員からも解説します。	
	イスラームの世界	○	今日の世界において、イスラームについての知識習得と理解は必須の事項である。本授業では、イスラームの基礎知識を解説しつつ、イスラーム教徒の社会生活のあり方を、さまざまな角度から学ぶ。バウポイントを使用した講義形式で、映像資料も適宜活用する。授業の順序や内容は、進捗状況に応じて変更の可能性がある。	
	イスラームの世界	○	イスラームの形成と発展に至る歴史的展開を重視する。古代末期に東方キリスト教・ゾロアスター教の文化圏でイスラームが成立する過程から始まり、ヘレニズムの影響下に哲学・科学を受容して独特のイスラーム文明を発展させるまでを追う。	
	「宗教」とは何か	○	本授業は、個別の宗教についての解説ではなく、「宗教」概念についての考察である。具体的には、19世紀後半以降の宗教研究の流れを紹介しながら、「信じる」でも「遠ざける」でもなく、「《宗教》について知る」という立場について考察したい。	
	現代社会と人間	○	人が芸術作品を制作したり鑑賞したりするときには、単に個人個人の偶然的な「思いつき」だけでそれをするわけではなく、一定のルールがあるように感じられませんか。こうしたものは、音楽、絵画、文学といったさまざまな表現形式の間にどのような違いがあるのでしょうか。 また、こうした芸術作品の制作や鑑賞を通して、私たちは自分の知覚や行為のしかたを変容させていくことがあります。そうした変容を、私たちはどのように語ることができるのでしょうか。 本講義では、これらを考える手がかりを、美学・芸術論のテキストから考えてみます。その読解を踏まえて、学生がレジュメを切って、発表する機会を設けます。 なお、受講者がどれだけいるかでグループ発表か個人発表かいずれかになります。	
	現代社会と人間	○	「旅」という観点から現代日本の宗教や宗教的な実践について学ぶ。これにより、現代人にとって宗教がどのような意味を持っているのかを考える。さらに、宗教的な実践に関わる人々や聖地を運営している人々に注目し、多様な生き方があることを理解する。	
	現代社会と人間	○	フィールドワークやインタビューによって収集してきた実際のエピソードや語りについて、哲学の一種である現象学の知見に基づき考察するのが臨床現象学です。 本授業では、現代社会を生きた人間をめぐるさまざまなエピソード（児童虐待、発達障害、児童養護施設で暮らす子どもとケアワーカー、原爆の被爆者など）を紹介し、臨床現象学的な考察についてみなさんとお話をします。その多くは「生きづらさ」に関連するものになります。 本授業では、グループワーク（履修人数によります）や、毎授業後のリアクションペーパーの提出を課します。授業の目標④にあるように、単に授業を聴講するだけでなく、みなさん一人ひとりに当事者意識をもって考え、疑問を持ち、表現してほしいからです。	
	哲学への扉	○	このコースでは、ものごとの「もっともらしさ」「自明性」を根源的に考える批判的思考力を身につけるため、実生活における経験から哲学的問いを立て、解答を形成することを試みます。「言葉」をめぐる生じる「他者」との軋轢や、「制度」の中で抑圧される「個人」といったアクチュアリティのある問題設定からスタートし、ウィトゲンシュタインの哲学から問題の汲み取り方を学ぶことで、社会においてもっともらしいと考えられている知識のありようを分析する手法を身につけていきたいと思います。 具体的には、以下のような哲学の中心的テーマ、現代理論、現代的課題を取り上げます。 － 言語の哲学 － 悪い言葉の哲学 － 差別の哲学 － 会話の哲学 － 日常言語の哲学 － 政治哲学 － 正義の理論 － J・ロールズの哲学 － ケアの倫理 － 分析フェミニズム また、ウィトゲンシュタイン哲学の中心的なトピックとして、以下のものを取り上げます。 － 『論理哲学論考』（＝前期ウィトゲンシュタイン）における「無意味sinnlos」と「ナンセンスUnsinn, unsinnig」 － 『哲学探究』（＝後期ウィトゲンシュタイン）における「アウグスティヌス的像」	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	哲学への扉	○	「人間」概念は今様々な学術の分野で大きく揺れ動きつつあります。それに伴って、この「人間」が世界を「知ろう」とする、その営みも大きく変わろうとしています。この授業では、「人間」と「知る」をテーマとして取り上げ、現在論じられている議論を参照しつつ、これまでの哲学史における議論を敷衍しながら、「人間」が「知る」ことをめぐる議論がどのような行われてきたのかをさまざまな論点から学びます。 授業の形式は講義形態ですが、毎回簡単なグループディスカッションを行い、哲学史における議論を自分の身の回りのことと関連づけて考える練習をします。また、授業後にはリアクションペーパーを通じて、疑問点や講義内容を通じて考えたこと、批判などを挙げてもらいます。	
	論理的思考法	○	授業では論理学の基本事項を学んでいきます。理解を深めるため、例題を説明したあとで練習問題を解いてもらいます。成績は授業時間内に行う小テストによって評価します。	
	教育と人間	○	教育とは知識の一方向的伝達ではない。教育の場面では、教える側も教えることを通じていろいろなことを学ぶのであり、教えるものと教えられるものの間には循環的な関係が成り立っている。本講義では、そのような循環的な仕方での教育を身につけるために、「哲学的人間学」という方法を学び、「人間」というテーマを通じて実践する。 「人間」について考える時、多くの場合、言葉や社会の形成などの点で、ほかの「生き物」とは決定的に違うということが前提にされている。他方で、科学に従うならば、進化論的な意味での「ヒト」はほかの生き物たちと連続しているはずである。そこで本講義では、文系・理系という垣根を越えて、「ヒト」を「てつがく」することで、知らず知らずに前提としてしまっていることを明らかにし、あらためて「人間」について考え直す。そこでは、ほかの「生き物」との違いだけでなく、「ロボット」のようなものとの違いについて考えることも重要となる。 授業の冒頭では、前回の授業のリアクションペーパーからよせられた問題をとりあげる。また、授業では専門的な内容や用語について簡単な説明を行なった上で、テキストに付属している問題を中心に参加者で議論を行なう。	
	教育と人間	○	教育は、人間が自己を形成するための助けとなるものであると考えられています。しかし、この場合「自己」とはどのようなものでしょうか。答えは背景にある考え方によって変わってきそうです。したがって、教育の目的と効果・結果について議論するためには、社会と人間に関する確固とした視点が必要になります。 本講義では、古代から近現代までの（主に西洋哲学の）文献を扱い、その人間観と社会観を読み解き、教育との結びつきを検討します。 古代についてはプラトン、アリストテレスという二人の哲学者を中心に、「徳」というものが人間のあり方や生き方とどうかかわると考えられていたのかをたどってみたいと思います。 近代については18世紀という時代に注目し、この時代に様々な形で現れた「啓蒙」というものに触れ、そののちに、ルソーとカントという二人の哲学者が「啓蒙」に対してどのような立場で臨んだかを確認します。	
	歴史への扉	○	日本に大きな影響を与えてきたユーラシアの歴史を、古代から現代までたどる。生態環境や気候変動、交易や文化などのトピックを取りあげるとともに、ユーラシアと日本とのあいだで活動した人々を紹介する。	
	歴史への扉	○	中世から近世にかけてのヨーロッパの都市社会を取り上げ、さまざまな角度から捉えることで歴史的側面から社会・文化の多様性を学ぶとともに、歴史研究のさまざまなアプローチの可能性についても考えていく。	
	歴史への扉	○	本講義は、朝鮮半島の歴史について、時代ごとの主要トピックに注目し、朝鮮半島に軸足を置きつつも、中国や日本その他の地域にも目を向けることで、朝鮮史・韓国史の流れと歴史過程への眼差しを捨てるようにする。	
	歴史への扉	○	戦後の日本社会は敗戦の復興から高度経済成長、バブル経済、そして平成不況と、目まぐるしい速度で変化し、現在も変化の只中にある。その過程で人々の記憶から消え去り、現在ではその痕跡すら残されていないことが多い。本講義では戦争孤児や集団就職、昭和レトロブームなどの戦後日本社会で現れた諸現象の実態を、近年の研究成果に照して概説してゆく。	
	歴史への扉	○	天皇制について通史的に概観しながら、各時代における変容を理解する。その上で、現在の象徴天皇制がどのようにして成立したのかを認識し、各自の皇室論を作り上げる。	
	地域研究への扉	○	地域研究（エリア・スタディーズ）は、人文・社会・自然科学の学間的知を横断しながら、地域固有の論理を描き出す学問です。ただし、地域研究は地域の固有性のみを探求する学問ではありません。地域はつねに動態的であり、人や資本が移動しながら、自然の脅威に晒されながら、ほかの地域との関係に影響されながら変化しています。地域の変化を捉える方法として適しているのがフィールドワークです。本授業では、フィールドワークの方法論を学習するとともに、フィールドワークで得られた知見や文献資料・視聴覚資料を活用しながら、地域の文化・社会構造を理解し、現代社会が抱える諸課題へ対策が講じられるよう、考察していきます。	
	地域研究への扉	○	地域研究のための基礎的なアプローチの仕方、テーマ設定、データの収集方法などを学ぶ。地域研究のテーマに基づき、グループ内で分担して口頭発表を行う。今年度は、構成要素や時系列によってグループが設定される。テーマに沿って各自の分担部分を資料、文献などに基づきレポートにまとめる。	
	地域研究への扉	○	この授業では、ドキュメンタリー映画などの映像資料を使いながら、中東地域の様々な社会問題について紹介します。最終的に受講生は、中東地域について理解を深めるだけでなく、自分が属する社会や文化を相対的に捉え直すことも期待されています。 授業はアクティブ・ラーニング方式で進められます。読書課題を読んだあとに、グループディスカッションに参加し、最後にグループ発表も行います。また、CanvasLMS上でのディスカッションへの積極的な参加が求められます。	
	教育学への扉	○	「ポップカルチャー」に含まれる多様な作品とそれらを受容する私たちの感性は複雑に交差し、時代や社会のあり方を象徴的に浮かび上がらせることがある。本授業では、さまざまな「推し」をもち、あるいは同人誌を制作する研究者（アカデミック・ファン）が、「ポップカルチャー」を通して浮かび上がってくる現代社会のあり方や人間観を明らかにしたテキストを読み解く。そして、その読解を踏まえて、学生が実際に「ポップカルチャー」を通して教育や社会の諸問題を発表する機会を設ける。	
	教育学への扉	○	講義を通して第二次世界大戦の歴史やそこからはじまった戦後の平和教育について、世界の平和学の理論や日本の学校教育、博物館教育の現場の実践から学んでもらう。また、校外学習として実際に平和博物館の見学をし、それをふまえて学生が考えた平和教育を発表してもらう。	
	多文化の世界	○	講義では、まずグローバル化した現代社会における多文化的状況を、空間的パースペクティブからとらえる。次に、世界各地の事例を通じて多文化社会の現状を把握し、それぞれの相違点や共通点を理解する。その際に、現代社会の特徴的な現象の一つである観光をキーワードにする。具体的には、台湾、日本（ニッポン）、フランス、グアム、タイなどの国・地域を中心に講義をおこなう。	
	多文化の世界	○	この授業では、東南アジアの国々が、多様な文化や文明の影響を受けながら、国家を形成してきた経緯を学ぶとともに、教育の役割や課題を考えていく。 とくに、インドネシアの事例を主として取り上げ、どのように国内外の文化や文明の影響を受けながら、国家を形成し、国民の教育を行ってきたのか、他国との比較を通して考える。	
	多文化の世界	○	東京はいかなる街としてつくられているのか。その歴史と現在について、渋谷や池袋、原宿や大久保、秋葉原といったさまざまな街、盛り場に展開される文化を焦点に置き、社会学的に考えることを目指す。主題となるのは、1970, 80年代以降、東京という街ではいかなる夢が見られ、しかし押しつぶされてきたかである。	
	文化を生きる	○	私たちは、自分の育った社会の文化的価値観を自然と身につけ、それを通して異文化を捉えてしまう。本講義では、こうした人間に潜む自文化中心的思考を自覚することから始まり、文化の多様性を見出し、そして最終的に自文化において「常識＝当たり前」とされていることを相対化し再検討することを目指す。グローバリゼーションが進行し「異文化理解」の必要性が唱えられている現代社会だからこそ、「異文化を知り、自文化を相対化する」学問である文化人類学をぜひ学んで欲しい。	
	文化を生きる	○	授業ではまず、ニーチェのギリシア精神の受容と解釈を『悲劇の誕生』を中心に解説する。その際に、「ディオニュソスのなもの」という概念の把握を主眼とする。次に、ニーチェの中心思想である永遠回帰について、その内容を主に『ツァラトゥストラ』を通じて解説していく。最後に、「ディオニュソスのなもの」という概念に由来する「強さのペシミズム」とニーチェにおける「ニヒリズム」の意味の連関を、『道徳の系譜学』第三論文の解説を通じて明らかにし、初期ニーチェが把握したギリシア精神の解釈が、後期のニーチェ哲学に影響を与えた様相を分析する。	
	人権思想の根源	○	本授業は、私たちの身のまわりが存在しているジェンダー／セクシュアリティ問題について、じぶんごととして捉えることができる力、そしてそれらを解決するための力を養っていただくことを目的とします。そのために、私たちを「種としてのヒト」から人間としてのひとへと育て養う「教育」（必ずしも、学校教育だけが教育ではありません）、とくに「包括性教育（Comprehensive sexuality education）」の可能性に着目しながら学びを深めていきたいと思っています。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	人権思想の根源	○	「人権」は普遍的な概念とされるが、主に白人男性たちによって創案された成立当初は「女性の人権」が除外されていたことはとても有名な話である。本講義では、まず「人権」の歴史的経緯を把握したうえで、現代社会における具体的な諸問題を取り上げ、各問題と人権思想がどのように交差し、人権思想がいかなる展開をしてきたかを概観する。また本講義を通して、日常生活では見えにくい（とされる）社会的不平等や差別の問題について鋭敏な感覚と想像力を培う。	
	手話と人権を考える	○	ろう者を言語・文化的少数者として、手話を自然言語として捉え、その仕組み、構造を具体的にみていく。またろう者・手話と社会の関わりについて、教育、法、人権などの側面から扱う。	
	点字から考える人権	○	点字は、人類共有の文字である。決して視覚障害者だけが「文字の代わりに」使用する記号ではない。しかし、残念なことに、これは現在一般的な共通認識となっているとは言えない。この事実が、今日点字の主たる使用者である視覚障害者が置かれている人権をめぐる状況を如実に物語っている。この授業では、点字を新たな「自分の文字」として習得するとともに、文字と人権、そして更に広く「人権とは何か」について考えたい。	
	点字から考える人権	○	点字は、人類共有の文字である。決して視覚障害者だけが「文字の代わりに」使用する記号ではない。しかし、残念なことに、これは現在一般的な共通認識となっているとは言えない。この事実が、今日点字の主たる使用者である視覚障害者が置かれている人権をめぐる状況を如実に物語っている。この授業では、点字を新たな「自分の文字」として習得するとともに、文字と人権、そして更に広く「人権とは何か」について考えたい。	
	アジアの文化とことば	○	フィリピン言語状況やさまざまな文化のあり方には、かつての植民地支配下でのキリスト教布教や学校教育普及から、最近の移民や海外出稼ぎまで、幅広い出来事が関係している。これらを取り上げることでフィリピン社会の固有性と普遍性を考察する。またフィリピンで人々の日常を彩るさまざまな事物や年中行事などにもふれる。	
	アフリカの文化とことば	○	グローバル資本主義の席巻、開港、紛争、気候変動、食糧難や感染症といったさまざまな苦難にさらされながらも、アフリカ社会が育んできた独自の文化と社会的紐帯によって乗り越えようとしている姿を、観光、先住民、自然保護、感染症、教育、アフリカ文学、在米農業、牧畜文化、都市、携帯電話、SNSといった具体的なトピックから紹介します。	
	ヨーロッパの文化とことば	○	ラテン語は古代ローマ人の言語であり、現在ではラテン語を母語とする人はいませんが、ラテン語は東アジアにおける古典中国語（漢文）と同様に、現在に至るまでヨーロッパの文化・教養の源泉であり続けています。本講義では、主にこのようなラテン語とのかかわりを通じて、ヨーロッパの言語、歴史、思想、宗教、社会等について考察していきます。その際には、われわれがヨーロッパ固有の文化だと思っているものには、ヨーロッパ以外の文化圏の文化や言語に由来するものも多いということです。また毎回の授業では、受講者のリアクションペーパーのコメントを紹介するとともに、それに対して教員がコメントをすることによって双方向的に知的探求を行うことを目指したいと思っています。なお、ラテン語の知識は前提としません。	
	ヨーロッパの文化とことば	○	「ことば」とはなんのでしょうか？現代の私たちは例えば、コミュニケーションの手段として、あるいは自己を表現する手段として言語を捉えています。しかしヨーロッパの思想において、「ことば」は伝統的に、単なる意思疎通や思考の道具以上の深い役割を与えられてきました。本講義では、思想・宗教・文学といった多様なテクストを通じて、ヨーロッパ文化に現れた「ことば」が持つ多様な意義に触れていきます。初期キリスト教における「ことば」観を出発点として、中世ドイツ語で語られた神秘主義、近代のロマン主義や観念論、現代哲学に至るまで、ヨーロッパ精神史を貫いて流れる「ことば」をめぐる思索と一緒に紐解いてみましょう。	
	ラテンアメリカの文化とことば	○	最初に、ラテンアメリカの人権差別の歴史を学んだあと、日本にあてはめて講義します。 毎回、出欠を兼ねて授業についてコメントを提出してもらいます。 次の授業で、前回の授業の復習のためにコメントを紹介します。 授業の最後に、印象に残った受講者のコメントについてコメントを書いて提出してもらい、次の授業で紹介します。このように書面をつうじて学生同士の意見交換をおこない、議論を発展させていきます。	
	ロシア・東欧の文化とことば	○	日本とソ連で製作された映画を約8本鑑賞し、それぞれの特徴を考察する。	
	中東の文化とことば	○	アラビア語は、中東の国々で使用される諸言語のなかで主要なものの一つである。また、世界に広がるイスラーム教にとって最も重要な言語である。そこでこの講義では、アラビア語およびイスラーム教に関わる諸文化を通じて、中東社会の歴史と現在を学ぶ。アラビア語の初歩的な知識（文字や単語）も併せて紹介する。映像資料や音声資料も適宜活用する。	
	イタリアの文化とことば	○	西洋美術の三大巨匠とされるレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロがすべレネサンス期のイタリア半島から出たことから分かるように、ヨーロッパ文化史においてイタリアは長らく芸術発信地であった。いろいろな時代の美術作品を知ることで、イタリアの文化とことばへの理解を深めることができます。本講義では、はじめに、イタリアの主要な都市と代表的な芸術家を紹介します。そのうえで、キリスト教、古典神話、寓意擬人像の各分野から重要なテーマを毎回1つずつとりあげ、美術作品の題名や芸術家のイタリア語表記を調べたり、物語や図像の知識を深めたりすることで、鑑賞と読解の方法を学びます。	
	イタリアの文化とことば	○	講義の前半では、イタリアの歴史の概要を確認しつつ、14～16世紀のイタリア語の文章（テキスト）を取り上げる。文法や単語の意味を確認した上で、歴史的・文化的背景を学び、内容および時代精神について理解を深める。講義の後半では、ことばと視覚芸術が結びついた例として、古代のテクストを参照に制作されたルネサンス時代美術作品をとりあげる。	
	ドイツ語圏の文化	○	ヨーロッパの中心に位置し、ヨーロッパ経済をリードする国・ドイツが現在の形になるまでには、長い時代と様々な歴史的事件を経てきました。ハプスブルク帝国の中心として栄華を誇ったオーストリアやプラハも、現在まで独自の文化を形成しています。講義では、それぞれに異なる表情を持つドイツ語圏の国々の文化を、様々な観点から検証していきます。	
	ドイツ語圏の文化	○	ドイツ語圏の都市にかかわる特徴的な文化と生活をテーマとし、歴史的・精神史的背景に照らしてその特質を分析する。また、記憶の文化におけるドイツと日本の違いを、具体的な事例を参考にしながら検証し、ドイツ的な物の見方とそれが近隣諸国との関係に与えている影響を考察する。	
	フランス語圏の文化	○	Francophonieとfrancophonieの定義について理解する。 まずは、フランス人とパカンスについて歴史の変遷と現状について考察する。つぎに、フランスの重要な観光資源であるパリ、アーバンツーリズムの視点で学ぶ。海浜リゾートについては、その形成過程について歴史の変遷だけではなく文学作品等を用いて紐解いていく。フランス語圏としては主にカナダ・ケベック州を事例に「フランスらしさ」と観光について考察するが先住民との関係にも範囲を広げていきたい。授業計画の順番が異なることもあります。	
	フランス語圏の文化	○	文化を人間のあらゆる知の実践ととらえ、文芸や造形芸術「作品」だけではなく、宗教や政治まで幅広く考察の対象とします。配布する資料プリントのほかにもさまざまな画像・映像資料を利用しながら、「理性」「自然」をキー・ワードとして、大革命にいたるまでのフランス文化の変遷に多角的に迫っていきます。 この講義をとおして、我々の生活している日本という環境、あるいは諸君が慣れ親しんでいるであろうアメリカ文化とは異なる、フランスのもっている独自の文化や社会の形の意義を考える機会ができることを希望します。	
	スペイン語圏の文化	○	スペイン・ラテンアメリカ美術の代表的な作家と作品について講義します。	
	中国語圏の文化	○	租界のあった時代の上海は、中国一の国際都市、商業都市、文化都市であった。講義では上海の近代都市としての魅力を、繁華街だけでなく、路地裏や工場地帯、郊外の住宅街や文教施設、上海における東西交流、日本における上海表象などミクロな視点と、北京など他の中国の都市との比較などマクロな視点からそれぞれ紹介する。	
	朝鮮語圏の文化	○	講義では、古代から十九世紀後半までの朝鮮半島の歴史について、政治・文化史を中心に概観する。また日本列島や中国大陸など東アジア諸地域との文化交流についても紹介する。	
	朝鮮語圏の文化	○	韓国映画を素材として、韓国文化をさまざまな視点から紹介する。歴史劇から現代的なラブストーリーまで、広く取り上げてみたい。また、どのような作品が集まり、日本とどのような差があるかも意識して考察したい。授業ごとに数編の作品を部分的に紹介していく。ただし、短編映画については全体を視聴し、考察の素材とする。	
	子どもの権利から考える国際協力	○	この講義では、国際NGOセーブ・ザ・チルドレンの現場で活動する職員やその協力団体の職員をゲストスピーカーとし、さまざまな国際課題への視座を養います。授業では、グループワークやディスカッションを行うため、参加者の積極的な参加が求められます。	共同

別記様式第2号（その3の1）					（用紙 日本産業規格A4縦型）	
授 業 科 目 の 概 要						
（全学共通科目 総合系科目）						
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考	
	現代社会における言葉の持つ意味	○	・言葉の起源 ・人間に言葉が生まれたプロセス ・言葉は固定を叫ぶが、人生は流転することを考える ・原始釈迦仏教は楽になることを目指した。それを言葉で考える。 ・言語学者ソシュールの定義とチョムスキーの普遍文法とブラジル・ピダハンの特殊言語を相対化して見えてくること ※シラバスと実際の授業は異なる場合があります。（日々の報道内容の影響を受けます）			
	立教ゼミナール 1	○	授業はテキストを講読する形で進めます。担当者の学生がテキストに関する発表を行い、それに関して参加者全員で議論します。参加者の理解が深められるように、教員が必要に応じて重要な論点やキーワードを解説します。学生の理解度や興味関心を重視して進度を決定します。			
	立教ゼミナール 1	○	受講者をグループに分け、グループの中で毎週の発表者・司会者を決め、全員でディスカッションを行いながら、テキストを読み進めていく。映画やテレビドラマなどに映像化されている作品は、それらも鑑賞し、テキストとの異同やその効果を見えます。			
	立教ゼミナール 1	○	今日わたしたちが直面している「いのち」をめぐる倫理的諸問題の中からいくつかをとりあげ、検討を加えながら「人間の尊厳」を尋ねる。具体的には、参加者の関心に応じていくつかのグループをつくり、それぞれのテーマのもとに研究発表と発題を行って、その後に全体で討議を重ねる予定。テーマとしては、「強制不妊手術」・「優生政策」・「代理出産」・「出生前診断」・「遺伝子操作」・「脳死」・「臓器移植」等が考えられる。			
	立教ゼミナール発展編 1	○	最初は小さい碁盤（6×6路、9×9路の盤）を用いて、囲碁のルールを学び、その後正規の盤（19×19路の盤）を用いて対局。碁碁は模範の棋譜を使用し途中から自由に対局。対局後は、内容について、対局相手と振り返る。ペア碁（2人組で1局対局）の際は、途中ペアとの相談時間を設けて、双方の戦略の確認や戦法について相談することで他者と折り合いながら最終的に勝利を目指す。			
	立教ゼミナール発展編 1	○	日本語に関する議論は古くからあるが、日本語を用いた活動はすべて対象である。具体的に日本語と深く関わる職業の方をゲスト・スピーカーとしてと呼びすることで、日本語および日本語学の学際的な広がりや実社会との関わりについて、受講生が（自らの経験や盛り込みながら）議論を通じて理解を深めていくことになる。 本授業の履修者は全学部の学生とシニア世代の立教セカンドステージ大学受講生である。所定のテーマに沿って意見交換を行うが、意見交換には基本ルールがある。 1. 誰もが他者を傷つけない限り自由に何でも話せること。 2. 所属学部年齢の違いにかかわらず全員が平等であること。 3. 他者の発言を否定する意見を言わない。むしろ、質問して意見を引き出してあげる。自分と違う意見を受け止め引き受ける姿勢を持つこと。 以上である。ルールに基づく意見交換を進めることによって、世代の違いを理解し、互いの世代の利害を理解し、尊重することができるようになることも目標の一つである。 ゲストスピーカーには「演劇ファシリテーター」「辞書編集」「書籍・雑誌・ウェブ記事編集／ライター」「校閲」「教育哲学」といった方を予定している。			
	立教ゼミナール発展編 1	○	東日本大震災からおおよそ14年が経ちましたが、地震と津波により引き起こされた福島第一原子力発電所の大事故を受けて発出された緊急事態宣言はまだ解除されなままです。にもかかわらず、2022年の暮れに岸田前総理は老朽化して廃炉となる原発を新しい原発に建て替えるという政策の転換をしました。緊急事態宣言が出ているうちは、原発事故は継続中だと公式に認定されていると考えられるのですが、この政策転換をどう考えたらいいのでしょうか。 こういう矛盾しているようにしか見えない政策転換が大して注目もされずに、何となく原発事故が過去の問題となっているように思ってしまうのは、やはり原発事故がもたらしている問題についてあまりにも情報が少なすぎるためではないでしょうか。そこでこの授業では、原発事故にテーマを絞り、事故がもたらした余りにも多面的な問題のいくつか（全部はともてまじゃないけどフォローできません）について、テキストや資料を読んだり、ゲストスピーカーからお話を伺ったり、学生同士で討論することを通して学んで考えていこうと思います。 原発事故がもたらしている影響はあまりに大きいのですが、この半期の授業で受講生が自力で学んで考え続けるためのスタートラインをつくっていくのが目標です。			
	睡眠文化論	○	睡眠は、これまで人間の基本的な欲求に基づく行動であるとされ、もっぱら自然科学の領域において研究が行われてきた。しかし近年の研究では、これまで考えられてきた以上に睡眠には文化的要因が重要であることが指摘され始めている。この授業では、文学、文化人類学や社会学、比較文明論など様々な視点から、睡眠を文化的側面から考えることを目的とする。睡眠のしくみの基礎的な理解から始まり、睡眠の歴史的・地理的変異、現代の睡眠環境、寝具のこだわり、夢の民族誌、文学に見る眠りなどのテーマを扱う予定である		共同	
	ボランティア論	○	今日、価値の多様化とインクルーシブ社会が求められる状況において「ボランティア活動に求められているもの何か」について様々な視点を提供する。具体的には、共に生きることができると社会を目指す新しい価値や活動について様々な現場の第一線を担っている方々をゲストに招くことにしている。講義では、ボランティア活動についてボランティアを提供する側だけでなく、ボランティアのサポートを受ける側の気持ちも汲み取りながら、日常的活動から災害支援、海外での支援、障害当事者への支援や企業の社会貢献活動等の様々な切り口からボランティアの姿が提供される。受講者は、社会に潜む多面的な諸課題に対して能動的に活動する主体性を育むことができる。			
	哲学対話 in RIKKYO	○	この授業には毎回3名の教員が参加しますが、その役割は知識の伝授ではありません。導入的な説明のあとは、グループ・ディスカッションのファシリテータに徹します。 毎回、参加者には少人数のグループになつてもらい、その都度のテーマについて議論をしてもらいます。この対話が授業の主たる内容です。授業の終わりに振り返りを行います。 この授業での哲学対話には、厳守すべきルールがあります。詳細は授業時に説明しますが基本的なものは以下です。 ①何を言ってもいい。他人の意見はそのまま聴く。 ②他人を攻撃したり、他人の意見を否定したり、揶揄してはならない。 ③学年や学科の違いを超え、出席者はすべて対等の立場で語る。 こうしたルールを守った上で、「哲学対話」のやり方を理解することも授業の目的の一つです（実際に、「哲学対話」は高校・大学などだけでなく、企業やカフェなどでも取り入れられています）。 各回のテーマは、以下のように、学生生活の身近にある問題を取りあげます（変更する場合があります）。		共同	
	ジェンダー・宗教・社会	○	日本では自身を「無宗教」と考える人が増えているが、宗教が社会から消えたわけではない。「宗教」と認知されていないものの、宗教性を帯びた場所で行われる「慣習」もあれば、宗教を背景に形成され、世俗社会によって継承された価値観もある。しかし「無宗教」を自認することは、「宗教家・信徒」に対する姿勢を規定し、自分の中に、そして世俗社会に潜在的に残っている宗教性を認識する妨げとなっている。こうした隠れた宗教性に気づき、それが社会と個人のジェンダー理解に与える影響について考えることが本講義の目的である。そのために、ジェンダーを専門とする宗教学者や社会学者はゲストスピーカーとして招き、宗教内の役割分担、儀礼の力学、LGBTの人々による批判、改宗によるアイデンティティ転換などといった研究課題について発題してもらい、討議をする。また、女性聖職者との対話を通して、彼女たちが「保守的」とされる宗教組織に留まる理由やそれを変革する方法、そして一般社会に対する彼女たちの批判がどのようなものかを知り、ジェンダーと社会をめぐる課題への知識を深めることができるだろう。		共同	
	立教学院とポール・ラッシュ	○	立教学院とポール・ラッシュ博士の関わりについて、歴史、スポーツ、教育、理念の4つの視点から、ゲスト・スピーカーからの講義およびグループディスカッションから議論する。		共同	
	多文化共生社会と日本	○	日本国内の日本語母語話者（言語的マジョリティ）、日本国内で生活する日本語上級者（生活に不自由を感じていない者）として、日本における多文化共生の在り方や国内の大学の役割について批判的に語ることも、多文化共生社会とはどのような社会かをやさしい日本語で説明することができる。また、日本が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす言語的マジョリティがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきか、やさしい日本語で表現することができる。そして、そのような日本の多文化共生社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、やさしい日本語で提案することができる。また、授業を通して、やさしい日本語の運用能力を高め、具体的に基本的なやさしい日本語表現のみならず抽象的な事柄もやさしい日本語で伝えることができる。			

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	仏教の世界	○	この授業では、釈迦が生まれた「人の世界」のほかには、輪廻転生を含む「仏の世界」にも目を向けます。日本文化にはこの仏の世界をベースにしたものが多いので、それを知ることは今まで気づかないうちに読んだり見たりしていたものをきちんと理解することにもつながります。	
	日本の宗教	○	日本の宗教における著名な人物の物語・伝記等を取り上げる。『今昔物語集』などの説話集、伝記、絵巻などのテキストを読むことを通じて、日本の宗教のあり方を考える。	
	日本の宗教	○	本コースでは、宗教信仰と思想を中心に、日本における諸宗教（神道、仏教、道教、儒教など）について学んでいく。	
	日本文化と精神性	○	本講義は、近現代日本社会の精神史を読み解くにあたり、近代以前の思想や文化も参照しつつ、明治以降の日本社会において自己とはどのように考えられ、その向上が目指されてきたのかについて考察します。個人と社会、他者との関わり方を、文学・宗教・哲学・教育学・経営史・社会史・ジェンダー史などの多様な領域での議論を手がかりにして読み解くことで、多様な要素が組み合わさりながら積み重ねられてきた日本の文化と精神性の実態や変化について考え、多様なものの見方を身につけます。	
	日本文化と精神性	○	この授業では、近代的な国家としての「日本」とは何か、そしてそこで暮らす人々の「精神性」について、さまざまな角度から考えます。そこで本授業では主に、ことば・宗教・文学・メディアを手がかりに、ナショナリズムやジェンダーそして「自己形成」の観点から、日本文化と精神性について取り上げます。具体的には、神道や仏教などの日本の宗教文化、近代における日本語のあり方、宮沢賢治や三島由紀夫など近現代の主要な文学作品、メディアと人々の関わりを扱います。	
	日本文化と精神性	○	近代日本を生きた多くの青年たちは、雑誌・新聞メディアや講話会などを通して、キリスト教や仏教をはじめとした宗教ないしは宗教的なものを追い求めていました。本講義では、知識人青年層を惹きつけた複数の宗教者の人間理解を探り、それが青年たちの人間形成（自己形成）にどのような影響を与えたのかについて検討します。講義の後半部では、一般的には文学者として知られる宮沢賢治の仏教者と教育者としての側面に光をあて、彼の仏教信仰を背景とした人間形成観を考察します。	
	Japanese Ethnology	○	このコースは英語のクラスではありません。日本語、フランス語、英語で書かれた文献を参照しながら、英語で教える日本民族学のコースです。講義は教授が英語で行う。おもしろい習慣や人物を紹介し、学問的フレームと核となる知識を提供する。毎回の授業では、1人または数人の著者を（ほとんどの場合、年代順に）作品とともに紹介し、それぞれの文脈に並列させる。	
	Japanese Ethnology	○	The anthropological approach to the study of culture and English communication. Colloquial practices and Case studies from a variety of ethnographic materials (e.g. articles, journals, talk shows, and greetings) are used in exploring the universality of cultural expressions and social customs both in Japan and in other societies. (和訳) 人類学的アプローチによる文化と英語コミュニケーションの研究。様々な民族誌資料（論文、雑誌、トークショー、挨拶など）から口語的慣習やケーススタディを行い、日本や他の社会における文化表現や社会習慣の普遍性を探る。	
	World History	○	In this course, we will explore the entangled histories of Europe and Asia, East Asia in particular, up to the late nineteenth century. We will examine a variety of topics, ranging from political, social, and economic history to religious transmissions, intellectual and cultural exchange, warfare, and migration. The course comprises three elements: First, we will discuss recent academic approaches to world history and global history. Second, we will explore the interactions and entanglements between Europe, East Asia, and the Islamic world. Finally, we will discuss the nature of these exchanges and what they tell us about globalization, regionalism, and Eurocentrism in specific group discussion sessions. (和訳) この授業では、19世紀後半までのヨーロッパとアジア、特に東アジアの絡み合った歴史を探究する。政治、社会、経済の歴史から、宗教の伝来、知的・文化的交流、戦争、移民に至るまで、さまざまなトピックを検討する。この授業は3つの要素で構成されている。第一に、世界史とグローバル・ヒストリーに対する最新の学術的アプローチについて論じる。第二に、ヨーロッパ、東アジア、イスラム世界間の相互作用と絡み合いを探究する。最後に、このような交流の本質と、グローバリゼーション、地域主義、ヨーロッパ中心主義について、具体的なグループ・ディスカッションで議論する。	
	World History	○	This course will provide an outline of the major political, social, cultural, and economic changes that have occurred globally from the nineteenth century to the present time. Special emphasis will be placed on the impact of the actions of western powers in a global context. It will adopt a thematic and a broadly chronological approach and include the analysis of both primary (textual and visual) and secondary sources. Course themes will include Imperialism and the Origins of Anticolonial Nationalism, Cultural Modernism, Decolonization and Globalization. Students are required to complete assigned readings and prepare answers to discussion questions in note form before coming to class. They will also write one essay of 1,500 words. (和訳) この授業では、19世紀から現在までに世界的に起こった政治、社会、文化、経済の主な変化について概説する。特に、グローバルな文脈における西欧列強の行動の影響に重点を置く。テーマ別および幅広い年代別のアプローチを採用し、一次資料（テキストおよびビジュアル）と二次資料の両方を分析する。授業のテーマは、帝国主義と反植民地ナショナリズムの起源、文化的モダニズム、脱植民地化とグローバリゼーションなどである。受講生は、授業前に課題図書を読み、ディスカッションの質問に対する答えをノートにまとめる。また、1,500語のエッセイを1本書く。	
	Religions in Asia	○	主としてインド、東アジアの多様な宗教現象に着目し、ヒンドゥー教、仏教、儒教、道教、神道などが、歴史的・文化的に各地域でそれぞれどのように発展したかを探究する。中でも特に、インド以南のアジア諸国の社会や文化に幅広い影響を及ぼした仏教についてやや詳しく見ることになる。毎回の授業は主に講義形式となるが、適宜グループワークによる議論・発表も行う。各授業で学生は当該回のテーマについて、積極的に関心を持ち、質問や、グループワークにおける議論などをしてほしい。	
	Peace and Human Rights 1	○	プレゼンテーションやディスカッションにおいて、学生は他のクラスメイトと協調的にグループワークを行う。各テーマの学習を終えた後、学生は個人的な最終プロジェクトとして、様々な問題群から一つのテーマを選定し、該当するテーマに関するリサーチを行い、その成果を発表することが求められる。	
	Peace and Human Rights 2	○	プレゼンテーションやディスカッションにおいて、学生は他のクラスメイトと協調的にグループワークを行う。各テーマの学習を終えた後、学生は個人的な最終プロジェクトとして、様々な人権問題から一つのテーマを選定し、該当するテーマに関するリサーチを行い、自分の意見を含めた発表を行うことが求められる。	
	International Humanities 1	○	This is a course that explores two distinct, yet interconnected histories of religion in politics, with a focus on the transnational nature of World Christianity: (1) religious politics in the early modern transatlantic English diaspora; and (2) its reception and re-creation in modern Japan and China. We will begin with religious-political conformity in early modern England and America, and end with a thorough investigation of how major themes in religious politics in the Anglophone Protestant tradition profoundly shaped the role of religion in politics in China, Japan, and among East Asian communities in the UK and the US today. (和訳) 本講義は、世界キリスト教のトランスナショナルな性質に焦点を当てながら、政治における宗教の2つの異なる、しかし相互に関連した歴史を探究するものである。近世イギリスとアメリカにおける宗教政治的適合性から始まり、イギリス系プロテスタントの伝統における宗教政治の主要なテーマが、中国、日本、そして今日のイギリスとアメリカにおける東アジア共同体の政治における宗教の役割をどのように深く形成したかを徹底的に調査して終わる。	
	International Humanities 2	○	The course comprises an historical overview of major paradigm shifts in Western thought from roughly 500BC to the present. Beginning with Greek thought and Jewish and Christian Scripture, we will progress through the paradigm shifts from realism, then via nominalism, voluntarism, empiricism and individualism to relativism, noting the historical and political events which precipitated each shift and the ongoing implications for intellectual movements today. The course will be taught by mixed-media lectures, including video content, each ending with a guided group plenary to aid retention and to promote sharing of ideas. Evaluation will comprise (1) a mid-term report on 1st millennium thought, (2) an end of term report on 2nd millennium thought, and (3) a final, timed essay. (和訳) 紀元前500年頃から現在に至るまでの西洋思想における主要なパラダイムシフトを歴史的に概観する。ギリシア思想とユダヤ教・キリスト教の聖典から始まり、実在論、名目的論、自発論、経験論、個人主義を経て、相対主義へとパラダイムシフトを進めていく。この授業は、ビデオ・コンテンツを含むミクスト・メディアの講義によって進められ、各講義の最後には、グループでの全体討論を行う。評価は、(1)第1千年紀の思想に関する中間レポート、(2)第2千年紀の思想に関する期末レポート、(3)最終的なエッセイで構成される。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
多 彩 な 学 び （ 2 ） 社 会 へ の 視 点	Introduction to Gender Studies	○	This course focuses on gender from a multicultural perspective, and explores gender's intersection with other identities such as race, social class, and sexual orientation. Topics include but are not limited to the following: How is the concept of gender different in different cultures? How does gender affect a person's daily life and basic human rights? (和訳) この授業では、多文化的な観点からジェンダーに焦点を当て、人種、社会階級、性的指向など、他のアイデンティティとジェンダーの交差を探索する。トピックには以下が含まれるが、これらに限定されるものではない。 ・ジェンダーの概念は文化によってどのように違うのか？ ・ジェンダーは人の日常生活や基本的人権にどのような影響を与えるのか？	
	多文化社会と異文化コミュニケーション	○	Using short videos from Deutsche Welle, relevant issues related to interculturalism and multicultural society are discussed. The video material is analyzed in detail to introduce students to the key terms related to the topics and the logic of argumentation. In the middle and at the end of the semester, students give presentations on one of the topics discussed in class. (和訳) ドイツ放送 (Deutsche Welle) の短いビデオを使い、異文化主義や多文化社会に関連する問題について議論する。ビデオ教材を詳細に分析し、トピックに関連する重要な用語や議論の論理を紹介する。学期半ばと終わりには、授業で取り上げたトピックの一つについてプレゼンテーションを行う。	
	入門・経済教室	○	経済学の基礎的概念である市場の役割と限界を中心に、経済学および経済の基本的な考え方について講義を行う。さらに、その「市場の役割と限界」という視点から、現実が生じている経済の諸課題として「所得分配と貧困」に関連するテーマについて具体的なデータを用いて考察し、学生の理解を深めたい。	
	入門・経済教室	○	経済学はいわゆる狭い意味での経済問題だけでなく、さまざまな社会問題、例えば、結婚と少子化、教育と学力、犯罪とその抑止、男女平等、希少性動物の保護、人工知能が経済に与える影響など、を分析することができる面白い学問です。そのような経済学の基本的な考え方とその面白さを、経済学の予備知識や数学などのスキルを前提することなく講義し、わかっていただくことがこの授業の目的です。	
	入門・経済教室	○	ごみに価値はあるのか？失業はどうして生じるのか？経済学で環境問題は解決できるのか？経済学は人間の心理をどう扱うのか？自分の利益だけを考えて行動すると、社会はどうなるのか？貨幣はだれが作っているのか？さまざまな現代の課題を経済学はどのように理解し、解決しようとしているのか？経済学になじみのない学生にもわかるように、わかりやすく解説します。	
	統計情報で社会・経済を診断する	○	授業では社会、経済統計を分析するために必要なグラフの読み方や作成方法、単純集計、度数分布、代表値などの基本的な統計量の算出方法、データの読み取り方を学習する。その後、応用的な時系列データの取り扱いやトレンドのあるデータ、各種の経済指標の算出方法と解釈の仕方を学習する。後半回では、応用的なデータ分析の方法（GIS、テキストマイニング、データ分析コンペティション）を紹介し、実際に簡単な分析についての演習を行う。 本講義では実践的なデータ分析のスキルを養うため、1回の講義の後、1回の演習を行う。	
	景気・格差問題と統計情報	○	統計情報を利用して現代社会の現状を理解する方法を学ぶ。授業は講義と演習・議論を組み合わせて行う。毎回のテーマについて、得られた統計を読み解き、その特徴や課題を共有するスキルを養う。	
	法と社会	○	担当者が執筆したテキストブックを用い、その内容について詳しく講述する。比較法の基礎理論すなわち比較法原論が講義の中心となる。講義の後半は、比較法学各論として、アメリカ比較法学を代表するマティアス・ライマンの比較法史研究とイタリアの優れた比較法学者ジュゼッペ・モナテリの比較法方法論を取り上げる。	
	法と社会	○	法とは何か、また、裁判の役割は何か、という法の基本的な考え方を学ぶと共に、民法の基本的な知識や考え方を学ぶ。具体的には、映画や写真などの視聴覚教材も用いながら、民法の歴史や基本的な考え方を学ぶことになる。また、現実の裁判例の事案を素材として、受講生同士で議論をすることによって、より理解が深まるものとする。	
	政治と社会	○	この講義は、政治を扱った映画を見る講義ではありません。また「案事」と呼ばれるような講義でもありません。政治学の主要テーマや基本概念を理解するための補助線として映画を利用し、そうすることで現代社会が抱える様々な問題について考えていくタイプの講義です。 今年の講義は、「自由」とであると言われ、実際「自由」であるかのように思える私たちの暮らしの不自由な現実を直視していくかと思います。講義はまず、ヨーロッパ・ルネサンス期のマキアヴェッリから始まり、次に人間の自由とプロテスタンティズムの信仰との関連性について確認します。また、20世紀においては、生存権・社会権を保障することで実質的な自由を実現しようとした福祉国家と、政府に頼ることなく自助努力・自己責任で自由に生きることを求めるネオ・リベラリズムとの対立について考察します。その後、ヴェーバーによる官僚制批判を紹介した上で、全体主義に抵抗するために思考し続けることの大切さを説いたアーレントを取り上げていきます。また、権威主義的指導者や周囲の人々に同調することによって不安から逃れようとする大衆心理を分析したフロム、規律訓練という権力によって相応しい人間を生み出していく権力技術について論じたフーコーも紹介します。そして現在、SNSを介した情報操作によって民主主義は危機的状況に陥っていますが、その民主主義をどのように立て直していけたらよいかについても考察していきたいと思います。 このように現代社会を考える上で重要なテーマを取り上げることで、学生自身の社会を視る眼を育てていくことが、この講義のねらいです。また、自分で考え、それを文章として書くことが求められる「出力」重視の講義です。得られる単位は2単位だけなので、単位取得効率の点から言えば甚だ「コスバノタイプ」の悪い講義ですが、自らの考えを深め、それを他者にに向けて表現していくことを大切にしたい人には良い機会になると思います。	
	政治と社会	○	現代日本の内閣・国会・官僚制・利益集団・市民活動の政治的役割について基本的な知識を確認し、その上で権力の正当性、民主主義の有効性について討論をする。他国との比較も視野に入れる。学生には課題文献のリーディングと授業内での討論への積極的参加を求める。	
	グローバル社会における法と政治	○	この授業では、海外の動向に大きな影響を受けている、これまで国内の問題としては積極的に取り組まれてこなかったいくつかの問題を取り上げます。そこでは法的な視点から捉えなおして論点の整理を試みます。また、法的視点にかぎらずに倫理的視点、もしくは哲学的視点を含む一般的な視点に立つこと、そしてそこから物事を分解・整理して自己の考え方に照らし合わせて批評する、ということについても簡単に説明し、自分の頭で物事をとらえる練習を試みます。取り上げるのは、代理出産（生殖医療）、外国人労働者（移民問題）、そして現在問題となっている感染症対策に関する問題（公衆衛生倫理）です。これらについて「個人の自由」および「他者との公正な関係」という切り口から分析と検討を進めていきます。また、テーマと関連するビデオ視聴も行う予定です。	
	グローバル社会における法と政治	○	グローバル化がいわれてすでに30年以上が経ち、その間に格差社会、ポピュリズム、ジェンダー問題、新しい戦争、難民危機や感染症など不確実性が世界と日本を揺るがしている。今までの国際・各国の法制度やデモクラシーはそれに対する適応・解決が可能なのだろうか。あるいは新しい形の政治が台頭するのだろうか。本講義は多面的に変化するグローバル社会の政治の構造変化について、最新の信頼できる基本的文献をテーマ毎に選んで解説し、履修者の考察を促す。	
	グローバル社会における法と政治	○	法学を専門にしていらない学生を対象に、表現の自由などの基本的人権の保障や国会などの統治機構について諸外国の憲法との比較を通じて、日本国憲法の基礎的な理解を深める。	
	現代のビジネスを学ぶ	○	「現代のビジネスを学ぶ」うえで必要な経営学の基礎的な理論を解説したうえで、日本企業の実例を通して受講者の理解を深める講義を行う。 担当教員は、本学経営学科卒業の後、メガバンク勤務があり、組織運営の事例では本学と他大学の比較や金融業界を採り上げる予定である。	
	現代のビジネスを学ぶ	○	社会環境の変化、消費者の多様化を背景に、マーケティングは、一般企業はもちろん、自治体や学校さらには社会貢献活動を行う非営利団体などにとっても、その重要性は高まっています。 本講義においては、学生がマーケティング要素の個別戦略を理解し、多面的に考察できるようになることを目指します。 具体的には、マーケティング戦略の基本要素である製品戦略、ブランド戦略、価格戦略、流通戦略、プロモーション戦略についての基本的な知識を修得します。 そのために、日頃から同じような製品であっても売れている製品とそうでない製品について、なぜそのような差が生まれるのか、マーケティング視点をもって観察することが望まれます。	
	企業と社会	○	企業は、ヒト、モノ、カネという経営資源を活用してビジネスを行っています。この経営資源を調達する場所が労働市場、原材料市場、金融市場です。 本講義では、企業を取り巻く経営環境としてこの3つの市場と企業行動の関係に焦点を当て、企業の事例も取り入れながら、市場と企業の仕組みについて、理論と実際の両面から学習します。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	企業と社会	○	本授業は、「企業と社会」に関し、①企業の原則と存在意義、②CSRの登場と発展、批判、③CSRの最新動向と今後の企業経営の課題、の3つのテーマを中心に取り扱う。それにより、企業と社会の関係の歴史的变化、議論の状況、そして現代の企業社会関係の有り様を学び、最終的には、自分の考えをまとめる。	
	企業と社会	○	本講義は、経営戦略論、組織理論、マーケティング論等の基礎的理論を解説したうえで、日本企業の実例を通して受講者の理解を深める講義を行う。 担当教員は本学経営学科卒業の後、メガバンク勤務経営がある。講義における事例研究では本学と他大学の比較を探り上げる予定である。	
	現代社会と環境	○	環境破壊における過去の教訓に学び、「足尾銅山鉱毒事件」、「水俣病事件」、そして「フクシマ」を貫く現代社会の問題の本質に迫る。特に、「3.11」から5年を待たずして原発が再稼働された今日、「現代社会と環境」の視点から「フクシマ」の意味を明らかにすることを試みる。また、「真の文明とは何か」を多面的に問う作業を通じて、問題の解決に向け、農業という人間の営みのもつ可能性へと議論を接続する仕方、今後の日本社会の展望を探りたい。	
	情報と倫理	○	デジタル技術の発展や人工知能（AI）等を利用した新たなサービスやビジネスが、私たちの生活や社会をどのように変えていくのか、基本的な知っておくべき知識や、情報倫理に関わる時事的な話題について解説する。受講者は、多様な考えを知り、思考を深めるとともに、自分なりの考えを検討する。	
	メディアと人間	○	今から一世紀にさかのぼる間に、私たちの社会生活は、多様なメディアとの関係において展開してきた。近年のインターネットの普及などによりさらに新たな状況の展開を迎える中で、この講義では、メディアと社会の関係を、コミュニケーションの観点により基礎からとらえ直すことを目的とする。そのことは、社会学を通して社会の将来を見通す手がかりともなるだろう。	
	文化と社会	○	社会学の視点から都市と地域を捉える基本的な視座を検討した後に、今日の都市の文化に関わる特徴的トピックを取り上げる。授業計画は以下に示すものを予定しているが、受講生の関心などにより変更する場合がある。	
	現代社会の解説	○	この授業では、現代社会の実象を科学的・客観的に把握するための社会調査の基本的方法を学んでいく。具体的には、①社会調査の概要、②質問紙調査（量的調査）の設計、③データの整理・分析の方法といったことを学び、さらに公式統計の活用や質的調査の方法についても学習する。特に質問紙調査に関しては、実際に質問項目を作ったり、データをパソコンで集計・分析したりすることの基本を学ぶ。	
	いのちの尊厳と福祉を考える	○	本講義では何人かの実践家、臨床家の事績をたどり、そこから「いのちの尊厳」をめぐる視点を抽出し考究する。次に、現実の障害福祉の状況を取り上げながら何が課題になっているのかを説明する。そして、「いのちの尊厳」がソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）の実現と表裏一体のものであることを講じる。	
	コミュニティをデザインする	○	地方自治体における地域コミュニティについて、必要な概念、その制度や政策、その主体、他国との比較、そのあり方等について講義する。	
	コミュニティをデザインする	○	講義全体を通じて、社会の中でマイノリティの立場に置かれやすい人びとから見た「コミュニティ」の実相を、一つの軸として設定する。 講義形式の授業ではあるが、可能な限り学生のみなさんからの要望等を取り入れ、映像の視聴や双方向コミュニケーションが図れる授業を工夫し、さまざまなコミュニティで行われている実践をリアルに紹介したいと考えている。	
	コミュニティをデザインする	○	「福祉国家とは何か」への理解が、自分や自分をとりまく人々、そしてコミュニティにとってどのように関わるのかを、福祉国家の歴史的・文化的観点から検討する。社会保障、貧困、仕事と労働、子育て、教育、高齢化社会、国際紛争、移民や難民といった幅広い問題を検討等の現代社会が抱える諸問題を知ることから出発する。少人数によるディスカッションを行い、それをクラス全体での議論に発展させる。その議論を受けて、自らがどのようにそれらの社会問題に向き合うのかを考察する。	
	観光学への誘い	○	本講義では、観光という多層的な社会現象について考える際の基礎的な視座を学ぶ。観光の歴史、観光と文化、観光と宗教、観光とメディアなど、観光関連問題について国内外の事例を交えながら紹介し、観光学という学際的な学問領域を概観する。	
	観光学への誘い	○	観光学の総合的な理解に向けて、観光を歴史、文化、政策、産業、人々の行動といった多様な側面からの視座を学ぶ。	
	異文化コミュニケーションを考えるA	○	異文化コミュニケーション論における概念、モデル、理論を用いて、異なる関係性や文化的背景にある人々のインターアクションを言語・非言語の視点から分析的に読み解くことで、日常的に見られるコミュニケーション行為や社会問題について批判的に考察していく。	
	異文化コミュニケーションを考えるA	○	まず学問の意義について体系的に論議し、続いてコミュニケーション論の原理的位置づけについて詳らかにする。その後、コミュニケーション論と心理学と言語学、これら三者の間の連関について一瞥した後、愈々本題に入り、言語学の基礎論を体系的、原理論的、全体論的に論議する。すなわち、（一）意味と形式、（二）意味論（文法など）と語用論、（三）言及指示と社会指標、（四）言語の意味範疇と文化的意味範疇、（五）直示（ダイクシス）や転換語（シフター）と非直示・非転換子、（六）システム・センテンスとテキスト・センテンス、（七）テキストとコンテクスト、（八）言語と言語変種、（九）地域方言と社会方言、（十）言語構造と普遍文法、（十一）語彙と文法、（十二）象徴と指標と類像、（十三）共時態と通時態、などといった、言語学の基礎を成す最も根本的な弁別的諸範疇の本義を可能な限り明確化する。	
	異文化コミュニケーションを考えるB	○	主に、日本のイスラームを具体例として取り上げる。 日本人がイスラームをどのように知り、理解し、そして受容していくのかその過程を見ること、また日本のイスラームに関する現状や課題を知ることによって、異文化コミュニケーションのあり方と意義について考える。 また、授業のまとめとなる最終レポートでは、イスラームに限らず学生自身が興味のある文化・社会・宗教・言語などについてテーマを設定して、異文化コミュニケーションについて考える。 なお、本講義の第1回目および第2回目の授業回では、文化交流の実践としてスロバキアの学生と意見交換する。具体的に、双方の文化紹介と異文化とは何かについて相互に意見交換する。実際に体験することによって、異文化コミュニケーションのあり方と意義について学生自ら考える機会を持つことになる。	
	異文化コミュニケーションを考えるB	○	異文化理解を深めるため、フィールドワークの手法やフィールドワークで得られた知見を実践につなげる方法を学ぶとともに、参加型学習を積極的にとりいれて発展してきた開発教育におけるフィールドワークの理念・歴史を学ぶ。開発教育とは、いわゆる発展途上国における開発を巡る問題をその歴史的背景とともに理解し、自分たちが暮らす社会との関係性のあり方を考え、持続可能な社会づくりに参加することを目的とした教育である。本科目で扱う事例は途上国でのフィールドワークが中心となるため、一般的に途上国が抱える開発課題の基礎的な内容や用語についても解説を加える。 本講義では、国内外で厳しい環境に暮らす人びとに寄り添い、対話し、課題解決を模索する、「現場を自らの足で歩いて考える」ための手法としてフィールドワークを位置づける。現場で何が起こっているのかを的確に把握し、現場に適した解決策を提案するためにも、フィールドワークの経験が不可欠である。フィールドワークの意義と手法を多面的に学んだのちに、複数の事例を用いて受講生同士のグループワークを実施する。模擬的にフィールドワークを体験することで、フィールドワークへの関心を深め、実践的なトレーニングの場とする。	
	異文化コミュニケーションを考えるC	○	中世から現代までの西洋における生活文化・風俗を衣食住の観点よりそれぞれ歴史的に俯瞰し、衣（ファッション、宝飾品）、食（テーブルウェア、道具）、住（建築・家具・室内装飾）の知識を得るとともに、専門用語の翻訳の意義について考察する。授業においてフランス語、イタリア語、英語などヨーロッパ言語を必要に応じて列挙するが、履修にあたってこれらの外国語が既習である必要はない。	
	異文化コミュニケーションを考えるC	○	この講義では、次の3点に重点をおいて授業を進めていく。 ・ 通訳翻訳の基本的概念と原理、状況的・文化的文脈に基づく通訳翻訳を考察する ・ 絵本や小説、映画とその他通訳事例について、その目的に応じた最善の翻訳方略や通訳アプローチを検討する。 ・ 各自で調べた実践事例から方略を分析し、グループ発表およびレポートの形でまとめる。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	経験から学ぶ、世界とつながる	○	核の歴史について、特に被害者の視点や声に着目しながらグローバルな観点から学びます。広島・長崎への原爆投下を出発点に、世界中で行われた核実験に向け、またウラン採掘や各種核施設で繰り返されてきた核被害を取り上げます。この過程で、「安全保障」「植民地主義」「フェミニズム」「資本主義」などについても議論を深めていきます。 この授業では、講義、ディスカッション、ロールプレイ、グループワークなどを組み合わせながら、大きく3つの「問い」を考えていきます。 ①広島・長崎を伝えるとはどういうことか ②“核の時代”の被害者は“被爆者”だけか ③社会は変えていけるのか 授業の各回の具体的な内容は、履修者の興味関心やスキルに応じて決めていきますが、基本的な史実をおさえる講義の他に、以下のような演習を予定しています。 ●核被害当事者の証言を聞く ●各種ロールプレイ（例：原爆ドームの保存をめぐる関係者会合、原発誘致に関する住民会議） ●国内外の戦争や核に関する博物館の展示内容の調査 ●核を題材とした映画や文学作品、芸術作品の鑑賞およびレビュー ●市民団体によるキャンペーンやアクションを調べる ●新聞への投書を行う 授業全体を通して、読む・書く・考える・意見を述べる機会を多く設けます。	
	対話を学ぶ	○	近年、様々な分野で導入が進んでいる生成型AIの課題や、自動翻訳機能などを題材に、人間の対話がどのような本質や可能性を持っているかを再発見する。その上で、紛争予防・紛争解決などのスケールで、対話が果たしてきた役割を振り返り、平和構築のツールとしての対話の可能性を学ぶ。授業の最終では、地域社会や日本国内に目を向け、良質な対話を妨げる要因を理解するとともに、それらを乗り越えて対話を実践できる市民になるための視座を養う。	
	大学と現代社会	○	グローバル社会では、より多様で複雑な判断が常に求められる。本授業では、そうしたグローバル社会で生き抜くうえで必要な「学ぶ力」「考える力」「信頼関係を構築する力」について理解を深める。さらに、そうした力を大学教育においてどのように培っていくかについても考えていく。	
	大学と現代社会	○	教育機能と学生生活を中心に、大学の歴史と現状、およびそれらの背後にある／あった社会の状況について学習します。またその過程で、履修者が自身の学生生活について省察する機会を適宜設けます。 授業の方法については次の通りです。 ①授業は講義、映像資料の視聴、グループワーク、ディスカッション等によって構成します。 ②授業参加者の対話（ともに話し、聴き、読み、書く）を重視します。 ③履修者数を考慮の上、グループ発表の機会を設けます。	
	パレスチナ問題の歴史と現在	○	世界で最も解決するのが難しい紛争の一つと言われる、「パレスチナ・イスラエル問題」。2023年には、ガザへの大規模空爆が起こり、数万人もの無辜の市民が殺され、190万人もの人々が非難を余儀なくされています。しかし、こうした大規模空爆は、2023年に始まったわけではありません。75年もの間、パレスチナ人は土地を奪われ、占領されてきました。しかし何故問題が解決されないのでしょうか？ 歴史的背景を紐解きながら、戦争について、宗教について、平和や正義について、国際政治について、多角的に考える機会を作りたいと思います。 講師は 2012 年 8 月～2017 年 2 月までパレスチナ自治区で国際協力 NGO 職員として活動していました。東エルサレムに住みながら、ガザ地区と西岸地区で子どものための保健事業を実施。また現在は、他の国際NGOでガザの人道支援事業などを担当しており、ガザにはこれまでに 100 回回訪れています。パレスチナ問題を知りたい方、平和、正義、宗教、政治、国際協力等に興味のある方、是非受講してみてください。	
	世界の中のロシア	○	本授業において、ロシアに関する知見を幅広く紹介する。まずソ連時代を簡単に概観し、次いでソ連解体後のロシアについて、政治体制、経済の転換とその帰結、ネ이션形成とナショナリズム、ジェンダー秩序、人口動態、外交・安全保障政策という重要な論点に分けて論じる。	
	ドイツ語圏の社会	○	第一次大戦からドイツ再統一までの歴史を、戦争を軸に、時代の記録としての映像資料を多用しながら検証していきます。	
	フランス語圏の社会	○	現代フランスの社会は、多様な人びととのあいだの複雑な関係から成り立っている。ブルジョワジーや農民といった社会階級の違いだけではない、フランス植民地主義の歴史に深い関連をもつ移民や難民や海外領土住民の存在は、フランス社会のあり方にさらに大きな複雑さをもたらしめている。この授業では、このような多様性を理解するために、映像資料を用いつつ、それぞれの人びととの生について解説を行う。さらに、多様な背景を持つ人びとがお互いにどのような社会関係を構築しようとしているかを考察する。これらを通して、重層的なフランス社会像を描き出す。	
	フランス語圏の社会	○	絶対王政を否定した大革命により共和国となったフランスは、民主主義の祖国ともいわれます。この講義ではそのようなフランスの近代市民社会のあり方を、さまざまな側面から、ときには歴史をたどりながら考察します。配布のプリントのほかにもさまざまな画像・映像資料を利用しつつ、大革命以降のフランス社会の変遷に多角的に迫っていきます。 この講義をとおして、我々の生活している日本という環境、あるいは諸君が慣れ親しんでいるであろうアメリカ社会とは異なる、フランスのもっている独自の文化や社会の形の意義を考える機会となることを希望します。	
	スペイン語圏の社会	○	スペイン近現代の政治・社会・経済の歴史上、主要な出来事を時系列に沿って概略を論ずる。その際、最新の学術的成果が反映される。	
	スペイン語圏の社会	○	近年「カタリニア独立」が話題となったように、スペイン語圏にはこれをまとめる求心力と独立などの形をとって噴出する遠心力とが働く。過去の例を通し、ふたつの力の狭間にある社会の特色を見出す。	
	中国語圏の社会	○	東アジアにおいて政治・経済・安全保障の面で大きな力を有する台湾・中国・日本を取り巻く諸問題を取り上げて解説し、討論を行う。台湾関連の論述に時間割いた内容となっており、通常の「中国論」とは異なるアプローチをとる。時間配分は、①前回のコメントペーパーの紹介と質問への回答10-15分、②当日の主題解説60分、③質問受け15-20分、④コメントペーパーの記述10分、を目安とする。	
	朝鮮語圏の社会	○	総合的学問として、全ての学問の大きな柱を形成する社会科学分野に関わる内容を扱いながら蓄えた論理的思考をもとに、今後各自の専門分野に東北アジア、とくに「日韓」という視座を応用・実践していただければ幸いです。	
	朝鮮語圏の社会	○	授業は主として講義形式でおこないます。講義のなかではとりわけ、韓国男性の美容実践や身体に焦点を当て、経済・社会・文化・ジェンダーとどのように交差しながら変化しているのかを探索します。また、映像作品を通じて現代社会が抱える問題について理解を深めます。なお、授業計画は変更される可能性があります。	
	社会調査入門	○	社会調査の目的や方法論について概説しつつ、量的調査と質的調査、統計的調査と事例研究法などの類型についても整理し、社会調査史や調査の種類と事例あわせて調査倫理について学ぶ。調査票調査やフィールドワークなど、データの収集から分析までの諸過程に関する基礎的な事項についても概説する。	
	社会調査の技法	○	10回分を量的調査、5回分を質的調査法のデータ収集法にあてる。量的調査に関しては、調査の企画・設計から、標本抽出や調査票の作成、実査の方法、データ作成や分析の考え方などを扱う。質的調査に関しては、調査の企画から、フィールドノート作成など収集データの整理の技法までを扱う。	
	データ分析入門	○	度数分布表、比率の計算、クロス集計、クramerのV、代表値、分散と標準偏差など変数の分布の特徴を表す方法や指標、共分散と相関係数など変数間の関係の強さを表す指標を学び、因果関係と相関関係の違いなど、データの解釈に至る方法について理解する。また、官庁統計など個票データ以外の統計的資料や時系列データなども扱いながら、データの社会科学的な含意をも理解できることをねらう。	
	データの科学	○	統計的データの集計・分析に必要な、基礎的な統計知識について学ぶ。記述統計学と推測統計学のうち、主に推測統計学に重点を置いたカリキュラムを展開する。確率論に基づいた推測統計学の基本的な考え方を身につけ、平均値や中央値、最頻値や分散、標準偏差といった基本統計量、共分散や相関係数といった変数間の関連性の強さを表す指標、クロス表の関連指標と独立性についてのカイ二乗検定、単回帰分析、偏相関係数と交絡変数の統制、重回帰分析などについて学ぶ。また、t検定や分散分析といった検定論についても学習する。統計学の応用的な内容を学習し、1変量、2変量を扱った分析手法から、多変量解析の入り口となる3変量を扱った分析手法についても一部学習する。	
	多変量解析入門	○	多変量解析の基本的な考え方と代表的な手法を習得する。特に、(1)予測・要因探求のための手法および(2)複雑な情報をまとめ分類するための手法について解説を行う。さらに、統計解析言語Rを用いた分析演習を通じて、これらの手法の活用事例や役割を理解する。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	データサイエンス入門	○	データサイエンスの基盤となる統計学および数理の基礎、データサイエンスの応用事例、機械学習の概念を修得する。具体的には、データ活用の現状とそこでの課題を学ぶとともに、必要とされる統計学や数理の基礎を学び、簡単な分析実習も体験する。さらに、最先端の手法や生成AIを中心としたについて人工知能についても触れる。	
	データサイエンス応用	○	データサイエンスおよびAIの歴史を学び、データサイエンスの応用事例、機械学習や深層学習の理論を学ぶ。具体的には、機械学習（教師あり学習、教師なし学習）、深層学習、強化学習について学び、その理論と活用方法を理解し、実際の分析実習も体験する。さらに、最先端の手法や生成AIを中心としたについて人工知能についてもその活用のために必要な知識を得る。	
	Introduction to Statistics 1	○	The following contents will be studied; frequency table, making statistical graphs, basic statistics as mean and variance, correlation and causation, analysis of variance and so on. (和訳) 度数表、統計グラフの作成、平均・分散などの基本統計、相関・因果関係、分散分析などを学ぶ。	共同
	Introduction to Statistics 2	○	The following contents will be studied; Basics of statistical inference, population and sample, estimation, statistical test and so on. (和訳) 統計的推測の基礎、母集団と標本、推定、統計検定などを学ぶ。	共同
	Introduction to the social survey	○	While providing a summary of the purpose and methodology of social surveys, we will organize the types of quantitative and qualitative surveys, statistical surveys, and case study methods, and students learn about survey ethics together with the history of social surveys and types and examples of surveys. We will also outline the basic issues of processes from data collection to analysis such as questionnaire surveys and fieldwork. (和訳) 社会調査の目的と方法論を整理しながら、量的調査、質的調査、統計調査、事例調査などの種類を整理し、社会調査の歴史、調査の種類と事例とともに調査倫理について学びます。また、質問紙調査やフィールドワークなど、データ収集から分析までのプロセスにおける基本的な事項を概説する。	
	Introduction to Multivariate Analysis	○	多変量解析の基本的な考え方や代表的な手法を習得する。特に、(1)予測・要因探求のための手法および(2)複雑な情報をまとめ分類するための手法について解説を行う。さらに、統計解析言語Rを用いた分析演習を通じて、これらの手法の活用事例や役割を理解する。	
	国際情勢を読み解く	○	中東での戦闘激化、ロシアによるウクライナ侵攻の継続、アメリカ国内の分断、北朝鮮の核開発、欧州の混乱など、世界は激動している。その現状を、歴史にさかのぼることによって理解を深める。積極的な質問を歓迎する。	
	立教ゼミナール 2	○	医学と医療の進歩は世界一の長寿国となることに貢献してきたが、一方医療技術の進歩は倫理的問題を孕むことになり抑制される一面もある。本ゼミナールでは、こうした倫理的問題を孕む医療や医療制度として「生殖医療」「終末期医療とAPCやアドバンス・ディレクティブ」「尊厳死と安楽死」「赤ちゃんポスト」を探りあげる。さらに今後の病気の治療の構造を大きく変える可能性のある「臓器移植と再生医療」「在宅医療の推進」をテーマとして考察を深める。 我が国は、1989年に降いたる団塊の世代が後期高齢者となる2025年度に向けて新たな社会体制を整えるべく制度改変を行ってきた。その2025年度に、実際に社会全体は持続可能な体制を整えることが出来ているだろうか。超高齢社会のただ中を生きていくものとして、現在社会を医療という観点から切り込み今後の医療との付き合い方を考察してみたい。	
	立教ゼミナール 2	○	授業担当者はすでに3回（2018年、2019年、2022年）、観光学部で指導するゼミが主催の展示会「トーヴェ・ヤンソン展」を立教大学図書館で開催しています。いずれも大学の広報課や図書館が様子を伝える記事を発信していますので、閲覧して参考にしてください。たとえば以下は第2回展示会（池袋図書館）の紹介記事です。 < https://www.rikkyo.ac.jp/news/2019/11/mknpps000001lncj.html > < https://library.rikkyo.ac.jp/_asset/img/archives/exhibition/exhibition3/2019-1-1.pdf > 今年度前期は、この授業「立教ゼミナール2」の履修生と、観光学部の4年ゼミの履修生等との、両者が協働して展示の検討・準備・制作の作業を重ねます。今年度後期の作業は（原則としては）4年ゼミ生たち（だけ）が引き継いで進めますが、展示の完成作業や展示会の運営作業に関心のある人たちについては、作業への（授業履修ではないものの）自由な継続参加を心から歓迎します（と言うのも、展示会には種々の「ムーミンのプロ」たち（出版関係者等）や「ムーミンのファン」たち（「ムーミン公式ファンクラブ」会員等）が来訪しますので、作業への参加を通して、これら「プロ」や「ファン」とコミュニケーションを深めることを強くお勧めします）。展示のテーマや内容（現時点での「案」）については、授業計画を参考にしてください。	
	立教ゼミナール 2	○	言葉の意味の構造や機能、言葉と認識の関係などに関する色々な説を紹介しつつ、それらの観点から日常生活に見られる表現・メッセージなどの例について考えてみる。学生には、事例を授業に持ち寄って自らの見解を述べたり討論したりすることも期待される。	
	立教ゼミナール 2	○	This course will deal with various issues facing the global socio-economy focusing on the railway . Students will gain an understanding by looking at a long span of time. The course will not be limited to Japan, but rather will have a broad perspective, obtaining a bird's-eye view of the global economic history. In addition, the students will be given time to present reports they have created and an opportunity will be provided for them to discuss specific issues. (和訳) この授業では、鉄道を中心にグローバルな社会経済が直面する様々な問題を扱う。長いスパンで見ることで理解を深める。日本に限定せず、広い視野で世界の経済史を俯瞰する。また、各自が作成したレポートを発表する時間を設け、具体的な課題について議論する機会を設ける。	
	立教ゼミナール 2	○	モビリティや流動性が高まると同時に、私たちはどこかに住み生活するという営みを避けることはできない。その空間的な場としての「コミュニティ」における共創は、リベラルな価値観（個人主義）が極まっているからこそ、あらゆる分野において求められている。しかし、その限界や困難もまた露呈している。政治、経済、福祉、防災、交通。このゼミナールでは、コミュニティの基礎単位である町内会にスポットを当て、その歴史と今日的意義と限界を再考する。さらに、コミュニティに学際的にアプローチする方法論である「地域学」にもスポットを当てる。担当を決め、レジュメを作成し、報告を行う。そのうえで、各自が該当箇所を読み込んで、ディスカッションを進め、理解を深めていく。	
	立教ゼミナール 2	○	アジア各国の政治と経済は目覚ましい変化を遂げており、最早かつての、先行する日本を追いかけるアジアという見方は完全に通用しなくなっています。この情勢を理解するためには、テクノロジーの変化など、最新の動向を踏まえた研究に依拠する必要があります。本ゼミナールでは、アジアの政治・経済の最新状況に詳しい、若くて優秀な執筆者を迎えたテキストを、指定された要約担当者による要約を踏まえて全員で理解し、まずアジアの政治・経済の正確な知識を共有します。続いて、それを踏まえて、日本のアジアとの向き合い方について議論します。	
	立教ゼミナール 2	○	担当教員が中心となって基礎的な金融論の各トピックを授業内で紹介していく予定です。また、毎回ゼミ生グループによる財務諸表分析の文献輪読・プレゼンテーション、および課題を与えることを通じて、学習内容の理解を深めていきます。	
	立教ゼミナール発展編 2	○	トラベルライティングを執筆し、知的刺激を与えあう場や他者との異なる視点に気づく場を設ける。また、実際に出版物を制作することにより、企画立案から執筆、編集までの過程を体験できるようにする。 ゲストスピーカーとして、旅行図書の編集プロデューサーやトラベルライティングの専門家を招請し、出版の意図や企画立案の方法、誌面構成の検討や取材方法、トラベルライティング執筆の注意点、編集の際の留意点等についても講義を行う。	
	立教ゼミナール発展編 2	○	本講義では、前半で「生活者発想」や「ブランドデザイン」の基本概念および関連する重要事項について学び、後半では実習課題を通じて、生活者発想に基づくブランドデザインのプロセスを体験してもらいます。 本授業はマーケティングの最前線で活動している広告会社の現役社員が担当します。そのため教科書の枠を超えた実践的かつ学際的な「生きたビジネス発想法」を学ぶことができる点が、本講義の大きな特徴でもあります。 また授業で学んだことを活かし、学外で実施される大学生のためのブランドデザインコンテストへの参加機会なども提供します。	
	立教ゼミナール発展編 2	○	クラスメイトのそれぞれの音楽体験（鑑賞・演奏したことのある歌や楽曲などの紹介）を共有し、その体験や楽曲を時代の文脈に置き直して読み解きます。また、ディスカッションを通してそれぞれの音楽体験の相異点と共通点を整理します。その上で、日本のポピュラー文化の継続と変遷についての文化論的考察を行います。毎回いくつかの楽曲を聴き合いながら、分析と考察を進めます。また、議論や考察の内容は記入式シートやリアクションペーパーなどで言語化し、学修成果としてまとめます。	

別記様式第2号（その3の1）					（用紙 日本産業規格A4縦型）	
授 業 科 目 の 概 要						
（全学共通科目 総合系科目）						
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考	
	立教ゼミナール発展編 2	○	グローバル都市空間の現実と基準を定め、多文化化の現状や課題について比較を試みる。近年における多文化主義に関する理論的・政治的・実践的議論を踏まえながら、北米、豪州などのメトロポリタン都市空間における多文化化の歴史と現状、多文化共生とかわる政策や実践事例を紹介する。そして、視野を東アジア地域に移し、日本と韓国での現状を検討し、北米・豪州における現状との比較考察を試みる。さらに、「新型コロナパンデミック」の影響が、世界の多文化・メトロポリタン都市においてどのように異なっていたかについても、現地のメディア報道などで調べる。			
	立教ゼミナール発展編 2	○	本科目では、マレーシアで使用されている歴史教科書（マレー語版、華語＝中国語版）の日本語訳を教材とし、第二次世界大戦期における日本占領についての記述や戦後マレーシアの歴史の中で日本占領がどのように記憶されていたかについて検討していくことを主たる活動とする。その際に、①マレーシアの多民族性が歴史の記述にどのように影響しているか、②戦後マレーシアの日本との関係と歴史記述との間にどのような関連性が見られるか、③これらの教科書がマレーシアにおける戦争の記憶にどのような影響を与えているかについて重点的に議論を行う。そのうえで、今後さらに関係の深まる東南アジア地域との関わり可能性について考えていく。教回にわたり、マレーシアの大学で教鞭をとる日本人研究者、日本の大学で教鞭をとるマレーシア人研究者、日本・マレーシアの経済協力の現場で働く実務家をゲストに迎え、ともに議論を行っていく。			
	立教ゼミナール発展編 2	○	エコロジー経済学、持続可能性、プラネタリー・バウンダリーおよびウェルビーイングに関する講義を通して基礎を学ぶと同時に、毎回のディスカッションをして各テーマについての理解を深めます。また、ゲストスピーカーとの対話をとおして、持続可能なウェルビーイングを作り出す事例や可能性、課題を学びます。受講生はグループに分かれて話し合いをし、このコースでの学びを広める方法や、身近な適用例を考えてコースの終盤で発表します。また各受講生は、与えられたテーマについてコース中に1回発表します。			
	立教ゼミナール発展編 2	○	本講義では、受講生は講義テーマについて深掘りし、自ら判断し、評価できる力を身につける。就職後も役立つ記事の読み方、情報収集のコツを身につける。毎回、講師による解説だけでなく、受講生が世界や日本の社会の課題について考えたこと、関心を持ったことなども適宜、発言してもらう。			
	R S Lゼミナール	○	授業の前半は世界各国の武力紛争に焦点を当て、平和教育がどのようなアプローチで紛争予防・紛争解決をめざしているかについて考察を深める。後半はマイノリティや社会的弱者の人権に目を向け、平和で公正な社会の実現を阻んできた差別などの社会的要因を掘り下げ、身近に潜む構造的暴力と、その解消方法を探る。			
	立教卒業生の「社長の履歴書」	○	現役の社長として、現在、会社経営のかじ取りをしている立教大学卒業の社長をお招きする。大学時代をどう過ごしたか、起業した経緯や会社経営の難しさ、どのような人材がこれからの社会には必要か、大学時代に何をどのように学べば、などの様々な論点について、立教大学の先輩として後輩の学生たちに率直な考えを伝えてもらう。学生と社長との討論や意見交換を積極的に行えるよう、インタラクティブな形式で授業を進める。受講生それぞれがキャリアやリーダーシップなどを考える講義である。		共同	
	グローバルシティ・ソウルを読み解く	○	グローバル都市としてのソウルにおける諸現象を観察するために、様々な場所を訪ねながら、その背景を解説する。ソウルにおける社会・文化的な諸現象を、どのような枠組みで分析しうるのかという理論枠組みを提示する。各回の講義では、ソウルのある場所を訪れて、そこでの顕著な現象を取り上げ、研究・分析のアプローチを紹介していく。ソウル広場・光化門広場、ソウル駅、北村、鐘路、新村、弘大、明洞、仁寺洞、恵化洞、東大門、梨泰院、大林洞、ソレウル、汝矣島、土岩洞デジタルメディアシティ、聖水洞、江南といった観光スポットとしても馴染みのある場所を訪れ、政治、世論、階層、伝統、ポピュラーカルチャー、ジェントリフィケーション、外国人労働者・移民、多文化化、社会的排除、貧困・格差、ジェンダー、文化資本などの社会学的テーマを多く取り上げる。		共同	
	SDGs×AI×経済×法	○	本授業のテーマに関し、それぞれの分野で活躍されている方をゲストスピーカーとしてお招きし、最先端の話をしていただきます。SDGsに関心がある学生はもちろんのこと、SDGsと技術・経済社会・法制度などとの関係を学問横断的に学びたい学生や、実務での取り組みを知りたい学生、将来の進路選択の参考にしたい学生などにとって、有意義な内容となるように授業を構成しています。なお、本授業は、SDGs推進の人づくりとして知られているESD（持続可能な開発のための教育）の第一人者である阿部治先生のサポートを受けています。		共同	
	SDGsと現代社会の課題とその関わり方入門	○	地球規模課題の解決のためのアクションに取り組む企業、NGO/NPO、地方自治体からゲストスピーカーが登場し、最前線の活動を紹介します。各回の授業では、気候変動、紛争、排他などの理由により脆弱な立場に置かれる人々の状況と、私たちの暮らしがどのようにつながっているかを理解する。また、ゲストスピーカーが投げかける問いや提案から、SDGsを多角的に考察し、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない社会」の実現に向け、ひとりひとりが取り組めるアクションを探る。			
	Knowledge, Design, and Innovation	○	In "Knowledge, Design, and Innovation", you'll be at the forefront of tackling complex challenges. You'll delve into organizational knowledge creation theory and design thinking, applying these in a real-life project. This journey will not only equip you with innovative problem-solving skills but also deepen your understanding of creating human- and planet-centric solutions. Collaboratively, we'll explore how these innovations intersect with the concept of a "good life," encouraging personal and professional growth in a world that demands multidisciplinary approaches. This course is your pathway to becoming an agent of change in an ever-evolving landscape. 《和訳》「Knowledge, Design, and Innovation」では、複雑な課題に取り組む最前線に立つことができます。組織の知識創造理論やデザイン思考を掘り下げ、実際のプロジェクトに応用します。この旅では、革新的な問題解決スキルを身につけるだけでなく、人間や地球を中心としたソリューションの創造についての理解を深めます。また、学際的なアプローチが求められる世界において、これらのイノベーションがどのような「良い人生」のコンセプトと交差し、個人的・職業的成長を促すかを共同で探求します。このコースは、日進月歩の環境の中で、変革の担い手となるためのあなたの道しるべです。		共同	
	大衆演劇の世界	○	日本の近代化は、その手本である「西洋」に向かうという方向性をもつために、目標との距離によって評価されずに影を薄め、忘れられていったものも多い。しかしグローバル化の影響が浸透するに従い、こうした忘れられたものが復活する現象がみられるようになった。人々の日常生活の中にあった「行楽」としての大衆娯楽・大衆演劇もその内に含まれる。人々の身近な娯楽であり、消耗品でもある大衆的な芸能を通じて、近世文化と近代文化、近代化とグローバル化、各々の属性と相違について考える。 （オムニバス方式／全14回） コーディネーター：基幹教員以外の教員（細井尚子／全14回出演） （基幹教員以外の教員（中野正昭）／3回、基幹教員以外の教員（毛利眞人）／3回） 喜劇・軽演劇・音楽劇 （基幹教員以外の教員（輪島裕介）／3回、基幹教員以外の教員（星川彩）／3回） 大衆的上演文化としてのポピュラー音楽など （基幹教員以外の教員（下野歩）／3回、基幹教員以外の教員（山崎朋）／3回） 大衆演劇の現在 （基幹教員以外の教員（後藤隆基）／3回、基幹教員以外の教員（斎藤雅文）／2回） 新派の展開、現在地 （基幹教員以外の教員（濱口久仁子）／2回） 女性による芸能		オムニバス方式	
	持続可能性の理論と実践	○	エコロジー経済学と生命倫理学を参考に持続可能性概念を再確認し、それを基にエネルギー、気候変動、人口減少下の持続可能性という現代社会の抱える問題点を批判的に考察します。その後、地域から持続可能性を実現していくための考え方や実践例を学びます。実践例としては、農的暮らしや社会的連帯経済、エネルギーの自給、ケアの自給、地域で職を作るなどを取り上げる予定です。		共同	
	持続可能な公共サービス提供体制の構築	○	専門領域の異なる藤井（地方自治論）と上林（公務労働社会学）の二つの切り口から基礎的な知識の提供を行うとともに、それを踏まえた上で普段はアクセスすることができない公共サービス提供の現場で活躍するゲスト・スピーカーから本音ベースのリアリティ溢れる実践に関する講演を聴くことで、受講生はわが事として公共サービスの提供の現状への認識を深めていく。 これらを基にして最後にディスカッションにより受講生が自らの考えをアウトプットしていくことにより、持続的な社会システムの構築を自発的に思考していく資質を身につけていくような科目運営を目指す。		共同	
	福島原発事故と社会の持続性	○	この授業では、2011年3月の福島原発事故がもたらした現在進行形の諸課題を学際的かつ対話的に分析・考察する。避難指示区域の解除と復興事業が進んできたが、公害・環境汚染にかかわる社会問題が持つ時間幅は長く、現在も帰還困難区域は残り、補償からこぼれた人びとがいる、裁判が続いているなど、被害は残っている。事故後の条件不利地化やエネルギー政策など、検討されなければならない問題が山積している。こうした諸問題を、ゲストスピーカーとともに考えていく。なお、授業計画の順番には変更もありうる。		共同	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	世界を動かす変革のチカラ	○	今日の社会では、政府や企業から相対的に自立した「市民」の活動がグローバルからローカルにいたるまで多種多様な領域で活動実績を積み重ね、社会を確実に変化させてきた。本授業では社会を動かす主体としての市民のあり方を市民活動家や自治体議員の取り組みを紹介しつつ検討していくとともに、こうした市民活動の記録を収集・保存・公開・分析する取り組みについても検討する。このために、多様な現場で活動を展開している市民またはこうした活動に造詣の深い研究者をゲストスピーカーとしてお招きして、多様な市民活動の可能性を検討していくこととしたい。 履修に際しては、以下の点に注意すること。 1)本授業では戦後の多様な社会問題や市民活動を取り上げる。受講生が日本史・世界史の現代史や公民の基礎的知識（高校教科書水準）を持っていることに加えて、今目的な問題について新聞等の報道に高い関心を持ち情報収集していることを前提とする。 2)ロールプレイ、ワークショップ、資料読み合わせなどの多彩な手法の参加型授業を展開する予定である。また、ゲストスピーカー等への質問の時間も確保する。受講生には授業に積極的に参加することを求める。	共同
	世界経済と日本	○	世界でもっともコントラスト（光と影、明暗の差異）の強烈な大陸、それがラテンアメリカ・カリブ海地域である。だが、地理的に遠いこともあり、この地域の歴史・社会・経済について、日本人が知る機会はおおくない。この授業では、この地域がいかに世界や私たちと密接にかかわっているかを理解するため、資料や動画を活用し、解説をおこなう。それにより「周辺」から見えてくる世界経済の姿や課題を考察する。	
	世界経済と日本	○	グローバリゼーションの進展により、日本経済の動き、ひいては私たちの生活が、目には見えにくい世界経済の動きといかに密接につながっているのか理解するために、幾つかの映画を取り上げて、世界経済論の基礎的な知識と考え方について講義する。	
	日本国憲法	○	日本国憲法につき、その歴史的背景、起草者意図、判例等を参照したり、諸外国との比較にも目配りしつつ、概論的講義を行う。	
	日本国憲法	○	日本国憲法の各章について、概説的に講義する。	
	日本国憲法	○	動画教材を利用しながらオンライン形式で授業を行う。近代憲法から日本国憲法の制定、象徴天皇制、平和主義について学んだあと、基本的人権に関する問題について、身近な事例を通じて講義する。具体的内容は、「授業計画」に示す。なお、基本的人権に関する個別テーマについては、できるだけタイムリーな問題を取り上げ、掘り下げて検討を行いたいと考えるので、授業計画にあげた内容とは異なる場合があること、授業の進路状況によってはテーマが多少前後すること、時間の都合でテーマが限られることのあることをあらかじめ了承いただきたい。	
	近代日本社会と人権	○	最も理解しにくいであろう部落差別問題を軸にしながら、明治維新から現代までの近現代社会の差別問題のありようを問う。部落問題を身近なものとして理解するために、ドキュメンタリーや文学作品の映画なども取り入れて解説する。可能な限り、ゲストスピーカーを招いて議論する場も設けたい。	
	近代日本社会と人権	○	日本外交のために生じてきた人権問題、あるいは、日本外交が解決をしようとしてきた人権問題などを広く概観する。各問題やそれぞれの当事者の状況・立場を理解した上で、なぜその問題が生じたか、これまでに各国政府や国際機関、市民社会等が解決のためにどのような努力を払ってきたか、今後どのような解決方法がとられるのか等について検討する。	
	日本の「多文化」政策を問い直す	○	21世紀に入って以降、注目され続けている多文化社会が形成されるまでの経緯を「歴史」「それぞれのエスニックグループ」「日本社会の認識」といった側面から捉え直した上で、政策上の変遷と課題を解説する。	
	Modern Japanese History 1	○	Modern Japanese History 1 offers a comprehensive introduction to the history of gender in modern Japan. The course emphasizes developing a broad understanding of how gender relations have shaped modern Japanese society, with a particular focus on women's experiences. Students will engage with recent English-language scholarship by historians, anthropologists, and political scientists, exploring transformations in gender roles and the diverse experiences of women throughout modern Japanese history. （和訳）日本近現代史1では、近代日本におけるジェンダーの歴史を包括的に紹介する。この授業では、特に女性の経験に焦点を当てながら、ジェンダー関係がどのように近代日本社会を形成してきたかを幅広く理解することに重点を置く。学生は、歴史学者、人類学者、政治学者による最近の英文研究に取り組み、日本近代史におけるジェンダーの役割の変容と女性の多様な経験を探求する。	
	Modern Japanese History 2	○	Our work begins with close reading of the assigned texts and the textbook. Lectures are designed to supplement the required readings; seminar-style discussions will allow students to clarify questions raised in class, discuss assigned reading, and prepare for assignments. Each class is designed to introduce students to the intellectual tools necessary for historical inquiry. Participants are expected to engage in small-group discussions that are structured to elicit questions about each session's reading assignment. While learning the facts of Japanese and East Asian history, students will be required to engage in critical reading of primary and secondary sources to develop analytical thinking and writing skills, and to learn the use of electronic and print-based research tools. Class presentations and essays provide an opportunity to synthesize material in preparation for the studies, which may draw on any and all required reading, class lectures, and seminar discussions. Ultimately, the aim of this course is to develop students' interests in the history of Japan and East Asia and to equip participants to fulfill their potential. Training critical readers of texts will be one of the most important purposes of this course. （和訳）授業は、課題図書と教科書を精読することから始める。講義は必読文献を補足するために行われ、ゼミ形式のディスカッションでは、授業で出された疑問を明確にし、課題図書について議論し、課題の準備をする。各授業は、歴史的探究に必要な知的手段を学生に紹介するようデザインされている。参加者は、各回の課題図書に関する質問を引き出すように構成された少人数制のディスカッションに参加することが求められる。日本史・東アジア史の事実を学びながら、一次史料や二次史料を批判的に読み、分析的思考力や記述力を養い、電子的・印刷的リサーチツールの使い方を学ぶ。授業でのプレゼンテーションやエッセイは、必読書、講義、ゼミでのディスカッションを活用し、研究の準備として資料を総合する機会を提供する。最終的に、この授業の目的は、日本および東アジアの歴史に対する学生の関心を高め、受講者がその潜在能力を発揮できるようにすることである。テキストの批判的読者を養成することは、この授業の最も重要な目的のひとつである。	
	Japanese Politics and Economy 1	○	この授業では、現代の日本社会で働き、生きていくとはどういうことなのかを、紋切り型のステレオタイプにとらわれることなく考察します。 「仕事」を通して、人は日々の暮らしを生き抜くだけではなく、自己の存在価値やアイデンティティを確立しようとする。この授業では、「仕事」という場で、ひとりの人間がどのように外の世界と折衝活動を行うのか、その政治性と経済性を検証します。 授業では、まず文献を通して以下のことを考えます：（1）人間の生活における仕事の意義と重要性；（2）日本における仕事の民族誌的な記述。これにより「働くこと」の機能を理解するとともに、学生はインタビュー調査の対象者2名を探し始めます。学期中に2回実施する「働く人へのインタビュー調査」は、ひとりで行うか、他の学生（履修者の多くが国際学生）とペア、あるいはチームを作って行うかを選ぶことができます。 学生は、文献調査、そしてインタビューを通して、現代日本の文化的・社会的・歴史的コンテキストにおける仕事についての「個人の語り」を分析していきます。研究結果は最終レポートとしてまとめ、授業内で発表します。	
	Japanese Politics and Economy 2	○	Japanese society developed on an isolated archipelago, which, over the course of centuries, remained largely closed off from external influences. This historical seclusion led to the emergence of unique social networks and distinct roles for various segments of the population. These roles are reflected in the responsibilities assigned to different social groups, movements, and also genders, and they continue to shape Japanese society today within the family unit, the military system, the nation, and the workplace. The course traces the evolution of political and economic institutions, beginning with the ancient imperial system and up to the challenges Japan's economy is facing in the current turbulent 21st century. While the course provides a historical background and analysis of the development of institutions, religions, and ideas, the main emphasis of the lessons is focused on the formation of the modern Japanese nation from the Meiji period, the post-WWII reconstruction, and the rapid changes occurring in contemporary Japan. （和訳）日本社会は孤立した列島で発展し、何世紀もの間、外部の影響からほとんど遮断されたままだった。この歴史的な鎖国が、独自の社会的ネットワークと、国民のさまざまな層に対する明確な役割の出現につながった。これらの役割は、異なる社会集団、運動、そして性別に割り当てられた責任に反映されており、家族単位、軍事システム、国家、職場において、今日も日本社会を形成し続けている。この授業では、古代の天皇制から始まり、激動の21世紀に日本経済が直面している課題まで、政治・経済制度の変遷をたどります。 制度、宗教、思想の発展について歴史的背景と分析を提供する一方で、授業の主眼は、明治期からの近代日本国家の形成、第二次世界大戦後の復興、そして現代日本で起きている急速な変化に置かれている。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Japanese Relations in Asia 1	○	This course employs two perspectives to understand the histories of modern Japan in the context of East Asia and globalization from the early 20th century to the present. It examines how modern boundaries, identities, and cultures shaped in a rapidly emerging modern world order. The course also looks at how individuals respond to and are shaped by the variety of modernity(ies). (和訳) この授業では、20世紀初頭から現在に至るまでの東アジアとグローバル化の文脈における近代日本の歴史を理解するために、2つの視点を用いる。 20世紀初頭から現在に至るまでの東アジアとグローバル化の文脈における近代日本の歴史を理解する。この授業では、急速に台頭する現代の世界秩序の中で、近代の境界線、アイデンティティ、文化がどのように形成されたかを検証する。急速に台頭する現代の世界秩序の中でどのように形成されたかを考察する。また、この授業では、個人がどのように近代に対応し、近代によって形成されたかを考察する。	
	Japanese Relations in Asia 2	○	This course explores the rise, expansion, collapse, and legacy of the Japanese colonial empire from the late 19th century through the end of World War II. Focusing on Japan's rule over Taiwan, Korea, Manchuria, and parts of Southeast Asia, the course examines the political, economic, and cultural dimensions of imperialism. Students will engage with primary and secondary sources to understand the ways in which Japanese colonialism shaped modern Asia and how scholars have interpreted these historical processes over time. Special attention will be given to themes of race, nationalism, economic exploitation, and resistance movements within the empire. (和訳) この授業では、19世紀後半から第二次世界大戦終結までの日本の植民地帝国の興隆、拡大、崩壊、そして遺産を探究する。台湾、朝鮮半島、満州、東南アジアの一部に対する日本の支配に焦点を当て、帝国主義の政治的、経済的、文化的側面を検討する。学生は、日本の植民地主義がどのように近代アジアを形成したのか、また、これらの歴史的過程を学者たちがどのように解釈してきたかを理解するために、一次資料や二次資料に取り組みます。特に、帝国内の人種、ナショナリズム、経済的搾取、抵抗運動などのテーマに注目する。	
	Japanese Society1	○	The course focuses on the evolution of Japanese society, its institutions and its guiding values over history up to our modern age. By studying concrete examples drawn from daily life, students will gain a deep understanding of social shifts, cultural practices, religious beliefs, and political institutions. Case studies will cover various aspects and phenomena seen in daily life, such as the socio-political uses of manga/anime, the functions of Buddhist temples and Shinto shrines, and the interplay between public and private identities. Students will gain a deep understanding of the core values that unify and shape Japanese society. A special emphasis is put on the fast changes that have been taking place in socio-economic life from WWII up to the contemporary age. This is a multi-disciplinary course. It incorporates theories from various fields of study, diverse analytical approaches and an array of interpretive frameworks. Students are encouraged to develop and present their own perspectives and original ideas throughout the course. (和訳) この授業では、現代に至るまでの日本社会の変遷、制度、価値観に焦点を当てます。日常生活から引き出された具体的な事例を学ぶことで、社会の移り変わり、文化的慣習、宗教的信念、政治制度について深く理解する。マンガ・アニメの社会的政治的利用、仏教寺院や神社の機能、公的アイデンティティと私的アイデンティティの相互作用など、日常生活で見られるさまざまな側面や現象をケーススタディとして取り上げます。学生は、日本社会を統合し形成している核となる価値観について深い理解を得る。 第二次世界大戦から現代までの社会経済生活の急速な変化に特に重点を置く。 これは学際的な授業である。様々な研究分野の理論、多様な分析アプローチ、解釈の枠組みを取り入れます。 受講生は、授業全体を通して、自分自身の視点や独創的な考えを発展させ、発表することが奨励されます。	
	Japanese Society1	○	この授業では、日本において平和問題として論じられている話題、たとえば広島・長崎、沖縄、福島、近隣アジア諸国との関係、また国内の社会・経済問題を取り扱う。担当教員は、非政府組織（NGO）で平和・軍縮問題にかかわっている自身の経験をもとに授業を進め、数名のゲストスピーカーも招聘して、NGO活動のケース・スタディを行う。受講生は、授業におけるディスカッションに積極的に参加し、次回に向けて割り当てられる宿題に取り組むことが求められる。以下の授業計画の順序や細部は一部変更になる可能性がある。	
	Japanese Society2	○	戦後70年を迎えた2015年の夏、多くの市民から反対の声があがる中、日本の国会で安保関連法案が通過した。そして翌年の5月、1945年8月以来初めての現職アメリカ大統領としてバラク・オバマが広島を訪問。多くの日本人の目に、この訪問は歴史的な出来事として映り、その過程は最初から最後までNHKで全国に生中継されたのである。「戦後」という概念を生き続けているまもなく戦後80年を迎える日本だが、文化、社会、政治のさまざまな側面で、いまだに「戦後」のように変わっているのだろうか。この講義では、仕事、家族、ジェンダー、教育など、現代社会を分析する上で重要なトピックを取り上げ、それらが戦後日本の文脈でどのように論じられてきたかを考察する。さらに、憲法9条や安保関連法案、3.11とその影響、皇室、沖縄、原子力、移民、そしてCOVID-19など、近年話題になった日本特有のトピックについても考える。 上記のトピックについての世論は二極化しているため、まず問題の本質を理解するためのテキストを読み、次に学術的・一般的な言説（国内外を問わず）において、それらがどのように描かれ、分析されているかを議論する。 また、学生は日本に関連する研究テーマをひとつ選び、セメスター・プロジェクトとして調査するが、その過程で小さなフィールドワークを行う必要がある。（詳細は授業で説明） 学生は、1学期を通して積極的な「探求者」であることが期待される。そのためにも出会った人々と交流し、時事ニュースを追いかけ、興味を持ったトピックを追求すること。セメスター・プロジェクトには教室の内外で得たデータを取り入れ、授業内で発表する他、期末レポートとして提出する。	
	Tokyo Studies	○	This course consists of reading, researching, writing and presenting papers by students as well as lectures by a lecturer. The lecturer will introduce a variety of literature on Tokyo, including history, geography, society, culture, architecture, and urban planning. Each session, students are required to read the readings, prepare a summary of the readings, and give a presentation. Students will also create a booklet titled "Tokyo Keywords" based on their own research. (和訳) 本講義は、学生による論文の読解、調査、執筆、発表と、講師による講義で構成される。講師は、歴史、地理、社会、文化、建築、都市計画など、東京に関するさまざまな文献を紹介する。毎回、受講生はリーディングを読み、その要約を作成し、プレゼンテーションを行う。また、各自が調べた内容をもとに「東京キーワード」と題した冊子を作成する。	
	Tokyo Studies	○	This course is a general introduction to students who are interested in the studies of Japanese history, culture from Edo to Tokyo. This course will consist of lectures, and city walking tours (five times). Students will also give group or individual presentations during the semester. (和訳) この授業は、江戸から東京までの日本の歴史・文化研究に興味のある学生を対象とした一般入門授業です。この授業は、講義と街歩きツアー（5回）で構成される。また、学期中にグループまたは個人でプレゼンテーションを行う。	
	Humans and Other Animals	○	Every day we are deeply involved with animals in various ways. Animals can be pets, popular food sources, or used in medical experiments. As our lives are deeply intertwined with non-human animals, thinking about animals is linked to thinking about the world today and ourselves. The class will cover topics such as zoos, pets, livestock animals, and traditional food culture. Students will be required to work with their classmates to conduct research and give three group presentations during the semester. (和訳) 私たちは日々、さまざまな形で動物と深く関わっている。動物はペットであったり、人気の食料源であったり、医療実験に使われたりする。私たちの生活が人間以外の動物と深く関わっている以上、動物について考えることは、今の世界や私たち自身について考えることにつながります。授業では、動物園、ペット、畜産動物、伝統的な食文化などのトピックを取り上げる。 学生はクラスメートと協力して研究を行い、学期中に3回のグループ・プレゼンテーションを行うことが求められる。	
	Food Cultures and the Acceptance of Japanese Food in the World	○	世界の様々な食文化を探究し、日本食がどのように伝わり、受け入れられてきたかを考える。アメリカ、ヨーロッパ、アジアの事例を取り上げ、それぞれの地域の食文化を学び、またそれらの地域で日本食がどのように受容されてきたかを分析する。そして、将来的にそれぞれのマーケットで日本食をどのように紹介していくかについても検討する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Business Communication	○	Students will study, discuss, and work together to understand key issues related to business communication, with a focus on issues related to Japan. (和訳) 履修者は、日本に関連する問題を中心に、ビジネス・コミュニケーションに関連する重要な問題を理解するために、共に学び、議論し、協力する。	
	Introduction to Tourism Studies	○	授業の前半(2回～8回)では、観光に関する基礎概念と、近年の観光産業の発展について国連世界観光機関の統計資料を通して紹介する。後半(9回～14回)では、主にスリランカや日本の事例とグループディスカッションを活かし、観光のインパクトおよび持続可能な観光について考察する。	
	Introduction to Tourism Studies	○	The course will allow students to learn keywords, basic concepts, and topics studied in tourism studies. During the course of this process, students will be trained to analyse various problems and challenges around tourism by considering cases that can be found in their own communities and neighbourhoods. By doing so, students are encouraged to think how tourism can contribute to the development of local communities, what is sustainable tourism, and how each one of us can contribute to them. The course will be based on lectures, but there will be group discussions and students will be asked to submit reaction papers at the end of each session in order to nurture their abilities to think, organise thoughts and express opinions in writing. (和訳) この授業では、観光学のキーワード、基本概念、トピックを学ぶ。 学ぶことができます。その過程で、観光をめぐるさまざまな問題や課題を、自分の住む地域や身近な事例をもとに分析する力を養います。 その過程で、観光をめぐるさまざまな問題や課題を、自分たちの住む地域や近隣の事例をもとに分析する力を養います。 を分析する訓練を受ける。そうすることで、学生は、観光が地域社会の発展にどのように貢献できるか、持続可能な観光とは何か？ 持続可能な観光とは何か、私たち一人ひとりがどのように貢献できるのか。 貢献できるかを考える。 授業は講義を中心に進められるが、グループ・ディスカッションも行われる。 各セッションの最後にリアクション・ペーパーを提出し、考える力を養う、 考えを整理し、文章で意見を述べる力を養う。	
	Learning and Teaching Today 1	○	・ What is teaching? ・ What is learning? ・ Bloom's Taxonomy ・ Constructive alignment ・ Active learning ・ Feedback (和訳) ・教えるとは何か？ ・ 学習とは何か？ ・ ブルームの分類法 ・ 建設的な調整 ・ 能動的学習 ・ フィードバック	
	Learning and Teaching Today 2	○	Activity based learning Inquiry based learning Problem based learning Social and Networked learning Dialogic facilitation (和訳) 活動ベースの学習 探究型学習 問題解決型学習 ソーシャルラーニングとネットワークラーニング 対話型ファシリテーション	
	Global and Japanese Political Economy 1	○	This course compares Japan and other industrialized countries' policies concerning copper, lithium, rare earths and other critical minerals. These minerals are essential to clean energy and decarbonization, in addition to myriad other high-technology applications in aerospace, health care, and national defence. The current and likely future demand for many of these materials exceeds existing supply capacities, resulting in worsening geopolitical instability and necessitating costly and difficult countermeasures. (和訳) この授業では、銅、リチウム、レアアース、その他の重要鉱物をめぐる日本と他の先進国の政策を比較します。これらの鉱物は、航空宇宙、医療、国防など無数のハイテク用途に加え、クリーンエネルギーや脱炭素化にも不可欠です。これらの鉱物の多くに対する現在および将来の需要は、既存の供給能力を上回っており、その結果、地政学的不安定が悪化し、コスト高で困難な対策が必要となっている。	
	Global and Japanese Political Economy 2	○	Japan's strategies for global, regional and domestic issues. After introductions, global issues such as climate change, peace/security, poverty, migration/displacement, global health etc. will be introduced, focusing on their significance for Japan and the region (Asia-Pacific). Case studies will look at how Japan is contributing to international and regional efforts to tackle global issues while furthering its own political and economic agendas. (和訳) グローバル課題、地域課題、国内課題に対する日本の戦略。イントロダクションの後、気候変動、平和／安全保障、貧困、移民／移住、グローバルヘルスなどのグローバルな課題について、日本と地域（アジア太平洋地域）にとっての重要性に焦点を当てながら紹介する。ケーススタディでは、日本が自国の政治的・経済的課題を推進する一方で、グローバルな課題に取り組む国際的・地域的な取り組みにどのように貢献しているかを見ていく。	
	Knowledge and Society 1	○	In this project-based course, students will learn about one epistemological orientation (i.e., positivism) and conduct a hands-on quantitative study (i.e., survey research). To experience knowledge making processes and understand its limitations, students will study basic principles of survey research, choose a research topic, initiate a survey, collect and analyze data, and present results. (和訳) このプロジェクト・ベースの授業では、学生は一つの認識論的志向（すなわち実証主義）について学び、実践的な量的調査（すなわち調査研究）を実施する。知識創造のプロセスを体験し、その限界を理解するために、学生は調査研究の基本原則を学び、研究テーマを選択し、調査を開始し、データを収集・分析し、結果を発表します。	
	Knowledge and Society 2	○	In this project-based course, students will learn about one epistemological orientation (i.e., interpretivism) and conduct a hands-on qualitative study (i.e., interview research). To experience knowledge making processes and understand its limitations, students will study basic principles of interview research, choose a research topic, conduct an interview, analyze data, and present results. (和訳) このプロジェクト・ベースの授業では、一つの認識論的志向性（＝解釈主義）について学び、実践的な質的研究（＝インタビュー調査）を行います。知識創造のプロセスを体験し、その限界を理解するために、学生はインタビュー調査の基本原則を学び、研究テーマを選択し、インタビューを実施し、データを分析し、結果を発表します。	
	Introduction to Sociology	○	The course is student-centered through active learning. The students must actively participate by reading the assigned texts, watching videos, engaging in discussions, collaborating with their classmates, giving presentations using PowerPoint slides or videos, writing reports, and receiving and giving feedback. (和訳) この授業は、アクティブ・ラーニングによる学生中心の授業である。学生は、指定されたテキストを読み、ビデオを見、ディスカッションに参加し、クラスメートと協力し、パワーポイントのスライドやビデオを使ってプレゼンテーションを行い、レポートを書き、フィードバックを受け、与えることによって、積極的に参加しなければならない。	

別記様式第2号（その3の1）				
授業科目の概要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Japanese Society and Culture1	○	This course explores the transcultural and transnational elements of Japan from a cross-border social sciences perspective. By looking at the stories of people at the margins of Japanese society, such as immigrants, mixed-heritage people, and ethnic minorities, we will historize and deconstruct the myth of Japan as a homogenous society by shifting the focus to the processes of mobility, migration, cultural diffusion, and hybridity. This course is taught in English and is designed to help students develop critical thinking, reading, discussion, and research skills. Each class will focus on a topic, exposing students to a range of sociological themes and concepts and their applications in the study of Japan. Students will take part in a cross-cultural exploration of ideas and works by Japanese and non-Japanese scholars through in-class lectures, group discussions, homework readings, and other activities, including a semester-long research project and collaboration. (和訳) この授業では、国境を越えた社会科学の視点から、日本のトランスカルチャー、トランスナショナルな要素を探究する。移民、混血、エスニック・マイノリティなど、日本社会の周縁にいる人々の物語に目を向けることで、移動、移住、文化拡散、混血のプロセスに焦点を移し、均質な社会としての日本の神話を歴史化し、解体していきます。 この授業は英語で行われ、クリティカル・シンキング、リーディング、ディスカッション、リサーチのスキルを身に付けることを目的としています。各授業ではトピックに焦点を当て、様々な社会的テーマや概念、そして日本研究への応用について学びます。学生は、授業中の講義、グループ・ディスカッション、宿題の読書、そして学期を通したリサーチ・プロジェクトや共同作業を含むその他の活動を通して、日本人および外国人研究者の考え方や作品の異文化間探究に参加します。	
	Japanese Society and Culture2	○	Every class of this course brings a different topic regarding the history of the Okinawan diaspora, their cultural manifestations, and connection points between the diaspora and Okinawa. Finally, this course will also discuss the position of Okinawa in Japanese society and its complex relationship with ethnicity and national identity. The classes consist of oral presentations and group discussions. Equipped with the knowledge gained from the class presentations and reference material, you are expected to participate in discussions around the theme of each class. The classes are designed to instigate your analytical ability in observing issues of the Okinawan diaspora and to connect them with a general landscape of social studies, such as immigration, national identity, ethnicity, and transnationalism. (和訳) この授業では、沖縄ディアスポラの歴史、その文化的表れ、ディアスポラと沖縄の接点について、毎回異なるトピックを取り上げる。最後に、この授業では、日本社会における沖縄の位置づけや、民族性や国民性との複雑な関係についても議論します。授業は口頭発表とグループ・ディスカッションで構成される。 授業でのプレゼンテーションや参考資料から得た知識をもとに、各授業のテーマに沿ったディスカッションに参加することが求められます。授業は、沖縄ディアスポラの問題を観察し、移民、ナショナル・アイデンティティ、エスニシティ、トランスナショナリズムといった社会研究の一般的な風景と結びつけるための分析能力を促すようにデザインされています。	
	The Dignity of Life and Welfare	○	This course begins by looking at the foundation of human rights: the United Nations Universal Declaration of Human Rights. It then introduces the Sustainable Development Goals (SDGs) and looks at how these goals aim to achieve the ideals embodied in the Universal Declaration of Human Rights. Students will then focus in on a particular country and write a report explaining that country's aims and effectiveness in reaching the SDG goals by 2030. Finally, students will present their findings to the class. (和訳) この授業では、まず人権の基礎となる国連世界人権宣言について学びます。その後、持続可能な開発目標（SDGs）を紹介し、これらの目標が世界人権宣言に具現化された理想をどのように達成することを目指しているかを見ていきます。その後、学生は特定の国に焦点を当て、2030年までにSDGsの目標を達成するためのその国の目的と効果について説明する報告書を作成する。最後に、学生はその結果をクラスで発表します。	
	Introduction to International Cooperation	○	This course will introduce Japan's international cooperation strategies, policy frameworks and essential institutions. After looking at theories of cooperation and international relations, we will study Japan's goals and values guiding international cooperation such as human rights and human security, gender equality, mutual benefit for development and prosperity in line with Japan's "Free and Open Indo-Pacific" international cooperation doctrine. The course will also examine how well Japan is positioned in the world and in Asia to contribute meaningfully to international cooperation in relation to solving global issues. We will examine in detail cooperation efforts on peace and security, poverty/development, human rights, gender equality and diversity, global health, migration/forced displacement/humanitarian crises, climate change, environmental protection, cybersecurity/AI etc. and look at global and regional cooperation frameworks (bilateral, trilateral, multilateral) and organizations. Through examples incl. the students' own selected case studies on international cooperation, we will also review the factors responsible for efficiency, success and failure of international cooperation. (和訳) この授業では、日本の国際協力戦略、政策枠組み、不可欠な制度を紹介する。協力と国際関係の理論に目を向けた後、日本の国際協力ドクトリン「自由で開かれたインド太平洋」に沿って、人権と人間の安全保障、男女平等、発展と繁栄のための互惠など、国際協力の指針となる日本の目標と価値観について学ぶ。また、グローバルな課題解決に関連する国際協力に有意義に貢献するために、日本が世界やアジアにおいてどのような立場にあるかを検証する。平和と安全保障、貧困・開発、人権、ジェンダー平等と多様性、グローバルヘルス、移民・強制移住・人道危機、気候変動、環境保護、サイバーセキュリティ・AIなどに関する協力の取り組みを詳細に検討し、世界的・地域的な協力の枠組み（二国間、三国間、多国間）や組織について考察する。また、学生自身が選んだ国際協力のケーススタディなどの事例を通して、国際協力の効率性、成功、失敗の要因についても検討する。	
	Political Sociology	○	The course will focus on three main areas. First, we will explore the basic concepts and theories of political sociology. Second, we will develop perspectives from gender and feminist studies as a critical lens for examining current socio-political changes in daily life. Third, we will analyze the mutual influences among politics, media, and technology. By the end of the course, students are expected to understand how traditional relationships among nation-states, society, and citizens are maintained, transformed, or dismantled from a gender and feminist studies perspective, as well as the political practices shaped by and through various forms of media and technology. (和訳) この授業では主に3つの分野に焦点を当てる。第一に、政治社会学の基本的な概念と理論を探究する。第二に、現在の日常生活における社会政治的变化を考察するための重要なレンズとして、ジェンダーとフェミニズム研究の視点を発展させる。第三に、政治、メディア、テクノロジーの相互影響について分析する。授業終了時には、ジェンダーやフェミニズム研究の視点から、国民国家、社会、市民の間の伝統的な関係がどのように維持され、変容し、あるいは解体されているのか、また様々な形態のメディアやテクノロジーによって形成され、それを通じた政治的実践について理解することが期待される。	
	Political Sociology	○	Course content will be focusing on two interconnected elements. First, each session will be dedicated to a theme that revolves around essential and international issues related to political sociology (22 topics in total). Students will be required to learn about the main concepts and theories, through documents provided by the teacher and text commentaries destined to be shared with others. Second, each session will be focusing on practicing critical thinking: greater importance will be given to oral presentation and collective discussion on critical issues. For example, students will be asked to propose personal analyses to the class, based on both class content and knowledge taken outside of class, so as to help everyone feeling at ease with the inherent complexity of international issues. A presentation schedule will be determined in the beginning of the semester, to make sure which contributions will be expected from everyone. (和訳) 授業の内容は、相互に関連する2つの要素に重点を置く。第一に、各セッションは政治社会学に関連する本質的かつ国際的な問題を中心に展開されるテーマで構成される（全22テーマ）。受講生は、教師から提供される資料や、他の受講生と共有するためのテキストの解説を通して、主要な概念や理論について学ぶことが求められる。第二に、各セッションはクリティカル・シンキングの実践に重点を置く。例えば、授業内容や授業外の知識に基づいて、個人的な分析をクラスに提案するよう求め、国際問題特有の複雑さを誰もが安心して感じられるようにする。どのような貢献が全員に求められるかを確認するため、学期初めに発表スケジュールを決定する。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Career and University Education in the Global World	○	This course includes discussions and presentations, and students will navigate through the career options they have and link them with what they have learned (or to be learned) in the university curriculum. This course will provide students the relevant career-related information so that they can make a smooth transition between their current university education and their future path of either work or higher education. Active discussion will be expected inside and outside of class hours. The instructor will provide feedback during and after the discussions and presentations, and help students to connect their interests with future career options. （和訳）この授業では、ディスカッションやプレゼンテーションを交えながら、学生が持っているキャリアの選択肢をナビゲートし、大学のカリキュラムで学んだこと（またはこれから学ぶこと）と結びつけていきます。この授業では、学生が現在の大学教育と将来の就職または進学の道をスムーズに移行できるよう、関連するキャリア関連情報を提供する。授業時間内外での活発なディスカッションを期待する。講師は、ディスカッションやプレゼンテーションの最中や終了後にフィードバックを行い、学生の興味と将来のキャリアの選択肢を結びつける手助けをする。	
	Selected Topics in Intercultural Communication A	○	As a result of globalization and the advancement of the information society, news consumers of today have immediate access to news from around the world. However, they know very little about the identities of the translators and interpreters involved in international news production, their motives, or their role as intercultural mediators. This course will allow students to learn how translation and interpreting practices are conducted for and by the media, as well as the specific issues involved in the process. （和訳）グローバル化と情報化社会の進展の結果、現代のニュース消費者は世界中のニュースにすぐにアクセスできるようになった。しかし、国際的なニュース制作に携わる翻訳者や通訳者のアイデンティティやその動機、異文化間の仲介者としての役割についてはほとんど知られていない。この授業では、翻訳や通訳の実務がメディアのために、またメディアによってどのように行われているのか、またそのプロセスに関わる具体的な問題を学ぶことができる。	
	Selected Topics in Intercultural Communication A	○	This course is designed to reveal the intricate relationship between social justice, communication, and civic engagement within an increasingly global and digital world. Class periods alternate between discussing theory and applying theory to a case study. Thus, we will apply critical communication theories to real world issues and gain a better understanding of how power is reinforced or resisted. We will engage in projects that recover silenced voices from the margins of history and that imagine how to better serve our communities. （和訳）この授業は、ますますグローバル化、デジタル化する世界の中で、社会正義、コミュニケーション、市民参画の複雑な関係を明らかにすることを目的としている。授業では、理論についてのディスカッションと、理論をケーススタディに適用することを交互に行います。そのため、批判的なコミュニケーション理論を現実世界の問題に適用し、権力がどのように強化され、あるいは抵抗されるのかについて理解を深めます。私たちは、歴史の周縁から沈黙した声を回復し、私たちのコミュニティによりよく奉仕する方法を想像するプロジェクトに取り組みます。	
	Selected Topics in Intercultural Communication B	○	This course explores the representation of difference and otherness in speculative films, focusing on Hollywood productions. We will examine how films depict encounters with the Other, imagined cyberworlds, and dystopias, analyzing the sociocultural anxieties and philosophical questions these narratives reflect. Each thematic section will include a film screening, critical discussion, and analysis of relevant theoretical frameworks. The course concludes with student presentations that synthesize course themes and apply them to selected films. （和訳）この授業では、ハリウッド映画を中心に、スベキュラティヴ映画における差異と他者性の表現を探究する。他者との出会い、想像上のサイバーワールド、ディストピアなどをどのように描くかを検証し、これらの物語が反映する社会的文化的な不安や哲学的な問いを分析する。各テーマのセクションでは、映画の上映、批評的ディスカッション、関連する理論的枠組みの分析を行う。授業の最後には、受講生によるプレゼンテーションを行い、授業のテーマを統合し、選択した映画に適用する。	
	Selected Topics in Intercultural Communication B	○	This course examines the social meanings of global gastronomic cultures and their implications for intercultural communication. Students will engage with both academic and non-academic writings, watch documentaries and short video clips, participate in class discussions, and present their findings to their peers. （和訳）この授業では、世界的美食文化が持つ社会的意味と、異文化間コミュニケーションにおけるその意味を考察する。受講生は、学術的、非学術的な文獻に触れ、ドキュメンタリーや短いビデオクリップを鑑賞し、クラスでのディスカッションに参加し、その結果を仲間に発表する。	
多彩な学び（3 芸術・文化への招待）	文学への扉	○	毎回一つの短篇小说ないしは詩を数篇とりあげ、アメリカの代表的な作家・作品の特徴について講義します。関連する映像資料も使用します。作者略歴や時代背景、作品に関する問いを含めた講義をもとに、受講者は作品を読んだ感想や問いに対する意見・考察等の小レポートを毎回提出してもらいます。内容確認のための小テストも行います。様々な視点から作品を読んでいき、学期末には一番興味をもった作品について短評を書いてもらう予定です。	
	文学への扉	○	本を読むとき、私たちはどのような期待を胸に抱いているのでしょうか。遠くの土地の文化や、過去に起こった出来事、異なる人種・セクシュアリティ・階級の視点を知ることができる—そのように考えて、本を手にとる人は多いかもしれません。そして、その期待が裏切られることは稀でしょう。しかし、物語から得られた知識は、その後どうなるのでしょうか。私たち自身の考え方や感じ方に大きな影響を与えるものもあれば、たいした印象を残さないものもあるはずです。なにかを知ったところで、それだけでは人は変わりません。 この授業では、知識（情報）を感性（心の動き）に変える方法を探ったアメリカの作家たちに焦点を当てます。「なにが描かれているか」という内容や教訓のレベルにとどまらず、「どのように描かれているか」というレトリックの次元に着目し、各作家たちがいかに読者の感性に訴えかけようとしたかを考えていきましょう。	
	文学への扉	○	本講義では、我々は文学と歴史の関係について分析・考察する。より正確には、文学のなかで描写された歴史と、それらの作品の歴史的背景との関係を考える。まず作品に描写された様々な分野の歴史（の断片）について精読し、次に取り上げた作品を現実の歴史のコンテクストに当てはめて俯瞰する。このようにして毎回の講義で、文学と歴史の錯綜した関係を解きほぐしていく。	
	文学への扉	○	およそ一回の講義に一卷を取り上げるペースで、『源氏物語』の桐壺巻から賢木巻までの物語を駆け足で読んでいく。一回の講義では、まず、その巻のあらすじや人物関係や鑑賞の要点などを説明し、その後、その巻の名場面を原文で読み、詳しく解説していく。原文を読むための文法力、読解力が求められる。	
	文学への扉	○	ストリートでの出来事であるヒップホップの歴史を学び、文化的・政治的・社会的側面の可能性について教室内で扱い吟味していくので、アーカイブからの多くの動画や音楽を視聴することになる。またヒップホップそれ自体だけでなく、その歴史的・社会的な背景を理解し、今目的に何を意味しているのかを学ぼうとする。	
	表象文化	○	江戸時代に初演された歌舞伎の代表的作品の読み解きについて講義する。また、演劇の理解を深めるために、観劇し、観劇レポートにまとめる。	
	表象文化	○	私たちは、ごく日常的に娯楽として（映画館で、あるいは自宅のテレビやモニターで...）映画を観て、楽しんでいる。そして、映画の物語について「面白い」「つまらない」「感動した」「飽きた」等々の感想を抱いたり、誰かと語り合ったりするだろう。しかし、映画の魅力は「物語」だけにあるのではない。私たちを楽しませてくれる映画は、実のところ、様々な技法の集積のうえに成り立っている。分析する技術を磨くことで、「物語」にとどまらない、映画の多様な表情を楽しむことができるようになるのである。知識や経験を積むことで、映画を成り立たせている様々な技法や戦略などが「見え」くるはずだ。そうした技法や戦略は、19世紀末に映画が誕生して以来、120年の歴史のなかで培われてきたものである。この授業では、古今東西の様々な映画作品の抜粋を取り上げつつ、映画を緻密に分析するために知っておくべき用語や知識、注目すべきポイントなどを解説していく。それによって、映画をより深く理解するための「見る力」および「聴く力」を鍛えることを目指す。	
	表象文化	○	姉妹をめぐる映画を視聴し、姉妹のモチーフを分析的に観察する。 扱われる映画は、日本、イギリス、西ドイツ、台湾の作品となる予定である。 映画（抜粋）の上映にあたっては、すべて日本語の字幕がつく。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	表象文化	○	15世紀から19世紀前半まで、西欧はアフリカ、アジア、カリブ海を植民地化してきた。フランスは、現在でもカリブ海や太平洋の島々を海外県として国家の一部にしている。こうした歴史において、人的・文化的交差のなかでさまざまなレベルの植民地表象および「黒人」表象が生み出されていった。ある時は表象の力によって奴隷制は廃止へと向かい、またある時は表象が差別や偏見を助長することになった。授業では、とりわけフランスを中心とした西欧におけるこうした表象のあり方を検討する。また芸術分野への「黒人」の影響、あるいはネグリチュード運動の変遷などを概観することで、現在にまでつながる植民地主義の問題についても議論する。毎回の授業ではリアクションペーパーが課され、最終授業では論述テストを実施する。	
	表象文化	○	講義形式で、前半は、言語を媒介とした表象の一形式である文学（小説）と、もっぱら視覚に関わる絵画や、言語と密接に関わるものの、他の媒介を中心とした表現ジャンルである演劇、映像、マンガ、アニメーションなどを、アダプテーションの概念を援用して比較することを通して、言語を媒介とした表象の特質を論じる。講義の後半は、文学（小説）が表現しようとしたわってきたいくつかのモチーフに着目し、利那の感情や気分、狂気、無意識（意識）、視覚的現実などを表現する際の工夫の分析を通して、文学表現の特質とその変遷について論じる。映画やマンガ、アニメなどについては、話題にすることはあるが、この授業ではそれらの表象形式そのものを論じるのではなく、あくまでも文学表現についての議論が中心になることは予め了承していただきたい。また、授業の課題として、適宜（5回程度を予定）小レポートの提出を求める。	
	表象文化	○	第一次世界大戦と第二次世界大戦に挟まれたおよそ20年間に戦間期と呼ぶが、本講義ではこの時期を「男性ジェンダーへの内省的振り返りの時期」と定位し、この時期に書かれたイギリス小説を男性性表象の観点から再考していく。それまでの文学作品は規範的男性性から逸脱する男性キャラクターを多く生み出してきたが、登場人物が抱える男性としての不安が、内面化したジェンダー・イデオロギーとの関係で表象され始めるのは戦間期からである。いくつかのジャンルの横断的に読むことで、この点を実証していく。	
	美術の歴史	○	18世紀後半～20世紀初頭までのフランス近代美術の展開を概観します。フランス近代美術といえば印象派が有名ですが、この画家たちは革新的な表現をした前衛芸術家でもありました。伝統的な美術表現からどのように逸脱して印象派が誕生したのでしょうか。またその表現が後世にどのように引き継がれていったのでしょうか。こうした問いを歴史や社会の幅広い文脈から論じます。授業ではさまざまな美術作品をスライドで示し、作品のディスクリプション（作品記述）をしながら細部まで見て解説します。	
	美術の歴史	○	パワーポイントを多用した講義形式となるが、出席者の積極的な参加（主にリアクションペーパー）も期待する。授業では作品を多く見せつつ、見えるもの（作品）と見えないもの（制作背景）とのつながりに注目し、西洋美術史の大きな流れを追う。科目は西洋美術とされるが、他の美術も比較対象として扱う。	
	美術の歴史	○	19世紀フランス絵画の流れを概観します。高解像度スライドを大量に使用し、できるだけ具体的にわかりやすく解説します。講義は毎週アップロードとする動画で実施します（オンデマンド形式）。並行して個々の事例を取り巻く歴史的・社会的文脈に注目します。初めはさて面白く思えない対象が、背景を知ると興味深く見えてくることもあります。美術鑑賞は「趣味（直感的な好き嫌い）」が決め手とみなされがちですが、「知る」「学ぶ」も重要だということを実感してもらいます。美術の歴史は多様かつ幅広いため、一学期間の授業で全体を見渡すのはなかなか困難です。このため本講義ではあえてまとを絞ります（全カリでは他にも美術関連科目が開講されていますので、より広範な視点を求める方は調べてみてください）。とはいえ19世紀フランスは現代にまで影響を及ぼす美術上の大変化が数多く起きた時期です。この授業で取り上げるクールベ、マネ、印象派などを深く学べば、21世紀を含めた他の時代・地域的美術を考える際のヒントになるはずです。	
	美術と社会	○	19世紀後半から20世紀にかけてのフランス美術を中心に、時代背景を理解しながら、産業の発展、都市の近代化、植民地主義と結びついた「プリミティヴィズム」や「オリエンタリズム」、そしてジェンダーと言った諸問題を、具体的な作品を等して論じます。	
	美術と社会	○	美術表現における「日常と非日常」、「象徴」、「不可視」をテーマにし、各時代、社会においてそれらがどのように描かれてきたかを追う。通史から一歩進み、テーマごとに作品を紹介する形式である。近現代美術も視野に入れたヨーロッパの古代から中世のキリスト教社会を中心とした美術作品を扱う。	
	美術と社会	○	王や皇帝、教皇などの権力者は様々な美術作例や建築を創り上げてきた。エジプトの王ファラオはピラミッドを、古代ギリシアの政治家ペリクレスはパルテノン神殿を建設した。この講義では、単に美術作品を網羅的に見ていくのではなく、美術と権力との関わりに焦点を当てながら、古代エジプトから古代ギリシア、古代ローマにおいて制作された作品を考えてみたい。	
	音楽の歴史	○	19世紀は、現代文化の基礎が形づくられた時代である。この時代、西洋音楽では、視覚的なイメージを反映した描写性の高い音楽が作曲され、また、感情をあらわすものとして音楽が意味づけられるようになった。その一方で、音楽には精神性が求められ、鑑賞されるようになったのもこの時代である。そうした19世紀の音楽を通して、現代の私たちの身の回りの音楽が、どのようなものとして作曲され、受容されているのか、考察をおこなう。	
	音楽の歴史	○	西洋音楽において声楽曲、歌劇は重要な位置を占めている。音楽の発生とともに存在した歌や、音楽・演劇・踊り・美術などの統合された歌劇（オペラ）は、現代に至るまで創作、演奏され続けている。この講義では中世・ルネサンス時代の宗教声楽曲から、バロック時代に登場しその後数多く作られた歌劇の中から代表作を取り上げ、それらの音楽的特徴や各時代における声楽曲の展開などを西洋音楽文化の中で考察する。	
	音楽の歴史	○	講義。西洋音楽史の最重要な専門用語や基本概念を歴史的な視点から論じる。毎回の授業では音楽を実際に聴き、楽譜を用いながら分析を加える。音楽的能力（実技・楽典等）は問わないが、積極的な関心と意欲は必須。とくに理論的な側面に重点を置くので、学としての音楽との対峙を想定してほしい。下記のようなトピックを論じつつ、各時代（古代、中世、ルネサンス、バロック、古典・ロマン派、世紀転換期、現代）の音楽の特徴を考察する。	
	音楽と社会	○	人と音楽との長い歴史の中で、音楽のあり方は社会情勢の変化とともに多様化してきました。西洋音楽の社会性を理解することは、ヨーロッパの歴史や文化、精神性を学ぶことにもつながっていきます。そうした背景をもとに、この授業では、各回、時代や地域を超えた様々な切り口で、西洋における音楽について考えていきます。	
	音楽と社会	○	この授業では、19世紀までのクラシック音楽とは一線を画したアイディアに基づく、20世紀の音楽作品を鑑賞する。そして、そのような作品が生まれた必然性を、音楽の歴史のほか、同時代の政治や社会状況とあわせて検討する。	
	音楽と社会	○	さまざまな地域の音楽や芸能にかかわる読み切りのテーマを設け、多くの音源、映像資料を通して当該テーマの理解を深めることをめざす。回により、音楽的側面、社会的側面、文化的側面、関連領域との関わりなどをクロスアップする。受講生が事象としての音とそれが発せられている様子や社会との関わりを通して対象を理解する手助けとしたい。	
	美術論演習	○	各回、様々な美術作品を取り上げる。履修者は、詳細な観察と記述を通じて気がついたことを出発点として、必要に応じて教員が提示した知見やキーワード等を踏まえて解釈を試みる。これらの観察や解釈をディスカッションを通じて共有するのと同時に、美術作品の持つ特性を当時の美術理論、歴史的な背景、社会的な機能などを踏まえて理解を深めていく。	
	美術論演習	○	1. 受講生が実際に訪れた展覧会や美術館について報告をする。 2. 展示空間を考えるワークショップを行う。 3. 仮想展覧会を企画し、口頭発表する。 4. 発表内容をレポートとして提出する。 授業の進行は受講者数によって調整される。	
	美術論演習	○	この演習では、それぞれの回において、受講者が肖像作品に関する発表を行う（扱う作品は、初回の演習の際に配布するリストの中から受講者が選択する。）。発表担当者は演習の冒頭で資料プリント（発表概要・関連作品・文献資料のテキスト・参考文献などを記載）を配布し、続いて、パワーポイントスライドを映写しながら作品の解説を行う。なお、口頭発表の中では、主たるモチーフとして表された肖像のモデルの経歴、肖像作品の作者の紹介にとどまらず、作品に確認される造形表現上の特徴と、その表現が有する意義、さらに、作品が有した役割（政治的・社会的あるいは宗教的機能など）の紹介も求められる。その後、科目担当者によるコメント、並びに、他の受講者による質問が行われる。	

別記様式第2号（その3の1）				
授業科目の概要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	音楽論演習	○	演習形式でおこないます。初めの数回、教員が全般的なプレゼンテーションをおこなった後、全受講生に個人もしくはグループで発表を担当してもらいます。各回の発表では、具体的な作品（パフォーマンズ）を1点以上取り上げることとします。担当者は、担当するジャンル（オペラ、バレエ、フィギュアスケート、ミュージカル）の基本事項を整理し、取り上げる作品を選定して必要事項を調査します。発表では、受講者の鑑賞のおよびその後の討論の助けになるよう、パワーポイントもしくはレジュメを作成した上で口頭発表をおこなってください。取り上げる作品については、受講者の積極的な希望、提案を優先し、グループ間で重ならないように調整する予定です。	
	音楽論演習	○	演習形式。初めの数回で教員が指針を与えた後、全受講生が発表を担当する。原則として毎回、1作のオペラを取り上げる。各回の担当者は、事前に必要事項を調査・分析した上で、鑑賞の手引きとしてレジュメ作成および口頭発表を行い、鑑賞後の討論を導く。受講人数によってはグループ発表となる。各国・各時代の代表作を中心に、多様な作品に触れることを目指すが、受講者の積極的な希望、提案があれば優先したい。	
	キリスト教美術	○	普段美術館の展示室で「美術作品」として、その時々々のテーマに沿った組み合わせで並べられた画像を見ることが多い私たちが、聖性を帯びた宗教的画像が本来置かれていた状況ではどのように機能していたのか、その多様なあり方を探っていきましょう。 まず事例を多数見ながら、キリスト教美術に頻出する主題やシンボリックなモチーフの意味を知って、画像読解の基礎知識を学ぶことから始めます。 授業後半では偶像崇拝を禁じているユダヤ教を母胎として生まれたキリスト教と画像の関係がどのような変遷を辿ったか、歴史的側面にも目を向けます。神の姿を画像化したい、神の存在を感じたいという要請と偶像崇拝の危険をめぐる葛藤を大きなテーマとして考えていきます。 人によっては、「美術」という感覚的な印象や才能の有無などで鑑賞されたり、評価されたりして基準があいまいでわかりづらいもの、あるいは現在の資産の評価で価値が決まりうるものも思っていたりするかもしれません。しかし、そのような見え方だけでは現在の私たちと異なる時代や地域の人々の感覚を理解できません。本授業では、事例がどのような社会の中で生まれ、どのように捉えられていたのかに注目し、宗教的崇敬対象として、また多様なメッセージを発する視覚的情報メディアとしてのキリスト教美術を考察していきます。	
	キリスト教美術	○	歴史的な背景を追いながら教会建築の誕生から発展、基本的な構造と社会的な思想を解説する。キリスト教の伝播とともに変化する代表的な写本挿絵例を用いて中世美術の特徴や図像学的な解説を行う。理解度を確認するための小テストを各カテゴリの区切りごとに4～5回ほど行う予定である。	
	キリスト教音楽	○	本講座は講義形式とする。教会音楽は、ヨーロッパの音楽の歴史（西洋音楽史）を理解するために欠かせない音楽ジャンルの一つである。この講座では、西洋音楽史において取りあげられることが多い作曲家の曲について、そのテーマや特色、作曲の背景などを検証する。授業では演奏を聴くだけでなく、作曲の技法や音楽の理論、社会の情勢を視野に入れて楽曲を分析する。履修者には、楽器の演奏や楽譜を読むなどの音楽に関する専門の技術・知識の有無は問わないが、音楽への積極的な関心、音楽を理解したいという意欲を求める。	
	キリスト教音楽	○	オラトリオは、独唱と合唱、オーケストラのために作曲された大規模、大編成の作品である。宗教的な内容を題材とし、聖書に基づく台本が多い。この講義では、台本や音楽の特徴、作曲家の生涯や、作品成立の背景などを検討する。毎回の授業では作品を実際に聴き、楽譜を用いながら分析を加える。音楽的能力（実技、楽典等）は問わないが、積極的な関心と意欲は必須。また、歌詞は主にドイツ語、加えて、英語、フランス語、ラテン語などの外国語なので、授業で配布する対訳をもとに、内容を理解しようとする努力を期待する。	
	都市と芸術	○	ケーススタディとしてロシアの都市（主にモスクワとサンクト・ペテルブルク）の人々の生活と音楽との様々な関係を紹介し、当時の暮らしの様子を想像しながら、そうした関係がどのような歴史学的、音楽学的意味を有しているのかを示し、ともに考える。また、そうした都市生活が、残された音楽作品の面から、また生活の実際という面から、今の我々とのように関係しうるかの一例を提示する。	
	建築と文化	○	日本では、中国大陸・朝鮮半島・西洋から、その文化、宗教、政治制度、思想を取り込み、日本の気候風土や既存の文化・宗教と融合させ、様々な建築や都市を築いてきた。同時に、建築や都市は人々の生活の場であり、新たな文化が生まれ、育まれる場所でもある。本講義では、西洋文化の導入により社会全般の急速な近代化が進んだ明治時代から第二次世界大戦の終戦までの近代に注目し、住宅を中心に日本人の生活について学び、さらに都市施設へと視野を広げ、日本の建築や都市の特徴とその変遷、そこで生きていた人々の生活・文化を学ぶ。	
	建築と文化	○	実用を超えて文化的意味を建物から読み取る時、建築があらわれる。建築史の代表的な建物をとりあげながら、建築の価値と評価を文化的側面から考察する。前半は、建物からどのように文化的意味を読み取るのかを論じ、後半は建物の価値と評価の基準について論じる。ただし受講生の数や興味に応じて、授業日程などを変化する可能性がある。	
	舞踊論	○	本授業は、地域に根差した文化や舞踊家たちの芸術活動の背景に触れながら、そこに出現する様々な舞踊に着目し、関連する研究を通じて、舞踊への理解を深めていく。取り上げる舞踊は、「生活文化の中の舞踊」「芸術としての舞踊」「教育の中の舞踊」「身体科学の中の舞踊」等である。授業内では、映像を適宜用いながら、舞踊について考察していく。	
	映像と社会	○	この授業では、ハリウッドで製作されたさまざまなジャンル映画を取り上げます（1910年代後半から1960年頃までのいわゆる古典期の作品がメインとなります）。映画のジャンルはそのときどきの社会的状況や人々の価値観と密接に結びついているからです。たとえ同じジャンルに属し、似たような題材を扱った作品であっても、製作された時代や作り手が違えば、まったく別様の表現や政治的態度が含まれることになります。授業では、各ジャンルを特徴づける演出やそのヴァリエーションを分析していくと同時に、ジャンル映画において戦争や性、人種、階級といった問題がどのように表象されてきたのかを検討していきます。 また、「映画は社会を映す鏡である」といった素朴な社会反映論的な見方ではなく、それぞれの作家や作品がどのようなパースペクティブから歴史や社会を捉えようとしたのかという点を重視しながら、映画と社会との複雑な関係性について考えていきます。	
	映像と社会	○	この授業では、現代のアメリカ映画について学術的にアプローチするための方法を学ぶ。「現代」の輪郭を明瞭に捉えるために、まずは「古典的ハリウッド映画」の歴史や形式に関する知識を習得し、そのうえで1960年代後半以後の「ニュー・ハリウッド」と呼ばれる変革について学習していく。さらには1990年代以降の様々な変化——CGをはじめとするデジタル技術の進展と普及、コングロマリット化や独立プロダクションの台頭といった産業面での変革、人種的・性的マイノリティの権利の重視したポリティカル・コレクトネスの導入、DVDやケーブルテレビおよびインターネット配信の普及などによる受容面での変化——についても学ぶことになるだろう。	
	身体表現と哲学	○	この授業では、人間の身体や人間の振る舞い、行動、演技、芸術表現などといった身体表現が、哲学においてどのように考えられてきたかを紹介していきながら、精神と身体、知覚と行動、創造的表現と二次的表現といった問題について考察する。また、身体や身体表現について哲学的に思考することがいかなる意味と価値をもつのかということも明らかにする。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	身体表現と哲学	○	世の中の人、その大半は、身体をもっています。幽霊さえも、しばしば身体をもっています。雑踏を見わたせば、あちらにも身体、こちらにも身体……があります。とにかく様々な身体が、世界にはあふれています。しかし、身体が「あふれている」ことは、身体が「ありふれている」という意味ではありません。 ある人の身体は、ほかの誰の身体とも置き換えることのできないものです。つまり、一見意外かもしれませんが、「意識」や「考え方」よりも、「身体」のほうが、ある意味で、個性的だとすらいえるのです。どんな身体であれ、ありふれたものなどありません。 しかし、正確さを欠いた眼（日常を生きるなかで、どんどん差異に鈍感になっていってしまう）には、そう見えてしまうらしいのです。そうだとするなら、「ありふれていないもの」、「途方もないもの」こそが「あふれている」のを見るためには、世界の過剰さにふれるためには、緻密な眼（あるいは、緻密な身体）の育成が、おそらく必要だといえます。 しかし身体は、あまりに身近なものであるがゆえに、あるいは、身「近」どころか「身そのもの」であるがゆえに、その個性がよく分からないというのも、また事実だろうとおもいます。そもそも、私たちは自分自身の顔も全身も直接見ることができませんし（鏡に写っている自分の顔は左右反転しています）、自分の身体がどのように機能しているのかもよく知りませんし（たとえば、内臓がいまちょうどなにを消化・吸収しているのか、精確に知っている人は、ほとんどいないはずです）、自分の身体がどこまで非日常的なものに変身できるかもよくわかっていません（おもいきって大胆な格好をはじめた（あるいは、これからしようとしている）ときの感情を想起してみてください）。 日常的な身体の使い方が、きわめて限定され、制限されたものである以上、人間の身体がもっているポテンシャルは、その狭い枠内でしか発揮されていません。身体のポテンシャルがどれほどのものなのか、身体はなにをなすのか、どんなふうにはたらくかが分かるのは、身体が日常性の外に出るとき、あるいは、決まった枠組の外に出ざるをえないときのことです。そのような営みを、ここでは仮に「表現」と呼ぶことにします。 本講義が扱うのは、身体を日常的な制約の外に連れ出すような表現行為の歴史です（ひるがえって、それは日常的な身体のあるかたを見つめ直すことにもなるとおもいますが、それはあくまで副産物でしょう）。映画、文学、ダンス、彫刻、音楽、絵画、写真、衣服……などにおける、身体の表現をととして、個々の身体が有する個性の途方もなさを、さまざまな角度から考えてみたいとおもいます。関連する哲学・思想も、ジェンダー／セクシュアリティ／エロス論などを含め、適宜紹介します。	
	ドイツ語圏の文学	○	・邦訳のあるドイツ語圏の児童文学を数作取り上げ、作品の成立事情と作者について概説します。 ・各回に作品の感想を述べる練習の機会を設ける予定です。 ・映像化されている作品については、授業内で映画を鑑賞することも考えています。	
	ドイツ語圏の文学	○	近代～現代のドイツ語圏の文学作品（小説・戯曲）の中から、ぜひとも知ってもらいたいもの、学生時代に読んでもらいたいものを取り上げ、作者の生涯や時代背景、作品の内容などについて概説する。その上で、作品の一部を翻訳で読み、そこに見出される表現手法や問題性について考察する。毎回授業後、コメントペーパーとして自分の考えを適切な文章でまとめてもらい、提出してもらう。 また、映像化されている作品については、一部をDVDで観ながら、文字テキストとの表現の違いなどについて比較検討する機会を持つ予定である。	
	フランス語圏の文学	○	フランス語圏に属する各地域（フランス、カリブ海、アフリカ、カナダ、ベルギーとスイス）の文学を、その歴史的・文化的・思想的背景を理解しながら読む。文学以外に音楽、美術、映画、哲学などにも触れる。	
	フランス語圏の文学	○	いわゆる「フランス文学」と「フランス語圏文学」との間に否応なく横たわる「隔たり」を意識しつつも、これらを「フランス語で書かれた文学」というより大きな枠組みでとらえ、様々な地域にルーツを持つ近現代の作家と作品を扱う。 言語とアイデンティティーとの関係は共通のテーマとして、作品の文化的・社会的背景を個別に分析すると同時に、フィクション、自伝的テキスト、証言、旅行記、民話、エッセイなど、文学の多様な表現手法を概観する。紹介する作家たちとフランス語との関わり方も様々である。ある作家にとっては母語であり、別の作家にとっては押し付けられた「支配者の言語」であり、また他の作家にとっては偶然めぐり合い外国語として習得した言語である。しかしいずれも「他者」との関係において「自分とは何者なのか」を問い、「隔たり」のただ中で書くことを通じて世界とつながることを試みた作家たちであり、そうしてフランス語の文学に新境地を開拓した彼ら/彼女らの作品に触れることで、言語という表現媒体が持つ力と可能性を再考する。	
	スペイン語圏の文学	○	イスパノアメリカと呼ばれる地域、そして広くラテンアメリカが生み出した文学作品を、そこに暮らす人びとの歴史と、その中で生まれた暮らしやメンタリティ、政治との関わりとともに考察する。 イスパノアメリカについて、まずはその成り立ちや、歴史に基づいたモザイク模様を織りなす文化を概観し、20世紀から今世紀にかけてのこの地域の代表的作家とその作品を取り上げ、それぞれの作家、作品を、地域や時代の特徴をとらえる。また、そうした文学作品をきっかけに制作された映画についても考察する。	
	中国語圏の文学	○	中国古典文学の世界観において、「小説」は長らく中心から外れた辺縁的なものと位置付けられてきた。しかし、中国語圏の各時代の社会・文化・思想を映し出す表現物として、小説ほど多様で豊かなものはないだろう。本授業では、先秦の寓話から清代の白話小説に至るまで、各時代の代表的な小説作品を取り上げ、その成立過程、物語内容、構造、受容の様相を多角的に分析し、小説が持つ「豊かさ」とその社会的・文化的意義に迫る。とりわけ小説の「虚構性」に注目し、その表現技法や語りの構造を掘り下げる講義としたい。 授業では受講生自身が作品を深く読み解き、批評的思考を養うことを重視する。そのため、毎回の授業ごとにリアクションペーパー（200字以上）の提出を求めることで、学んだ内容を振り返り、知識を定着させる。学期末には、受講生が最も興味を持った中国古典小説作品についての最終レポートを課し、各自の視点から小説の魅力や意義を考察することを求める。 本授業を通じて、中国古典小説に関する基礎的な知識を修得するだけでなく、文学と社会の関係について理解を深め、批判的かつ創造的に作品を読み解く力を養うことを目指す。	
	朝鮮語圏の文学	○	授業は講義形式でおこないます。 この授業の主眼は、日本語訳を利用して朝鮮のプロレタリア文学作品を実際に読んでいながら、時に強烈でグロテスクでもある、暗示と陰影に富んだ文学表現を味わい、人間が生きていることについての想像力や洞察を広げていくことにあります。講義を通じて、作品の主題や内容、時代背景や周辺の状況などに関して、理解を深めるための解説を提示します。受講者は、講義各回でのコメントと、自分で読んだ作品に関する短いレビューを提出する必要があります。提出されたレビューの内容を授業内で共有し、フィードバックをおこなうことで、作品の様々な解釈の可能性についても検討します。	
	朝鮮語圏の文学	○	授業は講義形式でおこないます。 この授業の主眼は、日本語訳を利用して朝鮮のプロレタリア文学作品を実際に読んでいながら、時に強烈でグロテスクでもある、暗示と陰影に富んだ文学表現を味わい、人間が生きていることについての想像力や洞察を広げていくことにあります。講義を通じて、作品の主題や内容、時代背景や周辺の状況などに関して、理解を深めるための解説を提示します。受講者は、講義各回でのコメントと、自分で読んだ作品に関する短いレビューを提出する必要があります。提出されたレビューの内容を授業内で共有し、フィードバックをおこなうことで、作品の様々な解釈の可能性についても検討します。	
	立教ゼミナール3	○	この授業では上演の場としてのオペラ座などの劇場の問題、グランド・オペラやオペレッタ、またロマンチック・バレエやクラシック・バレエといったジャンルの盛衰や流行などを扱う。作品としてはおもにバレエを中心に上げつつ、『ラ・シルフィード』『ジゼル』『コッペリア』といったいくつかの主要作品を扱って、その主要テーマや歴史的・社会的な意味、各作品の美学、さらに同時代の文学との関係などを探る。授業では毎回DVDを使って舞台映像を見る時間を設けるが、同時に単なる鑑賞に終わらないよう、19世紀フランスという歴史性を意識しながら、批評的に作品を検討する態度を養う。授業の進め方に関しては、最初何回か導入の講義をした後は、学生一人一人が自らのテーマを設定し、発表してもらうことになる。受講生にバレエ史の知識は求めないが、ある程度ミュージカルその他の観劇に関心があり、授業期間中に自分で自発的に観劇に行くことを受講の条件とする。	
	立教ゼミナール3	○	ダンス、ヨガ、合気道、気功などの基本的な身体トレーニングを毎授業、反復して取り組みながら自己の持つ身体感覚に目を向け、また、それと同時にメソッドに囚われない自由な発想を毎回異なるテーマからアプローチしながら身体の可能性を探る。以下に大まかな授業計画は示すが、集まった学生に応じて授業内容は変更されることがある。	
	日本の美術	○	日本史や日本美術史の教科書に載ったり、広く紹介されていたりする日本美術の代表的な作品を主題、作者、地域、吉祥性、文学や宗教との関わりなど様々な角度から概観したり、掘り下げたりして見ていきます。日本美術を多角的に捉えることによって、知識を深く定着させ、その面白さと特徴を考えます。合わせて日本文化への理解も深めます。	
	日本の美術	○	日本の美術史の流れを確認しつつ、毎回特定の画家や作品を選び、描かれた主題を中心に詳しく紹介する。その際に比較例を古今東西に幅広く求め、同時代の文学や芸能などとの関わりにも着目し、作品の持つ特徴や文化史的意義を多角的なアプローチから考察する。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	日本の音楽	○	「日本の伝統音楽」といえば、琴や三味線などの楽器を想起する人が多いだろう。しかしながら、日本音楽の種目の多くは「うた」や「語り」といった声による表現を主体にしており、言語芸術である詩歌や物語、演劇などとも深い関わりがある。本講義では、日本の伝統音楽の主要な種目の音源や動画を視聴しながら、それらが生まれた歴史的背景や音楽のしくみについて、成立年代順に概説する。日本に居ながらも、伝統音楽に触れる機会が少ない現代。多くの外国人が訪れる今こそ、先人達が継承してきた豊かな音楽文化に意識を向けていきたい。	
	日本の音楽	○	本授業では、雅楽を主軸にして日本音楽を学びます。日本において雅楽は他の音楽分野の源泉となるのみならず、音楽周辺の美術・建築・文学・宗教などの文化とも深く関わってきました。また、近年に国内外でよく知られるようになりました。そのような雅楽に関して、本授業では初歩的かつ正しい理解を身に付けます。なお、授業には受講生が歌曲を歌う実習もあります。	
	日本の演劇	○	能という舞台芸術について多角的に学ぶ。能の一曲を取り上げ内容を理解した上で、その一部分を詞章、節、それに伴う動きを含め、実際に身体で学び、最終的に演じる。実技中心。己れの肉体を自一杯使って、能の表現にどれだけ近付けるか、自分に仕掛ける事。 本年は「鶴」（ぬえ）という平家物語に登場する妖怪を主人公とした世阿弥晩年の作と言われる曲をテーマに据え、演劇、文学、歴史など多岐にわたる日本文化、芸術を縦断する授業を展開する。 演じる部分は、前半の源頼政が鶴を打ち取る仕方話の部分を予定。	
	演芸の世界	○	「演芸」は「演劇」同様、近代になって定着する概念で、具体的に指す芸（芸態）は多様だが、上演空間が狭い・気楽に楽しむ消費型娯楽という点を共有する。グローバル化した現代では、ウォークマン以降定着した個別に楽しむスタイル、ライブの価値の再発見、消費者が自身の属性、芸（芸態）の属性に関わらず、日本内外のものがフラットに並ぶ選択肢の中から自身の好みにより楽しむ芸（芸態）を選択するなど、娯楽における新たな消費スタイルが定着してきた。本講座では寄席で演じられる芸に生きる方々を講師としてお迎えし、具体的なお話によって展開し、寄席の世界を理解する。 （オムニバス方式／全14回） コーディネーター：基幹教員以外の教員（細井尚子／全14回出演）、基幹教員以外の教員（宮信明／全14回出演） （基幹教員以外の教員（一龍斎貞橋）／3回） 講談の世界 （基幹教員以外の教員（入船亭扇橋）／3回） 落語という芸 （基幹教員以外の教員（林家楽一）／3回） 紙切りの世界 （基幹教員以外の教員（江戸家猫八）／3回） 動物ものまねという芸	オムニバス方式
	観光と文学	○	人文社会科学からの観光現象に対するアプローチは、これまでもっぱら地理学・社会学・文化人類学などの分野から研究が行われてきた。しかし、国木田独歩の武蔵野、徳富蘆花の湘南のように、文学が新たな観光地を作り出したケースが過去には存在し、文学が力を失った現在もなお「シャーロック・ホームズ」シリーズのように視覚メディアにおける新たな展開を通して、「聖地巡礼」を惹き起こしているケースもあれば、城の崎における志賀直哉等、単なる記号のかたじけなくであるにせよ、観光資源として活用され続けているケースも数多い。この授業では、以上のような状況を踏まえ、文学による観光（文学作品に描かれた観光地の疑似体験やそれを通しての舞台探訪）と観光による文学（舞台を訪れた経験による作品理解や享受の促進）の双方から、観光経験における主観的意味づけとその言語化の重要性を考えてもらうことを目的としている。さらに、ガイドブックやトラベルライティングにそうした意味づけが経験的に活用されていることを紹介し、観光に適用される文学研究の応用可能性を考察する。	共同
	Japanese Culture 1	○	During the seminar, students will explore how everyday products and cultural habits – that are often seen as trivial forms of entertainment – carry deeper meanings and reflect the ideologies and values of the institutions and ideologies that design and produce them. Cultural artifacts and common habits are not only entertainment and a form of passing-time, but also tools of hidden messages that are delivered to their audiences unconsciously. Throughout the course, students will have the opportunity to analyze and understand the meanings of various cultural phenomena, such as manga, anime, kawaii practices, idols, subcultures, as well as traditional national cultures like the tea ceremonies and the cherry-blossom picnics. By examining specific products and case studies, students will develop critical thinking and independent analysis skills, while exploring themes and topics of personal interest. The course takes a multi-disciplinary approach, incorporating theories from a range of fields including anthropology, cultural studies, media theory, and cultural psychology, will will open new perspectives about the culture they see and participate in on a daily basis. （和訳）授業では、日常的な製品や文化的習慣が、しばしば些細な娯楽とみなされがちだが、いかに深い意味を持ち、それらをデザイン・生産する制度やイデオロギーのイデオロギーや価値観を反映しているかを探求する。文化的人物や一般的な習慣は、娯楽や暇つぶしの一形態であるだけでなく、無意識のうちに聴衆に届けられる隠されたメッセージの道具でもあるのです。この授業では、マンガ、アニメ、カワイイ習慣、アイドル、サブカルチャー、そして茶道やお花見などの伝統的な国民文化など、さまざまな文化現象の意味を分析し、理解する機会を得る。具体的な商品やケーススタディを検討することで、学生は批判的思考や自立した分析力を養うとともに、個人的に関心のあるテーマやトピックを探求していきます。人類学、カルチュラル・スタディーズ、メディア論、文化心理学など、さまざまな分野の理論を取り入れた学際的なアプローチにより、日常的に見たり参加したりしている文化について、新たな視点を切り開くことができるだろう。	
	Japanese Culture 1	○	This course is dedicated to understanding Japanese art and culture through the lens of performance. We will discuss selected topics in Japanese theatrical history, and collaboratively explore how using performance as a mode of analysis can help us understand culture and society. We will ask questions such as, “How does performance shape our understanding of history?” and “What does it mean to ‘perform’ our gender in today’s society?” The class will culminate in a final performance project, in which students apply a theoretical concept from the course to an art or performance object of their choice. （和訳）この授業は、パフォーマンスというレンズを通して日本の芸術と文化を理解することを目的としています。日本演劇史の中から厳選したトピックを取り上げ、分析方法としてパフォーマンスを用いることが、文化や社会を理解する上でどのように役立つかを共同で探求していきます。私たちは、「パフォーマンスはどのように私たちの歴史理解を形成するのか」、「現代社会で私たちのジェンダーを「演じる」とはどういうことなのか」といった問いを投げかけます。このクラスは、最終的なパフォーマンス・プロジェクトで締めくくられる。このプロジェクトでは、受講生は授業で学んだ理論的なコンセプトを、自分で選んだアートやパフォーマンスの対象に適用する。	
	Japanese Culture 2	○	The course is made up of key topics in the evolution of Japanese popular culture contents that led to the formation of influential worldwide movements and firmly placed Japan as a cultural superpower. We will explore and discuss these case studies from a variety of different perspectives. We will analyze and discuss manga and anime as a cultural phenomenon through a variety of topics: their history, evolution, and important figures. Course participants are expected to research on their own outside of the classes and, by the end of the semester, gain a working knowledge of popular culture and its role within Japanese society. （和訳）この授業は、世界的に影響のあるムーブメントを形成し、日本を文化大国として確固たる地位を築いた、日本の大衆文化コンテンツの進化における重要なトピックで構成されている。これらのケーススタディを様々な角度から探求し、議論します。マンガやアニメの歴史、進化、重要人物など、さまざまなトピックを通して、文化現象としてのマンガやアニメを分析し、議論する。受講生は、授業以外の時間にも自ラリサーチを行い、学期末までには、ポピュラーカルチャーと日本社会におけるその役割について、実践的な知識を身につけることが期待される。	
	Japanese Arts A	○	In this course, students will explore the major historical periods of Japanese art, spanning from the Jōmon period to the 21st century. The course will focus on examining representative artworks to develop the students' ability to identify the techniques, materials, and motifs characteristic of various forms of Japanese art. By situating artworks within their historical and cultural contexts, students will interpret their meanings and engage in discussions about the enduring global significance of Japanese art. （和訳）この授業では、縄文時代から21世紀までの日本美術の主要な歴史的時代を探究する。この授業では、日本美術の様々な形態に特徴的な技法、素材、モチーフを識別する能力を養うため、代表的な作品の検証に重点を置く。また、作品を歴史的・文化的文脈の中に位置づけることで、作品の意味を解釈し、日本美術の世界的な意義について議論します。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Japanese Arts A	○	This course introduces Japanese arts and visual culture from Edo to the early Meiji period based on selected themes. We will discuss the relationship between contemporary Japanese society and its artistic products through semiotic study, as well as the function of visual arts in Japan and Western influence. （和訳）この授業では、江戸から明治初期にかけての日本の芸術と視覚文化について、テーマを決めて紹介します。日本における視覚芸術の機能と西洋の影響について論じるとともに、記号論的研究を通して現代日本社会と芸術作品の関係について考察する。	
	Japanese Arts B	○	This course offers an immersive study of traditional Japanese music by examining its performance techniques, sound qualities, and evolving cultural roles. Students will explore both traditional and modern genres through live demonstrations and workshops led by active musicians, experiencing firsthand how traditional music remains vibrant and relevant today. In addition to learning about the unique sounds and techniques of instruments like the shakuhachi, koto, and shamisen, students will develop the ability to discern the aesthetic qualities—such as timing, tone, and sonic textures—that define Japanese music yet sometimes make it challenging to penetrate. Through active engagement with modern performers, students will gain a perspective that enables them to recognise and appreciate traditional genres within today's cultural context, expanding their understanding of Japanese music beyond strict traditional transmission, and connecting with it as modern listeners. The course will culminate in a research project, where students present their findings on the question, "How can we, as modern listeners, understand and appreciate Japanese sound?" （和訳）この授業では、邦楽の演奏技法、音質、文化的役割の変遷を検証することで、邦楽について深く学びます。現役の音楽家による実演やワークショップを通して、伝統音楽と現代音楽の両方のジャンルを探索し、伝統音楽がいかに現代においても生き生きとした存在であり続けているかを身をもって体験します。尺八、琴、三味線などの楽器のエニークな音色や奏法について学ぶだけでなく、日本の音楽を特徴づけているが、時にそれを理解することを難しくしている、タイミング、音色、音の質感などの美的特質を見極める力を養います。現代の演奏家との積極的な関わりを通して、受講生は、今日の文化的背景の中で伝統的なジャンルを認識し、評価することができる視点を身につけ、日本音楽に対する理解を、厳格な伝統的伝承を超えて広げ、現代の聴き手として日本音楽とつながることができるようになり、授業はリサーチ・プロジェクトで締めくくられ、受講生は「現代のリスナーとして、どのように日本の音を理解し、鑑賞することができるのか」という問いについての研究成果を発表します。	
	Japanese Arts B	○	授業の内容は、日本で現在も演奏されている主な伝統ジャンルや楽器について学びます。ゲスト演奏家によるワークショップや、クラス内・オンライン上での実演演奏など、インタラクティブな要素も取り入れます。また、「日本の音とは何か」という問いに個人的に答えるための個人的な研究にも取り組み、授業の最終週にはビデオ・プレゼンテーションを行います。	
	The Psychology of Literature 1	○	The contents of this course will be based on myths, legends and traditional stories from around the world. In this course, we will explore the psychology of literature from a variety of perspectives and critical viewpoints. Topics for investigation include empathy, emotions, theory-of-mind, effects of literature on the reader and creativity in fictional texts. （和訳）この授業の内容は、世界中の神話、伝説、伝統的な物語を題材にします。この授業では、文学の心理学を様々な視点と批評的観点から探求する。具体的には、共感、感情、心の理論、文学が読者に与える影響、フィクションにおける創造性などである。	
	The Psychology of Literature 2	○	The contents of this course will be based on fairy tales from around the world. In this course, we will explore the psychology of literature from a variety of perspectives, using examples from tradition versions of tales, as well as adaptations and remixed/contemporary versions. Topics for investigation include empathy, emotions, theory-of-mind, effects of literature on the reader and creativity in fictional texts. （和訳）授業の内容は、世界各地の童話を題材とします。この授業では、伝統的な童話、翻案された童話、リミックスされた現代的な童話などを例にとりながら、文学の心理学を様々な角度から探求していきます。調査するトピックは、共感、感情、心の理論、文学が読者に与える影響、そしてフィクションにおける創造性創造性などである。	
	Exploring Children's Literature	○	This course will allow students to gain deeper specialist knowledge and examine in detail various examples of well-known English children's literature. In each class, a selection of famous picturebooks created by a range of author/illustrators, both past and present, will be available for examination and discussion by students. Students will learn specialist terminology and develop their own criteria for describing and assessing these picturebooks. Common themes such as friendship, resilience and celebrating or embracing diversity will be discussed by participants from both the characters' and their own perspective in pairs and small groups. Students training to be English instructors at primary, junior-high, or high-school level, as well as anyone interested in literature, and ways to enjoy children's literature with their own, or future, children will find this course valuable. By the end of the course, students will have: (i) Read, analyzed and discussed in pairs or groups many well-known children's books in English. (ii) Learnt how to analyze and comment on a picturebook using correct terminology. (iii) Discussed themes from picturebooks, such as social issues, friendship or recognising and embracing diversity. (iv) Done a short presentation (20 mins) on a picturebook of their choice. (v) Written a final report (1,500 words) on a picturebook of their choice. （和訳）この授業では、専門的な知識を深め、有名なイギリス児童文学の様々な例を詳しく検討します。各授業では、古今東西の様々な作者・挿絵画家が手がけた有名な絵本を取り上げ、受講生が吟味し、ディスカッションを行います。学生たちは専門用語を学び、これらの絵本を説明し評価するための独自の基準を身につけます。友情、回復力、多様性の祝福や受け入れといった共通のテーマについて、登場人物の視点と自分自身の視点の両方から、参加者がペアや小グループで話し合う。 小学生、中学生、高校生レベルの英語指導者を目標としている学生や、文学に興味のある人、自分の子供、あるいは将来の子供と児童文学を楽しむ方法に興味のある人なら、この授業は貴重なものとなるでしょう。 授業終了時まで、受講生は以下を習得する： (i) 有名な児童文学を英語で読み、分析し、ペアやグループでディスカッションする。 (ii) 新しい用語を使って絵本を分析し、コメントする方法を学ぶ。 (iii) 社会問題、友情、多様性の認識と受け入れなど、絵本のテーマについて話し合った。 (iv) 自分の選んだ絵本について、短いプレゼンテーション（20分）を行った。 (v) 自分の選んだ絵本について、最終レポート（1,500字）を書いた。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Techniques for reading and enjoying a picturebook in English	○	Participants will gain knowledge about various picturebook characteristics and author/illustrators, as well as plan and carry out two picturebook read-alouds in class following the pre-reading, during-reading, and post-reading framework. This framework is designed to help instructors nurture the development of learners' language and other cognitive skills through, pre and post-reading discussion, drawing, writing or craft activities, for example. By the end of the course, students will have: 1. Understood the value of interactive picturebook read-alouds in developing various skills. 2. Learnt strategies to facilitate active participation and engagement during read-aloud sessions. 3. Planned, executed and reflected on two practical interactive picturebook read-alouds (30 mins) following the pre-reading, during-reading and post-reading framework. 4. Taken part in in-class and online discussions around the picturebooks and themes presented. 5. Written a final report (1,500 words). This course will be valuable for students training to be English instructors at the primary, junior high, or high school level, as well as anyone interested in literature or ways to share children's literature. （和訳）参加者は、様々な絵本の特徴や作者・イラストレーターについての知識を得るだけでなく、プレリーディング、リーディング中、ポストリーディングの枠組みに従って、クラスで2冊の絵本の読み聞かせを計画・実施する。このフレームワークは、例えば、読書前後のディスカッション、お絵かき、作文、工作などの活動を通して、指導者が学習者の言語能力やその他の認知能力の発達を促すようにデザインされています。 授業終了までに、受講生は以下を習得する： 1. 絵本の読み聞かせが、様々なスキルを伸ばす上で有効であることを理解する。 2. 絵本の読み聞かせセッションに積極的に参加するためのストラテジーを学ぶ。 3. 読書前、読書中、読書後の枠組みに従って、2つの実践的な対話型絵本の読み聞かせ（30分）を計画し、実行し、振り返った。 4. 絵本やテーマについて、クラス内やオンライン上でディスカッションを行った。 5. 最終レポート（1,500字）を書く。 この授業は、小学校、中学校、高校レベルの英語指導者を目指す学生だけでなく、文学や児童文学の伝え方に関心のある人にとっても貴重なものとなるでしょう。	
	International Humanities 3	○	Culture is an idea, a concept, or a set of assumptions, or it is what a group of people make, or it means artistic creations, or it is what shapes and reflects a set of values. Culture, in other words, means many things to many people. In this course we will examine and analyze a variety of ways in which culture can be defined, considered, valued, and otherwise used as a way of understanding human life. Culture, therefore, is not a simple, straightforward thing. By the end of the course, it is hoped that students will never use or hear the word 'culture' without stopping to think about how and why the term is being used. （和訳）文化とは、アイデア、概念、あるいは一連の前提であり、あるいは人々の集団が作るものであり、芸術的創造物を意味し、あるいは一連の価値観を形成し、反映するものである。言い換えれば、文化は多くの人々にとって多くのことを意味する。この授業では、人間の生活を理解する方法として、文化がどのように定義され、考察され、評価され、利用されるか、さまざまな方法を検討し、分析する。したがって、文化とは単純明快なものではない。この授業が終わる頃には、受講生が「文化」という言葉を、その言葉がどのように、そしてなぜ使われているのかを考えることなしに使ったり聞いたりすることがなくなることを期待している。	
	Literature and Society	○	Much of the world's great literature explores the relationship of the individual to society. Some literary works depict the individual in harmony with society while others describe the individual in conflict with society or leaving society behind altogether. In this course we will read and respond to works from a range of time periods and national literary traditions in order to assess how writers have depicted the individual's relationship to society. In the second half of the semester, students will produce a paper based on a topic of their own choosing that treats the topic of the individual and society. （和訳）世界の偉大な文学作品の多くは、個人と社会との関係を探求している。社会と調和する個人を描いた作品もあれば、社会と対立する個人、あるいは社会から完全に切り残された個人を描いた作品もある。この授業では、作家が個人と社会との関係をどのように描いてきたかを評価するために、さまざまな時代や国の文学の伝統から作品を読み、それに反応する。学期後半には、各自が選んだテーマに基づき、個人と社会を扱った論文を作成する。	
	Culture and Fine Arts	○	People sometimes consider fine arts/art in this modern world and their value is universal and invariable. Although it is a somewhat dubious and debatable statement, perhaps this is the most distinctive demarcation line drawn between fine arts/art and fashion! However, reasons and social contexts in which fine arts/art are born and based vary: How we see, think, and feel about art and artworks are not always and necessarily the same. Likewise, the roles and functions of fine arts/art are not the same. Fine arts/art have a history as long as that of human beings. In that long line of the story, it is in modern times that fine arts/art and artworks have come to attract a wider audience, making them feel closer to artworks in their daily lives. During this modern process, people's understanding of fine arts/art has enhanced and changed, while roles, functions, and value of artwork have become diverse. By taking examples from stories relating to fine arts/art and artists and works of art, chiefly from the modern world, the course examines phenomena and social environments where fine arts/art play/ed significant roles. Through these examinations, the course questions (and seeks answers) why people and society create, appreciate and support (or do not support particular) cultural assets called 'fine arts/art'. Students will: - research and discuss the given topics in/out of class. - write comments and thoughts about the topics and share them in class. - give presentations twice (one individually and another in groups). - write the essay twice (mid-term and final. Both individually). * There will be a field trip to art museum. （和訳）人々は時に、この現代世界における美術／芸術を、その価値は普遍的で不変的なものだと思われる。いささか怪しげで議論の余地のある発言ではあるが、おそらくこれが美術／芸術とファッションの間に引かれた最も特徴的な境界線なのだろう！しかし、美術／芸術が生まれ、その基盤となっている理由や社会的文脈はさまざまであり、私たちが美術や芸術作品をどのように見、考え、感じるかは、必ずしも常に同じではない。同様に、美術／芸術の役割や機能も同じではない。 美術／芸術の歴史は人類の歴史と同じくらい長い。その長い歴史の中で、美術／芸術や作品がより多くの人々を魅了し、日常生活の中で作品を身近に感じるようになったのは近代に入ってからである。その過程で、人々の美術／芸術に対する理解も深まり、変化し、作品の役割や機能、価値も多様化してきた。 本講義では、主に近現代の美術・芸術や芸術家・芸術作品にまつわるエピソードを題材に、美術・芸術が重要な役割を果たしている現象や社会環境について考察する。これらの考察を通して、なぜ人々や社会が「美術・芸術」という文化資産を創造し、評価し、支持するのか（あるいは支持しないのか）を問い（答えを求め）ます。 学生は以下のことを行う： ・与えられたトピックについて調べ、クラス内外で話し合う。 ・トピックについてコメントや考えを書き、クラスで共有する。 ・プレゼンテーションを2回行う（個人とグループ）。 ・エッセイを2回書く（中間と期末。）	
多彩な学 び（4 心身への 着目）	認知・行動・身体	○	「心と身体はつながっている」とはよく言われることである。心と身体が相互に影響を与え合うことは心身相関と呼ばれる。本講義は心身相関を軸として進めていく。心身相関の代表として、ストレスや心身症を出発点とし、対人関係を含めこれらに関連する環境や刺激などを私たちはどのように捉え、処理しているのかを学ぶ。さらに、現在の精神科医療における課題や問題とどう向き合うべきかを受講者とともに考えていきたい。	
	認知・行動・身体	○	私たちの心身の状態は、さまざまな神経伝達物質や神経回路の相互作用によって維持されている。この相互作用の動態が、マジョリティアのものから逸脱していると、「障害」とみなされたり、さまざまな生きづらさのもとになったりする。一方で、その逸脱が特別な能力や創造性をもたらす場合もある。本講義では、身近な実例や症例を入りにして、ヒトの心や行動のあり方を自然科学的に探求する方法と、それにより得られた知見の概要を学ぶ。講義は、日常生活にも役立つ内容を紹介し、科学的な思考を無理なく身につけられるように構成する。無意識的に形成してきた「ヒトの在りよう」のとらえ方を見直すことで、社会における多様性を受容・推進する必要性の理解をうながす。心や行動に対する生物学的アプローチに加えて、神経科学と情報科学（機械学習・人工知能など）を組み合わせた技術の動向にも触れ、心とは何か、意識とは何かという問いまで議論を進める。リアクションペーパーを通じて学生とのコミュニケーションと、自主学習を重視する。	
	認知・行動・身体	○	我々は、世界をありのままに捉えているわけではない。視覚認知の話題を中心に、我々の身の回りの事象に深く関連する心理学や認知科学のトピックを紹介しつつ、「心」が外界の情報をどのように処理しているのか解説する。また、関連する他の研究領域の題材や最新の研究トピックも体系的に学び、ヒトの視覚や認知を概観する。	
	心の科学	○	認知心理学は、人間の認識のしくみとその「不思議さ」を探求する。認知心理学は現代心理学における中心的なアプローチであり、人間の認識過程と知識構造について研究が進められている。本講義では、特に高次認知過程（記憶、言語、思考など）に焦点を当てる。また、狭い枠組みにとらわれず、生理心理学、臨床心理学、情報行動心理学、社会心理学、消費者行動心理学など近接領域にまたがった研究を積極的に紹介する。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	心の科学	○	対人場面には、様々な“なぜ？”がある。心理学をどれだけ学んでも、他者あるいは自分自身の心が手に取るようになることはないだろう。だが、行動に潜む心を読み取ろうとすることで、問いに対する何らかの答えは出ると、その後の行動予測にも役立つだろう。本授業ではこのような“心を読み取る姿勢”を、様々な知見を通して習得することを目的とする。	
	心の科学	○	心理学とは人間の心を科学的に解明しようとする学問であり、心理学の研究を通して明らかになっていることは、私たちの日常生活と密接な関わりをもっている。この授業では、様々な心理学の領域を概観し、日常生活での出来事と心理学で取り上げられているトピックとの関連性を紹介する。	
	パーソナリティの心理	○	日本語 人格・性格心理学に関する講義と、簡単に侵襲的でない心理検査の実習から、「その人らしさ」を理解すること、そして個性ある人々が共生し、互いの存在意義を認め合うことの大切さを考えます。心理学の理論的立場の相違や観点も含め、将来的に他者や自己を理解するために役立てられるような基礎的な人格心理学の理論とその歴史も含めて紹介します。	
	パーソナリティの心理	○	パーソナリティの定義と形成過程・構造などに関する理論および理解の方法について解説した後、対人関係・対人行動・心身の健康とパーソナリティとの関連性について、具体的な研究も示しながら考察する。	
	パーソナリティの心理	○	パーソナリティ発達や対人関係の発達など、社会情緒的な側面の発達を中心に概観していく。受講者各人が「これまで」を振り返り、「これから」を展望するためのヒントともなるように、具体的場面と関連づけながら講義を進めていく。生活の中でみられるエピソードの紹介なども、積極的に取り入れていく。授業全体を通じて、受講者各人が「人の発達とは何か」を考えるきっかけを提供したい。	
	対人関係の心理	○	各回では自己と他者の関わりから始まり、対人認知、社会的態度、集団の影響力や対人関係の各段階（親密な関係の形成・発展・維持・崩壊）といったテーマを取り上げる。各テーマの基本的な用語、概念を解説しながら、それらに関する具体的な研究を紹介することで対人関係の諸問題に対する理解を深めていく。人の悩みの多くは、対人関係が原因となる。そのため、「良好なコミュニケーションとは何か?」、「なぜ助けてと言えないのか?」や「空気を読むとは何か?」などの日常生活で感じる疑問にも焦点を当てながら、講義を進める。 講義は主にパワーポイントを用いて進めるが、必要に応じて映像教材なども使用する。毎回の講義の終わりににはコメントペーパーを作成し、提出してもらう。コメントペーパーの作成は、講義で学んだ知識を整理する上で重要であるため、各学生の積極的な取り組みが求められる。	
	対人関係の心理	○	対人関係にはポジティブな面とネガティブな面の2つの側面があり、この2つの側面はいずれも個人の心理的健康と深くかかわっている。授業では、コミュニケーションを基盤に、対人行動や対人関係の展開、あるいはストレスフルな対人関係など、さまざまな視点から理解を深めていく。	
	対人関係の心理	○	社会的存在である人間は、集団を離れて生きられない。集団は協働により係業を達成したり、成員に支援や安心感を与えるが、時として内外に破壊的な影響をもたらす。そうした「集団」で生じるさまざまな現象を、具体例をもとに心理学的に検討する。社会に生きる人間にとって、個と集団の理想的な関係はどうあるべきかを模索したい。	
	心の健康	○	私たちの「健康」は、身体だけでなく、「こころ」のあり方にも大きく影響されます。生きていく中で私たちは、日々の生活における様々な出来事や、それによるさまざまなこころの動きを体験しており、時に「こころの健康問題」に直面することも少なくありません。本授業では、おもに講義形式を通して、人間の一生を視野に入れ、心の健康と問題の境目の見極め方、問題が生じる背景、対策について、紹介していきたいと思います。	
	心の健康	○	日本は高齢社会に突入しました。その長い人生の中では、受験、就職、結婚、出産、そして配偶者の死など様々な出来事があり、たくさんのストレスがかかります。その結果、心のバランスを崩してしまう人も少なくありません。そんな中で我々が健やかに生きていけるように心の健康を考えていきます。知識があれば、防げることもあります。 まず「心の健康」を精神保健（異常心理学）の観点からみていきます。心理学の立場から、自分や家族がその状況に立たされたときにどのように対処できるのか、生きていくヒントを提示していきます。一部の症状については、様々な文化からもその現象を捉え、それが身近なものであることにも触れていきます。その上で、最後には「こころ」の正常と異常というものをトータルに自ら考えられるようにしていきます。	
	身体パフォーマンス	○	映像による鑑賞、ワークショップやディスカッションも交えて、講義形式で行う。 能では詞草（ことば・うた）と身体（肉体、物体）が交差して、独特の多層的な劇構造を立ちあがっている。能という演劇様式の把握ではなく、様式をもたらす表現技法のありようを、個々の作品、特に修羅能について、具体的な表現を踏まえて探つてゆく。	
	身体パフォーマンス	○	国内外で上演されている舞台芸術作品（劇場外での上演も含まれる）の記録映像を見ながら、作り手が何を考え、どのようなプロセスで舞台芸術を創作してきたのか歴史的・理論的に講義する。前半の授業（第1回～第7回）では歴史的に重要な作品および関連文献を取り上げ、舞台芸術を見えるための枠組（フレーム）について考える。後半の授業（第9回～第14回）では、ここ数年間に国内外で上演された作品および関連文献を取り上げ、国内外における舞台芸術および創作環境について紹介し、現代における舞台芸術や劇場環境の在り方について考える。これまで劇場に足を運んだことのない学生をはじめ、舞台芸術に関する予備知識のない学生の受講を歓迎する。	
	ストレスマネジメント	○	ウェルネスレベルの向上には、ストレス対処の知識とその実践が不可欠である。本講義では、ストレスを招かない思考やコミュニケーションスキル、状況に左右されずにウェルネスレベルを高めるスキル、それに様々な心理療法とその背景にある理論や価値観などを講義する。内容は受講生の興味や社会情勢などにより柔軟に対応する。	
	癒しの科学	○	心理療法は一つではなく、様々な心理療法が存在する。「癒し」を根底におきながら、各心理療法を解説する。セルフケアはもとより、他者との共存、共生社会の構築も視野にいて、「癒し」を考えることを目的とする。	
	癒しの科学	○	心理療法は一つではなく、様々な心理療法が存在する。「癒し」を根底におきながら、各心理療法を解説する。セルフケアはもとより、他者との共存、共生社会の構築も視野にいて、「癒し」を考えることを目的とする。	
	スポーツの科学	○	本授業では、スポーツの実践やスポーツに関わる人々の健康を支える科学的な背景を学びます。具体的には、運動器系、内分泌系、免疫系の役割、睡眠やメンタルヘルスの課題、子どもや高齢者特有の問題について取り上げます。また、それらに対する評価方法や対策についても学び、スポーツと健康・科学の密接な関係を多角的に理解します。	
	スポーツの科学	○	世界で活躍するアスリートの心・技・体に焦点を当て、「競技スポーツ」の知られざる全貌に、スポーツ科学の視点から迫る。いまや、トップアスリートの高みへの挑戦に科学の活用は欠かせない。さらなるパフォーマンス発揮（競技力の向上）は、科学者、アスリート、コーチの協働作業によって達成されている。理論（科学）と実践の統合は「トレーニング、現場での経験、情報、観察、問題提起、仮説をもとに合理的な事象を追求し、エビデンスとして確認する、というサイクルを繰り返す、また新たな発見をすることによって、パフォーマンスの向上を図ること」に寄与する。これこそが人にしかできない行為であり、人はそこから学ぶ。本講義では、視聴覚教材（DVD、スライド）などを用いて、競技スポーツの“奥深さ”を明らかにしていく。	
	健康の科学	○	1. 人体の構造と健康を維持する仕組みについて講義する。 2. 代表的な疾病についてそのメカニズムと予防方法・治療方法を紹介していく。 3. 生命に関する倫理的問題についてもいくつか検討する。	
	健康の科学	○	生涯を通じて、スポーツで身体することは、身体の機能が向上したり、その衰えを緩やかにすることもでき、病気の予防でも一助にもなり得る。健康スポーツと向き合うことで、豊かな人生に欠かせない健康・体力とウェルネスを獲得することができる。本講義では、スポーツで、真剣に楽しんで一所懸命に遊ぶために、知っておきたい身体とスポーツの関係を紹介する。また、その具体的なノウハウについても明らかにしていく。安全で効果的なスポーツを実践するための多くの知識を得て、「わたしの健康スポーツ（種目）の実践・ウェルネス」について考える。	
	栄養の科学	○	「食と栄養」を通じて「日常を科学する」知識や視点を持ち合わせるよう講義を展開し、体重管理や競技力向上、健康増進や疾病予防などさまざまな状況下で「食と栄養」についての自己管理を促す知識やスキルを提供する。	
	アンチエイジングの科学	○	1. 生命現象としての老化の基礎を紹介する 2. 加齢に伴う疾病の原因と機序を講義し、その対策を考察する。 3. 現在のアンチエイジング研究の紹介し、今後の研究課題を検討する。	
	スポーツとメディア	○	スポーツ記者を長く務めてきた毎日新聞論説委員が、スポーツとメディアの関係や報道の役割について、自らの経験も踏まえて講義する。インターネットによるSNSの発展でメディアが変革期を迎える中、スポーツジャーナリズムの将来も展望していく。	

別記様式第2号（その3の1）				
（用紙 日本産業規格A4縦型）				
授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 総合系科目）				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	スポーツと社会	○	スポーツがもつ機能や構造や社会を構成するさまざまな要素との関係性について明らかにする。数多くの分野とスポーツの関わり方を示す事例などを通して、普遍的かつ多様な視点からスポーツを考える。	
	スポーツと社会	○	本講では、文化人類学的視点と歴史学的視点でスポーツに関連する様々な事象に接近します。時事的な問題も取り扱うので、国際情勢の変化によって授業内容も変更になる場合があります。	
	スポーツと文化	○	地球上の様々な地域でおこなわれている伝統遊戯（伝統スポーツ）、および、近代スポーツの受容と変容の実相を、異文化交流というグローバルな視点で捉え直します。スポーツを切り口にして、文化創造のダイナミズムを歴史学、および、文化人類学的視点から比較検討します。祝祭的な空間における身体活動の意義を現代的課題と結びつけながら考えます。	
	スポーツと文化	○	毎回の講義にテーマを設定し、各テーマについて、テキストやその他の資料・映像などの情報を基にしながら講義をします。講義終了時には毎回リアクションペーパーに記入してもらい、評価の対象とします。記入内容があまりにも不十分な場合は出席になりませんので気をつけてください。	
	レジャー・レクリエーションと現代社会	○	本講義では、スポーツやレジャーやレクリエーションという文化が誕生した社会的背景とその変遷を歴史社会学的に振り返りながら日本人、とりわけ若者文化・サブカルチャーからみたライフスタイル観やレジャー観の特徴を理解します。毎時の講義では講義テーマに関連した資料をオンライン配布し、スライド提示や映像を活用します。毎時の講義ではリアクションペーパーを提出します。また講義の中間回と最終回に授業内テストを実施します。	
	アウトドアの知恵に学ぶ	○	スライド写真による解説を中心に進みます。テーマに応じて実体標本を回覧し、ゲストスピーカーからより専門的なお話を伺う予定です。本授業で扱う「アウトドア」とは、自然を上手に利用する技術や知恵全般のことであり、テントの張り方やハバベキューの方法といった個別のレジャーテクニックを学ぶ場ではありません。なお「命」についても多く取り上げます。狩猟などの回では人により不快に感じる画像も扱いますが、人間の営みを振り返るうえで避けることのできないテーマですので、ご承知おきください。	
	いのちを健康で彩る智慧	○	（１）ひとつの事象をさまざまな視座から素直に観察する姿勢を育む。 （２）これまでに体験したことのない事象をイメージできる豊かな想像力を育む。 （３）「健康」の概念、「健康」に関する価値観を形成する礎となる。さまざまな専門分野の「知」に触れる。 （４）履修者、ひとり一人が授業で得た気づきを統合し、「Health Humanities」の概念について、自分なりに熟考するとともに、人類の「生」と「健康」への貢献可能性について、さまざまな人生背景を有する履修者とともに考え、語り合い、分かちあう。 （５）一人ひとりの「思考の自律性」を高めるとともに、すべての市民が健康を享受できる世界を創りあげていくために、自らが社会で果たすべき役割を意識づける。	集中
	立教ゼミナール 4	○	This seminar explores modern research on religion, ritual, and charismatic gurus, with a particular focus on evolutionary and cognitive perspectives. While many in Japan and other societies do not follow a specific religion, the majority of people globally believe in gods or belong to religious groups. Rituals, a universal feature of human culture, play a crucial role in fostering social cohesion and cultural identity. This course examines religion and ritual as cross-culturally recurrent phenomena and explores the psychological and social effects of religious belief, ritual participation, and their implications in contemporary society. A key feature of the course is the examination of the growing appeal of charismatic leaders, often referred to as "gurus," and their influence on followers. We also explore the psychological underpinnings of conspiracy theories, which have become increasingly prevalent in the modern era. By investigating these topics, students will gain insights into how charismatic individuals and belief systems mobilize people, foster community, and shape social behavior. The seminar begins with introductory lectures aimed at developing foundational research skills. These sessions establish a strong base for the subsequent detailed study of religion, ritual, and belief systems. As the course progresses, students will engage with key studies, combining theoretical exploration with practical analysis. Over a two-week cycle, we will focus on a significant research study, critically discussing its strengths and weaknesses in the first week. In the second week, we will examine follow-up studies or related research through group discussions and reaction papers, encouraging students to build connections across studies and critically evaluate the literature. Students are required to deliver a 15-20 minute presentation on a selected topic, showcasing their ability to analyze research and communicate findings effectively. Additionally, short reaction papers will be assigned for selected weeks to deepen engagement with the material. As a culmination of the seminar, students will submit a final report on a topic of their choosing, demonstrating their ability to integrate course concepts and critically engage with research. Classes are structured to combine lectures and group discussions, fostering both independent critical thinking and collaborative learning. The course is conducted in English, with materials and discussions tailored to accommodate varying levels of language proficiency. By the end of the seminar, students will have gained a comprehensive understanding of key theories in religion and ritual, developed an appreciation for the role of charismatic figures and conspiracy theories in shaping social dynamics, and enhanced their skills in critical research analysis and effective communication. （和訳）このセミナーでは、宗教、儀式、カリスマの教祖に関する現代の研究を、特に進化論的、認知科学的な視点に焦点を当てて探求する。日本やその他の社会では、多くの人が特定の宗教を信仰していないが、世界的には大多数の人が神々を信じ、宗教団体に属している。儀礼は人類文化の普遍的な特徴であり、社会的結束や文化的アイデンティティを育む上で重要な役割を果たしている。この授業では、宗教と儀式を文化横断的に繰り返される現象として考察し、宗教的信仰、儀式への参加、現代社会におけるそれらの意味合いが心理的、社会的に及ぼす影響を探求する。 この授業の主な特徴は、しばしば「教祖」と呼ばれるカリスマ的指導者の魅力の高まりと、彼らが信奉者に与える影響についてを考察することです。また、現代社会ですます広まりつつある陰謀論についても、その心理的背景を探ります。これらのトピックを調査することで、受講生はカリスマ的な個人や信念体系がどのように人々を動員し、コミュニティを育み、社会的行動を形成しているのかについて洞察を深めていきます。 セミナーは、基礎的な研究スキルを身につけることを目的とした入門講義から始まる。これらのセッションは、宗教、儀式、信念体系に関するその後の詳細な研究のための強力な基盤を確立する。授業が進むにつれて、学生は理論的な探究と実践的な分析を組み合わせて、主要な研究に取り組んでいく。2週間はサイクルとして、重要な研究に焦点を当て、第1週目はその長所と短所を批判的に論じる。2週目には、グループ・ディスカッションやリアクション・ペーパーを通して、フォローアップ研究や関連研究を検討し、学生が研究間のつながりを構築し、文献を批判的に評価することを奨励する。 学生は、選択したトピックについて15〜20分のプレゼンテーションを行い、研究を分析し、発見を効果的に伝える能力を披露することが求められる。さらに、教材への取り組みを深めるために、選択した週に短いリアクション・ペーパーを課す。セミナーの集大成として、学生は選択したトピックに関する最終レポートを提出し、授業のコンセプトを統合し、研究を批判的に扱う能力を証明する。授業は講義とグループ・ディスカッションを組み合わせで構成され、自主的な批判的思考と共同学習の両方を育む。 授業は英語で行われ、教材やディスカッションはさまざまな語学レベルに対応できるよう調整される。セミナー終了時には、学生は宗教と儀式における主要な理論を包括的に理解し、社会学の形成におけるカリスマ的人物や陰謀論の役割に対する理解を深め、批判的な研究分析と効果的なコミュニケーションのスキルを高めることができる。	
	立教ゼミナール 4	○	本講義では、データサイエンスの分野における一般的な課題と事例を紹介し、それらを解決するデータサイエンスの手法を紹介する。各自、特定業界のデータ活用の実態を調査し、授業内で発表する。	
	立教ゼミナール発展編 4	○	日常生活で意識することの少ない人体の構造や力学的特性を学んで「身体への気付き」を促し、健康管理ツールとしてのストレッチや筋トレを、初級レベルで使えることを目標としたい。運動技術の習得をゴールとするのではなく、学生間の議論と共有体験を通じて各人が「カラダを探索する」入口に立てることを重視する。講義全体を通して、下記のテーマに対して多様な視点からアプローチしていく。この授業を通じて、肩こりや腰痛は自分自身で治す、予防するという意識を育んでほしい。 ・筋肉量を増やして見た目を改善することは、必ずしも機能的な向上には直結しない。形態学的改善と機能的改善の両者の要素を考慮しつつ筋トレすることが理想である ・筋肉は重層構造を成し、表面から触ることのできない深部筋への働きかけが重要である ・全身の筋肉や関節は、お互いが影響しあうシステムとして機能しており、痛みや不調の原因が該当部位以外に存在する ・自身の身体の状態を常に把握し、筋トレやストレッチを通じて自身で調整する習慣の重要性を理解する	
	立教ゼミナール発展編 4	○	本講義は禅における知性と霊性について、心身両面からの理解を試みる。そのため各回で授業を前半と後半に分け、前半では坐禅の実習を行い、後半で禅についての講義をする。禅を無分別智（霊性）と分別智（知性）の総合的把握とした場合、前半の坐禅は身体を通じた霊性へのアプローチ、後半の講義は禅の知性の把握として位置づけられる。坐禅の時間では伝統的な臨済禅の坐禅を中心に実修し、それだけにとどまらず上座部系のヴィパッサナー瞑想やマインドフルネス瞑想を取り入れることで、多様な坐禅を体験する。後半の講義においては、最先端の禅研究を踏まえて禅の思想史について学ぶ。単なる禅宗の教義ではなく、我々の日常の実践と関わる倫理思想史として、各時代・各地域の禅を紹介していく。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Japanese Mind	○	This class will provide an in-depth understanding of community challenges and adversity through the lens of the lecturer's first-hand research and experience in various communities both inside and outside of Japan. It will explore how different community issues are addressed at the grassroots level by examining: 1. The impact of natural disasters such as the Christchurch earthquakes and the Tohoku earthquake on local communities. 2. Local community development projects and education in Kenya. 3. Student led community development projects in Saitama. 4. The impact of tourism on local communities in Japan. Following each lecture, students will be encouraged to share their own perspectives and opinions on these issues through reaction papers and class discussions. Specific questions will be posed to provoke debate and encourage students to share their own ideas on how to address local community challenges. (和訳) この授業では、講師の国内外の様々なコミュニティでの実地調査や経験を通じて、コミュニティの課題や逆境について深く理解する。この授業では、様々な地域社会の問題が、草の根レベルでどのように取り組まれているのかを検証する: 1. クライストチャーチ地震や東日本大震災などの自然災害が地域コミュニティに与えた影響。 2. ケニアにおける地域開発プロジェクトと教育 3. 埼玉県における学生主導の地域開発プロジェクト 4. 日本における観光が地域社会に与える影響 各講義の後、リアクション・ペーパーやクラスでのディスカッションを通して、これらの問題に対する学生自身の視点や意見を共有することを奨励する。また、討論を誘発するような具体的な質問を投げかけ、地域社会の課題への取り組み方について、学生自身の考えを共有するよう促す。	
	Understanding Speech Sounds 1	○	This course covers basic articulatory phonetics. Students will firstly learn speech anatomy and physiology. Then they will learn phonetic transcription (IPA) and description of consonants and vowels. They will also learn suprasegmental features, such as stress, rhythm and intonation. (和訳) この授業では、基本的な調音音声学を学びます。まず、音声の解剖学と生理学を学びます。次に、音声学 (IPA)、子音と母音の表記を学びます。また、ストレス、リズム、イントネーションなどの超分節の特徴についても学びます。	
	Understanding Speech Sounds 2	○	This course introduces basic acoustic phonetics. Students will firstly learn sound wave and waveforms. Then they will learn characteristics of sounds, such as pitch, loudness, duration, and quality. Then students will learn the production of speech and acoustic properties of vowels and consonants. They will also learn how to use a phonetic application called praat. (和訳) この授業では、基本的な音響音声学を紹介します。まず、音の波と波形を学びます。次に、音の高さ、大きさ、長さ、音質などの音の特徴を学びます。次に、音声の生成と母音・子音の音響特性を学びます。また、プラートと呼ばれる発音アプリケーションの使い方も学びます。	
	Applied Data Science with the focus on Sport and Wellness	○	本講義では、データサイエンスの分野における一般的な課題とそれらを解決するデータサイエンスの手法を学ぶとともに、スポーツにおける応用事例についても理解を深める。また、プログラミング言語であるPythonやデータ可視化ツールのTableauなどに触れ、データ分析の演習も行う。	
	Health Science	○	This course is designed to provide students with a foundation to understand how to promote health and well-being through physical activity. The course consists of lectures, tutorial, and practical sessions. (和訳) この授業は、身体活動を通じて健康と幸福を促進する方法を理解するための基礎を身につけることを目的としている。授業は、講義、チュートリアル、実習で構成されています。	
	Health and Wellness	○	The course content is designed to guide students becoming leaders in health and wellness through physical activities. (和訳) 授業内容は、受講生が身体活動を通じた健康とウェルネスにおける指導者としての技能を身につけることができるようにデザインされています。	
	数学の世界	○	整数は身近な数でありながら様々な性質を持ち、現在でもいくつもの側面から研究が進められている数学的な対象である。この授業では、整数の割り算とその余りに注目して、素数の持ついくつかの性質について解説する。応用として、インターネット社会に不可欠な暗号技術の基本原理を紹介する。	
	数学の世界	○	「確率」は日常的にもよく使われる単語であるが、数学では「集合と写像」の言葉を用いて、厳密に定義される。確率に限らず、自然科学を記述する言語としての数学では、集合と写像の言葉は必要不可欠である。この講義では、確率の基礎事項の学習と並行して、集合と写像および集合の濃度の基礎事項について学ぶ。	
	数学の世界	○	まず前半は確率の話題を紹介していく。この中でいくつかの確率分布、平均、分散の計算の方法を紹介するが、必要事項を適時補足しながら進める予定である。後半は統計の話題を予定している。	
	数学の世界	○	グラフ理論は電車の路線図など現代社会において様々な場面で使われている。 本講義では、前半にグラフの定義や基本的な性質を学び、後半ではその応用例について学ぶ。	
	宇宙の科学	○	現代の宇宙科学は、電波からガンマ線に至る全電磁波領域で観測が行われ、宇宙の構造と進化の理解が進んできた。この授業では、最新の観測結果に基づいて、現代天文学の宇宙観、すなわち地球、太陽系、恒星、銀河、銀河団の誕生と進化、宇宙の起源について学ぶ。	
多彩な学び（5 自然の理解）	宇宙の科学	○	太陽系外宇宙の構造はどうなっているのか、それはどのような方法で、調べられたのかを学習する。太陽以外の星から始まり、我々の銀河系内の構造、それから、我々の銀河系外の銀河や銀河団について学ぶ。さらに、宇宙の膨張について、現代の科学でわかっていること、我々の身の周りにある元素の起源についてわかっていることを学修する。	
	宇宙の科学	○	太陽は惑星に対して電磁的エネルギーを供給しているが、その他にも太陽風という超高温の気体を放出しており、それが磁場を持つ惑星（水星、地球、木星、土星など）と磁場を持たない惑星（金星、火星、月、彗星、小惑星など）とプラズマを通じて相互作用している。その結果、磁場を持つ惑星では美しいオーロラ現象が見られる。授業では、何故そのような相互作用が起こるかを初学者にも理解出来るように解説する。授業の中でコメントカードの記入、および解答の時間を多く取り、理解を推進する。	
	宇宙の科学	○	現代宇宙物理学のえがく宇宙を概観します。宇宙の構造と成り立ち、その中で生まれた天体にはどのようなものがあるか、宇宙とヒトはどのように関わっているか、またその知識がどのような苦勞の果てに得られたか、紹介します。	
	生命の科学	○	地球上の多様な生物にも、共通の「生命のしくみ」がある。まず、生命現象を作り出すタンパク質や遺伝を司るDNAのしくみについて、身近な事例を絡めて概説する。さらに、応用的な内容として、生命の進化やその多様性、さまざま環境に生きる微生物研究やタンパク質工学研究などを紹介し、ライフサイエンス技術と社会との関わりについて考えていく。おもにパワーポイントを用い、グラフィックスや動画を交えた講義を行う。	
	生命の科学	○	個体レベルから細胞レベルまで、生命科学に関して広く理解する。その上で、生命科学的技術が我々の社会にどう貢献しているのかを知り、今後何ができるのかを考える。義務教育以来、生命科学分野になじみのない学生にもわかりやすく、かつ、最新の生命科学現象にも触れられるような構成にする。	
	生命の科学	○	本講義では最初に免疫を理解するための基礎として、細胞や遺伝子などについて学ぶ。さらに、免疫について学んだ後、免疫が関わる様々なトピックについて紹介する予定である。	
	生命の科学	○	生物共通のあるいは各生物特有の「しくみ」について概説し、その理解の上に、私たち自身及び私たちの周りの生命現象に関して、その機構や意義を解説する。時には専門的な領域にまで踏み込んだ解説を行うが、本質的な理解にはそれが必要であるところであってほしい。生命現象に対して問題意識を持ち、それを論理的にとらえようとする姿勢が望まれる。生物は物質から成り立っているので、化学的な観点からの解説も織り込む予定である。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	生命の科学	○	・前半はゲノム、タンパク質、細胞といった生命科学の基礎的な内容を盛り込みながら合成生物学とはどのような学問なのかを紹介する。実際のバイオ実験なども体験。 ・後半は、合成生物学の未来および産業としての可能性について、医療、ビジネス、倫理面を中心に、スタートアップ創業 & Exitの実体験(米国モデルナ社によるオリシロジェノミックス社の買収)も交えて解説する。キャリア、アントレプレナーシップを意識した内容。 ・googleフォームを介したリアルタイム双方向コミュニケーション。	
	物質の科学	○	『未知な事象に興味を持つ心』（好奇心）は科学技術を発展させるために必要な原動力です。本講義のテーマでもある『私たちの世界を構成する物質』は人類にとって最も根源的かつ重要な問いと言えます、古くから科学者の好奇心を駆り立ててきました。先人の努力の結果、現代では既に多くの謎が解かれています。本講義では、この根源的な問いに関して人類が解き明かしてきた解釈を、時には最新の研究を紹介しながら解説します。理科系科目(物理・化学・地学・生物)の既習の有無は問いません。	
	物質の科学	○	私たちが日常的に使用しているコンピュータは、力学や電磁気学といった古典物理の法則に基づいて動作しています。しかし、ミクロの世界、つまり原子や分子のレベルの現象を記述するためには、「量子論」と呼ばれる、古典物理を超えた新しい法則が必要です。量子コンピュータとは、この量子論の法則を利用して計算を行う新しいタイプの計算機です。その設計思想は、アインシュタインやシュレーディンガーといった科学者たちが展開した、量子論の基本原則に対する深い思索や批判的思考と密接に関わっています。このため、量子コンピュータを学ぶことは、量子論を深く理解することにも繋がります。この講義では、量子力学や線形代数を習ったことのない人向けにを対象に、基礎的な内容から丁寧に解説を進め、量子コンピュータの物理の初歩を概観します。	
	物質の科学	○	この宇宙は何からできているか、私たちが何からできているか知りたいという好奇心は、科学の最初の動機であり、最終的な目標です。最近の科学のめざましい進展により、物質を構成する原子の構造から宇宙の進化の過程まで、多くの現象が説明できるところまできました。しかし最近得られた観測データは、宇宙に正体不明の膨大なエネルギーが満ちていることを示唆しています。人類は宇宙の数パーセントしか知らないことが明らかとなっていました。私たちが現在何を知っていて何を知らないのか、科学の進展を振り返りながら概説します。	
	身近な物質の化学	○	我々の身のまわりにある様々な物質あるいは化学現象がどのような性質に基づいて利用されているのか、そして労働現場における化学物質管理について講義の中で紹介する。	
	身近な物質の化学	○	本授業では、化学物質の法規制、危険性、有害性について解説し、さらに摂取量を考慮したリスク評価、リスクコミュニケーションへ展開する。リスクの考え方は、社会において専門的な判断をする際の幅広い考え方へ繋がることも講義する。化学物質を安全に利用するための情報の調べ方にも触れる。持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）など国際的な取り組みについても紹介する。	
	身近な物質の化学	○	本講義は、高校化学を履修していないことを前提に、大きく3つのパートで構成される。第1部では、原子や分子の構成や性質について学ぶ。第2部では、原子や分子の性質を知るために必要な手法について学ぶ。第3部では、原子や分子を組み合わせて物質をつくりだす技術について学ぶ。	
	化学と自然	○	空気、オゾン、二酸化炭素、エネルギーと化石燃料、水、原子力ならびに代替エネルギーなどをテーマに、それぞれ2回にわたって講義する。それぞれのテーマに関連する化学の基礎知識について解説し、それをもとに将来の予測、可能性について考える。	
	化学と自然	○	化学結合、物質の構造、化学反応を網羅的、羅列的ではなく、原子・分子のレベルでとらえて、系統的に理解するために基礎から講義をする。特に、前半は、原子中の電子、周期表や化学結合など基礎的な内容を段階を踏んでゆっくりと講義する。それらを土台にして、後半では、物質の色、物質の反応、大気の温暖化効果やオゾンホールなどを理解出来るように講義する。	
	行動の科学	○	ヒトを含む動物は多様な行動をしているが、それにはどんな意味があるのだろうか？本講義では、動物の行動にどのように進化したかを考えていく。遺伝子の話なども出てくるので中学理科程度の知識はあったほうがいいかもしれないが、生物学の専門的知識は特段必要としない。ヒト以外の動物の話がほとんどなので、ヒトにしか興味がない場合には受講しないことを強く推奨する。また、授業中に睡眠と格闘することなく安らかに寝る人間も受講しないことを非常に強く推奨する。	
	行動の科学	○	スライドとビデオを使用し、進化論と動物行動の適応的意義について講義する。また、最新の論文などを紹介する。また、現代社会問題を取り上げ、それらを生物学的観点から考察した際に浮き彫りとなる人間社会特有の異常現象についても議論する。	
	生命の歩み	○	ーこれは私たち“ヒト”へと繋がる長い長い生命の物語ー 古生物学は私たちの生活と無関係に思える学問ですが、ヒトの身体には長い進化の歴史が詰まっています。私たちになぜ眼があり、なぜ骨格があり、なぜ二足歩行を行うのでしょうか？この授業では私たちヒトの身体に見られる様々な器官や構造が生物の進化の歴史の中でいつ獲得され、どのように引き継がれ、そして、ヒトという特異な生物がどうして誕生したのかについて地球史や生物進化の歴史を通じて学習していきます。沢山の不思議と出会いながら、生物としての“ヒト”とは何かを考えてみましょう。 【キーワード】古生物学、進化、地球史、骨学	
	生命の歩み	○	ーこれは私たち“ヒト”へと繋がる長い長い生命の物語ー 古生物学は私たちの生活と無関係に思える学問ですが、ヒトの身体には長い進化の歴史が詰まっています。私たちになぜ眼があり、なぜ骨格があり、なぜ二足歩行を行うのでしょうか？この授業では私たちヒトの身体に見られる様々な器官や構造が生物の進化の歴史の中でいつ獲得され、どのように引き継がれ、そして、ヒトという特異な生物がどうして誕生したのかについて地球史や生物進化の歴史を通じて学習していきます。沢山の不思議と出会いながら、生物としての“ヒト”とは何かを考えてみましょう。 【キーワード】古生物学、進化、地球史、骨学	
	生命の歩み	○	ホモサピエンスの出現、進化、多様性を学び、ヒトという生物の弱みや強みを理解する。	
	地球の理解	○	前半は将来世代からの借り物である地球と温暖化による雪氷圏の変化について扱う。中盤では複数の時間軸で見た環境の変化と文明崩壊の事例と移住の可否を地球史や宇宙の俯瞰によって学ぶ。後半では、温暖化の認知史やエネルギー問題について受講者間の議論や発表によって探究する。	
	地球の理解	○	地球がどの様に誕生して進化してきたか、構造はどうなっているのか、地表や地球内部で起こる様々な地球科学現象がどういった仕組みで起こるのか等について映像や写真をまじえながら紹介する。それぞれの内容に関し、それがどういった観測や実験に基づいて明らかにされてきたのかについて解説する。教科書等に記載されている基礎的な内容に加え、専門誌に発表されたばかりの最新の研究成果についても紹介していく。	
	地球の理解	○	地球と他の惑星を比較し、地球の特殊性と普遍性を考える。太陽系の惑星や太陽系外惑星から地球を考えることで、地球を理解する。	
	情報科学A	○	セキュリティ脅威には物理的脅威、技術的脅威、人的脅威が含まれるが、その中から故障や経年劣化を含む物理的脅威と人的脅威の中でも人が意図なく引き起こす偶発的脅威を扱う。物理的脅威として処理速度の低下や故障、保存したデータの消失をとりあげ、これらが生じる要因として演算処理装置やメモリ、SSDなどの保存媒体の仕組みや特徴について説明するとともに、情報漏洩を防ぐためのデータ抹消方法、インシデントの発生に際して証拠となるデータの復元や抽出などを行うコンピューター・フォレンジックについても紹介する。 また不正利用を防ぐための知識・所有・生体認証をとりあげ、各認証要素の特徴と問題点、またその問題点への対処方法およびリスク対策が逆に偶発的脅威を引き起こす事例について説明することで、安全性と効率性のバランスをとりつつセキュリティコントロールするためのポイントを習得する。	
	情報科学A	○	情報処理の「仕組みや原理の理解」を目的として、情報のデジタル化の概念からコンピュータの基本的な機構、マルチメディアシステム、ネットワーク、人工知能の基礎な事項などについて学ぶ。	

別記様式第2号（その3の1）					（用紙 日本産業規格A4縦型）	
授 業 科 目 の 概 要						
（全学共通科目 総合系科目）						
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容		備考	
	情報科学A	○	コンテンツのデジタル化には機器の処理能力と再現性の関係だけでなく、再生されたコンテンツを知覚する人間側の認知も影響している。デジタル化の過程と2進数符号化の利点と選択情報量、人の音声や色の知覚処理とコンテンツ表現、量子化誤差の影響と拡散に関する方法や理論的背景を通して用途・目的に応じたデータ処理の特性を学ぶ。 またトランジスタを中心にハードウェアを構成する機器の動作と特徴について学ぶことでコンピュータの可用性の問題についても理解を深める。			
	情報科学B	○	不正アクセスなどの技術的な攻撃とCookieを利用した情報収集の背景にあるネットワークプロトコルや社会とネットワークの関わりについて説明する。 (1) ネットワークプロトコルと攻撃 TCP/IPモデルの階層毎にプロトコルが規定する通信手順の目的と役割を、その必要性も含めて理解した上で、手順に潜在する脆弱性と実際に脆弱性を利用する攻撃の手段について学び、不正利用の防止や対処に必要な視点を得る。 (2) Webサイトにおける行動履歴の管理と情報収集 本来その場の人材によってのみ出力が決まる方式だったWebサイトのプロトコルが社会的な状況変化に伴い、過去の状態の反映と個人個人の行動の継続的管理が必要となっていた。その経緯と行動履歴の管理方法について説明するとともに、情報の収集・管理による利便性の向上と行動履歴の個人情報化やプライバシー侵害の問題、また収集に対する規制の現状についても紹介することで情報の自己コントロールを巡る社会的動向について考える。			
	情報科学B	○	主に人間や社会にかかわる側面についての情報処理技術が与える影響を学ぶものである。コミュニケーションの基礎知識からインターネット、IoT、マルチメディアシステムなどの構造・利用方法・影響などについて学ぶ。また、計算論的思考(Computational Thinking)の基礎となる知識を学ぶ。			
	情報科学B	○	TCP/IPモデルのプロトコル群を中心に、1950年代以降のコンピュータやネットワークの変化を踏まえつつ、現在のインターネットの特徴と代表的なプロトコルの役割やインターネットサービスを実現する仕組み、またその仕組みに潜在する脆弱性について説明する。また脆弱性を利用した攻撃への対応、情報機器の進化やネットワーク利用状況の変化など対応したプロトコルの変化についてもあわせて取り上げることで、社会と情報環境との関わり方について考える。			
	自然環境の保全	○	文明・科学技術の進展とグローバル社会の拡大に伴い、膨大な原材料や物資調達のための過剰な資源開発が全世界で進行中である。それは地球上に存在する自然環境や生物多様性に危機をもたらしている。この講義では、アフリカの熱帯雨林を事例に、われわれ人類の祖先が生み出した本来の自然環境や生物多様性の機能や役割を学びつつ、資源開発に伴う地球規模の自然界への脅威だけでなく従来から自然界に依拠し長大な年月に渡り持続可能な自然環境保全を実践してきた先住民族への土地・人権侵害などについても話題提供する。とりわけ大量の資源を輸入依存に頼る日本の責任は重い点から、日本人として何ができるのかを考察する機会をも提供する。			
	生物の多様性	○	スライドとビデオを使用し、進化学的観点から生物多様性について講義する。大学校内での生物観察や生物標本を用いた講義も行うことがある。一部の講義で分子生物学の内容を含むが、基礎から解説するので心配しなくてよい。			
	生物の多様性	○	生物学は「普遍性」と「多様性」が両輪となって発展している。これらはいかに密接に関係し合っている。本講義はこの多様性に着目し、様々なスクール（分子レベルから地球規模まで）の生物学を俯瞰することを目指す。また、最新の生物学の研究について関心を高めることも目指す。			
	地球環境の未来	○	この講義では、地球環境の成り立ち、様々な地球環境問題の原因やしくみ、影響等、地球環境の現状について学び、理解を深めます。また、私たちの日常生活は地球環境と密接に関係していることを念頭に置きながら、地球環境の未来を考えていきます。さらに、持続可能な社会のために今後望まれる解決策や個人でできる取り組みについても議論を進めます。			
	自然と人間の共生	○	北東アジア6ヶ国の市民が国境を越えて手をつなぎ、2001年から現在まで継続して取り組まれている平和教育キャンプがあります。『Kids' Asian Union Camp』と呼ばれるその国際キャンプは、2000年秋に3人の日本の若者によって始まりました。韓国やモンゴルの仲間の協力を得ながら1年後の2001年秋に第1回目のキャンプを日本で開催しました。以後、毎年1回、北東アジア各国を巡回しながら継続的に開催されています。6ヶ国からの参加者数は延べ1976人に達しています。毎回のキャンプでは6ヶ国から参加した100人ほどの参加者たちが、まったく異なる言語が飛び交う中、生活習慣などお互いの「違い」に触れながら1週間程度のキャンプ生活を共に過ごします。多様性に満ちあふれた時間と空間を共有するこのキャンプを通じて、参加者はお互いの「違い」が豊かな世界や未来への希望を生み出す「種子（種）」であることを体験から学びます。そして、同じ人間としての共感を深め、友情を育てていきます。この授業では、『Kids' Asian Union Camp』の理念、組織、スタッフ、活動内容、参加者の声を通じて、平和や教育について考え、持続可能なアジア地域の未来像を探っていきます。			
	脳と心	○	まず、脳の構造と機能についての基本的な情報を提供する。その上で、心理学の研究分野の中でも特に脳科学からのアプローチが盛んなくつかのテーマを取り上げ、今日までに得られている知見を各論的に解説していく。その際、できるだけ具体的な事例や実験結果を紹介する予定である。基本的な知識を身につけるとともに、現代の脳科学がどこまで人の心の働きを解明しているのかについて理解することを目指す。			
	オーダーメイド医療最前線	○	「オーダーメイド医療」とは、狭義には、個人個人の遺伝子の形質に合わせた薬剤や治療法などを選択する医療のことを指します。広義には、人間の生き方次第に方も個人の価値観が尊重されるという考えに基づき、生老病死へのあらゆる医学的介入を自律的に選択していくことを意味します。 そのような個人のニーズに合わせた「オーダーメイド医療」は、より効率的な治療効果が期待される一方で、遺伝子偏重の見方を含め、私たちの生命観や健康観に大きな影響をもたらす可能性があります。また、個を大切に、国家や社会に不当に制約・疎外されない自由な生き方を希求することは基本的な権利ですが、方向性を誤れば、格差を助長し共存存在としての他者理解を阻むことも危惧されます。 本講では、人間の幸福追求と先端医学科学技術の利用との間の多層的問題に触れ、ともに考える時間を持ちたいと思います。			
	大学と科学技術	○	社会における大学と科学技術の歴史を、古代ギリシアから現代まで辿っていく。その過程で、リベラルアーツとは何か？大学がどのように登場したのか？科学、技術、科学技術のそれぞれの違いについて、大学で科学技術が研究されるようになった背景について学ぶ。講義は、講師との対話やスモールディスカッションを挟みながら進められる。最終回は、テーマを決めたディスカッションを行い、本授業での学びを受講者自身でまとめるとともにレポート課題の準備を兼ねる。			
	大学と科学技術	○	原子力や放射能、遺伝子操作、化学物質汚染など、科学技術が絡む現代社会のさまざまな問題をどのように読み解けばよいのだろうか。大学・アカデミズムと科学技術との関係を解きほぐしながら、科学史や科学社会学などの科学技術論の視点を紹介し、社会的側面から考察する。また、それらを大学・学問のあり方と絡めて考えていく。			
	化学と社会	○	現代社会の直面する課題として、化学物質が原因となっている環境問題を取り上げ、物質と社会との関わり合いについて、自然科学の立場から考察を加える。また、化学が対象として来た物質とその社会とのつながりについて、「文明と物質」という観点から学習する。さらに、化学物質や原子力によるエネルギー生産についても触れる。物質-人間-社会の強い結びつきが現代社会を支える重要な要因の一つであることについて、学際的な理解を求める。			
	カーボンニュートラル人材育成講座	○	受講生の皆さんには、リアルな課題に取り組んでもらいます。今年度は、地域と本学が連携しながらカーボンニュートラルを実現するにはどうすればよいか、という点に関連する具体的な課題を皆さんに投げかけます。皆さんには、授業を通じて課題解決に役立つ知識を学んでもらい、グループワークによって課題に対する自分たちのアイデアを練り上げ、最後にそのアイデアを披露してもらいます。こうした実践的な学びを通じて得られる力は、皆さんの社会課題解決への思いを実現していく上できっと役立つはずです。この授業では、第一線で活躍される方々にゲストスピーカーとして来ていただき、皆さんの学びをサポートします。本学キャンパスにおける関連施設の見学なども取り入れる予定です。なお、グループを作りますので、最後までこの授業を受講する気持ちのある方だけに参加してもらえればと思います。		共同	
	立教ゼミナール5	○	人類と環境の関連性は、多角的な視点から考察することが重要である。環境が人類の生活や社会に与える影響だけでなく、人類の行動が環境にどのような変化をもたらしているのかを理解することが求められる。そのため、本授業では、これらのテーマを歴史的、科学的、社会的、倫理的な観点を含め、さまざまな側面から総合的に探求する。			
	Science Studies	○	本講義では、各種の自然の脅威（ハザード）によって生じる様々な現象を理解するとともに、それらが社会に与える負の影響（障害・被害）を最小限に抑えるためのハードとソフト対策、さらに発災時のタイミングを有効活用した「より良い復興（Build Back Better）」を実現する総合的災害管理について学ぶ。また防災の担い手である「自助・共助・公助」の関係と今後の在り方についても学ぶ。			

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Nature of the Earth	○	The course "Nature of the Earth" addresses a broad and rich body of subject matter. The Sciences of Geology, Astronomy, Meteorology, Climate and Oceanography are all included within the purview of Earth Science. Therefore, the following contents will be included in the overall curriculum but may be weighted to varying degrees in individual course sections. (和訳) 本授業では、幅広く豊かな題材を扱っている。地質学、天文学、気象学、気候学、海洋学はすべて地球科学の範囲に含まれる。従って、以下の内容はカリキュラム全体に含まれますが、個々の授業・セクションで比重が異なる場合があります。	
	Understanding of Agricultural Science	○	We are currently facing to several agricultural problems coming from climate change, population pressure, resource limitation, and so on. This course will be helpful to understand the history and current issues on agriculture and agricultural science. Based on the comprehensive understanding of those points, we will discuss how the agriculture should be practicing. (和訳) 私たちは現在、気候変動、人口増加、資源不足など、農業にまつわるさまざまな問題に直面している。本講座は、農業と農学に関する歴史と現在の問題を理解するのに役立つであろう。それらを総合的に理解した上で、農業のあり方について議論する。	
	Importance of Global Plant Health	○	Plants are essential of human beings, making up 80% of the food we eat. Food plants (crops) are suffering from diseases, pests, and weeds; consequently, 20 to 40% of crops are destroyed in every year. Along with a development of transportations leading to an active inter- and intra-national trading and travelling, we must pay attention to reduce a risk of plant pests and diseases spreading. (和訳) 植物は人類にとって必要不可欠なものであり、我々が口にする食料の80%を占めている。食用植物（農作物）は病気や害虫、雑草に悩まされ、毎年20～40%の農作物が壊滅的な打撃を受けている。交通の発達による国家間・国家間の取引や移動の活発化に伴い、植物の病害虫が蔓延するリスクを減らすために、私たちは注意を払わなければならない。	
	Ecology:Environment and Sustainability 1	○	Contents: Overview of Ecology and environment issues Biodiversity Ecosystem Services Climate change Renewable Resources Circular Economy (和訳) エコロジーと環境問題の概要 生物多様性 生態系サービス 気候変動 再生可能資源 循環型経済	
	Ecology:Environment and Sustainability 2	○	Travel and transportation Food Fast Fashion Sustainable lifestyles Housing (和訳) 旅行と交通 食べ物 ファストファッション 持続可能なライフスタイル 住宅	
	Topics in Natural Science	○	Students will gain a broad understanding of life sciences from the individual level to the cellular level. They will then know how knowledge and technology of life science contributes to our society and think about what we can do in the future. The course will be structured so that students who do not have enough fundamental knowledge with the field of life sciences can easily understand, and we will touch upon the latest life science phenomena. (和訳) 個体レベルから細胞レベルまで、生命科学に関して広く理解する。その上で、生命科学的技術が我々の社会にどう貢献しているのかを知り、今後何ができるのかを考える。義務教育以来、生命科学分野になじみのない学生にもわかりやすく、かつ、最新の生命科学現象にも触れられるような構成にする。	
多 彩 な 学 び （ 6 知 識 の 現 場）	全学共通科目総合系科目 G L 1 0 2	○	本講座は大きく3つの内容を取り扱う。1つ目はリーダーシップが身につくメカニズムの理解である。具体的には「人はどのように成長するのか」に関する理論を理解し、リーダーシップが身につくプロセスについての理解を深める。2つ目はリーダーシップを開発する方法について理解する。具体的には「人の成長を促す関わり方」に関する理論を理解し、ファシリテーションやコーチング等の具体的な関わり方の方法・スキルについて学ぶ。3つ目は他者のリーダーシップ開発を促す実践である。理論を頭で理解するだけでなく、実際に他者に関わることで、実践できるようにする。授業は講義だけでなく、グループワークを中心に行う。 なお、本授業の「他者のリーダーシップ開発」における「他者」とは、後輩・同僚・先輩・上司などさまざまな宛先を想定している。また、通常「他者のリーダーシップ開発」は、一人で行うものだけでなく、組織や上司の目標を認識した上で、連携しながら実施するものである。授業では上述した視点も含めて「他者のリーダーシップ開発」について学ぶものである。GLP科目はさまざまな学部・学年の学生が受講可能のため、その文脈に合わせて授業内容を適宜修正しながら授業を行う。	
	G L 1 0 3	○	・人間特性の理解と、効果的なコミュニケーション方法の理解する。 ・基本的な自己理解・他者理解のフレームを理解する。 ・人を動かす方法を理解する。 ・実践的な題材とグループワークにより、リーダーシップを開発する	
	G L 1 0 4	○	(1)論理思考の基礎を習得する - ロジックツリーを使って考えるプロセスを身につける (2)有効なアイデアをモレなく考え出す手法を学ぶ (3)相手に理解してもらえる伝え方を習得する (4)実践的な題材とグループワークにより、リーダーシップを開発する	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	GL111	○	You will work in small teams (5-6 people) on projects jointly developed by GLP and a client company/organization. Through the project, you will develop a new proposal to tackle the challenge brought by the client. During the project, you will be able to learn and reflect on your experience from various perspectives, and through mutual feedback and dialogue with your team mates, you will be able to get valuable and practical learning for life. Each class consists of students from various departments, years (junior year, sophomore year, etc). In this diverse setting, everyone is required to demonstrate leadership skills, such as setting own goals, helping each other, and taking your own initiative. All students will continue to be challenged to think and act on their own and contribute to a common goal defined with the team members, rather than just working on what is given. Eventually, all of us will be expected to support the leadership development and leadership practice of others, beyond the project team in the class. *The plan of the course and the sequence of the contents may be subject to change depending on the project theme and the progress of the group work. (和訳) GLPとクライアント企業・団体が共同で開発するプロジェクトに、少人数のチーム（5～6名）で取り組みます。プロジェクトを通じて、クライアントから持ち込まれた課題に取り組むための新しい提案を開発します。プロジェクト期間中は、様々な視点から学び、自分の経験を振り返り、チームメイトとの相互フィードバックや対話を通じて、人生に役立つ価値ある実践的な学びを得ることができます。 各クラスは様々な学部、学年（3年生、2年生など）の学生で構成されています。この多様な環境の中で、自ら目標を設定し、助け合い、主体的に行動するなど、リーダーシップを発揮することが求められます。与えられたことに取り組むだけでなく、自ら考え行動し、チームメンバーとともに定めた共通の目標に貢献することが、今後も全学生に求められます。最終的には、クラス内のプロジェクトチームだけでなく、他のメンバーのリーダーシップ開発やリーダーシップ実践をサポートすることが期待されます。 *プロジェクトテーマやグループワークの進捗状況により、講座の計画や内容の順序を変更する場合があります。	
	GL201	○	講義・演習・プロジェクトワークを通じた相互理解と調査に関する質問力を理解する。 実践的な題材とグループワークにより、リーダーシップを開発する	
	GL202	○	In this course, you will: 1. Deepen the understanding of yourself and your leadership style. 2. Practice inquiry skills in multiple of “Action Learning (Inquiry conference),” sessions. Action Learning is a methodology used globally where team members work together to solve problems using only questions. 3. Further develop your leadership skills, learning questioning techniques for better engagement and effective communication, and application of concepts and frameworks for self-discovery and for setting and action plan for continuous learning and improvement. *Depending on the situation, guest speakers may be invited to share their experience and allow for real life practice of inquiry skills by the students. *All students are expected to practice effective collaboration and co-creation with diverse members both inside and outside of the classroom, utilizing what they have learned in the basic GL courses. *All students are also expected to provide mutual support and contribute effectively for further developing their own leadership skills and the leadership skills of your classmates. Be prepared and be open to share your experiences and feedbacks with each other. (和訳) この授業では次のことを学ぶ： 1. 自分自身と自分のリーダーシップ・スタイルについて理解を深める。 2. アクションラーニング（探究会議）」の複数のセッションで探究スキルを実践する。アクションラーニングとは、チームメンバーが質問のみを使って問題解決に取り組む、世界的に使われている方法論です。 3. リーダーとしてのスキルをさらに向上させ、より良い関わりと効果的なコミュニケーションのための質問テクニックを学び、自己発見と継続的な学習と改善のための行動計画を設定するための概念とフレームワークを応用する。 *状況に応じて、ゲストスピーカーを招き、彼らの経験を共有し、学生が実際に探究スキルを実践できるようにする。 *すべての学生は、GL基礎科目で学んだことを活かし、教室の内外で多様なメンバーとの効果的な協働・共創を実現することが期待される。 *すべての受講生は、自分自身のリーダーシップ・スキルとクラスメートのリーダーシップ・スキルをさらに発展させるために、相互支援を行い、効果的に貢献することも期待されています。自分の経験や感想をお互いに共有できるように準備し、オープンにしましょう。	
	国連ユースボランティア	○	【事前研修】開発途上国において生活および業務を遂行するために必要となる知識や技術に関する講義や実習を行う。 【現地派遣】履修学生は、開発途上国の国連事務所等の機関に派遣され、各機関のスタッフや現地の方々とともに活動に従事する。教育、環境、保健衛生、人権擁護などの分野において、広報活動やプロジェクト運営サポート、各種調査などに携わる。現地派遣は約5か月間。派遣に際し、ウィークリーレポート・マンスリーレポート・ファイナルレポートの提出を求める。 【事後研修】帰国報告会を開催する。参加学生は、帰国報告会において活動報告を行うことが求められる。	集中
	陸前高田プロジェクト	○	*Participants will conduct field collaborative work in Rikuzentakata City, Iwate Prefecture, which is heavily affected by the Great East Japan Earthquake and Tsunami. Students are given an assignment on various topics that will be provided during the pre-departure sessions. After the field work, each group will work on the final presentation. All participants are required to attend the pre-departure and session and post-field work session. - Students from other universities, including Stanford University will participate in this course. English is used as the course language. Tentative schedule for Rikuzentakata Project July ① 14:30-17:30: (Ikebukuro Campus) Preparation session for Rikkyo students August ① All day : (Ikebukuro Campus) Pre-departure session for all participants August ② 5days : (Rikuzentakata City) Field work August ③ All day : (Ikebukuro Campus) Post field work wrap-up session (和訳) 参加者は、東日本震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市で現地共同作業を行う。学生には、出発前のセッションで提供される様々なトピックに関する課題が与えられる。フィールドワークの後、各グループは最終プレゼンテーションに取り組む。 参加者は全員、出発前のセッションとフィールドワーク後のセッションに出席することが義務付けられている。- この授業には、スタンフォード大学を含む他大学の学生も参加する。 受講言語は英語です。 陸前高田プロジェクトスケジュール（予定） 7月 ①14:30～17:30：（池袋キャンパス）立教生対象準備会 8月① 終日：（池袋キャンパス）参加者全員による出発前セッション 8月② 5日間：（陸前高田市）フィールドワーク 8月 ③ 終日：（池袋キャンパス）フィールドワーク終了後総括会	共同・集中
	海外ワークエクスぺリエンス1	○	事前準備：目標設定 事前研修：ワークエクスぺリエンスプログラムへの理解・参加準備、自己理解・目的や目標の確認、マナー学習等 ワークエクスぺリエンス（約1週間）：企業訪問、社会人インタビュー、プロジェクト学習等 事後研修：振り返り、プレゼンテーション、レポート作成	集中
	海外ワークエクスぺリエンス2	○	事前研修：派遣企業に関する基本的理解、関連業界調査、企業調査、マナーについて、講義・実習を行う 現地研修：派遣企業における就業体験（約4週間） 事後研修：振り返り、報告会、レポート作成	集中
	グローバルワークエクスぺリエンス（オンライン）	○	事前準備：派遣先企業に関する基本的理解、関連業界・企業調査、マナーについての講義・実習等 実習：派遣先企業における就業体験（2～3か月、計30時間程度）、月次報告書作成・提出 事後研修：振り返り、最終報告書作成・提出、報告会参加 本プログラムは参加学生の居住地から海外に拠点のある企業等においてオンラインで実施をする。	集中

別記様式第2号（その3の1）					(用紙 日本産業規格A4縦型)
授 業 科 目 の 概 要					
(全学共通科目 総合系科目)					
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考	
スポーツ共通科目総合系科目	国際的協働のためのキャリア実践	○	本科目の授業は、事前学習、就業体験（インターンシップ）、事後学習の3部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考を行う。その後事前研修を経て各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験（インターンシップ）、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験（インターンシップ）を予定している。派遣期間は10日～14日で、秋学期に事後研修を実施する。	集中	
	RS Lーコミュニティ（池袋）	○	本科目では、国際化に対応した都市づくりが進む豊島区にあって、その中核である池袋エリアを中心とした多文化共生の地域社会づくりを取り巻く歴史・現状と課題を地域関係者・専門家等の支援を得ながら掘り起こし、住民との協働を通じてその課題発見および改善のための仕掛け・仕組みづくりの過程に取り組む。 履修者を3つのテーマ・グループ（歴史・記憶班、次世代・子育て班、芸術・文化班）に編成し、池袋エリアを中心とした豊島区の多文化共生に資する交流機会、身近な生活課題を発見・改善する近隣連帯の仕組みにつながるアプローチを、フィールド活動として近隣関係者との対話やヒアリング、地域活動等の交流を通じて考える。		
	RS Lーコミュニティ（埼玉）	○	学内での事前学習では、生活保護制度や子どもの貧困について学習する。 学外での活動として、一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワークが主催する「アスポート学習教室」に、学習指導員として履修者が参加し、教室に参加する中学生に、学習サポートを行う。 事後学習として、事前学習およびアスポート学習教室での活動を通しての学びの成果、気づきについての報告会をおこなう。		
	RS Lーローカル（南魚沼）	○	*フィールドワークの実施内容や場所は、自然災害やその他社会状況によって変化することに注意。 実習以外に、12月に事前学習回、2月に事後学習回が設定され、出席は必須。 豪雪地帯（新潟県南魚沼市）でのフィールドワークを予定。雪崩りを中心とした活動や住民との交流を通して、雪国で暮らすことの意味を理解する。伝統知や地域文化、そこでの生活に触れ、人と自然の共生や豊かさ、コミュニティの意味、市民としての役割を考える。雪崩りのほか、地元の超小規模小学校訪問や、家庭訪問、雪と触れ合う活動を予定している。事前事後学習含め、本授業では対話やディスカッションの機会が多くあり、自身の考察のアウトプットを常に求められる。受け身ではなく主体的な参加が必須となる。	集中	
	RS Lーローカル（陸前高田）	○	1) 担当地点について事前に調査し、地理的状況、被害状況、地区の文化的背景・生活習慣、伝統行事などを把握する。 2) 陸前高田理解のために、社会福祉協議会より現状の生活課題あるいは社会福祉協議会のまちづくりの取り組み状況について講義を受ける。 3) 震災理解のために、陸前高田市内の視察と仮設住宅体験館宿泊を行う。 4) 現地フィールドワークにおいては、各グループ（両大学合わせて4、5人）は社協職員と共に住民との交流、聴き取りなどを行う。聴き取りのテーマは主に生活の変化として、震災被害などに限定せずに向う。 5) その地区の伝統行事、習慣・文化などの理解を踏まえ、震災およびコロナ禍によってもたらされた人間関係の在り方の変化について話しを伺う。 6) 聴き取り内容について協議し、生活課題を抽出し、その解決方法を考える。 7) 社協および住民の方々を対象に各チームの発表を行い、解決方法についてフィードバックを受ける。 8) フィードバックされた内容を踏まえて再度協議し、より現実的な解決方法を検討する。それを再度発表する。 9) 授業終了後に報告書を作成し、社会福祉協議会ならびに関係機関に寄贈する。	集中	
	RS Lーローカル（地域共生）	○	活動場所は、埼玉県熊谷市。熊谷市は、日本最高気温41.1度を記録し、環境破壊への問題意識が強い市町村として有名だ。実際、環境省から暑さ対策で殿堂入りなどを行っている。また、利根川と荒川が最接近しており水が豊富で、快晴日数も日本一。要するに、水、土、太陽に恵まれた肥沃な土地で、食材の宝庫でもある。 SOCIAL&PUBLICとは、熊谷市にある有限会社PUBLIC DINNERと埼玉福興株式会社との合同レーベルであり、活動体の名称。 PUBLICDINNERは、飲食店6店舗、ゲストハウスなどを運営し、地域を食でデザインする。また、熊谷園オーガニックフェスや埼玉県63市町村キーマン展など展開し、埼玉県内を有機的なつながりで結ぶ。埼玉福興では、多様な「人財」活用のひとつとして、しょうがい者を雇用しつつ、農業生産を行う農福連携の世界的企業だ。この二つの会社が織りなすSDG s とグローバルの可能性を、実践の中から、体で学ぶ。 具体的には、上記活動の拠点となる古民家をリノベーションしたゲストハウス「THE PUBLIC」に宿泊し、地域とのかかわりながら「農からはじまる暮らし」を体験する。仕事は、しょうがい者との農作業（水耕栽培、夏野菜の収穫等）や藍染etcを体験。地域の中で、各取組が、SDGsが日々の生活の中で、いかに実践されているか？を体感し、グローバルの可能性を、実践の中から五感で学んでいく。 授業を通じて、自分とは何者なのか？を知り、自分の未来を、自分で切り開くきっかけとなるだろう。	集中	
	RS Lーグローバル（フィリピン）	○	授業は2回の事前学習、約2週間のフィリピンにおける現地活動、1回の事後学習によって構成する。事前学習では、小グループに分かれてフィリピンを経済・文化・歴史などのテーマでリサーチをおこなう。また、フィリピン渡航後におこなう日本の文化紹介などの行事のための事前準備をする。フィリピン渡航後は、テーマ別の活動拠点に分かれてコミュニティ支援活動をおこなうことに加え、サービスラーニング概論や、各国の文化紹介などをおこなう。事後学習では、フィリピンでの活動を通して発見したことのふりかえりを中心に、国際社会における自分の役割や在り方について考察する。	集中	
	RS LーグローバルA	○	荒川河川敷(最寄り駅から徒歩20分以内想定)でのフィールドワーク。国内屈指の流域人口密度を誇る荒川が持つ社会課題の1つ「河川ごみ問題」に焦点を当て、当該問題の生じる原因に関する講義や解決に向けたイベントを組み立て、実践することで現場・現実・現物からSDGsを学ぶ。	集中	
	スポーツプログラム1（はじめてのバレー）	○	クラシックバレーの入門者、初心者を対象に、基礎エクササイズを体験することから始め、簡単なコンビネーションを行い、振付けられた簡単なグループ作品を踊り、発表する。各授業において、ストレッチングや筋コンディショニングも行う。また、クラシックバレーを行うことによって向上する体力について解説をする。		
	スポーツプログラム1（はじめてのバレー）	○	クラシック・バレーは華やかな400年の作品の歴史が知られるが、それは同時に無駄を削ぎ落とした一つの身体運動の完成の歴史でもある。本授業では、バレーを、その運動の構造を捉えて学ぶ。その上で受講者それぞれの身体に即した運動として、基本の実践習得を行う。		
スポーツプログラム1（バドミントン）	○	チーム分けをしたうえで、前半はバドミントンの基礎技術、基礎戦術を理解し、技能を身につけるために全体授業を行う。後半はチームごとに練習する時間（グループワーク）を設け、個人・チーム全体のパフォーマンスを向上させる。ゲーム形式は主に団体戦のダブルス。			
スポーツプログラム1（バドミントン）	○	バドミントンは、非常に軽いラケット・シャトルを用いるためラリーを続けやすく、初心者でも親しみやすいスポーツである。本授業では、バドミントンの基礎的技能を習得するとともに、初心者・経験者が協同してゲーム（特にダブルス）を積極的に楽しむことを目指す。さらに、科学的視点からバドミントンの技術を理解することや、戦術を模索するなど、一歩進んだスポーツの楽しみ方を学ぶ。マナーや仲間との協力を大切にし、スポーツを通じたコミュニケーション能力の向上を目指す。			
スポーツプログラム1（はじめてのフィンスイミング）	○	フィンスイミングの入門者や初心者を対象に、フィンスイミングの基本的な競技種目である「ビーフィン泳」「アブニア泳」「サーフィス泳」を基礎から体験・学習する。また、水の特性や水中運動に関する基本的な知識を体験、学習する。泳法習得後は授業内で記録会を行い、記録測定や泳法の習熟度確認を行う。記録会に向けた目標・練習計画の設定を通じて、自ら課題を見つけ解決法を考えるプロセスを実践する。			
スポーツプログラム3（バスケットボール）	○	毎回新しい技術を習得し、習得した技術を試すミニゲームを多く行う。 授業が進むにつれて、審判方法やテابلオフィシャルの方法を学び、ゲーム運営ができるようにする。 チーム毎に戦術を練り、練習をした上でリーグ戦を実施する。			
スポーツプログラム3（バレーボール）	○	バレーボールのゲームにおける基本的なリズム（パス（レシーブ）、トス、アタック）を使用したゲームが展開できるようにするため、基本技術の習得練習に加えて、基本的なリズムの習得を目指した練習を取り入れ、ハイレベルなゲームを楽しめるように展開する。			
スポーツプログラム3（バレーボール）	○	バレーボールのゲームにおける基本的なリズム（パス（レシーブ）、トス、アタック）を使用したゲームが展開できるようにするため、基本技術の習得練習に加えて、基本的なリズムの習得を目指した練習を取り入れ、ハイレベルなゲームを楽しめるように展開する。			
スポーツプログラム3（フットボール）	○	フットボールはアメリカンフットボールの身体接触を排除して、性別・年齢に関係なく、誰でもチームに参画できるスポーツです。役割分担の明確化によってメンバー各々が、如何に「チームに貢献出来るか」をテーマとして授業をすすめます。クラスをチーム分けし、戦術・作戦を練り、効果的な方法を模索しながらゲームを楽しみます。 2028年開催予定のロサンゼルスオリンピックに正式種目に採用されました。			

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	スポーツプログラム3(卓球)	○	基礎技術の習得とゲームを中心に授業を展開する。実践やセルフチェックを通じて、運動の心理的効果を学びつつ、コミュニケーション能力、バランスのとれた理性や的確な判断力を養成する。	
	スポーツスタディ1(アダプテッドスポーツ)	○	アダプテッド・スポーツの実技に加え、グループプレゼンテーションの作成、発表を実施する。	
	スポーツスタディ1(クライミング)	○	2020+1東京五輪で新種目として採用され、女子銀・銅メダル獲得により注目を集めたスポーツクライミングは、2024年パリ五輪でも男子銀メダル獲得の他、国際大会で日本選手が優れた成績を収めるなど、ますますその人気と認知が高まっています。このスポーツは力任せではなく、知恵と工夫を活かした「体を使うチェス」とも呼ばれ、戦略と身体能力を融合させたスポーツとして大きな魅力があります。 本授業では、スポーツクライミングの中でもボルダー（ボルダリング）を中心に学び、基礎的な動きから実践までを体験しながら、自分の身体の機能や動きについて理解を深めます。また、仲間とともに自分たちの力で楽しさとやりがいを感じることができるよう、グループワークも取り入れていきます。 ※毎回、最初に簡単な座学を取り入れクライミングの知識を深めます。ウォーミングアップで簡単な技術練習を行った後、各傾斜の壁をローテーションで登りながら理解を深めます。授業進行状況に合わせて順序、内容を変更することがあります。	
	スポーツスタディ1(クライミング)	○	スポーツクライミングとは壁に取り付けられた「ホールド」と呼ばれる突起物に手足をかけ、様々な課題（ルート）を、思考力と全身での動作を駆使しながらゴールを目指して登るスポーツである。本授業ではこの魅力的なスポーツについて、講義と実技の両面から楽しく学んでいく。講義については課題形式にて実施する場合がある。実技については、毎回登る技術（ムーブ）を学習し、その後課題に挑戦していく。	
	スポーツスタディ1(クライミング)	○	この授業では高さ4m程度の壁（クライミングウォール）に登る「ボルダリング」を中心に扱い、実技ではスポーツクライミングを実践する上で必要な基本的技術（ハンドワーク、フットワーク、ムーブ）を習得し、自分の身体の機能や動かし方の理解を深めます。座学では、スポーツクライミングに関する歴史や情報を通して、スポーツを総合的に理解することを目指します。 毎回、最初に簡単な座学を行った後、様々な傾斜のクライミングウォールを使って実技を行います。実技では技術練習だけでなく、毎回各自のレベルに合ったコース（課題）に挑戦する時間を設けます。スポーツクライミングは個人種目ですが、仲間とともに切磋琢磨できる楽しさややりがいも感じることができるよう、適宜グループワークも取入れられます。授業の進行状況に合わせて内容や順序を変更することがあります。	
	スポーツスタディ1(スポーツ縄跳び)	○	スポーツ縄跳びにおける基礎技術の習得を行い、長縄跳び、短縄跳びの様々な技が実施できるようになる。	
	スポーツスタディ1(パドミントン)	○	基礎技術の習得とゲームを中心に授業を展開する。実践やセルフチェックを通じて、コミュニケーション能力、バランスのとれた理性や的確な判断力を養成する。	
	スポーツスタディ1(ヒップホップ)	○	まずはヒップホップダンスの基本的なステップワークを中心としたルーティンを体得し、その後自由な表現であるコンテンポラリーダンスや民族舞踊の要素も取り入れ、各自のダンス表現の幅を広げる。 また、グループワークおよびショーケースを通じて、他者と共にダンスを創る、踊る、観る楽しさを味わう。	
	スポーツスタディ1(レクリエーションalスポーツ)	○	室内で行うことのできるスポーツを取り上げる。毎回担当者3～4名を決め、ある種目をルールや使用する道具を応用して楽しむ方法を考え、発表し、それを全員で実践する。また学生同士のコミュニケーションを深めるため、実践の際は毎時間グループやチームを新たに作る。	
	スポーツスタディ1(レクリエーションalスポーツ)	○	スポーツを楽しむことが全ての人々の基本的な権利となり、生涯スポーツ社会の実現に向けて、様々なスポーツへの関わり方が見直されている現在、誰もが気軽に楽しめるレクリエーションalスポーツの社会的意義は大きい。この授業では、まず自分たちがレクリエーションalスポーツを楽しみ、その組み立てや展開について理論的に捉えた後、対象や環境に応じたバリエーションと支援方法を考え、実践する。	
	スポーツスタディ1(レクリエーションalスポーツ)	○	さまざまなレクリエーションalスポーツ・ゲームを体験し、その実践を系統的にまとめ、生涯スポーツとしてのスポーツの役割を考察する。また、チームにおける役割分担やマネージメントを通して、スポーツとチームビルディングについて学習する。	
	スポーツスタディ1(レクリエーションalスポーツ)	○	本授業では、社交を目的としたさまざまなレクリエーションalスポーツの方法を学び、実践するとともにアレンジ方法を考究する。またレクリエーションalスポーツの生涯スポーツとしての意味や文化的意義、身体的コミュニケーションの意味を考究する。	
	スポーツスタディ1(レクリエーションalスポーツ(英語))	○	本授業における使用言語は英語であり、受講生は英語でコミュニケーションをとることが求められます。授業内容は、受講生がレクリエーションalスポーツにおける指導者としての技能を身につけることができるようにデザインされています。	
	スポーツスタディ1(太極拳)	○	健康を維持・増進させるための科学的知識を理解し、太極拳を通して、調心、調息、調身を中心としてトレーニングを行い、一つ一つの基本動作からスムーズに流れるまでゆっくりとして動く、虚実バランス身体運動を練習する。また、太極拳の背景について心身統一、養生思想も学ぶ。	
	スポーツスタディ1(太極拳)	○	太極拳は中国に起源をもち、長い歴史を有する武術であり健康法である。技術の習得に向け、個人練習のみならず、教えあう中での技術向上と同時に他者とのコミュニケーションを図ることを目指し、グループでの練習も行う。また、講義は授業期間の1/3程度行う。講義では、現代人にとっての運動・スポーツの必要性について様々な角度から考えたい。太極拳は「楽しい」けれど、24動作を習得するのは「楽」ではないかもしれない。毎回新しい動作を学ぶことになるので、できるだけ欠席のないことが望ましい。	
	スポーツスタディ1(日本文化と踊り(英語))	○	履修者全員が男女に関係なく、「阿波踊り」の基本型、自由型、「女踊り」および「男踊り」を実践する。学習成果として、自分で創作した囃子詞（「創作囃子詞」）を歌いながら踊る「阿波踊りパフォーマンス」をグループごとに発表する。毎回演習室（体育館4階）における講義（映像視聴およびディスカッションを含む）（2-30分程度）とダンスフロアにおける実技を併用する。	
	スポーツスタディ1(コンテンポラリーダンス)	○	ダンスの歴史、種類、役割などを講義で理解したうえで、実技に入る。14回の授業の前半ではストレッチ、ダンスの基礎動作にもなるエクササイズを行い、めいっはい身体を使って遊ぶ。身体遊びから始まり、他者と動くことで生まれる動き（コンタクトワーク）や、自分や他者の身体を探索するワークを行い、ダンスの楽しさを知る。 後半は前半で学んだこと感じたことを生かしながら作品を創作する。ダンス作品の創作法はさまざまなが、受講生にとって身近なことをテーマに、身体で表現していく。ダンスを通して自分自身や他者と向き合い、社会へ目を向けていく。ゼロから創り出すことの面白さ、そして身体、空間、音楽の関係性の豊かさ、多様な表現方法を知り、生涯にわたる身体表現を楽しめる基礎能力を養う。	
	スポーツスタディ2(ウォーターエクササイズ)	○	講義では、安全管理、水の特性、水中運動の特徴や効果、近代4泳法のポイントについて解説します。実技においては、浸水・水中での生理的応答や流体力学について触れながら、水中運動・水中レクリエーション・近代4泳法を基本に、様々な水泳（水球など）を実施します。泳力・泳技能により実施内容は調整しながら、自ら学び・実践することを評価の対象とします。授業は全体を通じて、講義（1/3）、実技（2/3）を組み合わせて行います。	
	スポーツスタディ2(アーティスティックスイミング(初級))	○	＜講義＞ アーティスティックスイミング（AS）の歴史とオリンピックの意義について ＜実技＞ 学期末の発表会を目標とし、全員参加で一つの演技を創り上げる ＜テスト＞ 筆記のみ（アーティスティックスイミング《AS》の歴史や用語）	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	スポーツスタディ2(アーティスティックスイミング(中・上級))	○	<講義> アーティスティックスイミング (AS) の歴史とオリンピックの意義について <実技> 学期末の発表会を目標とし、全員参加で一つの演技を創り上げる <テスト> 筆記のみ(アーティスティックスイミング《AS》の歴史や用語)	
	スポーツスタディ2(セルフケアエクササイズ)	○	体のアンバランスや癖に気づき、改善したいところや理想を具体化し、強化、ストレッチ、リラクセスする方法として、呼吸法を重視したピラティスマットエクササイズとヨガ、持久力向上やストレス発散を目的とした有酸素運動プログラムを紹介する。	
	スポーツスタディ2(セルフケアエクササイズ)	○	セルフケアエクササイズ【ヨガ】 授業は、解説講義と実技実習を行う。 講義では、ヨガの基礎知識と基本原理の概説を行う。 実習では、呼吸と運動したベーシックなヨガを行う。1) 6領域の基本的アーサナ(運動)とそのバリエーション、2) 基本的なプラナヤーマ(呼吸法)の解説を行い、実践する。セッションは十数種のアーサナを組合せた流れで行うが、毎回一つの主要テーマにスポットを当てて取り組む。	
	スポーツスタディ2(ダイエツフィットネス)	○	日常生活の中で継続実践し易い身体運動を取り上げ、構造の解説を行いつつ実践する。各回は幾つかの種類の運動を組み合わせた流れで行う。エクササイズには各自の記録用紙を用い、強度の自己管理にも取り組む。 本授業の具体的課題は以下の通り。 A) インナーマッスルを鍛えて姿勢を変え、動きの質をベースアップ、および基礎代謝を上げる。B) アウターマッスルを鍛え、ボディラインを創る。C) エネルギー消費に着目し、有酸素運動効果のあるトレーニングについてその理論を学び実践する。 これらの課題に対して下記の身体運動の実技実習に取り組み、その効果についての解説講義を行う。	
	スポーツスタディ2(トレーニング)	○	抵抗を利用し身体の機能向上を図るResistance Trainingは、スポーツ選手はもとより、健康・体力づくり運動といった視点で一般人においても広く実践されている。しかし、不適切な方法での実施は傷害の発生を誘発する。実践を通して、安全に重量を挙げることができる適切なフォームを習得し、技能向上を目指す。また、講義ではトレーニング科学の基礎を理解し、対象者のニーズに基づいたプログラムを策定する方法について概説する。これらを通してレジスタンストレーニングの理論と実践を学習していく。	
	スポーツスタディ2(ボディコンディショニング)	○	講義では、厚生労働省の定める健康づくりのための身体活動基準を知り、個人の身体データを用いて運動、栄養について学ぶ。実技では、講義で学んだ内容の実践やバランスボールを使用した運動等をおこなう。	
	スポーツスタディ2(ボディシェイプ)	○	講義では、ウエイトコントロールの正しい知識および運動による効果を解説する。それらをふまえ、どのような取り組みが自分のからだに必要なのかを考察する。実技では、自分のからだを知り、自身の体力を向上させるためのトレーニングを実践する。授業時間の1/3を講義、残りの2/3を実技とする。	
	スポーツスタディ3(ゴルフ)	○	この授業では、グラウンドで練習用ゴルフボールを打撃し、スイングの基本を習得する。また仮設コースをつくり、実践的なラウンドプレーを通じて、ゴルフのルール、マナーおよびエチケットについても学習する。	
	スポーツスタディ3(テニス)	○	テニスは老若男女問わず行うことができるスポーツの代表的な存在です。本授業では、テニスの基礎的技術練習を行い、ルール、歴史、競技特性を理解しながら、仲間とのコミュニケーションを深めていきます。生涯にわたってテニスを実践できる素養を学びます。	
	スポーツスタディ3(テニス)	○	テニスコートでは、その時限において課題・テーマをもとに練習し、それを実戦で試してみる、ということを基本的な授業の流れとする。適宜時限内において、テニスに必要なマナー・ルール・知識についての説明も行う。また、座学として生涯スポーツとしてのテニスについて講義を行う。	
	スポーツスタディ3(テニス(英語))	○	This course is for beginners. The course content is designed to provide students with fundamental knowledge and skills to play tennis recreationally. Students will be introduced to the basic skills and useful approaches to enjoy playing tennis individually as well as a team. (和訳) このコースは初心者向けです。レクリエーションとしてテニスをプレーするための基本的な知識と技術を習得します。個人でもチームでもテニスを楽しむための基本的なスキルや有用なアプローチを学びます。	
	スポーツスタディ3(バスケットボール)	○	本授業は初心者を対象とし、バスケットボールの基礎技術・戦術を身につけるために授業ごとのテーマに沿った練習を行う。授業後半にはゲームを行い、習得した技術を試す。チーム分けをして、チームごとに個人・チームのパフォーマンスを向上させる方法を考え、実践する。授業では、コミュニケーション能力の向上のためのワークも行う。	
	スポーツスタディ3(ハンドボール)	○	講義は授業の3分の1程度の時間を使い、ハンドボールの歴史やルール、基本的な技術・戦術について解説する。実技では、ハンドボール初心者でも安全に楽しく行うことができるよう、ウォーミングアップや基礎技術・戦術のトレーニングを行った後、ゲームを中心に実施する。	
	スポーツスタディ3(フットサル)	○	技術レベルの高低に関わらず、「知る」ことによって「できる」ことが増えていく感覚を体験してもらいたい。また、「できる」経験を通して、フットサルの楽しさを感じてもらい、その経験を人に伝えたいと思ってもらえるような授業にしたいと考えている。毎回、異なる鬼ごっこなどのウォーミングアップからスタートし、授業ごとのテーマに沿った練習を2項目ほど行う。テーマ習得が自然と行えるような練習を行なっていく。授業後半は必ずゲームを行い、テーマの確認をしてもらう。	
	スポーツスタディ3(フットサル)	○	プレー環境の整備・改良は以下の観点から行います。 ①チーム分けの方法：チーム分けの観点、チーム数、チーム替えの有無、頻度。 ②ルールの工夫：フットサルの正式なルールでスタートするが、必要であればルールを変更していく（ゴールキックやキックイン、得点の換算方法、女子や初心者に対する特別ルール、試合時間など）。 ③練習方法：練習は必要か不要か、練習をするとしたらどのようなやり方が良いのか（伝統的アプローチ、制約主導アプローチ、M-T-Mソッドなどの観点から考える）。 ④対戦方式：男子対男子、女子対女子、初心者対初心者、経験者対経験者、ミックスなど。 毎回ゲームを行いながら、チームミーティングや全体ミーティングを通して改良点を探っていきます。伝統的アプローチ、制約主導アプローチ、M-T-Mソッドなどの専門用語について解説し、授業で活用できるようにします。	
	スポーツスタディ3(フットサル)	○	実技は、基本的にウォーミングアップ→テーマトレーニング→ゲームという流れで行う。適宜、ルールや個人戦術やチーム戦術に関する講義も交える。女子や初心者への履修も歓迎する。実技授業であるため成績評価においては授業参加を重視し、仲間とともに楽しみながら積極的に身体を動かすことを求める。	
	スポーツスタディ3(フットサル)	○	技術レベルの高低に関わらず、「知る」ことによって「できる」ことが増えていく感覚を体験してもらいたい。また、「できる」経験を通して、フットサルの楽しさを感じてもらい、その経験を人に伝えたいと思ってもらえるような授業にしたいと考えている。毎回、異なる鬼ごっこなどのウォーミングアップからスタートし、授業ごとのテーマに沿った練習を2項目ほど行う。テーマ習得が自然と行えるような練習を行なっていく。授業後半は必ずゲームを行い、テーマの確認をしてもらう。	
	スポーツスタディ3(ブラインドサッカー)	○	実技は、基本的にウォーミングアップ→テーマトレーニングという流れで行う。適宜、個人戦術やチーム戦術に関する講義も交える。女子や初心者への履修も歓迎する。実技授業であるため成績評価においては授業参加を重視し、仲間とともに楽しみながら積極的に身体を動かすことを求める。	
	スポーツスタディ3(初心者向けサッカー・フットサル&フィットネス)	○	本授業は初心者を対象とし、サッカーとフットサルの基礎技術・戦術を身につけるために授業ごとのテーマに沿った練習を行う。授業後半にはゲームを行い、習得した技術を試す。チーム分けをして、チームごとに個人・チームのパフォーマンスを向上させる方法を考え、実践する。授業では、体幹トレーニングなどの身体トレーニングも行う。	
	スポーツスタディ3(卓球)	○	卓球はラケットの操作が容易なことなどから、若年から高齢、また、レクリエーションからプロフェッショナルまで、様々なレベルに応じて楽しめるスポーツである。本授業では、シングルス、ダブルス、団体戦などのゲームを中心に、卓球を通じてスポーツに親しむことを第一の目的とする。また、レベルを上げながら卓球の面白さを体験するため、サーブやスマッシュなど様々な打法の基本や攻防の技術を習得することを狙う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 総合系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	スポーツスタディ4(ゴルフ)	○	ゴルフは英国で生まれた世界を代表するスポーツであり、幅広い年齢層で生涯にわたって楽しむことができるスポーツでもある。この授業では集中授業として、ゴルフの基本的なショットの技術、エチケット・マナーおよびルールを習得し、実際にコースでプレーを行うことで、ゴルフの楽しさを理解する。	共同・集中
	スポーツスタディ4(ネイチャーキャンプ)	○	日本有数の自然環境がいまだに残る秘境「奥只見」。ここを舞台にカヌー、トレッキング、森林の観察、河川の観察、星空の観察などを通じ、豊かな自然環境を肌で感じとる。それを前提に、日本の将来の自然環境の在り方について討議、学習する。	共同・集中
	スポーツスタディ4(スキー(初級))	○	スキーは、老若男女を問わず楽しめる非常にポピュラーなスポーツであり、生涯スポーツとして身につけるには最適な種目である。この授業では、初心者、初級者を対象に、スキー場でのスキー技術指導に加え、ビデオを用いたフォーム分析などを行い、総合的にスキーのレベルアップを図る。さらに、その過程の中でスキーの楽しさを肌で感じ、生涯スポーツとしての認識を深める。雪質の良い裏磐梯エンリゾートグランデコスキー場では、緩急のロングコースをふんだんに楽しめる。初心者コースも充実しているので、初心者、初級者の受講を歓迎する。また、スキー以外の過ごし方も、露天温泉風呂付きリゾート型ホテルでの宿泊を通して、食や休養を含めたウェルネスを学ぶ。そして学部を超えた受講生間のコミュニケーションを図るので、新たな友達づくりも期待できる。この機会にこれからのリゾート型スキーを体験してみよう。	共同・集中
	スポーツスタディ4(スキー(中・上級))	○	スキーは多くの人々に親しまれるポピュラーなスポーツであり、生涯スポーツとしてさらなる技術向上を目指すのに最適な種目である。この授業では、スキー場での高度な滑走技術の指導に加え、ビデオを用いたフォーム分析や技術的フィードバックを行い、総合的にスキー技術を高めることを目指す。	共同・集中
	スポーツスタディ4(はじめての和太鼓)	○	本授業では、初心者でも楽しく安全に行えるような、和太鼓の打ち方や基本動作、さらに、演奏に必要な基本的な技術を身に付ける。実技を通して和太鼓の文化的な享受能力を高めるとともに運動文化の一つとして体力向上や健康増進を図り、身体表現や自己表現の可能性を広げる。また、講義においては、日本の伝統文化である和太鼓の歴史と世界中の人々まで魅了する「日本の太鼓」の意義や考え方等について学び、幅広い学習を行う。	共同・集中
	スポーツスタディ4(馬術)	○	馬術は、生き物である動物と共に行う数少ないスポーツの一つである。体育会馬術部スタッフの協力を得ながら、馬術に関する講義と、実践としての騎乗を実施する中で馬への理解を深め信頼関係を築いていく。また、騎乗練習ばかりでなく、馬は乗り物ではなく感情をもったパートナーであることを理解し、言葉を発しない馬との触れ合いやコミュニケーションをとることの大切さを学ぶ。正しく馬術を理解するために、騎乗前の準備として、馬にブラシをかけ頸絡や鞍をつけ、厩舎から馬を出して人間と一緒に歩く曳馬などを学ぶことからスタートする。騎乗の練習では、馬とコミュニケーションをとりながら常足（なみあし）で、スラロームコースを回ることを目標とする。	共同・集中
	スポーツスタディe	○	年齢や性別、体力、運動技術にあまり関係なく、自宅で楽しむことを重視したトレーニングを実際に体験し、自分とスポーツ、健康との関係や将来の自身の健康とスポーツのあり方を考究する。講義においては、トレーニング理論や方法、生活習慣の必要性、身体の仕組みやスポーツ文化などを解説する。実技においては、ボディコンディショニング、レジスタンストレーニング、フィットネス・トレーニングを視聴し、実際に実践し、体調管理や健康の維持・増進のためにはどのような取り組みが必要なのかを学習する。授業の流れは最初に講義を視聴し、その後、実技映像を視聴し、各自実技を行う。最後に小レポート課題を作成し提出する。なお、トレーニング記録は毎週付けることとし、期末レポートと共に提出してもらう。	

授 業 科 目 の 概 要				
〔全学共通科目 言語系科目〕				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
必修 学科 共通 科目 （言語系 科目）	英語ディスカッション	○	Throughout the course, students should be able to hold discussions in groups of three to five students for 12-20 minutes. The discussion will be balanced and interactive, and constructed by all participants. Over the course, students will develop into competent and confident communicators who share their own opinions and value the opinions of others. (和訳) コースを通して、受講生は3～5人のグループで12～20分間のディスカッションができるようになる。ディスカッションは、バランスの取れた双方向的なもので、参加者全員によって構成される。コースを通して、受講生は自分の意見を共有し、他者の意見を尊重する、有能で自信に満ちたコミュニケーターに成長する。	
	英語ディベート	○	In the framework of academic (educational) debate, students will learn how to build persuasive and logical arguments, and how to cross-examine, rebut, and refute the arguments of opponents. By actively engaging in interesting and challenging academic issues, students will develop their critical thinking, logical thinking, research, and cooperative team-building skills. (和訳) アカデミック(教育的)ディベートの枠組みの中で、生徒たちは説得力のある論理的な議論の組み立て方、相手の議論に対する反対尋問、反論、反証の仕方学びます。興味深く、挑戦的な学術的問題に積極的に取り組むことで、生徒は批判的思考、論理的思考、リサーチ、協力的なチームビルディングのスキルを身につけることができます。	
	英語リーディング&ライティング1 (R)	○	If you have opted to use textbooks, please aligned the content with the textbooks. Various in class activities and homework assignments are to be completed individually, in pairs, or groups, which will help the students integratively develop their reading and writing skills. The following tables summarize the overall performance goals of reading and writing components for the course. Note that specific writing/reading tasks to be carried out in class may vary from one level to another. (和訳) 教科書を使用する場合は、教科書に沿った内容にすること。授業中の様々な活動や宿題は、個人、ペア、またはグループで行う。以下の表は、このコースのリーディングとライティングの全体的な達成目標をまとめたものである。クラスで実施する具体的なライティング/リーディングの課題は、レベルによって異なる場合があることに注意すること。	
	英語リーディング&ライティング2 (W)	○	If you have opted to use textbooks, please aligned the content with the textbooks. Various in class activities and homework assignments are to be completed individually, in pairs, or groups, which will help the students integratively develop their reading and writing skills. The following tables summarize the overall performance goals of reading and writing components for the course. Note that specific writing/reading tasks to be carried out in class may vary from one level to another. (和訳) 教科書を使用する場合は、教科書に沿った内容にすること。授業中の様々な活動や宿題は、個人、ペア、またはグループで行う。以下の表は、このコースのリーディングとライティングの全体的な達成目標をまとめたものである。クラスで実施する具体的なライティング/リーディングの課題は、レベルによって異なる場合があることに注意すること。	
	英語 e ラーニング	○	Students are required to regularly study English on an e-learning platform, which offers two different courses: "Practical English 8" for regular homework assignments and "Tracker for the TOEIC (L&R)" for periodical TOEIC-based practice tests. They are required to complete the designated number of lessons in each category to build a solid foundation for the development of practical English communication ability. Students are also required to periodically participate in classroom learning sessions. They will meet the instructor with their assigned group members and practice speaking, writing, listening, and/or reading based on the themes related to common intercultural business scenes. (和訳) 学生は、2つの異なるコースを提供するeラーニング・プラットフォームで定期的に英語を学習することが求められる：定期的に宿題が出される「実践英語8」と、定期的にTOEIC形式の模擬テストが行われる「Tracker for the TOEIC (L&R)」。	
	英語プレゼンテーション	○	The following list provides the minimum requirements for students in Presentation Classes. The degree and sophistication of each skill taught will depend on the class, class level and teacher, but the elements listed in 3 below, and the number and type of presentations listed in 1 and 2 should be covered in class. 1. Number of Presentations 1) At least one individual mini presentation (approximately 2 min) or one group presentation (2 min per speaker) 2) A final individual presentation (level 2: 6 min, level 3: 5 min, level 4: 4 min) 2. Contents of the Final Presentation 1) Level 2: persuasive speech with at least some research 2) Levels 3 & 4: informative or persuasive speech (depending on ability) 3. Teaching Elements 1) Structural elements a. Organization of a presentation (introduction/body/conclusion) b. The elements of each part: introduction/body/conclusion c. Transitions and sequencers d. Making outlines/cue cards 2) Physical elements a. Posture b. Voice - volume, clarity, inflection c. Eye contact d. Gestures 3) Visual elements i. How to make effective visuals ii. Content-visual relationship ii. Level 2: making concise, audience-friendly visuals (including graphs and tables) Levels 3 & 4: making concise, audience friendly visuals (graphs and tables not required) b. Using visuals effectively i. Level 2: How to use visuals and how to explain graphs and tables ii. Levels 3 & 4: How to use visuals Final Presentation The topic of the final presentation may be one of the topics used in class, one assigned by the teacher, or one chosen by the student (with teacher approval). The presentation will focus on organizing information clearly and effectively. Instructors should evaluate students based on clearly defined criteria such as eye contact, clarity, use of specific examples/data to support their opinions, effort, enthusiasm for their topics, clear structure, etc. (和訳) 以下は、プレゼンテーションクラスで最低限必要とするものです。教える各スキルの程度や洗練度は、クラスのレベル、教員によって異なりますが、以下の3に記載されている要素、および1と2に記載されているプレゼンテーションの数と種類は、クラスごとにカバーします。 1. プレゼンテーションの数 1) 個人ミニ発表1回以上 (2分程度)、またはグループ発表1回以上 (1人2分程度) 2) 個人最終発表 (レベル2: 6分、レベル3: 5分、レベル4: 4分) 2. 最終プレゼンテーションの内容 1) レベル 2: 少なくともリサーチを含む説得力のあるスピーチ 2) レベル 3、4: 情報提供または説得力のあるスピーチ (能力による) 3. 指導要素 1) 構成要素 a. プレゼンテーションの構成 (イントロダクション/ボディ/結論) b. 各パートの要素: 序論/本文/結論 c. トランジションとシーケンサー d. アウトライン/キューカードの作成 2) 物理的要素 a. 姿勢 b. 声の大きさ、明瞭さ、抑揚 c. アイコンタクト d. ジェスチャー 3) 視覚的要素 a. 効果的なビジュアルの作り方 i. コンテンツとビジュアルの関係 ii. レベル2: 簡潔でわかりやすいビジュアル (グラフや表を含む) の作成 -レベル3および4: 簡潔で分かりやすいビジュアルを作成する (グラフや表は必須ではない)。 b. ビジュアルを効果的に使う i. レベル2: ビジュアルの使い方、グラフや表の説明の仕方 ii. レベル3・4: ビジュアルの使い方 最終プレゼンテーション 最終プレゼンテーションのトピックは、授業で使ったトピック、担当教員が指定したトピック、または学生が選んだトピックのいずれかを使用することができる (担当教員の確認が必要)。プレゼンテーションでは、情報を明確かつ効果的に整理することに重点を置く。担当教員は、アイコンタクト、明瞭さ、意見を裏付ける具体例やデータの使用、努力、トピックに対する熱意など、明確に定義された基準に基づいて評価します。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	上級英語1（リーディング＆ライティング）	○	Advanced English is an advanced skills-based course that aims to prepare students for transition into an international academic environment. Students will primarily focus on academic skills, developing necessary reading, writing and presentation techniques and strategies so that they may apply them in the fall semester of Advanced English which focuses on project-work, or later on at a college or university abroad. (和訳) 上級英語は、国際的なアカデミックな環境に移行するための準備を目的とした、高度なスキルベースの授業です。学生は主にアカデミック・スキルに重点を置き、必要なリーディング、ライティング、プレゼンテーションのテクニックやストラテジーを身につけ、プロジェクト・ワークに重点を置く秋学期の上級英語や、その後の海外の大学やカレッジで応用できるようにします。	
	上級英語2（プロジェクト英語）	○	The fall semester of Advanced English moves the focus of the course from academic skills to content. Students will work on projects on particular topics in English. In this way, the skills learnt in the spring semester are reinforced and applied in the fall. The course also focuses more on the group and aims to develop students that are interdependent, collaborative and creative. (和訳) 上級英語の秋学期は、コースの焦点をアカデミック・スキルから内容へと移す。学生は英語の特定のトピックに関するプロジェクトに取り組む。このようにして、春学期で学んだスキルを秋学期で強化・応用する。また、このコースではグループに重点を置き、相互依存的、協動的、創造的な生徒の育成を目指します。	
語選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 ドイツ)	ドイツ語1	○	初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。	
	ドイツ語2	○	基礎的な語彙や語句を習得し、かつこれまでに培った知識を用いて、複数の人がかかわる日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、身近な話題について自分の意見を述べるができるよう目指す。	
	ドイツ語A	○	CEFR A1レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、ドイツ語の理解力を総合的に養う。	
	ドイツ語B	○	CEFR A2レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、ドイツ語の理解力を総合的に養う。	
語選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 フランス)	フランス語1	○	初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。	
	フランス語2	○	基礎的な語彙や語句を習得し、かつこれまでに培った知識を用いて、複数の人がかかわる日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、身近な話題について自分の意見を述べるができるよう目指す。	
	フランス語A	○	CEFR A1レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、フランス語の理解力を総合的に養う。	
	フランス語B	○	CEFR A2レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、フランス語の理解力を総合的に養う。	
語選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 スペイン)	スペイン語1	○	初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。	
	スペイン語2	○	基礎的な語彙や語句を習得し、かつこれまでに培った知識を用いて、複数の人がかかわる日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、身近な話題について自分の意見を述べるができるよう目指す。	
	スペイン語A	○	CEFR A1レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、スペイン語の理解力を総合的に養う。	
	スペイン語B	○	CEFR A2レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、スペイン語の理解力を総合的に養う。	
選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 中国語)	中国語1	○	初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。	
	中国語2	○	基礎的な語彙や語句を習得し、かつこれまでに培った知識を用いて、複数の人がかかわる日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、身近な話題について自分の意見を述べるができるよう目指す。	
	中国語A	○	CEFR A1レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、中国語の理解力を総合的に養う。	
	中国語B	○	CEFR A2レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、中国語の理解力を総合的に養う。	
選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 朝鮮語)	朝鮮語1	○	初歩的な語彙や語句を習得して、日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、自己紹介をするなど、個人的なトピックを表現できるようになることを目指す。	
	朝鮮語2	○	基礎的な語彙や語句を習得し、かつこれまでに培った知識を用いて、複数の人がかかわる日常的なやり取りについて受け答えができるようになる。さらに、身近な話題について自分の意見を述べるができるよう目指す。	
	朝鮮語A	○	CEFR A1レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、朝鮮語の理解力を総合的に養う。	
	朝鮮語B	○	CEFR A2レベル程度のテキストを読解し、聞き取れるよう、朝鮮語の理解力を総合的に養う。	
語選全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 ロシア)	ロシア語1	○	教科書と補助教材（配付プリント）に沿って、(1)新出単語の確認、(2)文法解説、(3)練習問題、(4)テキストの読解と発音練習、という流れで進めていく。また視聴覚資料によってロシア文化を紹介しつつ、多面的な文化理解もめざす。	
	ロシア語2	○	教科書と補助教材（配付プリント）に沿って、(1)新出単語の確認、(2)文法解説、(3)練習問題、(4)テキストの読解と発音練習、という流れで進めていく。また視聴覚資料によってロシア文化を紹介しつつ、多面的な文化理解もめざす。	
	ロシア語A	○	教科書と補助教材（配付プリント）に沿って、(1)新出単語の確認、(2)テキストの読解と発音練習、(3)作文とその発表という流れで進めていく。また視聴覚資料によってロシア文化を紹介しつつ、多面的な文化理解もめざす。	
	ロシア語B	○	教科書と補助教材（配付プリント）に沿って、(1)新出単語の確認、(2)テキストの読解と発音練習、(3)作文とその発表という流れで進めていく。また視聴覚資料によってロシア文化を紹介しつつ、多面的な文化理解もめざす。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
進全 択学 必修 共通 科目 (言語系 B科目 日本語)	大学生の日本語A	○	各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、内容理解とともにディスカッションやプレゼンテーションのしかたを身につけることを目指す。	
	大学生の日本語B	○	各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指す。	
	大学生の日本語C	○	各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、内容理解とともにディスカッションやプレゼンテーションのしかたを身につけることを目指す。	
	大学生の日本語D	○	各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な技能を身につけることを目指す。	
グ 全 学 ー 共 通 ル ・ 目 コ 言 語 系 科 目 ニ ケ ー シ ヨ ン 自 由 科 目 領 域 (英 語)	Reading for Pleasure		This course is designed to help students find the books they want to read in English and make it an enjoyable experience. At the same time, the aim is to improve reading fluency. Each week, students will discuss what they are reading in class and be introduced to books that they may not usually read. During the course, the students will do short assignments, mini-poster presentations in groups and a final presentation to the whole class. (和訳) この授業は、学生が英語で読みたい本を見つけ、それを楽しい経験にすることを目的としています。同時に、リーディングの流暢さを向上させることも目的としています。毎週、学生はクラスで読んでいる本についてディスカッションし、普段読まないような本を紹介されます。コース中は、短い課題、グループでのミニ・ポスター・プレゼンテーション、クラス全員での最終プレゼンテーションを行います。	
	Reading for Pleasure		This class is designed to help students find the books they want to read in English and make it an enjoyable experience. At the same time, the aim is to improve reading fluency. Each week, students will discuss what they are reading in class and be introduced to books that they may not usually read. During the course, the students will do short assignments, give mini-presentations in groups, and give a final presentation to the whole class. (和訳) この授業は、学生が英語で読みたい本を見つけ、楽しく読めるようにすることを目的としています。同時に、流暢な読解力の向上を目指します。毎週、学生はクラスで読んでいる本について話し合い、普段読まないような本を紹介されます。コース中、学生は短い課題をこなし、グループでミニ・プレゼンテーションを行い、クラス全体で最終プレゼンテーションを行います。	
	Reading for Pleasure		Throughout the course, students will read three novels written in simplified English. They will expand their vocabulary, learn about the authors, and explore the history and culture of the settings where the stories take place. Additionally, students will have opportunities to read and discuss books of their own choosing and give presentations to the class. (和訳) 授業を通して、学生は簡略化された英語で書かれた3つの小説を読みます。語彙を増やし、作者について学び、物語の舞台となる歴史や文化を探ります。さらに、学生自身が選んだ本を読み、ディスカッションをしたり、クラスでプレゼンテーションをしたりする機会もあります。	
	Current News through English Media		The aims of this course are for the students to listen to, read, and respond to English-language news while learning about a variety of topical issues. Each week, a new topic is introduced that will be relevant to current events in the world. For example, last year some topics we discussed were: social media, health, immigration, slang, crime, and the United States election. Plus, students have chances to introduce their own topics and lead related discussions. The students will be able to understand short written, audio, or video news texts about current topics. They will also learn to explain the main point of a news story, and discuss their opinions about it with reasons and examples. Students will develop a critical understanding of how news events, issues and people are represented in different texts. (和訳) この授業の目的は、様々な時事問題について学びながら、英語のニュースを聞き、読み、反応することである。毎週、世界の時事問題に関連する新しいトピックが紹介されます。例えば、昨年は、ソーシャルメディア、健康、移民、スラング、犯罪、アメリカの選挙などについて取り上げました。さらに、学生たちは自分たちのトピックを紹介し、関連するディスカッションをリードする機会もある。学生たちは、時事的なトピックに関する短い文章、音声、またはビデオニュースを理解できるようになります。また、ニュースの要点を説明し、理由や例を挙げて自分の意見を述べることができるようになります。学生たちは、さまざまなテキストにおいて、ニュースの出来事、問題、人物がどのように表現されているかを批判的に理解できるようになります。	
	Current News through English Media		Throughout this course, students will learn how to: 1. Identify and explain (L) the main points of news bulletins and the significant points in straightforward topical news articles (C) 2. Infer and predict (L) text content from headings, titles, headlines, and images (C) 3. Select, comprehend, and report on (L) topics of personal interest found in texts such as interviews, short lectures and news reports (C) 4. Evaluate how news events, issues, and people are represented in a range of texts (C) 5. Summarise and discuss their opinions about news topics regarding a media text (L) *Language Goal (L) Content Goal (C) (和訳) この授業を通して、学生は以下のことを学ぶ： 1. ニュース速報の要点と、分かりやすい話題のニュース記事の重要なポイントを特定し、説明できる (L)。 2. 見出し、タイトル、見出し、画像から、本文の内容を推測し、予測することができる (C)。 3. インタビュー、短い講義、ニュースレポートなどの文章から、個人的に関心のあるトピックを選び、理解し、報告することができる (C) 4. 様々なテキストにおいて、ニュースの出来事、問題、人物がどのように表現されているかを評価することができる (C) 5. メディアのテキストについて、ニュースのトピックについて自分の意見をまとめ、話し合うことができる (L) *言語目標 (L) 内容目標 (C)	
	Current News through English Media		The aims of this course are for the students to listen to, read, and respond to English-language news while learning about a variety of topical issues. The students will be able to understand short written, audio, or video news texts about current topics. They will also learn to explain the main points of a news story, and discuss their opinions' about it with reasons and examples. Students will develop a critical understanding of how news events, issues and people are represented in different texts. (和訳) この授業の目的は、様々な時事問題について学びながら、英語のニュースを聞き、読み、反応することです。受講生は、時事的なトピックに関する短い文章、音声、ビデオニュースを理解できるようになる。また、ニュースの要点を説明し、理由や例を挙げて自分の意見を述べるようになる。学生はニュースの出来事、問題、人物が、さまざまなテキストでどのように表現されているかを批判的に理解する力を養います。	
	Multimodal Communication in English		This course is designed to deepen the students' understanding of the nature of communication through analyzing a variety of communication modes (i.e., written, spoken, and visual) present in different platforms. This will include printed and audio materials, video clips, movies, SNS and other digital materials. Students are expected to learn relevant communication theories to initiate individual and group-based projects to search, find, and analyze materials of their choice and to present how the materials are structured to communicate possible meanings. (和訳) この授業では、様々なプラットフォームに存在する様々なコミュニケーション・モード（文字、音声、映像など）を分析することで、コミュニケーションの本質について理解を深めることを目的としています。具体的には、印刷物、音声資料、ビデオクリップ、映画、SNS、その他のデジタル資料などである。受講生は、関連するコミュニケーション理論を学び、個人またはグループ単位でプロジェクトを立ち上げ、各自が選択した資料を検索、検索、分析し、その資料がどのような意味を伝えるために構成されているかを発表することが期待されています。	
	Multimodal Communication in English		Students are expected to learn relevant communication theories to initiate individual and group-based projects to search, find, and analyze materials of their choice and to present how the materials are structured to communicate a possible meaning. As a culminating activity, students will develop a material on a digital platform to communicate a message. (和訳) 学生は、関連するコミュニケーション理論を学び、個人またはグループベースのプロジェクトを立ち上げ、自分で選んだ資料を検索、発見、分析し、その資料がどのような意味を伝えるためにどのように構成されているかを発表することが期待されている。集大成として、学生はデジタル・プラットフォーム上でメッセージを伝えるための資料を作成する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Multimodal Communication in English		This course is designed to deepen an understanding of the nature of communication through analyzing a variety of communication modes (i.e., written, spoken, and visual) present in different platforms (i.e., media), including but not limited to printed and audio materials, letters, emails, video clips, movies, SNS, and/or other digital materials. Students are expected to learn relevant communication theories to initiate individual and group-based projects to search, find, and analyze materials of their choice and to present how the materials are structured to communicate a possible meaning. As a culminating activity, students will develop a material on a digital platform to communicate a message. (和訳) 印刷物、音声資料、手紙、電子メール、ビデオクリップ、映画、SNS、その他のデジタル資料など、さまざまなプラットフォーム（メディア）に存在する多様なコミュニケーション様式（文字、音声、視覚など）を分析することを通して、コミュニケーションの本質について理解を深めることを目的とする。学生は、関連するコミュニケーション理論を学び、個人またはグループ単位でプロジェクトを開始し、選択した資料を検索、検索、分析し、その資料がどのような意味を伝えるためにどのように構成されているかを発表することが期待されています。最終的な活動として、学生はデジタルプラットフォーム上でメッセージを伝えるための素材を開発します。	
	Self-directed and Reflective Language Learning		Students achieve individual language learning goals by designing and carrying out language learning plans. Weekly discussions will be based on reflective journals and reports on out-of-class learning activities. The contents of the course will be from the student's own academic disciplines and interests. In groups, students will participate in presentations and discussion activities throughout the course. (和訳) 学生は、言語学習計画を立案・実行することにより、個々の言語学習目標を達成する。毎週のディスカッションは、振り返りのための日誌と授業外の学習活動に関するレポートに基づいて行われる。コースの内容は、学生自身の学問分野や興味に基づいたものとする。グループに分かれ、プレゼンテーションやディスカッションに参加する。	
	Self-directed and Reflective Language Learning		Throughout this course, students will learn how to: 1. Create learning goals and reflect on progress (C) 2. Describe features and stages of learning plans and classify points to develop (C) 3. Consider aspects of individual learning histories in relation to learning backgrounds and future goals (C) 4. Assess and reflect on individual language learning plans (L) 5. Show understanding in reports and presentations of subject-specific vocabulary (L) 6. Respond appropriately using questions/replies in presentations and cooperate in group discussions and presentations (L) C = content-related goal, L = language-related goal (和訳) このコースを通して、学生は次のことを学びます： 学習目標の作成と進捗状況の確認 学習計画の特徴と段階を説明する。 個人の学習履歴を文化や学習背景との関連で考察する。 個々の言語学習計画の実施と振り返り 教科特有の語彙を理解する。 プレゼンテーションでの質問・返答が適切にでき、グループディスカッションに協力できる。	
	Self-directed and Reflective Language Learning		Throughout this CLIL course, students will learn how to: - Create learning goals and reflect on progress - Describe features and stages of learning plans - Consider aspects of individual learning histories in relation to culture and learning backgrounds - Implement and reflect on individual language learning plan - Show understanding of subject-specific vocabulary - Respond appropriately using questions/replies in presentations and cooperate in group discussion (和訳) このCLILコースを通して、学生は以下のことを学びます： ・学習目標を立て、進捗状況を振り返る ・学習計画の特徴と段階を説明する ・文化や学習背景に関連した個人の学習履歴の側面を考慮する。 ・個人の言語学習計画を実施し、振り返る ・教科特有の語彙を理解する。 ・プレゼンテーションで質問や返答に適切に対応し、グループディスカッションで協力することができる	
	Self-directed and Reflective Language Learning		This course is designed to support independent language learning. To achieve individual language learning goals, students will design and carry out language learning plans. Weekly discussions will be based on reflective journals and reports on out-of-class learning activities. The contents of the course will be from the students' own academic disciplines and interests. In groups, students will take part in presentations and discussion activities throughout the course. (和訳) この授業は、自立した語学学習をサポートすることを目的としています。個々の語学学習目標を達成するために、学生は語学学習計画を立て、実行する。毎週のディスカッションは、振り返りのための日誌と授業外の学習活動に関するレポートに基づいて行われる。コースの内容は、学生自身の学問分野や興味に基づいたものとする。グループに分かれ、プレゼンテーションやディスカッションを行う。	
	Self-directed and Reflective Language Learning		This course is designed to promote independent language learning by guiding students in creating and implementing personalized language learning plans. Students will work toward their individual goals and share their progress during weekly in-class discussions, drawing from reflective journals about their out-of-class learning experiences. The course content will be customized to align with students' academic fields, language learning objectives, and personal interests. Students will participate in group presentations, journal writing activities, and discussions throughout the course. (和訳) この授業は、学生が各自に合った語学学習計画を立て、実行できるように指導することで、自立した語学学習を促進することを目的としています。学生は各自の目標に向かって努力し、毎週のクラス内でのディスカッションで進捗状況を共有し、クラス外での学習経験について振り返り日記を作成する。コース内容は、学生の学問分野、語学学習の目的、個人の興味に合わせてカスタマイズする。コース期間中、グループ・プレゼンテーション、日記作成、ディスカッションに参加する。	
	Academic Communication		Various content knowledge that are relevant to addressing current global issues such as "business and management," "environment and tourism," "community and social," "health and wellbeing," "political and legal," "science and technology," "religion and philosophy," and "communication and culture." Specific communication skills necessary for both formal and informal academic speech, discussions, and writing such as evidence-based, appropriate academic communication style citations and referencing. They will also acquire critical and creative thinking skills such as analyzing global issues and synthesizing the ideas and discussion to present their solution. (和訳) 「ビジネスと経営」「環境と観光」「地域社会と社会」「健康と福祉」「政治と法律」「科学と技術」「宗教と哲学」「コミュニケーションと文化」など、現在のグローバルな問題への取り組みに関連するさまざまな内容。アカデミックなスピーチ、ディスカッション、ライティングに必要な具体的なコミュニケーションスキルを身につける。また、グローバルな問題を分析し、アイデアや議論を統合して解決策を提示するなど、批判的かつ創造的な思考スキルを習得する。	
	Academic Communication		This course provides students with the opportunity to address global issues collaboratively in groups of different majors and exchange their ideas and solutions. Groups will be decided according to the number of enrolled students. Example topics covered include Rikkyo's undergraduate majors such as "business and management," "environment and tourism," "community and social welfare," "health and well-being," "politics and law," "science and technology," "religion and philosophy," and "communication and culture." Students will acquire communication skills necessary for both formal and informal academic speech, discussions, and writing, including evidence-based academic communication styles, citations, and referencing. They will also acquire critical and creative thinking skills, such as analyzing global issues and synthesizing ideas and discussions to present their solutions. (和訳) この授業は、学生が異なる専攻のグループに分かれて、グローバルな問題に共同で取り組み、そのアイデアや解決策を交換する機会を提供するものである。履修者数に応じてグループを決定する。トピックの例としては、「ビジネス・経営」「環境・観光」「地域・社会」「健康・福祉」「政治・法律」「科学・技術」「宗教・哲学」「コミュニケーション・文化」など、立教の学部専攻を取り上げます。 学生は、エビデンスに基づいた適切なアカデミック・コミュニケーション・スタイル、引用、参照など、フォーマルおよびインフォーマルなアカデミック・スピーチ、ディスカッション、ライティングに必要なコミュニケーションスキルを習得する。また、グローバルな問題を分析し、アイデアや議論を統合して解決策を提示するなど、批判的かつ創造的な思考スキルも身につけます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Intercultural Studies		The main goal of this course is to prepare students for studying abroad by building their intercultural knowledge and communication skills. To achieve this goal, students will learn about other cultures and global varieties of English, discuss how their culture is similar to and different from other cultures, and learn what to do/say in common situations they may face when abroad. This will increase students' cultural awareness and sensitivity, and reduce culture shock if they travel, work, or study abroad. (和訳) この授業の主な目的は、異文化に関する知識とコミュニケーションスキルを身につけることで、海外留学に備えることです。この目標を達成するために、学生は異文化と世界的な英語の多様性について学び、自分たちの文化が異文化とどのように似ていて、どのように違うのかを議論し、海外で直面する可能性のある一般的な状況で何をすべきか/何を言うべきかを学びます。これにより、学生の文化に対する認識と感受性を高め、海外旅行、海外就職、海外留学の際のカルチャーショックを軽減します。	
	Intercultural Studies		Intercultural communication is at the heart of this course, which uses Elizabeth Acevedo's 'With the Fire on High' to examine identity, diversity, and cultural experiences. Weekly reading circles and reflective activities will deepen students' awareness of social issues and cultural perspectives, fostering their ability to engage thoughtfully with diverse viewpoints. By the end of the course, students will enhance their English fluency, analytical thinking, and have explored how social and cultural issues influence communication and understanding in a global context. Course content key points: 1. Intercultural communication themes including cultural identity, diversity, community, and trust. 2. Weekly reading circles with rotating roles (e.g., summariser, discussion leader, connector, culture connector etc). 3. Communicative activities, including role-play discussions and reflective tasks. 4. Weekly quizzes to reinforce comprehension and critical thinking. 5. Final reflective writing and a cumulative quiz to consolidate learning. (和訳) 異文化コミュニケーションはこのコースの中心であり、Elizabeth Acevedoの『With the Fire on High』を用いて、アイデンティティ、多様性、文化的経験について考察する。毎週行われる読書サークルと振り返り活動により、社会問題や文化的視点に対する学生の認識を深め、多様な視点に思慮深く関わる能力を養う。コース終了時には、英語の流暢さと分析的思考力を高め、社会的・文化的問題がグローバルな文脈におけるコミュニケーションや理解にどのように影響するかを探求します。 コース内容のポイント 1. 文化的アイデンティティ、多様性、コミュニティ、信頼を含む異文化間コミュニケーションのテーマ。 2. 役割分担 (例: 要約者、ディスカッション・リーダー、コネクター、文化コネクターなど) をしながら、毎週リーディング・サークルを行う。 3. ロールプレイ・ディスカッションや振り返り課題を含むコミュニケーション活動。 4. 理解力と批判的思考を強化するための小テストを毎週実施。 5. 最終的な振り返り作文と累積小テストによる学習の定着。	
	Intercultural Studies		The main goal of this course is to prepare students for studying abroad by building their intercultural knowledge and communication skills. To achieve this goal, students will 1) learn about other cultures and global varieties of English 2) discuss how their culture is similar to and different from other cultures. 3) learn what to do/say in common situations they may face when studying abroad. This will help students to have a better study abroad experience and reduce culture shock. (和訳) この授業の主な目的は、異文化に関する知識とコミュニケーション能力を養うことで、留学に備えることである。この目標を達成するために、学生は以下のことを行います。 1) 異文化と世界の英語表現について学ぶ。 2) 自分たちの文化が他の文化とどのように似ているのか、また違うのかを話し合う。 3) 留学中に直面する可能性のある一般的な状況において、何をすべきか/何を言うべきかを学ぶ。 これにより、学生がより良い留学生活を送り、カルチャーショックを軽減することができる。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 1 (Basic)		Each week, students will learn skills for TOEFL test by reading a textbook. Also, students will learn and discuss how to choose schools, prepare for study abroad, live in a foreign culture and adapt to classes abroad. (和訳) 毎週、テキストを読みながらTOEFLテストのためのスキルを学びます。また、学校の選び方、留学の準備、外国文化での生活、海外での授業への適応などを学び、話し合います。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 1 (Basic)		In this course, students will develop the basic skills needed to prepare for the TOEFL by engaging with TOEFL practice questions and TOEFL-related exercises and activities. In parallel to this, students will learn and discuss various topics that will help them prepare to study abroad. (和訳) この授業では、TOEFLの練習問題やTOEFLに関連したエクササイズやアクティビティに取り組むことで、TOEFL対策に必要な基礎力を養います。並行して、留学準備に役立つ様々なトピックを学び、ディスカッションします。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 1 (Basic)		This course mainly consists of two main activities. The first one is activities using the textbook. The students will tackle TOEFL-style exercises in the text, listen to and read about various topics, and then discuss and write about the topics to develop the basic English skills necessary to take TOEFL. In addition to the textbook activities, the course will also deal with topics relevant to studying abroad (e.g., culture shock) and deepen students' understanding of the topics through discussions and presentations. (和訳) この授業は主に2つの活動で構成されている。一つ目はテキストを使ったアクティビティです。テキストに掲載されているTOEFL形式の練習問題に取り組み、様々なトピックについて聞いたり読んだりし、そのトピックについてディスカッションしたり書いたりすることで、TOEFL受験に必要な英語の基礎力を養います。また、テキストを使ったアクティビティだけでなく、留学に関連したトピック (カルチャーショックなど) も扱い、ディスカッションやプレゼンテーションを通して理解を深めていきます。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 1 (Basic)		This course primarily consists of two main activities. The first focuses on textbook-based exercises. Students will engage in TOEFL-style tasks, listen to and read about a variety of topics, and then discuss and write about these topics to develop the essential English skills required for the TOEFL. In addition to textbook activities, the course will address topics related to studying abroad, fostering deeper understanding through discussions and presentations. (和訳) このコースは主に2つの活動で構成されている。1つ目は教科書を使った演習が中心です。TOEFL形式の課題に取り組み、様々なトピックについて聞いたり読んだりし、それらのトピックについてディスカッションしたり書いたりすることで、TOEFLに必要な英語力を養います。教科書に沿った演習に加え、留学に関するトピックを取り上げ、ディスカッションやプレゼンテーションを通して理解を深めます。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 2 (Intermediate)		This intermediate course is for students who are interested in studying abroad in the future and want to continue improving their academic communication skills. Including a wide range of contents relevant to studying abroad, the course focuses on developing students' fluency and confidence in academic English. The course will also help students become more independent language learners and develop the skills necessary for the TOEFL test. (和訳) この中級授業は、将来留学に興味があり、アカデミックなコミュニケーションスキルを継続的に向上させたい学生のためのコースです。留学に関連した幅広い内容を含み、アカデミックな英語での流暢さと自信を養うことに重点を置いています。また、より自立した語学学習者となり、TOEFLテストに必要なスキルを身につけます。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 2 (Intermediate)		This course is for students who are interested in studying abroad in the future and want to continue improving their academic communication skills. Including a wide range of contents relevant to studying abroad, the course focuses on developing students' fluency and confidence in academic English. The course will also help students become more independent language learners and develop the skills necessary for the TOEFL test. (和訳) この授業は、将来留学を希望し、アカデミックなコミュニケーションスキルを継続的に向上させたい学生のためのコースです。留学に関連した幅広い内容を含み、アカデミックな英語での流暢さと自信を養うことに重点を置いています。また、より自立した語学学習者となり、TOEFLテストに必要なスキルを身につけます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Study Abroad Preparation: TOEFL 2 (Intermediate)		Through this course, students will be able to: - Talk about a wide range of topics in interviews, long turns, and academic discussions - Write descriptions, preferences and explanations with reasons and support - Respond to a variety of texts through TOEFL test relevant speaking and writing tasks - Demonstrate an understanding of self-directed language learning strategies - Compile practical information about taking classes at a university abroad - Prepare for adapting to life in a foreign culture (和訳) この授業を通して、学生は以下のことができるようになる: ・インタビュー、長回し、アカデミックなディスカッションなど、幅広いトピックについて話すことができる。 ・理由と裏付けを伴った説明、好み、説明を書くことができる。 ・TOEFLテストに関連したスピーキングとライティングの課題を通して、様々な文章に対応することができる。 ・自己管理型の言語学習ストラテジーを理解する ・海外の大学で授業を受けるための実用的な情報をまとめる ・異文化での生活に適応するための準備をする	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 3 (Advanced)		This advanced course is for students who are interested in studying abroad in the future and want to improve their academic communication skills. Including a wide range of contents relating to studying abroad, and topics that might be expected in English-speaking countries, the course focuses on developing high levels of fluency and confidence in academic English. The course will also help students become more independent language learners and develop the advanced academic skills necessary for the TOEFL test. (和訳) 将来留学を希望し、アカデミック・コミュニケーション能力を向上させたい学生のための上級コースです。留学に関する幅広い内容や、英語圏で想定されるトピックを盛り込み、アカデミックな英語において高い流暢さと自信を身につけることに重点を置いています。また、より自立した語学学習者となり、TOEFLテストに必要な高度なアカデミック・スキルを身につけます。	
	Study Abroad Preparation: TOEFL 3 (Advanced)		Through this course, students will be able to: Talk about a wide range of topics in interviews, long turns, and academic discussions Write descriptions, preferences and explanations with reasons and support Respond to a variety of texts through TOEFL test relevant speaking and writing tasks Demonstrate an understanding of self-directed language learning strategies Compile practical information about taking classes at a university abroad Prepare for adapting to life in a foreign culture (和訳) この授業を通して、学生は以下のことができるようになる: インタビュー、長回し、アカデミックなディスカッションにおいて、幅広いトピックについて話すことができる。 理由と裏付けを伴った説明、好み、説明を書くことができる。 TOEFLテストに関連したスピーキングとライティングのタスクを通して、様々なテキストに対応することができる。 自己管理型の言語学習ストラテジーを理解する 海外の大学で授業を受けるための実践的な情報をまとめる 異文化での生活に適応するための準備をする	
	Study Abroad Preparation: IELTS 1 (Basic)		Through this course, students will develop skills in: Planning, reflection and self-evaluation for independent IELTS study. Speaking about Study Abroad topics in interviews, long turns and discussions. Writing descriptions, explanations, analyses and interpretations related to Study Abroad topics. Reading and listening to learn about Study Abroad topics. Making plans for Study Abroad. (和訳) この授業を通して、学生は以下のスキルを身につけます: 自立したIELTS学習のための計画、内省、自己評価。 インタビュー、長回し、ディスカッションで留学トピックについて話す。 留学トピックに関する説明、解説、分析、解釈を書く。 留学トピックに関するリーディングとリスニング 留学計画を立てる	
	Study Abroad Preparation: IELTS 1 (Basic)		Planning and self-evaluation for independent IELTS study. Speaking about Study Abroad topics in interviews, long turns and discussions. Writing descriptions and explanations related to Study abroad topics. Reading and listening to learn about Study Abroad topics. (和訳) IELTS自主学習の計画と自己評価。 面接、長回し、ディスカッションで留学トピックについて話す。 留学トピックに関する説明文を書く。 留学トピックについて学ぶためのリーディングとリスニング	
	Study Abroad Preparation: IELTS 2 (Intermediate)		CLIL Curriculum fit: The course encourages the development of broader competences including willingness to communicate, cooperation and interdependence, autonomy, and sedulity. The classes are content- and communication-driven. Topics are developed in various formats to engage a range of cognitive skills. Connections are formed within the classroom and to the wider community of the university and to study abroad locations around the world. (和訳) CLILカリキュラムに適合: この授業は、コミュニケーションへの意欲、協力と相互依存、自律性、落ち着きなど、幅広い能力の育成を促す。 授業は内容重視、コミュニケーション重視。 トピックは、さまざまな認知能力を引き出すために、さまざまな形式で展開される。 教室内だけでなく、大学や世界各地の留学先など、より広いコミュニティとのつながりも形成される。	
	Study Abroad Preparation: IELTS 2 (Intermediate)		Through this course, students will develop skills in: Planning and self-evaluation for independent IELTS study. Speaking about Study Abroad topics in interviews, long turns and discussions. Writing descriptions and explanations related to Study abroad topics. Reading and listening to learn about Study Abroad topics. CLIL Curriculum fit: The course encourages the development of broader competences including willingness to communicate, cooperation and interdependence and autonomy. The classes are content- and communication-driven. Topics are developed in various formats to engage a range of cognitive skills. Connections are formed within the classroom and to the wider community of the university and to study abroad locations around the world. (和訳) この授業を通して、学生は以下のスキルを身につけます: 自立したIELTS学習の計画と自己評価 面接、長回し、ディスカッションで留学トピックについて話す。 留学トピックに関する説明文を書く。 留学トピックに関するリーディングとリスニング CLILカリキュラムに適合: コミュニケーション能力、協調性、相互依存性、自律性など、幅広い能力の育成を促す。 授業は内容重視、コミュニケーション重視。 トピックは様々な形式で展開され、様々な認知能力に働きかける。 教室内だけでなく、大学や世界各地の留学先など、より広いコミュニティとのつながりが形成される。	
	Study Abroad Preparation: IELTS 2 (Intermediate)		Through this course, students will develop skills in: ● Planning and self-evaluation for independent IELTS study. ● Speaking about Study Abroad topics in interviews, long turns and discussions. ● Writing descriptions and explanations related to Study abroad topics. ● Reading and listening to learn about Study Abroad topics. (和訳) この授業を通して、学生は以下のスキルを身につけます: ・自立したIELTS学習のための計画と自己評価。 ・面接、長回し、ディスカッションで留学トピックについて話す。 ・留学トピックに関する説明文を書く。 ・留学トピックに関するリーディングとリスニング	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Study Abroad Preparation: IELTS 3 (Advanced)		Throughout this course, students will: ・ learn about the various question types typically found in each of the listening, reading, writing, and speaking sections of the IELTS test ・ learn about and practice key strategies and self-study techniques on how to prepare for the IELTS test through practice of the various question types ・ talk about a wide range of topics, including those related to study abroad (和訳) この授業を通して、受講生は以下のことを学びます: ・ IELTSテストのリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの各セクションで一般的に出題される様々な問題タイプについて学ぶ。 ・ 様々な問題タイプの練習を通して、IELTSテストに備えるための重要なストラテジーと自習テクニックを学び、練習する。 ・ 留学に関することを含め、幅広いトピックについて話す。	
	Study Abroad Preparation: IELTS 3 (Advanced)		This advanced course is for students who are planning to study abroad and want to further develop their language skills. Class contents cover a wide range of topics from study abroad contexts, including topics that could be expected in English-speaking countries, in addition to topics that are commonly found in the IELTS test. The course will help students develop advanced academic competencies needed for the IELTS test. (和訳) この上級の授業は、海外留学を予定し、さらに語学力を伸ばしたい方のためのコースです。授業内容は、IELTSでよく出題されるトピックに加え、英語圏で想定されるトピックなど、留学の文脈から幅広いトピックを扱います。IELTSテストに必要な高度なアカデミック能力を養います。	
	Study Abroad Preparation: IELTS 3 (Advanced)		Through this course, students will develop skills in: Planning and self-evaluation for independent IELTS study. Speaking about Study Abroad topics in interviews, long turns and discussions. Writing descriptions and explanations related to Study abroad topics. Reading and listening to learn about Study Abroad topics. CLIL Curriculum fit: The course encourages the development of broader competences including willingness to communicate, cooperation and interdependence and autonomy. The classes are content- and communication-driven. Topics are developed in various formats to engage a range of cognitive skills. Connections are formed within the classroom and to the wider community of the university and to study abroad locations around the world. (和訳) この授業を通して、学生は以下のスキルを身につけます: 自立したIELTS学習の計画と自己評価 面接、長回し、ディスカッションで留学トピックについて話す。 留学トピックに関する説明文を書く。 留学トピックに関するリーディングとリスニング CLILカリキュラムに適合: コミュニケーション能力、協調性、相互依存性、自律性など、幅広い能力の育成を促す。 授業は内容重視、コミュニケーション重視。 トピックは様々な形式で展開され、様々な認知能力に働かせる。 教室内だけでなく、大学や世界各地の留学先など、より広いコミュニティとのつながりが形成される。	
	Study Abroad Preparation: IELTS 3 (Advanced)		Throughout this course, students will: 1. learn about the various question types typically found in each of the listening, reading, writing, and speaking sections of the IELTS test 2. learn about and practice key strategies and self-study techniques on how to prepare for the IELTS test through practice of the various question types 3. talk about a wide range of topics, including those related to study abroad CLIL Curriculum fit: The course encourages the development of broader competences including willingness to communicate, cooperation and interdependence, autonomy, and sedulity. The classes are content- and communication-driven. Topics are developed in various formats to engage a range of cognitive skills. Connections are formed within the classroom and to the wider community of the university and to study abroad locations around the world (和訳) この授業を通して、受講生は以下のことを学びます: 1. IELTSテストのリスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの各セクションで一般的に出題される様々な問題タイプについて学びます。 2. 様々な問題タイプの練習を通して、IELTSテストに備えるための重要なストラテジーと自習テクニックを学び、練習する。 3. 留学に関することを含め、幅広いトピックについて話す。 CLILカリキュラムに適合: コミュニケーションへの意欲、協調性と相互依存性、自律性、落ち着きなど、幅広い能力の育成を促す。 授業は内容重視、コミュニケーション重視。 トピックは、さまざまな認知能力を引き出すために、さまざまな形式で展開される。 教室内だけでなく、大学や世界各地の留学先など、より広いコミュニティとのつながりが形成される。	
	英語海外文化研修		This English overseas language and cultural studies programme will take place over four weeks in August at the University of Warwick, UK. Classes at the English for Global Communication (EGC) Summer School (https://warwick.ac.uk/fac/soc/al/study/short-courses/egc) are made up of students from different countries as well as other students from Japanese universities and are taught completely in English, by English native instructors. Students are expected to actively participate in all classes and excursions, which are embedded in the program, as well as cooperate with others in university accommodation, to make the most of the opportunity to learn from and communicate effectively with staff members and other students. Students must attend all of the pre-departure training sessions held at Rikkyo University in the Spring semester and a reflection session in September. In these training sessions, in addition to information about travel procedures, students will participate in simulations of local classes held in English and learn about the actual life and customs of the UK. The schedule and cost are as follows:: Schedule: Planned departure on Early August and return on Late August, 2026. Students will stay in university accommodation (private rooms) for 4 weeks. The accommodation is self-catered, which means you will buy and prepare all meals yourself. Cost: Approximately 1 million yen. The exact cost will be confirmed in April/May 2026. This includes participation fees for the on-site program (tuition, course material fee etc.) and excursions, accommodation, round-trip airfare, a welcome meal, weekly sports and social events, an end-of-course Certificate of Attendance, final day dinner or BBQ, and transportation from the local airport to the course site. However, as the number of participants and exchange rate fluctuates, specifics will be announced during the pre-departure training in June/July. Day trips which are an integral part of the program may include London, Warwick Castle, Shakespeare's Stratford Upon Avon, Coventry or Oxford including tickets and transport. Payment: The program participation fee, fee for lodging and the fee for the round-trip ticket will be paid in full by credit card or bank transfer before departure. NOTE: Course participation withdrawals will not be accepted after course registration and written pledge submission, because of the inconvenience this would cause to the other participants and administrative staff at Rikkyo and Warwick University. The following steps are required before registration. 1. Attending the Preliminary Explanation: Guidance and explanation of the application guidelines will be provided at the beginning of April, so applicants must attend this session before registering. 2. Application: Students should fill out the application form and submit it on time. 3. Essay: For selection purposes, prospective students will write an essay (400-500 words) stating 1 your reasons for applying for the study abroad programme, 2 your personal goals, and 3 how participation will positively impact your studies at Rikkyo University and beyond. 4. Announcement of the results of the selection process: Students who have been accepted will participate in the pre-departure training. Upon the announcement of the results of the selection process, students will be registered for the course and be bound to pay all fees in full.	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
自由学 共 通 科 目 （英 語 ・ 語 系 科 目 ） バ ル ・ ス タ デ イ ー ズ 領 域			(和訳) この英語海外語学・文化研修プログラムは、8月の4週間にわたり、英国のウォーリック大学で開催されます。English for Global Communication (EGC) Summer School (https://warwick.ac.uk/fac/soc/al/study/short-courses/egc)の授業は、様々な国からの学生や日本の大学の学生で構成され、英語ネイティブ講師による完全な英語で行われます。受講生は、プログラムに組み込まれているすべての授業やエクササイズに積極的に参加し、大学の宿泊施設では他の受講生と協力し、スタッフや他の受講生から学んだり、他の受講生と効果的にコミュニケーションをとる機会を最大限に活用することが求められます。 春学期に立教大学で行われる出発前研修と、9月に行われる振り返り研修には必ず出席しなければなりません。この研修では、渡航手続きに関する情報のほか、英語で行われる現地の授業のシミュレーションに参加し、イギリスの実際の生活や習慣について学びます。 スケジュールと費用は以下の通り： スケジュール 2026年8月上旬出発、8月下旬帰国予定。大学寮（個室）に4週間滞在する。滞在先は自炊式で、食事はすべて自分で買い、用意する。 費用は約100万円。正確な費用は2026年4月～5月に確定します。これには、現地でのプログラム参加費（授業料、教材費等）、エクスカーション、宿泊費、往復航空運賃、ウェルカムミール、毎週のスポーツ・交流イベント、コース終了証、最終日のディナーまたはバーベキュー、現地空港からコース会場までの交通費が含まれます。ただし、参加者数や為替レートが変動するため、詳細は6～7月の出発前研修で発表される。 プログラムに含まれる日帰り旅行には、ロンドン、ウォリック城、シェイクスピアのストラトフォード・アポン・エイボン、コベントリー、オックスフォードなどが含まれる場合があります（チケット代、交通費込み）。 支払い プログラム参加費、宿泊費、往復航空券代は、出発前にクレジットカードまたは銀行振込にて全額お支払いいただきます。 注意：コース参加登録後、誓約書提出後の参加辞退は、他の参加者や立教大学、ウォーリック大学の事務スタッフに迷惑がかかるため、受け付けません。 登録の前に以下のステップが必要です。 1. 事前説明会への参加：4月上旬に募集要項のガイダンス・説明を行いますので、登録前に必ず出席してください。 2. 出席：入学願書に必要な事項を記入し、期日までに提出すること。 3. 小論文 選考のため、1.志望理由、2.個人的な目標、3.参加することが立教大学での学業にどのようにプラスになるか、などを400～500字のエッセイにまとめて提出する。 4. 選考結果の発表：合格者は出発前研修に参加する。選考結果発表後、受講登録が行われ、受講料が全額納入されます。	
	Introduction to Global Studies A: Humanities		Each week, students will learn a new academic concept through the assigned content. A mini lecture on each week' s topic will be given by the instructor, followed by students' discussion to better understand the topic. The topics will include learning theories/motivation and self-regulation (educational psychology), communication basics and strategies (communications), and bilingualism (linguistics). Students will engage in three projects in which they will conduct research individually and collaboratively with classmates and present their findings to the class. (和訳) 毎週、学生は与えられた内容を通して新しい学問的概念を学びます。各週のトピックについて講師がミニレクチャーを行い、その後、受講生がディスカッションを行うことで、トピックの理解を深める。トピックは、学習理論／モチベーションと自己調整（教育心理学）、コミュニケーションの基本と戦略（コミュニケーション）、バイリンガリズム（言語学）など。学生は3つのプロジェクトに取り組み、個人またはクラスメートと共同で研究を行い、その結果をクラスで発表する。	
	Introduction to Global Studies A: Humanities		*This course introduces students to fundamental academic concepts within the Humanities, with a focus on the fine arts, performing arts, literature, and philosophy. The course also aims to enhance students' language and academic skills, including note-taking, annotating, vocabulary development, analytical thinking, critical reasoning, discussion, and presentation skills. *The course contents may be adjusted based on student enrollment and the evolving learning objectives of the class. (和訳) *この授業では、美術、舞台芸術、文学、哲学を中心に、人文科学における基本的な学問的概念を学ぶ。また、ノートの取り方、注釈の付け方、語彙力の向上、分析的思考、批判的推論、ディスカッション、プレゼンテーションのスキルなど、言語能力やアカデミック・スキルの向上を目指します。 *授業内容は、受講者の状況や学習目的に応じて調整される。	
	Introduction to Global Studies A: Humanities		Each week, students will learn a new academic concept by reading an assigned text. A mini lecture on each week' s topic will be given by the instructor, followed by student discussion to better understand the topic. The topics will include gender equality and stereotypes (sociology), stress, anxiety, and mental strength (psychology), and linguistic relativity, speech acts, and discourse analysis (linguistics). Students will engage in two projects in which they will research, conduct surveys, collect/analyze data collaboratively with classmates, and present their findings to the class. (和訳) 毎週、指定されたテキストを読みながら、新しい学術的な概念を学びます。各週のトピックについて講師がミニレクチャーを行い、その後、受講生がディスカッションを行うことで、トピックの理解を深める。トピックは、男女平等とステレオタイプ（社会学）、ストレス、不安、精神力（心理学）、言語相対性、発話行為、談話分析（言語学）など。学生は2つのプロジェクトに取り組み、リサーチ、アンケート調査、クラスメートと協力したデータ収集・分析を行い、その結果をクラスで発表する。	
	Introduction to Global Studies B: Social Science		This course is designed for students to develop communicative and academic language skills through understanding topics related to Social Science, particularly cultural anthropology, sociology, and intercultural studies. Students will use general and specific contents to engage in group discussions and to develop critical thinking skills by understanding and analyzing academic lectures and texts. Our academic goal is to better understand and be able to describe in English the nature of interactions between different peoples and cultures. Tasks will include taking notes in academic contexts, summarizing material, finding key points, and presenting analyses. (和訳) この授業は、社会科学、特に文化人類学、社会学、異文化研究に関連するトピックを理解することを通して、コミュニケーション能力とアカデミックな言語能力を養うことを目的としています。一般的・具体的な内容を用いてグループディスカッションを行い、学術的な講義やテキストを理解・分析することで、批判的思考力を養います。学術的な目標は、異なる民族や文化間の相互作用の本質をよりよく理解し、英語で説明できるようになることです。アカデミックな文脈の中でノートを取り、資料を要約し、重要なポイントを見つけ、分析結果を発表する。	
	Introduction to Global Studies B: Social Science		Students will actively participate in reading tasks related to the main theme of "Intercultural Communication." There will be group discussions and presentations to confirm understanding. Based on what they learned, students will analyze various cases and make individual or group presentations. (和訳) メインテーマである「異文化コミュニケーション」に関連したリーディング課題に積極的に参加する。理解を確認するためにグループディスカッションやプレゼンテーションを行う。学んだことをもとに、様々なケースを分析し、個人またはグループでプレゼンテーションを行う。	
	Introduction to Global Studies B: Social Science		This course is designed for students to develop communicative and academic language skills through understanding topics related to Social Science, in particular law and politics, economics, and tourism. Students will use general and specific contents to engage in group discussions and to develop critical thinking skills by understanding and analyzing academic lectures and texts. They will also reflect their own learning through understanding various English learning strategies (vocabulary, reading, and writing) and critical thinking skills. After each content introduction, students are expected to deliver presentations related to the topic covered in class. (和訳) 社会科学、特に法律や政治、経済、観光に関するトピックを理解することで、コミュニケーション能力とアカデミックな言語能力を養うことを目的としたコースです。一般的・具体的な内容を用いてグループディスカッションを行い、学術的な講義やテキストを理解・分析することで、批判的思考力を養います。また、様々な英語学習戦略（語彙、リーディング、ライティング）やクリティカル・シンキング・スキルを理解することで、自らの学習を振り返ります。各コンテンツの紹介の後、授業で扱ったトピックに関連したプレゼンテーションを行う。	
	Introduction to Global Studies C: Natural Science		Students will use a variety of materials to participate in group discussions and engage in active learning in several ways (vocabulary skills, reading, writing, discussion, active listening, and presentation). Three times during the semester, students are expected to give clear, organized presentations, highlighting significant points regarding topics related to the class. Students shall also produce a report which develops an argument, giving reasons in support of or against a particular point of view related to topics and/or themes from the class. (和訳) 様々な教材を使ってグループ・ディスカッションに参加し、いくつかの方法（語彙力、リーディング、ライティング、ディスカッション、アクティブ・リスニング、プレゼンテーション）でアクティブ・ラーニングに取り組む。学期中に3回、授業に関連したトピックについて、重要なポイントを強調し、明確に整理されたプレゼンテーションを行うことが求められる。また、授業で扱ったトピックやテーマに関連し、特定の見解を支持または反対する理由を述べ、議論を展開するレポートを作成する。	
	Introduction to Global Studies C: Natural Science		Students will use general and specific contents to engage in group discussions and reflect their active learning through understanding various English learning strategies (vocabulary, reading, and writing) and critical thinking skills. After each content introduction, students are expected to give a clear, systematically developed presentation, with highlighting of significant points regarding the topic related in the class and produce a report which develops an argument, giving reasons in support of or against a particular point of view explaining the advantages and disadvantages of various options. (和訳) 学生は、一般的な内容や具体的な内容を用いてグループディスカッションを行い、様々な英語学習法（語彙、読解、ライティング）や批判的思考力を理解することで、能動的な学習に反映させる。各コンテンツの紹介の後、学生は、授業で関連したトピックについて、重要なポイントを強調しながら、明確で体系的に展開されたプレゼンテーションを行い、様々な選択肢の利点と欠点を説明する特定の視点を支持または反対する理由を述べ、議論を展開するレポートを作成することが期待されています。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: International Relations and Politics		Content Learning Objectives: Analyze key concepts in international relations and political science (C). Critically evaluate political events and trends on a global scale (C). Language Learning Objectives: Develop academic English skills relevant to political science discourse (L). Enhance abilities in reading, writing, and discussing complex political texts (L). Integrated Objectives: Apply political vocabulary and concepts in academic discussions and writing (C+L). Create and deliver presentations on international relations topics, demonstrating language proficiency and content understanding (C+L). (和訳) 学習目標 国際関係と政治学の主要概念を分析することができる(C) 世界規模での政治的出来事や傾向を批判的に評価することができる(C)。 言語学習目標 政治学に関連したアカデミックな英語力を身につける(L)。 複雑な政治的文章を読み、書き、議論する能力を高める(L)。 総合目標 政治に関する語彙や概念をアカデミックなディスカッションやライティングに応用する(C+L)。 国際関係のトピックについてプレゼンテーションを行い、言語能力と内容の理解を示す(C+L)。	
	CLIL Seminars: International Relations and Politics		This course integrates the study of politics and international relations with English language learning, offering students the chance to expand their understanding of global issues while building academic and language skills. Through group discussions, lectures, videos, texts, note-taking, and both group and individual presentations, students will explore topics such as global governance, war, migration, human rights, and environmental challenges, enhancing their critical thinking and communication abilities. (和訳) この授業は、政治と国際関係の学習と英語学習を統合したもので、アカデミックなスキルと語学力を身につけながら、グローバルな問題に対する理解を深める機会を提供します。グループ・ディスカッション、講義、ビデオ、テキスト、ノートの取り方、グループ・プレゼンテーション、個人プレゼンテーションを通して、グローバル・ガバナンス、戦争、移民、人権、環境問題などのトピックを探索し、批判的思考とコミュニケーション能力を高めます。	
	CLIL Seminars: International Relations and Politics		This course will introduce students to issues in international relations and politics and provide opportunities to improve their academic skills. Students will learn about topics such as war, diplomacy, trade, and foreign policy. By combining learner-led research projects with collaborative presentations, discussion, creative thinking, and written responses, students will improve their academic English proficiency and hone their higher order critical thinking skills. (和訳) このコースでは、国際関係や政治の問題を紹介し、学力向上の機会を提供する。戦争、外交、貿易、外交政策などのトピックについて学びます。学習者主導のサーチ・プロジェクトと、共同でのプレゼンテーション、ディスカッション、創造的な思考、そして文書による回答を組み合わせることで、アカデミックな英語力を向上させ、高次の批判的思考力を磨きます。	
	CLIL Seminars: Globalization and Business		In this course, students will delve into the convergence of globalization and business, with a specific focus on honing critical thinking skills through the examination of case studies. The curriculum underscores the analysis of business case studies to elucidate both the advantages and disadvantages inherent in the interplay of globalization and business. An overview of various topics will be explored, including marketplace competition, cultural issues at the workplace, and social responsibilities. Students will actively participate in researching and scrutinizing their own specific areas of interest (e.g., international trade, accounting, management), engaging in critical reflection on relevant issues. Through fostering active involvement in class discussions, self-initiated research endeavors, and collaborative projects, the course aims to empower students to formulate opinions and effectively articulate their reasoning on multifaceted topics. (和訳) この授業では、グローバル化とビジネスの融合について掘り下げ、特にケーススタディを通して批判的思考力を磨きます。カリキュラムでは、グローバル化とビジネスの相互作用に内在するメリットとデメリットの両方を解明するために、ビジネス・ケース・スタディの分析を重視します。市場競争、職場における文化的問題、社会的責任など、さまざまなトピックの概要を探索する。受講生は、各自の関心分野（国際貿易、会計、経営など）の調査や精査に積極的に参加し、関連する問題について批判的な考察を行う。クラスでのディスカッション、自発的な研究活動、共同プロジェクトなどに積極的に参加することで、学生が多面的なトピックについて意見を述べ、効果的に理由を説明できるようになることを目指します。	
	CLIL Seminars: Globalization and Business		Each week, students will learn a new academic concept through the assigned content. A mini lecture on each week's topic will be given by the instructor, followed by students' discussion to better understand the topic. The topics will include branding, branding psychology and marketing. Students will engage in three projects in which they will conduct individually and collaboratively with classmates and present their findings to the class. (和訳) 毎週、学生は指定された内容を通して新しい学問的概念を学びます。各週のトピックについて講師がミニ講義を行い、その後、受講生がディスカッションを行うことで、トピックの理解を深める。トピックには、ブランディング、ブランディング心理学、マーケティングなどが含まれる。学生は3つのプロジェクトに取り組み、個人で、またクラスメートと共同で研究を行い、その結果をクラスで発表する。	
	CLIL Seminars: Globalization and Business		Throughout this CLIL course, students will learn how to: 1) learn how to use a range of writing analysis tools and use these in writing their weekly class reflection journals and short responses to lectures, videos or class readings (Language, & Skills work) 2) develop their creativity skills (Content, Language, & Skills work) 3) discuss their ideas with classmates in response to lectures, videos or class readings. (Language & Skills work) 4) learn how to use the Level 10 Meeting system for effective meetings via mock training, and project team meetings (Content, Language, & Skills work) 5) develop negotiation skills (Content, Language, & Skills work) 6) use the Cornell Note Taking system to understand and record the main points of lectures and videos. (Language & Skills work) 7) learn effective business presentations skills (Content, Language, & Skills work) 8) develop research and team work skills and share their work on a team Google Site (Content, Language, & Skills work) There will be no final test but at the end of the semester each team will work on a project and give a final team presentation on that project, and make a team website using Google Sites to host and showcase their work. This final project work replaces the 'test'. (和訳) このCLILコースを通して、学生は以下のことを学ぶ: 1) さまざまなライティング分析ツールの使い方を学び、毎週の授業での振り返り日誌や、講義、ビデオ、クラスで読んだ内容に対する短い返答を書く際に活用する。 2) 創造力を高める(内容、言語、技能) 3) 講義、ビデオ、またはクラスで読んだ内容に対して、クラスメートと意見を交換する。(言語とスキル) 4) 模擬研修やプロジェクトチームのミーティングを通して、効果的なミーティングのためのレベル10ミーティングシステムの使い方を学ぶ(内容、言語、スキルワーク) 5) 交渉スキルを身につける(内容、言語、スキルワーク) 6) コーネルノートテイクシステムを使って、講義やビデオの要点を理解し、記録する。 7) 効果的なビジネスプレゼンテーションのスキルを身につける。 8) リサーチとチームワークのスキルを身につけ、チームのGoogleサイトに作品を共有する。 最終テストはないが、学期末に各チームはプロジェクトに取り組み、そのプロジェクトに関する最終プレゼンテーションを行う。この最終プロジェクトが「テスト」に代わる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: Advertising and the Media		Content: - Describe the role of media in society. - Identify different types of media and their advantages and disadvantages. - Understand the history, purpose, and functions of advertising. - Understand the social, ethical, and cultural aspects of advertising. - Analyze the implications of technological change on media and advertising. Language and Academic Skills: - Apply textual analysis to examine media messages. - Effectively communicate understanding through oral and written work. - Use target vocabulary to understand and discuss topics related to media and advertising. - Summarize, paraphrase, and quote appropriate sources effectively. (和訳) 内容 - 社会におけるメディアの役割について説明できる。 - さまざまな種類のメディアとその長所と短所を理解する。 - 広告の歴史、目的、機能を理解する。 - 広告の社会的、倫理的、文化的側面を理解する。 - 技術革新がメディアと広告に与える影響を分析する。 言語とアカデミック・スキル - テキスト分析を応用してメディアのメッセージを検証する。 - 口頭や書面を通して、理解を効果的に伝えることができる。 - メディアや広告に関するトピックを理解し、議論するために目標とする語彙を使用する。 - 適切な情報源を効果的に要約、言い換え、引用することができる。	
	CLIL Seminars: Advertising and the Media		Over the course of the semester, students will be tasked to analyze, evaluate, and discuss advertisements in a variety of forms to improve not only their media literacy but also develop their awareness and understanding of advertising. This will empower students to make better-informed choices regarding their needs, wants, and desires by considering the marketing messages they encounter. (和訳) 学期中、学生はメディア・リテラシーを向上させるだけでなく、広告に対する認識と理解を深めるため、さまざまな形態の広告を分析、評価、討論する。これは、学生が遭遇するマーケティング・メッセージを考慮することで、自分のニーズ、欲求、願望に関して、より良い情報に基づいた選択ができるようにするものである。	
	CLIL Seminars: Advertising and the Media		During the semester, students will attend lectures, learn advertising terminology, have discussions, complete assignments, and create their own advertisements in order to develop an awareness and general understanding of advertising and the media. Advertising strategies will include learning about consumers and target markets. Students will examine and analyze advertising through different forms of media (radio, TV, social media, outdoor) to identify and interpret messages and persuasive techniques used to attract customers. Lastly, students will discuss ethical considerations in advertising and examine and predict future trends in advertising. (和訳) 学期中、学生は講義に出席し、広告用語を学び、ディスカッションを行い、課題をこなし、広告とメディアに対する認識と一般的理解を深めるために、自分自身の広告を作成する。広告戦略には、消費者とターゲット市場についての学習も含まれる。さまざまなメディア（ラジオ、テレビ、ソーシャルメディア、屋外広告）を通して広告を検証・分析し、顧客を惹きつけるためのメッセージや説得力のあるテクニックを特定・解釈します。最後に、広告における倫理的配慮について議論し、広告における将来のトレンドについて検討・予測します。	
	CLIL Seminars: History		This course is designed to learn academic content through English, specifically within the domain of history. The goal is for students to be able to communicate more deeply about history through discussion and storytelling. Students will learn the language needed in order to communicate their knowledge about historical places, events, and people; and engage with a variety of historical resources, multimedia, and films; along with some reading comprehension assignments. There will be two presentations, which require some out-of-class work. The first involves the examination and presentation of artifacts to tell a story from the past. The final presentation involves evaluating historical tourism experiences based on The Experiential Model. (和訳) この授業は、英語を通してアカデミックな内容を学ぶことを目的とし、特に歴史という領域において学習する。目標は、ディスカッションやストーリーテリングを通して、歴史についてより深いコミュニケーションができるようになることです。学生は、歴史的な場所、出来事、人物についての知識を伝えるために必要な言葉と学び、さまざまな歴史資料、マルチメディア、映画に取り組み、読解の課題も課されます。また、2つのプレゼンテーションがあり、授業外の作業も必要となる。1回目は、過去の物語を語るための遺物を調査し、発表する。最後のプレゼンテーションでは、「体験モデル」に基づいて歴史観光体験を評価する。	
	CLIL Seminars: History		This course explores world history and the interconnectedness of human history on a global scale. Students will enhance their English language skills while gaining insight into significant global historical events, cultures and individuals. They will engage with a variety of historical resources including academic articles, authentic artifacts, news, documents, and other multimedia. Students will acquire history-related vocabulary and concepts to engage in group discussions to question and evaluate the events. (和訳) この授業では、世界史と世界規模での人類史の相互関係を探求します。世界史の重要な出来事、文化、個人についての見識を深めながら、英語力を高めます。学術論文、本物の芸術品、ニュース、文書、その他のマルチメディアを含む様々な歴史的資料に取り組みます。歴史に関連する語彙や概念を習得し、グループ・ディスカッションを行うことで、出来事に対する疑問や評価を深めていきます。	
	CLIL Seminars: History		This course is designed to learn academic content through English, specifically within the domains of history and film. The goal is for students to be able to communicate more deeply about history by discussing different historical periods and how people and events of those times were portrayed on film. There will be readings and discussions to accompany each theme, and in addition to some homework, there will be two presentations which require some out-of-class work. The first presentation will involve reading a chapter from a book about the history of Japanese cinema and presenting it to the class. The final presentation will involve choosing a theme we have covered and applying it to recent history in 21st Century films (either domestic or international). (和訳) この授業は、英語を通してアカデミックな内容を学ぶことを目的としており、特に歴史と映画の領域において学習する。歴史上のさまざまな時代や、その時代の人々や出来事が映画でどのように描かれたかを議論することで、歴史についてより深くコミュニケーションできるようになることが目標です。各テーマに沿ったリーディングとディスカッションがあり、宿題に加え、授業外の作業を必要とするプレゼンテーションが2回ある。最初のプレゼンテーションでは、日本映画の歴史に関する本の一章を読み、クラスで発表する。最後のプレゼンテーションでは、これまでに取り上げたテーマから1つを選び、21世紀の映画（国内外を問わず）における最近の歴史に当てはめて発表する。	
	CLIL Seminars: Art		Course Goals 1. Historical Understanding: Provide a comprehensive overview of art's evolution from the Paleolithic era to the present. 2. Analytical Skills: Develop students' ability to describe, interpret, and critically analyse artworks. 3. Creative Expression: Foster creativity by guiding students in producing their own art, exploring diverse techniques, and gaining hands-on experience. Language Goals 1. Vocabulary Acquisition: Learn art-related terms for effective communication about various artistic movements, styles, and techniques. 2. Conceptual Articulation: Develop English proficiency in expressing interpretations, critiques, and the rationale behind artistic creations. 3. Evaluation and Discussion Skills: Develop language skills for evaluating and discussing art within the artistic community. The course will be presented in English so that the students can learn language skills necessary for discussing and interpreting art, as well as, explaining the techniques and rationale behind their own artistic creations. (和訳) 授業目標 1. 歴史的理解：旧石器時代から現代までの芸術の変遷を包括的に概観する。 2. 分析能力：美術作品を描写、解釈、批判的に分析する能力を養う。 3. 創造的表現：学生が自ら作品を制作し、多様な技法を探索し、実践的な経験を積むよう指導することで、創造性を育む。 言語目標 1. 語彙の習得：様々な芸術運動、スタイル、テクニックについて効果的なコミュニケーションを図るため、芸術関連用語を学ぶ。 2. 概念の明確化：芸術作品の解釈、批評、根拠を表現する英語力を養う。 3. 評価と討論のスキル：芸術コミュニティの中で芸術を評価し、議論するための言語能力を養う。 この授業は英語で行われるため、受講生は芸術について議論したり解釈したりするのに必要な言語能力を身につけることができる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: Art		This course is designed to provide participants with a basic chronological introduction to the history of global art. The movements, issues, styles, techniques, and topics of each defining era will be discussed through analysis of example artworks and artists from that time. We will be examining some of the most important artists and art of each era through presentation, close-looking, and discussion-based inquiry to understand the aesthetic and societal influences of each time period. The material will be presented in English and participants will acquire essential language skills to comprehend lectures, videos, and readings. Students will acquire art-related vocabulary and concepts to engage in group discussions to question and evaluate the relevance and importance of historical and modern art in society. (和訳) この授業は、世界美術史の基礎的な年代入門を目的とする。各時代の動き、問題、スタイル、技法、トピックについて、その時代の作品やアーティストの例を通して分析します。各時代の最も重要な芸術家や芸術作品について、プレゼンテーション、実見、ディスカッションを通して考察し、各時代の美学的、社会的影響を理解する。教材は英語で提示され、参加者は講義、ビデオ、リーディングを理解するために必要な語学力を身につけます。受講生は、美術に関する語彙や概念を習得し、グループ・ディスカッションに参加することで、社会における歴史的・近代的美術の関連性や重要性を問い、評価する。	
	CLIL Seminars: Art		The content goals of this class are: - To enable students to follow lectures, discussions, and presentations in art - To understand and respond to detailed descriptions of subjects and issues related to art - To be able to synthesize information from contemporary art-based sources and present the findings in a clear and concise manner The language goals of this class are: - To be able to appropriately use a range of technical vocabulary, expressions, and concepts common to contemporary art - To be able respond and ask follow-up questions probing for more detail during art-related discussions - To be able to express evaluative comments and opinions about art (和訳) このクラスの目標は 美術の講義、ディスカッション、プレゼンテーションについていけるようにする。 美術に関する主題や問題についての詳細な説明を理解し、対応できる。 現代美術に関する情報を総合し、簡潔明瞭に発表することができる。 この授業の言語目標は 現代美術に共通する専門的な語彙、表現、概念を適切に使いこなすことができる。 アートに関連したディスカッションにおいて、より詳細な情報を得るための応答やフォローアップの質問ができる。 美術についての評価や意見を述べることができる。	
	CLIL Seminars: Movies		The main in-class activities will be discussions about short movie clips in relation to the themes shown in the weekly schedule. The main out of class activity will be to watch at least 8 English movies and keep a diary. The diary will include the application of the themes discussed in class to the films watched outside of class. Each week, the diaries will be shared in groups. Other assignments are indicated in the weekly schedule. (和訳) 主な授業内活動は、週間スケジュールに示されたテーマに関連した短い映画クリップについてのディスカッションである。授業外の主な活動は、少なくとも8本の英語映画を鑑賞し、日記をつけることである。日記には、授業中に議論されたテーマを授業外で鑑賞した映画に当てはめることが含まれる。毎週、日記はグループで共有する。その他の課題は週間スケジュールに記載されている。	
	CLIL Seminars: Movies		This course is designed to help students better understand the theory and practical processes involved in filmmaking while improving their language skills. Students will learn about and discuss different aspects of films. They will listen to explanations in the style of Western lectures, watch clips related to filmmaking, and talk about them. The course will focus on communication and interaction, helping students learn the content and improve their language skills for discussion. Homework will include essays, reports or short presentations on the themes covered in class. There will also be practical group projects, including a final film project, where students will share ideas, listen to others, and work together. Students will use all their reading, listening, speaking, and writing skills to make the most of their learning and improve their language ability. (和訳) この授業は、語学力を向上させながら、映画制作に関わる理論と実践的なプロセスをより深く理解することを目的としています。受講生は映画の様々な側面について学び、ディスカッションする。西洋の講義のスタイルで説明を聞き、映画制作に関連するクリップを鑑賞し、それについて話し合います。コミュニケーションとインタラクションに重点を置き、内容を学び、ディスカッションのための語学力を向上させます。宿題は、授業で扱ったテーマに関するエッセイ、レポート、ショート・プレゼンテーションなど。また、最終的な映画プロジェクトを含む、実践的なグループ・プロジェクトも行われます。学生は、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングのすべてのスキルを駆使して、学習を最大限に活用し、語学力を向上させます。	
	CLIL Seminars: SDGs		The course will provide an overview of the United Nations Sustainable Development Goals (SDGs), how they are linked, and their current status. Students will learn about issues related to the SDGs in countries around the world and will compare and contrast them with their own experiences in Japan and overseas through discussions. Students will use critical thinking skills to propose potential solutions to SDG-related issues and to make persuasive presentations. (和訳) 国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」について、その概要や関連性、現状などを学びます。世界各国のSDGsに関連する課題を学び、ディスカッションを通して、国内外での自らの経験と比較検討します。クリティカルシンキングスキルを用いて、SDGsに関連する課題の解決策を提案し、説得力のあるプレゼンテーションを行います。	
	CLIL Seminars: SDGs		In this course, students will study the United Nations' Sustainable Development Goals (SDGs) and develop international mindset. SDGs and the reasons for their creation will be introduced as well as essential vocabulary related to sustainability. Students will have opportunities to research and analyze specific Goals that interest them and critically reflect on the methods, initiatives and policies that may lead to solving the issues. Students will be encouraged to actively engage in class discussions, self-initiated research and collaborative projects to form their own opinions about specific issues related to SDGs and express their reasoning/arguments in spoken and written forms. (和訳) この授業では、国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」を学び、国際感覚を養います。SDGsとその創設理由、持続可能性に関連する重要な語彙を紹介する。学生は、関心のある特定の目標について調査・分析し、課題解決につながる可能性のある方法、取り組み、政策について批判的に考察する機会を持つ。SDGsに関連する具体的な問題について自分なりの意見を形成し、その理由や主張を話し言葉や文章で表現するために、クラスでのディスカッションや自主研究、共同プロジェクトに積極的に参加することを奨励する。	
	CLIL Seminars: SDGs		In this course, students will study the United Nations' Sustainable Development goals (SDGs). The philosophy behind the SDG and why they were created will be introduced as well as essential vocabulary and terms related to sustainable development. Students will have opportunities to evaluate how their lifestyle choices may have on achieving the SDGs as well as research and analyze methods, initiative, and policies that may lead to solving issues that will lead into achieving the SDGs within Japan and globally. (和訳) この授業では、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) について学びます。SDGsの背景にある哲学や、なぜSDGsが作られたのか、また持続可能な開発に関連する重要な語彙や用語についても紹介します。また、SDGsの達成につながる課題解決につながる方法、取り組み、政策について調査・分析します。	
	CLIL Seminars: Ecology		This course aims to give students a basic awareness of key topics in ecology: "the study of living organisms [e.g., plants, animals, fungi] and their interactions with one another and their environments" (Ecology for All!). Course topics include Introduction to Ecology, The History of Life, Evolution, Species Interactions, Food Webs, Biodiversity, Human Impact, and Conservation. The language component of the course will give students the tools they need to understand and discuss authentic materials (e.g., texts, websites, videos). For example, students will work collaboratively using shared Google Docs to take notes, ask questions, uncover meaning, and discuss their current understanding of ecology. Students will have an opportunity to explore one topic of the course more deeply through the final project. The format of the final project will be negotiated with students based on their individual interests and needs (e.g., essay, presentation, video, classroom activity, field work, etc.). (和訳) この授業は、生態学の主要なトピックについて基本的な知識を身につけることを目的としている：このコースでは、「生物とその相互作用および環境に関する研究」(Ecology for All!) コースのトピックには、生態学入門、生命の歴史、進化、種の相互作用、食物網、生物多様性、人間による影響、保全などが含まれます。コースの言語要素は、学生が本物の教材（読み物、ウェブサイト、ビデオなど）を理解し、討論するのに必要なツールを提供する。例えば、学生は共有のGoogle Docsを使い、メモを取り、質問し、意味を明らかにし、生態学についての現在の理解を記録する。学生は最終プロジェクトを通して、コースの1つのトピックをより深く探求する機会を持つ。最終プロジェクトの形式は、各自の興味やニーズ（例：エッセイ、プレゼンテーション、ビデオ、教室での活動、フィールドワークなど）に基づいて学生と相談する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: Ecology		Cycle 1: Ecosystem interactions and evolution. How do organisms interact within and between species? How do these interactions function in ecosystems? How do the interactions affect species over time? Cycle 2: Global systems and human influence. What are the global systems that have allowed life to proliferate on our planet? How have humans affected these systems? What can we expect in the future and how can we protect life on Earth? (和訳) サイクル1: 生態系の相互作用と進化 生物は種内、種間どのように相互作用しているのか? これらの相互作用は生態系の中でどのように機能しているのか? 相互作用は、時間とともに種にどのような影響を与えるのか? サイクル2: 地球システムと人間の影響。 私たちの惑星に生命を繁栄させてきた地球規模のシステムとは何か? 人類はこれらのシステムにどのような影響を与えてきたのか? 私たちは将来何を期待し、どのようにして地球上の生命を守ることができるのだろうか?	
	CLIL Seminars: Ecology		This course aims to create an awareness of and concern about ecology and its associated environmental problems, with the goal for students to discuss these issues and present possible solutions in English. Through collaborative learning and problem solving, students will learn about the extent of these current global ecological challenges, their impact on the environment and human life, and their own personal responsibility. Students will also acquire critical thinking skills and appropriate English expressions to effectively communicate these ecological issues through discussion and presentations. (和訳) この授業は、エコロジーとそれに関連する環境問題に対する意識と関心を高めることを目的とし、学生がこれらの問題について英語で議論し、可能な解決策を提示することを目標とする。共同学習や問題解決を通して、学生たちは現在地球規模で起こっているエコロジー問題の大きさ、環境と人間生活への影響、そして自分自身の責任について学びます。また、ディスカッションやプレゼンテーションを通して、これらのエコロジー問題を効果的に伝えるための批判的思考スキルや適切な英語表現を身につけます。	
	CLIL Seminars: Intercultural Communication		Through three projects and a final assignment, students will be able to inspect and question communication practices, discover more about their own and other cultures, and develop their own strategies to be an effective communicator within and across cultures. (和訳) 3つのプロジェクトと最終課題を通して、受講生はコミュニケーションの実践を点検し、疑問を投げかけ、自国と他国の文化についてより深く知り、文化の内外で効果的なコミュニケーションとなるための独自の戦略を開発することができる。	
	CLIL Seminars: Intercultural Communication		This course is designed for students to understand the interconnections between language and language users from the perspective of intercultural communication through a combination of readings, lectures, discussions, analysis, and presentations. Students will learn the major theories and concepts related to various intercultural communication issues and will examine the characteristics of intercultural communication in today's increasingly diverse and interconnected world. Additionally, students will develop their academic language skills necessary to comprehend the key points in academic texts and lectures. They will also learn to synthesize information, express their thoughts, and share their experiences in a clear, organized, and comprehensible manner through summaries and discussions. Finally, students will work on a research project that includes a creative, exploratory, and interactive presentation on a topic discussed in class. (和訳) この授業は、読書、講義、ディスカッション、分析、プレゼンテーションを組み合わせることによって、異文化間コミュニケーションの観点から言語と言語使用者の相互関係を理解することを目的としています。学生は、異文化間コミュニケーションの諸問題に関連する主要な理論や概念を学び、ますます多様化し相互接続が進む今日の世界における異文化間コミュニケーションの特徴を考察する。さらに、学術的な文章や講義の要点を理解するために必要なアカデミックな言語能力を養います。また、要約やディスカッションを通して、情報を統合し、自分の考えを表現し、自分の経験を分かりやすく整理して共有することを学びます。最後に、授業で取り上げたトピックについて、創造的、探求的、対話的なプレゼンテーションを含む研究プロジェクトに取り組みます。	
	CLIL Seminars: Intercultural Communication		This seminar explores essential topics in intercultural communication, utilising a CLIL (Content and Language Integrated Learning) approach to blend content knowledge with language skills development. The course emphasizes fostering higher-order thinking skills, such as analysis and evaluation, while promoting a deeper understanding of cultural awareness. Students will critically examine core intercultural concepts, explore diverse perspectives, and reflect on their own cultural experiences. Through interactive activities, discussions, and practical tasks, participants will enhance their ability to navigate intercultural contexts effectively, building both theoretical knowledge and practical communication skills essential for real-world applications. (和訳) この授業では、CLIL (Content and Language Integrated Learning) アプローチを活用し、異文化間コミュニケーションに不可欠なトピックを探索し、内容知識と言語スキルの向上を融合させます。このコースでは、分析・評価といった高次の思考スキルを育成することに重点を置くとともに、文化的認識に対するより深い理解を促します。学生は、異文化間の核となる概念を批判的に検討し、多様な視点を探索し、自分自身の文化的経験を振り返ります。双方のクリティシティ、ディスカッション、実践的な課題を通して、受講生は異文化の文脈を効果的にナビゲートする能力を高め、実社会での応用に不可欠な理論的知識と実践的なコミュニケーション・スキルの両方を身につけます。	
	CLIL Seminars: Tourism		This course will introduce students to the main issues in tourism and improve their academic skills. Students will learn about topics such as transport, hospitality, destination management, and tourism's effects, before considering how such can be sustainably developed. By combining learner-led research projects with collaborative presentations, debate, creative thinking, and written responses, students will improve their academic English proficiency and hone their higher order critical thinking skills. (和訳) この授業では、観光における主要な問題を紹介し、学術的なスキルを向上させる。学生は、交通、ホスピタリティ、デスティネーション・マネジメント、観光の効果などのトピックについて学んだ後、観光を持続的に発展させる方法について考えます。学習者主導のリサーチ・プロジェクトと、共同プレゼンテーション、ディベート、創造的思考、回答書作成などを組み合わせることで、アカデミックな英語力を向上させ、高次の批判的思考力を磨きます。	
	CLIL Seminars: Tourism		This course will introduce students to the main concepts and issues in tourism and improve their academic skills. Students will learn about topics such as tourist motivation, tourist types, destination types, promoting and creating tourism products, and the development of sustainable tourism. By combining learner-led research projects with collaborative presentations, debate, creative thinking, and written responses, students will improve their academic English proficiency and hone their higher order critical thinking skills. (和訳) この授業では、観光における主な概念や問題を紹介し、学力の向上を図る。観光客のモチベーション、観光客のタイプ、デスティネーションのタイプ、観光商品のプロモーションと創造、持続可能な観光などのトピックについて学びます。学習者主導のリサーチ・プロジェクトと、共同プレゼンテーション、ディベート、クリエイティブ・シンキング、ライティング・レスポンスを組み合わせることで、アカデミックな英語力を向上させ、高次のクリティカル・シンキングのスキルを磨きます。	
	CLIL Seminars: Health and Wellness		In this course, students will obtain basic academic knowledge and English language competence in the field of health and wellness. The first half of the course focuses on factors affecting wellness, and the second half of the course concerns the improvement of wellness. Students are required to apply their learned knowledge to their research and projects. Active participation in group discussions is expected, and a final project including a presentation is required. (和訳) この授業では、健康とウェルネスの分野における基礎的な学術知識と英語能力を身につける。コースの前半はウェルネスに影響を与える要因に焦点を当て、後半はウェルネスの改善について学ぶ。学生は学んだ知識を研究やプロジェクトに応用することが求められる。グループ・ディスカッションへの積極的な参加が求められ、プレゼンテーションを含む最終プロジェクトが義務付けられている。	
	CLIL Seminars: Health and Wellness		In this course students will explore fundamental concepts related to physical and mental health and wellness. The course begins with ways that health and wellness can be improved by the individual, followed by focussing on various other aspects of health-related topics. The topics to be discussed include nutrition, exercise, stress management, mental health, work-life balance, mindfulness and public health. There will be plenty of English discussion related to the topics, along with a focus on researching and developing knowledge in the areas. You will also have a chance to improve not only your English skills, but also academic skills, such as problem-solving, debating, and critical thinking. Authentic, relevant content will be sequenced each week to improve students' academic listening and speaking skills. Students will also build their vocabulary and further enhance the discussion skills learned in their first year while learning about a variety of topical issues, both domestic and global. Classes each week will include listening, critical thinking, reading, writing, and speaking tasks. (和訳) この授業では、心身の健康とウェルネスに関する基本的な概念を探索する。このコースでは、まず健康とウェルネスを個人で改善する方法を学び、その後、健康に関連する様々な側面に焦点を当てる。トピックとしては、栄養、運動、ストレス管理、メンタルヘルス、ワークライフバランス、マインドフルネス、公衆衛生などが挙げられる。トピックに関連した英語でのディスカッションも多く、その分野のリサーチや知識開発にも焦点を当てます。また、英語力だけでなく、問題解決、ディベート、批判的思考などのアカデミック・スキルを向上させるチャンスもあります。学生のアカデミックなリスニングとスピーキングのスキルを向上させるため、毎週、本格的に関連性のあるコンテンツが配列されます。また、ボキャブラリーを増やし、1年次に学んだディスカッションのスキルをさらに高めながら、国内外のさまざまな時事問題について学びます。毎週の授業では、リスニング、クリティカル・シンキング、リーディング、ライティング、スピーキングなどの課題が出される。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: Health and Wellness		Explore the intricacies of health and wellness through this content-integrated language seminar. Develop language proficiency while delving into topics such as health issues, building wellness skills, mental and emotional health, and personality and subjective well-being. Engage in language exercises tailored to health and wellness communication, allowing you to express thoughts on personal control and well-being, the process of emotion, cause and correlates of happiness and lifestyle choices. With a focus on real-world scenarios, this course enhances language skills while promoting a healthier, more informed lifestyle. Immerse yourself in a dynamic blend of language acquisition and wellness education, fostering both linguistic expertise and a holistic approach to personal health health and wellness plan. (和訳) この内容統合型の語学授業を通して、健康とウェルネスの複雑さを探求する。健康問題、ウェルネス・スキルの構築、精神的・感情的健康、パーソナリティと主観的幸福などのトピックを掘り下げながら、語学力を伸ばします。健康やウェルネスに関するコミュニケーションに合わせた言語演習を行うことで、個人のコントロールやウェルビーイング、感情のプロセス、幸せの原因と相関関係、ライフスタイルの選択などに関する考えを表現できるようになります。実社会のシナリオに焦点を当てたこの授業は、言語スキルを高めると同時に、より健康的で情報に基づいたライフスタイルを促進します。言語習得とウェルネス教育がダイナミックに融合したこのコースで、言語的な専門知識と、個人の健康とウェルネス計画への総合的なアプローチの両方を身につけましょう。	
	CLIL Seminars: Health and Wellness		Health and Wellness is an interdisciplinary subject, which aims to give students a holistic overview of what makes for good health and well-being. In this course, we will investigate the various dimensions of health and wellness in a personal and societal sense, before focusing on areas of personal interest. There will be plenty of English discussion related to the topics and group work, along with a focus on researching and developing knowledge. You will also have a chance to improve not only your English skills, but also academic skills, such as problem-solving, debating, and critical thinking. (和訳) ヘルスとウェルネスは学際的な科目であり、何がよい健康や幸福をもたらすかについて全体的な概観を学生に与えることを目的としている。このコースでは、個人的および社会的な意味での健康とウェルネスの様々な側面を調査した後、個人的に関心のある分野に焦点を当てます。トピックに関連した英語でのディスカッションやグループワークも多く、リサーチや知識開発にも重点を置きます。また、英語力だけでなく、問題解決、ディベート、批判的思考などのアカデミック・スキルを向上させるチャンスもあります。	
	CLIL Seminars: Gender Issues		In this course, lectures will be given on how to: 1. Express opinions about gender issues that are prevalent in modern society. 2. Comprehend academic readings through note-taking, acquiring terminology, and scanning and skimming text. 3. Give presentations with confidence, design effective and attractive PowerPoints, and use appropriate presentation language. 4. Write a short essay (approximately 700 words) about a relevant gender issue using proper formatting, transition words, and accurately cite sources. 5. Ask follow-up questions with appropriate phrases for agreement and disagreement during discussion to express views and share knowledge about the topic. (和訳) この授業では、次のような講義が行われる： 1. 現代社会に蔓延するジェンダー問題について意見を述べる。 2. ノートの取り方、専門用語の習得、スキミングとスキミングを通して、学術的な読書を理解する。 3. 自信を持ってプレゼンテーションを行い、効果的で魅力的なパワーポイントをデザインし、適切なプレゼンテーション言語を使用する。 4. 適切な書式、移行語を使用し、出典を正確に引用する。 5. トピックについて意見を述べたり、知識を共有したりするために、ディスカッション中に、同意や不同意を表す適切なフレーズを使って、フォローアップの質問をする。	
	CLIL Seminars: Gender Issues		This course is an opportunity for students to increase their interest in gender issues while improving their English at the same time. Through a combination of lectures, readings, discussions, writings, and presentations, students will explore various topics regarding gender. Students will complete weekly homework assignments and use their critical thinking skills to discuss questions about the content and themes. Students will also complete mid-term and final assignments about topics from class discussions. (和訳) この授業は、英語を上達させると同時に、ジェンダー問題への関心を高める機会である。講義、リーディング、ディスカッション、ライティング、プレゼンテーションなどを組み合わせながら、ジェンダーに関する様々なトピックを探究していきます。学生は毎週の宿題をこなし、クリティカル・シンキング（批判的思考）のスキルを駆使して、内容やテーマに関する疑問について議論する。また、クラスでのディスカッションから得たトピックについて、中間・期末課題を課す。	
	CLIL Seminars: Japanology		Throughout this CLIL course, students will learn how to: 1. understand and appropriately use a range of technical vocabulary and idiomatic expressions common to the study of Japanology or Japanese Studies (L) 2. ask follow-up questions probing for more detail during a discussion (L) 3. exploit information and arguments from a text or video to discuss a topic, glossing with evaluative comments and adding opinion (L) 4. follow lectures, discussions, and presentations and respond to related questions (C) 5. present clear, detailed descriptions of complex subjects related to Japanese culture and society in English (C) 6. synthesize information from two or more sources and present the findings in a clear and understandable manner (C) *L = Language goal, C= Content goal (和訳) このCLIL授業を通して、学生は次のことを学ぶ： 1. 日本学や日本研究に共通する専門用語や慣用表現を理解し、適切に使用することができる (L) 2. ディスカッションの中で、より詳細な質問をすることができる (L) 3. トピックについて議論するために、テキストやビデオからの情報や議論を利用し、評価的なコメントや意見を加えることができる (L) 4. 講義、ディスカッション、プレゼンテーションについていけ、関連する質問に答えることができる (C) 5. 日本の文化や社会に関する複雑なテーマについて、明確で詳細な説明を英語で述べることができる (C) 6. 2つ以上の情報源から得た情報を統合し、その結果を明確で理解しやすい方法で発表することができる (C) *L＝言語目標、C＝内容目標	
	CLIL Seminars: Japanology		This course is designed for students to increase their interest in Japanese culture through a combination of readings, lectures, discussions, analysis, and presentations. Students will learn the major theories and concepts related to traditional and contemporary Japanese culture and society and will examine the characteristics of them. Additionally, students will develop their academic language skills necessary to comprehend the key points in academic texts and lectures. They will also learn to synthesize information, express their thoughts, and share their experiences in a clear, organized, and comprehensible manner through summaries and discussions. Finally, students will work on a research project that includes a creative, exploratory, and interactive presentation on a topic discussed in class. (和訳) この授業は、読書、講義、ディスカッション、分析、プレゼンテーションを組み合わせることにより、日本文化への関心を高めることを目的としている。日本の伝統文化や現代社会に関する主要な理論や概念を学び、その特徴を考察します。さらに、学術的な文章や講義の要点を理解するために必要なアカデミックな言語能力を養います。また、要約やディスカッションを通して、情報を統合し、自分の考えを表現し、経験を分かりやすく整理して共有する力を身につけます。最後に、授業で取り上げたトピックについて、創造的、探求的、対話的なプレゼンテーションを含む研究プロジェクトに取り組みます。	
	CLIL Seminars: Psychology		This course is designed for students to learn basic academic content related to psychology through English, whilst at the same time acquiring essential language to understand and discuss the field. Students will develop academic skills to grasp the major points of texts on a variety of psychological issues, and use the concepts to engage in group discussions and activities to further consolidate their understanding. After an initial survey of the field, students will select an aspect of psychology of their interest and work on group projects involving creative presentation and the development of educational activities in order to deepen both their own and their classmates' understanding. (和訳) 心理学に関連する基礎的な学術内容を英語を通して学ぶと同時に、心理学を理解し、議論するために必要な言語を習得することを目的とした授業です。様々な心理学の問題に関するテキストの要点を把握するためのアカデミック・スキルを身につけ、その概念を用いてグループ・ディスカッションやアクティビティに参加し、さらに理解を深めます。心理学の基礎知識を学んだ後、各自が興味のある心理学の分野を選択し、創造的なプレゼンテーションや教育活動の開発を含むグループプロジェクトに取り組み、自分自身とクラスメートの理解を深めます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	CLIL Seminars: Psychology		This course is designed to learn academic content through English, specifically within the domain of psychology. Basically, it will be an advanced discussion and presentation class, that uses the language skills that students learned throughout freshman year as the main framework language for guiding the class through this content area. In particular, we will focus on sports psychology, to talk about various coaching philosophies and methods, as well as controversial topics globally and locally. We'll also watch scenes from some popular sports films to spark discussion, as well as react to and make commentary about interviews with professional athletes, sports psychologists, and motivational speakers. For the final presentation, depending students' interests/needs, we will either read an academic article related to cultural psychology in sports and deconstruct it for the class to make an academic presentation or make "debate-like" speed presentation on a controversial topics. (和訳) この授業は、英語を通して、特に心理学の領域におけるアカデミックな内容を学ぶことを目的としている。基本的には、ディスカッションとプレゼンテーションの上位クラスで、1年次を通して学んだ言語スキルを、この分野の授業を進めるための主要な枠組み言語として使用します。特に、スポーツ心理学に焦点を当て、様々なコーチングの哲学や方法、世界的・地域的に論争的になっているトピックについて話します。また、ディスカッションのきっかけとなるよう、人気のあるスポーツ映画のシーンを観たり、プロスポーツ選手やスポーツ心理学者、モチベーションを高める講演者のインタビューに反応し、解説をしたりします。最終プレゼンテーションでは、学生の興味やニーズに応じて、スポーツにおける文化心理学に関連する学術論文を読み、それをクラスで分解して学術的なプレゼンテーションを行うか、論争的になっているトピックについて「ディベートのような」スピードプレゼンテーションを行います。	
	CLIL Seminars: Psychology		Key vocabulary and topics will be introduced and explored through short readings and discussions. A variety of activities will be used to allow students to better refine their understanding of the topics and the concepts they touch on, including: vocabulary review, true/false activities, short answers, short essays, and discussions in pairs and groups that culminate in a class discussion. Engaging in discussions that require critical thinking of the topics we cover is a key component of this class. (和訳) 主要な語彙やトピックを紹介し、短い読書やディスカッションを通して探求する。語彙の復習、真偽判定問題、記述問題、小論文、ペアやグループでのディスカッションなど、様々なアクティビティを通して、トピックやトピックが扱う概念の理解を深めます。取り上げたトピックについて批判的思考を必要とするディスカッションに参加することは、このクラスの重要な要素である。	
	CLIL Seminars: Literature		This course is designed for students to study literature in English while developing their language skills. Students will be encouraged to develop an informed and perceptive understanding of literature in today's society using multiple perspectives and critical thinking. Course content will support the use of language strategies to read and respond to literary texts using concepts from critical theory and the broad field of English studies. Individually and in groups, students will discuss and react to various literary texts. Students will select texts related to their own interests and will work on a creative and interactive presentation at the end of the course. Note: Weekly contents may change according to student interest, student level, or student-guided topics. (和訳) この授業は、語学力を伸ばしながら英語で文学を学ぶことを目的としています。多角的な視点と批評的思考を駆使し、現代社会における文学について十分な情報と鋭い理解を深める。コースの内容は、批評理論や英語学の広範な分野からの概念を用いて、文学テキストを読み、反応するための言語ストラテジーの使用をサポートします。個人またはグループで、様々な文学テキストについて議論し、反応する。受講生は自分の興味に関連したテキストを選択し、コースの最後には創造的でインタラクティブなプレゼンテーションに取り組みます。 注：毎週の授業内容は、学生の興味、レベル、または学生の指導によるトピックによって変更されることがあります。	
	CLIL Seminars: Literature		Possible topics for discussion: ● Children and young adult literature ● Trends in literature and reading in society ● Critical reading (reader response, feminist reading, post-colonial, post-structuralism) ● Global literature ● Gender issues and literature ● Social issues through literature ● Ethical reading and ethical questions in literature ● SDGs in literature ● Decolonising the curriculum ● Paper books vs. digital reading ● School-based literature learning vs. 'in the wild' reading ● Effects of banning books ● Creative remixing and adaptations of literature Possible types of literature used in the course: - Novels - Poetry - Drama/Play - Short Story - Essay - Biography/Autobiography (和訳) ディスカッションのテーマ 児童文学とヤングアダルト文学 社会における文学と読書の傾向 批評的読書（読者の反応、フェミニスト的読書、ポストコロニアル、ポスト構造主義） グローバル文学 ジェンダー問題と文学 文学を通じた社会問題 文学における倫理的読解と倫理的問題 文学におけるSDGs カリキュラムの脱植民地化 紙の本とデジタル読書 学校での文学学習と「野生の」読書 禁書の効果 文学の創造的なリミックスと翻案 授業で利用される可能性のある文学の種類 - 小説 - 詩 - 戯曲 - 短編小説 - エッセイ - 伝記/自伝	
	CLIL Seminars: Language Learning		These are the concepts and theories students will learn about how people learn languages: Behaviourism, Cognitivism, Constructivism, Sociocultural theory, Comprehensible input, Communicative language teaching, Universal Grammar, Content-based instruction, CLIL, Technology Enhanced Language Learning, Task-based learning, and Translanguaging. They will show the development of how people teach and learn languages. The course will have quizzes, presentations and group discussions. (和訳) これらは、学生が言語を学ぶ方法について学ぶ概念と理論である：行動主義、認知主義、構成主義、社会文化理論、理解可能なインプット、コミュニケーション言語教育、普遍文法、内容ベースの指導、CLIL、テクノロジーによる言語学習、タスクベースの学習、トランスランゲージングなどです。このコースでは、小テスト、プレゼンテーション、グループディスカッションが行われます。	
	CLIL Seminars: Language Learning		The aim of this course is to develop students' academic language proficiency through understanding content areas of language learning and second language acquisition (SLA). Students will learn and discuss how we develop a second language across three units. In Unit 1, students will learn core ideas from SLA, including the best age to learn a language and the differences between first languages and second languages. In unit 2, students will learn about language learning foci, including the importance of grammar, vocabulary, and speaking. Finally, in unit 3, the students will learn about factors influencing SLA, including motivation, personality, and emotion. Throughout the course, students are expected to apply knowledge and insights of SLA to their own (English or other) language learning. There will be many group discussions and individual/group presentations. (和訳) この授業の目的は、言語学習の内容領域と第二言語習得 (SLA) を理解することを通して、学生のアカデミックな言語能力を伸ばすことです。学生は、3つのユニットを通して、どのように第二言語を習得していくかを学び、ディスカッションします。ユニット1では、言語を学ぶのに最適な年齢や、第一言語と第二言語の違いなど、SLAの中核となる考え方を学びます。ユニット2では、文法、語彙、スピーキングの重要性など、言語学習の焦点について学びます。最後に、ユニット3では、モチベーション、性格、感情など、SLAに影響を与える要因について学びます。コースを通して、受講生はSLAの知識と洞察を自分自身の（英語または他の）言語学習に応用することが期待される。グループ・ディスカッションや個人/グループ・プレゼンテーションも多く行われる。	

授 業 科 目 の 概 要				
（全学共通科目 言語系科目）				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
グローバル共通科目 言語系科目 領域自由科目 （英語）	Communication for Global Business		Throughout this course, students will learn how to: 1) take part, express logical opinions, and understand the opinions of others in discussions regarding a range of business-related topics such as work-life balance, services and systems, customer service, finance and facilities 2) give and receive information related to business situations, whilst checking understanding when unsure 3) discuss problems and solutions, and develop a plan in a business meeting situation 4) express personal views regarding their qualifications, skills, and personal qualities, and respond to questions in situations such as a business interview 5) give a presentation related to a business topic in which the main points are expressed clearly 6) develop an appreciation of different varieties of English and strategies for communicating via English as a global language （和訳）この授業を通して、受講生は次のことを学びます： 1) ワークライフバランス、サービスやシステム、カスタマーサービス、財務、設備など、ビジネスに関連する様々なトピックに関するディスカッションに参加し、論理的な意見を述べ、他者の意見を理解する。 2) ビジネス状況に関連した情報を提供したり、受け取ったりする。 3) ビジネスミーティングの場面で、問題と解決策について話し合い、計画を立てる。 4) ビジネス面接などの状況において、自分の資格、技能、個人的資質に関する個人的見解を述べ、質問に答える 5) ビジネストピックに関するプレゼンテーションを行い、要点を明確に表現する。 6) さまざまな種類の英語を理解し、国際語としての英語を使ってコミュニケーションを図る。	
	Communication for Global Business		This course will prepare students for communicating in English in the business world by building on the language they have studied in the past. Students will learn how to understand and talk about various business situations, problems at work, and international differences in employment contexts. Students will also learn how to take part in business meetings, interviews, and presentations, and become more aware of the variety of Englishes spoken around the world. （和訳）この授業では、過去に学習した言語を基礎として、ビジネスの世界での英語でのコミュニケーションに備えます。ビジネスにおける様々な状況、仕事上の問題、雇用における国際的な違いなどを理解し、話す方法を学びます。また、ビジネス会議、面接、プレゼンテーションへの参加方法を学び、世界中で話されている様々な英語をより意識するようになります。	
	Communication for Global Business		Throughout this course, students will learn how to: 1) take part, express logical opinions, and understand the opinions of others in discussions regarding a range of business-related topics such as work-life balance, services and systems, customer service, finance and facilities 2) give and receive information related to business situations, and confirm comprehension or ask for clarification when needed 3) discuss problems and solutions, and develop a plan in a business meeting situation 4) express personal views regarding their qualifications, skills, and personal qualities, and respond to questions in situations such as a business interview 5) give a presentation related to a business topic in which the main points are expressed clearly 6) develop an appreciation of different varieties of English and strategies for communicating via English as a global language （和訳）この授業を通して、受講生は以下のことを学びます： 1) ワークライフバランス、サービスやシステム、カスタマーサービス、財務、設備など、ビジネスに関する様々なトピックについて、ディスカッションに参加し、論理的な意見を述べ、相手の意見を理解する。 2) ビジネスに関連した情報の授受ができ、必要に応じて理解度を確認したり、説明を求めたりできる。 3) 商談の場において、問題と解決策について話し合い、計画を立てることができる。 4) ビジネス面接などの場面で、自分の資質、能力、技能について個人的な見解を述べ、質問に答えることができる。 5) ビジネストピックに関するプレゼンテーションを行い、要点を明確に表現する。 6) さまざまな種類の英語を理解し、国際語としての英語を使ってコミュニケーションを図る。	
	Collaborative Business Projects		This course simulates the experience of working on an internship at an international company in which English is used. In this course, students brainstorm new product ideas, pitch ideas within the company, perform market research, design an ad campaign, and participate in a job interview. The course starts with easier tasks, but quickly builds toward more challenging group projects. Students must work in small teams to complete these projects, while taking turns being the project manager for their team. Students are required to attend class actively and regularly and participate in English. Students should expect to do between 30-60 minutes of preparation work outside of class each week. （和訳）この授業では、英語を使用する国際的な企業でのインターンシップをシミュレートします。この授業では、学生は新製品のアイデアを出し合い、社内での売り込み、市場調査、広告キャンペーンをデザインし、就職面接に参加します。コースは簡単な課題から始まりますが、より難易度の高いグループ・プロジェクトへと急速に発展していきます。学生は少人数のチームに分かれ、交代でチームのプロジェクト・マネージャーを務めながら、これらのプロジェクトを完了させなければならない。学生は積極的かつ定期的に授業に出席し、英語で参加することが求められる。毎週30～60分程度の授業外での準備学習が必要です。	
	Collaborative Business Projects		This course simulates the experience of working on an internship at an international company in which English is used. Students will work actively in all-English discussion-style groups to brainstorm new product ideas, pitch ideas within the company, perform market research, design an ad campaign, and participate in a job interview. The course will also introduce some Canadian business contexts and opportunities to enhance students' understanding of international markets. The course starts with easier tasks but quickly builds toward more challenging group projects. Students must work in small teams to complete these projects, taking turns being the project manager for their team. Active and regular participation in English is required, and students should expect to do between 30-60 minutes of preparation work outside of class each week. （和訳）この授業では、英語を使用する国際企業でのインターンシップをシミュレートします。受講生は、ディスカッション形式のグループに分かれ、新製品のアイデア出し、社内での売り込み、市場調査、広告キャンペーンのデザイン、就職面接などに積極的に取り組みます。また、国際市場についての理解を深めるため、カナダのビジネス事情や機会についても紹介します。 授業は簡単な課題から始まりますが、より難易度の高いグループ・プロジェクトへと急速に発展していきます。受講生は少人数のチームに分かれ、交代でプロジェクト・マネージャーを務めながらプロジェクトを進めていきます。積極的かつ定期的に英語への参加が必須であり、学生は毎週授業外で30～60分の準備作業を行うことを想定しておく必要がある。	
	Collaborative Business Projects		We will do a lot of brainstorming exercises, share ideas, and will also learn what we need to know to have better communication at work. We will also do market research, and present what you've researched and learned. We will also practice some job interview techniques at the end of the course. （和訳）ブレインストーミングをたくさん行い、アイデアを出し合い、職場でより良いコミュニケーションをとるために必要なことも学びます。また、市場調査を行い、調べたことや学んだことを発表します。コースの最後には、就職面接のテクニックも練習します。	
	Collaborative Business Projects		The course starts with easier tasks, but quickly builds toward more challenging group projects. Students must work in small teams to complete these projects, while taking turns being the project manager for their team. Students are required to attend class actively and regularly while participating in English. Students should expect to do preparation work outside of class each week. In this course, students brainstorm new product ideas, pitch ideas within the company, perform market research, design an ad campaign, and participate in a job interview. （和訳）授業は簡単な課題から始まりますが、より難易度の高いグループ・プロジェクトへと急速に発展していきます。学生は少人数のチームに分かれ、交代でプロジェクト・マネージャーを務めながら、これらのプロジェクトを完成させなければならない。学生は英語に参加しながら、積極的かつ定期的に授業に出席することが求められる。また、毎週授業以外の時間に予習をすることが求められます。 この授業では、新製品のアイデア出し、社内での売り込み、市場調査、広告キャンペーンのデザイン、就職面接などを行います。	
	Collaborative Business Projects		In this course, students brainstorm new product ideas, pitch ideas within the company, perform market research, design an ad campaign, and participate in a job interview. The course starts with easier tasks, but quickly builds toward more challenging group projects. Students must work in small teams to complete these projects, while taking turns being the project manager for their team. （和訳）この授業では、新製品のアイデアを出し合い、社内でのアイデアを売り込み、市場調査を行い、広告キャンペーンをデザインし、就職面接に参加する。コースは簡単な課題から始まりますが、より難易度の高いグループ・プロジェクトへと急速に発展していきます。学生たちは少人数のチームに分かれ、交代でチームのプロジェクト・マネージャーを務めながら、これらのプロジェクトを完成させなければならない。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	Collaborative Business Projects		This course simulates the experience of working on an internship at an international company in which English is used. In this course, students brainstorm new ideas, pitch ideas within the company, perform market research, design an ad campaign, and participate in a job interview. The course starts with easier tasks, but quickly builds toward more challenging group projects. Students must work in small teams to complete these projects, while taking turns being the project manager for their team. Students are required to attend class actively and regularly and participate in English. (和訳) この授業では、英語を使用する国際的な企業でのインターンシップをシミュレートします。このコースでは、新しいアイデアのブレインストーミング、社内でのアイデアのプレゼンテーション、市場調査、広告キャンペーンのデザイン、就職面接などを行います。コースは簡単な課題から始まりますが、より難易度の高いグループ・プロジェクトへと急速に発展していきます。学生は少人数のチームに分かれ、交代でチームのプロジェクト・マネージャーを務めながら、これらのプロジェクトを完了させなければならない。学生は積極的かつ定期的に授業に出席し、英語に参加することが求められる。	
国際学 交流 通 制 度 目 短 言 語 系 科 目 修 ブ ロ グ ラ ム (英 語)	短期語学研修科目(英語)		研修期間、研修実施校の国・地域、受講コース、宿泊先を選択肢の中から自由に選択することができる。教室での授業の他に課外活動も用意されている。 【EF】 週26レッスン～32レッスン(1レッスン40分)の授業を受講する。ジェネラルコースから試験対策、ビジネスコースまで選択可能。さらに特別選択科目(SPIN)で、幅広い分野の中から興味のある科目を追加することができる。 【Kaplan】 週20レッスン～35レッスン(1レッスン45分)の授業に加え、Kaplan独自の学習メソッド「K+」に基づいたオンライン教材や、教師主導による他の学生との交流の時間が設けられている。ジェネラルコースからビジネスコースまで選択可能。	集中
	ビクトリア夏E S L 2		カナダ・ビクトリア大学にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他にオプションアクティビティ(別料金。バンクーバー旅行など)が予定されている。現地ではキャンパス内の寮に滞在する。	集中
	ハワイ夏E S L 1		アメリカ・ハワイ大学マノア校にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他に、フィールドトリップやフラダンスのワークショップ、現地学生との英会話練習の時間が予定されている。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
	ダブリン春E S L 3		アイルランド・ダブリンシティ大学にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他に、市内観光や旅行が予定されている。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
	ビクトリア春E S L 2		カナダ・ビクトリア大学にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他にオプションアクティビティ(別料金。バンクーバー旅行など)が予定されている。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
	ダブリン夏E S L 3		アイルランド・ダブリンシティ大学にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他に、市内観光や旅行が予定されている。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
	ハワイ春E S L 1		アメリカ・ハワイ大学マノア校にて実施される英語研修に参加する。教室での授業の他に、フィールドトリップやフラダンスのワークショップ、現地学生との英会話練習の時間が予定されている。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
	グリフィス春E S L 3		オーストラリア・グリフィス大学にて実施される英語研修に参加する。滞在中は現地の家庭にホームステイをする。	集中
留 自 全 学 由 学 準 科 共 備 目 通 制 度 目 短 言 語 系 科 目 修 ブ ロ グ ラ ム (独 語 語 系 科 目)	ドイツ語総合1		必修科目と並行してCEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ドイツ語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	ドイツ語総合2		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ドイツ語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	ドイツ語総合3		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、ドイツ語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	ドイツ語総合4		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、ドイツ語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	ドイツ語総合5		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、ドイツ語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	ドイツ語総合6		必修科目と並行してCEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。特に、スピーキングや音読、そしてリスニングの能力への向上のために、個々の発音やアクセントを学ぶ。	
	ドイツ語総合7		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。特に、スピーキングや音読、そしてリスニングの能力への向上のために、イントネーションやリズムを学ぶ。	
	ドイツ語海外言語文化研修(春学期)		1. 春学期中(事前研修)：全4回の事前研修(全回出席必須)で、準備を行う。 2. 夏季休暇中(研修予定期間：春に実施する説明会で確認すること)：レベル別に少人数クラスで学習。また、グループでのプロジェクト活動、ライプツィヒやベルリンの市中見学を通して、ドイツの文化と社会に直接触れ見聞を広げる。 3. その他 ・現地での滞在は学生寮を予定。(キッチン・シャワーはフロアで共同使用) ・参加費用は約70万円(往復航空運賃、現地プログラム、学生寮費を含む。ただし、レートや参加人数によって変更の可能性あり。詳細は事前研修で説明します。)	集中
ブ 自 全 学 由 学 準 科 共 備 目 通 制 度 目 短 言 語 系 科 目 修 ブ ロ グ ラ ム (独 語 語 系 科 目)	入門ドイツ語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにドイツ語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、ドイツ語の発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身に付け、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
	ドイツ語演習1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏の芸術」で、具体的な題材として「音楽・詩・文化」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	ドイツ語演習2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏の芸術」で、具体的な題材として「映画・演劇・パフォーマンスアート」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	ドイツ語演習3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏の消費・産業」で、具体的な題材として「フード・ファッション・観光」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	ドイツ語演習4		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏のニュース」で、具体的な題材として「時事問題・国際問題・環境問題」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	ドイツ語演習5		必修科目等で身に付けたCEFR B1レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏の歴史」で、具体的な題材として「ヨーロッパの中のドイツ語圏・戦後のドイツ」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。 この演習では、ドイツ語のテキストを議論しながら、ドイツ近現代史における「民主主義」とは何だったかを理解する。	
	ドイツ語演習6		必修科目等で身に付けたCEFR B1レベルのドイツ語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ドイツ語圏の現代社会」で、具体的な題材として「法律・政治・経済の仕組み」を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。 この演習は、ドイツ語の教材を扱うことによって、現在のドイツの政治のあり方を問う。主なテーマとしては、移民・気候変動・極右主義を扱います。それ以外のテーマは、参加者の興味により決めます。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
キ自全 ヤ由学 リ科共 ア通 ヘ目 域ド イ言 ツ語 系系 科目	ドイツ語トレーニング 1		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。	
	ドイツ語トレーニング 2		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。	
	ドイツ語トレーニング 3		CEFR C1レベルの教材等を使用し、高度で複雑な内容のテキストを理解し、しっかりとした構成をもった詳細なテキストを作成し、自身の意見を的確に表現できるようになることを目指す。	
	ドイツ語トレーニング 4		CEFR C1レベルの教材等を使用し、高度で複雑な内容のテキストを理解し、しっかりとした構成をもった詳細なテキストを作成し、自身の意見を的確に表現できるようになることを目指す。	
	キャリアドイツ語 1		CEFR B1レベルの教材等を使用し、ドイツ語のビジネス・コミュニケーションに必要となる知識を身に付け、さらに教室内での実践経験を通して説得したり交渉したりする能力を磨く。具体的には、履歴書の書き方や面接でのPRの仕方、マーケティングリサーチ、ビジネスメールの書き方などを学ぶ。	
	キャリアドイツ語 2		CEFR B2レベルの教材等を使用し、ドイツ語のビジネス・コミュニケーションに必要となる知識を身に付け、さらに教室内での実践経験を通して説得したり交渉したりする能力を磨く。具体的には、履歴書の書き方や面接でのPRの仕方、ビジネス資料作成やプレゼンの論理構築、交渉場面でのストラテジーなどを学ぶ。	
	キャリアドイツ語 3		CEFR B1レベルの能力がある学生が履修することを前提とし、ドイツ語⇄日本語に翻訳する基礎となる技術を身に付ける。旅行関係の情報記事、パンフレット、新聞記事、ニュースなどを題材に、場面や状況に応じたニュアンスの違い、言語間での意味のギャップ、そして文化や社会的背景の位相に起因する翻訳で生じる問題についても扱う。	
	キャリアドイツ語 4		CEFR B2レベルの能力がある学生が履修することを前提とし、ドイツ語⇄日本語に翻訳する基礎となる技術を身に付ける。旅行関係の情報記事、パンフレット、新聞記事、ニュースなどを題材に、場面や状況に応じたニュアンスの違い、言語間での意味のギャップ、そして文化や社会的背景の位相に起因する通訳で生じる問題についても扱う。	
ア自全 ヤ由学 リ科共 ア通 ヘ目 域ド イ言 ツ語 系系 科目	アカデミックドイツ語 1		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B2レベルの教材等を使用し、ドイツ語の学術界で必須となるさまざまなスキルやコミュニケーションに必要となる知識を身に付け、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、ドイツ語のプレゼンテーションやディスカッションの方法、講義や講演での質問の仕方を学ぶ。	
	アカデミックドイツ語 2		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B2レベルの教材等を使用し、ドイツ語の学術界で必須となるさまざまなスキルやコミュニケーションに必要となる知識を身に付け、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、ドイツ語のレポートや論文の執筆の方法を学ぶ。	
	アカデミックドイツ語 3		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B2レベルの教材等を使用し、ドイツ語の学術界で必須となるさまざまなスキルやコミュニケーションに必要となる知識を身に付け、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、ドイツ語で書かれた文献のリサーチや講読、講義や講演を聞き理解するためのテクニックを学ぶ。	
	アカデミックドイツ語 4		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B2レベルの教材等を使用し、ドイツ語の学術界で必須となるさまざまなスキルやコミュニケーションに必要となる知識を身に付け、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、ドイツ語で書かれた文献の講読をする。	
	ドイツ語CLIL 1		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR C1レベルの人文・社会・自然科学系の各分野のアカデミックな題材やグローバル社会で特に重要なテーマを中心に扱う。	
留自全 ヤ由学 リ科共 ア通 ヘ目 域ド イ言 ツ語 系系 科目	フランス語総合 1		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。【フランス語検定試験4級レベル】の問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。初習者が本授業を履修する場合は、必修科目を履修していることを前提とする。	
	フランス語総合 2		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。【フランス語検定試験4級レベル】の問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。	
	フランス語総合 3		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。【フランス語検定試験3級レベル】の問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。初習者が本授業を履修する場合は、必修科目を履修していることを前提とする。	
	フランス語総合 4		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。【フランス語検定試験3級レベル】の問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。	
	フランス語総合 5		必修科目と並行してCEFR A1レベル以上の教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。初級文法を確認しながら、留学に必要なフランス語力を身につける。さらにフランス滞在に向けて必要な情報を収集し、留学に備える。	
	フランス語総合 6		必修科目と並行してCEFR A1レベル以上の教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。初級文法を確認しながら、留学に必要なフランス語力を身につける。さらにフランス滞在に向けて必要な情報を収集し、留学に備える。	
	フランス語総合 7		CEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。フランス語検定試験準2級レベルの問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。	
	フランス語総合 8		CEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、フランス語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。フランス語検定試験準2級レベルの問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。	
	フランス語総合 9		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、フランス語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。フランス語検定試験2級レベルの問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。	
	フランス語総合 10		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、フランス語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。TCFまたはDELF・DALFの問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。	
	フランス語海外言語文化研修 (秋学期)		現地での研修はディジョン市のブルゴーニュ大学付属国際フランス語学センター (CIEF) で3週間にわたって行われる。クラスはレベル別で、様々な国の学生で構成される。授業はフランス人教員により、すべてフランス語で行われる。積極的な参加が常に求められる。 秋学期に開催される事前研修には毎回必ず出席すること。事前研修では、渡航手続きの他、フランス語のみによる現地の授業の模擬授業を行い、フランスでの実際の生活や習慣などについても学ぶ。現地研修の予定日程と費用は以下の通り。 日程：2027年2月中を予定。留学生会館（個室）に宿泊。 費用：募集要項を確認のこと。現地プログラム参加費（授業料・補助教材費等）、宿泊費、往復航空運賃、現地空港から研修地までの移動費などを含む。ただし、参加人数や為替レート等により変動があるので、詳細は事前研修で発表する。 参加費納入：出発までに、プログラム参加費（宿泊費を含む）と、航空券代を銀行振込により納入する。ただし、グループ参加の性質上、履修登録/誓約書提出後の研修参加辞退は他の参加者や関係各所に多大の迷惑がかかるため原則として認められないので、体調管理に留意して真剣に取り組むこと。	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
キ自全 ヤ由学 リ科共 ア目通 領ヘ科 域フ目 ラン語 ス系 語科 目	キャリアフランス語1		CEFR B1レベルの教材等を使用し、フランス語のビジネス・コミュニケーションに必要な知識を身に付け、さらに教室内での実践経験を通して説得したり交渉したりする能力を磨く。具体的には、履歴書や面接でのPR、ビジネス資料作成やプレゼンの論理構築、交渉場面でのストラテジーなどを学ぶ。個々のフランス語力を高めると同時に、ペアワークやグループワークを取り入れることで、ビジネス上におけるチームワークの実践をフランス語を通して培う。	
	キャリアフランス語2		CEFR B1レベルの教材等を使用し、テーマごとに自身の意見をフランス語で述べながら、ディスカッションができるようになることを目指す。また、相手の意見も取り入れながら、互いに建設的な議論ができるようなコミュニケーション力を培う。	
	キャリアフランス語3		CEFR B2レベルの教材等を使用し、フランス語から日本語に翻訳・通訳する基礎となる技術を身に付ける。旅行関係の情報記事、パンフレット、新聞記事、ニュース、文学作品などを題材に、場面や状況に応じたニュアンスの違い、言語間での意味のギャップ、そして文化や社会的背景の位相に起因する翻訳・通訳で生じる問題についても扱う。フランス語の意味を正しく理解するだけでなく、どのような日本語に置き換えるべきかについても考える。	
	フランス語トレーニング1		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。【フランス語検定試験準1級】レベルの問題を解きながら、実践的なフランス語力も身につける。	
ブ自全 由学 ジ科共 エ目通 クヘ科 目ト目 領フ語 域ラン ス系 語科 目	入門フランス語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにフランス語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、フランス語の発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
	フランス語演習1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのフランス語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材に触れながら定着をはかる。科目の総合テーマは「日仏文化理解」で、具体的には「フランス語圏と日本の文化の違い」について考察を深めることを目指す。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	フランス語演習2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのフランス語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材に触れながら定着をはかる。科目の総合テーマは「日仏文化理解」で、具体的にはフランス語特異な表現方法やレトリックを中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	フランス語演習3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのフランス語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材に触れながら定着をはかる。科目の総合テーマは「日仏文化理解」で、具体的にはフランス語特異な表現方法やレトリックを中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	フランス語演習4		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのフランス語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材に触れながら定着をはかる。科目の総合テーマは「フランス語圏の社会・文化・歴史」で、具体的な題材としてフランス語圏の連帯を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	フランス語演習5		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのフランス語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「フランス語圏の芸術・文化・時事」で、具体的な題材として美術・文学・映画・音楽・ニュース等を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
ア自全 カ由学 デ科共 ミ目通 ッヘ科 目ク目 領フ語 域ラン ス系 語科 目	上級フランス語ライティング1		Exercices de grammaire Rédactions (和訳) 文法の練習 ライティング	
	上級フランス語ライティング2		Exercices de grammaire Rédactions (和訳) 文法の練習 ライティング	
留自全 学由学 準目共 備目通 領ヘ科 域ス目 ペ言 イ語 ン系 語科 目	スペイン語総合1		必修科目と並行してCEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	スペイン語総合1		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。初習者が本授業を履修する場合は、必修科目を履修していることを前提とする。 なお本授業は、受講者がスペイン語に慣れ、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランス良く身につけるため、できる限りアウトプットのアクティビティを多く実施する。	
	スペイン語総合2		必修科目と並行してCEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	スペイン語総合2		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。 なお本授業は、受講者がスペイン語に慣れ、「聞く・話す・読む・書く」の4技能をバランス良く身につけるため、できる限りアウトプットのアクティビティを多く実施する。	
	スペイン語総合3		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	スペイン語総合4		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、スペイン語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	スペイン語総合5		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、スペイン語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	スペイン語総合6		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、スペイン語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	スペイン語海外言語文化研修(秋学期)		春休みの数週間、スペインのガリシア州に滞在し、サンティアゴ・デ・コンボステラ大学国際コースの短期スペイン語集中コースを受講する。 秋学期中に行われる計4回の事前研修と1回の事後研修（いずれも土曜日午後）に必ず出席すること。 春休み中の約3週間、サンティアゴ・デ・コンボステラ大学国際コースのスペイン語セミナーでスペイン語を学ぶほか、課外活動や現地生活を通してスペイン語の運用を実践し、スペイン語圏の文化・社会に関する知見を広める。 現地での滞在方法はホームステイ。 費用は、現地プログラム参加費（授業料・補助教材費等）、宿泊費、往復航空運賃、現地空港から研修地までの移動費などを含み約60万円程度。ただし参加人数や為替レート等により変動があるので、詳細は事前研修で発表する。	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
ブ自全 ロ由学 ジ科共 エ目通 クト目 領ヘ言 域ベ語 ン系 語科 目	入門スペイン語		言語A・B必修科目の学修を経て新たにスペイン語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、スペイン語の文字・発音・基礎文法を中心に学修し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
	スペイン語演習 1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏のエンターテインメント」で、具体的な題材として、映画、歌、演劇、TV等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。具体的には、鑑賞文や解説を参考し、各自で日本語の詩をスペイン語に訳す。訳を教員およびクラスメートと確認し合い、ブラッシュアップする。スペイン語の詩は輪読して大意を確認した後、日本語で鑑賞文を書く。	
	スペイン語演習 1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏のエンターテインメント」で、具体的な題材として、映画、歌、演劇、TV等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。スペイン語を母語とするさまざまな国や地域のCMを見ることで多様な文化や考え方について気づきを促し知見を広げ、学生自身の中にある言語資産、文化資産を活用してアクティブリスニングの姿勢を養う。シャドウイングによりスペイン語のイントネーションに慣れ聴解力、発音の向上を目指し、アクティビティをとおして適切な語彙力、文法力を強化し、一つ一つを確実なものとしていく。	
	スペイン語演習 2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏のエンターテインメント」で、具体的な題材として、映画、歌、演劇、TV等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。スペイン語を母語とするさまざまな国や地域のCMを見ることで多様な文化や考え方について気づきを促し知見を広げる。学生自身の中にある言語資産、文化資産を活用してアクティブリスニングの姿勢を養い、シャドウイングによりスペイン語のイントネーションに慣れ聴解力、発音の向上を目指す。アクティビティをとおして語彙力、文法力を強化し、一つ一つを確実なものとしていく。	
	スペイン語演習 2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏のエンターテインメント」で、具体的な題材として、映画、歌、演劇、TV等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	スペイン語演習 3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏の「いま」を知る」で、具体的な題材として、料理、スポーツ、ファッション、ポップカルチャー等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	スペイン語演習 4		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏の「いま」を知る」で、具体的な題材として、料理、スポーツ、ファッション、ポップカルチャー等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	スペイン語演習 5		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏の「いま」を知る」で、具体的な題材として、料理、スポーツ、ファッション、ポップカルチャー等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。この授業では、広大なスペイン語圏の多様な料理について知見を広める。1回の授業で1〜2種類のレシピを読み進め、スペイン語の読解力・聴解力・語彙力の伸長に加え、よりスペイン語らしい発音やイントネーションの獲得を目指す。また、スペイン語で平易な文を書き文章を書く力ならびに発表を通してプレゼンする力も培うことを目標とする。	
	スペイン語演習 6		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏の文化と社会」で、具体的な題材として、歴史、芸術、文学、社会、時事問題等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。スペイン語を聞き取り大意をつかみ、次に虫食いのスクリプトで穴埋めをして単語を聞き取ったり聞き取りにくいポイントについて学んだりし、その上でテキストの内容を構文理解を含めて把握する。	
	スペイン語演習 7		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「スペイン語圏の文化と社会」で、具体的な題材として、歴史、芸術、文学、社会、時事問題等を扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
キ自全 ヤ由学 リ科共 ア目通 領ヘ科 域ニ言 ベペ語 ン系 語科 目	キャリアスペイン語 1		CEFR B1レベルの教材等を使用し、スペイン語のビジネス・コミュニケーションに必要な知識を身に付け、さらに教室内での実践経験を通して説得したり交渉したりする能力を磨く。具体的には、履歴書や面接でのPR、ビジネス資料作成やプレゼンの論理構築、交渉場面でのストラテジーなどを学ぶ。	
	キャリアスペイン語 2		CEFR B1レベルの能力がある学生が履修することを前提とし、スペイン語から日本語に翻訳・通訳する基礎となる技術を身に付ける。旅行関係の情報記事、パンフレット、新聞記事、ニュースなどを題材に、場面や状況に応じたニュアンスの違い、言語間での意味のギャップ、そして文化や社会的背景の相違に起因する翻訳・通訳で生じる問題についても扱う。	
	スペイン語トレーニング 1		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。	
	スペイン語トレーニング 2		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。	
ア自全 カ由学 デ科共 ミ目通 クシ目 領ヘ科 域ニ言 ベペ語 ン系 語科 目	アカデミックスペイン語 1		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B1レベルの教材等を使用し、学術的な分野で必須となるスペイン語のさまざまなスキルやコミュニケーション上必要な知識に触れ、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、スペイン語で書かれた文献のリサーチや講読、論文執筆、講義や講演での質問の仕方、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。	
	アカデミックスペイン語 2		留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、授業ではCEFR B2レベルの教材等を使用し、学術的な分野で必須となるスペイン語のさまざまなスキルやコミュニケーション上必要な知識に触れ、教室内での実践経験を通してそれらの能力を磨く。具体的には、スペイン語で書かれた文献のリサーチや講読、論文執筆、講義や講演での質問の仕方、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。	
留自全 学由学 準科共 備目通 領ヘ科 域ニ国 言語 語系 科 目	中国語総合 1		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、中国語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。初習者が本授業を履修する場合は、必修科目を履修していることを前提とする。	
	中国語総合 2		CEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、中国語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。	
	中国語総合 3		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、中国語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	中国語海外言語文化研修 （春学期）		夏休みの3週間、台北市の台湾師範大学に滞在し、中国語の研修を行う。 授業はネイティブ教員が、短期学習班の外国人向け中国語教材を用い、すべて中国語によって行う。たえず質問に答え、自分からも質問するという、能動的に取り組む姿勢を求める授業になる。 履修にあたっては、4月上旬開催予定の説明会に参加すること。説明会の時間などの詳細はR Guideで確認すること。 また事前研修は全回必ず出席すること。	集中
	中国語海外言語文化研修 （秋学期）		春休みの3週間、台北市の台湾師範大学に滞在し、中国語の研修を行う。 授業はネイティブ教員が、短期学習班の外国人向け中国語教材を用い、すべて中国語によって行う。たえず質問に答え、自分からも質問するという、能動的に取り組む姿勢を求める授業になる。 履修にあたっては、8月下旬開催予定の説明会に参加すること。説明会の時間などの詳細はR Guideで確認すること。 また事前研修は全回必ず出席すること。	集中

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
ブ自全 ロ由学 ジ科共 エ目通 ク(中目 領国言 域語系 語科目)	入門中国語		言語A・B必修科目の学修を経て新たに中国語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、中国語の文字・発音・基礎文法を中心に学修し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
	中国語演習 1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの中国語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「中国語圏の社会・文化・芸術」で、具体的な題材として中国語圏の映像作品を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
	中国語演習 2		必修科目等で身に付けたCEFR B1レベルの中国語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「中国語圏の社会・文化・芸術」で、具体的な題材として中国語圏の飲食文化を中心に扱う。また、本領域の科目はアカデミック領域の科目を受講するための準備段階にも位置づけられる。	
キ自全 ヤ由学 リ科共 ア目通 域(中目 領国言 語系科目)	キャリア中国語 1		CEFR A2レベルの能力がある学生が履修することを前提とし、日本語から中国語に翻訳・通訳する基礎となる技術を身に付ける。旅行関係の情報記事、パンフレット、新聞記事、ニュースなどを題材に、場面や状況に応じたニュアンスの違い、言語間での意味のギャップ、そして文化や社会的背景の位相に起因する翻訳・通訳で生じる問題についても扱う。	
	キャリア中国語 2		CEFR B2レベルの教材等を使用し、中国語のビジネス・コミュニケーションに必要な知識を身に付け、さらに教室内での実践経験を通して説得したり交渉したりする能力を磨く。具体的には、履歴書や面接でのPR、ビジネス資料作成やプレゼンの論理構築、交渉場面でのストラテジーなどを学ぶ。	
	中国語トレーニング 1		CEFR B2レベルの教材等を使用し、日常生活から社会生活に至る幅広いテーマに関する内容で、抽象的かつ具体的なテキストを理解し、そして自身の視点から意見や説明ができるようになることを目指す。	
	中国語トレーニング 2		CEFR C1レベルの教材等を使用し、高度で複雑な内容のテキストを理解し、しっかりとした構成をもった詳細なテキストを作成し、自身の意見を的確に表現できるようになることを目指す。	
	上級中国語コミュニケーション 1		本課程中由教師给出主題、各主題分两次进行。第一次课阅读文章，学习必要的词汇语法，概括段落意思，分析作者意图。第二次课从该主题出发，进行分组延伸讨论，并发表自己的意见。学期末，学生自由选做题最终发表。 (和訳) この授業では教師がテーマを与え、各テーマを2回に分ける。最初の授業では、記事を読み、必要な語彙と文法を学び、文章の意味を要約し、著者の意図を分析する。2回目の授業では、そのテーマについてグループディスカッションを行い、自分の意見を述べる。学期末には、最終プレゼンテーションのテーマを自由に選ぶことができる。	
	上級中国語コミュニケーション 2		本課程中由教師给出主題、各主題分两次进行。第一次课阅读文章，学习必要的词汇语法，概括段落意思，分析作者意图。第二次课从该主题出发，进行分组延伸讨论，并发表自己的意见。学期末，学生自由选做题最终发表。 (和訳) この授業では教師がテーマを与え、各テーマを2回に分ける。最初の授業では、記事を読み、必要な語彙と文法を学び、文章の意味を要約し、著者の意図を分析する。2回目の授業では、そのテーマについてグループディスカッションを行い、自分の意見を述べる。学期末には、最終プレゼンテーションのテーマを自由に選ぶことができる。	
ア自全 由学 デ科共 キ目通 ク(中目 領国言 域語系 語科目)	上級中国語ライティング 1		本課程中由教師给出主題、各主題分两次进行。第一次课上选读该主题的文章，掌握必要的词汇语法，课后完成作业。第二次课上教师对学生作文进行讲评，并通过分组讨论，加以修改完善。 ※本課程包含HSK、中検等中文考试的作文指导。 (和訳) この授業では講師がテーマを与え、各テーマを2回でカバーする。最初の授業では、そのテーマに関するエッセイを選び、必要な語彙や文法を習得するために読み、授業の終わりに宿題を出す。2回目の授業では、教師が学生のエッセイを評価し、グループディスカッションを通して添削・改善を行います。 HSKや中国語検定など、中国語検定試験の作文指導も行います。	
	上級中国語ライティング 2		本課程中由教師给出主題、各主題分两次进行。第一次课上选读该主题的文章，掌握必要的词汇语法，课后完成作业。第二次课上教师对学生作文进行讲评，并通过分组讨论，加以修改完善。 ※本課程包含HSK、中検等中文考试的作文指导。 (和訳) この授業では講師がテーマを与え、各テーマを2回でカバーする。最初の授業では、そのテーマに関するエッセイを選び、必要な語彙や文法を習得するために読み、授業の終わりに宿題を出す。2回目の授業では、教師が学生のエッセイを評価し、グループディスカッションを通して添削・改善を行います。 HSKや中国語検定など、中国語検定試験の作文指導も行います。	
	アカデミック中国語 1		基礎中国語の能力を持つ学生、留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、教室内での受講や実践トレーニングを通して、理論的な理解やコミュニケーションに必要な知識を身につける。具体的には、講義、会話練習、作文、発表などを通じて、知識を深めると同時に、質問の仕方、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。	
	アカデミック中国語 2		基礎中国語の能力を持つ学生、留学経験者や国内外の大学院への進学を考えている学生を対象に、教室内での受講や実践トレーニングを通して、理論的な理解やコミュニケーションに必要な知識を身につける。具体的には、講義、会話練習、作文、発表などを通じて、知識を深めると同時に、質問の仕方、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。	
	上級中国語リスニング・リーディング 1		本課程将通过学习中文视听资料和阅读资料，学习自然、当下流行的汉语表达。 (和訳) このコースでは、中国語の視聴覚教材や読み物を通して、自然な中国語表現、時事的な中国語表現、ポピュラーな中国語表現を学びます。	
	上級中国語リスニング・リーディング 2		本課程将通过学习中文视听资料和阅读资料，学习自然、当下流行的汉语表达。 (和訳) このコースでは、中国語の視聴覚教材や読み物を通して、自然な中国語表現、時事的な中国語表現、ポピュラーな中国語表現を学びます。	
留自全 学由学 准科共 備日通 域(朝目 領鮮言 域語系 語科目)	朝鮮語総合 1		CEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的な能力の強化を目指す。初習者が本授業を履修する場合は、必修科目を履修していることを前提とする。	
	朝鮮語総合 1		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的な能力の強化を目指す。	
	朝鮮語総合 2		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。	
	朝鮮語総合 2		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。	
	朝鮮語総合 3		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、朝鮮語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	朝鮮語総合 4		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、朝鮮語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
ブ自全 ロ由学 ジ科共 エ目通 ク(朝目 領鮮言 域語系 語科目)	朝鮮語海外言語文化研修 (春学期)		夏休みの数週間、韓国のソウル市にある聖公会大学に滞在し、朝鮮語（韓国語）の研修を行う。	集中
	入門朝鮮語		言語A・B必修科目の学習を経て新たに朝鮮語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、朝鮮語の文字・発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
	朝鮮語演習 1		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「朝鮮語圏の社会・生活文化」である。	
	朝鮮語演習 2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「朝鮮語圏の社会と慣習」である。	
	朝鮮語演習 3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「朝鮮語圏の現在」である。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	朝鮮語演習 3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「朝鮮語圏の現在」である。 本授業は前学期までに「朝鮮語総合2」「朝鮮語総合4」「朝鮮語演習2」いずれかの授業を修了しているか、TOPIK3級またはハン検3級取得済の学生を対象とする。	
	朝鮮語演習 4		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「多文化社会と朝鮮・韓国」である。	
	朝鮮語演習 4		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルの朝鮮語運用能力を土台とし、CEFR B2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「多文化社会と朝鮮・韓国」である。 本授業は前学期までに「朝鮮語総合2」、「朝鮮語総合4」、「朝鮮語演習2」いずれかの授業を修了しているか、TOPIK3級またはハン検3級取得済の学生を対象とする。	
	上級朝鮮語演習 1		매 수업마다 한국(북한) 관련 뉴스를 시청하고 번역하는 실전연습을 실시한다 전문용어와 전문지식의 습득, 미디어 번역에 있어 필요한 번역 스킬과 원문에 대한 정확한 이해도를 습득한다 수업은 한국어와 일본어로 진행되나, 한글 능력 검정 시험 준2급 정도의 어휘력이 필요하다 (和訳) 毎回の授業で韓国(北朝鮮)関連ニュースを視聴し、翻訳する実践練習を行う 専門用語と専門知識の習得、メディア翻訳に必要な翻訳スキルと原文に対する正確な理解度を得得する 授業は韓国語と日本語で行われるが、ハングル能力検定試験準2級程度の語彙力が必要。	
	上級朝鮮語演習 1		각 설정된 테마의 사전준비와 토론, 발표 등을 통하여 조선어(한국어)로 생각하고 조선어(한국어)로 적극적으로 발화를 해 본다. 또한 이러한 활동 속에서 부족한 어휘나 문형, 문법 등을 확인하고 습득한다. (和訳) 各設定されたテーマの事前準備や討論、発表などを通じて、朝鮮語(韓国語)で考え、朝鮮語(韓国語)で積極的に発話をしてみる。また、このような活動の中で、不足している語彙や文型、文法などを確認し、習得する。	
	上級朝鮮語演習 2		매 수업마다 한국(북한) 관련 뉴스를 시청하고 번역하는 실전연습을 실시한다 전문용어와 전문지식의 습득, 미디어 번역에 있어 필요한 번역 스킬과 원문에 대한 정확한 이해도를 습득한다 (和訳) 毎回の授業で韓国(北朝鮮)関連ニュースを視聴し、翻訳する実践練習を行う 専門用語と専門知識の習得、メディア翻訳に必要な翻訳スキルと原文に対する正確な理解度を得得する。	
	上級朝鮮語演習 2		이 수업은 매 수업마다 한국 영상 자료를 보고 그것에 관해 학생들은 페어 또는 그룹으로 토론을 한 후 마지막에 영상의 내용을 요약하여 써서 제출한다. 이 수업에서는 학기 중에 2번의 발표가 있다. (和訳) この授業では、毎回の授業で韓国の映像資料を見て、それについて学生はペアまたはグループでディスカッションを行い、最後に映像の内容を要約して書いて提出します。 この授業では、学期中に2回の発表があります。	
留自全学 準備科目 通領(科目 ロシア語系 科目)	ロシア語総合 1		必修科目と並行してCEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ロシア語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	ロシア語総合 2		CEFR A1レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ロシア語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。本授業を履修する場合は、必修科目を履修済みまたは履修していることを前提とする。 授業の具体的な流れとしては、教科書と補助教材(配布プリント)で新出単語・会話モデルを確認した後、単語や表現を置き換えながら自ら話す訓練を行う。その後、ペアワークによる会話練習も行い、聴き取り、話す能力の向上に努める。必要に応じて文法解説も加えていく。また、随時、視聴覚資料を用いてロシア語圏の社会・文化について紹介する。	
	ロシア語総合 3		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ロシア語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。	
	ロシア語総合 4		必修科目と並行してCEFR A2レベルの教材を扱い、日常で用いられる範囲での基本的なコミュニケーション能力の強化を目指す。また、複言語・複文化能力を養うために、ロシア語圏の社会や文化について自国のものと比較しながら理解を深める。 最初の数回は教科書の第1課～第15課の復習を行う。教科書の課ごとではなく、語形変化を中心に文法事項でまとめて再確認していく。その後、第16課～第20課の文法事項を学ぶ。小さなテキストの読解や作文を通じて語彙の増強とロシア語文法学習の総仕上げも行う。また、聴き取りの訓練や会話練習のペアワークなども随時取り入れ、音声面の強化も目指す。視聴覚資料を用いてロシア語圏の社会・文化の紹介も行いたい。	
	ロシア語総合 5		CEFR B1レベルの教材等を使用し、身近な話題や関心のあるテーマ、また簡単な時事問題について理解し、簡単な意見のやり取りができるようになることを目指す。また、異文化への理解をより深めるために、ロシア語圏のみにとどまらずそれ以外の言語圏、そして履修者自身の文化的背景や生活する社会との比較を通して見識を広める。	
	入門ロシア語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにロシア語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、ロシア語の文字・発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
ブ自全 ロシア語系 科目 通領(科目 ロシア語系 科目)	ロシア語演習 1		必修科目等で身に付けたCEFR A1-A2レベルのロシア語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ロシア語圏の文化」で、具体的な題材として料理、旅行などを中心に扱う。	
	ロシア語演習 2		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのロシア語運用能力を土台とし、CEFR B1レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ロシア語圏の文化」で、具体的な題材としてスポーツ、芸術、年中行事などを中心に扱う。	
	ロシア語演習 3		必修科目等で身に付けたCEFR A2レベルのロシア語運用能力を土台とし、CEFR A2レベルの題材を使用する。科目の総合テーマは「ロシア語圏のエンターテインメント」で、具体的な題材として映画、アニメを中心に扱う。	
自全 自由学 科共通 科目 (科目 日本語系 科目)	日本の社会と文化A		社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、課題設定能力も高める。最後にまとめとしてプレゼンテーションまたはレポートを課す。	
	日本の社会と文化B		時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。講義も行うが、主としてテーマについてのディスカッションやプレゼンテーションを中心とした授業を行い、課題設定能力も高める。最後にまとめとしてプレゼンテーションまたはレポートを課す。	
	日本の社会と文化C		「日本の企業風土」「日本の経営」「日本式サービス」をトピックとして取り上げ、ゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーからの講義を軸として授業を進める。授業で扱うトピックについて理解を深めると同時に、それらのトピックを語る際に使われる語彙や文型について学び、使う課題も行う。ゲストスピーカーによる講義の前には事前学習として、それぞれのトピックについての基本的知識や専門的な語彙や文型を学び、講義の後には、内容理解やディスカッションを行い、レポート作成などを行う。事前学習、ゲストスピーカーによる講義、事後学習という流れの中で学ぶことが重要であるため、責任を持って授業に参加できる者の履修を望む。	
	社会の中の日本語A		擬音語・擬態語、様々な感情表現、微妙なニュアンスを表す副詞、位相など、日本語の特徴的な側面を取り上げ、それについての論文を読んだり、調査をしたりする。課題設定能力を高め、大学での学びに必要な日本語運用能力を向上させる。 具体的には、日本語の特徴的な1つの側面を取り上げ、それについて、論文を読んだり複数の事例に触れたりした後、ディスカッションしながら理解を深めていく。また、学んだ語彙や表現などを使用した文章の作成などを通して、より高度で自然な日本語運用能力を身につける。最後には、テーマに関するトピックについて自分で調べたものをプレゼンテーションし、さらにレポートにまとめる。	
	社会の中の日本語B		日本語の特徴的な側面として、若者言葉、SNSやメールの文体、人の呼び方、役割語を取り上げ、それについての文章を読んだり、調査したりする。 具体的には、日本語の特徴的な1つの側面を取り上げ、それについて論文を読んだり、複数の事例に触れたりした後、ディスカッションしながら理解を深めていく。また、学んだ語彙や表現などを使用した文章の作成などを通して、より高度で自然な日本語運用能力を身につける。最後には、テーマに関するトピックについて自分で調べたものをプレゼンテーションし、さらにレポートにまとめる。	
	論文読解の技法		参加者の専門に沿った学術論文を数編選び、「構成」「スタイル」「語彙」「文型」「文末表現」「引用の仕方」「参考文献の提示方法」などの点に留意しながら読む。日本語学術論文の特徴については講義およびディスカッションを行う。さらに、いくつかの論文については要約を行い、読み取った内容を簡潔にまとめる練習も行う。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	論文作成の技法		日本語の論文の構成、スタイル、使用される語彙や接続表現、文型の特徴について学び、自らがそれらを用いて構成を組み立てや短文作成などを行う。その後、実際の論文作成を行い、実践力をつける。講義も行うが、参加者自身の論文作成に基づいた授業を行い、ピア・エディティングも行う。毎回、「課題設定」「論文構成」「引用」「接続表現」などのテーマを決め、そのテーマに沿った学習および短文作成を行う。随時、論文要約なども取り入れながら、作成する文章を徐々に長く、高度なものにしていき、最終的には1つの研究計画書の完成を目指す。参加者それぞれが問題意識を持ち、自分の間違いに気づき、それを修正していくスキルが身につくように授業を行う。学術論文、卒業論文の作成に困難を感じている者には特に履修をすすめる。	
	キャリアの日本語A		就職活動に必要な日本語に関連する様々な事例―「エントリーシートの書き方」「自己PRの仕方」「集団面接の受け方」「個人面接の受け方」などを実践的に学ぶ。さらに、面接に行く際のマナーなどについても学ぶ。実際に自分で何度かエントリーシートを書いたり、発表したりする活動を行う。そして、それに対するフィードバックをクラスメート、および教員から受けることでスキルアップを目指す。また、様々なタイプの面接練習も行う。さらに、学外から留学生の就職活動に携わるゲストを招き、就職活動の概要に関する説明を聞き、就職活動全体の流れや要点を学ぶ。	
	キャリアの日本語B		就職試験の国語分野、常識分野の試験問題を数多く解き、それについての説明を受けることで、日本の就職試験の傾向を知ると同時に、対応スキルを身につける。就職試験問題を数多く知るために、毎回、たくさんの問題に取り組む。効率的に授業をすすめるために、宿題としても試験問題を課し、授業中は解説や質問対応などにより多く時間を割く。個々の試験問題についての解説なども行うが、主として参加者が積極的に与えられた問題に数多く取り組み、それを通して就職試験について「知ろう」とする姿勢が必要である。	
	ビジネスのための口頭運用力A		ビジネス場面で必要とされる構文または談話レベルの口頭運用力―敬語や待遇表現―について、電話応対、依頼など実際の場面を設定して実践的に学び、それが使えるように練習する。	
	ビジネスのための口頭運用力B		意思決定と問題解決のための課題をソリューション・デザイン型活動で行い、その過程の中で、ビジネス場面で必要とされるプレゼンテーションの仕方や交渉の技術などのスキルアップを目指す。	
	ビジネスメールと文書		日本で就職したり、日系企業で働いたりする際に必要となるビジネス文書の読解や作成について、具体例を挙げながら実践的に学び、実際にビジネス文書が読め、作れるところまで練習する。ビジネス場面で使われる様々な文書（報告書、提案書、依頼書など）の実例を使い、形式や語彙、文型などについて学ぶ。さらに、参加者自らがビジネス文書を作成し、学んだ語彙や文型などを使えるようになるまで繰り返し練習する。実際の文書だけでなく、ビジネスでメールを使う際の形式やルール、マナーについても学び、様々な場面を設定して実際にメール作成を行う。	
全学共通科目（ポルトガル語系科目）	ポルトガル語（ブラジル）1		言語A・B必修科目の学習を経て新たにポルトガル語（ブラジル）を学ぶ学生を対象とする。具体的には、ポルトガル語（ブラジル）の文字・発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションをする。自分のこと、身の回りのことについて話したり、短い文を読み書きする。	隔年
	ポルトガル語（ブラジル）2		「ポルトガル語（ブラジル）1」に引き続き、ポルトガル語（ブラジル）の基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、簡単なコミュニケーションをする。日常的なやり取りでの受け答えをしたり、身近な話題について自分の意見を述べる。短いテキストを読み書きする。	隔年
全学共通科目（日本語系科目）	日本手話初級1		日本手話・入門編の語学講義。主に、初めて手話に出会う学生を対象に、異文化コミュニケーションの一つとして手話を学ぶと共に、ろう文化の概要を知る。また、ろう者の文化や生活についての概説を行い、さらに、授業外に課題図書を読み進めることで、ろう者の文化やデフコミュニティについて理解を深める。授業で学習したコミュニケーション能力は成果として発信し、授業外でも発揮する機会を設けていく。	
	日本手話初級2		日本手話・初級編の語学講義。豊かな表現力を持つ手話を通してコミュニケーション能力を磨くと共に、ろう者の社会的背景を学ぶ。また、手話を読み取る力を養う。また、ろう者の職業についての概説や、実在するろう者の紹介を通して社会における国内外のろう者像を探る。さらに、授業外に課題図書を読み進めることで、ろう者社会への理解を深める。授業で学習したコミュニケーション能力は成果として発信し、授業外でも発揮する機会を設けていく。	
	日本手話中級1		日本手話・中級編の語学講義。主に、初級編を終えた学生を対象に、手話でのコミュニケーション能力のアップを図ると共に、ろう者について多角的に考察する。また、コラムでは、ろう者の歴史・教育・法律・福祉制度など社会に関わることについて学び、さらに、授業外に課題図書を読み進めることで、ろう者社会への理解を深める。授業で学習したコミュニケーション能力は成果として発信し、授業外でも発揮する機会を設けていく。	
	日本手話中級2		日本手話・上級編の語学講義。主に中級編を終えた学生を対象に、手話で自分の意見を表現する力を身につけると共に、ろう者について多角的に考察する。さらに、授業外に課題図書を読み進めることで、ろう者社会への理解を深める。また、コラムでは、言語としての手話・芸術について学び、異文化への理解を深め、コラムの総まとめとして将来への展望へと考察を進める。授業で学習したコミュニケーション能力は成果として発信し、授業外でも発揮する機会を設けていく。	
全学共通科目（インドネシア語系科目）	入門インドネシア語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにインドネシア語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、インドネシア語の文字・発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
全学共通科目（タイ語系科目）	入門タイ語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにタイ語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、タイ語の発音・基礎文法、さまざまなシチュエーションでの会話を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	
全学共通科目（タガログ語系科目）	入門タガログ語		言語A・B必修科目の学習を経て新たにタガログ語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、タガログ語の文字・発音・基礎文法を中心に学習し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになることを目指す。	

授 業 科 目 の 概 要				
(全学共通科目 言語系科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
全 学 共 通 科 目 (ベ ト ナ ム 語 系 科 目)	入門ベトナム語		言語A・B必修科目の学修を経て新たにベトナム語を学ぶ学生を対象とする。具体的には、ベトナム語の文字・発音・基礎文法を中心に学修し、基本的な語彙や表現を身につけ、初歩的なコミュニケーションができるようになる。	

別記様式第2号（その3の1）				
(用紙 日本産業規格A4縦型)				
授 業 科 目 の 概 要				
(教職科目)				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
教職科目	社会・公民科教育法1		学習指導要領に示された中学校社会科及び高等学校公民科の目標・内容・全体構造について理解し、対応する学問領域の特性を踏まえた教材研究の方法について学習する。あわせて、本科目と並行して履修する、あるいは本科目の履修の後に続く「社会・公民科教育法演習1」「社会・公民科教育法2」「社会・公民科教育法演習2」との関連性・継続性を考慮し、本科目の中で、学習指導案の作成の基礎を学び、実際に1単元・1時間の授業設計を行い、学習指導案を各自作成して発表、振り返りを行う。	
	社会・公民科教育法演習1		「社会・公民科教育法1」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校社会科及び高等学校公民科の各分野・科目について、履修者各自が1単元・1時間分の範囲について教材研究を行って教材を作成し、学習指導案を準備した上で模擬授業を行う。模擬授業の実施とその振り返りを通して、中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性に応じた授業設計ができる力量を養成する。あわせて、教材及びICTの活用法、学習評価の考え方の基礎的理解についても実践的に学ぶ。	
	社会・公民科教育法2		中学校社会科及び高等学校公民科の学習内容について、教材及びICTの効果的な活用法を理解した上で、履修者各自が活用法を考えた授業設計を行い、その授業計画を発表、振り返りを行う。あわせて、中学校社会科及び高等学校公民科の分野・科目に即した年間指導計画の作成・発表、学習評価の模擬の実践(学習指導案の「生徒観」)に即応した定期試験用の試験問題の作成・発表)などを通して、より実践的に授業設計の向上に取り組む力量を養成する。	
	社会・公民科教育法演習2		「社会・公民科教育法2」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校社会科及び高等学校公民科の各分野・科目について、履修者各自が作成した教材及びICTの効果的な活用を考えた授業設計に基づき、模擬授業を実施する。実施後に履修者相互の振り返りを行い、改善点を見出し、改訂プランを作成することを通して、教材及びICTの活用に実践的かつ発展的に取り組むことのできる力量を養成する。あわせて実践研究の動向を学び、中学生・高校生の実態に即した授業設計とその実践に取り組む力量を養成する。	
	理科教育法1		学習指導要領に示された中学校及び高等学校理科の目標・内容・全体構造について理解し、対応する学問領域の特性を踏まえた教材研究の方法について学習する。あわせて、本科目と並行して履修する、あるいは本科目の履修の後に続く「理科教育法演習1」「理科教育法2」「理科教育法演習2」との関連性・継続性を考慮し、本科目の中で、学習指導案の作成の基礎を学び、実際に1単元・1時間の授業設計を行い、学習指導案を各自作成して発表、振り返りを行う。	
	理科教育法演習1		「理科教育法1」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校及び高等学校理科の各分野・科目について、履修者各自が1単元・1時間分の範囲について教材研究を行って教材を作成し、学習指導案を準備した上で模擬授業を行う。模擬授業の実施とその振り返りを通して、中学生・高校生の発達段階、学力状況の多様性に即した授業設計ができる力量を養成する。あわせて、教材及びICTの活用法、学習評価の考え方の基礎的理解についても実践的に学ぶ。	共同
	理科教育法2		中学校及び高等学校理科の学習内容について、教材及びICTの効果的な活用法を理解した上で、履修者各自が活用法を考えた授業設計を行い、その授業計画を発表、振り返りを行う。あわせて、理科の分野・科目に即した年間指導計画の作成・発表、学習評価の模擬の実践(学習指導案の「生徒観」)に即応した定期試験用の試験問題の作成・発表)などを通して、より実践的に授業設計の向上に取り組む力量を養成する。	
	理科教育法演習2		「理科教育法2」で学習したことをもとに、学習指導要領に示された教科の目標及び内容を踏まえ、中学校及び高等学校理科の各分野・科目について、履修者各自が作成した教材及びICTの効果的な活用を考えた授業設計に基づき模擬授業を実施する。実施後に履修者相互の振り返りを行い、改善点を見出し、改訂プランを作成することを通して、教材及びICTの活用に実践的かつ発展的に取り組むことのできる力量を養成する。あわせて実践研究の動向を学び、中学生・高校生の実態に即した授業設計とその実践に取り組む力量を養成する。	共同
	教育原論		授業の目標に近づくべく、教育学および隣接諸科学の成果を援用しながら、主な柱として次のような問題を検討する。参加者間で相互に討議する機会をなるべく多く設けたい。 ・人間のメルクマールと教育の理念 ・子どもと大人の関係の歴史の変遷 ・近代学校を導いた思想とその教育理念	
	教職概論		教職の意義、教員の役割、教員の職務内容について、社会的意義や社会的要請、法制上の規定、歴史的過程から学習する。また、教職と他の職業との相違を理解した上での、教職に就くまでのプロセスや教職に就いた後の研修の在り方を理解するとともに、「チーム学校」の具体的な事例の学習を通して、「チーム学校」において教職員が学校内外の専門家等と連携・分担して働く重要性やその在り方への理解を深める。	
	教育制度論・教育課程論		本講義は、教育に関する制度及び教育課程に関する教育の基礎的事項を学ぶ科目である。教育制度及び教育課程は、その規範が日本国憲法(憲法、1946年)及び旧教育基本法(旧教基法、1947年)の精神―(人権としての教育)―にあることはいうまでもない。旧教基法を全面改正し成立した新教育基本法(新教基法、2006年)以降に具体化する現代日本の教育改革が、私たち国民の教育をどこに導くのかについて、現憲法の精神を拠り所にリアルに考える。	
	教育心理学		幼児・児童及び生徒の心身の発達の過程及び特徴を理解するとともに、学習に関する基礎的知識を身に付け、また発達を踏まえた学習を支える指導についての基礎的な考え方を理解する。さらに、心身のしょうがい、発達しょうがいを持つ生徒の心理、学習過程と指導について学ぶ。	
	特別支援教育の理論と方法(中・高)		インクルーシブ教育の実現に向けて、障害者権利条約や関係する制度等に関する理解、障害や配慮するべき事項などの知識、学校としての実施するべき対応等、今後の教員として必要な資質を高めるとともに、障害の状況に応じて「自立活動」の視点をもとにした具体的な対応についての考察を行う。また、障害はないが特別な配慮等が必要な生徒への対応についても考察を行う。	
	道德教育の理論と方法(中学校)		課題ごとに目標に即して講義し、それぞれの資料に基づき学習する。実際の教材や指導案、授業記録をグループワークで検討する。協同で指導案を作成し模擬授業を行ない検討する。	
	特別活動及び総合的な学習の時間の理論と方法		「総合的な学習(探究)の時間」や「特別活動」によって育まれる資質や能力について実践事例をもとに考察し、各教科の学習との関連性を踏まえて、生徒の主体性の育成やキャリア発達に資する展開等について計画的・継続的な指導の工夫について議論を深める。	
	教育方法論		現代社会に求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法、指導技術について講義する。さらに情報機器を活用した効果的な授業や適切な教材の作成・活用について講じる。	
	ICT活用の理論と方法		ICT(情報通信技術)の活用の意義と理論の基本を学び、デジタル教材の作成・利用の事例やオンライン授業実践など中学校・高等学校におけるICTを効果的に活用した学習指導の在り方、学習評価における教育データの活用と教育情報セキュリティの重要性、統合型校務支援システムを含むICTを活用した校務の推進状況について知るとともに、生徒への情報モラルを含む指導法の基礎を身に付ける。	
	生徒・進路指導の理論と方法		生徒指導もキャリア教育も学校現場ではあらゆる教育活動において実践するものとされている。教育現場における実践事例に触れながら、本来の意味や役割について理解を深め、教育現場で活用できる実践的な力量形成が図れるように講義する。	
	学校教育相談の理論と方法		生徒が自己理解を深め、クラス内外での人間関係を構築し、集団のなかで適応的に活動するための教育相談の理論を取り扱う。また、生徒の心理的発達に応じた関わりに必要なカウンセリングの基礎理論、メタカウンセリング理論および技法について、ロールプレイやグループワークを取り入れながら学習する。	
	中・高教育実習事前指導		中・高教育実習事前指導Ⅰでは、教育実習概要、教育実習に関わる諸手続き、授業作り入門(講義編・添削編)について説明を行う。 中・高教育実習事前指導Ⅱでは、授業作り入門の講義(講義編)を行う。 中・高教育実習事前指導Ⅲでは、先輩の教育実習経験から教育実習の心構えを学ぶ。 中・高教育実習事前指導Ⅳでは、授業作り入門の演習(添削編)を行う。	
	高校教育実習		・「直前指導」で実習の概略と課題を確認し、各自の教育実習校で2～3週間の教育実習を行う。 ・教育実習期間中の指導内容や気づきなどは、「教育実習の記録」に記載し、指導教諭の点検を受ける。 ・教育実習全体を振り返り、「教育実習事後レポート」を作成し、「教育実習の記録」および「研究授業授業案」と一緒に、指定期日までに提出する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(教職科目)				
科目 区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
	中・高教育実習		・「直前指導」で実習の概略と課題を確認し、各自の教育実習校で3週間の教育実習を行う。 ・教育実習期間中の指導内容や気づきなどは、「教育実習の記録」に記載し、指導教諭の点検を受ける。 ・教育実習全体を振り返り、「教育実習事後レポート」を作成し、「教育実習の記録」および「研究授業授業案」と一緒に、指定期日までに提出する。	
	教職実践演習（中・高）		少人数クラスを編成し、演習形式で講義とディスカッションを中心に展開する。 また中・高の現職教員や地域と学校に関わる関係者による講義をふまえ、教科指導、生活指導および学級運営等について模擬授業、ロールプレイなどをおして実践的理解を深める。 授業は、「クラス別授業」と「クラス合同授業」によって構成される。 「クラス合同授業」は、「教職実践演習(中・高)」履修の全学生が一同に介して受講する形態をとる。 「クラス別授業」は、各クラス担当者により授業計画に沿って授業が進行する。 履修希望クラスは、下記「注意事項」にしたがって、各自の秋学期履修計画に基づき手続きをおこなうこと。クラス確定後のクラス変更は原則、認めない。 なお「クラス合同授業」の日程など授業実施の詳細は、7月初旬に発表される受講クラスと同時に連絡する。各自確認すること。 卒業要件に必要な正課科目と重複する場合は、正課科目の授業を優先し、履修計画等を検討すること。	
	教職特別演習		概論的科目で学んだことに基づきつつ、今日の学校教育に関してより深く、実践的な内容を取り扱っていく。学校・授業に関する多面的なアプローチ・理解ができるように、主として、テーマ＝人権・愛国心・いじめ問題などーについての論文などを取り上げて、検討・ディスカッションを行う。初回に担当者から発題を行い、以後、文献などを検討対象ごとに、毎回参加者が分担して発表を行い、参加者全員でディスカッションを行う形式で進めることを予定している。具体的な進め方に関しては、初回授業時に受講学生と相談の上決定する。	

学校法人立教学院 設置認可等に関わる組織の移行表

令和7年度

令和8年度

立教大学

立教大学

学 部	学 科	入学 定員	編入学 定員 (3年次)	収容 定員
文学部	キリスト教学科	50	—	200
	史学科	215	—	860
	教育学科	101	—	404
	文学科	552	—	2,208
経済学部	経済学科	332	—	1,328
	会計ファイナ ンス学科	176	—	704
	経済政策学科	176	—	704
理学部	数学科	66	—	264
	物理学科	77	—	308
	化学科	77	—	308
	生命理学科	72	—	288
社会学部	社会学科	173	—	692
	現代文化学科	173	—	692
	メディア社会 学科	173	—	692
法学部	法学科	360	—	1,440
	政治学科	110	—	440
	国際ビジネス 法学科	115	—	460
観光学部	観光学科	195	—	780
	交流文化学科	175	—	700
コミュニ ティ福祉 学部	福祉学科	130	—	520
	コミュニティ 政策学科	220	—	880
経営学部	経営学科	230	—	920
	国際経営学科	155	—	620
現代心理 学部	心理学科	143	—	572
	映像身体学科	176	—	704
異文化コ ミュニ ケーション 学部	異文化コミュニ ケーション 学科	210	—	840
スポーツ ウェル ネス学部	スポーツウェ ルネス学科	230	—	920
計		4,862	—	19,448

学 部	学 科	入学 定員	編入学 定員 (3年次)	収容 定員	変更の事由
文学部	キリスト教学科	50	—	200	
	史学科	215	—	860	
	教育学科	101	—	404	
	文学科	552	—	2,208	
経済学部	経済学科	332	—	1,328	
	会計ファイナ ンス学科	176	—	704	
	経済政策学科	176	—	704	
理学部	数学科	66	—	264	
	物理学科	77	—	308	
	化学科	77	—	308	
	生命理学科	72	—	288	
社会学部	社会学科	173	—	692	
	現代文化学科	173	—	692	
	メディア社会 学科	173	—	692	
法学部	法学科	360	—	1,440	
	政治学科	110	—	440	
	国際ビジネス 法学科	115	—	460	
観光学部	観光学科	195	—	780	
	交流文化学科	175	—	700	
コミュニ ティ福祉 学部	福祉学科	130	—	520	
	コミュニティ 政策学科	220	—	880	
経営学部	経営学科	230	—	920	
	国際経営学科	155	—	620	
現代心理 学部	心理学科	143	—	572	
	映像身体学科	176	—	704	
異文化コ ミュニ ケーション 学部	異文化コミュニ ケーション 学科	210	—	840	
スポーツ ウェル ネス学部	スポーツウェ ルネス学科	230	—	920	
環境学部	環境学科	204	—	816	学部の設置（届出） ※収定増認可申請済み
計		5,066	—	20,264	

設置の趣旨等を記載した書類

目次

①設置の趣旨及び必要性.....	- 4 -
1. 立教大学環境学部を設置する必要性.....	- 4 -
2. 立教大学環境学部が養成する力・人材像	- 8 -
3. 組織として研究対象とする中心的な学問分野.....	- 17 -
②学部・学科の特色.....	- 18 -
③学部・学科の名称及び学位の名称	- 21 -
1. 「環境学部」とする理由.....	- 21 -
2. 学位に付記する専攻分野の名称.....	- 21 -
3. 英訳名称.....	- 21 -
④教育課程の編成の考え方及び特色	- 22 -
1. 教育課程の編成・実施方針.....	- 22 -
2. 科目区分の設定及び各科目区分の科目構成	- 22 -
3. 設置の趣旨と授業科目の対応関係.....	- 25 -
4. 必修科目・選択科目・自由科目の構成.....	- 26 -
5. 配当年次の考え方	- 28 -
6. 科目の設定単位数の考え方.....	- 30 -
7. 教育課程の編成・実施方針と学位授与の方針との連関.....	- 30 -
8. 教養教育の実施方法.....	- 31 -
9. 主要授業科目について.....	- 31 -
10. 授業期間について.....	- 33 -
⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件.....	- 34 -
1. 授業の方法、学生数.....	- 34 -
2. 配当年次の設定.....	- 35 -
3. 卒業要件.....	- 35 -
4. 履修モデル	- 37 -
5. 卒業論文・卒業プロジェクトに係る単位認定.....	- 38 -
6. CAP 制の設定.....	- 38 -
7. 他大学における授業科目の履修	- 38 -
8. 多様なメディアを利用した授業	- 39 -
⑥実習の具体的計画.....	- 39 -
1. 実習の目的.....	- 39 -
2. 実習先の確保.....	- 40 -
3. 実習先との契約内容.....	- 40 -
4. 実習水準の確保の方策	- 40 -

5. 実習先との連携体制.....	- 40 -
6. 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）.....	- 40 -
7. 事前・事後における指導計画.....	- 41 -
8. 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画.....	- 41 -
9. 実習施設における指導者の配置計画.....	- 41 -
10. 成績評価体制及び単位認定方法.....	- 42 -
⑦企業実習（インターンシップを含む）や 海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画..	- 42 -
1. 実習先の確保.....	- 42 -
2. 実習先との連携体制.....	- 42 -
3. 成績評価体制及び単位認定方法.....	- 44 -
4. その他特記事項.....	- 45 -
⑧取得可能な資格.....	- 45 -
⑨入学者選抜の概要.....	- 46 -
1. 入学者受入れの方針.....	- 46 -
2. 入学者選抜.....	- 46 -
3. 外国人留学生の受入れ.....	- 47 -
⑩教員研究実施組織の編制の考え方及び特色.....	- 48 -
1. 教員配置.....	- 48 -
2. 教育上主要と認める授業科目への基幹教員の配置.....	- 49 -
3. 中心となる研究分野とその研究体制.....	- 49 -
4. 教員組織の年齢構成.....	- 50 -
⑪施設、設備等の整備計画.....	- 50 -
1. 校地、運動場の整備計画.....	- 50 -
2. 校舎等施設の整備計画.....	- 51 -
3. 図書等の資料及び図書館の整備計画.....	- 52 -
⑫管理運営.....	- 53 -
1. 教学面における管理運営の体制 （教授会の役割、構成員、開催頻度の予定、審議事項等）.....	- 53 -
2. 教授会以外の会議体の役割.....	- 54 -
⑬自己点検・評価.....	- 56 -
⑭情報の公表.....	- 57 -
1. 教育研究活動情報.....	- 57 -
2. 教育情報.....	- 57 -
3. 経営・財務情報.....	- 59 -
⑮教育内容等の改善のための組織的な研修等.....	- 59 -
1. 授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修 及び研究の実施に関する計画.....	- 59 -

2. 職員に必要な知識・技能の習得並びに必要な能力及び資質を向上させる研修等	- 60 -
⑩社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	- 62 -
1. 教育課程内の取組について.....	- 62 -
2. 教育課程外の取組について.....	- 62 -
3. 適切な体制の整備について.....	- 62 -

①設置の趣旨及び必要性

1. 立教大学環境学部を設置する必要性

1) 社会的背景：環境危機の深刻化と大学による環境教育・環境人材育成への期待

現代社会は深刻な環境危機の時代にあるといわれる。国連は、なかでも気候変動、生物多様性の損失、汚染を三大地球危機（Triple Planetary Crisis）と呼び、その複合的な悪化が地球と人類の今後を阻む可能性を警告している。自然資源を利用してきた人間社会の発展がついに地球の限界（プラネタリー・バウンダリー）を超えつつあることが指摘され、特に温室効果ガスの蓄積による「地球沸騰化」を早急にくい止めなければ、人間社会の存続が危ぶまれる状況となっている。

令和6（2024）年5月に閣議決定された日本の「第六次環境基本計画」は、三大地球危機にくわえ、人口減少と東京一極集中や、経済の長期停滞といった国内の問題も相まって、日本の環境、経済、社会が深刻な状況に陥っていることへの「強い『危機感』」を示しつつ、持続可能な社会としての「循環共生型社会」を実現すべく、これまでの経済社会システムの延長線上での対応にとどまらず、システムそのものを変革（Transformative Change）する必要性を論じている。特に令和2（2020）年に、日本全体としてカーボンニュートラルを2050年までに達成することが宣言され、令和5（2023）年7月に「脱炭素成長型経済構造移行推進戦略（GX推進戦略）」が閣議決定されたことを踏まえ、あらゆる分野で変革、移行を推進する施策が計画されている。そして、そうした変革の実現に向け、国と大学が連携し、環境人材育成の積極的な推進と環境研究・技術開発の体制整備に取り組む重要性が示されている。

このように、環境危機に対処し、従来のシステムそのものを変革するためには、環境に関わる科学的な知見、アプローチに従い、経済や社会システムへの深い理解を踏まえ、課題に対し創造的に取り組むことのできる人材が必要である。環境に関わる文系、理系双方の知識と視座を持ち、総合的な判断、行動をできる人材が、政府、地方公共団体、企業、市民団体といったあらゆるセクターで、今求められている。

また、同じく令和6（2024）年5月に閣議決定された「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」では、日本そして世界の深刻な環境危機を乗り越えるために、環境教育や環境保全のための協働取組を、個人の行動変容だけでなく、中長期的な社会システムの変革へとつなげていくことを前提に推進していく必要性が詳細に記されている。特に大学の役割として、環境課題に関する研究促進にくわえ、幼少中高を通じた学校教育や地域・民間団体等との対話と協働を通じた学びへの参画と促進、産官学民の様々な主体をつなぎながら環境を軸とした学生や地域住民、事業者等への教育機会の提供推進を通じ、社会変革の担い手を育成することへの期待が示されている。また、今後のわが国の最重要課題のひとつとして、若者の社会変革への参加の促進が挙げられ、

若者が環境問題について関心やアイデアを発信する機会や、実際の社会での活動に参画する機会を通じ、経験を通じて社会を変革する力を育んでいくことの重要性が強調されている。

こうした協働取組と若者の参画を通じた社会変革は、環境課題だけでなく、現代社会が直面するあらゆる課題の解決に向けて求められる。若者を含む様々な主体をつなぎ、その参画を得て、対話と協働を通じて課題解決に取り組んでいくことが、社会変革を生む原動力になる。つまり、対話の関係を築きながら協働取組を促し広げることのできる人材の育成が、今、広く求められている。例えば、気候変動問題に関していえば、現在の化石燃料依存型の社会システムをどのように評価し、どのようにリデザインするか、その移行過程で忘れてはならないことは何か、社会変革に向けた課題を考え、関係者との対話と協働を通じ、解決策を実践していくことが重要である。

また、その実践において、環境正義を重要な視点としてそなえ、ありとあらゆる人々の暮らしと健全な生態系が持続可能なものとなるよう取り組んでいかなければならない。環境危機やその対応の中で、特にシステムの変革を進める過程では、取り残されたり、しわ寄せを受けたりする人たちが生まれる。こうした人々の存在に注意を払い、格差を是正しながら公正な過程を通じ課題解決に取り組むことができる人、つまり環境正義の視点を持ちながら社会変革に取り組むことのできる人の育成が、今、急務となっている。

環境問題は科学的な調査、分析、シミュレーション等により明らかになり、データに基づいて対策が講じられる。環境問題やその対策が経済に及ぼす影響もデータに基づく分析が必要である。環境課題への取り組みには、様々なデータの解析、統計処理、GISやGPSといった情報技術が不可欠であり、データサイエンスや情報技術を十分に活用することも重要である。DX（デジタルトランスフォーメーション）とGXが同時進行で進むなか、環境負荷を低減しつつ人間性を尊重した新しい社会インフラを創造する力のある人材育成が急務となっている。

【参考資料 URL】

1) 第六次環境基本計画

https://www.env.go.jp/council/02policy/41124_00012.html

2) 脱炭素成長型経済構造移行推進戦略（GX推進戦略）

https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/gx_jikkou_kaigi/index.html

3) 環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01376.html

2) 日本の大学における環境教育・環境人材育成

このように、環境危機の時代を乗り越える新しい経済社会システムへの変革を担う力・人材の育成が強く期待される中、大学教育には、そうした社会的要請に応える新たな教育の創造が求められている。日本の大学における環境教育・人材育成の取組は、1970年代に理工系領域で「環境」を名称に含む学部・学科開設が広がり、1990年代に入って社会科学領域や学際領域でも「環境」系学部・学科開設が進んだ。2000年代に入ると、2005年から開始された「持続可能な開発のための教育の10年」とも連動しながら、文科省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」（公募テーマの一つに「持続可能な社会につながる環境教育の推進」を提示、採択30件）、環境省「アジア環境人材育成イニシアティブ推進事業」（採択11大学）、文科省「戦略的環境リーダー育成拠点形成事業」（採択17大学）等の施策により新たなプログラム開発とネットワーク構築が促され、2011年には大学・企業・行政・NPO等の連携プラットフォームとして「環境人材育成コンソーシアム」が発足した。現在、1970年代から1990年代にかけて広く設置された環境系学部・学科・研究科等の多くが各大学内の改組等を経て姿を変え、2000年代以降開発された環境人材育成プログラムやコンソーシアムは多くが取り組みを縮小、中断している。環境問題がグローバル化し、その解決へ向けた取り組みも高度化・複雑化するとともに、これまでの経済社会システムの延長線上に持続可能な未来はないことが広く認識されるいま、これまでとは異なる新たな教育の創造を、時限型プログラムではなく学部・学科の設置による大学の責任として真正面から取り組む必要がある。

一方、文科省は令和4年度第2次補正予算にもとづき「成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金による継続的支援（以下、大学・高専機能強化支援事業）」を実施してきた。脱炭素やデジタル化の進展といった世界の潮流にもとづく産業構造の抜本的変革を踏まえた教育・人材育成の「成長と分配の好循環」を実現するために、意欲ある大学等の「大胆な組織再編」が支援される施策であり、特に理工系教育の充実が期待されている。

3) 立教大学に環境学部を設置する必要性

このように、環境危機の時代を乗り越えるため、またグリーン・デジタルといった世界の潮流に合致する成長分野をけん引するため、大学教育が経済社会システム変革を担う力・人材を育成する新しい教育に本腰を据えて取り組むことが求められる状況を踏まえ、立教大学は「環境学部環境学科」を設置することを決意し、上述の「大学・高専機能強化支援事業」において令和5年度の選定を受けた。

本学は、建学から150年間、「Pro Deo et Patria ― 普遍的なる真理を探究し、私たちの世界、社会、隣人のために」をその精神として掲げ、キリスト教と「リベラルアーツ」に基づく教育を推進してきた。イギリス国教会にルーツを持つ聖公会を礎とし、設立当初から単に既存の職業に就く能力を育成するのではなく「人格の陶冶」を支えることを目指してきた本学のリベラルアーツ教育は、「学びの精神～なぜ学ぶのか」「学びの技法～どのように学ぶ

のか」を理学部、社会学部、経済学部、経営学部、法学部といった多様な専門領域を横断しながら考える全学共通科目にくわえ、サービスマーケティングなど実践的な学びを重視する複合的なカリキュラムとして進化し、「専門性に立つ教養人」を育ててきた。

また、2006 年度の経営学部開設とともに本学が他大学に先駆けて開発、蓄積してきたリーダーシップ教育は、「シェアド・リーダーシップ」の理念に基づき、「権限やカリスマ性が無くとも、チームをまとめ、活性化し、仲間の力を引き出すことができる『柔らかなリーダーシップ』」を育てることを掲げ、広く社会から評価されてきた。2013 年度からは、経営学部以外の学生も履修できる全学プログラムとして「グローバル・リーダーシップ・プログラム（立教GLP）」を展開し、連携企業が提示する課題に対し学生がチームで取り組む「リーダーシップ入門」など、現場・社会の実状と学修をつなげながら自身と仲間のリーダーシップを育む科目を開講し、学生からも大変高い人気を集めている。

さらに、立教大学は、「専門性に立つグローバル教養人」を育成することを目指すグローバル教育プログラムを全学的に展開している。「英語ディベート」の必修化や「専門領域を英語で学ぶ」ための段階的科目開講、「複言語・複文化主義」に基づく第二外国語教育の充実、中・長期海外留学プログラムにくわえ、グローバル教育センターが提供する海外ワークエクスぺリエンスや国連ユースボランティア、「国際協力人材育成」プログラムなどの実践科目を通じ、充実したグローバル教育を実施し、社会的に高い評価を得ている。

このように本学が他大学に先駆けて発展させてきたリベラルアーツ教育、リーダーシップ教育、グローバル教育の豊富な特色ある実績を土台としつつ、理学部、社会学部、経済学部、経営学部、法学部等を含む既存の 11 学部、理学研究科・社会科学研究科・社会デザイン研究科など 15 研究科、ESD 研究所や共生社会研究センターなどの研究機関の活動のなかで展開されてきた環境課題への取組も基盤とし、環境学部環境学科を開設する。「リベラルアーツとサイエンスを軸にした立教型環境リーダーの育成」を掲げ、環境問題の解決と持続可能な社会の実現に向けて、グローバルかつ分野横断的な対話と協働に基づき行動できる力を育てることを目指す。立教大学にとっては、理学部に次ぐ 2 番目の自然科学系領域を柱に含む学部の誕生となり、〈Global Liberal Arts & Sciences〉教育の学内モデルとして全学に共有する役割を率先して担うこととなる。

立教大学の環境学部では、文理の枠を超える多角的な視座と持続可能な世界への変革を担う実践力を育成することをコンセプトとし、実績を重ねてきたリベラルアーツ教育、リーダーシップ教育、グローバル教育を発展させた教育プログラムを編成する。国内外のフィールドでの学びを重視し、様々な専門家・関係者と対話し協働するための「つなぐ」リーダーシップを育て、「次代を担う新しい環境リーダー」の輩出を推進する。日本の首都、また世界有数の都市である東京を拠点とし、全国・世界から学生が集う大学として、環境省をはじめとする国の環境行政中枢機関や、都・区市町村自治体、都内を本拠地とする企業や NGO/NPO などと緊密に連携しつつ、全国・海外の地域社会とのネットワークを構築し、各地域が直面する環境課題にローカル且つグローバルな視野から取り組む協働のつながりのハ

ブとなることを目指す。

また、立教大学の環境学部は、「環境正義」の理念を前面に掲げ学部教育全体を通じ追求していくが、これも国内の大学にはまだほとんど見られない重要な特徴のひとつとなる。人々の暮らしやあらゆる生命に様々な悪影響を及ぼす気候変動や公害などの環境問題について、特に社会的、経済的に弱い立場におかれている人がより深刻な被害を受けやすいこと、また対策の実施に当たっても、取り残される人やしわ寄せを受ける人が出やすいことを認識し、公正な社会と環境の保全をともに実現することが必要だとする「環境正義」の考え方は、近年、国際社会でその重要性が盛んに論じられ、先述の「第六次環境基本計画」をはじめ日本の政策においても言及されるようになってきている。キリスト教理念にもとづき、世界の隣人を愛し、苦しむものへの共感性を育むことを是とする本学であるからこそ、この理念を基軸とし、すべての学生に、「環境正義」のために自身の専門性を活かすことへの意識を育み、さらに学外の環境課題に関わる人たちがこの理念を共有してともに働くネットワークを築くハブとなることを目指す。

2. 立教大学環境学部が養成する力・人材像

1) 環境学部の教育研究上の目的

本学部の教育研究上の目的を以下のとおりとし、これを学則に明記する。

環境学部は、自然環境と人間との関係を複合的な視点でとらえ、環境問題の解決と持続可能な社会への変革に貢献できる力の育成を目的とする。文理の枠を超えて幅広く知識を身につけ、現実の課題と結びつけながら活用できる能力と、環境正義の概念を理解し、自らの強みを活かしながら、対話と協働の関係を構築できるリーダーシップを養う。

2) 環境学部の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

本学部では「環境学」を教育研究の中心に位置付け、学士（環境学）の学位を授与する。学位授与の方針は以下のとおりである。

◆学修成果

「学士（環境学）」を授与される学生は、以下のような能力を有する。

1. 一つの立場、一つの考え方にとらわれず、様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえることができる。
2. 自分の強みを活かしながら、他者の強みを引き出し、課題解決に向けて「対話」と「協働」を導くリーダーシップを発揮できる。
3. 環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用することができる。

4. 環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を理解することができる。
 5. 環境学において自ら見出した専門性をもとに、環境問題の本質について考えることができる。
 6. 地球市民の一人として、グローバル・ローカルな環境課題の解決と持続可能な未来の実現に向けて、社会の変革に参画する意志を持つことができる。
- さらに全学共通科目により、
7. 言語Aの学修によって、聞く・話す・読む・書くという基本的技能にもとづいて、状況に応じて適切なコミュニケーションができる。さらに、英語圏の文化のみならず、英語を通して得た国際的な知見によって、多様な文化を理解し、対応できる。また、自分の専門領域の内容を英語で学ぶ基礎が身につく。また、NEXUSプログラムにより入学した学生については、言語Bと合わせて大学での学修に必要とされる高度な日本語運用能力を養うとともに、実社会のコミュニケーションに対応できる実践的な日本語力を身につける。
 8. 言語Bの学修によって、聞く・話す・読む・書くという基本的技能にもとづいて、日常生活における基本的なコミュニケーションができる。さらに、当該言語圏の文化のみならず、その言語を学ぶ過程で獲得した多元的な視点を通じて、異文化を理解し、対応できる。また、留学生については、大学での学修に必要とされる高度な日本語運用能力を養うとともに、実社会のコミュニケーションに対応できる実践的な日本語力を身につける。
 9. 学びの精神では、立教大学設立理念の一端に触れ、自ら主体的に学ぶ姿勢を身につけ、大学での講義科目受講の包括的スキルを体得する。
 10. 多彩な学びでは、学問的知見の多様性と豊饒性を理解し、他の諸学問の成果を交錯させることで、世界を複眼的に解読する柔軟な知性を涵養する。また、スポーツ実習では、心身の健康増進を目的とした科学的知識を理解し、スポーツの実践をとおした体力の維持・向上、運動習慣を醸成する。

◆学修環境

上記のような学修成果をもたらすために、以下のような学修環境を提供する。

1. 初年次当初より、オリエンテーション合宿や少人数授業などを通じ、学生と学生、学生と教員のつながりを基盤とした学びの共同体を形成する。
2. 在学期間を通して学生1名につき専任教員1名が担任(アカデミック・アドバイザー)として学修上のアドバイスを適宜与える。
3. 文理の枠を越える多様な専門分野の教員陣のチームワークによって、環境学を多角的、かつ系統的に学ぶことのできるカリキュラムを設定する。
4. 文系・理系の枠を越えて学生がともに学ぶために、高校での理系科目履修の差を埋

める充実した基礎教育を提供するとともに、すべての学生が1年次より環境科学の基礎を身につけることのできる科目を設定する。

5. 現実の環境課題に向き合いながら「対話」と「協働」を導く力を育む系統的なリーダーシッププログラムを提供する。
6. すべての学生が1年次より、実際にフィールドを訪れ、現場の実情を学び、様々な人々と出会う機会を得ることのできるカリキュラムを提供する。
7. すべての学生が、入学後に多様な分野に触れながら、自らの関心に応じて専門分野を定め、専門的指導を受けられるカリキュラムを提供する。
8. 学生と学生、学生と教員の間の分野を越えた学び合いにくわえて、地域や企業、市民社会組織の人々など、多様な人と交流し学び合う機会を提供する。
9. 学びの集大成として、調査研究と論文執筆に取り組む「卒業論文」か、環境課題の解決につながる活動に取り組む「卒業プロジェクト」のいずれかを選ぶことができ、それぞれについて適切な指導を受けられるカリキュラムを提供する。
10. 英語を用いて学ぶ科目を、講義・実習ともに設置する。
11. 海外でのフィールド実習や留学など、グローバルな学修の機会を提供する。
12. 学生の学修の進捗および達成度を測るために、国際標準のGPA制度を適正に運用する。

3) 環境学部の教育課程編成の方針（カリキュラム・ポリシー）

本学部の教育課程編成の方針は以下のとおりである。

◆教育課程の編成と特色

環境学部の教育課程は、学士課程における修業年限4年間を「導入期」「形成期」「完成期」の3期に区分し編成している。各期のねらいは以下のとおりである。

1. 導入期は、「リベラルアーツとしての環境学原論1」、「環境科学入門1」、「環境フィールドスタディ1」、「環境リーダーシップEL1（学びの技法含む）」、「学びの精神」、言語教育科目で構成し、形成期、完成期における学修の基礎を醸成する。なお、NEXUSプログラムでは、標準0.5年間〔1学期間〕の日本語集中履修期間に加え、言語Aおよび言語Bにおける日本語、ならびに平易な日本語を用いて実施する「学びの精神」の履修をとおして、学ぶための姿勢と基礎的な知識・技法を身につける。
2. 形成期は、「リベラルアーツとしての環境学原論2」「環境科学入門2」「環境リーダーシップEL2」にくわえて、基幹科目の履修を通じて基礎的な学修の完成を目指すとともに、発展科目、実践科目を履修することによって、自らの専門性を見出し、現場での実践力を養う。基幹科目は、環境に関する重要なトピックを文理にまたがる複

数の学問分野の視点から読み解く「A：環境総合」、人文社会科学系の基礎を身につける「B：人間と社会」、自然科学系の基礎を身につける「C：科学と技術」の科目群からバランスよく履修することによって、文理の枠を越えた視野・視点・視座を身につける。発展科目は、講義系科目に加え、自然科学系の実験・実習科目を含む、環境学を構成する多様な分野の中から選択し履修することによって、自らの専門性を見出し、深めていく。形成期の実践科目においては、様々な環境課題の現場で実践的な活動をおこなう。これらの学びを通して、環境正義の理念を理解し、幅広い知識を現実の課題と結びつけながら活用できる力を身につける。

3. 完成期は、引き続き、発展科目や実践科目の履修を通じて、学生の軸となる領域に関して専門的、個別的な内容を学習し、その専門性を磨いていくとともに、周辺領域の学問分野についても学びを拡げていく。卒業論文・プロジェクト関係科目の履修を通じ、4年間の学修の集大成として、学問的な研究を行い論文を執筆する「卒業論文」、または実際の課題解決につながる活動を自ら計画・実行する「卒業プロジェクト」のいずれかを選択して取り組む。また、「卒業コロキウム1・2」を履修し、自分の専門性を軸に、他の学生や教員との交流の中で、環境問題の本質を考え、持続可能な未来の実現に向けた社会変革に参画する意志を共有する。

◆環境学部のカリキュラムの構造（資料1）

◆教育課程の構成

環境学部の卒業要件単位は 124 単位であり、履修区分に応じて以下の科目群に分けられている。

1. 必修科目（20 単位）は、以下の科目区分で構成する。
 - ・言語教育科目（言語A） 6 単位
 - ・言語教育科目（言語B） 4 単位
 - ・リベラルアーツとしての環境学原論1・2 4 単位
 - ・環境科学入門1・2 4 単位
 - ・環境フィールドスタディ1 2 単位
2. 選択科目（88 単位）は、以下の科目区分で構成する。
 - ・学びの精神 4 単位
 - ・多彩な学び・スポーツ実習 14 単位
 - ・卒業論文・プロジェクト関係科目 18 単位
 - ・基幹科目 16 単位以上（A：環境総合4 単位以上、B：人間と社会6 単位以上、C：科学と技術6 単位以上）
 - ・発展科目 12 単位以上
 - ・実践科目（学びの技法含む） 6 単位以上

3. 自由科目は（16 単位）は、他学部・他学科科目、専門導入科目、専門関連科目、言語自由科目などから構成する。自由科目には、以下から 16 単位を修得することができる。

- ・ 必修科目・選択科目の卒業要件単位数を超えて修得した単位
- ・ 他学部・他学科科目
- ・ 専門導入科目・専門関連科目
- ・ 言語自由科目
- ・ 5 大学間単位互換制度による他大学科目

- 環境学部では、文理の枠を越え、複数の学問分野を融合的に学ぶことをめざし、多様な専門分野の講義科目を配置している。必修科目、基幹科目、発展科目を段階的に履修していくことで、幅広い視野と多角的な視座を身に付けながら、時間をかけて自らの専門性を見出し深めることができる。
- また、知識やスキルを現実の課題と結びつけながら活用できる力や、持続可能な未来に向けた対話と協働を導くリーダーシップを育むため、実践科目群を配置し、フィールドとつながる学びを重視している。くわえて、学問的研究だけでなく、課題解決の実践的な取り組みも支援するために、「卒業論文」か「卒業プロジェクト」を選択制としている。
- 専門導入科目として、数学、物理、化学、生物といった高校の理系科目の履修の差を埋める機会を提供し、大学での学修への円滑な移行を促す。
- 言語教育科目では、必修科目として言語A（英語）と言語B（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・日本語（留学生のみ）から1言語を選択）の2言語を課している。ただし、NEXUSプログラムでは言語Aと言語Bともに、日本語を課す。さらに学修を深め、新しい言語に挑戦するための言語自由科目（14言語）を開講している。少人数クラスでの「聞く・話す・読む・書く」の基本的技能の訓練を通じて、当該言語による専門的または日常的なコミュニケーションを可能にし、異文化対応能力を育成する。
- 学びの技法は、大学における学問を修めるうえで必要なスキルの向上を目的とする。学部の専門領域に即して、スチューデント・スキル及びスタディ・スキルの向上、情報リテラシーの理解、キャリアプランの形成等を、少人数の演習形式で実施する。
- 学びの精神は、大学で学ぶこと、また立教大学での学びの意味について理解する科目群である。宗教、人権、大学、また立教大学ならではの専門性をキーワードに据え、多様な主題を交えた科目を配置する。
- 多彩な学びは、広範な学問分野を俯瞰した、多彩な科目群である。人文学、社会科学、自然科学、スポーツ人間科学に依拠しながらもその枠を超えた、幅広い知識と

教養、総合的な判断力を養う科目を配置する。スポーツ実習は、スポーツの実践をとおり健康の維持向上を図る科目群である。運動技術の向上を目指すスポーツプログラム、実践に加えて歴史的、文化的背景を身につけるスポーツスタディを配置する。

◆「学部・学科の学修成果」と、科目群もしくは科目との関係

1. 一つの立場、一つの考え方にとらわれず、様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえることができる。（「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」「環境科学入門 1・2」、基幹科目 A（環境と総合）・B（人間と社会）・C（科学と技術）の科目群、「環境コロキウム 1・2」）
2. 自分の強みを活かしながら、他者の強みを引き出し、課題解決に向けて「対話」と「協働」を導くリーダーシップを発揮できる。（「環境リーダーシップ E L 1～E L 4」）
3. 環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用することができる。（「環境フィールドスタディ 1・2」「短期フィールドワーク A～C」「長期フィールドワーク A～E」「短期ワークエクスぺリエンス A・B」「長期ワークエクスぺリエンス A・B」「プロジェクト実習 A・B」「野外活動実習」など）
4. 環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を理解することができる。（「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」「環境倫理」ほか基幹科目 B（人間と社会）科目群、その他該当発展科目、実践科目）
5. 環境学において自ら見出した専門性をもとに、環境問題の本質について考えることができる。（発展科目群、卒業論文・プロジェクト関係科目群）
6. 地球市民の一人として、グローバル・ローカルな環境課題の解決と持続可能な未来の実現に向けて、社会の変革に参画する意志を持つことができる。（「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」「気候変動とカーボンニュートラル」ほか基幹科目 A（環境と総合）科目群、「社会変革の環境教育学・E S D 論」ほか基幹科目 B（人間と社会）科目群、「Natural and Social Sciences of Triple Planetary Crisis」ほか英語開講科目群、「短期ワークエクスぺリエンス A・B」「長期ワークエクスぺリエンス A・B」「プロジェクト実習 A・B」などの実践科目群、その他該当発展科目など）
7. 言語 A の学修によって、聞く・話す・読む・書くという基本的技能にもとづいて、状況に応じて適切なコミュニケーションができる。さらに、英語圏の文化のみならず、英語を通して得た国際的な知見によって、多様な文化を理解し、対応できる。また、自分の専門領域の内容を英語で学ぶ基礎が身につく。ただし、NEXUS プログラムでは、言語 A（日本語）の学修によって、大学での学修に必要とされる高度な日本語運用能力を養うとともに、実社会のコミュニケーションに対応できる実践的な日本

語力が身につく。

8. 言語Bの学修によって、聞く・話す・読む・書くという基本的技能にもとづいて、日常生活における基本的なコミュニケーションができる。さらに、当該言語圏の文化のみならず、その言語を学ぶ過程で獲得した多元的な視点を通じて、異文化を理解し、対応できる。また、留学生については、大学での学修に必要とされる高度な日本語運用能力を養うとともに、実社会のコミュニケーションに対応できる実践的な日本語力を身につける。
9. 学びの精神では、立教大学設立理念の一端に触れ、自ら主体的に学ぶ姿勢を身につけ、大学での講義科目受講の包括的スキルを体得する。
10. 多彩な学びでは、学問的知見の多様性と豊饒性を理解し、他の諸学問の成果を交錯させることで、世界を複眼的に解読する柔軟な知性を涵養する。また、スポーツ実習では、心身の健康増進を目的とした科学的知識を理解し、スポーツの実践をとおした体力の維持・向上、運動習慣を醸成する。

◆履修モデル（資料2）

4）入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

◆教育活動・教育内容

<環境学部教育概要>

環境学部の教育プログラムは、リベラルアーツ教育、環境リーダーシップ教育、フィールド教育を3つの柱とし、全体として「環境正義」の理念と社会変革への意志の共有を基盤におく。

- ・リベラルアーツ教育：文理の枠を越え、複数の学問分野を融合的に学ぶことをめざし、多様な専門分野の講義科目を配置する。必修科目、基幹科目、発展科目を段階的に履修していくことで、幅広い視野と多角的な視座を身に付けながら、時間をかけて自らの専門性を見出し深めることができる。
- ・環境リーダーシップ教育：現実の環境課題に向き合いながら「対話」と「協働」を導く力を育む系統的なリーダーシッププログラムを提供する。
- ・フィールド教育：すべての学生が1年次より、環境課題の現場を訪れ、様々な人々と出会う機会を得ながら、知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用する力を育むことのできるカリキュラムを提供する。
- ・環境正義：環境課題に関する「不公平」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を学び、持続可能な未来へ向けた社会変革の意志を共有する。

<指導体制>

- ・学業や大学生活について常時相談を受け付けるため、アカデミックアドバイザー（担任）制を導入する。
- ・初年次当初より、オリエンテーション合宿や、「フィールドスタディ1」「環境リーダーシップEL1・EL2」など20名程度の少人数で展開する授業科目を提供し、学生と学生、学生と教員の関係構築を促す。
- ・文理の枠を越える異分野の教員が共同で担当する授業を多く開講し、多角的視座からの教育を推進する。
- ・高校での理系科目履修の差を埋める導入教育を提供するとともに、すべての学生が1年次より環境科学の基礎を身につけることのできる科目を設定し、文理の枠を越えて学生がともに学ぶことのできる環境を用意する。
- ・優秀な上級生をスチューデント・アシスタント（SA）、大学院生をティーチング・アシスタント（TA）として配置し、一人ひとりの学生に指導が行き届くような環境を用意する。
- ・実験・実習のための多様な実験室および実験設備を用意する。
- ・基幹的な科目については主な教科書・参考書・演習書を図書館に導入し、学生が学びを広げ深めるための蔵書を充実させる。
- ・3年次の「専門演習1・2」、4年次の「卒業論文・卒業プロジェクト演習1・2」等を通して、各学生が調査研究と論文執筆に取り組む「卒業論文」か、環境課題の解決につながる活動に取り組む「卒業プロジェクト」のいずれかを選ぶことができ、それぞれについて適切な指導を受けられる体制を用意する。
- ・正課としての「ワークエクスペリエンス」などを通じてキャリア教育を積極的に展開する。
- ・指導力向上のための教員研修（FD）を実施し、指導力の向上に日々努める。
- ・海外の連携先等を訪れる実践科目や留学支援体制を用意し、グローバルな学修を促進する。

<指導法>

- ・多くの授業科目で、学生と学生、学生と教員の間の分野を越えた学び合いにくわえて、地域や企業など学外の実社会の人々など、多様な人との交流と学び合いを通じた「対話」と「協働」の力の育成と、「環境正義」の理念にもとづく社会変革の意志の共有を重視する。
- ・多くの授業科目において、筆記試験だけでなく、グループワーク、プレゼンテーション、レポートなど様々な要素を評価に取り入れる。
- ・学生自らが課題設定をして企画・実行する活動を重視する。特に環境課題の解決や持続可能な社会づくりへ貢献するアクションを、正課授業・課外活動の双方を通じ支援する。

◆入学者に求める知識・技能・態度・体験

環境学部教育の教育目的や教育活動に賛同し、以下のような知識・技能・態度・体験を有する学生を求める。

<知識>

高等学校で学ぶ内容にくわえて、社会の出来事にも幅広く関心を持ち、知識を蓄えておくこと。環境学部は文理融合の学部であり、文系・理系にとらわれず多様な分野に興味を持ち学んでいることが望ましい。高校の授業だけでなく、日頃から新聞などの様々な媒体でニュースに触れ、知識と思考を得ておくことが望まれる。

<技能>

授業を理解し、本を読み、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション等を行うために必要となる日本語の能力を有することが必要である。コンピュータの基本ソフトをある程度操作できることが望まれる。「英語」に関しては、読む、書く、話す、聞くといった能力を高等学校で十分に身につけておくことが必要である。

<態度>

環境問題をはじめ、現代社会のさまざまな問題に対する関心をもっていることが望まれる。また、さまざまな背景、価値観、経験を持つ他者を理解しようと努め、対等な関係性を構築し、協働的に活動できる素地があることが望まれる。また、環境学に関する興味・関心があり、学問的に探究し、持続可能な社会の実現に参画する志を有していることが必要である。

<体験>

日常生活において、環境問題を含むさまざまな問題に関心を持ち、それを理解しようと努力した経験をもつことが望まれる。さらに、そうした問題に対し、仲間と、または個人で、主体的に取り組んだ経験があるとより望ましい。また、高等学校における生徒会活動、クラブ活動、行事実行委員会活動、海外留学や、学校外の地域活動や社会的活動への主体的な取り組みの経験を持つことや、それら経験の意味を深く考え今後に生かそうとする姿勢も重要である。

◆入試種別の目的

<一般入試>

本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、環境学部での教育を志望する者に対して、高等学校における教科・科目の学習の達成度を測り、選抜することを目的とする。

<大学入学共通テスト利用入試>

本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、環境学部での教育を志望する者に対して、高等学校における教科・科目の学習の達成度を、大学入学共通テストを利用して測定し、選抜することを目的とする。

<自由選抜入試>

環境学部に関連した高い能力をもつ者、あるいは学業以外の諸活動の分野に秀でた個性をもつ者で、本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、そこで学びたいという熱意を提出書類及び面接等の内容により多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<アスリート選抜入試>

スポーツ競技の実績が優秀であるだけでなく、人格的にも優れ学業に対する高い意欲をもつ者を、競技実績や提出書類、小論文、面接等の内容により多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<外国人留学生入試（書類選考による募集制度）>

国際交流の一環として、交換留学制度とは別に、本学での教育を希望する外国人留学生を、提出書類および日本留学試験の成績等の内容により、多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<指定校推薦入学>

環境学部が自らの教育目的に基づいて、特色ある教育を行っている高等学校を指定したうえで、環境学部の教育目的を理解し、環境学部が定める一定の学力を有する者を高等学校長が推薦し環境学部が受け入れることを目的とする。

<関係校推薦入学>

日本聖公会に所属する高等学校を対象として、本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、キリスト教に基づく教育を継続して学びたいという意欲のある者を高等学校長が推薦し本学が受け入れることを目的とする。

<学校長推薦による入学（NEXUS）>

NEXUSプログラム日本語集中履修期間のカリキュラム内容ならびに2学期目以降に接続する環境学部カリキュラムにおける教育目的に基づいて、特色ある教育や言語教育を行っている外国の高等学校を指定したうえで、次世代に繋がるグローバルな協働共生について日本語コミュニケーションを通じ実践する姿勢を持ち、かつ環境学部の教育目的を理解し、本学が定める一定の学力を有する者を当該の高等学校長が推薦し、環境学部が受け入れることを目的とする。

◆入学前学習

REO（Rikkyo English Online）を利用した英語学習を課している。また、指定校推薦入学・関係校推薦入学・自由選抜入試合格者・アスリート選抜入試の合格者に対しては入学前に読んでおくべき推薦図書リストを送付している。

3. 組織として研究対象とする中心的な学問分野

立教大学環境学部が研究対象とする中心的な学問分野は「環境学」であるが、教育研究上の目的のなかで「自然環境と人間の関係を複合的な視点でとらえること」「文理の枠を越え

幅広く知識を得ること」を強調しているとおり、自然科学、人文社会科学の多様な領域を幅広く扱いながら、環境課題の解決や持続可能な社会への変革につながる実践的な環境学研究を展開していくこととする。具体的には、気候変動とカーボンニュートラル、生物多様性とネイチャーポジティブ、資源循環とサーキュラーエコノミー、環境汚染・公害、環境アセスメントと持続可能な開発といった現実の環境課題に対し、環境化学、生命科学、生物学、気候力学、環境史学、環境工学、環境デザイン学、環境地理学、環境政策学、環境経済学、環境法学、環境社会学、環境教育学、経営学の各領域を含む学際的研究チームを組織し、共同研究を推進する。

②学部・学科の特色

学校教育法第 83 条にあるとおり、大学の役割は、「広く知識を授けるとともに、知的、道徳的、及び応用的能力を展開させる」ことであり、「教育研究の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」ことである。本学部の教育プログラムの特色は、リベラルアーツ教育、リーダーシップ教育、フィールド教育の 3 つを教育の柱とする点である。環境正義の概念を理解し、持続可能な社会への変革のために行動できる、次代を担う「環境リーダー」の育成が本学部の教育目標であり、本学部が社会に対して果たす役割である。この特色、役割はまさに、上記の大学の役割を体現するものであると考えている。

OECD が令和元（2019）年に提示した「ラーニング・コンパス 2030」は、世界の教育改革の指針として知られ、そこに示された「変革を起こすコンピテンシー（Transformative competencies）」が現代社会における教育の柱として国内外で広く重視されている。「変革を起こすコンピテンシー」を構成する「①新たな価値を創造する力、②対立やジレンマを克服する力、③責任ある行動をとる力」は、環境危機を乗り越え持続可能な未来へ向けて社会経済システムを変革していくうえで欠かせない力であり、本学部の教育課程は、こうしたコンピテンシーの獲得を目指して編成するものとする。

中央教育審議会答申「2024 年に向けた高等教育のグランドデザイン」（平成 30 年 11 月）では、高等教育が目指すべき姿として『『何を教えたか』から、『何を学び、身に付けることができたのか』への転換が必要』であり、教育課程の編成においては「学修者自らが学んで身に付けたことを社会に対し説明し納得が得られる体系的な内容となるよう構成することが必要」とされている。上記のような、持続可能な社会への変革を担うコンピテンシーへの着目は、この指摘と合致するものである。

さらに、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成 17 年 1 月）の提言する「高等教育機関の個性・特色の明確化」においては、大学が 7 つの機能を併有するとして、その比重の置き方が個性・特色の表れとなるとしている。本学部が重点的に担おうとする機能は、そのうちの、「3. 幅広い職業人養成」、「4. 総合的教養教育」、及び「7. 社会貢献機能（地

域貢献、産学官連携等)」である。

これらのことを踏まえて、以下の5点が本学部教育内容の特色である。

第一にリベラルアーツ教育：「変革を起こすコンピテンシー」の一つとしてあげられている「①新たな価値を創造する力」を涵養するためには、多彩な視座に立ち、幅広い視野と多角的な視点を獲得することが重要である。そのために、「4. 総合的教養教育」の機能として、リベラルアーツ教育を教育の柱の一つに掲げ、文理の枠を越え、複数の学問分野を融合的に学ぶことをめざし、多様な専門分野の講義科目を配置する。また、多彩な教員陣によるチームティーチングによる、オムニバス形式やリレー形式、さらに教員同士や地域や企業、官公庁や市民団体等から招く多彩なゲストが対話形式で実施する授業を配置することで、学生は、それぞれの学問分野を関連づけながら、多様な視座からの考え方を身に付けることができる。本学部の教育課程は自由度の高さを特徴とし、様々な履修過程を経た異学年の学生が授業内外での活動を通して、異なる価値観をもつ学生同士、あるいは学生と教員、さらには現場で様々な立場・視座から環境課題に取り組む人々との交流ができるように設計されている点も特色となる。

第二にリーダーシップ教育：対話と協働を通じて、環境課題を取り巻く「②対立やジレンマを克服する力」を身に付ける教育プログラムとして、リーダーシップ教育を実施する。立教大学が経営学・組織論を基盤に独自に展開してきたリーダーシッププログラムを、本学部でさらに発展させ、環境課題の解決と持続可能な社会づくりに向けて一人一人がリーダーシップを発揮していく「シェアド・リーダーシップ」のスキルの獲得を目指す。一人のリーダーを置くという従来のリーダーシップ構造を脱し、環境課題を含む様々な状況の複雑さや不確実さを特徴とする「VUCA（Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧性））の時代」を生き抜くためのソフトなリーダーシップを育むことが特色である。企業やNPO、官公庁等からゲストを招き、現実の環境課題に向き合いながら、「リーダーシップは誰しもが発揮できるものであり、すべきもの」とし、「自らの強みを活かしたリーダーシップを発揮」するために、課題解決型授業を通して、ゲストから提示された課題に対して、学生自身がグループワークにより、解決案を創り出していく課程を体験する。その過程において、「視座を高める」ことを意識し、物事を客観的かつ広い視野で見ることを学び、より多角的な視点で物事を判断できる適切なリーダーシップの発揮を学ぶ。また、プログラムの後半ではリーダーシップの理論的な側面も学び、持続可能な社会づくりに不可欠な「対話」と「協働」を導く力を育む系統的な環境リーダーシッププログラムを提供する。こうした教育の提供により、様々なセクターの環境と持続可能な社会づくりに関わる分野において活躍できる「3. 幅広い職業人の育成」をめざす。

第三にフィールド教育：現代社会が直面する環境課題は様々な要因が複雑に絡み合っ

おり、その解決のためには時間軸を考慮に入れながら、深く、広く、構造的に物事を捉えて、その課題に最も効果的な解決策を見出し貢献していくための「③責任ある行動をとる力」が求められる。特に深さの視点を持つためには、環境問題の現場に存在する、個々の文脈に即した具体的な情報に触れることが必要である。そのような深さの視点の獲得を目的とし、1年次に現場を訪れる「フィールドスタディ1」を必修とし、環境課題に実際に取り組む人々と出会い、対話を通して課題に対する理解を深め、知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用する力を育むことを目指す。また2年次以降にも選択科目として、国内外の環境課題の現場で現地の人々とともに課題に取り組むフィールドワーク等の機会を豊富に提供する。これらの学びは、知識やスキルを現実の課題と結びつけて活用する力を育む本学部における教育の特色の一つであり、「3. 幅広い職業人の養成」「4. 総合的教養教育」に繋がるものである。

第四に社会変革へ向けた行動の重視：本学部の教育目標は、持続可能な社会への変革のために行動できる、次代を担う「環境リーダー」の育成であり、そうした行動への意志を共有する機会を教育課程の中で重視する。4年次に学びの集大成として、学術的な研究に取り組む「卒業論文」に代わり、環境課題解決に取り組む「卒業プロジェクト」を選択できることとし、「卒業プロジェクト」においては、教員のサポートのもと、学生自身が、環境課題の解決と社会の変革に向けたプロジェクトの立案、計画を行い、主体的に実践に取り組む。また、それに先立つ科目として、プロジェクト実習やワークエクスペリエンス等を展開し、現実社会において「③責任ある行動をとる力」を育む体系的な構成になっていることが特色である。こうした教育は「3. 幅広い職業人育成」に効果的なものであると同時に、「教育の成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」「7. 社会貢献機能(地域貢献・産学連携等)」の役割にもつながることが期待される。

第五に環境正義の理念の理解と共有：本学部の教育全体を通じて、環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を学び、共有する。この「環境正義」の理念は、上述の教育課程のすべての根底として、全教員が意識し共通して各授業の内容に反映させ、行動原理の根本として学生が学んでいくことを目標とする。キリスト教にもとづき、世界の隣人を愛し、苦しむものへの共感性を育むことを是とする本学であるからこそ、この理念を基軸とし、すべての学生に、「環境正義」のために自身の専門性を活かすことへの意識を育み、さらに本学部の教育を通じ、現場の環境課題に関わる人たちともこの理念を共有し、ともに働くネットワークを築くことを目指す。

以上のように、本学部の教育の特色を5点にわたりあげたが、いずれも教員が「何を教えたか」という教育から、学修者が「何を学び、身に付けることができたのか」を理解する教育への転換を図る学部全体としての取組であり、さらに学修成果を現実の社会につなげ、環

境正義にもとづく持続可能な社会への変革のために実践する教育へと昇華させるものと言える。

このような特色ある教育を展開するために、文理を越えて、様々な分野から多彩な教員陣を構成し、一学科に集約することにより、上記の機能を十分に発揮できるものと考えている。また、多分野にわたる教員が、教育・研究を通して交流し、他の学問分野の視点を取り入れることで、教員自身の資質の向上も期待される。

③学部・学科の名称及び学位の名称

1. 「環境学部」とする理由

本学部の教育理念は、環境危機に取り組む観点から、対話と協働の関係を構築できるリーダーシップを育むことであり、リベラルアーツ教育、リーダーシップ教育、フィールド教育を3つの柱とし、「環境正義」の理念と社会変革への意志を共有した、次代を担う「環境リーダー」の育成を目指すことにある。また、環境学の特定の分野に限った教育ではなく、文理の枠を超え、環境学に関する幅広い学問分野を融合的に学び、現代の環境問題にアプローチすることとしている。このような設置趣旨から、名称を環境学部環境学科とした。

2. 学位に付記する専攻分野の名称

本学部は「環境学科」という単一の学科で構成され、学科の名称の持つ意味は、前項での説明のとおりである。本学部では環境に関わる様々な学問領域からなる「環境学」を教育研究の中心に位置づけているため、学位に付記する専攻分野の名称も「環境学」とするのが適切である。

3. 英訳名称

環境学部環境学科の英訳名称は、日本語名称を直接的に反映させるとともに、国際的な通用性も踏まえ、以下のとおりとする。なお、学位名については文理融合の学部であることから、Bachelor of Arts & Sciences とする。

種類	日本語名称	英語名称
学部名	環境学部	College of Environmental Studies
学科名	環境学科	Department of Environmental Studies
学位名	学士（環境学）	Bachelor of Arts & Sciences

④教育課程の編成の考え方及び特色

1. 教育課程の編成・実施方針

本学部教育課程編成の方針は、前述の「①設置の趣旨及び必要性」にて記載したとおりである。

2. 科目区分の設定及び各科目区分の科目構成

1) 科目区分の設定及びその理由

本学では、全ての学部が、教育課程を「全学共通科目」と「専門科目」に大別することとしており、本学部においてもそれに倣う。「全学共通科目」は「言語系科目」と「総合系科目」で構成する。「専門科目」は、学年の進行に従って配置し、学修の基盤、学習の核そして問題意識の拡大のため、「専門必修科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「実践科目」、「卒業論文・プロジェクト関係科目」、「専門導入科目」及び「専門関連科目」に区分する。

2) 各科目区分の科目構成

【全学共通科目－言語系科目】

複数言語を学修し、多面的な視点を養うため、「言語A」（英語）と「言語B」（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・ロシア語・日本語（留学生のみ）から1言語を選択）の2つにさらに区分する。加えて、さらに学修を深め、新しい言語に挑戦するための言語自由科目（14言語）を開講している。

【全学共通科目－総合系科目】

専門領域の枠を超えた人間としての深い認識や価値観、総合的な判断力を養うため、「学びの精神」、「多彩な学び」及び「スポーツ実習」の3つにさらに区分する。

「学びの精神」は、大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解する科目群である。宗教、人権、大学といった本学らしい基本となるテーマを包含した科目を用意し、また、教員との対話、学生同士の協働作業をとおして講義の受け方を体得する。さらに、自ら調べ、自ら考えて発信する、大学での主体的な学びの姿勢を身につける。

「多彩な学び」は、専門分野の枠を超えた幅広い知識と教養、総合的な判断力を養うことを目的とし、今日的なテーマを扱う6つのカテゴリで構成する科目群である。

「スポーツ実習」は、健康維持・増進を目的として、実践と講義をとおして科学的知識、技能、またスポーツにまつわる文化的背景を学ぶ科目群である。実技を中心とした「スポーツプログラム」、理論の講義をしっかりと取り入れた「スポーツスタディ」により、心身に関してバランスのとれた知性と判断力を養う。

【専門科目－専門必修科目】

環境学部での学修を通じ、一つの立場、一つの考え方にとらわれず、文理の壁を越えた様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえ、「環境正義」の理念に立って、環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用し、社会の変革に参画する意志と力を育んでいくための素地を形成する科目群を、初年次生向け専門必修科目として設定する。科目構成は表のとおりである。

形態	配当学期	科目名称	概要
講義	1 年次 春	リベラルアーツとしての環境学原論 1	環境学の多様なアプローチとその関係性を春学期・秋学期の1年を通して学びながら、教員と学生のそれぞれが環境正義にもとづく環境問題の解決と持続可能な社会の実現に向けてどのような役割を担うのかをともに考える。
講義	1 年次 秋	リベラルアーツとしての環境学原論 2	
講義 ＋実験	1 年次 春	環境科学入門 1	地球環境に関する基本的な知識と現代の環境問題を理解するための自然科学的な基礎を学ぶ。1 では化学と生物学、2 では気候学、気象学、地学とデータサイエンスを扱い、各分野の講義・実習をそれぞれの専門性を持つ教員がオムニバス形式で担当する。
講義 ＋実験	1 年次 秋	環境科学入門 2	
実習	1 年次 通年	環境フィールドスタディ 1	実際の地域課題や現地の自然環境を題材として、様々な学問分野の知識や視点がどのように関連しているかを学ぶ。文理をまたぐ複数の教員が同行し、それぞれの視座から、環境正義にもとづく持続可能な地域づくりを議論、指導しながら、現場の多様な人・組織との対話・協働を体験的に学ぶ。

【専門科目－基幹科目】

環境学部における専門的な学修の基礎を構築する基幹科目を、初年次より選択し履修する。環境に関わる重要なトピックについて、文理を横断する多様な専門性を持つ教員陣が異なる視点・視座にもとづく対話を通じ多角的に取り上げる科目群「A：環境総合」、人文・社会科学系の基礎を学ぶ科目群「B：人間と社会」、自然科学系の基礎を学ぶ科目群「C：科学と技術」を設定する。Aより4単位以上、BとCよりそれぞれ6単位以上の履修を求め、すべての学生が文理をまたぐ多角的な視座、異なる専門性をつなぐ意識を獲得する機会とする。

区分	科目名称
A：環境総合 文理を横断する多様な専門性を持つ教員陣が異なる視点・視座にもとづく対話を通じ多角的に環境課題を論じる	気候変動とカーボンニュートラル
	生物多様性とネイチャーポジティブ
	環境汚染・公害とわたしたちの社会
	資源循環とサーキュラーエコノミー
	環境アセスメントと持続可能な開発
	環境データサイエンス
B：人間と社会 人文・社会科学系の基礎を学ぶ	自然環境と人間社会
	環境倫理
	環境教育・ESDとシティズンシップ
	環境法入門
	環境政策・経済学入門
	環境学のための社会調査法入門
	Environmental Issues in Japan and the World
C：科学と技術 自然科学系の基礎を学ぶ	環境統計学基礎
	環境物理学基礎
	環境化学基礎
	環境生物学基礎
	環境地学基礎
	環境デザイン・マネジメント
	Natural Science of Triple Planetary Crisis

【専門科目－発展科目】

発展科目は、環境学を構成する自然科学領域、人文・社会科学領域、環境総合領域の多様な分野から構成される科目群である。自然科学領域においては、化学、生物・生態学、気候・気象学、環境史学を柱として、講義と実験・実習科目を設置する。人文・社会科学領域においては、法学、政策学、経済学、社会学、教育学を柱として、文学やアート、環境課題解決に不可欠な対話と協働を実現するための心理学、ファシリテーションやコーディネーションといった実践的な知識・技能も取り上げる。環境総合領域においては、文理の枠を越えて環境課題をとらえるための科目を設置する。

【専門科目－実践科目】

実践科目は、持続可能な未来に向けた対話と協働を導く「環境リーダーシップEL1～4」、環境課題の現場で実践的な活動を行う「フィールドスタディ2」「短期フィールドワークA～C」「長期フィールドワークA～E」、社会変革へ向け行動する力と意志を育む「短期・

長期ワークエクスペリエンス A・B」「プロジェクト実習 A・B」、環境と人間をつなぐ「インタープリテーション実習」「Environmental Interpretation in English」「野外活動実習」から構成される。

【専門科目－卒業論文・プロジェクト関係科目】

卒業論文・プロジェクト関係科目は、学問的な研究を行い論文を執筆する「卒業論文」、または実際の課題解決を自ら計画・実行する「卒業プロジェクト」が用意され、これらのいずれかを選択して履修する。加えて「卒業論文・プロジェクト演習 1・2」とそれに先立つ「専門演習 1・2」により、論文の執筆指導、プロジェクトの立案、実行に関する指導、そのための専門知識の獲得や議論を行う。学生同士、学生と教員が分野の垣根を越えて交流し環境学の全体像を描くことを目的とする「環境コロキウム 1・2」を開講する。

【専門科目－専門導入科目】

専門導入科目は、高校の理系科目の履修の差を埋める科目として展開し、数学、物理、化学、生物の内容を取り上げ、大学での学修への円滑な移行を目的とする。

【専門科目－専門関連科目】

専門関連科目は、教育職員免許状取得のための要件となる教科及び教科の指導法に関する科目を展開している。

3. 設置の趣旨と授業科目の対応関係

これまで記載した設置の趣旨及びそれに基づく学生に修得させる能力と授業科目の対応関係は表のとおりである。

学生に修得させる能力	対応する主な授業科目・科目群等
1. 一つの立場、一つの考え方にとらわれず、様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえることができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」「環境科学入門 1・2」、基幹科目 A（環境と総合）・B（人間と社会）・C（科学と技術）の科目群、「環境コロキウム 1・2」
2. 自分の強みを活かしながら、他者の強みを引き出し、課題解決に向けて「対話」と「協働」を導くリーダーシップを発揮できる。	「環境リーダーシップ E L 1～E L 4」など
3. 環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用することができる。	「環境フィールドスタディ 1・2」「短期フィールドワーク A～C」「長期フィールドワーク A～E」「短期ワークエクスペリエンス

	A・B」「長期ワークエクスぺリエンスA・B」「プロジェクト実習A・B」「野外活動実習」など
4. 環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を理解することができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論1・2」、「環境倫理」ほか基幹科目B（人間と社会）科目群、その他該当発展科目、実践科目
5. 環境学において自ら見出した専門性をもとに、環境問題の本質について考えることができる。	発展科目群、卒業論文・プロジェクト関係科目群
6. 地球市民の一人として、グローバル・ローカルな環境課題の解決と持続可能な未来の実現に向けて、社会の変革に参画する意志を持つことができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論1・2」、「気候変動とカーボンニュートラル」ほか基幹科目A（環境と総合）科目群、「社会変革の環境教育学・ESD論」ほか基幹科目B（人間と社会）科目群、「Natural Science of Triple Planetary Crisis」ほか英語開講科目群、「短期ワークエクスぺリエンスA・B」「長期ワークエクスぺリエンスA・B」「プロジェクト実習A・B」などの実践科目群、その他該当発展科目など

4. 必修科目・選択科目・自由科目の構成

1) 必修科目及び選択必修科目

【全学共通科目】

言語系科目（10 単位必修）は、異なる文化背景をもつ多様な人々とコミュニケーションをとるための言語運用能力と、異文化理解力の習得を目指すものである。英語はレベル別に編成されたクラスで、自分の実力に合わせて「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能をバランスよく学修する（6 単位必修）。また、英語以外に複数の言語から選択できる初習言語の履修が必要である（4 単位必修）。

【専門科目】

専門必修科目の名称と、必修とする理由は下表のとおりである。すべての学生が、①～⑤の5科目を履修し、計10単位を修得することとする。

	科目名称	配当 年次	単位 数	必修科目とする理由
①	リベラルアーツとしての環境学原論 1	1	2	環境学を構成する多様な分野とその視点・視座と、それらからみた環境正義にもとづく持続可能な社会づくりのあり方に触れ、環境学部における文理融合の学修の基盤を得るため。
②	リベラルアーツとしての環境学原論 2	1	2	
③	環境科学入門 1	1	2	高校・入試での文理選択に関わらず、環境を理解するうえで不可欠な自然科学の基礎的知識・スキルや視点・視座を獲得するため。
④	環境科学入門 2	1	2	
⑤	環境フィールドスタディ 1	1	2	環境課題を解決するために不可欠な現場の理解と、多様な人・組織との対話・協働について、経験を通じて考えるため。

2) 選択科目

※本学で「自由科目」と呼称している科目は卒業要件に参入可能な科目である。

【全学共通科目】

現代のグローバル社会では、英語をツールとして使いこなしながら、多様な人々と協働し、さまざまなフィールドで課題を解決していくことができる力が求められる。

そのため、単に「英語を話す」だけでなく、「英語でロジカルに考える力」や「専門領域について英語で議論できる力」など、一歩進んだ英語運用能力が必要になることから、言語系科目として、令和2（2020）年度から新たな英語カリキュラムを開始している。また、初修言語については、より高いレベルの言語運用能力の修得を目指して、4年間をとおして継続的に言語科目を履修できるよう、標準的なコミュニケーションから、海外で必要とされる高度な語学力まで、目的に合わせた学習が可能な科目を用意している。

総合系科目は、現実にかたちを変えながら日々生起する問題を発見し、解決策を見出すため、自らの専門分野を深く追究するだけでなく、それぞれの分野で得た知識を具体的なテーマに則して自分の力で整理し、再構成してゆく、自ら主体的に考える力を育成するものである。「学びの精神」、「多彩な学び」及び「スポーツ実習」の3区分のうち、「学びの精神」の科目群から2科目（4単位）、残り2つの科目群から7科目（14単位）を選択し、計18単位を修得する必要がある。

【専門科目】

基幹科目として20科目、発展科目として50科目、実践科目として22科目、卒業論文・プロジェクト関連科目として9科目、専門導入科目として5科目及び専門関連科目として3科目を開講する。

上記のとおり、基幹科目・発展科目として文・理・複合の3領域に即した授業科目と、そ

れらを通じて得る知識やスキルを現場の課題や状況につなげる実践科目を配置し、基幹科目から 14 単位以上、発展科目から 12 単位以上、実践科目から 6 単位以上、さらにこれら三区分から合わせて 52 単位以上を修得する必要がある。なお、実践科目の「環境リーダーシップ E L 1」「環境リーダーシップ E L 2」については、上述の必修科目に準じた 1 年次全員履修科目として、環境学部環境学科における学修の基礎を醸成する。

また、卒業論文・プロジェクト関係科目から 18 単位を修得する必要がある。「専門演習 1・2」「卒業論文・プロジェクト演習 1・2」（各 2 単位、計 8 単位）にくわえ、「卒業論文」「卒業プロジェクト」のいずれか一方（8 単位）、「環境コロキウム 1」または「留学レポートセミナー（4 年次春学期に大学間連携または学部主催の留学プログラムに参加し「環境コロキウム 1」を履修できない学生対象）」、「環境コロキウム 2」（各 1 単位、計 2 単位）を選択し履修する。

専門導入科目及び専門関連科目については「自由科目」に算入される。「自由科目」として 16 単位以上の科目を選択し、単位を修得する必要があるが、これには、卒業要件単位を超えて修得した全学共通科目、専門科目等を含めることができることとする。

3) 自由科目

※本学では卒業要件に参入しない科目を「随意科目」と呼称している。

教職課程に係る「各教科の指導法」（理科教育法 1、社会・公民科教育法 1）等を随意科目とし、卒業要件に参入しない。

5. 配当年次の考え方

本学では、標準修業年限の 4 年間を「導入期」、「形成期」及び「完成期」の 3 つに分け、それぞれの学修段階にあわせた科目を履修することとしている。特に、全学共通科目（総合系）では「学びの精神」及び「スポーツ実習」は 1 年次春学期から履修が可能であるが、6 つのカテゴリからなる「多彩な学び」については、「学びの精神」の履修により、大学における基礎的な学修方法を修得したことを前提に履修させるため、1 年次秋学期からの履修（1 年次春学期は履修不可）としている。

専門科目の配当年次の考え方については以下のとおりである。

【1 年次】

専門必修科目の 5 科目に加え、学部における学修の基盤となる「環境リーダーシップ E L 1・E L 2」（実践科目）および基幹科目を履修する（専門必修科目・基幹科目については、上記（「2. 科目区分の設定及び各科目区分の科目構成（各科目区分の科目構成）」表を参照）。

「環境リーダーシップ E L 1・E L 2」では、環境学部の専門科目への円滑な導入の基礎として、少人数のグループワークを通じ、自分なりのリーダーシップの発揮と他者のリーダ

ーシップの開発を体感し、環境学部で自律的に学修していくために必要となるリーダーシップ、チーム・ビルディング、コミュニケーションといった、持続可能な社会づくりに向けた対話と協働に関わる基礎的なスキルを学ぶ。

基幹科目では、環境に関わる重要なトピックについて、文理を横断する多様な専門性を持つ教員陣が異なる視点・視座にもとづく対話を通じ多角的に取り上げる科目群「A：環境総合」、人文・社会科学系の基礎を学ぶ科目群「B：人間と社会」、自然科学系の基礎を学ぶ科目群「C：科学と技術」を設定し、学生が文理をまたぐ多角的な視座、異なる専門性をつなぐ意識を獲得し、専門的な学修の基礎を構築する機会とする。

また高校時に理系教科（数学・物理学・化学・生物学）を未学習であった学生を対象とした大学レベルの理系科目学習に繋げる「導入科目」も履修可能とする。

【2年次】

1年次から継続して基幹科目を選択し履修しつつ、発展科目や、「環境リーダーシップEL1・2」に続く他の実践科目の履修を開始する。

基幹科目によって、引き続き、文理をまたぐ多角的な視座と異なる専門性をつなぐ意識を育みつつ、自身の関心に沿った発展科目を、自然科学領域、人文・社会科学領域、環境総合領域から自由に選択して履修することによって、3年次以降の専門演習において学びを深めたい専門分野やテーマを絞り込んでいく。

実践科目では、現場での実践的活動を通じて、1年次から履修してきた科目で得た知識やスキルが現実の環境課題とどのように結びつくのか、体験を通じて学んでいく。

【3年次】

継続して発展科目や実践科目を履修しながら、卒業論文・プロジェクト関係科目として「専門演習1・2」を履修し、1年次・2年次での学修を通じて明らかにしてきた自身の関心に沿って、4年次で卒業論文または卒業プロジェクトに取り組むために必要となる専門分野の知識や視点、思考法や研究方法を身に着ける。また、様々な分野の発展科目や実践科目を通じて、ひとつの専門分野にもとづく視点・視座にとらわれない視野を広げ、複数の専門分野における知識やスキルを深めていく。

【4年次】

4年間の学びの集大成として、卒業要件となっている卒業論文・プロジェクト関係科目を主に履修する。自身の関心や卒業後のビジョンにあわせて、「卒業論文」または「卒業プロジェクト」のいずれかを選択して、取り組む。

「卒業論文」では、自身の興味関心に沿って研究課題を定め、指導教員のもと、学問的な研究に取り組み、論文を執筆する。「卒業プロジェクト」では、自身の興味関心にもとづき、指導教員のもと、実際の環境課題解決を指向したプロジェクトを計画、実行し、最終報告書

にまとめる。いずれも、その過程において自身の研究・実践の進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身の研究・プロジェクトを批判的思考に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加の研究・実践を計画、実施する。あわせて、「環境コロキウム１・２」を全員が履修し、それぞれの研究や実践を他領域の学生とも共有しながら、文理融合の環境学におけるそれぞれの関係性と自身の立ち位置を確認し、環境学の全体像を描く。

6. 科目の設定単位数の考え方

大学設置基準に基づき、各授業科目の単位数は、１単位の授業科目を４５時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。
(1)講義及び演習については、１５時間から３０時間の授業をもって１単位とする。(2)輪講、実験、実習及び実技については、３０時間から４５時間の授業をもって１単位とする。これを踏まえ、本学では１科目１００分授業を１４回行っているため、１科目あたり２単位としている。なお、卒業論文・プロジェクト演習科目については、大学設置基準第２１条第３項の規定に基づき、授業科目の履修に加え、卒業論文または卒業プロジェクトに必要な学修等を考慮して、単位数を設定する。

7. 教育課程の編成・実施方針と学位授与の方針との関連

本学部の教育課程編成の方針は、「教育課程の編成と特色」、「カリキュラムの構造」、「教育課程の構成」及び「学部・学科の学修成果」と、科目群もしくは科目との関係」に区分している。このうち「学部・学科の学修成果」と、科目群もしくは科目との関係」の「学部・学科の学修成果」は、学位授与の方針における「学修成果」と同様の表現を使用しており、下表（再掲）のとおり学位授与の方針で掲げる学修成果と授業科目の対応関係を示している。

学生に修得させる能力	対応する主な授業科目・科目群等
１．一つの立場、一つの考え方にとらわれず、様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえることができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論１・２」「環境科学入門１・２」、基幹科目Ａ（環境と総合）・Ｂ（人間と社会）・Ｃ（科学と技術）の科目群、「環境コロキウム１・２」
２．自分の強みを活かしながら、他者の強みを引き出し、課題解決に向けて「対話」と「協働」を導くリーダーシップを発揮できる。	「環境リーダーシップＥＬ１～ＥＬ４」など
３．環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用することがで	「環境フィールドスタディ１・２」「短期フィールドワークＡ～Ｃ」「長期フィールドワ

きる。	ーク A～E」「短期ワークエクスぺリエンス A・B」「長期ワークエクスぺリエンス A・B」「プロジェクト実習 A・B」「野外活動実習」など
4. 環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を理解することができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」、「環境倫理」ほか基幹科目 B（人間と社会）科目群、その他該当発展科目、実践科目
5. 環境学において自ら見出した専門性をもとに、環境問題の本質について考えることができる。	発展科目群、卒業論文・プロジェクト関係科目群
6. 地球市民の一人として、グローバル・ローカルな環境課題の解決と持続可能な未来の実現に向けて、社会の変革に参画する意志を持つことができる。	「リベラルアーツとしての環境学原論 1・2」、「気候変動とカーボンニュートラル」ほか基幹科目 A（環境と総合）科目群、「社会変革の環境教育学・ESD 論」ほか基幹科目 B（人間と社会）科目群、「Natural Science of Triple Planetary Crisis」ほか英語開講科目群、「短期ワークエクスぺリエンス A・B」「長期ワークエクスぺリエンス A・B」「プロジェクト実習 A・B」などの実践科目群、その他該当発展科目など

8. 教養教育の実施方法

これまで記載してきた全学共通科目がこれに該当する。詳細は「②学部・学科の特色」、「④教育課程の編成の考え方及び特色」の「2. 科目区分の設定及び各科目区分の科目構成」及び「⑤教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件」の「3. 卒業要件」に記載のとおりである。また、全学共通科目は、各学部ではなく全学共通カリキュラム運営センターが運営しており、各授業科目を担当する教員は、予め定められた基準に基づいて各学部から選出される専任教員と兼任教員とで構成している。

9. 主要授業科目について

本学における主要授業科目についての方針は以下の通りである。

- (1)「主要授業科目」は個々の科目単位ではなく、卒業要件単位表で示す「科目区分」ごとに設定する。
- (2)各学部の学位授与の方針、並びに学修成果との関連を踏まえ、主要授業科目への適否を科目区分ごとに設定する。

- (3)「必修科目」に含まれる科目区分は、必ず主要授業科目とする。
- (4)「選択科目」に含まれる学科・専修におけるカリキュラム構成や科目区分の編成の関連を踏まえて主要授業科目とする
- (5)「自由科目」※については、主要授業科目とはしない。

※本学では卒業要件に参入しない科目を「随意科目」と呼称している。

1) 全学共通科目

全学共通科目における「主要授業科目」は、全学で定めた方針に基づいて、以下の通りとしている。

	科目区分	主要授業科目
必修科目	言語A	○
	言語B	○
選択科目	学びの精神	○
	多彩な学び	○
	スポーツ実習	○
自由科目	言語自由科目	—

2) 専門科目

本学部における主要授業科目は、以下の考え方に基づいて設定している。

- (1) 本学部は、リベラルアーツにもとづく文理融合を教育理念の軸におき、自然科学系、人文社会科学系、総合系の科目群の中から、複数の学問分野を融合的に学修できるよう、「専門必修科目」「基幹科目」「発展科目」を構成する。学生は、高校や入試での文理選択に関わらず、文理をまたぐ多様な分野の視点・視座に触れながら自身の専門性を見出し、深めていく。また総合系科目群における多様な専門性を持つ教員によるチームティーチングを通じ、環境正義にもとづく対話と協働のあり方を学ぶ。
- (2) 初年次から最終年次まで、環境課題の現場と学修をつなぐ機会を得られるよう、多様な「実践科目」を設定する。初年次必修科目の「環境フィールドスタディ1」、初年次生全員の履修が推奨される「環境リーダーシップEL1・2」での導入に続き、2年次以降、国内外の環境課題の現場により深く関わる機会を、フィールドワーク、ワークエクスペリエンス、プロジェクト実習など様々なかたちで提供する。
- (3) 4年間の学修の集大成として、学問的な研究を行う卒業論文、または実際の課題解決を自ら計画・実行する卒業プロジェクトのいずれかを選択して取り組むこととし、それに向けた準備も含め、3年次から「卒業論文・プロジェクト関連科目」を設定する。

以上の3つの考え方により、本学部の主要授業科目については「専門必修科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「実践科目」、「卒業論文・卒業プロジェクト関係科目」の5つの科目区分としている。

10. 授業期間について

本学の授業は1年を2学期に分けて行ない、それぞれを春学期、秋学期と呼ぶ。さらに各学期を前半と後半に分けた四半期（春学期1、春学期2、秋学期1、秋学期2）があり、授業には以下の種類がある。

・通年科目	
通年開講科目	春学期・秋学期通して行われるもの
通年他科目	学部・学科で期間を定めて行われるもの
・春学期科目	
春学期開講科目	春学期で完結するもの
春学期1 開講科目	春学期前半で完結するもの
春学期2 開講科目	春学期後半で完結するもの
春学期他科目	春学期に学部・学科で期間を定めて行われるもの
春学期期間外科目	春学期期間外に学部・学科で期間を定めて行われるもの（履修登録時期が通常より遅れる科目）
・秋学期科目	
秋学期開講科目	秋学期で完結するもの
秋学期1 開講科目	秋学期前半で完結するもの
秋学期2 開講科目	秋学期後半で完結するもの
秋学期他科目	秋学期に学部・学科で期間を定めて行われるもの
秋学期期間外科目	秋学期期間外に学部・学科で期間を定めて行われるもの（履修登録時期が通常より遅れる科目）

上記の通り、多様な授業期間を設けており、海外に留学する在学生や海外からの交換留学生など、イレギュラーな履修登録を行う学生も含めて十分に科目提供を行う体制となっている。

⑤教育方法、履修指導方法及び卒業要件

1. 授業の方法、学生数

1) 全学共通科目

言語系科目は、「言語A」については、入学試験時に提出される各種英語検定試験のスコア等に基づき、各人の英語能力に応じて10名程度のクラスに編成する。他の言語系科目は、履修者数が一定の範囲に留まるものと想定されるため、クラスサイズの上限は設けない。

総合系科目は、「学びの精神」、「多彩な学び」、「スポーツ実習」の3つの科目群で構成されている。「学びの精神」は大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解する科目群であり、教員との対話、学生同士の協働作業を通して講義の受け方を体得し、自ら調べて考えて発信する大学での主体的な学びの姿勢を身につけるため、クラスサイズは80名程度、上限を200名とする。「多彩な学び」は、専門分野の枠を超えた幅広い知識と教養、総合的な判断力を養うことを目的とした科目群であり、リベラルアーツ教育の主軸となるさまざまな主題に基づく、かつ今日的なテーマを扱う6つのカテゴリで構成されており、クラスサイズは160名程度、上限を300名とする。「スポーツ実習」は健康維持・増進を目的として、実践と講義を通して科学的知識、技能、またスポーツに纏わる文化的背景を学ぶ科目群であり、実技を中心とした「スポーツプログラム」と理論の講義をしっかりと取り入れた「スポーツスタディ」により構成されており、クラスサイズは施設の広さと安全面を配慮し20名～40名程度とする。

2) 専門科目

教育課程編成の方針に基づき、授業形式については、講義科目、演習科目、実験・実習科目を適切に組み合わせるとともに、授業形式や授業内容に応じたクラスサイズを設定しつつ、学年進行にともない、基礎から応用・発展へと体系的、段階的に学修できるよう配当年次を設定する。

講義科目においては、「何を教えたか」から「何を学び、身に付けることができたのか」への転換を図るため、一方通行の講義形式にとどまらず、アクティブラーニング形式の授業スタイルを積極的に取り入れる。本学部の入学定員は204人であることから、講義科目は、必修科目の合同で行う授業を除き、クラスサイズの上限を100人程度とする。大幅に上限を超えるような場合は、クラス増で対応するほか、SA・TA（スチューデント・アシスタント、ティーチング・アシスタント）制度を設け、担当教員の申請によりSA・TAを活用することとする。

演習科目の授業の方法、及びクラスサイズは次に示すとおりである。1年次開講の実践科目「環境フィールドスタディ1」は、1年次必修の科目であり、204人の学生を9つのグループに分け、それぞれのグループが事前事後学習を伴い、各環境課題の現場へと教員引率の

もと訪れる方法とする。同じく1年次開講の実践科目「環境リーダーシップEL1・EL2」は、少人数グループでのグループ活動を行う授業方法とする。1学年を9クラス編成として、共通の課題を各クラスで取り扱い、そのクラスサイズを20～25名程度とする。その他の演習科目についても同様に、グループ活動や野外活動を行うため、クラスサイズを20～25名程度とする。3年次開講の卒業論文・卒業プロジェクト関係科目である「専門演習1・2」についても、個別の指導を行う必要から、18クラス編成として、クラスサイズを10名程度とする。なお、「環境化学実習」、「環境生命実習」は、実験授業となるため、安全面と効果面を考慮し、履修者が増えすぎないように、クラスサイズを上限30名程度とする。

実習科目である「インタープリテーション実習」や「野外活動実習」は野外活動を行うため、クラスサイズを20～25名程度とする。国内外の実習地で、引率教員の指導のもと、具体的な環境課題に対する実践に取り組む「短期フィールドワークB・C」「長期フィールドワークB～E」は、それぞれ15名程度のクラスサイズとする。「短期フィールドワークA」「長期フィールドワークA」は、学生が自ら手配する実習先で個別に実施するため、特に人数制限は設けない。これら「フィールドワーク」や「ワークエクスペリエンス」などについては、学内における事前・事後指導と実習先における実習を組み合わせることにより、学びを深める。また、学内外で具体的な環境課題の解決へ向けた取り組みを経験する「プロジェクト実習A・B」は、20～25名程度のクラスサイズとする。その他各種の実習科目にはクラスサイズの上限は設けないが、担当教員が指導可能な範囲で実習を実施するものとする。

2. 配当年次の設定

「④教育課程の編成の考え方及び特色」の「5. 配当年次の考え方」に記載のとおりである。

3. 卒業要件

本学部の卒業要件（「教育課程等の概要」に記載）は以下のとおりである。

環境学科は、全学共通科目28単位、専門教育科目については必修科目を10単位、選択科目のうち基幹科目を16単位以上、発展科目12単位以上、実践科目6単位以上併せて52単位、卒業論文・プロジェクト関係科目を18単位、自由科目を16単位以上、合計124単位以上を修得しなければならない。自由科目には、指定単位数を超えて修得した選択科目の単位を算入することができる。また、専門導入科目、専門関連科目、他学部科目、言語自由科目（全学共通）、並びに5大学間単位互換制度による他大学の科目の単位を算入することができる。

上記を踏まえた科目区分ごとの考え方は以下のとおりである。

1) 全学共通科目（※28単位）

全ての学部で共通である。言語系科目は、言語A（英語）6単位及び言語B（初修言語）

4単位を卒業要件単位としている。2つの言語の履修を卒業要件としているのは、国際的なコミュニケーションが日常的に行われるようになった現在の世界で必要不可欠な言語である英語の力を磨くとともに、英語以外のもう1つの言語を学び、英語圏以外の国・地域の人々が築き上げてきた社会や文化、ものの考え方などに言語を通して触れ、世界が多文化であることの理解を深めることで、多様な視点を獲得できると考えているからである。言語Aは、「英語ディスカッション」(1単位)、「英語ディベート」(1単位)、「Reading & Writing」(2単位)、「Presentation」(1単位)及び「e-Learning」(1単位)に区分する。また、言語Bは、入学手続き時に学生に希望を提出させることとしており、「～語1」、「～語A」、「～語2」及び「～語B」(各1単位)に区分する。

総合系科目は、「学びの精神」(4単位)のほか、「多彩な学び」及び「スポーツ実習」(合わせて14単位)を卒業要件単位としている。「学びの精神」は、講義を受けた上で、学生がその要点を理解して自らの考えを練り、リアクションペーパーや小レポートでそれを表現するという、高校までの勉強とは異なる大学での講義科目受講の包括的スキルを、1年次春学期のうちに体得することを目的としている。「多彩な学び」は、内容によってカテゴリに分かれ、「人間の探究」、「社会への視点」、「芸術・文化への招待」、「心身への着目」、「自然の理解」及び「知識の現場」の6つに区分する。「知識の現場」はボランティア活動や海外でのさまざまな実践活動に学生時代に積極的に関わろうとする学生を大学の側から後押しするために、学内の様々な部局が主体となって設けているカテゴリである。「スポーツ実習」は、「スポーツプログラム」(1単位/実技中心)及び「スポーツスタディ」(2単位/講義・レポートあり)の2つに区分し、健康を維持・増進させるための科学的知識の理解、体力の向上等及びスポーツの文化的側面の理解、実践を通じたコミュニケーション能力、的確な判断力等の養成を目的とする。

2) 専門必修科目 (※10単位)

5科目全ての履修及び単位の修得を卒業要件とする。これらはいずれも、環境学分野の基礎理論・技能に関する科目である。環境学部専門教育への導入と初期展開をはかるため、10単位の修得が必要である。

3) 基幹科目 (※16単位以上)

基幹科目「A：環境総合」は、環境に関する重要なトピックを取り上げ、文理にまたがる複数の学問分野の視点から読み解く科目であり、6科目のうちから2科目以上の履修及び単位の修得(A：4単位)を選択必修として卒業要件とする。また、人文社会科学系、自然科学系の学問的基礎を身に付け、文理の枠を超えた視野・視点・視座を身につけることを目的とし、人文社会科学系の基幹科目「B：人間と社会」、自然科学系の基幹科目「C：科学と技術」を、それぞれ7科目の科目群から3科目以上の履修及び単位の修得(B：6単位、C：6単位)を選択必修として卒業要件とする。

4) 発展科目 (※12 単位以上)

発展科目は、すべてが選択科目である。環境学を構成する多様な分野の中から選択し履修することによって、自らの専門性を見出し、深めていく。これらの学びを通して、環境正義の理念を理解し、幅広い知識を現実の課題と結びつけながら活用できる力を身につけることを目的とした、学部での学修の核となる科目群であり、12 単位以上の修得が卒業要件となる。

5) 実践科目 (※6 単位以上)

リーダーシッププログラムである環境リーダーシップ E L 1～4、環境フィールドスタディ 2、短期・長期フィールドワーク、短期／長期ワークエクスエクスペリエンス等からなる科目群であり、リーダーシップスキルの獲得や、環境現場とつながる学びを重視する。知識やスキルを現実の課題と結びつけながら活用できる力や、持続可能な未来に向けた対話と協働を導くリーダーシップを育むことを目的としており、6 単位以上の修得が卒業要件となる。

6) 卒業論文・プロジェクト関係科目 (※18 単位)

4 年間の学修の集大成として、学問的な研究を行い、論文を執筆する「卒業論文」、または実際の課題解決を自ら計画・実行する「卒業プロジェクト」のいずれかを選択して取り組む(8 単位)。また、これらの指導を行う科目として、「卒業論文・プロジェクト演習 1・2」(各 2 単位)、卒業論文、卒業プロジェクト実施に先立ち、3 年次に各教員から専門的な指導を受ける「専門演習 1・2」(各 2 単位)、他の学生や教員との交流を通して、自身の研究・実践が、環境学や環境アクションにおいてどのような位置づけにあるか、どのような意義や重要性を示し得るかを学ぶ科目として、「環境コロキウム 1・2」(各 1 単位)の合計 18 単位の履修を卒業論文・プロジェクト関係科目として卒業要件とする。なお、4 年次春学期に大学・学部が主催する留学プログラムに参加し「環境コロキウム 1」を履修できない学生は、「留学レポートセミナー」(1 単位)を履修する。

7) 自由科目 (※16 単位以上)

全ての科目が選択科目である。各科目区分で卒業要件単位数を超えて履修した授業科目の単位数のほか、他学部他学科の授業科目等についても、自由科目として卒業要件に参入することができる。

4. 履修モデル

資料 2 のとおりである。

本学部のカリキュラムは「教育課程の編成の考え方及び特色」、ならびに本項目で述べて

いるとおり、文・理・複合の3領域にわたって、幅広い科目群を配置しており、学生は自身の興味関心にしたがって履修を進めていくため、多様な履修モデルが構築可能である。資料2ではその例として、文理融合・環境総合系、文理融合・人文社会科学重視系、文理融合・自然科学重視系の3つの履修モデルを示している。

5. 卒業論文・卒業プロジェクトに係る単位認定

本学部では、卒業要件として、3年次の「専門演習1」及び「専門演習2」の履修を経て、自分の専門を定めて自分の問題意識を掘り下げたのち、さらに深く研究または実践を進めるため、4年次に「卒業論文」又は「卒業プロジェクト」のいずれかを必ず履修する。両者とも、演習科目としての単位数は他の講義科目と同様2単位であるが、卒業研究自体に必要な学修等を考慮して、8単位としている。

なお、卒業論文では、環境課題に関連した調査、研究を行う。その過程において自身の研究の進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身の研究を批判的思考法に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加研究を計画する。最終的には卒業論文としてまとめることを目的としている。

卒業プロジェクトでは、環境課題解決を指向したプロジェクトの立案、計画、実践を行う。その過程において自身の実践の進行状況を発表するとともに、教員、あるいは他の学生からのフィードバックをもとに自身のプロジェクトを批判的思考法に基づいて評価し、必要に応じて方向性の修正や、追加の実践を計画する。1年をかけてプロジェクトを手がけ、最終報告書の提出を行う。

6. CAP制の設定

各学期において履修する科目の単位数は、4月に履修計画を立てる際に、各学期の必修科目の単位数や春学期・秋学期のバランスを考え、偏らないようにするため、30単位を上限とする。ただし、年間における履修登録上限単位数は1年次から4年次まで共通で44単位とする。なお、履修登録をした科目で単位を修得できなかった科目も、履修登録上限に含まれる。

また、全学共通科目の総合系科目については、過度な登録を防ぐため、全学年において、各学期の履修登録上限を6単位とする。

7. 他大学における授業科目の履修

多数の大学が所在する東京に位置している利点を生かして、幅広い学修機会提供のために学部レベルでの他大学における授業科目の履修等も支援することを基本的な方針とし、5大学間単位互換制度（f-Campus）を行っている。f-Campusとは学習院大学、学習院女子大学、日本女子大学、早稲田大学、本学の5大学間における単位互換制度であり、本学を除く他の4大学合計で年間12単位までを認めている。これらの5大学はいずれも本部キャン

パスが近接しており、学生が相互に通うことができる環境にあることを活かして、直接、他大学の授業に参加することによる新たな学修意欲の昂進や、複数の大学からの参加による授業の活性化等、様々な学修効果を目指している。

8. 多様なメディアを利用した授業

本学では、対面にて授業を行う科目のほか、インターネット環境を利用してオンライン上で授業を行う科目を開設している。オンライン授業の実施形態は3つに区分し、①ライブ参加型：オンライン演習形式（双方向のリアルタイム・ミーティング）、②ライブ視聴型：オンライン講義形式（一方向のリアルタイム動画配信）、③オンデマンド型：オンライン録画配信方式（一方向の動画配信）としている。オンライン授業の方式、および実際の実施方法、手順などは教職員専用ポータルサイト内で資料を展開し、教員に周知している。また、授業支援システムとして、Canvas LMS を全学的に運用し、テストの実施、レポートの提出、教材や課題の掲載、担当教員と受講学生との連絡手段などに活用している。これにより授業運営を効果的に支援し、様々な学修活動の充実を図っている。

⑥実習の具体的計画

1. 実習の目的

教育実習を通じて、本学部教育目的における「文理の枠を超えて幅広く知識を身につけ、現実の課題と結びつけながら活用できる能力と、環境正義の概念を理解し、自らの強みを活かしながら、対話と協働の関係を構築できるリーダーシップを養う」という基本理念を学生が自ら理解・説明できるようになるとともに、本学部の学位授与の方針に位置付けている「1. 一つの立場、一つの考え方にとらわれず、様々な分野にまたがる視野・視点・視座から物事をとらえることができる」「2. 自分の強みを活かしながら、他者の強みを引き出し、課題解決に向けて「対話」と「協働」を導くリーダーシップを発揮できる」「3. 環境に関する知識やスキルを現場の実状と関連づけて実践的に活用することができる」「4. 環境課題に関する「不正義」に向き合い、より公正な社会を目指す「環境正義」の理念とその重要性を理解することができる」「5. 環境学において自ら見出した専門性をもとに、環境問題の本質について考えることができる」「6. 地球市民の一人として、グローバル・ローカルな環境課題の解決と持続可能な未来の実現に向けて、社会の変革に参画する意志を持つことができる」の6点について、学生が経験を通じた成長の機会を得て教育者（中学校理科または社会科、高等学校公民科または理科）としての専門性を獲得することを目的としている。

2. 実習先の確保

【教育実習】

毎年度、東京都教育委員会等へ受け入れ申請を行い、受け入れ前年度の12月頃に「教育実習生受入決定通知書」を受領している。また、私立学校については、一貫校の立教池袋中学校・高等学校及び立教新座中学校・高等学校、系属校の立教女学院中学校・高等学校及び香蘭女学校中等科・高等科に加え、東京都、神奈川県、京都府、大阪府及び兵庫県の学校による受入れ実績がある。

3. 実習先との契約内容

【教育実習】

実習を行う学生ごとに、東京都教育委員会、一貫校、系属校等から、実習生所属（所属学部等）、実習生氏名、実習教科、実習校、実習校所在地、実習期間等を記載した教育実習内諾書を受領している。

4. 実習水準の確保の方策

【教育実習】

実習の水準を確保するため、受講資格として以下の要件を定める。そのほか、「教育実習事前及び事後指導」の履修を通じ、実習生に対して適切な事前指導を行い、実習水準を確保する。

- (1) 教職に関する科目について、原則として、1～3年次開講の必修科目（8科目 16単位）全ての単位を修得していること。
- (2) ガイダンスへの出席を含め実習までに必要な所定の手続きを、すべて完了していること。
- (3) 定期健康診断を受診し、健康に問題がないこと。
- (4) 麻疹のワクチン接種の証明もしくは、抗体が十分にあることが確認できること。
- (5) 実習先から受入れについて承諾を得ていること。

5. 実習先との連携体制

【教育実習】

実習先との連携は、本学の「学校・社会教育講座」が実務を担う。同講座の教職員は、教育実習が円滑に実施されるよう、実習前、実習中、実習後の各段階において、適宜、実習先との間で実習日程、実習期間、実習内容など、必要な連絡、調整を行う。実習前は、各実習校等に内諾・承諾を得るための事前訪問を行い、実習指導者等の意見や要望を聴取するほか、事前準備や資格要件の確認等について必要な意見交換を行う。実習中及び実習後も、学校・社会教育講座が実習先との間で必要な情報交換を行う。

6. 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）

全学生に対して入学時に麻疹・風疹・水痘・おたふくかぜワクチン・新型コロナウイルス

感染症等の予防接種調査を実施し、予防接種歴・罹患歴がない学生については予防接種を受けるよう指導する。また、感染予防対策につき、実習校から事前に指示があった場合は、これに従うよう指導する。また、本学部においても、実習中の事故及び損害賠償に対応するものとして、公益財団法人日本国際教育支援協会が運営する「学生教育研究災害傷害保険」及び「学研災付帯賠償責任保険」に全員が加入をする。

7. 事前・事後における指導計画

【教育実習】

3～4年次を通じて開講される「教育実習事前及び事後指導」の履修を義務付け、下記の指導を行う。

実習の前年度（3年次）は、実習目的・実習要件・実習方法等について担当教員が事前指導を行う。具体的には、実習に対する心構え、実習日誌の書き方、生徒観察の方法、板書や発問の方法、挨拶や服装などの諸点につき、詳細に指導する。特に、模擬授業においては、学校長経験者等の外部ゲストを招いて説明会や質問会を設けるなど、教育現場の実情を踏まえた多面的、かつ具体的な指導を行う。

実習終了後（4年次）は、実習を振り返り、反省点や課題の検討を中心に事後指導を行う。具体的には、研究授業の指導案に基づいた模擬授業を再現し、担当教員を含めた学生間のディスカッションを通じて各々の課題を明確にする。さらに、4年次の「教職実践演習」の履修を通じて、教育実践に必要な教職教育の総括的な指導を行う。

8. 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

【教育実習】

本資格取得における実習に関して、教員及び助手の配置は求められておらず、実習先に本学部の教員及び助手を配置する予定はないが、実習先への巡回指導については、全学教員養成会議が決定する計画に基づき、学校・社会教育講座の教員又は本学部の教員が行い、特定の教員に過度な負担がかかることはない。

9. 実習施設における指導者の配置計画

【教育実習】

実習先は、学校法人であり、指導教員は配置されている。実習先に本学部の教職員を配置する予定はないが、学校・社会教育講座が実習先と緊密に連携して実習が円滑に実施されるよう努める。実習生に対しては、訪問指導担当教員を配置して、実習前の面談、実習中の実習校訪問指導を行う。実習校訪問に当たっては実習生の研究授業等、担当授業を参観した上で、実習生への指導を行うとともに、実習先担当者とも適宜意見を交換し、適切な実習の運営に努め、実習訪問終了後には「教育実習の記録」、「教育実習事後レポート」、「研究授業で使用了授業案」を提出する。また、実習中の欠席・事故等の対応については実習校、実習

生、訪問担当教員からの連絡を受け、担当教員が中心となり全学教員養成会議において協議しながら対応する。

10. 成績評価体制及び単位認定方法

【教育実習】

「中・高教育実習」、「高校教育実習」の単位は、以下の点を総合して担当教員が評価する。

- (1) 「教育実習直前指導」への出席
 - (2) 実習校からの評価
 - (3) 「教育実習の記録」、「教育実習事後レポート」、「研究授業で使用した授業案」
- なお、以下に該当した場合は、単位を認めない。
- (1) 「教育実習直前指導」に無断欠席した場合
 - (2) 「教育実習の記録」、「教育実習事後レポート」、「研究授業で使用した授業案」を期限内に提出しなかった場合

⑦企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

1. 実習先の確保

専門必修科目である「環境フィールドスタディ1」の履修を通じて、全学生に対して学外実習を実施する。1年次生全員が9つのチームに分かれ、各チームが文理を越えた多様な専門性を持つ複数の教員とともに国内の地域を訪れ、実際の地域課題や現地の自然環境をテーマに、現場の取り組みと人々から学び、講義や演習で学ぶ知識やスキルと実社会とのつながりをとらえつつ、環境問題に対する多角的な視点・視座を育む。現時点で予定している実習先は以下のとおりである。

- ・北海道羅臼町／世界自然遺産・野生生物・水産業・知床学
- ・東京都豊島区／都市の環境政策・水道・廃棄物
- ・東京都多摩地区／里山まちづくり・狩猟・自伐林業・コミュニティビジネス
- ・長崎県対馬市／海洋プラスチック・藻場再生・地産地消・生態系・観光

また、2年次以降の学生を対象とした実践科目「環境フィールドスタディ2」「短期フィールドワークA～C」「長期フィールドワークA～E」「インタープリテーション実習」「野外活動実習」においても、選択履修した学生に対する学外実習を計画している。

なお、本学部が計画する実習については、特定の施設や団体での受け入れを必要とするものではなく、上に挙げたような学外の諸地域を訪れ、当該地域で環境課題を学ぶものである。

2. 実習先との連携体制

1) 現地実習への事前準備

実習に先立って、担当教員が、実習先の担当者*との間で、(1)連絡体制、(2)受入れ人数、(3)実習前後の指導方法、(4)実習内容、(5)事故が起きた際の責任体制、(6)関係者の個人情報保護等についての調整を行う。学生は、本学部内に設置される「フィールド学修支援室(仮称、以下同じ)」において、必要な手続きを行う。「フィールド学修支援室」の担当職員は、実習先の担当者との間で、必要な事前手続きを行う。

※必修科目として実施する「環境フィールドスタディ1」については、実習中の訪問先や移動手段等に関わる現地調整を担うコーディネーター業務を、現地関係者等に委託する。

2) 指導体制

(1)「環境フィールドスタディ1 (初年次必修)」 「環境フィールドスタディ2 (2年次以上選択)」

*事前学習 (春学期)

全体ガイダンスの後、実習先ごとに9つのチームに分かれ、2回の事前学習(訪問地域の概要・課題の背景、フィールドでの学びの視点)を実施する。文理をまたぐ複数の教員がチームで担当し、訪問先の地域関係者をゲストスピーカーとして招く。学生はグループディスカッションを通じて議論を積み重ねる。「環境フィールドスタディ2」を履修する2年次以上の学生は、実習計画の策定・精査に取り組むとともに、初年次生の学びを促すファシリテーションの方法を学ぶ。

*現地実習 (夏季休暇中または通年)

各チームが訪れる地域によって、遠方の場合は3日間程度、近隣地域の場合は週末などを利用し複数回の現地実習をおこなう。それぞれの実習地で、上記の複数教員が、現場の状況、問題、取組を多角的に解説、指導するとともに、現地の関係者と学生との交流をファシリテートする。「環境フィールドスタディ2」を履修する2年次以上の学生は、教員の指導のもと、初年次生の学びを促す役割を担う。

*事後学習 (現地実習完了後)

学びのふりかえりと報告会へ向けた準備をおこない、最終的に全体報告会で「地域の現状・課題・取組とわたしたちの学び」を、実習地ごとに発表する。

(2)「短期フィールドワークA～C」「長期フィールドワークA～E」

*事前学習 (春・秋学期)

全体ガイダンスの後、2回の事前学習を実施し、訪問地域の概要・課題の背景を学ぶとともに、活動計画・目標を策定する。「短期・長期フィールドワークA」は、学生自身が主体的に実習地を選定、手配する。「短期フィールドワークB・C」「長期フィールドワークB～E」は、教員が実習地を手配する。

*現地実習 (春・秋学期中または夏季・春季休暇中)

学生自身が地域課題の解決に参画、貢献することを目的として活動する。「短期・長期フィールドワーク A」は、教員は同行せず、オンラインでの面談や、学生が提出する日誌へのフィードバックによる指導を実施し、必要に応じて巡回指導をおこなう。「短期フィールドワーク B・C」「長期フィールドワーク B～E」は、文理領域をまたぐ複数の教員が同行し、現場の状況、問題、取組を多角的に解説、指導するとともに、現地の関係者と学生との交流や、学生による課題解決への参画をファシリテートする。

＊事後学習（実習完了後）

学びのふりかえりと報告会へ向けた準備をおこない、最終的に全体報告会で「地域の現状・課題・取組とわたしたちの学び」を発表する。

(3) 「インタープリテーション実習」

＊事前学習（春学期前半）

ガイダンス、環境インタープリテーションについて基本的理解を得る講義と実習を実施する。4週目には、日本インタープリテーション協会トレーナーを招き、プログラムの相互評価について学ぶ。

＊現地実習（春学期半ば）

学外研修として、担当教員にくわえ、日本インタープリテーション協会トレーナーを招き、自然環境の中で実際の環境インタープリテーションの体験や実践、資源調査の実習等をおこなう。

＊事後学習（春学期後半）

学外研修をふりかえりつつ、日本インタープリテーション協会トレーナーを招いてプログラムの相互評価を学んだ後、環境教育や持続可能な地域づくり・観光との関係についての講義と授業全体のふりかえりをおこなう。

(4) 「野外活動実習」

＊事前学習（夏季休暇中）

授業のウォーミングアップ、概要説明を実施する。

＊現地実習（夏季休暇中）

自然環境の中に身を置き、自然体験活動の体験や関連施設見学をおこなう。担当教員のほか、自然体験活動指導者を招き、複数人体制で指導をおこなう。

＊事後学習（夏季休暇中）

学外研修をふりかえりつつ、授業全体をふりかえる。

3. 成績評価体制及び単位認定方法

学外実習に関する成績評価は、それぞれの授業目標に沿ってシラバスに記載する成績評価方法・基準に応じて、担当教員が総合的に判断して行い、単位を認定する。

各科目の成績評価方法・基準は以下の通りとする。

- (1)「環境フィールドスタディ 1・2」「短期フィールドワーク A～C」「長期フィールドワーク A～E」：事前・事後学習課題（20%）、現地訪問中の積極的な参加（30%）、報告会での発表（20%）、最終レポート（30%）を担当教員が総合的に判断して行い、単位を認定する。
- (2)「インタープリテーション実習」：実技（20%）×2 回（40%）、プログラム計画シート（レポート）（20%）、授業内レポート（20%）、出席および授業参加度（20%）
- (3)「野外活動実習」：修了テスト（40%）、自然体験活動実習（実技）（20%）、授業内レポート（20%）、出席および授業参加度（20%）

4. その他特記事項

学内手続きと選考は以下のとおりである。

＊「環境フィールドスタディ 1」

4 月～ 初年次生ガイダンス・実習地希望調査、選考

5 月～ 事前学習・実習開始

＊その他の科目

前年度 10 月～ 次年度履修に関する募集ガイダンス開始

前年度 12 月～ 選考

前年度 1 月 履修者発表

⑧取得可能な資格

本学部で取得できる資格は表のとおりである。

資格名	区分	資格取得又は受験資格	修了要件	本学部以外の追加科目
教育職員免許状	国家	資格取得	含めない	なし

なお、教育職員免許状は、中学校一種（社会）・高等学校一種（公民）および中学校一種（理科）・高等学校一種（理科）の課程認定を申請する予定である。

⑨入学者選抜の概要

1. 入学者受入れの方針

本学部の入学者受入れの方針は、前述の「①設置の趣旨及び必要性」にて記載したとおりである。

2. 入学者選抜

【選抜方法、選考基準等】

本学部の設置の趣旨及び入学者受入れの方針に基づき、学校法人としての公共性と私学としての独自性を勘案しながら、入学者選抜を実施する（入学定員 204 名）。

本学では、一定の高い基礎学力を持ち、かつ、知的好奇心が旺盛で、本学の理念である自由の学府の精神に富む、勉学意欲の高い学生を、日本国内、世界から多数迎え入れている。環境学部では、「一般入試」をはじめとして「大学入学共通テスト利用入試」、「アスリート選抜入試」、「自由選抜入試」、「外国人留学生入試」等の多様な入試を実施する予定である。これらの多様な入試形態を通して、学生自身の興味関心に基づき、環境課題の解決に強い関心を持ち、社会変革への貢献する意志を有する多様な個性をもった学生を受け入れ、大学がより豊かで充実した学問の場となることを目指す。そして、環境学部では環境正義の理念のもと、将来的に社会変革に大いに貢献できる可能性を持った人材を受け入れる。

また、環境学には人文社会科学的な視座からのアプローチと自然科学的な視座からのアプローチがあり、さらにそれぞれの学問分野の視座に立ちながら、自身と異なる専門性を有する人々との対話を通じて協働の関係を結ぶことが求められる。こうした観点に立ち、各入学者選抜の方法においては、高等学校での教科・科目の学習歴によらず幅広く受け入れることができるよう、例えば一般入試では「文系方式」「理系方式」の2通りを設けるなどの取り組みを行う。

【入試区分ごとの募集人員および目的】

入試区分ごとの募集人員は表のとおりである。

入試区分	募集人員
一般入試	約 90 人
大学入学共通テスト利用入試（3 科目型）	約 25 人
大学入学共通テスト利用入試（4 科目型）	
大学入学共通テスト利用入試（6 科目型）	
自由選抜入試	約 30 人
アスリート選抜入試	若干名
外国人留学生入試	若干名

指定校推薦入学	約 40 人
関係校推薦入学	約 15 人

それぞれの入試区分の目的は以下の通りである（再掲）。

<一般入試>

本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、環境学部での教育を志望する者に対して、高等学校における教科・科目の学習の達成度を測り、選抜することを目的とする。

<大学入学共通テスト利用入試>

本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、環境学部での教育を志望する者に対して、高等学校における教科・科目の学習の達成度を、大学入学共通テストを利用して測定し、選抜することを目的とする。

<自由選抜入試>

環境学部に関連した高い能力をもつ者、あるいは学業以外の諸活動の分野に秀でた個性をもつ者で、本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、そこで学びたいという熱意を提出書類及び面接等の内容により多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<アスリート選抜入試>

スポーツ競技の実績が優秀であるだけでなく、人格的にも優れ学業に対する高い意欲をもつ者を、競技実績や提出書類、小論文、面接等の内容により多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<外国人留学生入試（書類選考による募集制度）>

国際交流の一環として、交換留学制度とは別に、本学での教育を希望する外国人留学生を、提出書類および日本留学試験の成績等の内容により、多面的・総合的に評価し、選抜することを目的とする。

<指定校推薦入学>

環境学部が自らの教育目的に基づいて、特色ある教育を行っている高等学校を指定したうえで、環境学部の教育目的を理解し、環境学部が定める一定の学力を有する者を高等学校長が推薦し環境学部が受け入れることを目的とする。

<関係校推薦入学>

日本聖公会に所属する高等学校を対象として、本学ならびに環境学部の教育目的を理解し、キリスト教に基づく教育を継続して学びたいという意欲のある者を高等学校長が推薦し本学が受け入れることを目的とする。

3. 外国人留学生の受入れ

日本語資格要件は、「日本留学試験」を受験し、成績確認書、成績通知書、受験票のうち、いずれかの写しを提出するものとする。成績については、本学から独立行政法人日本学生支援機構に照会する。「日本語」は、日本の大学等での勉強に対応できる日本語力を測定する。

得点範囲は、読解、聴解・聴読解が 0～400 点、記述は、0～50 点である。「理科」および「数学」は、日本の大学等での勉学に必要な理系の基礎的な学力を測定するものとし、「理科」は物理、化学、生物のうちから 2 科目を選択し、「数学」はコース 2 を選択する。「理科」および「数学」とも、得点範囲は 0～200 点である。資格要件としては、「日本語」、「理科」の 2 科目、「数学」の合計点で概ね 8 割の得点率を基準とする。また、英語資格・検定試験のスコアの提出を必須とする。

また、経費支弁能力を確認するため、本人が学費・生活費を支弁する場合は、(1) 本人名義の銀行等における預金残高証明書（目安残高 120 万円以上）及び(2) 奨学金の受給証明書（奨学金受給が決定している者）の提出を求め、本人以外の者が学費・生活費を支弁する場合は、(3) 経費支弁者の銀行等における預金残高証明書、(4) 収入証明書（課税証明書、源泉徴収票等）及び(5) 奨学金の受給証明書（奨学金受給が決定している者）の提出を求めている。

さらに、在籍を管理するため、入学時に在留管理システムへ在留カードをアップロードしてもらうとともに、在留期間更新許可申請手続きの支援を行なっている。在留期限 2 ヶ月前に在留管理システムより、申請者情報の確認・修正依頼の通知を送付し、対象者は、個人情報（生年月日、出生地、配偶者の有無、本国における居住地、本国の電話番号等）、パスポート番号、学歴、犯罪歴、卒業後の予定、在日親族の有無等を入力の上、在留カードの表裏の写真、パスポートの画像ファイル、成績証明書の画像ファイル等を在留管理システムにアップロードすることとなっている。

⑩教員研究実施組織の編制の考え方及び特色

1. 教員配置

基幹教員数は 18 人、うち半数の 9 名を教授、残る半数を准教授で構成する。

本学部の理念を実現するために、文理の枠を越えた多様な専門分野に根ざしながら環境課題に関わる研究と実践、教育の最先端で活躍し、環境正義にもとづく社会変革に向けた教育と研究を担う意志を共有する教員により構成する。また、文理融合・リベラルアーツ教育、現場と密接に連携する実践教育、対話と協働を実現するリーダーシップ教育を軸に、環境正義の理念を共有する環境リーダーを育成する本学部の教育目標や教育課程等に共感し、分野を越えたチームティーチングの充実と、そのための F D 活動等に熱意を注ぐことができ、これまでの経験に基づき貢献する力を持つ者で構成する。

本学部が研究対象とする中心的な学問分野は「環境学」であるが、教育研究上の目的のなかで「自然環境と人間の間を複合的な視点でとらえること」「文理の枠を越え幅広く知識を得ること」を強調しているとおり、自然科学、人文社会科学の多様な領域を幅広く扱いながら、環境課題の解決や持続可能な社会への変革につながる実践的な環境学研究・教育を展開していくことを計画している。これを担うために、環境化学、生命科学、生物学、気候力

学、環境史学、環境工学、環境デザイン学、環境地理学、環境政策学、環境経済学、環境法学、環境社会学、環境教育学、経営学といった、環境学を支える多様な分野の専門家集団として教員組織を構成する（下表参照）。

基幹教員全員が、大学等の機関や研究所での実務経験を持ち、1名を除き博士の学位を取得、残る1名も環境分野において官民セクター双方をまたぐ豊富な実務経験と大学院指導経験を持つ。すべての教員が、環境学および各専門分野において高度の教育研究上の指導能力、業績等を有する。

No	職位	専門分野	No	職位	専門分野
①	教授	環境化学	⑩	准教授	地理学
②	教授	環境化学	⑪	教授	環境政策学
③	教授	環境化学工学	⑫	准教授	環境政策学
④	教授	海洋生物学、環境保全学	⑬	教授	環境政策学
⑤	准教授	生命科学	⑭	准教授	国際法学、環境法学
⑥	准教授	気候力学	⑮	教授	環境教育学
⑦	准教授	環境史学、古気候学	⑯	教授	環境社会学
⑧	准教授	環境デザイン学	⑰	准教授	環境経済学
⑨	准教授	環境工学	⑱	教授	経営学、組織行動論

2. 教育上主要と認める授業科目への基幹教員の配置

本学部における教育上主要な科目は、全学共通科目における必修科目「言語A」「言語B」、選択科目「学びの精神」「多彩な学び」「スポーツ実習」の科目区分と、専門科目における「専門必修科目」、「基幹科目」、「発展科目」、「実践科目」、「卒業論文・卒業プロジェクト関係科目」の科目区分である。

専門科目における主要科目区分ごとの基幹教員の配置状況は以下の通りであり、適切に基幹教員を配置している。

区分	割合
専門必修科目	97.3%
基幹科目	77.2%
発展科目	57.1%
実践科目	91.5%
卒業論文・卒業プロジェクト関係科目	100.0%

3. 中心となる研究分野とその研究体制

先述のとおり、本学部が研究対象とする中心的な学問分野は「環境学」とし、教育研究上

の目的のなかで「自然環境と人間の関係を複合的な視点でとらえること」「文理の枠を越え幅広く知識を得ること」と記しているとおり、自然科学、人文社会科学の多様な領域を幅広く扱いながら、環境課題の解決や持続可能な社会への変革につながる実践的な環境学研究を展開していく。具体的には、気候変動とカーボンニュートラル、生物多様性とネイチャーポジティブ、資源循環とサーキュラーエコノミー、環境汚染・公害、環境アセスメントと持続可能な開発といった現実の環境課題に対し、環境化学、生命科学、生物学、気候力学、環境史学、環境工学、環境デザイン学、環境地理学、環境政策学、環境経済学、環境法学、環境社会学、環境教育学、経営学の各領域から学外の研究者とも接続しながらそれぞれの研究を進めると同時に、学部内でも学際的研究チームを組織し、積極的に共同研究を推進する。

4. 教員組織の年齢構成

本学部の開設時及び完成年度の基幹教員組織の年齢構成は下表のとおりである。40 歳代までの教員が半数を占めているため、教育研究水準の維持向上・教育研究の活性化に配慮した年齢構成であるといえる。

	40～49 歳	50～59 歳	60～64 歳	65～70 歳
開設時	10 名	5 名	2 名	1 名
完成年度	6 名	8 名	1 名	3 名

また、本学の定年に関する規程である学校法人立教学院就業規則（資料 3）では、第 20 条において、満 65 歳に達した場合にその年度末をもって定年退職としているものの、立教大学特別専任教授任用規程（資料 4）を定め、同条で定める定年退職をした専任教員のうち教授の職位にあった者で、契約の年度末において 70 歳を超えない者を教授として任用できることとしている。開設時には 65 歳以上になる者が 1 名、完成年度には 3 名いるため、当該教員の研究分野を加味し、特別専任教授への任用または適切に後任補充を行う予定である。

⑪施設、設備等の整備計画

1. 校地、運動場の整備計画

1) 学部の教育研究を踏まえた適切な環境整備

本学部を設置する池袋キャンパスは文学部・異文化コミュニケーション学部・経済学部・経営学部・社会学部・法学部といった人文社会科学系の学部と理学部という自然科学系の学部を設置している。本学部は文理融合の教育理念を掲げた学部であり、様々な学問分野の視座・視点・視野の獲得を目指すことから、多彩な分野の研究者、学生と日常的に交流が求め

られるが、まさにそのような環境を提供できるキャンパスとなっている。

教員の研究室が配置される新研究棟は間伐材を利用した木造造りとなっており、また屋上には太陽光パネルを設置し、節電、創エネルギーの機能を持たせている。Nearly ZEB (Zero Energy Building) の認証取得を目指しており、新研究棟を環境教育の題材としても活用することが想定されている。

2) 学生の休息その他の利用のための適当な空地の整備状況

池袋キャンパス内には第一食堂とレストランアイビー、TULLY'S COFFEE、東京ハラルデリ&カフェ、9号館軽食堂、日比谷松本楼セントポールズ会館店と全部で6つの学生食堂を展開しており、経済援助の面からはできるだけ安価に、また、食生活の面からはバランスのとれた食事ができるように配慮しつつ、学生が快適に食事を楽しむことができる環境を整えている。また、昼休みの際は学内の多くの教室を開放し、多くの学生が昼食などを取れるスペースとして利用している。他にもキャンパス棟内にもベンチやイスを設け、大学敷地内にもレストスペースを広く設置するなど学生の休息場所の確保に努めている。また、学内の教室施設についてはサークル活動、課外活動のミーティングや練習の場所とし学生に貸し出しも行っており、学生の憩いの場と一助を担っている。そのほか、コーヒーショップ、文房具店、書店、コンビニエンス・ストア等を設けている。

3) 運動場の利用計画

地下2階地上5階建ての総合体育館（ポール・ラッシュ・アスレチックセンター）があり、アリーナ、トレーニングルーム、ランニングコース、50メートル温水プール、屋上にはテニスコート兼フットサルコートなどが整備されている。授業に利用されるほか、運動部の練習場などとしても利用している。

2. 校舎等施設の整備計画

1) 教員の研究室、必要な教室の整備計画

教員の研究室は本学での基準に則り、令和7（2025）年度中に完成予定の新教育研究棟にて各専任教員に20㎡の研究室が割り当てられる。教員間の日常的な議論やコミュニケーションが可能となるような工夫をしながら配置する予定である。

教室は池袋キャンパスに設置されている教室を他学部・他研究科と共有して使用する。また、本学部の設置により、池袋キャンパスの在籍学生数が増加するが、令和6（2024）年度および令和9（2027）年度にキャンパス既存施設の改修により教室を増加する。本学部の設置により在籍学生数が増加したとしても、完成年度となる2029年までには教室増加の対応がなされ、池袋キャンパスにおける教育研究に支障はない。

2) 教育課程等を実施するために必要な施設・設備

本学部が実験及び実習で使用する施設・設備は以下のとおりである。

施設名	利用内容
学生実験室（100 m ² ×1=100 m ² ）	環境科学入門1、環境化学実習、環境生命実習の実習で使用する。赤外分光装置や紫外可視分光分光装置などの化が分析装置や、顕微鏡、インキュベーターなどを設置する。各種サンプルの化学分析や、生物の顕微鏡観察、インキュベーターによる培養などを行う。
サーバー室（20 m ² ×1=20 m ² ）	気象データの取得、解析を行うためのサーバーを設置する。

3. 図書等の資料及び図書館の整備計画

1) 学部の種類・規模等を踏まえた図書等の整備

本学の池袋キャンパスに設置している池袋図書館は、開設以来、各学部の専門領域および周辺領域に関する図書、学術資料の収集を継続的に行っている。また、各学部で開講する全ての科目で使用する教科書を図書館において整備している。蔵書数は令和5（2023）年度末時点で190万冊を超え、国内有数の蔵書数を誇る。

「環境学」は各学問領域を基盤とする学際性を有するものであるが、池袋図書館では、既設学部の専門領域に応じて、自然科学・人文科学・社会科学の図書を所蔵しており、各領域の環境関連図書も整備が進んでいる。これらの既存図書等を活用するとともに、必要に応じて継続的な整備を行う予定である。

2) デジタルデータベース、電子ジャーナル等の整備計画

本学図書館は、池袋・新座図書館併せて既に豊富なオンライン資料（約96,000件の電子ジャーナル、約52,000件の電子書籍及び243件のデータベース）（令和6（2024）年度）を有している。これらの既存の資料を活用するとともに、必要に応じてさらなる充実を図る予定である。

3) 図書館の閲覧室、閲覧席数、レファレンス・ルーム、検索手法等など、教育研究を促進できる機能等

池袋図書館は、ロイドホール（18号館）の地下2階から3階までの5フロアと12号館の地下2階から地上1階までの3フロアが一体化した、最大収蔵冊数200万冊、閲覧席数1,630席以上を誇る、国内の大学でも屈指の大規模図書館である。現在128万冊の蔵書があり、自由に閲覧することができる。また、ディスカッションやグループワークなどの学習形態に対応するため、ラーニング・スクウェアやグループ学習室を設けていることや、多彩な閲覧席、飲食可能なテラスやリフレッシュルームなども配し、利用者の長時間利用に配慮した工夫

をしており、総合学習図書館及び研究図書館としての機能を維持するとともに、多様なニーズに対応し利便性を向上させることによって、学習・教育・研究を支援している。

また、教育研究情報環境のネットワーク利用基盤である学術情報システム（Rikkyo Information System）によって、利用者は文献の収集から整理、資料の提供に至るまでの総合的なサービスを受けることができる。図書資料等の目録データはOPACによるオンライン検索とともに、学内LANを経由して、各研究室や学内の各施設、さらには学外や自宅からもアクセスが可能である。

以上については、学部の種類を問わず汎用的な要素を含んでいるため、本学部の目的等に照らしても十分に適切である。

4) 他の大学の図書館等との協力

他の教育研究機関との連携については、本学、青山学院大学、学習院大学、國學院大學、東洋大学、法政大学、明治大学及び明治学院大学の8大学で「山の手線コンソーシアム」を形成し、学生及び教職員が各大学の図書館を利用できる体制を構築している。

⑫管理運営

1. 教学面における管理運営の体制（教授会の役割、構成員、開催頻度の予定、審議事項等）

本学は、学則第77条第1項の規定に基づき、教授会を置くこととしている。本学部においても、上記規程に基づき、教授会を設置する。構成員等は下表のとおりである。なお、隔週で開催している。

	根拠規程	内容
構成員	学則第77条第2項	教授及び准教授
審議事項	学則第77条第3項	・学部内の人事 ・学部長の選挙 ・教育課程 ・試験 ・学生の入学 ・編入学 ・卒業 ・休学 ・復学 ・退学 ・再入学 ・除籍

		・転部・転科 ・賞罰 ・その他学部に関する事項 ・総長の諮問事項
--	--	---

本学の、教学面における管理運営体制を構成する主な会議体は以下の通りである。

＊部長会

「立教大学部長会規程」（資料５）第７条の規定に基づき、教育研究上の基本的な計画に関する事項など、大学及び大学院の教育研究の重要事項に関する事項を審議する。「部長会」は、同規程第２条の規定に基づき、全ての学部長（基礎となる学部をもつ研究科は、学部長と研究科委員長が同じ者である）が出席する。

＊教育改革推進会議

「立教大学教育改革推進会議規程」（資料６）第１条及び第７条の規定に基づき、学士課程教育及び大学院教育の改善を図り、その充実と高度化を推進するため、教育内容及び教育方法の改善に関する事項等を審議する。同規程第２条第３号の規定に基づき、総長が推進責任者（令和６（２０２４）年度は教学担当副総長）を指名するとともに、各学部長、各研究科委員長及び「大学教育開発・支援センター長」を構成員としている。

＊国際化推進会議

「立教大学国際化推進会議規程」（資料７）第１条及び第７条の規定に基づき、国際化の推進を図り、その充実と高度化を推進するため、大学並びに学部及び研究科の国際化推進等を審議する。同規程第２条第３号の規定に基づき、総長が推進責任者（令和６（２０２４）年度は国際化推進担当副総長）を指名するとともに、各学部長、各研究科委員長等を構成員としている。

＊自己点検・評価運営委員会

「立教大学自己点検・評価規程」（資料８）第３条第１項の規定に基づき、自己点検・評価を行う際の基本的枠組みを決定し、自己点検・評価活動の全体を運営・調整する。同規程第６条第１項の規定に基づき、総長が委員長（令和６（２０２４）年度は教学担当副総長）を任命するとともに、同規程第４条の規定に基づき、各学部長、各研究科委員長など、同規程第２条に規定される組織の長を構成員としている。

２．教授会以外の会議体の役割

本学部における教授会以外の会議体は以下のとおりである。

＊教務委員会

本委員会は数名の委員によって構成され、下記の学部の教務に関する事項を検討・協議する。

- (1) 学年暦や授業時間割等の編成に関する事項

- (2) 非常勤講師及びゲストスピーカーに関する事項
- (3) 履修の手引、授業計画書(シラバス)等の作成に関する事項
- (4) 授業評価の実施に関する事項
- (5) 学業成績に関する事項
- (6) 単位互換及び遠隔講義に関する事項
- (7) 既修得単位に関する事項
- (8) その他教務に関する事項

＊FD委員会

「立教大学ファカルティ・ディベロップメントに関する規程」に基づき、本学部の研究・教育・社会連携などに関する機能の開発、また、個々の教員及び教員組織としてそれらと関連する活動全般を行う上で必要な能力の開発を行う。また、教育力の向上や授業方法の改善につながる様々な企画や取り組みなどを学部の全構成員で検討・調整する。

＊自己点検・評価委員会

本委員会は学部の全構成員によって構成される委員会であり、自らの教育研究活動などの状況について自己点検をし、優れている点や改善点など自己評価を行う。その結果を踏まえ、教育研究水準の向上や活性化に向けて、研修会やワークショップなどを企画・開催し、継続的な活動を実施する。

＊倫理委員会

「立教大学ライフサイエンスに係わる研究・実験の倫理及び安全委員会規程」に基づき、本学部では、倫理や法律上の問題が発生することが予想される環境学に関する教育研究が実施されるため、主に研究・実験に関する倫理及び安全の管理を行う倫理委員会を設置する。本委員会は、数名の委員によって構成され、研究内容の点検を行うとともに、倫理委員会で扱う審査の内容や基準などについて、規程の整備などを行う。

＊入試委員会

入学試験に関する出題採点方法、実施方法などについて協議するなどの役割を担い、入学試験問題の作問・点検・採点を担当する数名の委員によって構成される。

＊キャリア支援・国際交流委員会

本委員会は、数名の委員によって構成され、キャリア教育について検討・協議し、多様なキャリアパスをサポートできるようなキャリア支援の構築に取り組む。

＊図書選定委員会

本委員会は数名の委員によって構成され、環境学に関する図書や研究雑誌をはじめ、オンラインジャーナルやデータベース、視聴覚資料など、日本語や日本語以外で書かれた多様な研究資料やデータの蓄積を図り、新たな知見を創出するための研究環境の整備及び充実について検討・決定する。

⑬自己点検・評価

以下の全学の仕組みに基づいて、本学部においても自己点検・評価を行うこととする。

1) 自己点検・評価運営委員会

本学では、1993年に「立教大学自己点検・評価規程」を制定及び施行し、自己点検・評価活動を行っている。本学の自己点検・評価の目的は、「本学における教育研究水準の向上を図り、本学の目的及び社会的使命を達成する」（同規程第1条）ことにある。

自己点検・評価の組織、手続き、権限等は同規程に定めている。自己点検・評価を実施する組織は、同規程第2条に基づき、「自己点検・評価を行う際の基本的枠組みを決定し、全体を運営・調整する」ことを任務とする「自己点検・評価運営委員会」（以下「運営委員会」という。）及び学部、研究科等に置かれ各組織の活動の自己点検・評価を行う「自己点検・評価委員会」（以下「点検・評価委員会」という。）である。

運営委員会の構成は、同規程第4条の規定に基づき、委員長（総長指名により、令和6（2024）年度は教学担当副総長が委員長を兼ねている。）、副委員長（令和6（2024）年度は研究推進担当副総長）及び点検・評価委員会の長としている。したがって、全ての学部及び研究科の長が各自己点検・評価委員会委員長として、運営委員会に出席していることになる。

全学的な自己点検・評価活動として、運営委員会を同規程第5条第1項の規定に基づき、年に2回以上開催している。原則として、前期（春学期）には当該年度の活動方針の確認、前年度の学部等の自己点検・評価結果のまとめ、自己点検・評価活動方法の確認及び毎年度数値を蓄積している大学基礎データと認証評価機関（公益財団法人大学基準協会）から示されている定量的な基盤評価の水準（入学定員に対する入学者比率、大学設置基準等による必要専任教員数等）の比較等を行い、後期（秋学期）には大学機関別認証評価で指摘を受けた事項に係る進捗状況の確認、諮問委員会（外部評価委員会）から指摘を受けた事項に係る進捗状況の報告、当該年度の自己点検・評価報告書の作成依頼を行っている。

学部、研究科等に置かれる点検・評価委員会の自己点検・評価活動のうち、学部及び研究科においては、同規程第9条の規定等に基づき、点検・評価活動を行い、毎年度「自己点検・評価報告書」を作成するとともに、運営委員会において全学で共有している。

2) 諮問委員会（外部評価委員会）

本学における教育・研究活動を改善するため諮問委員会（外部評価委員会）を毎年度開催している。委員には他大学教員、海外日系企業の支援経験を有する識者等を選任して、国際的な見地からの意見を求めている。また、諮問委員会の評価結果に対しては、次回開催時に対応状況を報告するなど、PDCAサイクルを適切に回しながら、評価を踏まえた変革を続けている。なお、Webサイトには毎年議事要録（日英併記）を公開している。

⑭情報の公表

1. 教育研究活動情報

【大学全体】

本学は、学校教育法施行規則第 172 条の 2 の規定に基づき、多様なステークホルダーに対し、以下のとおり、大学の基本的情報を「教育情報」及び「経営・財務情報」に分け、透明度の高い情報公開に努めている。

2. 教育情報

【大学の教育研究上の目的等に関する情報】

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/>

教育研究上の目的を、「立教大学学則」及び「立教大学大学院学則」（以下「学則等」という。）に明示しているとともに、ウェブサイトで公開している。

【教育研究上の基本組織に関する情報】

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/introduction/organization/>

学部、学科、専修、課程、研究科及び専攻等の名称等をウェブサイトで公開している。

【教育研究実施組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関する情報】

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/go9edr00000081kh-att/kyouin.pdf>

<https://univdb.rikkyo.ac.jp/search?m=home&l=ja>

学部学科（専修）ごと、研究科（専攻）ごとの教員組織と教員数をウェブサイトで公開している。また、教員が有する学位と業績については、「立教大学研究者情報」としてウェブサイトで公開している。

【入学者数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関する情報】

https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/evaluation/data/mknpps000001sg9e-att/02_students.pdf

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/career/>

入学者数、収容定員、在学者数、卒業者数及び修了者数をウェブサイトで公開している。また、進学者数、（企業別）就職者数、その他進学及び就職等の状況については、「就職・進学状況」としてウェブサイトで公開しているとともに、学部ごとに、決定者の多い上位 30 企業を併せて公開している。

【授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関する情報】

<https://rguide.rikkyo.ac.jp/>

<https://sy.rikkyo.ac.jp/web/>

カリキュラムのしくみ、履修規定、履修登録等について記載された履修要項や教務関連案内については、R Guide（ウェブサイト）で公開している。また、授業の目標、授業内容、授業計画等については、「シラバス」としてウェブサイトで公開している。

【学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関する情報】

<https://rguide.rikkyo.ac.jp/>

成績評価についての統一的基準及び卒業又は修了認定基準について、上記 R Guide（ウェブサイト）にリンクしている各学部・研究科等の履修要項に明示している。

【校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関する情報】

<http://www.rikkyo.ac.jp/campuslife/>

池袋及び新座の両キャンパスの紹介、図書館、学生食堂、診療所・保健室等の施設等については、「キャンパス案内」としてウェブサイトで公開している。

【授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関する情報】

<http://www.rikkyo.ac.jp/admissions/fees/>

<http://www.rikkyo.ac.jp/admissions/brochure/>

費用に関する情報については、学則等に規定するとともに、大学案内、大学院案内及びウェブサイトで公開しているほか、在学生の保証人へは別途郵送している。

【大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関する情報】

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/career/>

<http://www.rikkyo.ac.jp/campuslife/>

就職及び進路支援については「キャリアセンター」、奨学金支援については学生部、留学生支援については「国際センター」、学習支援については図書館、修学上及び人間関係等の相談については「学生相談所」並びにしょうがい者支援（発達障害を含む。）については「しょうがい学生支援室」が実施しており、ウェブサイトで支援情報を公開している。また、学生及び教職員向けに、学生支援関係の情報を網羅した冊子を毎年度配布するとともに、これについてもウェブサイトで閲覧可能にしている。

【「卒業又は修了の認定に関する方針」、「教育課程の編成及び実施に関する方針」及び「入学者の受入れに関する方針」（3方針）】

https://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/educational_policy/

「立教大学の教育目的と各種方針」として、大学全体及び各学部及び研究科の3方針を、大学ウェブサイトで公開している。

【その他（認証評価及び外部評価の結果、認可申請書等）】

<http://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/evaluation/>

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/reports.html>

認証評価結果及び外部評価結果（日英）、認可申請書等について、ウェブサイトで公開している。

3. 経営・財務情報

<https://rec.rikkyo.ac.jp/disclosure/reports/>

【事業計画書・報告書】

事業計画書及び事業報告書については、法人本部、大学、高等学校、中学校及び小学校を包含して法人ウェブサイトで公開している。

【財務情報】

事業活動収支計算書、資金収支計算書、活動区分資金収支計算書及び貸借対照表については、ウェブサイトで公開しているほか、年4回刊行している雑誌の季刊「立教」にも各年度の予算及び決算を掲載している。

⑮教育内容等の改善のための組織的な研修等

1. 授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に関する計画

【大学全体】

本学では、「立教大学ファカルティ・ディベロップメントに関する規程」（以下「FD規程」という。）（資料9）を策定し、これに基づきFD活動を行っている。また、毎年度、各学部及び研究科等は、教育改革推進会議推進責任者（令和6（2024）年度は教学担当副総長）からの依頼に基づいて「FD展開状況報告書」を作成するとともに、FD規程第6条の規定に基づき、毎年度同会議に報告している。

なお、上記自己点検・評価では、本学が選択する認証評価機関である公益財団法人大学基準協会が示す大学基準に沿って点検・評価するとともに、他大学の認証評価結果を調査し、全学的な視点から教育内容等の改善に資する取組みを行っているが、FD活動については、各学部研究科が独自に課題を設定し、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施することとしている。

【本学部独自の取組み】

1) 学部における教授法や教育技法の改善について考える研修会

教員を対象として、学部の教育理念に関わる基本理念の共有、多様な視座と多角的な視点を身に付けるためのリベラルアーツ教育にもとづく学習理論や授業法、フィールド教育・リーダーシップ教育等に関する教授法や教育技法の事例報告、学生指導・学生支援に関する理論や方法の共有、情報リテラシーやアカデミックリテラシーの習熟、教育機器利用法（オンラインツールの活用等）、視聴覚教材の可能性と有効な活用など、毎回テーマを設定し、学部における教授法や教育技法の改善について考える研修会をFD委員会の主催で2ヶ月に1回程度開催する。

2) 学部授業における効果的なICT活用に関する勉強会

教員を対象として、分析ソフトウェアの利活用、プレゼンテーションに必要なツール、より効果的なデータの視覚化の可能性などについて、情報共有、意見交換を行う勉強会をFD委員会の主催で2ヶ月に1回程度開催する。

3) 海外の教員及び研究者によるセミナー・講演会

教員を対象として、海外における大学の教育環境の事例報告、国際的な教育環境の紹介、授業内容及び方法に関する情報共有、コラボレーションの可能性を探るセミナーや講演会（オンラインを含む）を、キャリア支援・国際交流委員会が主催し、毎学期に1回開催する。

4) 研究教育活動に関わる学内部署との情報共有や意見交換の会（研修会・勉強会）

教職員を対象として、学部での研究活動を円滑に行うために、学内の以下の部署との情報共有や意見交換会、FD委員会の主催で必要に応じて不定期で開催する。

- * 図書館：情報リテラシー、研究資料やデータの蓄積・充実など
- * リサーチ・イニシアティブセンター：研究資金の獲得（研究計画、申請書作成等）
- * メディアセンター：教育研究活動のICT活用等
- * キャリアセンター：学生のキャリア支援等

2. 職員に必要な知識・技能の習得並びに必要な能力及び資質を向上させる研修等

本学では、大学教育開発・支援センターや人事課等が、教育改善に必要な知識及び技能を習得させ、その能力及び資質を向上させる等の目的で、シンポジウム及び研修を開催している。特に、大学教育開発・支援センターが開催しているシンポジウムでは、参加対象を全教職員（事務職員を含む。）としており、著名な研究者を招聘してその時々的高等教育に係る課題を扱うとともに、毎回小冊子（「大学教育開発研究シリーズ」）を刊行している。

また、大学設置基準等の一部を改正する省令（平成28年文部科学省令第18号）が平成29（2017）年4月1日から施行され、「大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修の機会」を設けること等が求められることを踏まえて、平成28（2016）年7月に

「立教大学におけるSDの実施方針・計画」※を制定した。これは、法人として既に定めている「職員の育成方針」を踏まえ、大学版としてまとめ直したものである。

※https://www.rikkyo.ac.jp/about/disclosure/educational_policy/

本学職員に求める職員像は、

- (1) 建学の精神に対する理解に努め、教育研究機関の一員として自覚・熱意・誇りを持ち、自ら考え、行動することができる職員
 - (2) 学院を取り巻く環境の変化や多様なステークホルダーに対応し、幅広い視野と経営的視点をもって、前例にとらわれず、業務改革・改善を推進していくことができる職員
 - (3) 組織の使命・目標を達成するために、マネジメント能力やリーダーシップを発揮できる職員
 - (4) 他者との協働において柔軟に対応できるバランス感覚のある職員
 - (5) 幅広い知識と高い専門性を持ち、業務の高度化に対応できる職員
 - (6) 明るく楽しく前向きな職場環境づくりに努め、他者を認め、活かし育てることができる職員
- としている。

上記「立教大学におけるSDの実施方針・計画」の「SDの実施計画」では、本学が行う研修を、1) 人事部が行う研修、2) 各組織が行う研修及び3) 職員各自が行う研修の3つに大別し、各種研修を経ながら職員の能力及び資質の向上に努めている。

このうち、1)については従前より法人人事部が毎年実施しており、立教大学の職員として必要な一般的な知識・技能の習得のための内定者研修、新入職員研修、4級職研修等の「資格等級別研修」(昇格要件となる研修)、政策立案、組織運営、業務マネジメント、人材育成・管理に関しての能力を培う管理職研修等の「職位別研修」、その他、外部団体主催の研修会や他機関への職員の派遣等による実務経験などの「目的別研修」の3つに分けられる。

2)については、各組織の業務に即した職務遂行能力及び職務姿勢を習得するために実施するものであり、組織別の集合研修、学内外へのプログラム・講習会等への参加等から構成される。

3)については、業務に関連した知識・技能習得を目的に実施するものであり、承認された各種研修の参加費用補助や自主勉強会・研修会の実施費用補助が活用できる。補助対象は、各種講習会補助、外国語講習会補助、自主勉強会・研修会補助及びTOEIC受験料補助の4種類である。

⑯社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

1. 教育課程内の取組について

本学では、各種プログラムの開催やガイドブック配布など年次に応じた段階的支援を行うキャリアセンターの支援と、学部の専門性を生かした学部独自の支援の両軸で、学生のキャリア・就職活動をサポートしている。興味のある分野や未来社会で担いたい役割など、将来に夢見る自分の姿を実際の現場へとつなげる、実践的なノウハウがある。

本学は、キャリアを「仕事・職業を含めた、自立した個としての自分らしい人生のあり方」と捉えており、就職＝ゴールとは考えていない。学生が卒業後の人生において、自らの意思によって将来を見据え、主体的に考えながら、自分でキャリアを切り拓いていく力が大切だと考えている。その力は、学生が過ごしてきた学生生活での学びや経験を基盤にして築かれるものである。そのため、1年次から参加できるプログラムをキャリアセンターや各学部が多数展開し、学生が多くの経験や多様な価値観に触れ、「学ぶ力」「考える力」を身につけられるキャリア支援を行っている。

専門科目のなかに様々なキャリア形成意識を醸成する科目を設け、初年次から自らの進路を考えるきっかけとする。1年次に履修する「環境リーダーシップEL1」では初年次教育の一環として、環境問題に取り組む企業や自治体等と連携し、将来の職業観について考える機会を設ける。また、実践系科目の「短期ワークエクスペリエンスA・B」「長期ワークエクスペリエンスA・B」では、就業体験活動を通じて社会的・職業的自立を図るために必要な能力の涵養に資するよう努めていく。さらに、学部の特性に応じたキャリア支援・就職支援を行うために、学部キャリアサポーターを配置して学部独自の支援を展開する。学部キャリアサポーターは、本学の全学部共通の制度として整備したものであり、学部教員やキャリアセンターと連携しながら、学部におけるキャリア教育の推進や国内外のインターンシップの実施など、学部独自のキャリア支援プログラムを展開することが主たる役割であり、本学部でも同様の制度を導入する。

2. 教育課程外の取組について

教育課程外の支援体制は、本学内組織のキャリアセンターが担う。キャリアセンターでは、就職ガイダンスや各種プログラム開催のほか、就職活動に関する情報・資料の公開、キャリア・就職についての個人相談など、数多くのサポートを行っている。これらは就職活動準備をしている3・4年次生はもちろん、1・2年次から利用できる。学年を問わずキャリア・就職に関する相談を受け付けており、学生生活の過ごし方や就職活動など、不安や質問がある時は気軽に利用することができ、キャリアカウンセリングに熟練した相談員がアドバイスする体制を整えている。

3. 適切な体制の整備について

学生の社会的・職業的自立への支援は、キャリア支援・国際交流委員会を中心として、教務委員会、学科長及び担当教員による体制を整える。また、全ての教員がアカデミックアドバイザーとして1学年あたり12名程度の学生を受け持ち、個別面談を定期的に行うことで、学生個々の状況を把握し、学部内で情報共有を行う。

●設置の趣旨等を記載した書類(資料)

<目次>

資料1	環境学部カリキュラムの構造	…2
資料2	環境学部履修モデル	…3
資料3	学校法人立教学院就業規則	…6
資料4	立教大学特別専任教授任用規程	…7
資料5	立教大学部長会規程	…8
資料6	立教大学教育改革推進会議規程	…9
資料7	立教大学国際化推進会議規程	…10
資料8	立教大学自己点検・評価規程	…11
資料9	立教大学ファカルティ・ディベロップメントに関する規程	…12

4年間のカリキュラム

	1年次	2年次	3年次	4年次
	導入期		形成期	
	完成期			
	環境学への入口として、「リベラルアーツとしての環境学原論」「環境科学入門」「環境フィールドスタディ」といった必修科目を履修。さらには選択科目として、環境課題の多角的なとらえ方や、社会科学・自然科学それぞれの基礎を学ぶ「基幹科目」によって、環境を学ぶ下地を身につけます。		人文社会科学・自然科学のさまざまな分野を含む50以上の「発展科目」から、自らの関心に応じて選択し、環境問題や持続可能な社会に対する視野を広げつつ、専門性を深めていきます。また、国内外の“現場”により深く入り込んだり、野外活動スキルを習得したりする「実践科目」で実践力を養います。	
	学びの集大成として、3年次の「専門演習」で自らの関心に応じて選んだ分野の学びを深めたうえで、学術的な研究と論文執筆に取り組む「卒業論文」か、環境課題の解決につながる活動に取り組む「卒業プロジェクト」のいずれかを選ぶことができます。また、全学生が交流する「環境コロキウム」で、それぞれの視点・視点のつながりを考え、「対話」と「協働」のスキルを磨きます。			
必修科目	● リベラルアーツとしての環境学原論1 ● 環境科学入門1 ● 環境フィールドスタディ1		● リベラルアーツとしての環境学原論2 ● 環境科学入門2	
基幹科目	基幹科目A:環境総合 ● 気候変動とカーボンニュートラル ● 生物多様性とネイチャーポジティブ ● 環境汚染・公害とわたしたちの社会 ● 資源循環とサーキュラーエコノミー など		基幹科目B:人間と社会 ● 自然環境と人間社会 ● 環境倫理 ● 環境教育・ESDとシティズンシップ ● 環境法入門 ● 環境政策・経済学入門 など	
			基幹科目C:科学と技術 ● 環境統計学基礎 ● 環境物理学基礎 ● 環境化学基礎 ● 環境生物学基礎 ● 環境地学基礎 など	
発展科目			● 環境史 ● 環境とアート ● 国際環境法 ● 環境行政法 ● 環境ガバナンス ● 市民参加と合意形成 ● 環境と国際経済	
			● 気候・エネルギー政策論 ● 環境マーケティング ● 環境社会学 ● 環境アクションと市民社会 ● 環境の紛争解決学 ● 社会変革の環境教育学・ESD論 ● 参加と対話のアシリテーション	
			● 持続可能な開発と国際協力 ● 分子生物学 ● 地球流体力学 ● 環境数値解析 ● 環境毒性学 ● 環境化学実習	
			● 材料化学 ● 海洋生物学 ● 陸上生物学 ● 環境生命実習 ● 都市環境学 ● 資源循環学 ● 気候学	
			● 気象学実習 ● 科学史・科学哲学 ● ライフサイクルアセスメント など	
実践科目	● 環境リーダーシップEL1		● 環境リーダーシップEL2 ● 環境リーダーシップEL3 ● 環境リーダーシップEL4 ● 環境フィールドスタディ2	
			● 短期/長期フィールドワークA～E ● 短期/長期ワークエクスぺリエンスA,B ● プロジェクト実習A～D	
			● アウトドア実習A,B ● インタープリテーション実習 など	
卒業論文・プロジェクト関係科目			● 専門演習1-2 ● 卒業論文・プロジェクト演習1-2 ● 卒業論文 ● 卒業プロジェクト ● 環境コロキウム1-2	

(1) 文理融合環境総合系履修モデル 《気候変動》

総合系	人文社会学系	自然科学系	実践系
-----	--------	-------	-----

科目群	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
必修科目	リベラルアーツとしての環境学原論 1・2 環境科学入門 1・2 環境フィールドスタディ 1			
基幹科目A 環境総合	気候変動とカーボンニュートラル	資源循環とサーキュラーエコノミー 環境とデータサイエンス		
基幹科目B 人間と社会	環境倫理	環境政策・経済学入門 環境法入門 環境教育・ESDとシティズンシップ 環境学のための社会調査法入門		
基幹科目C 科学と技術		環境統計学基礎 環境物理学基礎 環境地学基礎 環境デザイン・マネジメント		
発展科目		気候・エネルギー政策論 エネルギー科学 地球環境史	環境心理学 環境と国際政治 環境と国際経済 サステナビリティ経営論 環境コミュニケーション 地球流体力学 資源循環学 都市環境学 ライフサイクルアセスメント	環境アクションと市民社会 国際環境法 気候学 気象学実習
実践科目	環境リーダーシップEL1・EL2	プロジェクト実習A プロジェクト実習B	長期ワークエクスペリエンスA	
卒業論文または卒業プロジェクト			専門演習 1・2	卒業論文・プロジェクト演習 1・2 卒業論文または卒業プロジェクト 環境コロキウム 1・2
導入科目	大学への物理学 大学への数学	自然科学のための数学		

(2) 人文社会科学系履修モデル 《環境政策》

総合系	人文社会学系	自然科学系	実践系
-----	--------	-------	-----

科目群	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
必修科目	リベラルアーツとしての環境学原論 1・2 環境科学入門 1・2 環境フィールドスタディ 1			
基幹科目A 環境総合	環境汚染・公害とわたしたちの社会	資源循環とサーキュラーエコノミー 環境アセスメントと持続可能な開発		
基幹科目B 人間と社会		環境政策・経済学入門 環境法入門 環境倫理 環境教育・ESDとシティズンシップ 環境学のための社会調査法入門		
基幹科目C 科学と技術		環境統計学基礎 環境化学基礎 環境デザイン・マネジメント		
発展科目		環境ガバナンス 法学概論	市民参加と合意形成 環境と国際政治 気候・エネルギー政策論 環境行政法 環境と人権 社会変革の環境教育学・ESD論 参画と対話のファシリテーション 環境社会調査法実践 環境とアート 都市環境学	持続可能な開発と国際協力 環境正義のための紛争解決学 共創のコーディネーション
実践科目	環境リーダーシップEL1・EL2	長期フィールドワークB 環境リーダーシップEL3・EL4	長期ワークエクスペリエンスB プロジェクト実習A	
卒業論文または卒業プロジェクト			専門演習 1・2	卒業論文・プロジェクト演習 1・2 卒業論文または卒業プロジェクト 環境コロキウム 1・2
導入科目	大学への化学 大学への数学			

(3) 自然科学系履修モデル 《生態生物学》

総合系 人文社会学系 自然科学系 実践系

科目群	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次
必修科目	リベラルアーツとしての環境学原論 1・2			
	環境科学入門 1・2			
	環境フィールドスタディ 1			
基幹科目A 環境総合	生物多様性とネイチャーポジティブ	環境データサイエンス	環境アセスメントと持続可能な開発	
基幹科目B 人間と社会		環境の歴史 自然環境と人間社会 環境倫理	環境法入門 国際環境法 環境ガバナンス	
基幹科目C 科学と技術		環境化学基礎 環境生物学基礎 環境統計学基礎		
発展科目		環境生命実習 微生物学 陸上生物学 気候・エネルギー政策論	環境化学実習 海洋生物学 分子生物学 地球化学 食品化学 環境毒性学	生物生態学 地球環境史
実践科目	環境リーダーシップEL1・EL2	環境フィールドスタディ 2	野外活動実習	
		環境リーダーシップEL3・EL4	長期ワークエクスぺリエンス	
卒業論文または卒業プロジェクト			専門演習 1・2	卒業論文・プロジェクト演習 1・2 卒業論文または卒業プロジェクト 環境コロキウム 1・2

資料 3 学校法人立教学院就業規則

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料 3

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料 4 立教大学特別専任教授任用規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料 4

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料 5 立教大学部長会規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料 5

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料6 立教大学教育改革推進会議規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料6

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料 7 立教大学国際化推進会議規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料 7

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料 8 立教大学自己点検・評価規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料 8

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

資料9 立教大学ファカルティ・ディベロップメントに関する規程

1 書類等の題名

「設置の趣旨等を記載した書類」資料9

2 出典

本学規程

3 引用範囲

全文

4 その他の説明

従前より公表していない規程のため、公表を差し控える。

学生の確保の見通し等を記載した書類

目次

(1) 新設組織の概要

- ①新設組織の概要..... - 2 -
- ②新設組織の特色..... - 2 -

(2) 人材需要の社会的な動向等

- ①新設組織で養成する人材の全国的、地域的、社会的動向の分析..... - 4 -
- ②中長期的な 18 歳人口等対象人口の全国的、地域的動向の分析..... - 6 -
- ③新設組織の主な学生募集地域..... - 7 -
- ④既設組織の定員充足の状況..... - 8 -

(3) 学生確保の見通し

- ①学生確保に向けた具体的な取組と見込まれる効果..... - 9 -
 - ア 既設組織における取組とその目標..... - 9 -
 - イ 新設組織における取組とその目標..... - 10 -
 - ウ 当該取組の実績の分析結果に基づく、新設組織での入学者の見込み数..... - 11 -
- ②競合校の状況分析（立地条件、養成人材、教育内容と方法の類似性と定員充足状況）.... - 13 -
 - ア 競合校の選定理由と環境学部との比較分析、優位性..... - 13 -
 - イ 競合校の入学志願動向等..... - 15 -
 - ウ 学生納付金等の金額設定の理由..... - 15 -
- ③学生確保に関するアンケート調査..... - 16 -
 - ア 高校生アンケートの概要..... - 16 -
 - イ 高校生アンケートの結果 - 17 -
- ④人材需要に関するアンケート調査等..... - 18 -
 - ア 人材需要アンケートの概要..... - 18 -
 - イ 人材需要アンケートの結果..... - 18 -

(4) 新設組織の定員設定の理由..... - 19 -

(1) 新設組織の概要

①新設組織の概要

新設組織	入学定員	編入学定員	収容定員	所在地 (教育研究を行うキャンパス)
立教大学 環境学部環境学科	204 名	なし	816 名	東京都豊島区西池袋 3-34-1

②新設組織の特色

■養成する人材像、学位の分野を踏まえた新設組織の特色

立教大学（以下、「本学」という）は、環境学部環境学科（以下、「本学部」という）を新設することを予定している。

本学部の教育研究上の目的は「自然環境と人間の関係を複合的な視点でとらえ、環境問題の解決と持続可能な社会への変革に貢献できる力の育成を目的とする。文理の枠を超えて幅広く知識を身につけ、現実の課題と結びつけながら活用できる能力と、環境正義の概念を理解し、自らの強みを活かしながら、対話と協働の関係を構築できるリーダーシップを養う。」である。

この目的に基づいて、次のような人材を養成する。

- 1) 環境に関する基礎知識を自然科学・社会科学・人文科学の観点から幅広く身につけ、現実の課題と結びつけながら理解できる人材
- 2) 自然環境を科学的に捉え、社会経済システムに関わる技術と学識をそれぞれの立場で活用できる人材
- 3) 様々な関係者や異なる分野の専門家を対話を通じてつなぎ、協働の関係を構築しながら、地域社会及び国際社会に貢献できる人材
- 4) “Environmental Justice”（環境正義）の概念を理解し、環境問題の解決とサステナブル社会への変革のために行動できる人材

学位の分野は、本学のこれまでの教育・研究の実績と成果を基盤として、理学関係、法学関係、経済学関係の学際・複合領域とする。

本学部カリキュラムの特色は、次の4点である。

第一に、文理を融合したリベラルアーツ教育を行う。本学が創立以来、150年にわたって実践してきたリベラルアーツ教育を「環境学」をテーマに取り組み、文理を融合したカリキュラムを編成する。また、本学の既設組織である理学部、法学部、経済学部等で積み重ねてきた教育研究の実績を基盤に、「環境学」が有する学際性に配慮した多様な科目群を展開する。

第二に、フィールドで実践力を身につける。1年次必修科目であるフィールドスタディに始まり、4年間で国内外に赴き、その土地ごとの環境問題を実際に経験するだけでなく、フィールドワークやプロジェクト実習といった実践系科目では、その課題に取り組み、環境問題の解決に貢献する実践力を身につける。

第三に、対話と協働を導くリーダーシップを身につける。本学では、「チームの目標達成に向けて全員が発揮できるリーダーシップ」を立教型リーダーシップと呼び、全学共通科目としてグローバルリーダーシッププログラム（GLP）や経営学部によるビジネスリーダーシッププログラム（BLP）を展開してきた実績と経験を活用して、環境学部独自のプログラムとして、様々な専門家や利害関係者、ステークホルダーとの間で対話と協働を導く力を育成する「環境リーダーシッププログラム（ELP）」を展開する。

最後に、“Environmental Justice”「環境正義」の理念に基づく社会変革への意思を共有する。環境問題が地域間、世代間等で不公正性を有していることを認識し、「環境正義」の理念を尊重しながら、環境課題の解決にあたることができる力を育むカリキュラムを編成する。

■新設組織と関連する既設組織

新設する環境学部環境学科は、本学が創立以来実践してきたリベラルアーツ教育と、既設組織の教育研究活動の実績に基づいて設置するものであり、特に、理学部化学科、法学部法学科、経済学部経済学科を基盤とするものである。なお、これら学部学科において新設組織開設後の改編等の予定はない。

既設組織	入学定員	編入学定員	収容定員	所在地 (教育研究を行うキャンパス)
立教大学 理学部化学科	77 名	なし	308 名	東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学 法学部法学科	360 名	なし	1,440 名	東京都豊島区西池袋 3-34-1
立教大学 経済学部経済学科	332 名	なし	1,328 名	東京都豊島区西池袋 3-34-1

(2) 人材需要の社会的な動向等

①新設組織で養成する人材の全国的、地域的、社会的動向の分析

「高等教育をはじめとする教育の在り方について、国としての方向性を明確にするとともに、誰もが生涯にわたって学び続け学び直しができるよう、教育と社会との接続の多様化・柔軟化を推進する」ことを目的として、令和3年12月に設置が閣議決定された、内閣総理大臣を議長とする教育未来創造会議による、令和4年5月10日付「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」では、脱炭素化の推進にあたり「2050 カーボンニュートラル表明自治体のうち、約9割が外部人材の知見を必要とする」ことから、これらの知見を有するいわゆる「グリーン人材」が不足することを指摘し、今後の基本的考え方の一つに「社会課題への対応、SDGs への貢献」を挙げて「国民全体のデジタルリテラシーの向上を図るとともに、地球規模の課題である脱炭素社会の構築、再生可能エネルギーの活用、地方創生などの課題解決による価値創造を推進し、Society5.0 と持続可能な開発目標（SDGs）達成の双方を実現する『Society5.0 for SDGs』に向けて取り組む」こととしている。また、目指したい人材育成の在り方として、「デジタル、人工知能、グリーン（脱炭素化など）、農業、観光など科学技術や地域振興の成長分野をけん引する高度専門人材の育成」を重視することが示された。

また、令和6年5月14日に閣議決定された、文部科学省と環境省による「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」では、異常高温等の気候変動の危機を踏まえて2050年カーボンニュートラルの実現をはじめとした持続可能な社会への変革が急務であることを指摘し、社会変革における若者の参画、環境教育等に取り組む人材の確保・育成に向けて取り組んでいくことが示された。こうした国・政府等の「グリーン人材」育成に向けた諸方針について、本学部はその教育・研究の面から貢献することができるものである。

さらに、前掲した「環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針」においては、環境教育で育みたい力として、

- ・問題や現象の背景を理解する力
- ・多面的かつ総合的なものの見方を重視し体系的に思考する力（システム思考）
- ・物事を批判的にとらえ代替案を思考する力（クリティカル思考）
- ・創造的に思考する力
- ・未来像を予測して計画を立てる力
- ・データや情報を分析する力
- ・協調的に課題を解決する力
- ・複雑さやリスクに対応する力
- ・コミュニケーションをとる力
- ・リーダーシップを発揮する力

・シティズンシップを発揮して市民として参加する力 など

を例示しており、これらは、前述した本学部の育成する人材像とも合致するものである。

続けて、同方針では、環境教育の実践において大切にしたい点について、

- ・環境「の中で」「について」「のため」の教育を状況や目的に応じ組み合わせること
- ・人々の個性や多様性を尊重し、安心して参加できる環境を整えること
- ・多様な立場や状況、価値観の人々との対等な出会いを促すこと
- ・学習者の気づきや力を引き出し、学び合いを促進すること（ファシリテーション）
- ・主体は「教える人」ではなく「学ぶ人」であることを意識し、自己決定を尊重すること
- ・学習者自らが感性を働かせて考えるプロセスを設けること
- ・各自の考えや学びの結果を共有し、振り返るプロセスを設けること
- ・事物や事象の背後にある意味や関係性を解くこと（インタープリテーション）
- ・人と人、人と自然、人と地域・社会のつながりを十分に意識すること
- ・経済や社会との関係に留意し、環境、経済、社会の統合的な向上を意識すること
- ・活動に遊びや創造の要素を取り入れること
- ・日常での体験に加え、旅などの非日常的な体験において感動や学びを引き出すこと
- ・特定の結論や価値観に誘導しないよう留意すること
- ・個人の行動だけでなく、組織や地域等における集団の取組を重視すること

などを示しており、この点も、本学部の特色と適合するものであり、本学部が育成しようとする人材への社会的需要が認められると考える。

なお、本学が位置する東京都豊島区では、「豊島区環境基本計画（2019-2030）」において、「みんなが主役—文化とともに発展するエコシティとしま」を推進している。本学部はこのような地域課題や豊島区の重点政策に対しても、教育研究の両面でアプローチが可能であり、本学部が輩出する人材への需要は地域的にも大いに存在するものである。

学校法人河合塾がまとめた「2024 年度私立大入試結果」によれば、表 1 のとおり、私立大学全体の志願者総数が令和 4（2022）年度から令和 6（2024）年度にかけて減少傾向であることに對し、本学部の学部系統としてもっとも近い「総合・環境・情報・人間」系統は、同 3 年度間で大きな増減がなく推移しており、今後も安定して志願者を集めることが期待できる。

【表 1：私立大学志願者数の推移】

	2022 年度	2023 年度	前年比	2024 年度	前年比
全体	3, 206, 705 人	3, 081, 623 人	96. 1%	3, 046, 822 人	98. 9%
総合・環境・ 情報・人間	132, 250 人	132, 697 人	100. 3%	132, 661 人	99. 9%

（出典：学校法人河合塾「2024 年度私立大入試結果」より作成）

【参考資料 URL】

- 1) 我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/teigen.html>
- 2) 環境保全活動、環境保全の意欲の増進及び環境教育並びに協働取組の推進に関する基本的な方針
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01376.html
- 3) 豊島区環境基本計画（2019-2030）
<https://www.city.toshima.lg.jp/148/kuse/shisaku/shisaku/kekaku/008719.html>
- 4) 河合塾「2024 年度私立大入試結果」
https://www.keinet.ne.jp/exam/past/pdf/24s_zentai.pdf

②中長期的な 18 歳人口等対象人口の全国的、地域的動向の分析

令和 7 年 1 月の中央教育審議会大学分科会（第 181 回）の資料によれば、18 歳人口は 2026 年の 109 万人から 2035 年には 96 万人と、およそ 13 万人減少するとされており、全国的に 18 歳人口の減少には歯止めがかかっていない。また、本学が立地する東京都と埼玉県、またこれに隣接する千葉県及び神奈川県（以下「一都三県」という）の 18 歳人口の推計においても全国と同様に減少傾向にある（表 2）。

【表 2：一都三県の 18 歳人口予測】

（単位：万人）

	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034
埼玉県	6.2	6.1	6.1	6.0	6.0	5.9	5.9	5.9	5.6
千葉県	5.2	5.1	5.1	5.1	5.0	5.0	5.0	4.9	4.7
東京都	10.5	10.6	10.6	10.3	10.3	10.4	10.6	10.6	10.3
神奈川県	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.3	7.3	7.3	7.0

（出典：株式会社教育企画センターが学校基本調査をもとに作成した資料

<https://www.pcpe.jp/blog/20240325-223/>を加工して作成）

その一方で、大学（学部）への進学者の推移を見ると、表 3 のとおり本学における入学者の主な出身都道府県である一都三県では大きく減少することなく、維持ないし増加傾向で推移している。本学では、志願者の約 8 割が一都三県の出身者で構成されているため、全国的な 18 歳人口の減少傾向の影響を一定程度受けるものの、大学進学率の上昇に伴って、今後も入学者数を確保できることが見込まれる。よって、新設学部 of 十分な定員充足が可能であるといえる。

【表 3：全国および一都三県の大学（学部）進学者数の推移】

(単位：人)

	令和 3 (2021)	令和 4 (2022)	令和 5 (2023)	令和 6 (2024)
全国	534, 312	546, 589	546, 498	535, 721
埼玉県	31, 214	32, 130	32, 155	31, 792
千葉県	26, 437	27, 354	27, 277	26, 830
東京都	66, 352	68, 782	68, 980	68, 115
神奈川県	39, 004	40, 847	41, 045	40, 364

(出典：令和 3 年度～同 6 年度学校基本調査をもとに作成)

【参考資料 URL】

中央教育審議会大学分科会（第 181 回）資料

https://www.mext.go.jp/content/20250128-mxt_koutou02-000039884_14.pdf

③新設組織の主な学生募集地域

■主な学生募集地域

本学既設学部的一般選抜における出身高校所在地域別の入学者数は表 4 のとおりであり、全体の 78.9%が一都三県で構成されている。こうした状況を踏まえて、本学部では一都三県を主な学生募集地域として設定する。ただし、環境問題は都市部でのみ生じているわけではないこと、学生の多様化を促す意味からも、全国から学生を確保することができるよう周知・PR活動に取り組む。

【表 4：令和 6（2024）年度一般選抜の出身高校所在地域別状況】

	志願者数	合格者数	入学者数
北海道・東北	1, 562	388	67
北関東	3, 050	819	153
一都三県	44, 399	12, 987	2, 101
甲信越・東海	4, 022	1, 143	204
近畿	828	150	28
中国	600	156	20
四国	301	82	14
九州・沖縄	1, 375	297	54
その他（外国等）	358	72	19
合計	56, 495	16, 094	2, 660

また、資料 1 のとおり、本学部を設置する東京都の状況を見ると、一都三県に所在する高等学校の出身者でおよそ 7 割を構成しており、本学既設学部の状況と同様の傾向が見て取

れる。さらに、日本私立学校振興・共済事業団が作成する「私立大学・短期大学等入学志願動向」によれば、東京都の大学・学部の定員充足状況（資料１）は直近３年度に 103%前後で推移しており、学生の確保が十分に可能な地域であると言える。

④既設組織の定員充足の状況

既設組織の入学定員の直近５年間の充足状況については、資料２のとおりである。いずれの学科においても、年度による変動は見られるものの、おおむね安定して 0.95～1.00 で推移していることから、本学のPR・広報活動が一定の成果を挙げており、新設学部においても定員の充足は可能であると考ええる。なお、一部の既設組織において、0.9を下回る入学定員充足状況が生じているが、翌年度には学生を十分に確保できているため、大きな問題は生じていない。

（３）学生確保の見通し

①学生確保に向けた具体的な取組と見込まれる効果

ア 既設組織における取組とその目標

学生確保に向けた取り組みについては、学部学科別ではなく全学部学科共通で展開している。そのため、以下に記載する数値は大学全体で集計したものであり、次のとおりである。

また、既設学科等の学生募集のためのPR活動の過去の実績については、資料3のとおりとなっており、学生確保に向けて戦略的に推進する入学センターと各学部を中心に全事務局の職員が協力し、これらの取り組みを推進している。

■オープンキャンパスの開催

令和6（2024）年度オープンキャンパスは8月2日、3日、5日に池袋キャンパスにて3日間、8月7日、8日に新座キャンパスにて2日間の計5日間にわたって実施した。5日間の合計来場者数は47,800人であった。

池袋キャンパスの主要プログラム（大学説明会、入試説明会、各学部説明、各学科体験授業、留学説明会、キャリア説明会、立教生によるトークライブ、立教生によるキャンパスツアー）を事前予約制にして実施したが、体験授業等においては予約開始後数分で満席となるような学科もあり、高校生等の参加者からのニーズが高いことがわかる。

■高等学校での進学ガイダンス

高等学校での進学ガイダンスに年間を通じて参加し、高校生に対して、大学の特色、各学部の内容、学費・奨学金、取得資格、進路状況、入試制度等について説明を行っている。令和6（2024）年度においては、延べ230校で実施した（模擬授業を含む）。

■高等学校教員対象入試説明会

毎年6月上旬に、高等学校教員対象の大学説明会をオンラインで実施している。教育の特色、入試結果、入試制度、キャリア・就職の特長について周知するとともに、個別質問にも対応している。令和6（2024）年度は事前申し込み318人、ライブ配信時の視聴者は235人であった。

■進学相談会

毎年度4月から翌年3月まで、受験生及び保護者対象の進学相談会に参加し、個別相談に応じるとともに、大学パンフレット等を配布している。令和6（2024）年度は全国148会場に参加した（資料参加を含む）。

なお、令和5（2023）年8月に開催したオープンキャンパスへの来場者のうち、同年度に

実施した入試の受験状況は表5のとおりである。本学のオープンキャンパスは、中学生から高校3年生、既卒者まで幅広く来場することから、来場者数のうち概ね2割強が当該年度に実施する入試の対象者となっている。オープンキャンパスに来場した高校3年生・既卒者のうち、およそ1/3程度が本学を志願しており、さらに合格した場合はうち5～6割程度が入学していることがわかる。こうした状況から、オープンキャンパス来場者の本学への志願度合いは強く、PR活動としてのオープンキャンパスは本学にとって有意義な活動といえる。

【表5：令和5（2023）年度オープンキャンパス来場者の入試出願動向】

	来場者数 (約)	高3・既 卒 (a)	志願者数 (b)	志願率 (=b/a)	合格者数 (c)	入学者数 (d)	入学率 (=d/c)
8月3日	15,000	3,512	1,364	38.8%	419	226	53.9%
8月4日	14,700	3,613	1,383	38.3%	471	253	53.7%
8月5日	14,200	2,808	932	33.2%	272	161	59.1%

イ 新設組織における取組とその目標

■オープンキャンパス

本学ではこれまで、例年8月上旬にオープンキャンパスを開催しており、令和6（2024）年度の池袋キャンパスでのオープンキャンパスにおいて、「新設学部構想内容の説明」および「環境学の学びの体験授業」を実施した。

- ・8月2日（金）：学部構想内容の説明（2回）12:40～13:30、15:20～16:10 各回185名
- ・8月3日（土）：学部構想内容の説明（2回）12:40～13:30、15:20～16:10 各回185名
体験授業（2回）11:20～12:10、14:00～14:50 各回185名

全プログラムを事前予約制とし、予約はすべて満席となった。参加した高校2年生、高校1年生からは、事後のアンケートで「興味が湧いた」、「もっと詳しく知りたい」、「入試科目を早く知りたい」、「受験したい」等のコメントが見られ、一定のPR効果があったと考えられる。

なお、令和7（2025）年度は本学部の入試広報も盛り込んだ内容を企画し、本学部の特設コーナーを設けて教育の理念や特色、カリキュラム、入試制度について紹介するほか、令和6（2024）年に引き続き、環境学の実際の学びに関する体験授業も用意して高校生の興味を喚起するように努める計画である。また、高校生や保護者からの入試制度に関する相談につき、個別に対応する機会も設定する。オープンキャンパスへの参加者や資料請求を行った者に対しても、本申請に関する認可後に改めて入試要項等の適切な情報提供を速やかに行う。

■リーフレット、大学ウェブサイト内の専用ページ、パンフレット

新設学部の学生確保に向けた具体的な取組として、リーフレットを作成し、本学と連携関係にある高等学校を中心に、本学部の新設および構想内容について高校教員との懇談会に

て説明を行った後に、日を改めて各高等学校に訪問し、高校生を対象に本学部の説明会を実施している。本学部の開設時期や入学者選抜の方式について、決まり次第知らせてほしい等の要望が寄せられるなど、高等学校関係者から非常に高い関心が示されている。また、大学ウェブサイト内に専用の特設サイトを設け、随時情報を更新し、積極的にWEB上でもPR活動を行っている。さらに、本学部のパンフレットを作成し、本学部の設置認可後には、高等学校関係者と受験生・保護者を対象とした入試広報活動をより積極的に展開する計画である。

■高等学校関係者を対象とした入試広報活動

これまで、本学では 230 校以上の高等学校を訪問して本学の教育研究活動や入試制度について説明を行ってきた。令和 6（2024）年度は、高等学校教員対象の大学説明会を開催し、個別の質問に対応したところである。

新設組織の開設前年度となる令和 7（2025）年度においても、既設学部と本学部の入試広報のためにこれらの活動を実施する。特に、本学に対して継続的に入学実績が確認できる高等学校に対しては、本申請に関する認可後速やかに、その事実を伝達し、今後の入試広報活動の予定を告知する文書を発送する計画である。その後、高等学校を直接訪問して、本学部の教育の特色や入試制度について説明を行う。また、本学部の設置に伴い、令和 8（2026）年度入試に向けた広報は、環境関連分野や社会課題・地域課題に関連する教育活動に力を入れている全国の高等学校にも範囲を拡大する計画である。これらの様々な機会を活用して、新設を目指す本学部に関する情報を伝えることができるように努める。

■高等学校在学中の生徒や保護者を対象とした入試広報活動

受験情報誌・ウェブサイトや進学相談会の際に資料請求のあった者に対する大学案内・入試関連資料の送付のほか、インターネット（本学のウェブサイトや受験情報サイトのウェブサイトへの情報掲出）やオープンキャンパスを通じた直接的な情報提供を行っている。令和 7（2025）年度は本申請の認可書受領後、速やかに本学ウェブサイトで学生募集に関する情報提供を開始し、高校訪問によって高校関係者に伝達する情報をウェブサイトからも入手することができるようにする。

ウ 当該取組の実績の分析結果に基づく、新設組織での入学者の見込み数

令和 6（2024）年度の既設組織の入学者実績においては、一般選抜が 55.0%、学校推薦型選抜が 35.5%、総合型選抜 9.5%の構成割合となっている。このうち、学校推薦型選抜は、本学を設置する学校法人内に設置する高等学校、建学の精神を共有するキリスト教の日本聖公会に連なる高等学校、本学への入学実績や地域特性・教育内容などを総合的に検討し選定した高等学校に推薦を依頼した結果である。本学部の開設に際しても、引き続き各高等学校との連携関係を強化していくことで、入学定員 204 名の 35%程度を見込む。

また、表3（前掲）のとおり、令和5（2023）年度オープンキャンパス来場者のうち当該年度の対象となる高校3年生と既卒者について、33～38％程度が本学を志願している。令和6（2024）年度に実施したオープンキャンパスの本学部関連プログラムにおいては、全6回で1,000名を超える高校生が参加しており、このうち33～38％程度が志願したとすると400名程度の志願者を得ることが見込まれる。令和7（2025）年度も引き続きこうした取り組みを積極的に進めることで、一般選抜で入学定員204名の55％程度を見込む。

②競合校の状況分析（立地条件、養成人材、教育内容と方法の類似性と定員充足状況）

ア 競合校の選定理由と環境学部との比較分析、優位性

競合校の選定理由としては、学校種の類似性は、本学と同様の「私立大学（4年制）」であること、学問分野の類似性は、当該大学の教育課程の編成状況を踏まえ、学校基本調査の学科系統分類表の中分類を参考にしつつ、学校法人河合塾の分類による学際系「環境」の大学・学部であること、所在地の類似性については、新設組織における主な学生募集地域としている「東京都」と「神奈川県」に所在している大学の教育組織であること、学力層の類似性は、学校法人河合塾による偏差値を参考に新設組織が想定する学力層と同程度の教育組織であることから、以下の3大学を選定した。

- ・慶応義塾大学環境情報学部
- ・法政大学人間環境学部
- ・東京都市大学環境学部

■競合校との比較分析

教育内容と方法

取り上げた3大学のいずれも、環境学系の学部系統と位置付けることができるが、それぞれに教育研究の軸を置く領域があったうえで、環境学が有する学際性を担保している。本学部の大きな特徴は、本学が建学以来、実践を積み重ねてきたリベラルアーツ教育を基盤に、文理を融合・横断する教育課程の編成にあり、自然科学系の科目群、人文・社会科学系の幅広い科目群からそれぞれ要件単位数以上を修得する。また、高等学校で文系に重点を置いて学んできた学生であっても、大学での学びへとつなぐ理系の導入科目群を用意することで、文系・理系の境界なく学ぶことができるカリキュラムとしている。

また、本学部で新たに「環境リーダーシッププログラム（略称：ELP）」を開発し展開する点も他大学にはない大きな特徴である。本学が二十余年以上にわたって、「立教型リーダーシップ」と名付け経営学部や全学共通科目で実践してきた、「チームの目標を達成するために全員発揮型のリーダーシップ」を育む教育を、新たに環境学部のプログラムとして開発する。これからのグリーン人材に求められるスキルの一つとしてリーダーシップを位置付け、地方自治体や企業等と連携し、EL1～EL4の実践的な科目を展開する。本学のリーダーシップ教育は企業人事担当者からも高い評価を得ており、本学部を卒業する学生に対

しても高い評価を得られることが期待できる。

入試

本学部が予定している一般選抜（一般入試）では、文系方式と理系方式の二通りの方法で選抜を実施することとしており（表6参照）、大学入学共通テスト利用入試においても、文系と理系の双方で科目選択が可能な入試方法とする。このように、志願者が高等学校において力を入れて取り組んだ教科・科目で受験することができる入試方法を用意することで、多様な背景をもつ学生で本学部が構成されることを目指している。こうした入試方法は、併願が想定される競合校と比較すると特徴的であり、より多くの志願者に受験機会を確保するものである。

【表6：環境学部の一般入試実施予定科目】

文系方式	国語	「現代の国語」、「言語文化」（漢文を除く）、「論理国語」、「文学国語」、「古典探究」（漢文を除く）
	地理歴史、公民、数学	「地理総合、地理探究」、「歴史総合、日本史探究」、「歴史総合、世界史探究」、「公共、政治・経済」、「数学」（数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学A、数学B〔数列〕、数学C〔ベクトル〕）のうちから1科目選択
	外国語	英語資格・検定試験のスコア、もしくは大学入学共通テスト「外国語（『英語』）」のいずれか
理系方式	理科	「物理」（物理基礎、物理）、「化学」（化学基礎、化学）、「生物」（生物基礎、生物）のうちから1科目選択
	数学	「数学」（数学Ⅰ、数学Ⅱ、数学Ⅲ、数学A、数学B、数学C）
	英語	英語資格・検定試験のスコア、もしくは大学入学共通テスト「外国語（『英語』）」のいずれか

修学支援

本学では全ての学部にアカデミックアドバイザーを置くことを定めている。本学部の場合、基幹教員1名あたり一学年12～14名程度の学生を担当し、初年次からの履修指導、学生生活全般に関する相談を行う。特に、本学部においては、自然科学・人文科学・社会科学系の科目を広範に展開することから、学生が年度当初に履修計画を作成するうえで、教員からのアドバイジングが重要である。定期的実施する個別面談で、学生の学びに対する意欲の確認と今後のキャリア形成に向けた助言を行い、学生の修学における問題点を解消できるように努める。

また、本学では全学部に共通する奨学金制度を運用しており、奨学目的の奨学金制度と、

育成目的の奨学金制度を幅広く展開している。主な給与型の奨学金制度としては、修学が困難な学生を対象とする「学部給与奨学金」（年額 50 万円）、一都三県以外に所在する高等学校の出身者で経済的な困難を抱える学生を対象とする「自由の学府奨学金」（年額 50 万円）、留学プログラムに参加する学生向けの「グローバル奨学金」（プログラム内容、渡航先に応じて 10～50 万円）、家計急変時に修学を継続できるように支援する「緊急給与奨学金」（年額 30 万円）等、競合する他大学と比較しても充実した奨学金制度を設けており、本学部においてもこれらの制度を活用して修学支援に取り組む。

就職支援

本学ではキャリア支援方針として「①学生が、社会的および職業的に自立した個人としての自分らしい人生のあり方を追求できるように支援する。②学生が、一生を通じて自らの資質を向上させ、教養をもって社会に貢献できる人となるよう支援する。」ことを掲げ、キャリア支援・就職支援を主管する全学組織であるキャリアセンターと各学部が協働することにより、充実した就職支援体制を構築している。キャリアセンターでは、就職ガイダンス、業界企業研究講座、自己分析講座等の 80 種類を超えるプログラムを毎年度 300 回以上開催しており、1 年次から 4 年次にかけて適時適切な情報提供と 4 年間にわたる継続的な支援を実施している。また、本学の特徴として、各学部キャリア支援のコーディネーターを専属で配置し、キャリアセンターと連携しながら各学部の正課プログラムにおけるキャリア支援を実施している。新設組織においても、これらの就職支援体制のもと、個々の学生に寄り添った就職支援を実施する。

なお、既設組織における卒業生の就職率は、直近の 3 年度で 97.4%、97.5%、97.7%と推移しており、本学の就職支援体制が一定の成果を挙げていると言える。

取得できる資格

本学部で取得できる資格は以下の通りである。中学「社会」・高校「公民」ならびに中学「理科」・高校「理科」の教職課程を有している点は、競合する他大学にはない本学部の特徴である（教職課程認定申請中）。

＊教員免許状（中学校一種「社会」、高等学校一種「公民」）

＊教員免許状（中学校一種「理科」、高等学校一種「理科」）

なお、全学部の学生を対象に開講している学校・社会教育講座科目を履修することによって、以下の資格を取得できる。

＊学芸員

＊司書

＊司書教諭

＊社会教育主事

イ 競合校の入学志願動向等

本学部と併願が想定される大学の入学定員の充足状況は、下記の表 7 のとおりである。

【表 7：競合校の過去 3 年度入学定員充足状況】

	入学 定員	R4 年度		R5 年度		R6 年度		平均 充足率
		入学 者数	充足率	入学 者数	充足率	入学 者数	充足率	
慶應義塾大学 環境情報学部	425	469	110%	412	96%	455	107%	104%
法政大学 人間環境学部	343	341	99%	365	106%	295	86%	97%
東京都市大学 環境学部	180	189	105%	187	103%	199	110%	106%

本学部と併願が想定される各大学が公表している令和 4 年度から令和 6 年度の平均の入学定員充足状況は、環境学系の各大学のいずれも安定して入学者を確保していることがわかる。直近の令和 6 年度入学者については、慶應義塾大学環境情報学部で入学定員 425 人に対して、入学者数 455 人、定員充足率 104%、法政大学人間環境学部で入学定員 343 人に対して、入学者数 295 人、定員充足率 86%、東京都市大学環境学部で入学定員 180 人に対して、入学者数 199 人、定員充足率 106%となっている。年度によって、入学定員充足率に増減はあるものの、3 か年の平均で見れば 100%前後となっており、環境学系の学部については 18 歳人口の減少期においても安定した入学者動向であると言える。

ウ 学生納付金等の金額設定の理由

学生納付金（学費等納入金）については、入学金 200,000 円は本学の既設学部と同額である。授業料は 1,350,000 円、実験・実習費については 1 年次が 40,000 円、2 年次以降 20,000 円としている（別途、学生健康保険互助組合費 3,500 円）。新設学部の学生納付金の総額（年額）は、1 年次が 1,593,500 円、2 年次以降は 1,373,500 円となる。また、納入方法は、各年度始めに一括納入か、春学期・秋学期のそれぞれ始めまでに分納（2 回）することとして定めている。本学の人文科学・社会科学系の既設学部と比較した場合、新設学部の授業料が年間で 10 万円程度高く設定している。新設学部の教育課程は文理融合型の教育カリキュラムであり、実験・実習科目も含めた理系科目も半数程度配置されていることから、このような学生納付金の設定を行った。

また、本学部と併願が想定される競合校の学生納付金は表 8 のとおりであり、学生確保の観点から見ても、競合校と比較しても同程度の金額設定となっていることを確認しており、適切であるといえる。

【表 8：競合校の学生納付金一覧】

(単位：円)

	慶應義塾大学 環境情報学部	法政大学 人間環境学部	東京都市大学 環境学部
入学金	200,000	240,000	250,000
授業料	1,090,000	831,000	1,326,000
実験実習費	－	－	－
施設費等	310,000	228,000	
その他	71,350	16,000	60,000
合計	1,671,350	1,315,000	1,636,000

③学生確保に関するアンケート調査

本学部の設置計画を策定するにあたり、定員充足の見込みについて客観的な根拠となるデータから検証することを目的として、本学部の開設初年度に受験対象となる高等学校の在校生を対象とした進学需要等に関するアンケート調査を実施した。

ア 高校生アンケートの概要

調査目的	令和 8（2026）年度に立教大学が設置構想中の「環境学部環境学科（仮称）」（入学定員204名）における志願者・入学者等の学生確保の見通しを測定するためのアンケートを実施した。
調査対象	[調査対象]令和 8 年 3 月に高校卒業予定である高校 2 年生（令和 6 年度） [調査地域]「環境学部環境学科（仮称）」の主たる学生募集エリアと想定される東京都を始めとする関東地方を含む東日本全域の高等学校 271 校から調査の協力を得た。
調査内容	・回答者の基本情報（性別、居住地） ・卒業後の志望進路 ・志望する大学等の設置者 ・興味のある学問分野 ・立教大学「環境学部環境学科（仮称）」特色への興味・関心 ・立教大学「環境学部環境学科（仮称）」への受験・入学意向
調査時期	令和 6 年 5 月～9 月 ※令和 6 年 8 月実施の立教大学オープンキャンパスを含む
調査方法	高校側の希望に基づき、紙方式・WEB方式のいずれかでアンケート調査を実施。 [紙方式] アンケート用紙・「環境学部環境学科（仮称）」概要およびリーフレットを必要部数送付。ホームルームで配付の上、その場で回答し回収いただいた。 [WEB方式] 担当教員のメールアドレスにアンケート調査サイトURLおよびアクセス用QRコードを送付。自校対象生徒のタブレット端末等に配信の上、原則その場で回答し送信するよう促していただいた。

回収件数	有効回答数43,204件 (うち高校 271 校から 42,718 件、令和 6 (2024) 年 8 月 2・3・5 日オープンキャンパスにて 486 件回収)
------	--

イ 高校生アンケートの結果

(1) 立教大学「環境学部環境学科」への受験・入学意向

本高校生アンケート調査に回答した合計 43,204 名のうち、7,621 名（回答者全体の 18.7%）より立教大学「環境学部環境学科」への受験意向（第一志望～第三志望以降の合計）が示され、**入学定員 204 名の 37.4 倍**となった。

一方、**「第一志望として受験する」とした 732 名のうち、立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」に合格した場合「入学する」としたのは 627 名**であった。また、「第二志望として受験する」とした 1,112 名のうち、「環境学部環境学科」に合格した場合「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」としたのは 663 名、「第三志望以降として受験する」とした 5,777 名のうち「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」としたのは 4,908 名であった。

「環境学部環境学科」を第一志望で受験し合格した場合、**他大学の受験結果に関わらず入学意向を示す高校生が 627 名（入学定員 204 名の 3.1 倍）いた**。また、第二・第三志望以降で受験し合格した場合、志望順位が上位の志望校合否結果により入学意向を示す高校生が 5,571 名（同 27.3 倍）いた。

(2) クロス集計（大学進学＞私立大学＞「環境学」に興味＞受験意向＞入学意向）

「高校卒業後の希望進路（問 3）」、「進学先の大学設置者種別（問 4）」、「興味のある学問分野（問 5）」、「受験意向（問 7）」、「入学意向（問 8）」の五重クロス集計を行ったところ、「大学進学を希望」し、かつ「私立大学を希望」し、かつ「環境学に興味」を持ち、その上で立教大学「環境学部環境学科」への受験意向を示したのは **1,373 名（第一志望～第三志望以降の合計）、入学定員 204 名の 6.7 倍**となった。そのうち「第一志望として受験する」とした上で「入学する」とした者は 219 名であった。同様に「第二志望として受験する」とし「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」とした者は 196 名、「第三志望以降として受験する」とし「志望順位が上位の他の志望校が不合格の場合に入学する」とした者は 721 名いた。

五重クロス集計を経てもなお、立教大学「環境学部環境学科」を第一志望で受験し合格した場合、他大学の受験結果に関わらず入学意向を示す高校生が、**予定する入学定員 204 名を上回る 219 名いた**。また、第二・第三志望以降で受験し合格した場合、志望順位が上位の志望校合否結果により入学意向を示す高校生が 917 名いた。

以上より、開設初年度に受験対象となる一部の高等学校の在校生に限定した調査結果に

においても、本学の環境学部環境学科への入学希望の高さをうかがうことができる。

資料4：立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての高校生アンケート調査（令和6年9月：株式会社 KEI アドバンス／株式会社高等教育総合研究所）

④人材需要に関するアンケート調査等

本学部の設置計画を策定するうえで、環境学部の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的が、社会的な人材需要の見通しを踏まえた計画であることを客観的根拠となるデータから検証することを目的として、本学への求人実績や卒業生の採用実績がある関連企業等を対象として、環境学部で養成する人材の必要性及び卒業生に対する採用意向に関するアンケート調査を実施した。

ア 人材需要アンケートの概要

調査目的	令和8（2026）年度に立教大学が設置構想中の「環境学部環境学科（仮称）」（入学定員204名）における卒業後の採用の見通しを測定するためのアンケートを実施した。
調査対象	立教大学「環境学部環境学科（仮称）」が養成する人材の採用が見込まれる以下の事業所に依頼 ・立教大学卒業生の採用実績先企業 ・主要官公庁、都道府県庁 ・NPO（環境保全が主業務／有給職員5名以上） 以上合計 2,587 件
調査内容	・回答事業所の基本情報（業種・所在地・従業員または職員規模、新卒採用の際に求める能力・資質） ・環境への取り組み（環境保全責任者の勤務状況、脱炭素経営の取り組み） ・立教大学「環境学部環境学科（仮称）」が養成する人材の社会的ニーズ ・立教大学「環境学部環境学科（仮称）」が養成する人材の採用意向
調査時期	令和6年5月～6月
調査方法	調査対象事業所に対しアンケートを郵送し依頼。 （紙方式・web方式での回答方法を案内し、いずれかで回答を依頼）
回収件数	有効回答数 316 件（回収率 12.2%）

イ 人材需要アンケートの結果

(1) 立教大学「環境学部環境学科（仮称）」が養成する人材の社会的ニーズ

回答事業所の 74.7%にあたる 236 事業所から立教大学「環境学部環境学科（仮称）」で養成する人材のニーズは高いとの回答を得ており、「環境学部環境学科」が養成する人材

について、全体の 3 / 4 の事業所がその社会的ニーズについて認める結果となっている。

(2) 立教大学「環境学部環境学科(仮称)」が養成する人材の採用意向

回答事業所の 58.9%にあたる 186 事業所から立教大学「環境学部環境学科(仮称)」の卒業予定者の採用意向が示されており、当該 186 事業所における採用可能人数(単年度)の合計は、入学定員の 204 名を大きく上回る 366 名であった。

このような本学への求人実績や卒業生の採用実績がある一部の関連企業等に限定した調査結果においても、環境学部環境学科で学んだ卒業生への採用意向の高さがうかがえることから、卒業後の進路については見通しがあると考えられる。

資料 5 : 「環境学部環境学科(仮称)」設置構想についての人材需要アンケート(令和 6 年 7 月:株式会社 KEI アドバンス/株式会社高等教育総合研究所)

(4) 新設組織の定員設定の理由

環境学部の定員設定の理由は、一都三県の高等学校・中学校・小学校の生徒・児童数、一都三県の高等学校を卒業した者の大学進学状況、既設組織の定員充足の状況、競合校の入学志願動向等、さらには、開設初年度に受験対象となる高等学校の在校生に対する進学需要調査の結果に加えて、本学への求人実績や卒業生の採用実績がある関連企業等を対象とした人材需要調査の結果などを総合的に踏まえたものであり、合理性のある設定であると考えている。

●学生の確保の見通し等を記載した書類(資料)

<目次>

資料 1	新設組織が置かれる都道府県への入学状況（別紙 1）	…2
資料 2	既設学科等の入学定員の充足状況（別紙 2－1～27）	…3
資料 3	既設学科等の学生募集のためのPR活動の過去の実績（別紙 3）	…30
資料 4	立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての高校生アンケート調査報告書（令和6年9月：株式会社KEIアドバンス／株式会社高等教育総合研究所）	…31
資料 5	立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての人材需要アンケート報告書（令和6年7月：株式会社KEIアドバンス／株式会社高等教育総合研究所）	…32

新設組織が置かれる都道府県への入学状況

別紙 1

○出身高校の所在地県別の入学者数の構成比（上位 5 都道府県）※直近年度

	都道府県名	人 数	構成比
1	東京都	53,761人	34.3%
2	神奈川県	22,609人	14.4%
3	埼玉県	18,604人	11.9%
4	千葉県	14,011人	9.0%
5	茨城県	5,628人	3.6%
	全 体	156,543人	100.0%

※「学校基本調査」の「出身高校の所在地県別入学者数」から作成すること。

※大学、学部、学部の学科、短期大学、短期大学の学科を設置する場合や収容定員の増加に係る学則変更認可申請の場合に作成（専門職大学、専門職短期大学、高等専門学校を含む）。大学院は作成不要。

○新設組織が置かれる都道府県の定員充足状況

	新組織所在地 (都道府県)	充足率		
		令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
1	東京都	103.70%	103.57%	102.88%
2				

※2校地で教育課程を実施する場合はそれぞれの状況を記載すること。

○新設組織の学問分野（系統区分）の定員充足状況

	系統区分	充足率		
		令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
1	その他系学部	99.56%	98.93%	97.78%
2				

※「系統区分」は日本私立学校振興・共済事業団の「今日の私学財政」の系統区分に従うこと。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１

大学学部学科等名：立教大学 文学部キリスト教学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	延べ人数	15人	14人	13人	17人	21人	16人
	志願者数	15人	14人	13人	17人	21人	16人
	受験者数	6人	5人	6人	4人	4人	5人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	2人	1人	3人	1人	2人
	辞退者数	15人	14人	13人	17人	21人	16人
	志願者数	15人	14人	13人	17人	21人	16人
	受験者数	6人	5人	6人	4人	4人	5人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	2人	1人	3人	1人	2人
	辞退者数	3人	3人	5人	1人	3人	3人
	入学者数	10人	10人	10人	10人	13人	11人
学校推薦型選抜	募集人数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	延べ人数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	志願者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	受験者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	志願者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	受験者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	17人	18人	20人	20人	17人	18人
	入学者数	29人	29人	29人	29人	29人	29人
一般選抜	募集人数	233人	277人	374人	160人	356人	280人
	延べ人数	214人	263人	353人	148人	336人	263人
	志願者数	214人	263人	353人	148人	336人	263人
	受験者数	53人	68人	61人	64人	77人	65人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	33人	46人	43人	46人	49人	43人
	辞退者数	194人	223人	283人	128人	269人	219人
	志願者数	176人	214人	268人	120人	256人	207人
	受験者数	47人	65人	51人	54人	68人	57人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	27人	43人	33人	36人	40人	36人
	辞退者数	20人	22人	18人	18人	28人	21人
	入学者数	7人	7人	7人	7人	7人	7人
共通テスト利用入試	募集人数	272人	121人	107人	40人	471人	202人
	延べ人数	272人	121人	107人	40人	471人	202人
	志願者数	272人	121人	107人	40人	471人	202人
	受験者数	55人	34人	38人	20人	62人	42人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	51人	31人	34人	17人	60人	39人
	辞退者数	272人	121人	107人	40人	471人	202人
	志願者数	272人	121人	107人	40人	471人	202人
	受験者数	55人	34人	38人	20人	62人	42人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	51人	31人	34人	17人	60人	39人
	辞退者数	4人	3人	4人	3人	2人	3人
	入学者数	1人	1人	1人	1人	1人	1人
その他の特別選抜	募集人数	5人	1人	3人	4人	4人	3人
	延べ人数	5人	1人	3人	4人	4人	3人
	志願者数	5人	1人	3人	4人	4人	3人
	受験者数	3人	1人	3人	3人	3人	3人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	1人	0人	0人
	辞退者数	5人	1人	3人	4人	4人	3人
	志願者数	5人	1人	3人	4人	4人	3人
	受験者数	3人	1人	3人	3人	3人	3人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	1人	0人	0人
	辞退者数	3人	1人	3人	2人	3人	2人
	入学者数	47人	47人	47人	47人	50人	48人
合計	募集人数	542人	431人	517人	241人	869人	520人
	延べ人数	523人	417人	496人	229人	849人	503人
	志願者数	134人	126人	128人	111人	163人	132人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	87人	79人	78人	67人	110人	84人
	うち追加合格者数	503人	377人	426人	209人	782人	459人
	志願者数	485人	368人	411人	201人	769人	447人
	受験者数	128人	123人	118人	101人	154人	125人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	81人	76人	68人	57人	101人	77人
	辞退者数	47人	47人	50人	44人	53人	48人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	49人	49人	50人	50人	50人	50人
入学定員充足率	0.96	0.96	1.00	0.88	1.06	0.97
歩留率	0.35	0.37	0.39	0.40	0.33	0.37

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）
大学学部学科等名： 立教大学 文学部史学科

別紙２－２

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	10人	10人	10人	10人	10人	10人
	延べ人数	37人	50人	38人	28人	67人	44人
	志願者数	37人	50人	38人	28人	67人	44人
	受験者数	20人	23人	17人	26人	24人	22人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	3人	6人	9人	7人	6人
	辞退者数	37人	50人	38人	28人	67人	44人
	志願者数	37人	50人	38人	28人	67人	44人
	受験者数	20人	23人	17人	26人	24人	22人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	3人	6人	9人	7人	6人
	辞退者数	15人	20人	11人	17人	17人	16人
	入学者数	60人	60人	60人	60人	75人	63人
	募集人数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
学校推薦型選抜	延べ人数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	志願者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	受験者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	志願者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	受験者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	合格者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	102人	104人	113人	99人	101人	104人
	募集人数	91人	91人	91人	91人	91人	91人
	延べ人数	1598人	2046人	1736人	1331人	1655人	1673人
一般選抜	志願者数	1516人	1968人	1627人	1277人	1560人	1590人
	受験者数	318人	315人	374人	371人	385人	353人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	236人	259人	314人	311人	311人	286人
	辞退者数	1367人	1643人	1378人	1090人	1332人	1362人
	志願者数	1292人	1586人	1295人	1049人	1264人	1297人
	受験者数	290人	277人	319人	330人	335人	310人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	208人	221人	259人	270人	261人	244人
	辞退者数	82人	56人	60人	60人	74人	66人
	入学者数	22人	22人	22人	22人	22人	22人
	募集人数	890人	659人	786人	471人	846人	730人
	延べ人数	890人	659人	786人	471人	846人	730人
	志願者数	166人	240人	245人	200人	269人	224人
共通テスト利用入試	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	162人	219人	228人	178人	254人	208人
	辞退者数	890人	659人	786人	471人	846人	730人
	志願者数	890人	659人	786人	471人	846人	730人
	受験者数	166人	240人	245人	200人	269人	224人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	162人	219人	228人	178人	254人	208人
	辞退者数	4人	21人	17人	22人	15人	16人
	入学者数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
	募集人数	12人	13人	25人	25人	15人	18人
	延べ人数	12人	13人	25人	25人	15人	18人
	志願者数	9人	12人	17人	19人	11人	14人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	1人	4人	4人	5人	3人	3人
その他の特別選抜	辞退者数	12人	13人	25人	25人	15人	18人
	志願者数	12人	13人	25人	25人	15人	18人
	受験者数	9人	12人	17人	19人	11人	14人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	1人	4人	4人	5人	3人	3人
	辞退者数	8人	8人	13人	14人	8人	10人
	入学者数	187人	187人	187人	187人	202人	190人
	募集人数	2639人	2872人	2698人	1954人	2684人	2569人
	延べ人数	2557人	2794人	2589人	1900人	2589人	2486人
	志願者数	615人	694人	766人	715人	790人	716人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	404人	485人	552人	503人	575人	504人
	辞退者数	2408人	2469人	2340人	1713人	2361人	2258人
	志願者数	2333人	2412人	2257人	1672人	2293人	2193人
合計	受験者数	587人	656人	711人	674人	740人	674人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	376人	447人	497人	462人	525人	461人
	辞退者数	211人	209人	214人	212人	215人	212人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	214人	214人	215人	215人	215人	215人
入 学 定 員 充 足 率	0.99	0.98	1.00	0.99	1.00	0.99
歩 留 率	0.34	0.30	0.28	0.30	0.27	0.30

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－３

大学学部学科等名： 立教大学 文学部教育学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	延べ人数	5人	2人	5人	47人	62人	24人
	志願者数	5人	2人	5人	47人	62人	24人
	受験者数	2人	0人	1人	2人	4人	2人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	1人	2人	1人
	辞退者数	5人	2人	5人	47人	62人	24人
	志願者数	5人	2人	5人	47人	62人	24人
	受験者数	2人	0人	1人	2人	4人	2人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	1人	2人	1人
	辞退者数	2人	0人	1人	1人	2人	1人
	入学者数	26人	26人	26人	26人	26人	26人
	募集人数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
学校推薦型選抜	延べ人数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	志願者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	受験者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	志願者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	受験者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	23人	34人	34人	40人	34人	33人
	入学者数	63人	63人	63人	63人	63人	63人
	募集人数	887人	1457人	1334人	1158人	1074人	1182人
	延べ人数	827人	1394人	1279人	1110人	1027人	1127人
一般選抜	志願者数	205人	289人	309人	266人	278人	269人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	139人	229人	251人	208人	213人	208人
	うち追加合格者数	139人	229人	251人	208人	213人	208人
	辞退者数	707人	1128人	1033人	904人	860人	926人
	志願者数	656人	1080人	991人	871人	824人	884人
	受験者数	176人	256人	254人	234人	231人	230人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	110人	196人	196人	176人	166人	169人
	入学者数	66人	60人	58人	58人	65人	61人
	募集人数	9人	9人	9人	9人	9人	9人
	延べ人数	660人	517人	508人	382人	486人	511人
	志願者数	660人	517人	508人	382人	486人	511人
共通テスト利用入試	受験者数	178人	125人	107人	66人	122人	120人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	167人	116人	95人	62人	115人	111人
	志願者数	660人	517人	508人	382人	486人	511人
	受験者数	660人	517人	508人	382人	486人	511人
	合格者数	178人	125人	107人	66人	122人	120人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	167人	116人	95人	62人	115人	111人
	入学者数	11人	9人	12人	4人	7人	9人
	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	21人	16人	28人	18人	12人	19人
	志願者数	21人	16人	28人	18人	12人	19人
	受験者数	21人	16人	28人	18人	12人	19人
その他の特別選抜	合格者数	9人	9人	8人	7人	7人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	2人	4人	3人	3人
	志願者数	21人	16人	28人	18人	12人	19人
	受験者数	21人	16人	28人	18人	12人	19人
	合格者数	9人	9人	8人	7人	7人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	2人	4人	3人	3人
	入学者数	7人	7人	6人	3人	4人	5人
	募集人数	100人	100人	100人	100人	100人	100人
	延べ人数	1596人	2026人	1909人	1645人	1668人	1769人
	志願者数	1536人	1963人	1854人	1597人	1621人	1714人
	受験者数	417人	457人	459人	381人	445人	432人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
合計	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	308人	347人	348人	275人	333人	322人
	志願者数	1416人	1697人	1608人	1391人	1454人	1513人
	受験者数	1365人	1649人	1566人	1358人	1418人	1471人
	合格者数	388人	424人	404人	349人	398人	393人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	279人	314人	293人	243人	286人	283人
	入学者数	109人	110人	111人	106人	112人	110人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	100人	100人	101人	101人	101人	101人
入学定員充足率	1.09	1.10	1.10	1.05	1.11	1.09
歩留率	0.26	0.24	0.24	0.28	0.25	0.25

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－４

大学学部学科等名： 立教大学 文学部文学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	0人	10人	10人	10人	10人	8人
	延べ人数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	志願者数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	受験者数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	合格者数	26人	45人	35人	37人	42人	37人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	6人	14人	16人	12人	21人	14人
	実人数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	志願者数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	受験者数	64人	140人	139人	124人	128人	119人
	合格者数	26人	45人	35人	37人	42人	37人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	6人	14人	16人	12人	21人	14人
	入学者数	20人	31人	19人	25人	21人	23人
学校推薦型選抜	募集人数	136人	136人	136人	136人	145人	138人
	延べ人数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	志願者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	受験者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	合格者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	志願者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	受験者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	合格者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	184人	178人	151人	164人	164人	168人
一般選抜	募集人数	305人	298人	298人	298人	298人	299人
	延べ人数	3780人	5489人	5166人	4752人	4336人	4705人
	志願者数	3569人	5268人	4941人	4548人	4137人	4493人
	受験者数	825人	1184人	1301人	1197人	1255人	1152人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	580人	920人	1004人	899人	967人	874人
	実人数	3220人	4354人	4137人	3809人	3503人	3805人
	志願者数	3029人	4184人	3969人	3667人	3347人	3639人
	受験者数	741人	1062人	1126人	1060人	1095人	1017人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	496人	798人	829人	762人	807人	738人
	入学者数	245人	264人	297人	298人	288人	278人
共通テスト利用入試	募集人数	69人	66人	66人	66人	66人	67人
	延べ人数	2563人	2275人	2185人	1948人	2153人	2225人
	志願者数	2563人	2275人	2185人	1948人	2153人	2225人
	受験者数	639人	540人	620人	516人	719人	607人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	591人	507人	563人	493人	675人	566人
	実人数	2563人	2275人	2185人	1948人	2153人	2225人
	志願者数	2563人	2275人	2185人	1948人	2153人	2225人
	受験者数	639人	540人	620人	516人	719人	607人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	591人	507人	563人	493人	675人	566人
	入学者数	48人	33人	57人	23人	44人	41人
その他の特別選抜	募集人数	23人	23人	23人	33人	33人	27人
	延べ人数	252人	194人	202人	169人	200人	203人
	志願者数	252人	194人	202人	169人	200人	203人
	受験者数	50人	54人	60人	58人	48人	54人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	32人	27人	44人	30人	26人	32人
	実人数	252人	194人	202人	169人	200人	203人
	志願者数	252人	194人	202人	169人	200人	203人
	受験者数	50人	54人	60人	58人	48人	54人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	32人	27人	44人	30人	26人	32人
	入学者数	18人	27人	16人	28人	22人	22人
合計	募集人数	533人	533人	533人	543人	552人	539人
	延べ人数	6843人	8276人	7843人	7157人	6981人	7420人
	志願者数	6632人	8055人	7618人	6953人	6782人	7208人
	受験者数	1724人	2001人	2167人	1972人	2228人	2018人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1209人	1468人	1627人	1434人	1689人	1485人
	実人数	6283人	7141人	6814人	6214人	6148人	6520人
	志願者数	6092人	6971人	6646人	6072人	5992人	6355人
	受験者数	1640人	1879人	1992人	1835人	2068人	1883人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1125人	1346人	1452人	1297人	1529人	1350人
	入学者数	515人	533人	540人	538人	539人	533人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	537人	537人	552人	552人	552人	546人
入学定員充足率	0.96	0.99	0.98	0.97	0.98	0.98
歩留率	0.30	0.27	0.25	0.27	0.24	0.27

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－５

大学学部学科等名：立教大学 経済学部経済学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	10人	10人	10人	10人	10人	10人
	延べ人数	58人	71人	65人	43人	90人	65人
	志願者数	58人	71人	65人	43人	90人	65人
	受験者数	9人	11人	9人	8人	11人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	5人	2人	2人	2人	3人
	辞退者数	58人	71人	65人	43人	90人	65人
	志願者数	58人	71人	65人	43人	90人	65人
	受験者数	9人	11人	9人	8人	11人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	5人	2人	2人	2人	3人
	辞退者数	6人	6人	7人	6人	9人	7人
	入学者数	75人	75人	75人	75人	85人	77人
学校推薦型選抜	募集人数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	延べ人数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	志願者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	受験者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	志願者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	受験者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	合格者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	123人	136人	131人	127人	134人	130人
一般選抜	募集人数	184人	184人	184人	184人	184人	184人
	延べ人数	3143人	3131人	2649人	3156人	2656人	2947人
	志願者数	2939人	2967人	2518人	3004人	2503人	2786人
	受験者数	573人	720人	879人	954人	725人	770人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	402人	593人	739人	760人	574人	614人
	辞退者数	2886人	2430人	2052人	2373人	2057人	2360人
	志願者数	2695人	2314人	1961人	2273人	1953人	2239人
	受験者数	521人	620人	735人	822人	625人	665人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	350人	493人	595人	628人	474人	508人
	辞退者数	171人	127人	140人	194人	151人	157人
	入学者数	45人	45人	45人	45人	45人	45人
共通テスト利用入試	募集人数	1738人	1823人	1779人	2600人	1619人	1912人
	延べ人数	1738人	1823人	1779人	2600人	1619人	1912人
	志願者数	451人	526人	547人	350人	582人	491人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	437人	489人	515人	338人	547人	465人
	うち追加合格者数	1738人	1823人	1779人	2600人	1619人	1912人
	志願者数	1738人	1823人	1779人	2600人	1619人	1912人
	受験者数	451人	526人	547人	350人	582人	491人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	437人	489人	515人	338人	547人	465人
	辞退者数	14人	37人	32人	12人	35人	26人
	入学者数	6人	6人	6人	6人	6人	6人
	募集人数	57人	53人	53人	61人	52人	55人
その他の特別選抜	延べ人数	57人	53人	53人	61人	52人	55人
	志願者数	26人	28人	23人	22人	21人	24人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	14人	12人	11人	9人	14人	12人
	うち追加合格者数	57人	53人	53人	61人	52人	55人
	志願者数	57人	53人	53人	61人	52人	55人
	受験者数	26人	28人	23人	22人	21人	24人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	14人	12人	11人	9人	14人	12人
	辞退者数	12人	16人	12人	13人	7人	12人
	入学者数	320人	320人	320人	320人	330人	322人
	募集人数	5119人	5214人	4677人	5987人	4551人	5110人
	延べ人数	4915人	5050人	4546人	5835人	4398人	4949人
合計	志願者数	1182人	1421人	1589人	1461人	1473人	1425人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	856人	1099人	1267人	1109人	1137人	1094人
	うち追加合格者数	4862人	4513人	4080人	5204人	3952人	4522人
	志願者数	4671人	4397人	3989人	5104人	3848人	4402人
	受験者数	1130人	1321人	1445人	1329人	1373人	1320人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	804人	999人	1123人	977人	1037人	988人
	辞退者数	326人	322人	322人	352人	336人	332人
	入学者数						
	募集人数						
	延べ人数						
	志願者数						
	受験者数						
	合格者数						
	うち追加合格者数						
	辞退者数						
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	330人	330人	332人	332人	332人	331人
入学定員充足率	0.99	0.98	0.97	1.06	1.01	1.00
歩留率	0.28	0.23	0.20	0.24	0.23	0.23

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－６

大学学部学科等名：

立教大学 経済学部会計ファイナンス学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	志願者数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	受験者数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	合格者数	1人	1人	4人	3人	5人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	1人	1人	1人	2人	1人
	実人数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	志願者数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	受験者数	34人	13人	13人	35人	31人	25人
	合格者数	1人	1人	4人	3人	5人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	1人	1人	1人	2人	1人
学校推薦型選抜	入学者数	0人	0人	3人	2人	3人	2人
	募集人数	40人	40人	40人	40人	45人	41人
	延べ人数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	志願者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	受験者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	合格者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	志願者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	受験者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	合格者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	64人	74人	63人	59人	80人	68人
	募集人数	95人	95人	95人	95人	95人	95人
	延べ人数	1085人	965人	989人	822人	819人	936人
	志願者数	1023人	931人	954人	789人	776人	895人
	受験者数	196人	257人	326人	267人	229人	255人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	110人	198人	244人	202人	172人	185人
	実人数	978人	691人	724人	583人	569人	709人
	志願者数	978人	691人	724人	583人	569人	709人
	受験者数	920人	669人	702人	563人	547人	680人
	合格者数	172人	220人	259人	211人	174人	207人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	86人	161人	177人	146人	117人	137人
共通テスト利用入試	入学者数	86人	59人	82人	65人	57人	70人
	募集人数	25人	25人	25人	25人	25人	25人
	延べ人数	787人	700人	594人	595人	884人	712人
	志願者数	787人	700人	594人	595人	884人	712人
	受験者数	226人	178人	208人	154人	271人	207人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	209人	161人	189人	142人	249人	190人
	実人数	787人	700人	594人	595人	884人	712人
	志願者数	787人	700人	594人	595人	884人	712人
	受験者数	226人	178人	208人	154人	271人	207人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	209人	161人	189人	142人	249人	190人
その他の特別選抜	入学者数	17人	17人	19人	12人	22人	17人
	募集人数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	14人	19人	17人	16人	25人	18人
	志願者数	14人	19人	17人	16人	25人	18人
	受験者数	6人	12人	9人	10人	12人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	3人	2人	2人	5人	3人
	実人数	14人	19人	17人	16人	25人	18人
	志願者数	14人	19人	17人	16人	25人	18人
	受験者数	6人	12人	9人	10人	12人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	3人	2人	2人	5人	3人
合計	入学者数	5人	9人	7人	8人	7人	7人
	募集人数	169人	169人	169人	169人	174人	170人
	延べ人数	1984人	1771人	1676人	1527人	1839人	1759人
	志願者数	1922人	1737人	1641人	1494人	1796人	1718人
	受験者数	493人	522人	610人	493人	597人	543人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	321人	363人	436人	347人	428人	379人
	実人数	1877人	1497人	1411人	1288人	1589人	1532人
	志願者数	1819人	1475人	1389人	1268人	1567人	1504人
	受験者数	469人	485人	543人	437人	542人	495人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	297人	326人	369人	291人	373人	331人
	入学者数	172人	159人	174人	146人	169人	164人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	175人	175人	176人	176人	176人	176人
入学定員充足率	0.98	0.91	0.99	0.83	0.96	0.93
歩留率	0.35	0.30	0.29	0.30	0.28	0.30

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－７

大学学部学科等名： 立教大学 経済学部経済政策学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	志願者数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	受験者数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	合格者数	9人	11人	9人	9人	4人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	3人	2人	2人	1人	2人
	実人数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	志願者数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	受験者数	48人	63人	75人	81人	52人	64人
	合格者数	9人	11人	9人	9人	4人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	3人	2人	2人	1人	2人
	入学者数	8人	8人	7人	7人	3人	7人
学校推薦型選抜	募集人数	40人	40人	40人	40人	45人	41人
	延べ人数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	志願者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	受験者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	合格者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	志願者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	受験者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	合格者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	66人	72人	72人	68人	71人	70人
	募集人数	95人	95人	95人	95人	95人	95人
一般選抜	延べ人数	1757人	1311人	1024人	826人	817人	1147人
	志願者数	1757人	1311人	1024人	826人	817人	1147人
	受験者数	1691人	1262人	998人	793人	790人	1107人
	合格者数	318人	291人	337人	268人	235人	290人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	233人	201人	269人	216人	173人	218人
	実人数	1680人	1018人	800人	604人	606人	942人
	志願者数	1680人	1018人	800人	604人	606人	942人
	受験者数	1618人	986人	780人	582人	591人	911人
	合格者数	301人	251人	282人	216人	207人	251人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	216人	161人	214人	164人	145人	180人
	入学者数	85人	90人	68人	52人	62人	71人
	募集人数	25人	25人	25人	25人	25人	25人
共通テスト利用入試	延べ人数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	志願者数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	受験者数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	合格者数	110人	218人	296人	170人	303人	219人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	105人	206人	265人	152人	275人	201人
	実人数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	志願者数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	受験者数	484人	691人	941人	675人	1061人	770人
	合格者数	110人	218人	296人	170人	303人	219人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	105人	206人	265人	152人	275人	201人
	入学者数	5人	12人	31人	18人	28人	19人
	募集人数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
その他の特別選抜	延べ人数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	志願者数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	受験者数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	合格者数	7人	13人	15人	13人	10人	12人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	7人	6人	8人	5人	6人
	実人数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	志願者数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	受験者数	12人	28人	30人	22人	26人	24人
	合格者数	7人	13人	15人	13人	10人	12人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	7人	6人	8人	5人	6人
	入学者数	5人	6人	9人	5人	5人	6人
	募集人数	169人	169人	169人	169人	174人	170人
合計	延べ人数	2367人	2165人	2142人	1672人	2027人	2075人
	志願者数	2367人	2165人	2142人	1672人	2027人	2075人
	受験者数	2301人	2116人	2116人	1639人	2000人	2034人
	合格者数	510人	605人	729人	528人	623人	599人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	341人	417人	542人	378人	454人	426人
	実人数	2290人	1872人	1918人	1450人	1816人	1869人
	志願者数	2290人	1872人	1918人	1450人	1816人	1869人
	受験者数	2228人	1840人	1898人	1428人	1801人	1839人
	合格者数	493人	565人	674人	476人	595人	561人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	324人	377人	487人	326人	426人	388人
	入学者数	169人	188人	187人	150人	169人	173人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	175人	175人	176人	176人	176人	176人
入 学 定 員 充 足 率	0.97	1.07	1.06	0.85	0.96	0.98
歩 留 率	0.33	0.31	0.26	0.28	0.27	0.29

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－８

大学学部学科等名：立教大学 理学部数学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	3人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	3人	8人	4人	2人	7人	5人
	志願者数						
	受験者数	3人	8人	4人	2人	7人	5人
	合格者数	0人	2人	1人	1人	3人	1人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	2人	0人
	実人数	3人	8人	4人	2人	7人	5人
	志願者数						
	受験者数	3人	8人	4人	2人	7人	5人
	合格者数	0人	2人	1人	1人	3人	1人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	2人	0人
学校推薦型選抜	入学者数	0人	2人	1人	1人	1人	1人
	募集人数	9人	9人	9人	9人	11人	9人
	延べ人数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	志願者数						
	受験者数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	合格者数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	志願者数						
	受験者数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	合格者数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	9人	8人	16人	10人	13人	11人
	募集人数	47人	40人	40人	40人	40人	41人
	延べ人数	751人	659人	776人	573人	743人	700人
	志願者数						
	受験者数	713人	635人	742人	537人	697人	665人
	合格者数	191人	272人	205人	187人	202人	211人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	142人	218人	172人	142人	167人	168人
	実人数	652人	532人	602人	465人	588人	568人
	志願者数						
	受験者数	621人	515人	577人	436人	552人	540人
	合格者数	182人	237人	184人	166人	179人	190人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	133人	183人	151人	121人	144人	146人
共通テスト利用入試	入学者数	49人	54人	33人	45人	35人	43人
	募集人数	6人	11人	11人	11人	11人	10人
	延べ人数	415人	445人	564人	0人	749人	435人
	志願者数						
	受験者数	415人	445人	564人	0人	749人	435人
	合格者数	108人	168人	211人	0人	221人	142人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	107人	160人	198人	0人	214人	136人
	実人数	415人	445人	564人	0人	749人	435人
	志願者数						
	受験者数	415人	445人	564人	0人	749人	435人
	合格者数	108人	168人	211人	0人	221人	142人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	107人	160人	198人	0人	214人	136人
その他の特別選抜	入学者数	1人	8人	13人	0人	7人	6人
	募集人数	1人	1人	1人	1人	1人	1人
	延べ人数	10人	11人	10人	15人	15人	12人
	志願者数						
	受験者数	10人	11人	10人	15人	15人	12人
	合格者数	2人	2人	2人	2人	1人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	2人	1人	1人	1人
	実人数	10人	11人	10人	15人	15人	12人
	志願者数						
	受験者数	10人	11人	10人	15人	15人	12人
	合格者数	2人	2人	2人	2人	1人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	2人	1人	1人	1人
合計	入学者数	0人	1人	0人	1人	0人	0人
	募集人数	66人	63人	63人	63人	65人	64人
	延べ人数	1188人	1131人	1370人	600人	1527人	1163人
	志願者数						
	受験者数	1150人	1107人	1336人	564人	1481人	1128人
	合格者数	310人	452人	435人	200人	440人	367人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	251人	379人	372人	143人	384人	306人
	実人数	1089人	1004人	1196人	492人	1372人	1031人
	志願者数						
	受験者数	1058人	987人	1171人	463人	1336人	1003人
	合格者数	301人	417人	414人	179人	417人	346人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	242人	344人	351人	122人	361人	284人
	入学者数	59人	73人	63人	57人	56人	62人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	66人	66人	66人	66人	66人	66人
入 学 定 員 充 足 率	0.89	1.11	0.95	0.86	0.85	0.93
歩 留 率	0.19	0.16	0.14	0.29	0.13	0.18

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－９

大学学部学科等名：立教大学 理学部物理学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	志願者数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	受験者数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	合格者数	1人	3人	0人	2人	1人	1人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	1人	0人	0人
	実人数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	志願者数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	受験者数	6人	8人	4人	5人	2人	5人
	合格者数	1人	3人	0人	2人	1人	1人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	1人	0人	0人
学校推薦型選抜	入学者数	1人	3人	0人	1人	1人	1人
	募集人数	11人	11人	11人	11人	14人	12人
	延べ人数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	志願者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	受験者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	合格者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	志願者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	受験者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	合格者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	6人	15人	10人	15人	7人	11人
	募集人数	45人	45人	45人	45人	45人	45人
	延べ人数	1000人	1025人	1017人	1124人	987人	1031人
	志願者数	933人	977人	974人	1079人	936人	980人
	受験者数	214人	264人	293人	282人	244人	259人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	163人	217人	237人	233人	197人	209人
	辞退者数	163人	217人	237人	233人	197人	209人
	実人数	840人	791人	788人	888人	781人	818人
	志願者数	786人	758人	753人	855人	742人	779人
	受験者数	197人	236人	259人	250人	219人	232人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	146人	189人	203人	201人	172人	182人
	辞退者数	146人	189人	203人	201人	172人	182人
共通テスト利用入試	入学者数	51人	47人	56人	49人	47人	50人
	募集人数	13人	14人	14人	14人	14人	14人
	延べ人数	964人	848人	672人	0人	745人	646人
	志願者数	964人	848人	672人	0人	745人	646人
	受験者数	280人	271人	240人	0人	303人	219人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	263人	260人	226人	0人	284人	207人
	辞退者数	263人	260人	226人	0人	284人	207人
	実人数	964人	848人	672人	0人	745人	646人
	志願者数	964人	848人	672人	0人	745人	646人
	受験者数	280人	271人	240人	0人	303人	219人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	263人	260人	226人	0人	284人	207人
	辞退者数	263人	260人	226人	0人	284人	207人
その他の特別選抜	入学者数	17人	11人	14人	0人	19人	12人
	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	志願者数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	受験者数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	合格者数	2人	3人	0人	1人	2人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	1人	0人	0人	0人	0人
	実人数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	志願者数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	受験者数	6人	14人	4人	8人	7人	8人
	合格者数	2人	3人	0人	1人	2人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	1人	0人	0人	0人	0人
合計	入学者数	2人	2人	0人	1人	2人	1人
	募集人数	73人	74人	74人	74人	77人	74人
	延べ人数	1982人	1910人	1707人	1152人	1748人	1700人
	志願者数	1915人	1862人	1664人	1107人	1697人	1649人
	受験者数	503人	556人	543人	300人	557人	492人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	426人	478人	463人	234人	481人	416人
	辞退者数	426人	478人	463人	234人	481人	416人
	実人数	1822人	1676人	1478人	916人	1542人	1487人
	志願者数	1768人	1643人	1443人	883人	1503人	1448人
	受験者数	486人	528人	509人	268人	532人	465人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	409人	450人	429人	202人	456人	389人
	辞退者数	409人	450人	429人	202人	456人	389人
	入学者数	77人	78人	80人	66人	76人	75人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	77人	77人	77人	77人	77人	77人
入学定員充足率	1.00	1.01	1.04	0.86	0.99	0.98
歩留率	0.15	0.14	0.15	0.22	0.14	0.16

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１０

大学学部学科等名： 立教大学 理学部化学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	3人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	9人	6人	5人	12人	9人	8人
	志願者数						
	受験者数	9人	6人	5人	12人	9人	8人
	合格者数	3人	2人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	1人	2人	2人	1人
	実人数						
	志願者数	9人	6人	5人	12人	9人	8人
	受験者数	9人	6人	5人	12人	9人	8人
	合格者数	3人	2人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	1人	2人	2人	1人
学校推薦型選抜	入学者数	3人	2人	1人	2人	1人	2人
	募集人数	11人	11人	11人	11人	14人	12人
	延べ人数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	志願者数						
	受験者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	合格者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数						
	志願者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	受験者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	合格者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	12人	17人	10人	20人	15人	15人
	募集人数	47人	47人	47人	47人	47人	47人
	延べ人数	903人	887人	952人	875人	864人	896人
	志願者数						
	受験者数	865人	845人	914人	843人	817人	857人
	合格者数	212人	274人	349人	255人	253人	269人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	162人	225人	296人	205人	204人	218人
	実人数						
	志願者数	793人	701人	764人	687人	688人	727人
	受験者数	761人	671人	739人	665人	656人	698人
	合格者数	199人	242人	309人	231人	236人	243人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	149人	193人	256人	181人	187人	193人
共通テスト利用入試	入学者数	50人	49人	53人	50人	49人	50人
	募集人数	10人	10人	10人	10人	10人	10人
	延べ人数	997人	783人	717人	0人	720人	643人
	志願者数						
	受験者数	997人	783人	717人	0人	720人	643人
	合格者数	294人	256人	220人	0人	231人	200人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	281人	241人	216人	0人	223人	192人
	実人数						
	志願者数	997人	783人	717人	0人	720人	643人
	受験者数	997人	783人	717人	0人	720人	643人
	合格者数	294人	256人	220人	0人	231人	200人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	281人	241人	216人	0人	223人	192人
その他の特別選抜	入学者数	13人	15人	4人	0人	8人	8人
	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	9人	10人	2人	3人	14人	8人
	志願者数						
	受験者数	9人	10人	2人	3人	14人	8人
	合格者数	3人	3人	0人	1人	3人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	0人	0人	2人	1人
	実人数						
	志願者数	9人	10人	2人	3人	14人	8人
	受験者数	9人	10人	2人	3人	14人	8人
	合格者数	3人	3人	0人	1人	3人	2人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	0人	0人	2人	1人
合計	入学者数	1人	1人	0人	1人	1人	1人
	募集人数	73人	74人	74人	74人	77人	74人
	延べ人数	1930人	1703人	1686人	910人	1622人	1570人
	志願者数						
	受験者数	1892人	1661人	1648人	878人	1575人	1531人
	合格者数	524人	552人	581人	280人	505人	488人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	445人	468人	513人	207人	431人	413人
	実人数						
	志願者数	1820人	1517人	1498人	722人	1446人	1401人
	受験者数	1788人	1487人	1473人	700人	1414人	1372人
	合格者数	511人	520人	541人	256人	488人	463人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	432人	436人	473人	183人	414人	388人
	入学者数	79人	84人	68人	73人	74人	76人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	77人	77人	77人	77人	77人	77人
入 学 定 員 充 足 率	1.03	1.09	0.88	0.95	0.96	0.98
歩 留 率	0.15	0.15	0.12	0.26	0.15	0.17

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１１

大学学部学科等名：立教大学 理学部生命理学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	2人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	6人	9人	13人	8人	6人	8人
	志願者数						
	受験者数	6人	9人	13人	8人	6人	8人
	合格者数	3人	3人	5人	1人	2人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	2人	1人	1人	0人	1人
	実人数	6人	9人	13人	8人	6人	8人
	志願者数						
	受験者数	6人	9人	13人	8人	6人	8人
	合格者数	3人	3人	5人	1人	2人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	2人	1人	1人	0人	1人
学校推薦型選抜	入学者数	3人	1人	4人	0人	2人	2人
	募集人数	9人	9人	9人	9人	11人	9人
	延べ人数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	志願者数						
	受験者数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	合格者数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	志願者数						
	受験者数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	合格者数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	12人	16人	14人	16人	17人	15人
	募集人数	47人	42人	42人	42人	42人	43人
	延べ人数	1029人	896人	900人	874人	829人	906人
	志願者数						
	受験者数	964人	848人	864人	833人	783人	858人
	合格者数	257人	261人	235人	237人	253人	249人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	208人	226人	207人	191人	218人	210人
	実人数	896人	694人	691人	674人	658人	723人
	志願者数						
	受験者数	838人	660人	663人	644人	623人	686人
	合格者数	241人	227人	201人	200人	216人	217人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	192人	192人	173人	154人	181人	178人
共通テスト利用入試	入学者数	49人	35人	28人	46人	35人	39人
	募集人数	10人	14人	14人	14人	14人	13人
	延べ人数	688人	868人	689人	0人	671人	583人
	志願者数						
	受験者数	688人	868人	689人	0人	671人	583人
	合格者数	200人	277人	280人	0人	230人	197人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	199人	258人	251人	0人	219人	185人
	実人数	688人	868人	689人	0人	671人	583人
	志願者数						
	受験者数	688人	868人	689人	0人	671人	583人
	合格者数	200人	277人	280人	0人	230人	197人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	199人	258人	251人	0人	219人	185人
その他の特別選抜	入学者数	1人	19人	29人	0人	11人	12人
	募集人数	1人	1人	1人	1人	1人	1人
	延べ人数	17人	19人	14人	13人	10人	15人
	志願者数						
	受験者数	17人	19人	14人	13人	10人	15人
	合格者数	4人	4人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	1人	2人	1人	2人
	実人数	17人	19人	14人	13人	10人	15人
	志願者数						
	受験者数	17人	19人	14人	13人	10人	15人
	合格者数	4人	4人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	1人	2人	1人	2人
合計	入学者数	2人	2人	1人	2人	2人	2人
	募集人数	69人	70人	70人	70人	72人	70人
	延べ人数	1752人	1808人	1630人	911人	1533人	1527人
	志願者数						
	受験者数	1687人	1760人	1594人	870人	1487人	1480人
	合格者数	476人	561人	536人	258人	505人	467人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	409人	488人	460人	194人	438人	398人
	実人数	1619人	1606人	1421人	711人	1362人	1344人
	志願者数						
	受験者数	1561人	1572人	1393人	681人	1327人	1307人
	合格者数	460人	527人	502人	221人	468人	436人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	393人	454人	426人	157人	401人	366人
	入学者数	67人	73人	76人	64人	67人	69人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	72人	72人	72人	72人	72人	72人
入学定員充足率	0.93	1.01	1.06	0.89	0.93	0.96
歩留率	0.14	0.13	0.14	0.25	0.13	0.16

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１２

大学学部学科等名： 立教大学 社会学部社会学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	志願者数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	受験者数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	合格者数	8人	8人	5人	8人	9人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	2人	1人	1人	2人
	実人数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	志願者数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	受験者数	101人	93人	96人	85人	95人	94人
	合格者数	8人	8人	5人	8人	9人	8人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	2人	2人	1人	1人	2人
	入学者数	6人	6人	3人	7人	8人	6人
学校推薦型選抜	募集人数	30人	30人	30人	30人	38人	32人
	延べ人数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	志願者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	受験者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	合格者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	志願者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	受験者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	合格者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	60人	59人	56人	57人	57人	58人
一般選抜	募集人数	97人	97人	97人	97人	97人	97人
	延べ人数	2187人	2334人	2075人	1854人	1952人	2080人
	志願者数	2187人	2334人	2075人	1854人	1952人	2080人
	受験者数	2024人	2229人	1979人	1774人	1869人	1975人
	合格者数	346人	440人	516人	418人	466人	437人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	272人	361人	416人	330人	378人	351人
	実人数	1935人	1754人	1561人	1383人	1417人	1610人
	志願者数	1935人	1754人	1561人	1383人	1417人	1610人
	受験者数	1780人	1684人	1502人	1335人	1362人	1533人
	合格者数	301人	369人	443人	345人	382人	368人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	227人	290人	343人	257人	294人	282人
	入学者数	74人	79人	100人	88人	88人	86人
共通テスト利用入試	募集人数	24人	24人	24人	24人	24人	24人
	延べ人数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	志願者数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	受験者数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	合格者数	195人	233人	249人	111人	269人	211人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	178人	219人	229人	105人	255人	197人
	実人数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	志願者数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	受験者数	909人	1020人	1093人	546人	981人	910人
	合格者数	195人	233人	249人	111人	269人	211人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	178人	219人	229人	105人	255人	197人
	入学者数	17人	14人	20人	6人	14人	14人
その他の特別選抜	募集人数	9人	9人	9人	9人	9人	9人
	延べ人数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	志願者数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	受験者数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	合格者数	20人	18人	16人	20人	19人	19人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	10人	8人	7人	12人	12人	10人
	実人数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	志願者数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	受験者数	89人	78人	84人	73人	69人	79人
	合格者数	20人	18人	16人	20人	19人	19人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	10人	8人	7人	12人	12人	10人
	入学者数	10人	10人	9人	8人	7人	9人
合計	募集人数	165人	165人	165人	165人	173人	167人
	延べ人数	3346人	3584人	3404人	2615人	3154人	3221人
	志願者数	3183人	3479人	3308人	2535人	3071人	3115人
	受験者数	629人	758人	842人	614人	820人	733人
	合格者数	629人	758人	842人	614人	820人	733人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	462人	590人	654人	448人	646人	560人
	実人数	3094人	3004人	2890人	2144人	2619人	2750人
	志願者数	2939人	2934人	2831人	2096人	2564人	2673人
	受験者数	584人	687人	769人	541人	736人	663人
	合格者数	584人	687人	769人	541人	736人	663人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	417人	519人	581人	375人	562人	491人
	入学者数	167人	168人	188人	166人	174人	173人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	170人	170人	173人	173人	173人	172人
入 学 定 員 充 足 率	0.98	0.99	1.09	0.96	1.01	1.00
歩 留 率	0.27	0.22	0.22	0.27	0.21	0.24

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１３

大学学部学科等名： 立教大学 社会学部現代文化学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	志願者数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	受験者数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	合格者数	6人	5人	4人	7人	5人	5人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	0人	2人	0人	3人	1人
	実人数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	志願者数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	受験者数	64人	74人	66人	58人	51人	63人
	合格者数	6人	5人	4人	7人	5人	5人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	0人	2人	0人	3人	1人
	入学者数	5人	5人	2人	7人	2人	4人
学校推薦型選抜	募集人数	30人	30人	30人	30人	38人	32人
	延べ人数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	志願者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	受験者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	合格者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	志願者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	受験者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	合格者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	62人	61人	56人	52人	58人	58人
一般選抜	募集人数	97人	97人	97人	97人	97人	97人
	延べ人数	1845人	2083人	1825人	1373人	1278人	1681人
	志願者数	1845人	2083人	1825人	1373人	1278人	1681人
	受験者数	1746人	2015人	1755人	1343人	1235人	1619人
	合格者数	279人	367人	322人	374人	342人	337人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	190人	284人	259人	280人	254人	253人
	実人数	1616人	1425人	1260人	945人	915人	1232人
	志願者数	1616人	1425人	1260人	945人	915人	1232人
	受験者数	1523人	1387人	1214人	927人	888人	1188人
	合格者数	235人	300人	255人	295人	282人	273人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	146人	217人	192人	201人	194人	190人
	入学者数	89人	83人	63人	94人	88人	83人
共通テスト利用入試	募集人数	24人	24人	24人	24人	24人	24人
	延べ人数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	志願者数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	受験者数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	合格者数	168人	217人	239人	150人	253人	205人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	159人	202人	199人	138人	236人	187人
	実人数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	志願者数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	受験者数	619人	813人	717人	654人	1016人	764人
	合格者数	168人	217人	239人	150人	253人	205人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	159人	202人	199人	138人	236人	187人
	入学者数	9人	15人	40人	12人	17人	19人
その他の特別選抜	募集人数	8人	8人	8人	8人	8人	8人
	延べ人数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	志願者数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	受験者数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	合格者数	11人	6人	11人	12人	13人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	4人	2人	5人	2人	6人	4人
	実人数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	志願者数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	受験者数	43人	38人	52人	42人	43人	44人
	合格者数	11人	6人	11人	12人	13人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	4人	2人	5人	2人	6人	4人
	入学者数	7人	4人	6人	10人	7人	7人
合計	募集人数	164人	164人	164人	164人	172人	166人
	延べ人数	2633人	3069人	2716人	2179人	2446人	2609人
	志願者数	2633人	3069人	2716人	2179人	2446人	2609人
	受験者数	2534人	3001人	2646人	2149人	2403人	2547人
	合格者数	526人	656人	632人	595人	671人	616人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	354人	488人	465人	420人	499人	445人
	実人数	2404人	2411人	2151人	1751人	2083人	2160人
	志願者数	2404人	2411人	2151人	1751人	2083人	2160人
	受験者数	2311人	2373人	2105人	1733人	2056人	2116人
	合格者数	482人	589人	565人	516人	611人	553人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	310人	421人	398人	341人	439人	382人
	入学者数	172人	168人	167人	175人	172人	171人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	170人	170人	173人	173人	173人	172人
入学定員充足率	1.01	0.99	0.97	1.01	0.99	0.99
歩留率	0.33	0.26	0.26	0.29	0.26	0.28

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１４

大学学部学科等名： 立教大学 社会学部メディア社会学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	志願者数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	受験者数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	合格者数	7人	5人	5人	7人	8人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	4人	3人	2人	2人	3人
	実人数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	志願者数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	受験者数	63人	75人	72人	64人	68人	68人
	合格者数	7人	5人	5人	7人	8人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	4人	3人	2人	2人	3人
学校推薦型選抜	入学者数	5人	1人	2人	5人	6人	4人
	募集人数	30人	30人	30人	30人	38人	32人
	延べ人数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	志願者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	受験者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	合格者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	志願者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	受験者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	合格者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	63人	56人	57人	54人	56人	57人
	募集人数	97人	97人	97人	97人	97人	97人
	延べ人数	1905人	1991人	1772人	1513人	1398人	1716人
	志願者数	1905人	1991人	1772人	1513人	1398人	1716人
	受験者数	1785人	1927人	1727人	1459人	1350人	1650人
	合格者数	237人	320人	359人	438人	317人	334人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	160人	238人	268人	344人	235人	249人
	実人数	1609人	1344人	1223人	1042人	945人	1233人
	志願者数	1609人	1344人	1223人	1042人	945人	1233人
	受験者数	1498人	1310人	1200人	1017人	917人	1188人
	合格者数	189人	253人	287人	338人	254人	264人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	112人	171人	196人	244人	172人	179人
共通テスト利用入試	入学者数	77人	82人	91人	94人	82人	85人
	募集人数	24人	24人	24人	24人	24人	24人
	延べ人数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	志願者数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	受験者数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	合格者数	150人	158人	184人	135人	217人	169人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	135人	140人	158人	127人	194人	151人
	実人数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	志願者数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	受験者数	801人	748人	805人	779人	766人	780人
	合格者数	150人	158人	184人	135人	217人	169人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	135人	140人	158人	127人	194人	151人
その他の特別選抜	入学者数	15人	18人	26人	8人	23人	18人
	募集人数	8人	8人	8人	8人	8人	8人
	延べ人数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	志願者数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	受験者数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	合格者数	13人	21人	18人	14人	12人	16人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	6人	9人	10人	8人	6人	8人
	実人数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	志願者数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	受験者数	70人	72人	68人	64人	67人	68人
	合格者数	13人	21人	18人	14人	12人	16人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	6人	9人	10人	8人	6人	8人
合計	入学者数	7人	12人	8人	6人	6人	8人
	募集人数	164人	164人	164人	164人	172人	166人
	延べ人数	2902人	2942人	2774人	2474人	2355人	2689人
	志願者数	2902人	2942人	2774人	2474人	2355人	2689人
	受験者数	2782人	2878人	2729人	2420人	2307人	2623人
	合格者数	470人	560人	623人	648人	610人	582人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	303人	391人	439人	481人	437人	410人
	実人数	2606人	2295人	2225人	2003人	1902人	2206人
	志願者数	2606人	2295人	2225人	2003人	1902人	2206人
	受験者数	2495人	2261人	2202人	1978人	1874人	2162人
	合格者数	422人	493人	551人	548人	547人	512人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	255人	324人	367人	381人	374人	340人
	入学者数	167人	169人	184人	167人	173人	172人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	170人	170人	173人	173人	173人	172人
入学定員充足率	0.98	0.99	1.06	0.97	1.00	1.00
歩留率	0.36	0.30	0.30	0.26	0.28	0.30

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１５

大学学部学科等名：立教大学 法学部法学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	志願者数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	受験者数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	合格者数	5人	4人	5人	8人	1人	5人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	2人	5人	0人	2人
	実人数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	志願者数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	受験者数	26人	34人	40人	53人	58人	42人
	合格者数	5人	4人	5人	8人	1人	5人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	2人	5人	0人	2人
学校推薦型選抜	入学者数	3人	3人	3人	3人	1人	3人
	募集人数	121人	121人	121人	121人	134人	124人
	延べ人数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	志願者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	受験者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	合格者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	志願者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	受験者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	合格者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	110人	125人	143人	139人	150人	133人
	募集人数	183人	183人	183人	183人	183人	183人
	延べ人数	2600人	3315人	3144人	1899人	2159人	2623人
	志願者数	2502人	3174人	2988人	1825人	2055人	2509人
	受験者数	779人	930人	781人	778人	665人	787人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	581人	762人	650人	660人	533人	637人
	実人数	2288人	2413人	2267人	1436人	1564人	1994人
	志願者数	2203人	2321人	2172人	1387人	1497人	1916人
	受験者数	706人	757人	640人	641人	557人	660人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	508人	589人	509人	523人	425人	511人
共通テスト利用入試	入学者数	198人	168人	131人	118人	132人	149人
	募集人数	32人	32人	32人	32人	32人	32人
	延べ人数	1221人	1462人	1562人	910人	1430人	1317人
	志願者数	1221人	1462人	1562人	910人	1430人	1317人
	受験者数	370人	479人	430人	394人	617人	458人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	359人	453人	403人	340人	567人	424人
	実人数	1221人	1462人	1562人	910人	1430人	1317人
	志願者数	1221人	1462人	1562人	910人	1430人	1317人
	受験者数	370人	479人	430人	394人	617人	458人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	359人	453人	403人	340人	567人	424人
その他の特別選抜	入学者数	11人	26人	27人	54人	50人	34人
	募集人数	6人	6人	6人	6人	6人	6人
	延べ人数	26人	21人	21人	40人	28人	27人
	志願者数	26人	21人	21人	40人	28人	27人
	受験者数	14人	11人	16人	23人	19人	17人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	5人	4人	6人	11人	11人	7人
	実人数	26人	21人	21人	40人	28人	27人
	志願者数	26人	21人	21人	40人	28人	27人
	受験者数	14人	11人	16人	23人	19人	17人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	5人	4人	6人	11人	11人	7人
合計	入学者数	9人	7人	10人	12人	8人	9人
	募集人数	346人	346人	346人	346人	359人	349人
	延べ人数	3983人	4957人	4910人	3041人	3825人	4143人
	志願者数	3885人	4816人	4754人	2967人	3721人	4029人
	受験者数	1278人	1549人	1375人	1342人	1452人	1399人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	947人	1220人	1061人	1016人	1111人	1071人
	実人数	3671人	4055人	4033人	2578人	3230人	3513人
	志願者数	3586人	3963人	3938人	2529人	3163人	3436人
	受験者数	1205人	1376人	1234人	1205人	1344人	1273人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	874人	1047人	920人	879人	1003人	945人
	入学者数	331人	329人	314人	326人	341人	328人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	360人	360人	360人	360人	360人	360人
入 学 定 員 充 足 率	0.92	0.91	0.87	0.91	0.95	0.91
歩 留 率	0.26	0.21	0.23	0.24	0.23	0.24

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１６

大学学部学科等名：立教大学 法学部政治学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	13人	33人	35人	26人	26人	27人
	志願者数	13人	33人	35人	26人	26人	27人
	受験者数	6人	4人	4人	2人	7人	5人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	2人	2人	1人	4人	2人
	辞退者数	13人	33人	35人	26人	26人	27人
	志願者数	13人	33人	35人	26人	26人	27人
	受験者数	6人	4人	4人	2人	7人	5人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	2人	2人	1人	4人	2人
	辞退者数	4人	2人	2人	1人	3人	2人
	入学者数	37人	37人	37人	37人	37人	37人
	募集人数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
学校推薦型選抜	延べ人数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	志願者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	受験者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	志願者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	受験者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	43人	52人	54人	51人	47人	49人
	入学者数	58人	58人	58人	58人	58人	58人
	募集人数	1020人	1035人	946人	554人	638人	839人
	延べ人数	985人	994人	906人	532人	612人	806人
一般選抜	志願者数	304人	288人	252人	244人	234人	264人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	224人	236人	210人	196人	199人	213人
	うち追加合格者数	224人	236人	210人	196人	199人	213人
	辞退者数	901人	750人	721人	408人	500人	656人
	志願者数	870人	727人	692人	392人	483人	633人
	受験者数	275人	231人	219人	195人	201人	224人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	195人	179人	177人	147人	166人	173人
	辞退者数	80人	52人	42人	48人	35人	51人
	入学者数	9人	9人	9人	9人	9人	9人
	募集人数	311人	401人	458人	298人	591人	412人
	延べ人数	311人	401人	458人	298人	591人	412人
	志願者数	88人	136人	123人	131人	247人	145人
共通テスト利用入試	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	82人	127人	119人	123人	234人	137人
	辞退者数	311人	401人	458人	298人	591人	412人
	志願者数	311人	401人	458人	298人	591人	412人
	受験者数	88人	136人	123人	131人	247人	145人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	82人	127人	119人	123人	234人	137人
	辞退者数	6人	9人	4人	8人	13人	8人
	入学者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	26人	19人	15人	11人	19人	18人
	延べ人数	26人	19人	15人	11人	19人	18人
	志願者数	16人	14人	8人	9人	12人	12人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	11人	7人	3人	3人	6人	6人
その他の特別選抜	うち追加合格者数	26人	19人	15人	11人	19人	18人
	辞退者数	26人	19人	15人	11人	19人	18人
	志願者数	16人	14人	8人	9人	12人	12人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	11人	7人	3人	3人	6人	6人
	うち追加合格者数	5人	7人	5人	6人	6人	6人
	辞退者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	入学者数	109人	109人	109人	109人	109人	109人
	募集人数	1413人	1540人	1508人	940人	1321人	1344人
	延べ人数	1378人	1499人	1468人	918人	1295人	1312人
	志願者数	457人	494人	441人	437人	547人	475人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	319人	372人	334人	323人	443人	358人
	うち追加合格者数	1294人	1255人	1283人	794人	1183人	1162人
合計	辞退者数	1263人	1232人	1254人	778人	1166人	1139人
	志願者数	428人	437人	408人	388人	514人	435人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	290人	315人	301人	274人	410人	318人
	うち追加合格者数	138人	122人	107人	114人	104人	117人
	辞退者数						
	志願者数						
	受験者数						
	合格者数						
	うち追加合格者数						
	辞退者数						
	志願者数						
	受験者数						
	合格者数						
	うち追加合格者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入 学 定 員	110人	110人	110人	110人	110人	110人
入 学 定 員 充 足 率	1.25	1.11	0.97	1.04	0.95	1.06
歩 留 率	0.30	0.25	0.24	0.26	0.19	0.25

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１７

大学学部学科等名：立教大学 法学部国際ビジネス法学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	2人	2人	2人	2人	2人	2人
	延べ人数	13人	12人	12人	9人	6人	10人
	志願者数	13人	12人	12人	9人	6人	10人
	受験者数	0人	2人	2人	0人	0人	1人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	1人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	13人	12人	12人	9人	6人	10人
	志願者数	13人	12人	12人	9人	6人	10人
	受験者数	0人	2人	2人	0人	0人	1人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	1人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	1人	2人	0人	0人	1人
	入学者数	0人	1人	2人	0人	0人	1人
学校推薦型選抜	募集人数	37人	37人	37人	37人	37人	37人
	延べ人数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	志願者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	受験者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	志願者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	受験者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	42人	54人	61人	65人	54人	55人
一般選抜	募集人数	61人	61人	46人	40人	40人	50人
	延べ人数	661人	708人	1422人	470人	489人	750人
	志願者数	646人	693人	1366人	455人	471人	726人
	受験者数	176人	234人	338人	186人	173人	221人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	118人	172人	270人	151人	131人	168人
	辞退者数	581人	564人	1044人	346人	375人	582人
	志願者数	568人	553人	1013人	336人	362人	566人
	受験者数	157人	207人	293人	151人	150人	192人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	99人	145人	225人	116人	108人	139人
	辞退者数	58人	62人	68人	35人	42人	53人
	入学者数	9人	9人	9人	7人	7人	8人
共通テスト利用入試	募集人数	383人	205人	1301人	265人	562人	543人
	延べ人数	383人	205人	1301人	265人	562人	543人
	志願者数	92人	83人	210人	111人	240人	147人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	90人	77人	196人	100人	216人	136人
	うち追加合格者数	383人	205人	1301人	265人	562人	543人
	志願者数	383人	205人	1301人	265人	562人	543人
	受験者数	92人	83人	210人	111人	240人	147人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	90人	77人	196人	100人	216人	136人
	辞退者数	2人	6人	14人	11人	24人	11人
	入学者数	3人	3人	18人	26人	26人	15人
	募集人数	21人	14人	35人	67人	48人	37人
その他の特別選抜	延べ人数	21人	14人	35人	67人	48人	37人
	志願者数	13人	10人	28人	51人	29人	26人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	6人	3人	12人	16人	13人	10人
	うち追加合格者数	21人	14人	35人	67人	48人	37人
	志願者数	21人	14人	35人	67人	48人	37人
	受験者数	13人	10人	28人	51人	29人	26人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	6人	3人	12人	16人	13人	10人
	辞退者数	7人	7人	16人	35人	16人	16人
	入学者数	112人	112人	112人	112人	112人	112人
	募集人数	1120人	993人	2831人	876人	1159人	1396人
	延べ人数	1105人	978人	2775人	861人	1141人	1372人
合計	志願者数	323人	383人	639人	413人	496人	451人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	214人	253人	478人	267人	360人	314人
	うち追加合格者数	1040人	849人	2453人	752人	1045人	1228人
	志願者数	1027人	838人	2422人	742人	1032人	1212人
	受験者数	304人	356人	594人	378人	473人	421人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	195人	226人	433人	232人	337人	285人
	辞退者数	109人	130人	161人	146人	136人	136人
	入学者数						
	募集人数						
	延べ人数						
	志願者数						
	受験者数						
	合格者数						
	うち追加合格者数						
	辞退者数						
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入 学 定 員	115人	115人	115人	115人	115人	115人
入 学 定 員 充 足 率	0.95	1.13	1.40	1.27	1.18	1.19
歩 留 率	0.34	0.34	0.25	0.35	0.27	0.31

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１８

大学学部学科等名：立教大学 観光学部観光学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総 合 型 選 抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	志願者数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	受験者数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	合格者数	3人	9人	7人	5人	4人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	2人	2人	2人	0人	1人
	実 人 数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	志願者数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	受験者数	44人	44人	44人	53人	50人	47人
	合格者数	3人	9人	7人	5人	4人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	2人	2人	2人	0人	1人
学 校 推 薦 型 選 抜	入学者数	3人	7人	5人	3人	4人	4人
	募集人数	35人	35人	35人	35人	41人	36人
	延べ人数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	志願者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	受験者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	合格者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実 人 数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	志願者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	受験者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	合格者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一 般 選 抜	入学者数	57人	52人	43人	37人	45人	47人
	募集人数	123人	125人	125人	125人	125人	125人
	延べ人数	1703人	2128人	1339人	1497人	1566人	1647人
	志願者数	1632人	2061人	1295人	1452人	1506人	1589人
	受験者数	276人	373人	408人	492人	456人	401人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	166人	248人	277人	344人	331人	273人
	実 人 数	1492人	1423人	938人	971人	1028人	1170人
	志願者数	1492人	1423人	938人	971人	1028人	1170人
	受験者数	1426人	1381人	911人	948人	995人	1132人
	合格者数	246人	289人	321人	372人	345人	315人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	136人	164人	190人	224人	220人	187人
共 通 テ ス ト 利 用 入 試	入学者数	110人	125人	131人	148人	125人	128人
	募集人数	20人	20人	20人	20人	20人	20人
	延べ人数	534人	624人	513人	730人	506人	581人
	志願者数	534人	624人	513人	730人	506人	581人
	受験者数	103人	92人	85人	83人	143人	101人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	92人	81人	76人	72人	126人	89人
	実 人 数	534人	624人	513人	730人	506人	581人
	志願者数	534人	624人	513人	730人	506人	581人
	受験者数	103人	92人	85人	83人	143人	101人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	92人	81人	76人	72人	126人	89人
そ の 他 の 特 別 選 抜	入学者数	11人	11人	9人	11人	17人	12人
	募集人数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	志願者数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	受験者数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	合格者数	15人	14人	10人	13人	5人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	7人	5人	4人	6人	1人	5人
	実 人 数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	志願者数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	受験者数	41人	39人	28人	25人	22人	31人
	合格者数	15人	14人	10人	13人	5人	11人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	7人	5人	4人	6人	1人	5人
合 計	入学者数	8人	9人	6人	7人	4人	7人
	募集人数	187人	189人	189人	189人	195人	190人
	延べ人数	2379人	2887人	1967人	2342人	2189人	2353人
	志願者数	2308人	2820人	1923人	2297人	2129人	2295人
	受験者数	454人	540人	553人	630人	653人	566人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	265人	336人	359人	424人	458人	368人
	実 人 数	2168人	2182人	1566人	1816人	1651人	1877人
	志願者数	2102人	2140人	1539人	1793人	1618人	1838人
	受験者数	424人	456人	466人	510人	542人	480人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	235人	252人	272人	304人	347人	282人
	入学者数	189人	204人	194人	206人	195人	198人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	195人	195人	195人	195人	195人	195人
入 学 定 員 充 足 率	0.97	1.05	0.99	1.06	1.00	1.01
歩 留 率	0.42	0.38	0.35	0.33	0.30	0.35

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－１９

大学学部学科等名： 立教大学 観光学部交流文化学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	5人	5人	5人	5人	5人	5人
	延べ人数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	志願者数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	受験者数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	合格者数	6人	7人	2人	4人	10人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	0人	0人	0人	2人	1人
	実人数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	志願者数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	受験者数	30人	33人	34人	11人	34人	28人
	合格者数	6人	7人	2人	4人	10人	6人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	1人	0人	0人	0人	2人	1人
	入学者数	5人	7人	2人	4人	8人	5人
学校推薦型選抜	募集人数	40人	40人	40人	40人	46人	41人
	延べ人数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	志願者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	受験者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	合格者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	志願者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	受験者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	合格者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	61人	41人	42人	37人	39人	44人
一般選抜	募集人数	102人	100人	100人	100人	100人	100人
	延べ人数	1673人	1128人	1306人	985人	1300人	1278人
	志願者数	1612人	1098人	1267人	964人	1269人	1242人
	受験者数	235人	351人	385人	410人	396人	355人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	144人	247人	270人	306人	284人	250人
	辞退者数	144人	247人	270人	306人	284人	250人
	実人数	1474人	789人	884人	641人	879人	933人
	志願者数	1417人	772人	862人	629人	860人	908人
	受験者数	212人	278人	316人	300人	307人	283人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	121人	174人	201人	196人	195人	177人
	辞退者数	91人	104人	115人	104人	112人	105人
	入学者数	91人	104人	115人	104人	112人	105人
共通テスト利用入試	募集人数	20人	20人	20人	20人	20人	20人
	延べ人数	589人	368人	774人	288人	481人	500人
	志願者数	589人	368人	774人	288人	481人	500人
	受験者数	112人	85人	108人	102人	136人	109人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	96人	74人	98人	90人	125人	97人
	辞退者数	96人	74人	98人	90人	125人	97人
	実人数	589人	368人	774人	288人	481人	500人
	志願者数	589人	368人	774人	288人	481人	500人
	受験者数	112人	85人	108人	102人	136人	109人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	96人	74人	98人	90人	125人	97人
	辞退者数	96人	74人	98人	90人	125人	97人
	入学者数	16人	11人	10人	12人	11人	12人
その他の特別選抜	募集人数	4人	4人	4人	4人	4人	4人
	延べ人数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	志願者数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	受験者数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	合格者数	5人	4人	2人	2人	4人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	0人	0人	2人	1人
	実人数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	志願者数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	受験者数	11人	13人	7人	6人	8人	9人
	合格者数	5人	4人	2人	2人	4人	3人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	2人	1人	0人	0人	2人	1人
	入学者数	3人	3人	2人	2人	2人	2人
合計	募集人数	171人	169人	169人	169人	175人	171人
	延べ人数	2364人	1583人	2163人	1327人	1862人	1860人
	志願者数	2303人	1553人	2124人	1306人	1831人	1823人
	受験者数	419人	488人	539人	555人	585人	517人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	243人	322人	368人	396人	413人	348人
	辞退者数	2165人	1244人	1741人	983人	1441人	1515人
	実人数	2108人	1227人	1719人	971人	1422人	1489人
	志願者数	2108人	1227人	1719人	971人	1422人	1489人
	受験者数	396人	415人	470人	445人	496人	444人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	220人	249人	299人	286人	324人	276人
	辞退者数	220人	249人	299人	286人	324人	276人
	入学者数	176人	166人	171人	159人	172人	169人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	175人	175人	175人	175人	175人	175人
入 学 定 員 充 足 率	1.01	0.95	0.98	0.91	0.98	0.96
歩 留 率	0.42	0.34	0.32	0.29	0.29	0.33

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２０

大学学部学科等名：

立教大学 コミュニティ福祉学部福祉学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	15人	15人	10人	8人	8人	11人
	延べ人数	64人	32人	41人	27人	28人	38人
	志願者数	64人	32人	41人	27人	28人	38人
	受験者数	10人	17人	7人	12人	10人	11人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	6人	3人	6人	5人	5人
	辞退者数	64人	32人	41人	27人	28人	38人
	志願者数	64人	32人	41人	27人	28人	38人
	受験者数	10人	17人	7人	12人	10人	11人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	3人	6人	3人	6人	5人	5人
	辞退者数	7人	11人	4人	6人	5人	7人
	入学者数	25人	25人	30人	21人	26人	25人
学校推薦型選抜	募集人数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	延べ人数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	志願者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	受験者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	志願者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	受験者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	合格者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	57人	46人	41人	49人	44人	47人
一般選抜	募集人数	86人	86人	86人	76人	76人	82人
	延べ人数	851人	824人	854人	648人	550人	745人
	志願者数	811人	795人	815人	633人	534人	718人
	受験者数	184人	269人	287人	189人	181人	222人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	112人	189人	206人	138人	125人	154人
	辞退者数	736人	556人	591人	420人	352人	531人
	志願者数	701人	537人	564人	411人	342人	511人
	受験者数	160人	203人	211人	145人	143人	172人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	88人	123人	130人	94人	87人	104人
	辞退者数	72人	80人	81人	51人	56人	68人
	入学者数	20人	20人	20人	17人	17人	19人
共通テスト利用入試	募集人数	297人	654人	578人	426人	734人	538人
	延べ人数	297人	654人	578人	426人	734人	538人
	志願者数	92人	163人	164人	110人	205人	147人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	79人	151人	146人	94人	190人	132人
	うち追加合格者数	297人	654人	578人	426人	734人	538人
	辞退者数	297人	654人	578人	426人	734人	538人
	志願者数	92人	163人	164人	110人	205人	147人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	79人	151人	146人	94人	190人	132人
	辞退者数	13人	12人	18人	16人	15人	15人
	入学者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
その他の特別選抜	募集人数	16人	9人	8人	21人	10人	13人
	延べ人数	16人	9人	8人	21人	10人	13人
	志願者数	9人	5人	7人	11人	5人	7人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	4人	1人	1人	4人	1人	2人
	うち追加合格者数	16人	9人	8人	21人	10人	13人
	辞退者数	16人	9人	8人	21人	10人	13人
	志願者数	9人	5人	7人	11人	5人	7人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	4人	1人	1人	4人	1人	2人
	辞退者数	5人	4人	6人	7人	4人	5人
	入学者数	149人	149人	149人	125人	130人	140人
合計	募集人数	1285人	1565人	1522人	1171人	1366人	1382人
	延べ人数	1245人	1536人	1483人	1156人	1350人	1354人
	志願者数	352人	500人	506人	371人	445人	435人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	198人	347人	356人	242人	321人	293人
	うち追加合格者数	1170人	1297人	1259人	943人	1168人	1167人
	辞退者数	1135人	1278人	1232人	934人	1158人	1147人
	志願者数	328人	434人	430人	327人	407人	385人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	174人	281人	280人	198人	283人	243人
	辞退者数	154人	153人	150人	129人	124人	142人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	154人	154人	154人	130人	130人	144人
入 学 定 員 充 足 率	1.00	0.99	0.97	0.99	0.95	0.98
歩 留 率	0.44	0.31	0.30	0.35	0.28	0.33

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２１

大学学部学科等名：

立教大学 コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	15人	15人	15人	20人	20人	17人
	延べ人数	71人	83人	90人	58人	76人	76人
	志願者数	71人	83人	90人	58人	76人	76人
	受験者数	12人	11人	14人	17人	15人	14人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	5人	8人	7人	7人	6人
	辞退者数	71人	83人	90人	58人	76人	76人
	志願者数	71人	83人	90人	58人	76人	76人
	受験者数	12人	11人	14人	17人	15人	14人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	5人	8人	7人	7人	6人
	辞退者数	71人	83人	90人	58人	76人	76人
	入学者数	7人	6人	6人	10人	8人	7人
学校推薦型選抜	募集人数	20人	20人	20人	20人	38人	24人
	延べ人数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	志願者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	受験者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	志願者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	受験者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
	入学者数	50人	46人	34人	84人	85人	60人
一般選抜	募集人数	91人	91人	91人	134人	130人	107人
	延べ人数	902人	1423人	822人	1281人	1000人	1086人
	志願者数	862人	1348人	796人	1253人	970人	1046人
	受験者数	189人	242人	274人	394人	309人	282人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	121人	171人	184人	279人	213人	194人
	辞退者数	815人	1047人	602人	869人	692人	805人
	志願者数	779人	999人	591人	854人	671人	779人
	受験者数	173人	207人	233人	314人	252人	236人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	105人	136人	143人	199人	156人	148人
	辞退者数	68人	71人	90人	115人	96人	88人
	入学者数	20人	20人	20人	30人	26人	23人
共通テスト利用入試	募集人数	20人	20人	20人	30人	26人	23人
	延べ人数	366人	736人	537人	669人	636人	589人
	志願者数	366人	736人	537人	669人	636人	589人
	受験者数	116人	159人	128人	150人	209人	152人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	98人	143人	112人	140人	181人	135人
	辞退者数	366人	736人	537人	669人	636人	589人
	志願者数	366人	736人	537人	669人	636人	589人
	受験者数	116人	159人	128人	150人	209人	152人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	98人	143人	112人	140人	181人	135人
	辞退者数	18人	16人	16人	10人	28人	18人
	入学者数	3人	3人	3人	6人	6人	4人
その他の特別選抜	募集人数	3人	3人	3人	6人	6人	4人
	延べ人数	14人	15人	9人	16人	21人	15人
	志願者数	14人	15人	9人	16人	21人	15人
	受験者数	9人	11人	8人	10人	14人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	4人	4人	4人	3人	5人	4人
	辞退者数	14人	15人	9人	16人	21人	15人
	志願者数	14人	15人	9人	16人	21人	15人
	受験者数	9人	11人	8人	10人	14人	10人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	4人	4人	4人	3人	5人	4人
	辞退者数	5人	7人	4人	7人	9人	6人
	入学者数	5人	7人	4人	7人	9人	6人
合計	募集人数	149人	149人	149人	210人	220人	175人
	延べ人数	1403人	2303人	1492人	2108人	1818人	1825人
	志願者数	1363人	2228人	1466人	2080人	1788人	1785人
	受験者数	376人	469人	458人	655人	632人	518人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	228人	323人	308人	429人	406人	339人
	辞退者数	1316人	1927人	1272人	1696人	1510人	1544人
	志願者数	1280人	1879人	1261人	1681人	1489人	1518人
	受験者数	360人	434人	417人	575人	575人	472人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	212人	288人	267人	349人	349人	293人
	辞退者数	148人	146人	150人	226人	226人	179人
	入学者数	148人	146人	150人	226人	226人	179人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	154人	154人	154人	220人	220人	180人
入学定員充足率	0.96	0.95	0.97	1.03	1.03	0.99
歩留率	0.39	0.31	0.33	0.35	0.36	0.35

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２２

大学学部学科等名： 立教大学 経営学部経営学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	25人	25人	25人	25人	25人	25人
	延べ人数	133人	177人	179人	168人	216人	175人
	志願者数	133人	177人	179人	168人	216人	175人
	受験者数	32人	41人	44人	51人	47人	43人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	6人	5人	11人	7人	11人	8人
	辞退者数	133人	177人	179人	168人	216人	175人
	志願者数	133人	177人	179人	168人	216人	175人
	受験者数	32人	41人	44人	51人	47人	43人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	6人	5人	11人	7人	11人	8人
	辞退者数	26人	36人	33人	44人	36人	35人
	入学者数	45人	45人	45人	45人	45人	45人
	募集人数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
学校推薦型選抜	延べ人数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	志願者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	受験者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	志願者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	受験者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	入学者数	98人	99人	98人	97人	96人	98人
	募集人数	133人	128人	128人	128人	128人	129人
	延べ人数	2925人	2702人	1891人	1678人	1406人	2120人
一般選抜	志願者数	2780人	2609人	1798人	1582人	1327人	2019人
	受験者数	265人	276人	301人	308人	311人	292人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	200人	209人	251人	256人	250人	233人
	辞退者数	2644人	2003人	1431人	1267人	1072人	1683人
	志願者数	2509人	1931人	1369人	1201人	1017人	1605人
	受験者数	240人	230人	252人	248人	257人	245人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	175人	163人	202人	196人	196人	186人
	辞退者数	65人	67人	50人	52人	61人	59人
	入学者数	20人	25人	25人	25人	25人	24人
	募集人数	1494人	1473人	1288人	756人	790人	1160人
	延べ人数	1494人	1473人	1288人	756人	790人	1160人
	志願者数	125人	165人	176人	85人	147人	140人
共通テスト利用入試	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	102人	144人	153人	73人	131人	121人
	うち追加合格者数	1494人	1473人	1288人	756人	790人	1160人
	志願者数	1494人	1473人	1288人	756人	790人	1160人
	受験者数	125人	165人	176人	85人	147人	140人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	102人	144人	153人	73人	131人	121人
	辞退者数	23人	21人	23人	12人	16人	19人
	入学者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	80人	74人	87人	79人	58人	76人
	延べ人数	80人	74人	87人	79人	58人	76人
	志願者数	24人	26人	30人	22人	15人	23人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	5人	10人	3人	4人	2人	5人
その他の特別選抜	うち追加合格者数	80人	74人	87人	79人	58人	76人
	志願者数	80人	74人	87人	79人	58人	76人
	受験者数	24人	26人	30人	22人	15人	23人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	10人	3人	4人	2人	5人
	辞退者数	19人	16人	27人	18人	13人	19人
	入学者数	226人	226人	226人	226人	226人	226人
	募集人数	4730人	4525人	3543人	2778人	2566人	3628人
	延べ人数	4585人	4432人	3450人	2682人	2487人	3527人
	志願者数	544人	607人	649人	563人	616人	596人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	313人	368人	418人	340人	394人	367人
	うち追加合格者数	4449人	3826人	3083人	2367人	2232人	3191人
	志願者数	4314人	3754人	3021人	2301人	2177人	3113人
合計	受験者数	519人	561人	600人	503人	562人	549人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	288人	322人	369人	280人	340人	320人
	辞退者数	231人	239人	231人	223人	222人	229人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	230人	230人	230人	230人	230人	230人
入 学 定 員 充 足 率	1.00	1.04	1.00	0.97	0.97	1.00
歩 留 率	0.42	0.39	0.36	0.40	0.36	0.39

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２３

大学学部学科等名： 立教大学 経営学部国際経営学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	15人	15人	15人	15人	15人	15人
	延べ人数	79人	115人	77人	70人	88人	86人
	志願者数	79人	115人	77人	70人	88人	86人
	受験者数	32人	31人	30人	21人	30人	29人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	14人	12人	14人	2人	10人	10人
	辞退者数	79人	115人	77人	70人	88人	86人
	志願者数	79人	115人	77人	70人	88人	86人
	受験者数	32人	31人	30人	21人	30人	29人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	14人	12人	14人	2人	10人	10人
	辞退者数	18人	19人	16人	19人	20人	18人
	入学者数	30人	30人	30人	30人	33人	31人
	募集人数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
学校推薦型選抜	延べ人数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	志願者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	受験者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	志願者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	受験者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	合格者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	71人	79人	76人	72人	68人	73人
	募集人数	83人	78人	78人	78人	78人	79人
	延べ人数	893人	913人	964人	803人	872人	889人
一般選抜	志願者数	832人	885人	924人	789人	831人	852人
	受験者数	106人	174人	211人	235人	227人	191人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	68人	146人	160人	176人	180人	146人
	辞退者数	785人	674人	673人	575人	616人	665人
	志願者数	727人	655人	649人	566人	595人	638人
	受験者数	91人	141人	169人	184人	183人	154人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	53人	113人	118人	125人	136人	109人
	辞退者数	38人	28人	51人	59人	47人	45人
	入学者数	15人	20人	20人	20人	20人	19人
	募集人数	1099人	561人	621人	278人	561人	624人
	延べ人数	1099人	561人	621人	278人	561人	624人
	志願者数	107人	83人	84人	46人	113人	87人
共通テスト利用入試	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	86人	69人	71人	31人	97人	71人
	辞退者数	1099人	561人	621人	278人	561人	624人
	志願者数	1099人	561人	621人	278人	561人	624人
	受験者数	107人	83人	84人	46人	113人	87人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	86人	69人	71人	31人	97人	71人
	辞退者数	21人	14人	13人	15人	16人	16人
	入学者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	53人	33人	26人	37人	42人	38人
	延べ人数	53人	33人	26人	37人	42人	38人
	志願者数	5人	6人	6人	8人	11人	7人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	4人	4人	3人	5人	4人
その他の特別選抜	辞退者数	53人	33人	26人	37人	42人	38人
	志願者数	53人	33人	26人	37人	42人	38人
	受験者数	5人	6人	6人	8人	11人	7人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	4人	4人	3人	5人	4人
	辞退者数	3人	2人	2人	5人	6人	4人
	入学者数	146人	146人	146人	146人	149人	147人
	募集人数	2195人	1701人	1764人	1260人	1631人	1710人
	延べ人数	2134人	1673人	1724人	1246人	1590人	1673人
	志願者数	321人	373人	407人	382人	449人	386人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	170人	231人	249人	212人	292人	231人
	辞退者数	2087人	1462人	1473人	1032人	1375人	1486人
	志願者数	2029人	1443人	1449人	1023人	1354人	1460人
合計	受験者数	306人	340人	365人	331人	405人	349人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	155人	198人	207人	161人	248人	194人
	辞退者数	151人	142人	158人	170人	157人	156人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	155人	155人	155人	155人	155人	155人
入 学 定 員 充 足 率	0.97	0.92	1.02	1.10	1.01	1.00
歩 留 率	0.47	0.38	0.39	0.45	0.35	0.41

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２４

大学学部学科等名： 立教大学 現代心理学部心理学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	10人	10人	10人	10人	10人	10人
	延べ人数	68人	54人	104人	89人	84人	80人
	志願者数	68人	54人	104人	89人	84人	80人
	受験者数	10人	18人	22人	18人	12人	16人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	5人	4人	4人	3人	4人
	辞退者数	68人	54人	104人	89人	84人	80人
	志願者数	68人	54人	104人	89人	84人	80人
	受験者数	10人	18人	22人	18人	12人	16人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	5人	4人	4人	3人	4人
	辞退者数	5人	13人	18人	14人	9人	12人
	入学者数	40人	40人	40人	40人	45人	41人
学校推薦型選抜	募集人数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	延べ人数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	志願者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	受験者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	志願者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	受験者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	85人	70人	74人	78人	72人	76人
	入学者数	63人	63人	63人	63人	63人	63人
一般選抜	募集人数	1294人	1225人	1065人	933人	904人	1084人
	延べ人数	1229人	1170人	1016人	889人	845人	1030人
	志願者数	1229人	1170人	1016人	889人	845人	1030人
	受験者数	141人	165人	85人	204人	149人	149人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	101人	137人	72人	165人	119人	119人
	辞退者数	1072人	868人	773人	646人	625人	797人
	志願者数	1072人	868人	773人	646人	625人	797人
	受験者数	1017人	833人	742人	625人	589人	761人
	合格者数	119人	135人	75人	163人	123人	123人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	79人	107人	62人	124人	93人	93人
	入学者数	40人	28人	13人	39人	30人	30人
共通テスト利用入試	募集人数	23人	23人	23人	23人	23人	23人
	延べ人数	680人	756人	720人	465人	658人	656人
	志願者数	680人	756人	720人	465人	658人	656人
	受験者数	88人	161人	177人	80人	234人	148人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	81人	143人	146人	73人	196人	128人
	辞退者数	680人	756人	720人	465人	658人	656人
	志願者数	680人	756人	720人	465人	658人	656人
	受験者数	88人	161人	177人	80人	234人	148人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	81人	143人	146人	73人	196人	128人
	辞退者数	7人	18人	31人	7人	38人	20人
	入学者数	23人	23人	23人	23人	23人	23人
その他の特別選抜	募集人数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	延べ人数	25人	24人	30人	22人	11人	22人
	志願者数	25人	24人	30人	22人	11人	22人
	受験者数	8人	8人	9人	10人	7人	8人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	3人	4人	3人	2人	3人
	辞退者数	25人	24人	30人	22人	11人	22人
	志願者数	25人	24人	30人	22人	11人	22人
	受験者数	8人	8人	9人	10人	7人	8人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	2人	3人	4人	3人	2人	3人
	辞退者数	6人	5人	5人	7人	5人	6人
	入学者数	139人	139人	139人	139人	144人	140人
合計	募集人数	2152人	2129人	1993人	1587人	1729人	1918人
	延べ人数	2087人	2074人	1944人	1543人	1670人	1864人
	志願者数	2087人	2074人	1944人	1543人	1670人	1864人
	受験者数	332人	422人	367人	390人	474人	397人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	189人	288人	226人	245人	320人	254人
	辞退者数	1930人	1772人	1701人	1300人	1450人	1631人
	志願者数	1875人	1737人	1670人	1279人	1414人	1595人
	受験者数	310人	392人	357人	349人	448人	371人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	167人	258人	216人	204人	294人	228人
	辞退者数	143人	134人	141人	145人	154人	143人
	入学者数						

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	143人	143人	143人	143人	143人	143人
入 学 定 員 充 足 率	1.00	0.94	0.99	1.01	1.08	1.00
歩 留 率	0.43	0.32	0.38	0.37	0.32	0.37

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２５

大学学部学科等名：立教大学 現代心理学部映像身体学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	20人	20人	20人	20人	20人	20人
	延べ人数	141人	146人	145人	133人	133人	140人
	志願者数	141人	146人	145人	133人	133人	140人
	受験者数	20人	31人	36人	27人	31人	29人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	7人	8人	7人	5人	6人
	辞退者数	141人	146人	145人	133人	133人	140人
	志願者数	141人	146人	145人	133人	133人	140人
	受験者数	20人	31人	36人	27人	31人	29人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	5人	7人	8人	7人	5人	6人
	辞退者数	15人	24人	28人	20人	26人	23人
	入学者数	34人	34人	34人	34人	39人	35人
	募集人数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
学校推薦型選抜	延べ人数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	志願者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	受験者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	志願者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	受験者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	49人	53人	53人	43人	59人	51人
	入学者数	82人	82人	82人	82人	82人	82人
	募集人数	1273人	1479人	1448人	1013人	1090人	1261人
	延べ人数	1197人	1429人	1384人	979人	1037人	1205人
一般選抜	志願者数	172人	270人	161人	241人	182人	205人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	101人	193人	109人	176人	124人	141人
	うち追加合格者数	979人	885人	849人	610人	649人	794人
	辞退者数	913人	864人	817人	595人	623人	762人
	志願者数	124人	193人	126人	178人	137人	152人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	53人	116人	74人	113人	79人	87人
	うち追加合格者数	71人	77人	52人	65人	58人	65人
	辞退者数	31人	31人	31人	31人	31人	31人
	募集人数	810人	769人	737人	524人	792人	726人
	延べ人数	810人	769人	737人	524人	792人	726人
	志願者数	189人	158人	181人	127人	176人	166人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
共通テスト利用入試	合格者数	157人	136人	141人	100人	143人	135人
	うち追加合格者数	810人	769人	737人	524人	792人	726人
	辞退者数	810人	769人	737人	524人	792人	726人
	志願者数	189人	158人	181人	127人	176人	166人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	157人	136人	141人	100人	143人	135人
	うち追加合格者数	32人	22人	40人	27人	33人	31人
	辞退者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
	延べ人数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
	志願者数	7人	9人	9人	9人	9人	9人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	4人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
その他の特別選抜	辞退者数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
	志願者数	7人	9人	9人	9人	9人	9人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	4人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	7人	5人	7人	5人	6人	6人
	辞退者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
	延べ人数	27人	21人	22人	21人	25人	23人
	志願者数	7人	9人	9人	9人	9人	9人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	4人	2人	4人	3人	3人
	うち追加合格者数	7人	5人	7人	5人	6人	6人
	辞退者数	3人	3人	3人	3人	3人	3人
	募集人数	2300人	2468人	2405人	1734人	2099人	2201人
合計	延べ人数	2224人	2418人	2341人	1700人	2046人	2146人
	志願者数	437人	521人	440人	447人	457人	460人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	263人	340人	260人	287人	275人	285人
	うち追加合格者数	2006人	1874人	1806人	1331人	1658人	1735人
	辞退者数	1940人	1853人	1774人	1316人	1632人	1703人
	志願者数	389人	444人	405人	384人	412人	407人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	215人	263人	225人	224人	230人	231人
	うち追加合格者数	174人	181人	180人	160人	182人	175人
	辞退者数	170人	170人	170人	170人	175人	171人
	募集人数	2300人	2468人	2405人	1734人	2099人	2201人
	延べ人数	2224人	2418人	2341人	1700人	2046人	2146人
	志願者数	437人	521人	440人	447人	457人	460人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	176人	176人	176人	176人	176人	176人
入学定員充足率	0.99	1.03	1.02	0.91	1.03	1.00
歩留率	0.40	0.35	0.41	0.36	0.40	0.38

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２６

大学学部学科等名：

立教大学 異文化コミュニケーション学部異文化コミュニケーション学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
総合型選抜	募集人数	15人	15人	15人	15人	20人	16人
	延べ人数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	志願者数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	受験者数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	合格者数	22人	26人	26人	29人	42人	29人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	9人	15人	10人	11人	17人	12人
	実人数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	志願者数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	受験者数	219人	224人	195人	157人	169人	193人
	合格者数	22人	26人	26人	29人	42人	29人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	9人	15人	10人	11人	17人	12人
	入学者数	13人	11人	16人	18人	25人	17人
学校推薦型選抜	募集人数	15人	15人	15人	15人	45人	21人
	延べ人数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	志願者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	受験者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	合格者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	志願者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	受験者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	合格者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	入学者数	56人	54人	54人	61人	80人	61人
一般選抜	募集人数	75人	75人	75人	75人	95人	79人
	延べ人数	1141人	1964人	1618人	1402人	1335人	1492人
	志願者数	1105人	1893人	1557人	1360人	1282人	1439人
	受験者数	190人	223人	212人	196人	289人	222人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	141人	187人	158人	164人	232人	176人
	実人数	1011人	1414人	1189人	1051人	1008人	1135人
	志願者数	977人	1369人	1145人	1024人	970人	1097人
	受験者数	172人	182人	190人	172人	251人	193人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	123人	146人	136人	140人	194人	148人
	入学者数	49人	36人	54人	32人	57人	46人
共通テスト利用入試	募集人数	8人	8人	8人	8人	13人	9人
	延べ人数	539人	656人	685人	673人	675人	646人
	志願者数	539人	656人	685人	673人	675人	646人
	受験者数	47人	76人	122人	70人	201人	103人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	46人	70人	107人	65人	183人	94人
	実人数	539人	656人	685人	673人	675人	646人
	志願者数	539人	656人	685人	673人	675人	646人
	受験者数	47人	76人	122人	70人	201人	103人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	46人	70人	107人	65人	183人	94人
	入学者数	1人	6人	15人	5人	18人	9人
その他の特別選抜	募集人数	27人	27人	27人	27人	37人	29人
	延べ人数	146人	167人	193人	157人	147人	162人
	志願者数	146人	167人	193人	157人	147人	162人
	受験者数	49人	52人	53人	51人	57人	52人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	20人	15人	28人	20人	27人	22人
	実人数	146人	167人	193人	157人	147人	162人
	志願者数	146人	167人	193人	157人	147人	162人
	受験者数	49人	52人	53人	51人	57人	52人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	20人	15人	28人	20人	27人	22人
	入学者数	29人	37人	25人	31人	30人	30人
合計	募集人数	140人	140人	140人	140人	210人	154人
	延べ人数	2101人	3065人	2745人	2450人	2406人	2553人
	志願者数	2065人	2994人	2684人	2408人	2353人	2501人
	受験者数	364人	431人	467人	407人	669人	468人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	216人	287人	303人	260人	459人	305人
	実人数	1971人	2515人	2316人	2099人	2079人	2196人
	志願者数	1937人	2470人	2272人	2072人	2041人	2158人
	受験者数	346人	390人	445人	383人	631人	439人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	198人	246人	281人	236人	421人	276人
	入学者数	148人	144人	164人	147人	210人	163人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平均
入学定員	145人	145人	145人	145人	210人	158人
入学定員充足率	1.02	0.99	1.13	1.01	1.00	1.03
歩留率	0.41	0.33	0.35	0.36	0.31	0.35

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の入学定員の充足状況（直近５年間）

別紙２－２７

大学学部学科等名：

立教大学 スポーツウエルネス学部スポーツウエルネス学科

（大学の学科、短大の専攻課程、高専の学科ごとに作成。大学院は作成不要。）

１．各選抜方法の状況

		R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
総合型選抜	募集人数	0人	0人	0人	30人	30人	12人
	延べ人数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	志願者数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	受験者数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	合格者数	0人	0人	0人	30人	36人	13人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	2人	4人	1人
	実人数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	志願者数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	受験者数	0人	0人	0人	114人	149人	53人
	合格者数	0人	0人	0人	30人	36人	13人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	2人	4人	1人
学校推薦型選抜	入学者数	0人	0人	0人	28人	32人	12人
	募集人数	0人	0人	0人	58人	58人	23人
	延べ人数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	志願者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	受験者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	合格者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	志願者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	受験者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	合格者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
一般選抜	入学者数	0人	0人	0人	53人	57人	22人
	募集人数	0人	0人	0人	90人	108人	40人
	延べ人数	0人	0人	0人	1088人	1151人	448人
	志願者数	0人	0人	0人	1053人	1114人	433人
	受験者数	0人	0人	0人	384人	353人	147人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	271人	259人	106人
	辞退者数	0人	0人	0人	684人	688人	274人
	実人数	0人	0人	0人	668人	666人	267人
	志願者数	0人	0人	0人	272人	229人	100人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	159人	135人	59人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	113人	94人	41人
	辞退者数	0人	0人	0人	30人	30人	12人
共通テスト利用入試	入学者数	0人	0人	0人	30人	30人	12人
	募集人数	0人	0人	0人	576人	687人	253人
	延べ人数	0人	0人	0人	576人	687人	253人
	志願者数	0人	0人	0人	120人	188人	62人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	105人	153人	52人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	576人	687人	253人
	辞退者数	0人	0人	0人	576人	687人	253人
	実人数	0人	0人	0人	120人	188人	62人
	志願者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	受験者数	0人	0人	0人	105人	153人	52人
	合格者数	0人	0人	0人	15人	35人	10人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	4人	4人	2人
	辞退者数	0人	0人	0人	16人	19人	7人
その他の特別選抜	入学者数	0人	0人	0人	16人	19人	7人
	募集人数	0人	0人	0人	16人	19人	7人
	延べ人数	0人	0人	0人	15人	16人	6人
	志願者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	受験者数	0人	0人	0人	2人	3人	1人
	合格者数	0人	0人	0人	16人	19人	7人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	15人	16人	6人
	辞退者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	実人数	0人	0人	0人	2人	3人	1人
	志願者数	0人	0人	0人	13人	13人	5人
	受験者数	0人	0人	0人	212人	230人	88人
	合格者数	0人	0人	0人	1847人	2063人	782人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	1812人	2026人	768人
	辞退者数	0人	0人	0人	602人	650人	250人
合計	入学者数	0人	0人	0人	380人	419人	160人
	募集人数	0人	0人	0人	1443人	1600人	609人
	延べ人数	0人	0人	0人	1427人	1578人	601人
	志願者数	0人	0人	0人	490人	526人	203人
	受験者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	合格者数	0人	0人	0人	268人	295人	113人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	222人	231人	91人
	辞退者数	0人	0人	0人	212人	230人	88人
	実人数	0人	0人	0人	1847人	2063人	782人
	志願者数	0人	0人	0人	1812人	2026人	768人
	受験者数	0人	0人	0人	602人	650人	250人
	合格者数	0人	0人	0人	0人	0人	0人
	うち追加合格者数	0人	0人	0人	380人	419人	160人
	辞退者数	0人	0人	0人	1443人	1600人	609人

３．入学定員充足率

	R2年度入学者	R3年度入学者	R4年度入学者	R5年度入学者	R6年度入学者	平 均
入 学 定 員	0人	0人	0人	230人	230人	92人
入 学 定 員 充 足 率	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	0.97	1.00	#DIV/0!
歩 留 率	#DIV/0!	#DIV/0!	#DIV/0!	0.37	0.36	#DIV/0!

（備考）「その他の特別選抜」は、帰国生入試、社会人入試、外国人留学生入試、国際コース選抜入試、アスリート選抜入試の合計値を記入している。このうちアスリート選抜入試は第一～第三までの志望学科を記入するため、各学科に振り分け後の数値を用いている。

既設学科等の学生募集のためのPR活動の過去の実績

①募集を行った学科等名称及び取組の名称：（全学部全学科対象）オープンキャンパス

	R5 年度入試	R6 年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)	7560人	43900人	①取組概要 本学志望者を対象にキャンパスにて学部説明、体験授業、キャンパスツアー等を行う（毎年8月に5日開催）。なお、R5年度入試分はコロナ禍のためハイブリッド開催。左記の表は対面実施プログラムのみを記載している。 ②過去の取組実績を踏まえた新設組織の入学者数の見込みに関する分析 過年度の傾向から受験対象者のうち4割程度が実際の受験に結びついていることがわかる。令和6年8月に開催したオープンキャンパスにおいても参加者等総数は47800人と実績が安定しており、今後も入学者の確保に向けた効果的なPR活動であると言える。
うち受験対象者数 (b)	2876人	9933人	
うち受験者数 (c)	1305人	3679人	
うち入学者数 (d)	269人	640人	
（受験率 c/b)	45. 4%	37. 0%	
（入学率 d/b)	9. 4%	6. 4%	

②募集を行った学科等名称及び取組の名称：（全学部全学科対象）資料請求

	R5 年度入試	R6 年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)	6052人	11635人	①取組概要 民間委託業者サービスを利用した、大学案内・学部案内等の資料希望者へ郵送する。 ②過去の取組実績を踏まえた新設組織の入学者数の見込みに関する分析 スマートフォンやタブレットを利用したデジタルパンフレットサービスも導入しているが、紙媒体の大学案内の送付希望は継続して実績が多い。受験対象者のうち3割弱が実際の受験行動に結びついていることから、大学案内等を通じて本学・学部の魅力をPRすることで一定の入学者の確保につながる。
うち受験対象者数 (b)	6052人	11635人	
うち受験者数 (c)	1780人	3105人	
うち入学者数 (d)	229人	395人	
（受験率 c/b)	29. 4%	26. 7%	
（入学率 d/b)	3. 8%	3. 4%	

③募集を行った学科等名称及び取組の名称：（全学部全学科対象）Youtubeライブ

	R5 年度入試	R6 年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)	467人	1678人	①取組概要 動画配信サービスであるYoutubeを活用した、大学教職員による大学説明・入試制度説明を行うライブ配信を12月に実施する。コメント機能を活用して視聴している受験対象者から質問を受け付け、ライブで回答する点に特徴がある。 ②過去の取組実績を踏まえた新設組織の入学者数の見込みに関する分析 本学のホームページやSNS等でライブ配信について周知するため、本学への志望度合いが高い受験者層が参加すること、また入試直前の12月に実施していることから、実際の受験につながりやすい取組である。各種の取組の中でもっとも受験率・入学率が高く、効果的である。
うち受験対象者数 (b)	317人	1034人	
うち受験者数 (c)	257人	833人	
うち入学者数 (d)	59人	161人	
（受験率 c/b)	81. 1%	80. 6%	
（入学率 d/b)	18. 6%	15. 6%	

④募集を行った学科等名称及び取組の名称：

	R5 年度入試	R6 年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)			
うち受験対象者数 (b)			
うち受験者数 (c)			
うち入学者数 (d)			
（受験率 c/b)	#DIV/0!	#DIV/0!	
（入学率 d/b)	#DIV/0!	#DIV/0!	

⑤募集を行った学科等名称及び取組の名称：

	R5 年度入試	R6 年度入試	取組概要と入学者数等に関する分析
参加者等総数 (a)			
うち受験対象者数 (b)			
うち受験者数 (c)			
うち入学者数 (d)			
（受験率 c/b)	#DIV/0!	#DIV/0!	
（入学率 d/b)	#DIV/0!	#DIV/0!	

資料 4 立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての高校生アンケート調査報告書（令和 6 年 9 月：株式会社 KEI アドバンス／株式会社高等教育総合研究所）

1 書類等の題名

立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての高校生アンケート調査報告書（令和 6 年 9 月：株式会社 KEI アドバンス／株式会社高等教育総合研究所）

2 出典

本学が株式会社 KEI アドバンスに依頼した調査報告書

3 書類等の利用範囲

全文

4 その他の説明

公表することを前提とした調査報告書ではないため、公表を差し控える

資料 5 立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての人材需要アンケート報告書（令和 6 年 7 月：株式会社 KEI アドバンス／株式会社高等教育総合研究所）

1 書類等の題名

立教大学「環境学部 環境学科（仮称）」設置構想についての人材需要アンケート調査報告書（令和 6 年 9 月：株式会社 KEI アドバンス／株式会社高等教育総合研究所）

2 出典

本学が株式会社 KEI アドバンスに依頼した調査報告書

3 書類等の利用範囲

全文

4 その他の説明

公表することを前提とした調査報告書ではないため、公表を差し控える